

## 日本近代文学におけるヒステリーの表現

朴, 美姪

<https://hdl.handle.net/2324/4784710>

---

出版情報：九州大学, 2021, 博士（学術）, 課程博士  
バージョン：  
権利関係：



# 日本近代文学におけるヒステリーの表現

2022年 1月

九州大学大学院

地球社会統合科学府 地球社会統合科学専攻

朴 美姪

## 目 次

|                                          |    |
|------------------------------------------|----|
| 序 章 近代日本におけるヒステリー .....                  | 1  |
| 第1節 ヒステリーという病.....                       | 1  |
| 第2節 日本近代文学におけるヒステリー研究の現状.....            | 3  |
| 第3節 本論文におけるヒステリー研究.....                  | 6  |
| <br>                                     |    |
| 第1章 明治期におけるヒステリーと神経病 .....               | 15 |
| 第1節 ヒステリーと神経病.....                       | 15 |
| 第2節 明治期におけるヒステリー言説.....                  | 17 |
| 第3節 神経病からヒステリーへ.....                     | 24 |
| 第4節 『真景累ヶ淵』における神経病.....                  | 28 |
| 第5節 「ヒステリー」で読む『真景累ヶ淵』 .....              | 34 |
| <br>                                     |    |
| 第2章 ヒステリーの妻たち .....                      | 39 |
| 第1節 岩野泡鳴「五部作」—ヒステリーと「永続」しない愛—.....       | 39 |
| 1. 泡鳴と「五部作」 .....                        | 40 |
| 2. 千代子のヒステリー.....                        | 42 |
| 3. 妻になれなかった妾のお鳥.....                     | 45 |
| 4. 義雄における理想の妻.....                       | 47 |
| 第2節 夏目漱石『道草』—夫婦間の永続的な愛と葛藤—.....          | 49 |
| 1. 鏡子のヒステリー.....                         | 50 |
| 2. 「緩和剤」としてのヒステリー.....                   | 57 |
| 3. 夫と妻のヒステリー.....                        | 61 |
| 4. 家庭におけるヒステリー.....                      | 64 |
| 第3節 芥川龍之介「二つの手紙」—ドッペルゲンガーとの関係性を中心に—..... | 66 |
| 1. 「二つの手紙」という物語.....                     | 67 |
| 2. 妻のヒステリーとドッペルゲンガー現象.....               | 69 |
| 2. 1. 第一の出現.....                         | 70 |
| 2. 2. 第二の出現.....                         | 71 |
| 2. 3. 第三の出現.....                         | 73 |
| 3. ヒステリーとドッペルゲンガー、そして死.....              | 75 |
| 第4節 広津和郎『神経病時代』—「性格破産者」との相関関係を中心に—.....  | 80 |

|                                      |            |
|--------------------------------------|------------|
| 1. 広津和郎と「性格破産者」たる者.....              | 81         |
| 2. 『決闘』における「性格破産者」とヒステリー.....        | 83         |
| 3. 『神経病時代』における妻のヒステリー.....           | 88         |
| 4. 『神経病時代』における「性格破産者」とヒステリー.....     | 91         |
| <b>第3章 女の語るヒステリー</b> .....           | <b>95</b>  |
| 第1節 岩野清「枯草」―「新しい女」の恋とヒステリー―.....     | 95         |
| 1. 清における「ラブ」.....                    | 95         |
| 2. 清と泡鳴における「愛の争闘」.....               | 98         |
| 3. 「池田日記」からみる「争闘」.....               | 101        |
| 4. 「枯草」における妻のヒステリー.....              | 104        |
| 第2節 与謝野晶子「姑と嫁に就て」―女性教育とヒステリー―.....   | 109        |
| 1. 中根澄子の姑殺人未遂事件.....                 | 110        |
| 2. 「姑と嫁に就て」―姑と嫁のヒステリー―.....          | 113        |
| 3. 教育思想とヒステリー―.....                  | 117        |
| 第3節 宮本百合子「縫子」―働く女性のヒステリー―.....       | 120        |
| 1. 近代日本における女性教育と労働.....              | 121        |
| 2. 働く縫子とヒステリー.....                   | 123        |
| 3. 「家」における縫子のヒステリー.....              | 126        |
| <b>第4章 ヒステリー患者と物語</b> .....          | <b>131</b> |
| 第1節 有島武郎『或る女』―葉子の破滅を中心に読み直す―.....    | 131        |
| 1. 「或る女のグリンプス」におけるヒステリー観.....        | 132        |
| 2. 母系によるヒステリーの遺伝性.....               | 134        |
| 3. 満たされない欲求という溝.....                 | 137        |
| 4. 有島武郎の女性解放思想.....                  | 142        |
| 第2節 佐藤春夫『更生記』―ヒステリーをめぐる物語の展開―.....   | 146        |
| 1. 『更生記』におけるヒステリー.....               | 147        |
| 2. 第一のヒステリー発作.....                   | 148        |
| 3. 第二のヒステリー発作.....                   | 152        |
| 4. 「子供の死」の秘密.....                    | 153        |
| 第3節 三島由紀夫『音楽』―分析医と患者のヒステリーをめぐる―..... | 157        |
| 1. 『性の分析―女性の冷感症―』の受容.....            | 158        |

|                                    |            |
|------------------------------------|------------|
| 2. 麗子のヒステリー.....                   | 161        |
| 3. 汐見とヒステリー.....                   | 163        |
| <b>終章</b> .....                    | <b>169</b> |
| <b>参考文献</b> .....                  | <b>175</b> |
| <b>参考資料</b>                        |            |
| 1. 明治期におけるヒステリー「図書・そのほか」【目録】 ..... | 1          |
| 2. 明治期におけるヒステリー「記事」【目録】 .....      | 10         |
| 3. 明治期における神経病「図書・そのほか」【目録】 .....   | 16         |
| 4. 明治期における神経病「記事」【目録】 .....        | 26         |

## 序 章 近代日本におけるヒステリー

### 第1節 ヒステリーという病

ヒステリーとは何か。新福尚武は「ヒステリーの定義は過去でも現在でも、欧米でもわが国でも、まちまちであるので、それらを短時間に要領よくまとめて述べることは到底できない」<sup>1</sup>と述べているが、子宮を意味する古代ギリシャ語を語源とし、長い間女性固有の病として語られてきたという程度でまとめておきたい。ヒステリーに関する記述がヒポクラテスの医学書に初めて登場していることを踏まえれば、少なくとも紀元前4世紀には確認されていたことになると思われるが、ヒポクラテスが言及する以前から助産婦の間で用いられていたため、「実際のところ、その起源が非常に遠い古代、すなわち紀元前二千年まえにさかのぼ」<sup>2</sup>らなければならないという。

しかし、ヒステリーの概念の歴史的変遷には、科学の進歩だけでなく、社会文化的な影響もあったと考えられる。特に、ヒステリーの時代ともいわれる世紀末の欧米では、精神医学という分野を中心に女性の精神が分析され、理論が構築された。ヒステリー研究で最も著名なフロイトがその代表的な学者であるといえる。さらに、当時の文学や美術などの文化領域においても、女性の属性としてヒステリーが多く用いられ、ヒステリーの時代を成立させる点で影響を及ぼした。

エレイン・ショーウォーターが著わした『心を病む女たち—狂気と英国文化—』は、狂気を女性の病として研究した精神分析学と、その時期に形成された文化についてフェミニストの立場から論じたもので、狂気が女性の病として最も関心が高かった世紀末の欧米、中でもイギリスを中心に医学的言説及び文化的資料を分析している。当時の男性たちは女性の狂気に対する理論を構築し、その理論をもとに診断や治療を行っていたが、特に、フロイトはヒステリー患者を治療していた時に神経症の原因に「性」が関わっているという理論を展開し、夢の分析や自由連想法を開発したという。

さらに、女性嫌悪的な思想が色濃く現われている世紀転換期の文化について論じたブルム・ダイクストラの『倒錯の偶像—世紀末幻想としての女性悪—』では「単純本能の生物、人類の多産な土壌、自然の熟れた果実として、女は「脳のない」存在であり、発達の途を進む男性の一時的欲求を満たすよう、女の本能に鋏を入れてやるべきだということは、世紀転

---

<sup>1</sup> 新福尚武「ヒステリーの定義—精神神経科—ヒステリーの定義—第6回日本精神身体医学会総会より—」『精神身体医学』6(1)、1966年2月、11頁。

<sup>2</sup> エティエンヌ・トリヤ『ヒステリーの歴史』安田一郎・横倉れい共訳、青土社、1998年5月、16頁。

換期の多くの男性から科学的に臨床された事実とみなされるようになった」<sup>3</sup>と述べられているが、当時の科学の領域では「性」を根拠に女性をめぐり、様々な言説が成立していたであろう。

『ヒステリーの歴史』を著わしたエティエンヌ・トリヤは、現在では「ヒステリー患者にはヒステリー自体、すなわちヒステリー人格しかもはや残っていない」<sup>4</sup>とし、以下のよう

に述べている。

実を言うと、この人格に対する関心は新しいものではない。すなわち、順番に言うと、魔女、憂うつ性(vaporeuse)の女、神経過敏で、デリケートで、夢を見る人、しかしまた気まぐれで、移り気で、予見できず、必要に応じて嘘をつく人、虚言症の人、色情的で、倒錯的な人である。時代と研究者の気質に応じて、ヒステリー患者は症状の代わりに、これらの属性で衣がえされた。<sup>5</sup>

日本においては、江戸末期の蘭学者による翻訳書からヒステリーが初めて登場しているが、「幕末にヒステリーという概念が受容されて約半世紀のあいだに、ヒステリーが女性の病だという認識は定着」<sup>6</sup>し、欧米の文化圏と同様に、ヒステリーはあらゆる分野において様々な形で用いられるようになる。ショーウォーターはヒステリーの言説が作りあげられた背景について「ヒステリーを十九世紀という歴史上の特殊な枠組の中で、無意識な形のフェミニスト的な抗議とみなすことは確かに可能である。その抗議は当時の女性運動が行った、家父長制的価値観に対する攻撃と対をなす」<sup>7</sup>と指摘しているが、近代日本においてヒステリーが流行した明治末期から大正期の間には『青鞥』を中心に婦人解放運動が行われていたこと、さらに、その先頭に立っていた「新しい女」たちがヒステリーとされていたこと<sup>8</sup>は、家父

---

<sup>3</sup> ブラム・ダイクストラ『倒錯の偶像—世紀末幻想としての女性悪—』富士川義之・藤巻明・松村伸一・北沢格・鶴飼信光共訳、パピルス、1994年4月、282頁。

<sup>4</sup> 同前掲注2、329頁。

<sup>5</sup> 同前掲注2、330頁。

<sup>6</sup> 船越幹央「ヒステリー—メディアのなかの病—」『青弓社ライブラリー13 偏見というまなざし—近代日本の感性—』坪井秀人編、青弓社、2001年4月、79頁。

<sup>7</sup> エレイン・ショーウォーター「序章 女の病い」『心を病む女たち—狂気と英国文化—』山田晴子・藪田美和子共訳、朝日出版社、1990年10月、5頁。

<sup>8</sup> 江種満子は『青鞥』社宛に『汝等ハ偏狭ニシテ『ヒステリー』的ナル思想ヲ以テ社会ト闘ヒ……』と書かれた脅迫文が送られたが、「ヒステリーにわざわざ「」をつけ、この言葉をトピックス性を強調することによって、この言葉が『青鞥』の活動自体のトピックス的性格を同伴したものだということ強調して見せている」と述べている。

江種満子「『道草』のヒステリー」『国語と国文学』71(12)、1994年12月、1-2頁。

長社会という類似した社会的環境における一つの特徴として共通しているとみてよいであろう。ヒステリーは男性を中心に形成されたあらゆる分野及び生活様式等の隅々に潜在している女性嫌悪的な要素を探ることに適合した研究テーマであると考えられるが、ヒステリーを研究することによって、女性の被害者としての歴史を辿ることに留まらず、現在にいたるまで社会全般に存続している女性への偏見と差別の歴史に光を当てることもできると考えられる。

## 第2節 日本近代文学におけるヒステリー研究の現状

日本近代文学研究においてヒステリーはどのように論じられているのか。様々な分野において語られてきたというヒステリーの歴史の特性上、ヒステリーを媒介に様々な視点から論じることが可能になっている。まず、ヒステリーに関する言説を踏まえつつ、医学的な視点から徹底的に分析し、文学作品の中でどのように描かれているのかについて論じた先行研究<sup>9</sup>があるが、ヒステリーを論じる際に、最も基礎的で必要不可欠な研究であると考えられる。ただし、この種の先行研究が蓄積されるにつれ、ヒステリーにおける医学言説の分析だけでは新たな研究成果を見出せないため、「テキストに描かれたヒステリーというものの(ありもしない)科学的内実などではなく、その科学による言説化がテキストに何をもたらしているか」<sup>10</sup>が、今では重要になってきている。

上記のような基礎的な先行論を踏まえつつ、ヒステリーという言葉にまつわるイメージが作品においてどのような役割を果たしているのかについて検討することができると考えられる。ヒステリーは「記号論的価値」<sup>11</sup>を持ち、ヒステリーから想起される様々なイメージ、

---

<sup>9</sup> 先行研究には、山本芳明「ヒステリーの時代—『或る女』序説」(『学習院大学文学部研究年報』36、1990年3月)、船越幹央「ヒステリー—メディアのなかの病—」(『青弓社ライブラリー13 偏見というまなざし 近代日本の感性』坪井秀人編、青弓社、2001年4月)、江頭太助「H・エリスの『性の心理学的研究』の影響—『或る女』研究の視点—」(『有島武郎の研究』朝文社、1992年6月)、石井直志「精神病理の世紀末《ヒステリー》考—「ボヴァリー夫人」から「或る女」まで」(『国文学 解釈と教材の研究』40(11)、1995年9月)、石原千秋「百年前の男と女—雑書から覗く明治・大正(10) 男は神経衰弱、女はヒステリー—」(『本』31(7)、2006年7月)、坪井秀人「ヒステリーの時代—『或る女』のマッド・シーン—」(『性が語る』名古屋大学出版会、2012年2月)などがある。さらに、新田篤『日本近代文学におけるフロイト精神分析の受容』(和泉選書、2015年4月)の中でもヒステリーについて分析が行われており、病跡学的な視点から多数の文学作品を分析した高橋正雄は「精神医学的にみた近代日本文学」(『聖マリアンナ医学研究誌』、2011-2020年)というタイトルで2011年の「第1報 二葉亭・鴎外・一葉・紅葉・鏡花」を始めとして、現在(2020年、「補遺(13)なだいなだ(2)・小林秀雄(2)・梶井基次郎・芥川文」)まで総41編の論文を発表しているが、その中にはヒステリーについて言及した研究も含まれている。

<sup>10</sup> 坪井秀人「ヒステリーの時代—『或る女』のマッド・シーン—」『性が語る』名古屋大学出版会、2012年2月、50-51頁。

<sup>11</sup> 石原は、スーザン・ソントグの『隠喩としての病い』(富山太佳夫訳、みすず書房、1982年4

特に、大正文学においては、性的なイメージが著しくあらわれているが、石原千秋は「近代日本においては、神経衰弱とヒステリーほど「隠喩」に充ち満ちた病はない」<sup>12</sup>とし、ヒステリーは象徴的な身体表現として用いられ、「夫婦における「愛情表現」となっている」<sup>13</sup>と述べている。石原のようにヒステリーをロマンチックな「隠喩としての病い」<sup>14</sup>として解釈する立場があれば、山本芳明<sup>15</sup>、坪井秀人<sup>16</sup>、江種満子<sup>17</sup>や小西由里<sup>18</sup>のようにジェンダーやフェミニズムの立場からヒステリーを論じ、ヒステリーにまつわる男女の力学関係や女性に対する差別問題について指摘している研究もある。ジェンダーやフェミニズムの視点から

---

月)を踏まえつつ、「ロマン主義以前は「結核のような恋愛」といった言い方が隠喩という文学表現として通用していたが、ロマン主義以降は「結核に罹っているのは恋をしているからだろう」といった具合に、結核と恋愛とが現実の世界でイコール関係になったというわけだ。結核が、現実の世界で「記号論的価値」を持つに到ったのである」と述べている。

石原千秋「百年前の男と女—雑書から覗く明治・大正(10)男は神経衰弱、女はヒステリー—」『本』31(7)、2006年7月、34頁。

<sup>12</sup> 同前掲注11、35頁。

<sup>13</sup> 同前掲注11、39頁。

<sup>14</sup> 同前掲注11、41頁。

<sup>15</sup> 山本芳明「ヒステリーの時代—『或る女』序説」は、『或る女』のジェンダー学的な研究において「新たなジェンダー論へ架橋」(江種満子「セックスとジェンダーのアポリア—ジェンダーで読む『或る女』のために—」『総力討論ジェンダーで読む『或る女』』翰林書房、1997年10月、21頁)の役割をしているといわれているが、「有島は、葉子の「狂暴な振舞ひ」そのものが他者に対する「非言語的交通」として「所与の秩序というものの抑圧に対する異議申し建て」になっていく可能性を徹底的に追及するのではなく、葉子が「自然の法に背いた機能の逆用」の結果、ヒステリーになってしまうこと自体に「近代社会」を生きる女性の悲劇を見ていたのである」と述べられている。

山本芳明「ヒステリーの時代—『或る女』序説」『学習院大学文学部研究年報』36、1990年3月、116頁。

<sup>16</sup> 坪井秀人「ヒステリーの時代—『或る女』のマッド・シーン—」では、「女性是他者化される(あるいは他者は女性化される)。その上で自己と他者との境界はぎりぎりでは透明にかつ曖昧なものにされ、生理的身体的な次元をも介することによって、両者の照応関係は感性的に鋭敏なものに高められていく。そしてその生理的身体的な次元における中心的な媒介の一つに、ほかならぬヒステリーが組み込まれているのである」と述べられている。

同前掲注10、60頁。

<sup>17</sup> 江種満子「『道草』のヒステリー」では、「女のヒステリーは、一つには『道草』のような経路をたどって子供に安定的に行き着く形があり、他に『或る女』のように子供(母)への道をあえて閉ざし、男性との権力的に対称的な対関係の実現に固執することによって、ついに果たせず錯乱に及ぶ形がある。しかしどちらもヒステリーを発症させる根源が、女という、権力として弱いジェンダーを内面化して生きなければならなかった存在がこうむる、ジェンダーの病にほかならなかつたことを露呈した」と述べられている。

同前掲注8、13-14頁。

<sup>18</sup> 小西由里は「抑圧された言語と性—ヒステリーという表象—」(『Perspective』1、2001年3月)、「『或る女』におけるヒステリー」(『近畿大学日本語・日本文学』4、2002年3月)、「ヒステリーと女子教育についてのノート(一)—岩野泡鳴「焰の舌」を中心に—」(『近畿大学日本語・日本文学』5、2003年3月)を発表しているが、『或る女』におけるヒステリーについて「葉子に対してヒステリーと子宮の病によって死ぬという結末が用意されたのであり、有島を含む知識人たちでさえも女性に対する〈女らしさ〉への抑圧という集团的無意識の構造に加わっていた」と述べている。

小西由里「『或る女』におけるヒステリー」『近畿大学日本語・日本文学』4、2002年3月、125頁。

は、ヒステリーの言説を踏まえつつ、時代や社会関係の影響を受け、形成されたヒステリーが女性を抑圧する手段としてどのように用いられているのかについて論じられることが多い。現在にいたるまで女性に対する偏見や差別といった社会的な問題は存続しており、こうした問題の基底にヒステリーという女性差別的な歴史があるということを考えれば、ジェンダーやフェミニズムの視点からの研究は持続的に行われるべきであると考えられる。

さて、日本近代文学研究においてヒステリーを主なテーマとして論じられた作品には何があるであろうか。最も多く言及されているのは、有島武郎『或る女』研究ではないかと考えられるが、ヒステリーは主人公葉子を破滅させる要因となっており、有島が描こうとした女性の物語において重要な位置を占めているため、『或る女』研究にはかかせないキーワードとして定着している。また、夏目漱石『道草』研究においても主人公健三と妻お住の夫婦関係や家庭問題を論じる際にヒステリーが多く言及されている。しかし、『或る女』と『道草』を除いては、ヒステリーを主なテーマとして論じられた日本近代文学研究は乏しいのが実情であると考えられる。おそらく、ヒステリーが用いられている作品であっても、大抵単なる形容用語として読まれる場合が多く、あまり意味を持たないように思われるからではないかと考えられる。船越幹央の「ヒステリー—メディアのなかの病—」は近代日本におけるヒステリー言説を踏まえつつ、主に10名の作家の作品<sup>19</sup>を中心に分析したものであるが、簡単に触れておきたい。

船越は、1901(明治34)年から1945(昭和20)年までに発表され、全集に収録されている作品を中心に、ヒステリーの用例を調べ、分析した結果、「ヒステリーは感情に関わる領域で使われることが多」<sup>20</sup>く、「ヒステリーが昂じた女性に対して「気違い」という捉え方もなされている」<sup>21</sup>と述べている。さらに、「ヒステリーの発生する様子は(中略)突発性と反

---

<sup>19</sup> 船越は、感情表現としてヒステリーが用いられている作品として永井荷風「すみだ川」(1903)、夏目漱石「それから」(1904)・「虞美人草」(1907)、有島武郎「或る女」(1919)、横光利一「時計」(1934)、谷崎潤一郎「柳湯の事件」(1918)・「日本に於けるクリップン事件」(1927)、宇野浩二「高い山から」(1920)、佐藤春夫「女あるじ」(1935)、志賀直哉「山科の記憶」(1926)、徳田秋声「仮想人物」を挙げており、ヒステリーを「気違い」と捉えている作品として、杉村楚人冠「死馬の骨」(1912)、徳田秋声「爛」(1913)、有島武郎「或る女」(1919)を挙げている。さらに、ヒステリーが〈反復・継続〉するとして谷崎潤一郎「呪はれた戯曲」(1919)、夏目漱石「門」(1910)、志賀直哉「不幸なる恋の話」(1911)、徳田秋声「秘めたる恋」(1917)を挙げており、ヒステリーという言葉が論理的な領域における逸脱に関わっているとし、夏目漱石「門」(1910)・「明暗」(1916)、永井荷風「二人妻」(1922-23)、長田秀雄「放火」(1914)、森田草平「下手人」(1914)の作品を挙げている。

同前掲注6。

<sup>20</sup> 同前掲注6、89頁。

<sup>21</sup> 同前掲注6、91頁。

復・継続性」<sup>22</sup>を帯びており、こうした特徴は「ヒステリーの意味の基盤になっている」<sup>23</sup>というが、ヒステリーを考える際に注意点として以下のような二点を挙げている。

ひとつは、ヒステリーである女性はノーマルな状態から逸脱した存在だとみなされ、この逸脱イメージを付与することにヒステリーという言葉が使われたということ。ふたつめは、ヒステリーが起こったとされる場面が、夫婦関係や恋愛関係など女性と男性との関係のなかにあるという点。そこでは、男性の女性に対する視線がヒステリーというものを生み出しているといえる。ヒステリーは〈女性の病〉とされたが、むしろ男女関係の力学によって生じる現象と言えるのである。<sup>24</sup>

ヒステリーの持つ「病」というイメージからは「異常」を想起され、「ノーマルな状態」としては取り扱われないが、単に医学的な意味合いとして用いられている場面ではなく、当時の一般的な生活様式及び道徳や倫理などの基準に合致しない行動や態度をとる場面においてヒステリーが用いられ、一種の「反社会性」「非常識」を感じさせることも指摘できると考えられる。おそらく、家父長制下に定められた道徳規範や秩序などに従わないような女性がヒステリーとされ、場面によっては「狂女」と等しい存在として描写されていたであろう。そうした中で、ヒステリーを語る男性と、語られる女性との力学関係が形成されるのは、当然の成り行きであったとも思われる。以上のような先行研究を踏まえ、ヒステリーを中心に日本近代文学について論じたいと思うが、各章について簡略にまとめておきたい。

### 第3節 本論文におけるヒステリー研究

明治期におけるヒステリー言説は主に「婦人病」の一種として語られていたが、当時発表された文学作品においても、そうした言説の影響がうかがわれる。すでに、多くの先行研究において指摘されているため、本節にて明治文学におけるヒステリーの用例について簡単に紹介する程度にしておきたい。

まず、筑摩書房刊行の『明治文学全集』に収録されている作品の中で、ヒステリーが用いられている作品を調べたが、まとめてみると以下のようなものである。

---

<sup>22</sup> 同前掲注6、91頁。

<sup>23</sup> 同前掲注6、92頁。

<sup>24</sup> 同前掲注6、92頁。

|                   | 作家名                                                                                                                                                                           | 作品名     | 発表年度 |      |
|-------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------|------|------|
|                   |                                                                                                                                                                               |         | 西暦   | 和暦   |
| ヒステリー用例<br>(書誌情報) |                                                                                                                                                                               |         |      |      |
| 1                 | 福澤諭吉                                                                                                                                                                          | 日本婦人論   | 1885 | 明治18 |
|                   | 俗に所謂婦人の疝症又は癩頭痛など云ふものは即ちヒステリー子宮病神経病等の諸病にして<br>(『明治文學全集8 福沢諭吉集』筑摩書房、1966年3月、110頁。)                                                                                              |         |      |      |
| 2                 | 坪内逍遙                                                                                                                                                                          | 妹と背かざみ  | 1886 | 明治19 |
|                   | たちまちヒステリヤ(血の道癩のたぐひ)を起しやせん。<br>(『明治文學全集16 坪内逍遙集』筑摩書房、1969年2月、190頁。)                                                                                                            |         |      |      |
| 3                 | 高瀬文淵                                                                                                                                                                          | 詩篇 若葉   | 1893 | 明治26 |
|                   | 今更思へば着々と外に思当る微候もあつたので、敢てヒステリーの為めばかりではなかつた。<br>(『明治文學全集23 山田美妙 石橋忍月 高瀬文淵集』筑摩書房、1971年8月、34頁。)                                                                                   |         |      |      |
| 4                 | 三宅花圃                                                                                                                                                                          | 萩桔梗     | 1895 | 明治28 |
|                   | 女は一八、九、二十、位の時にさういふヒステリーの様な病が出る<br>(『明治文學全集81 明治女流文學集』筑摩書房、1966年8月、147頁。)                                                                                                      |         |      |      |
| 5                 | 小栗風葉                                                                                                                                                                          | 寝白粉     | 1896 | 明治29 |
|                   | 歇私的里球の <sup>へステリキウ</sup> 圧上 <sup>あつじやう</sup> をさへ覚えけるに、医者は生殖器病の反射的作用と、精神の感動より <sup>おこ</sup> 発 <sup>へステリア</sup> りし歇私的里と診断せり。<br>(『明治文學全集65 小杉天外 小栗風葉 後藤宙外集』筑摩書房、1968年10月、158頁。) |         |      |      |
| 6                 | 福地櫻痴                                                                                                                                                                          | 買収政略大策士 | 1897 | 明治30 |
|                   | ヒステリーか梅毒か、但しは血の道か、孰れかは知らねども、いつも色青き瘦軀の半病人、いま一步を進めば地獄から火を取りに来さうな風体。<br>(『明治文學全集11 福地櫻痴集』筑摩書房、1966年6月、114頁。)                                                                     |         |      |      |
| 7                 | 尾崎紅葉                                                                                                                                                                          | 新続金色夜叉  | 1897 | 明治30 |
|                   | 此疾は決して書物の中には載せて在るまじく存候を、医者は訳無くヒステリイと申候。是もヒステリイと申候外は無きかは不存申候へども<br>(『明治文學全集18 尾崎紅葉集』筑摩書房、1965年4月、327頁。)                                                                        |         |      |      |
| 8                 | 内田魯庵                                                                                                                                                                          | くれの廿八日  | 1898 | 明治31 |
|                   | 『なアに例のヒステリーを起したんだ、』<br>(『明治文學全集24 内田魯庵集』筑摩書房、1978年3月、6頁。)                                                                                                                     |         |      |      |
| 9                 | 柳川春葉                                                                                                                                                                          | 秋袷      | 1902 | 明治35 |
|                   | 『お前の病気といふのは何時可く成るのか、ヒステリーにでも成られては困るて。』<br>(『明治文學全集22 硯友社文學集』筑摩書房、1969年1月、179頁。)                                                                                               |         |      |      |
| 10                | 草村北星                                                                                                                                                                          | 濱子      | 1902 | 明治35 |
|                   | ヒステリーの昂進ばかりではない。<br>(『明治文學全集93 明治家庭小説集』筑摩書房、1969年6月、84頁。)                                                                                                                     |         |      |      |

|    |                                                                                                                                    |          |      |      |
|----|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------|------|------|
| 11 | 山岸荷葉                                                                                                                               | 紺暖簾      | 1902 | 明治35 |
|    | 一向に流す涙の瀧の如く、果は声を立つ葉に措かず、急ぎ医を呼べば、少しくヒステリー性のものありと診断す。<br>(『明治文學全集22 硯友社文学集』筑摩書房、1969年1月、303頁。)                                       |          |      |      |
| 12 | 菊池幽芳                                                                                                                               | 家庭小説 乳姉妹 | 1903 | 明治36 |
|    | (昭) やつぱり貴嬢はヒステリーかも知れない。あんまり神経を遣ひ過ぎたのでせう。<br>と昭信は口では云ひましたけれども、心ではヒステリーのみではあるまいと信じて居るのでした。<br>(『明治文學全集93 明治家庭小説集』筑摩書房、1969年6月、220頁。) |          |      |      |
| 13 | 岩野泡鳴                                                                                                                               | 焰の舌      | 1906 | 明治39 |
|    | 猛 それでなげやア、ヒステリーなどいふ神経病の一種で、お化けや幽霊を自分で拵らへて、自分でそれを苦む仲間にあなを数へ入れますぞ。<br>(『明治文學全集86 明治近代劇集』筑摩書房、1969年3月、184頁。)                          |          |      |      |
| 14 | 小栗風葉                                                                                                                               | 恋ざめ      | 1907 | 明治40 |
|    | 弥張ヒステリーとでも云んでせう<br>(『明治文學全集65 小杉天外 小栗風葉 後藤宙外集』筑摩書房、1968年10月、271頁。)                                                                 |          |      |      |
| 15 | 長塚節                                                                                                                                | 開業医      | 1909 | 明治42 |
|    | おかみさんといふのは家附の娘でそれでヒステリーであるから我儘な人である。<br>(『明治文學全集54 伊藤左千夫 長塚節集』筑摩書房、1977年6月、241頁。)                                                  |          |      |      |
| 16 | 徳田秋声                                                                                                                               | 二十四五     | 1909 | 明治42 |
|    | ヒステリーの気味も多少あつた。<br>(『明治文學全集68 徳田秋声集』筑摩書房、1971年1月、267頁。)                                                                            |          |      |      |
| 17 | 北原白秋                                                                                                                               | 邪宗門      | 1909 | 明治42 |
|    | 「噴水の印象」の一句「濡れ黄ばむ <sup>ヒステリー</sup> 憂鬱症のゆめ」(明治41年7月)<br>(『明治文學全集74 明治反自然派文學集(一)』筑摩書房、1966年12月、28頁。)                                  |          |      |      |
| 18 | 水野葉舟                                                                                                                               | おみよ      | 1910 | 明治43 |
|    | もう永らくヒステリーで狂気のやうになつて寝て居る。<br>(『明治文學全集72 水野葉舟 中村星湖 三島霜川 上司小剣集』筑摩書房、1969年5月、20頁。)                                                    |          |      |      |
| 19 | 島崎藤村                                                                                                                               | 家        | 1910 | 明治43 |
|    | 『医者？ 医者の言ふことなぞが奈何して宛に成りませう。女の病氣とさへ言へば、直ぐ <sup>ヒステリー</sup> 歇私的里……』<br>(『明治文學全集69 島崎藤村集』筑摩書房、1972年6月、210頁。)                          |          |      |      |
| 20 | 北原白秋                                                                                                                               | 思ひ出      | 1911 | 明治44 |
|    | 「わが部屋」の一句「 <sup>ヒステリー</sup> 弊私的里の從姉きて」<br>(『明治文學全集74 明治反自然派文學集(一)』筑摩書房、1966年12月、101頁。)                                             |          |      |      |
| 21 | 近藤元                                                                                                                                | 南方の花     | 1912 | 明治45 |
|    | ヒステリーの女の眸にうつりたる冷たく澄みし初秋の海<br>(『明治文學全集64 明治歌人集』筑摩書房、1968年9月、73頁。)                                                                   |          |      |      |

|    | 北原白秋                                                                                                                                                                    | 東京景物詩 | 1913 | 大正2 |
|----|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------|------|-----|
| 22 | 「公園の薄暮」の一句「 <sup>つか</sup> 疲れたる <sup>がらす</sup> 硝子より <sup>ヒステリイ</sup> 弊私的 <sup>ひとみ</sup> 里の <sup>はな</sup> 瞳を放つ。」(明治42年2月)<br>(『明治文學全集74 明治反自然派文學集(一)』筑摩書房、1966年12月、114頁。) |       |      |     |
|    | 「鶯の歌」の一句「 <sup>ヒステリイ</sup> 憂鬱症の <sup>たましひ</sup> 靈の <sup>やめ</sup> 病るしらべよ……」(明治42年1月)<br>(『明治文學全集74 明治反自然派文學集(一)』筑摩書房、1966年12月、114頁。)                                     |       |      |     |
|    | 「雑艸園」の一句「そのなかに絶えず恐るる <sup>ヒステリイ</sup> 弊私的里の看護婦の眼と、」(明治42年10月)<br>(『明治文學全集74 明治反自然派文學集(一)』筑摩書房、1966年12月、116頁。)                                                           |       |      |     |
|    | 「瞰望」の一句「 <sup>ヒステリイせい</sup> 弊私的里性の薄青き、あるは閉せる、」(明治42年10月)<br>(『明治文學全集74 明治反自然派文學集(一)』筑摩書房、1966年12月、118頁。)                                                                |       |      |     |
|    | 「IV 銀色の背景」の一句「 <sup>ヒステリイ</sup> 弊私的里の甚しきは」(明治43年2月)<br>(『明治文學全集74 明治反自然派文學集(一)』筑摩書房、1966年12月、120頁。)                                                                     |       |      |     |
|    | 「雪ふる夜のころもち」の一句「 <sup>ヒステリー</sup> 弊私的里の <sup>ほつき</sup> 発作が過ぎた、そのあとの沈んだ <sup>きぶん</sup> 気分 <sup>ふんゐき</sup> の雰囲気に」(明治43年6月)<br>(『明治文學全集74 明治反自然派文學集(一)』筑摩書房、1966年12月、124頁。) |       |      |     |
|    | 「蕨」の一句「 <sup>やうじ</sup> 楊枝 <sup>つか</sup> へり <sup>ヒステリー</sup> 弊私的里の」(明治44年4月)<br>(『明治文學全集74 明治反自然派文學集(一)』筑摩書房、1966年12月、154頁。)                                             |       |      |     |
|    | 「河岸の雨」の一句「一寸おきき、何処かで千鳥が鳴く、 <sup>ヒステリー</sup> 歇私的 <sup>たましひ</sup> 里の靈、」(明治45年5月)<br>(『明治文學全集74 明治反自然派文學集(一)』筑摩書房、1966年12月、159頁。)                                          |       |      |     |

ヒステリー用例の最初となるのは1885(明治18)年に発表された福沢諭吉「日本婦人論」であるが、次のような記述がある。

食物の不足を以て身を害するの害は過食の害に異ならず。快樂は情の食物なり。然るに日本の女性は此食物に飢えて満足を得ず、就中社会中等以上に於ては春情を養ふの方便最も不自由にして惨酷を極め、是等の憂愁内に鬱して心識過敏形體脆弱の禍を醸し、世々の遺伝女性の子に伝へ又孫に及ぼし、今日其全般の性質を見るに、些細の事変に喜怒哀楽恐怖し、輕少の労苦寒熱痛痒にも堪るを得ず、無事健康と称する者にてても一見病むが如く憂ふるが如く恐るゝが如く悲しむが如くにして、所謂人生の萎縮したる者甚だ多し。其発して病症に現はれたる者は実に千差万別無限なる可しと雖ども、一、二を挙げば、俗に所謂婦人の疝症又は癩頭痛など云ふものは即ちヒステリー子宮病神経病等の諸病にして、之が為には鬱憂閉塞心怖不眠月華不順飲食不消化等の症を現はして、時としては眩暈し又は劇痛に苦しみ、全身次第に瘦瘠して医薬效を奏せず、半死半生不愉快至極なる日月を消して遂に斃るゝ者甚だ

少なからず。<sup>25</sup>

諭吉は「婦人の快樂」の「不足」により、生じる「鬱」は子孫に遺伝するだけでなく、「ヒステリー子宮病神経病等の諸病」の原因になるという。こうした問題は「日本全国の女性は概して此類の憂愁に苦しめられ、其禍は伝へて子々孫々に及ぼし、以て次第に人種の發達を妨るは慨嘆に堪へざる事共なり」<sup>26</sup>と婦人だけの問題ではなく、日本全体の問題として認識していた。また、この問題に対する方案の例として「再婚の自由にてても、男子が九十九にして女子が一ならば、其の四十九を返却して正しく等分ならしめんと欲するのみ」<sup>27</sup>と男性に偏っている「婚姻の権利」を女性に同等に与えるべきであるとし、「期する所の目的は人種の改良」<sup>28</sup>にあるとした。さらに、婚姻制度における男女不平等の問題について指摘し、「速に日本女性の鎖を解くことに尽力す可きものなり」<sup>29</sup>と当時の婦人問題に関心を寄せていた。しかし、一方では「人種の發達」を阻害する婦人の快樂不足問題、さらに、快樂不足により女性にあらわれる諸病の一つとしてあげられているヒステリーは、ヒステリーとされる女性たちに「人種の發達」を阻害するという汚名を着せる種になりえる。そういった意味で諭吉の展開した婦人論は、諭吉自身が意図していなかったものの、女性に対する偏見と差別をもたらしたという結果になったのは否定できないであろう。

明治文学におけるヒステリーは当時のヒステリー言説と同様に、主に婦人病の一種として用いられているが、その対象となっているのは当然女性である。まず、坪内逍遙『妹と背かゞみ』では、妻を選ぶ際に「家庭教育の重んずべき」<sup>30</sup>とし、教養のない女性はヒステリーになるという文脈において用いられており、高瀬文淵「詩篇 若葉」では、出産後のお絹がヒステリーとなっている。三宅花圃「萩桔梗」は女性作家による最初のヒステリー用例ではないかと考えられるが、作中では浪子がヒステリーとなっており、「夫婦になつて、一生笑つたり、泣いたりして、ムニャムニャと暮して仕舞ふ」<sup>31</sup>とヒステリーは治るとされている。小栗風葉「寝白粉」では妹に、福地櫻痴「買収政略大策士」では「一昨年廿八歳にて茂林令夫人」<sup>32</sup>にヒステリーが用いられており、尾崎紅葉「新続金色夜叉」ではお静がヒステ

---

<sup>25</sup> 福沢諭吉「日本婦人論」『明治文學全集8 福沢諭吉集』筑摩書房、1966年3月、110頁。

<sup>26</sup> 同前掲注25。

<sup>27</sup> 同前掲注25、116頁。

<sup>28</sup> 同前掲注25、116頁。

<sup>29</sup> 同前掲注25、116頁。

<sup>30</sup> 坪内逍遙「妹と背かゞみ」『明治文學全集16 坪内逍遙集』筑摩書房、1969年2月、189頁。

<sup>31</sup> 三宅花圃「萩桔梗」『明治文學全集81 明治女流文學集』筑摩書房、1966年8月、147頁。

<sup>32</sup> 福地櫻痴「買収政略大策士」『明治文學全集11 福地櫻痴集』筑摩書房、1966年6月、114頁。

リーとされている。内田魯庵「くれの廿八日」では、妻のヒステリーが夫に「僕を恐嚇する示威運動」<sup>33</sup>として捉えられている。

次いで、柳川春葉「秋裕」では、露子にヒステリーが用いられており、草村北星「濱子」の主人公の濱子は「松波病院の第三号室に収容され」<sup>34</sup>ている間、ヒステリーを起している。山岸荷葉「紺暖簾」では、母がヒステリーとなっているが、水野葉舟「おみよ」の中でも、お君の母がヒステリーであるため、「お君は日に二三時位は大抵毎日、そこに看病に行く」<sup>35</sup>とされている。菊池幽芳「乳姉妹」では君江が婚礼の準備で「神経を遣ひ過ぎ」てしまい、ヒステリーとなっており、岩野泡鳴「焰の舌」では花子がヒステリーとなっているが、ヒステリーを神経病の一種であるとし、そのため「お化けや幽霊を自分で拵らへて」<sup>36</sup>とされているところからは、神経病という考え方が流行した時の「怪異＝病理」という図式がうかがわれる。次に中年の男の恋を描いた小栗風葉「恋ざめ」ではその相手となる百合子に、長塚節「開業医」ではおかみさんに、徳田秋声「二十四五」では漣子に、島崎藤村「家」では曾根にヒステリーが用いられている。最後に、北原白秋と近藤元の詩においてもヒステリーが用いられているが、特に、北原白秋の場合は、多数の作品においてヒステリーの様々な表記が用いられ、詩の韻律をより美しく活かしており、繊細な感覚の表現を達成していると考えられる。他にも、夏目漱石『虞美人草』(1907)、『それから』(1909)、『門』(1910)や寺田寅彦『話の種』(1907)、石川啄木『葉書』(1909)等の作品にヒステリーが用いられていることが分かった。以上のようにヒステリーは断片的な感情表現にとどまらず、ヒステリーの医学的な知識やヒステリーにまつわる女性のイメージ等を活かして創作の手段として用いられている。

さて、本論文の議論を展開する上での難題は、人物のどうした状況に対して「ヒステリー」という表現を当てはめるか、という問題である。もっとも分かりやすい解決方法としては、「ヒステリー」の語が作者によって使われ、作者からお墨付きをもらった人物や場面だけを論じるという方法であろう。しかし、そうした機械的な方法では、人物の症状や実態を見逃してしまうおそれがあると思われる。作家は、文体への配慮から、ヒステリーの語を繰り返し使うのを控える可能性があるだろうし、人物のステレオタイプ化をきらう作者なら、みずから人物をヒステリーと認定することで人物が固定化して読まれることを恐れるかもし

<sup>33</sup> 内田魯庵「くれの廿八日」『明治文學全集24 内田魯庵集』筑摩書房、1978年3月、6頁。

<sup>34</sup> 草村北星「濱子」『明治文學全集93 明治家庭小説集』筑摩書房、1969年6月、83頁。

<sup>35</sup> 水野葉舟「おみよ」『明治文學全集72 水野葉舟 中村星湖 三島霜川 上司小剣集』筑摩書房、1969年5月、20頁。

<sup>36</sup> 岩野泡鳴「焰の舌」『明治文學全集86 明治近代劇集』筑摩書房、1969年3月、184頁。

れない。本研究では、おおむね、ヒステリーの範囲を緩やかに大きめに設定し、医学的には必ずしもヒステリーに相当しない症状をもヒステリー的なものとしてそれに含め、そうした症状が物語の展開にどのように関わっているかを見たいと考えている。医学的症例のデータ集として書かれているわけではない文学作品を材料にして、あえてヒステリーの観点から論じる以上、「取りすぎ」を恐れず、積極的に採集していくことに大きな弊害は生じないと考えられるからである。本論文では、ヒステリーという存在が作品のテーマや人物の性格や特徴、さらには人物間の関係、ストーリーの展開などになんらかの点で密接に関わり、作品の中でヒステリーという要素が一定の重要性を帯びていると思われる作品を取り上げ、考察の対象にしたい。

まず、第1章では、明治期においてヒステリーという言葉はあまり知られていなかったものの、ヒステリーのような疾患の総称として用いられる神経病という言葉が流行していたことを踏まえて、神経病という言葉に注目し、ヒステリーの造型に影響を及ぼしたとみられる要素について探してみたい。明治維新後、西洋からの知識を積極的に受容し、急速な文明開化が進んでいた明治期は、新旧の文明が絡み合い、民衆には混沌とした時期でもあったと考えられる。特に、西洋医学の積極的な受容は、当時の日常生活を一変させるような効果をもたらしていたが、それが必ずしも嬉しいことにはかぎらなかったようである。幽霊や怪異を扱う怪談の領域では、怪異を病理として解釈しようとする動きに反発し、神経病という言葉を用いて批判しようとした作者もいるが、それがかえって「神経病」という「コトバの大衆化を促進した」<sup>37</sup>という結果になった。その代表的な作品として三遊亭円朝『真景累ヶ淵』があるが、作品の中で神経病という言葉が用いられている場面を分析し、さらにその中でヒステリーと解釈できる登場人物及び場面について検討してみたい。

第2章では、多くの先行研究の中で指摘されている妻のヒステリーについて探してみたい。取り上げる作品は、まず、作家自身の実生活を素材にして描かれた岩野泡鳴「五部作」と夏目漱石『道草』の両作品を第1節、第2節において検討を行いたい。両作品では、妻のヒステリーを家庭不和や夫婦問題の一つとして用いているが、泡鳴の「五部作」では家庭崩壊をもたらしている一因として用いられている一方で、漱石の『道草』では家庭を維持する「緩和剤」として用いられている。一家の家長であり、一人の夫でもあった男性作家におけるヒステリーの妻はどのように描かれていたであろうか。人によって様々な形であられるという特徴を持つヒステリーは、主に夫が求める良妻賢母に従わない妻に用いられていたのだが、

---

<sup>37</sup> 渡会好一『明治の精神異説—精神病・神経衰弱・神がかり—』岩波書店、2003年3月、100頁。

その良妻賢母というのは社会的な影響力を持っていた。そうしたことがどのようにあらわれているのかについて考察を行いたい。

第3節、第4節では妻の性欲とヒステリーを関連づけて用いられている作品として、芥川龍之介「二つの手紙」と広津和郎『神経病時代』を中心に検討を行いたい。芥川の「二つの手紙」は妻のヒステリーにドッペルゲンガーというオカルト的な要素を加味した作品で、神経病という言葉の流行時に形成された「怪異＝病理」図式の特徴がうかがわれる。欲求不満を原因とするヒステリーは妻の姦通事件との関係性を強調していると同時に、ドッペルゲンガー説を裏づける根拠として用いられている。本論ではドッペルゲンガー発現の一因として挙げられている妻のヒステリーを中心に作品を分析し、ヒステリーが「二つの手紙」においてどのような意味を持つのかについて考察を行いたい。次の第4節で取り扱う広津の『神経病時代』は、チャーホフの影響から性格破産者を主人公にし、当時の日本社会を引っ張るべき知識人が弱い性格のために自主性を失っていることを社会問題として取り扱い、描こうとした作品である。主人公定吉を神経病にさせる一因として妻のヒステリーがあげられているが、『決闘』においては定吉の立場にあるラエーフスキーがヒステリーとされている。両作品における性格破産者とヒステリーについて、対照・比較しながら検討を行いたい。

第3章では、女性作家によって語られるヒステリーについて考察する。「新しい女」たちは『青鞥』を中心に婦人解放運動を展開したが、当時の男性社会を脅かしたという理由で非難的となり、ヒステリーとされていた。おそらく、そうした社会的な雰囲気がヒステリーの流行とも関係があったと考えられるが、当事者でもある女性たちはヒステリーをどのように用い、どのように理解していたであろうかについて探してみたい。取り上げる作品は、第1節では、「五部作」の作家岩野泡鳴の元妻であった岩野清の作品を中心に考察を行いたい。岩野清は『青鞥』を中心に創作や評論活動をしていた「新しい女」の一人であり、岩野泡鳴との契約同棲をはじめ、別居後の同居請求訴訟や離婚請求訴訟などで世間の注目を集めた人物である。泡鳴との同棲生活を記録した『愛の争闘』と当時の実生活が反映された短編小説「枯草」を中心に、岩野清におけるヒステリーについて検討してみたい。

次の第2節では、日本近代女流文学の代表的な作家与謝野晶子の「姑と嫁に就て」という評論を中心に、ヒステリーがどのように用いられていたのかについて探してみたい。実在の姑殺人未遂事件に対する晶子の見解とその事件からうかがわれる日本の社会問題、特に女性の教育に対する問題認識がヒステリーを媒介にどのようにあらわれているのかについて考察を行いたい。第3節においてはプロレタリア文学家として労働者のために多くの創作活動や社会活動を行ってきた宮本百合子の作品にあらわれているヒステリーについて検討してみた

い。百合子の作品では、女中のような「勤労下層階級」<sup>38</sup>を主人公にし、その人生に着目して描かれた作品があまりないと指摘されているが、その指摘しているところを踏まえつつ、「縫子」における女性の労働問題に焦点を当てて検討してみたい。

第4章では、ヒステリーの医学的な知識が文学作品においてどのように活用されているのかについて検討してみたい。取り上げる作品は、第1節では、有島武郎の『或る女』を中心に探してみたい。『或る女』は1911(明治44)年に発表された「或る女のグリンプス」を改作し、1919(大正8)年に改めて発表した。改作の際にはハヴロック・エリスの『性の心理』を参考にしたといわれている。医学書を参考にして改作した『或る女』と改作前の「或る女のグリンプス」を対照・比較し、ヒステリーがどのように変化しているかに注目し、葉子の悲劇的要素としてどのように作用しているか、さらに、フェミニストであった有島が主人公を破滅させた意図は何であろうかについて考察を行いたい。第2節では、日本において初めて精神分析を素材にとった作品といわれている佐藤春夫の『更生記』を中心に探してみたい。ヒステリー患者の症状と精神病理学の助教授の分析によって物語がどのように展開されているのか、その特性について検討してみたい。第3節では、精神分析医を主人公にした三島由紀夫の『音楽』を中心に探してみたい。由紀夫は『音楽』を創作する際に、シュテーケルの医学書を参考にしたといわれているが、その影響下にヒステリーがどのように描かれているかについて検討してみたい。

---

<sup>38</sup> 大河晴美「女中・元女中を描いた小説群―「黄昏」「或る日」「格子縞の毛布」「氷蔵の二階」をめぐる」『国文学 解釈と鑑賞』71、2006年4月、96頁。

## 第1章 明治期におけるヒステリーと神経病

ヒステリーという言葉は女性の病として明治末期から大正期にかけて大ブームとなり、多くの文学作品の中で用いられていた。その中でヒステリーという言葉は主に感情をあらわす形容用語として用いられており、ヒステリーが発生する様子には「突発性、反復・継続性」がうかがわれるということはすでに序章において触れてある。おそらく、ヒステリーの原因や症状等が人によってそれぞれ異なり、様々な形であらわれる点で創作するにあたって使いやすい素材であったであろう。但し、女性の病であるという点で、主に女性人物が対象となっており、当時の社会的な背景から家庭や男女間において出来得る様々な状況に用いられている。そのため、ヒステリーの先行研究は、ヒステリーを媒介にあらわれる女性の社会問題及び男女関係における力学関係等といったジェンダー学の視点から論じられたものが多く、取り扱われた作品も自然主義文学系列が大半を占めている。本論文にも、そのような研究の一環としてみることのできる論文が含まれているが、一方で、本章においては既存の先行研究とは少し異なるアプローチを試みたい。ヒステリーという言葉が流行する前に、神経病という言葉の流行があり、ヒステリーが神経病の一種として認識されていたということを手掛かりとして、その影響関係について探してみたい。まず、ヒステリーと神経病がどのような関係性を持っているのか、当時形成された言説を中心に検討を行いたい。

### 第1節 ヒステリーと神経病

日本においてヒステリーという言葉が初めて登場したのは、江戸末期の蘭学者らの訳書からである。1857(安政4)年に刊行された緒方洪庵訳本『扶氏経験遺訓』第6篇の「神経病」に「男子ニ依ト昆埜児ト謂ヒ婦人ニ歇以私的里ト謂フ」と「依ト昆埜児」の項を説明するために用いられている。神経病という言葉は1822(文政5)年に刊行された宇田川榛斎『遠西医方名物考』の中で初めて用いられていたという。「玄白門下の秀才」<sup>1</sup>であった宇田川榛斎が、杉田玄白『解体新書』(1774)の中で初めて「「神気の経脈」という意味」<sup>2</sup>として登場している日本語の造語「神経」を用い、「神経病」という言葉を作ったとされている。『解体新書』はヨーハン・アダム・クルムス著の『ターヘル・アナトミア(Anatomische Tabellen)』(1722)の訳本であるが、その中でZenuw(セーニュー)というオランダ語を「「神気経脈」

<sup>1</sup> 中貞夫「十九 宇田川玄眞」『杉田玄白の生涯 日本科学の先駆者』小学館、1942年12月、221頁。

<sup>2</sup> 吉田城「序論」『神経症者のいる文学』名古屋大学出版会、1996年7月、6頁。

(中略)だと説明しているように、精神・靈魂の通り道という意味<sup>3</sup>として「神経」と訳していたという<sup>4</sup>。それに比べ、ヒステリーは「歇以私的里」と本来の発音に漢字を当てたもので、明治期には「歇以私的里」「弊私的里」「歇私的里」「歇斯的里」「比私的里」「歇私埒利」「喜斯的里」「比私的里」「歇私的兒」「歇依私的里」等の漢字表記や「ヒステリー」「ヒステリイ」「ヘーステリー」「ヘステリイ」等のカタカナ表記が用いられている。ヒステリーという現象をあらわす表記がこれほど多かったということからみれば、当時のヒステリー言説は生成している最中であったということやヒステリーという言葉から想起できるイメージもまだ定型化されていない状態であったということが想定できよう。

さて、これらの用語は、江戸末期には「蘭方医には知られてはいたけれども、一般にはまだ普及していなかった」<sup>5</sup>が、明治維新後の文明開化によって西洋の精神医学が本格的に導入され、専門用語として用いられるようになる。とはいえ、ヒステリーや神経病が医学書によって民衆に伝わり、大衆化が促されたとは言いがたい。医学書が知識人の間では読まれたと想定できても、民衆にまで読まれたとは考えられないからである。前田愛によると明治初期における日本人の識字率は低かったため、「明治政府は王政復古のイデオロギーと文明開化の効能とを民衆に浸透させるためには、まことに効率のわるい方法を採用しなければならなかった」<sup>6</sup>ということから医学書による大衆化は出来なかったであろう。

文明開化後の近代社会において幽霊などの怪異はいわゆる前近代的な思想になるのだが、谷口基によると、文明開化は「徹底した実学主義と現実主義のおすすめだった」<sup>7</sup>ため、「旧慣習俗、迷信、淫祠邪教など、旧世界から残るいわゆる「闇」の領域」<sup>8</sup>は不合理なものとして排斥されていたという。怪談がテーマとしてきた「闇」の領域は「最も直截に「開化」の掣肘を受ける存在」<sup>9</sup>であったためなのか、怪談を語ってきた人たちは「「開化」の世にあって時代遅れと目された怪談のスタイルをかりて社会批判」<sup>10</sup>を行っていた。その際に用いられていたのが神経病という言葉であり、自然に「怪異＝病理」という図式が形成さ

<sup>3</sup> 渡会好一『明治の精神異説—精神病・神経衰弱・神がかり—』岩波書店、2003年3月、8頁。

<sup>4</sup> 吉田城は、Zenuw＝「神経」という訳語が定着すれば、Ziekte(シーキテ、複数形 Ziekten)は一般に病気を表わすオランダ語であるため、Zeunwziekte(セーニューシーキテ)を「神経病」と訳すのに工夫はいらないのであろうと指摘している。

同前掲注2、6頁。

<sup>5</sup> 同前掲注3、6頁。

<sup>6</sup> 前田愛『近代読者の成立』岩波書店、2001年2月、146頁。

<sup>7</sup> 谷口基「式 開化期怪談の苦闘」『怪談異譚—怨念の近代—』水声社、2009年8月、46頁。

<sup>8</sup> 同前掲注7。

<sup>9</sup> 同前掲注7、53頁。

<sup>10</sup> 同前掲注7、51-52頁。

れるようになる。特に、神経病という言葉が多く用いられた理由としては、あらゆる神経疾患の総称であった神経病という言葉で様々な現象をあらわすことが容易であったということや超自然的な民俗信仰を解釈する病名として「精神・霊魂の通り道という意味」を持つ神経病という言葉が適していたということが考えられる。三浦正雄は「幽霊などの怪異を〈神経病〉と解釈する作品」<sup>11</sup>としていくつかをあげているが、その中に三遊亭円朝の落語『真景累ヶ淵』も含まれている。さらに、「円朝の怪談の人気は大変なものであった」<sup>12</sup>と指摘しているところからは神経病という言葉の流行に一助したとみることもできよう。

一方で、ヒステリーはどういう状態であったろうか。川村邦光によると、日本の精神医学の初期段階は「狐憑きのフィールドワークから始まったといっても過言ではない。精神病の症例として、日本固有の精神病ともみなされながら、狐憑きがふんだんにみられたのであり、眼前のテーマとして、現地調査、また文献渉猟を通じて研究された」<sup>13</sup>という。知識人の間で流通されていたヒステリーは主に学問的な研究対象として扱われていたと考えられるが、具体的にどのような内容であったのか、さらに、神経病とどのように関連づけられ、言及されていたのかについて、当時の関連文献を通じて探ってみたい。

## 第2節 明治期におけるヒステリー言説

関連文献資料は「図書・そのほか」と「記事」とに分けて分析を行いたい。まず、「図書・そのほか」は国会図書館に登録されている資料と金子準二編著『日本精神病学書史明治編 日本裁判精神病学書史明治編』において紹介されている資料を合せたもので、図書、雑誌、機関紙等の資料が含まれている。「記事」の場合は、明治期において民衆に多く読まれ、大衆紙ともいわれる『読売新聞』と『朝日新聞』に載せられた記事の中でヒステリーについて言及されている記事を集めた。「図書・そのほか」と「記事」とに分ける理由は「図書・

<sup>11</sup> 三浦正雄は「幽霊などの怪異を〈神経病〉と解釈する作品」として、三遊亭円朝の落語『真景累ヶ淵』(明治2年口演、初出『やまと新聞』明治20年9月-21年1月推定、明治21年・井上勝五郎(薫志堂)刊)、『怪談牡丹燈籠』(文久元年作、明治17年・東京婢史出版社)、『鏡ヶ池操松影』(5冊、明治18年、牡丹屋・朝香屋・金桜堂)、河竹黙阿弥の歌舞伎『木間星箱根鹿笛』(明治13年11月初演、初出『歌舞伎新報』明治12年12月、明治113年・吉村いと刊)、高島濫泉『怪談深閨廟』(初出『絵入朝野新聞』明治14年2-3月、明治17年・鶴声社)、一竿齋宝洲『勸懲十八番神経闇開化怪談』(3冊、明治17年、金亀堂・松寿堂)、関屋孝橘『怪談怨緒環』(明治17年、日月堂)、花笠文京『開明小説 四季の花籠』(明治17年、絵入り自由出版社)、竹柴其水『百物語雨夜怪談』、香夢楼主人『怪談牡丹燈』(明治20年、内沢安二良刊)を挙げている。

三浦正雄「神経病としての怪談—日本近現代怪談文学史(1)—」『埼玉学園大学紀要 人間学部篇』(7)、2007年12月、265(52)頁。

<sup>12</sup> 同前掲注11。

<sup>13</sup> 川村邦光編著「第1章 近代日本における憑依の系譜とポリティクス」『憑依と近代とポリティクス』青弓社、2007年2月、27頁。

そのほか」の分析では、主に学問的にどのように語られていたのかを知るためであり、「記事」の分析では、その学問的な知識が民衆にどのように伝わっていたのか、さらにヒステリーという言葉が実生活においてどのように用いられていたのかを知るためである。

まず、ヒステリーの文献資料を収集する際には、先述したようにヒステリーの表記が様々であったため、「ヒステリー」「ヒステリイ」「ヘーステリー」「ヘステリイ」のカタカナ表記と「歇以私的里」「弊私的里」「歇私的里」「歇斯的里」「比私的里」「歇私埤利」「喜斯的里」「比私的里」「歇私的兒」「歇依私的里」の漢字表記を含めて調べた。「記事」の場合は、社会、学術、犯罪、教育等と関連した「記事」と精神病院や薬等を宣伝している「広告」とに分けることができたが、用語がどのように語られ、民衆にどのように伝わったかという言説の分析を目的としているため、本文では「広告」の内容は取り上げず、参考資料の「目録」にのみ表記しておきたい。調査対象となる期間は1868(明治元)年1月25日から1912(明治45)年7月30日までの明治期であるが、「記事」の場合は『朝日新聞』『読売新聞』の各創刊号から調べた。但し、統計では『朝日新聞』より『読売新聞』の創刊が早かったため、『読売新聞』が創刊された1875(明治8)年からの記事件数を表記した。

まず、収集した「図書・そのほか」資料の件数を年度別にまとめてみると以下のようである。

| 西暦   | 和暦   | 件数 | 西暦   | 和暦   | 件数 | 西暦   | 和暦        | 件数         |
|------|------|----|------|------|----|------|-----------|------------|
| 1868 | 明治元  | 0  | 1883 | 明治16 | 2  | 1898 | 明治31      | 0          |
| 1869 | 明治2  | 0  | 1884 | 明治17 | 0  | 1899 | 明治32      | 4          |
| 1870 | 明治3  | 0  | 1885 | 明治18 | 4  | 1900 | 明治33      | 3          |
| 1871 | 明治4  | 0  | 1886 | 明治19 | 5  | 1901 | 明治34      | 1          |
| 1872 | 明治5  | 1  | 1887 | 明治20 | 2  | 1902 | 明治35      | 3          |
| 1873 | 明治6  | 0  | 1888 | 明治21 | 6  | 1903 | 明治36      | 5          |
| 1874 | 明治7  | 0  | 1889 | 明治22 | 2  | 1904 | 明治37      | 11         |
| 1875 | 明治8  | 2  | 1890 | 明治23 | 6  | 1905 | 明治38      | 14         |
| 1876 | 明治9  | 2  | 1891 | 明治24 | 3  | 1906 | 明治39      | 14         |
| 1877 | 明治10 | 0  | 1892 | 明治25 | 8  | 1907 | 明治40      | 10         |
| 1878 | 明治11 | 1  | 1893 | 明治26 | 6  | 1908 | 明治41      | 22         |
| 1879 | 明治12 | 1  | 1894 | 明治27 | 8  | 1909 | 明治42      | 19         |
| 1880 | 明治13 | 1  | 1895 | 明治28 | 5  | 1910 | 明治43      | 18         |
| 1881 | 明治14 | 2  | 1896 | 明治29 | 5  | 1911 | 明治44      | 24         |
| 1882 | 明治15 | 1  | 1897 | 明治30 | 4  | 1912 | 明治45      | 17         |
|      |      |    |      |      |    |      | <b>総計</b> | <b>242</b> |

※「図書・そのほか」資料目録の詳細は「参考資料1」を参照。

金子準二によると、西洋精神病学の初紹介の単行本は1876(明治9)年に刊行された神戸文哉『精神病約説』であるという。この精神医学の単行本は「外科、内科、産婦人科などの西洋医学紹介書の発行よりおくれて」<sup>14</sup>いるため、ヒステリーに関する最初の紹介となるのは、桑田衛平訳述『内科摘要』とされている。1872(明治5)年に刊行された『内科摘要』は、アメリカのペンシルバニア大学健全学教頭兼内科助教であったヘンリー・ハルツホルン(Henry Hartshorne)の「内科總論兼治療法」第2版の訳本である。ヒステリーについては以下のように記されている。

喜斯的里 ヒステリア(匈)

喜斯的里はひとり婦人の病にして、本来子宮の疾患に係るを以ってこの名を命ぜり。すなわち其の症状たる千変万化究極し難しというえども、畢竟ただ全神経系の刺衝機過敏なるを以って本性とす。此の病もまた時として発作間歇をなし、其の発するや、頻に笑い或は哭しみ自ら禁じ難きものあり、或はまたその甚だしきものに至っては、ほとんど癲癇の搐掣に似たるものありしかれども、この喜斯的里症は、全く人事不省に陥ることなく、かつ治し易きを以って真の癲癇とは、自ら異なるものなり。

(中略)

喜斯的里性の婦人においては、月経の不調なるもの多きが故に、すべからく注意して、これを調節するの処置を施し、かつ必ず開豁の地に逍遙せしめ、すべて精神の感動及び心思を勞するの諸件を避けしめ、安全なる産業を営ましむべし。<sup>15</sup>

「婦人の病」として紹介されているヒステリーは、「発作」を起こし、それによって「頻に笑い或は哭しみ自ら禁じ難きものあり、或はまたその甚だしきものに至っては、ほとんど癲癇の搐掣に似たるもの」であるが、「全く人事不省に陥ることなく、かつ治し易き」という点で、癲癇とは異なっていると記されている。また、ヒステリー症の婦人においては「月経の不調なるもの多き」とされ、「これを調節するの処置を施し」、「すべて精神の感動及び心思を勞するの諸件を避けしめ、安全なる産業を営ましむべし」と記されている。『内科摘要』は1875(明治8)年10月に『増訂華氏内科摘要』として刊行されるが、その中でヒステリーは「脳及神経系諸病」と分類されている。他にヒステリーが神経系疾患として分類され

<sup>14</sup> 金子準二『日本精神病学書史明治編 日本裁判精神病学書史明治編』日本精神病院協会、1965年1月、5頁。

<sup>15</sup> 同前掲注14、21-23頁。

ているのは、『病理各論』(1881)、『内科病論』(1882)、『鼈氏内科学 下巻』(1894)などである。

当初は専門知識的な内容が中心となっていたが、日露戦争前後に坂田實の『健脳法』(1904)、後藤省吾の『脳神経衰弱』(1905)、三宅秀の『安眠法』(1908)のような通俗精神医学書が続々と発行され、ヒステリーも通俗医学書の中で語られるようになる。糸左近は「明治末期から大正初期にかけて文系の内容から医学的に関係する書籍まで幅広いジャンルの書籍を出版」<sup>16</sup>し、主に生理、衛生、病態学に関する研究を中心に行っていたが、1905(明治38)年に刊行された学生向けの通俗衛生書『男女学問病』の中でヒステリーについて以下のように記している。

我国では古来血の道と称してゐる(中略)原因 十五歳より廿五歳までの婦人に多い病で、精神の感動から発するのは最も多い。一体女子を男子に比ぶると感情の強いもので、ことに驚愕・悲哀・憤怒・嫉妬・虚栄等の情は最も著しいやうである、之を女学生の学校試験前後などに徴して見ると、これ等の情の盛んに戦ふ様は、迥も男性の如き比では無い、『何う有ても優等生になつて皆なに泡吹かしてやらう』とか、『彼の人は何時も何時も優等になつて、したり顔であるが憎い』とか、『今度若も落第したら、世間の人に対しても顔向が無い何うしたら可からう』とか、色々考へて、学科の勉強に精神を費すよりも、その方に費すのが強い、そこで目出度目的を達せらるれば、虚栄心の高まる位で済むが、落第でもすると、驚く、悲しむ、泣く、怒る、妬む、其の結果甚しきはこの病気に罹ることは珍らしく無い。この外神経性の遺伝・重病後・貧血・衰弱からも為り、又、生殖器諸病からも反射的に惹起すことも沢山ある。昔の恋愛小説にある恋の病なども本病のことである。又狐憑病も多くは本病の一種である。<sup>17</sup>

当時の民衆がヒステリーをどのように理解していたのか、または民衆にどのように理解させていたのかを総合的に分かることのできる資料であると考えられるが、「血の道」や「婦人に多い」という女性の病としてのヒステリー、「驚愕・悲哀・憤怒・嫉妬・虚栄等の情は最も著しい」という記述からは女性の感情をあらわす形容用語としてのヒステリー、「女学

---

<sup>16</sup> 島田和幸「糸左近著「生理と病理」について—明治末期に出版された人体に関する啓蒙書について—」『形態科学』13(1)、人類形態科学研究会、2009年、1頁。

<sup>17</sup> 糸左近『男女学問病』金刺芳流堂、1905年7月、25-26頁。

生」のヒステリーからは社会に進出する女性、または新しい女の修飾語としてのヒステリー、「狐憑病」からは怪異やミステリーとしてのヒステリーというように、それまで蓄積されてきた日本におけるヒステリーのイメージとしてまとめることができよう。特に、「狐憑病」は先述したように「憑き物」の精神医学的研究に多く取り上げられていたが、その最初は1885(明治18)年『官報』に発表されたエルヴィン・フォン・ベルツ(Erwin von Bälz)の「狐憑病説」である<sup>18</sup>。「狐憑病説」はベルツが狐憑きとみなされた女性を診断・治療した事例をまとめたものであるが、その一例を紹介しておきたい。

某家ノ處女嘗テ馬車ヨリ墮チ其驚愕セリ次日ニ及ヒテ重大ナル疾病ニ罹リシモノト  
如ク或ハ戰慄シ或ハ譫語ス親戚皆其ノ重症ノ腦病ナランヲ憂慮セリ予往キテ之ヲ  
一診シ其ノ強ク腦ノ平衡力ヲ震盪シタルモノ即チ驚愕ニ因スル思慮麻痺症ニシテ歇  
私的里病ノ一類ナル<sup>19</sup>

ある「處女」が「馬車ヨリ墮チ」「驚愕」し、翌日には「戰慄」「譫語」し、親戚一同は「重症ノ腦病」になったのではないかと「憂慮」した。ベルツは往診し「強ク腦ノ平衡力ヲ震盪シタルモノ」、すなわち驚愕を原因とする「思慮麻痺症」で「歇私的里病ノ一類」と診断している。

ベルツに次いで1893(明治26)年に発表された島村俊一の「島根県下狐憑病取調報告」は、狐憑病者の34人の事例についてまとめたもので、日本精神医学者による憑き物についての最初の研究とされている。島村の研究では患者34名のうち男性13名、女性21名で、女性が多く、女性患者の場合は15名がヒステリーであったとされている<sup>20</sup>。1902(明治35)年に公刊された門脇眞枝の『狐憑病新論』は狐憑病者113人の事例についてまとめたものだが、その中では女性患者に最も多く現われる症状として「臆躁狂」<sup>21</sup>が記されている。門脇はヒステリーという言葉を用いていなかったものの、「ヒステリー狂とは予の記せる臆躁狂と同一の病なり」

---

<sup>18</sup> 谷口基によると、医師の増山守正が1875年12月に発行した「実学究理」の啓蒙書『旧習一新』(1875)の中で「一種奇症ノ神經病ニシテ、野狐眩惑ニ因テ狂言妄語スル非ズ、神經怪奇ニ鋭敏変性シ、…(後略)…」と「憑狐」が精神医学的に説明されているというが、ここではヒステリーと関連づけられていない。

同前掲注7、69頁。

<sup>19</sup> エルヴィン・フォン・ベルツ「狐憑病説」『官報』470、1885年1月、10頁。

<sup>20</sup> 門脇眞枝『狐憑病新論』の「狐憑症沿革大要及狐憑に関する諸種の記載」に紹介されている島村俊一の研究内容を参考にした。

門脇眞枝『狐憑病新論』博文館、1902年9月、24頁。

<sup>21</sup> 同前掲注20、147頁。

<sup>22</sup>と理解していたことを踏まえれば、島村の研究と同様に狐憑病の女性患者に多く現われる症状はヒステリーであったと見ることができよう。渡会は『狐憑病新論』について「躁病や統合失調症の憑依妄想までを、「狐憑病」として一括」<sup>23</sup>し、「典型的なトランス・憑依性障害は、子宮病と胃病になやむ女性が、祈禱をうけたために狐が乗りうつった状態になった」<sup>24</sup>のであり、「狐憑病が「迷信」と教育の程度に関係しているとし、遺伝によるとされる精神病のなかでも、迷信と教育程度、「主婦」である女性に、狐憑病との親縁的な関係を見出している」<sup>25</sup>と述べている。

以上のような言説はいずれも医学的な専門知識であったため、民衆に好まれ、読まれたとは考えにくい。しかし、こうした医学知識を分かりやすく、興味深く伝えてくれたのが「新聞」というメディアであり、それによって大衆化が促されたと考えられる。

まず、収集した「記事」資料の件数を年度別にまとめてみると以下のものである。

| 西暦        | 和暦   | 件数 | 西暦   | 和暦   | 件数 | 西暦   | 和暦   | 件数         |
|-----------|------|----|------|------|----|------|------|------------|
| 1868      | 明治元  |    | 1883 | 明治16 | 0  | 1898 | 明治31 | 3          |
| 1869      | 明治2  |    | 1884 | 明治17 | 0  | 1899 | 明治32 | 1          |
| 1870      | 明治3  |    | 1885 | 明治18 | 4  | 1900 | 明治33 | 0          |
| 1871      | 明治4  |    | 1886 | 明治19 | 0  | 1901 | 明治34 | 4          |
| 1872      | 明治5  |    | 1887 | 明治20 | 1  | 1902 | 明治35 | 4          |
| 1873      | 明治6  |    | 1888 | 明治21 | 1  | 1903 | 明治36 | 10         |
| 1874      | 明治7  |    | 1889 | 明治22 | 0  | 1904 | 明治37 | 2          |
| 1875      | 明治8  | 0  | 1890 | 明治23 | 0  | 1905 | 明治38 | 4          |
| 1876      | 明治9  | 0  | 1891 | 明治24 | 0  | 1906 | 明治39 | 17         |
| 1877      | 明治10 | 0  | 1892 | 明治25 | 0  | 1907 | 明治40 | 8          |
| 1878      | 明治11 | 0  | 1893 | 明治26 | 0  | 1908 | 明治41 | 14         |
| 1879      | 明治12 | 0  | 1894 | 明治27 | 0  | 1909 | 明治42 | 15         |
| 1880      | 明治13 | 0  | 1895 | 明治28 | 0  | 1910 | 明治43 | 16         |
| 1881      | 明治14 | 1  | 1896 | 明治29 | 0  | 1911 | 明治44 | 11         |
| 1882      | 明治15 | 0  | 1897 | 明治30 | 0  | 1912 | 明治45 | 7          |
| <b>総計</b> |      |    |      |      |    |      |      | <b>123</b> |

※「記事」資料目録の詳細は「参考資料2」を参照。

<sup>22</sup> 同前掲注20。

<sup>23</sup> 同前掲注3、112頁。

<sup>24</sup> 同前掲注3、112頁。

<sup>25</sup> 同前掲注13、31頁。

ヒステリーという言葉が用いられた記事で最も早かったのは、1881(明治14)年5月18日付の『朝日新聞』の記事である。広島県医師による「不思議な出来事」の連載記事であったが、その中では「ヘーステリと云へる病」<sup>26</sup>に罹った50歳の女性について記されている。ヒステリーという病の原因や症状等の医学的な知識を伝えるために書かれたというより、医師の経験した「不思議な出来事」を語る際に少し触れている程度であるが、記事の冒頭に「今の開明の世に」<sup>27</sup>「怪異なる説は云はぬものぞ云々」<sup>28</sup>と書かれていることから、当時の怪異を病理として解釈しようとした社会的雰囲気を意識した記事のように思われる。

次の1885(明治18)年には4件の記事の中でヒステリーについて記されていたが、「狐憑病説」の連載記事からである。先述したように「狐憑病説」は『官報』に1885(明治18)年1月27日に発表されたベルツの医学説であるが、発表されると同時に『読売新聞』では同日の1月27日に、『朝日新聞』では1月30日に、各連載が始まっている。その記事の中でヒステリーが登場しているが、『朝日新聞』では「歇私的里」の仮名表記に誤謬があったため、以下のように訂正の記事を出している。

狐憑病説 の続文を一昨日及び昨日の紙上に出したる中歇私的里の字にジフテリヤと振仮名せしはヘーステリの誤謬則ち歇私的里は婦人神経病の名なり<sup>29</sup>

ヒステリーの仮名表記を「ジフテリヤ」と2回も間違っているということは、書き間違っただけというより、よく知らなかったとみてよいであろう。さらに、ヒステリーの仮名表記を訂正し、「婦人神経病」と説明を加えていることから民衆にはヒステリーより神経病が知られていたとみることもできよう。

ヒステリーについて言及された記事が17件で最も多かった1906(明治36)年には、6月から8月にかけて「神経の衛生」というタイトルの学術記事が連載され、その中で用いられていたが、39回にわたって連載された記事の企画意図について以下のように記されている。

近頃神経病に就て世間の注意を惹く事が多くなり殊に婦人には此病の爲めに苦痛する方が漸次増加すれば田村医学士に乞ふて『神経の衛生』なる説明を茲に掲ぐ(記者)<sup>30</sup>

<sup>26</sup> 『朝日新聞』(東京/朝刊)、1881年5月18日付、4面。

<sup>27</sup> 同前掲注26。

<sup>28</sup> 同前掲注26。

<sup>29</sup> 『朝日新聞』(東京/朝刊)、1885年2月5日付、1面。

<sup>30</sup> 「神経の衛生」『読売新聞』(朝刊)、1906年6月9日付、3面。

この時期は神経病者や自殺者が多かったため、こうした学術記事が連載されたと考えられるが、特に「婦人」向けにしているかのように記されていることや「神経病の三大王なる比斯的里、神経衰弱、比ト昆垚里」<sup>31</sup>と書かれているところからは、当時ヒステリーに対する関心は高かったとみることができよう。他にも「肺の衛生」「肥える法、痩せる法」「通俗大学講座」「潜める意識の研究」等の学術を取り扱った連載記事の中でもヒステリーが言及されている。

学術記事のほかに、社会面の記事では女性の自殺事件において死因をヒステリーとしており、詐欺、強盗などを犯した女性に対して、ヒステリーを病んでいたからというような文脈で用いられている。その一つが『朝日新聞』に長期間にわたって連載された毒婦の一人と知られている花井お梅の記事である。ヒステリーが言及されているのは1903(明治31)年4月12日から14日にかけて報道された花井お梅の釈放に関する記事であったが、「お梅は幼少の頃よりヒステリーの兆ありて」<sup>32</sup>「ヒステリーの兆候顕著なる」<sup>33</sup>「持病のヒステリー」<sup>34</sup>とお梅のヒステリーについて繰り返し、記されている。「毒婦小説のジャンルとしての生命は、明治十年代半ば過ぎで終ってい」<sup>35</sup>たが、新聞では毒婦話が長く続いていたことが分かる。

さて、ヒステリーにおける言説の件数からみると、明治30年代から徐々に増えていくことが分かるが、「神経病」の状況とはどのように違うであろうか、その動向について検討してみたい。

### 第3節 神経病からヒステリーへ

神経病という言葉の流行からヒステリーという言葉の流行へ移行する現象については、ヒステリーの関連文献数と神経病の関連文献数を各年度別に比較しながら検討してみたい。神経病という言葉はヒステリーを含め、様々な神経疾患の総称として用いられていたため、用語の取り扱いにはヒステリーよりもはるかに多い。したがって、文献数を比較するより刊行された文献数の年度別推移を中心に分析を行いたい。統計値は神経病の一種としてヒステリーが語られた場合、またはヒステリーが神経病の一種であると語られた場合は、同じ文献であっても「神経病」と「ヒステリー」の両方に件数として認めたが、推移を分析するには影響

---

<sup>31</sup> 「神経の衛生」『読売新聞』(朝刊)、1906年6月25日付、3面。

<sup>32</sup> 「帰宅後の花井お梅」『朝日新聞』(東京/朝刊)、1903年4月12日付、5面。

<sup>33</sup> 「其後のお梅」『朝日新聞』(東京/朝刊)、1903年4月13日付、5面。

<sup>34</sup> 「其後のお梅」『朝日新聞』(東京/朝刊)、1903年4月14日付、5面。

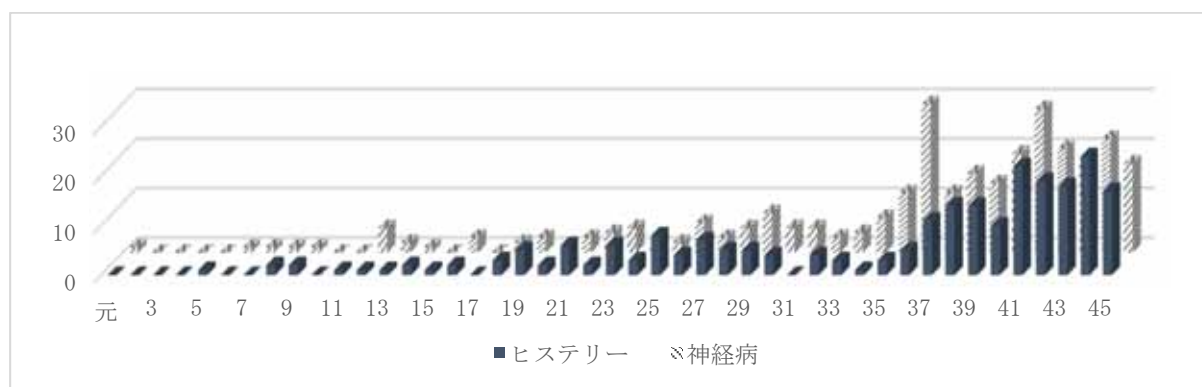
<sup>35</sup> 朝倉喬司「序章 いま、なぜ毒婦なのか？」『毒婦の誕生—悪い女と性欲の由来—』洋泉社、2002年、21頁。

を及ぼさないと思われる。まず、ヒステリー言説の「図書・そのほか」と同様に、国会図書館の登録資料や『日本精神病学書史明治編 日本裁判精神病学書史明治編』から収集した神経病に関する文献数を比較のためにヒステリーの文献数とともに表にまとめたが、以下のようである。

| 西暦        | 和暦   | ヒステリー | 神経病 | 西暦   | 和暦   | ヒステリー | 神経病 | 西暦   | 和暦   | ヒステリー      | 神経病        |
|-----------|------|-------|-----|------|------|-------|-----|------|------|------------|------------|
| 1868      | 明治元  | 0     | 1   | 1883 | 明治16 | 2     | 3   | 1898 | 明治31 | 0          | 5          |
| 1869      | 明治2  | 0     | 0   | 1884 | 明治17 | 0     | 0   | 1899 | 明治32 | 4          | 3          |
| 1870      | 明治3  | 0     | 1   | 1885 | 明治18 | 4     | 2   | 1900 | 明治33 | 3          | 4          |
| 1871      | 明治4  | 0     | 0   | 1886 | 明治19 | 5     | 2   | 1901 | 明治34 | 1          | 7          |
| 1872      | 明治5  | 1     | 0   | 1887 | 明治20 | 2     | 0   | 1902 | 明治35 | 3          | 12         |
| 1873      | 明治6  | 0     | 1   | 1888 | 明治21 | 6     | 3   | 1903 | 明治36 | 5          | 25         |
| 1874      | 明治7  | 0     | 1   | 1889 | 明治22 | 2     | 4   | 1904 | 明治37 | 11         | 11         |
| 1875      | 明治8  | 2     | 1   | 1890 | 明治23 | 6     | 5   | 1905 | 明治38 | 14         | 16         |
| 1876      | 明治9  | 2     | 1   | 1891 | 明治24 | 3     | 2   | 1906 | 明治39 | 14         | 14         |
| 1877      | 明治10 | 0     | 0   | 1892 | 明治25 | 8     | 2   | 1907 | 明治40 | 10         | 19         |
| 1878      | 明治11 | 1     | 0   | 1893 | 明治26 | 6     | 6   | 1908 | 明治41 | 22         | 29         |
| 1879      | 明治12 | 1     | 5   | 1894 | 明治27 | 8     | 3   | 1909 | 明治42 | 19         | 20         |
| 1880      | 明治13 | 1     | 2   | 1895 | 明治28 | 5     | 5   | 1910 | 明治43 | 18         | 19         |
| 1881      | 明治14 | 2     | 1   | 1896 | 明治29 | 5     | 6   | 1911 | 明治44 | 24         | 23         |
| 1882      | 明治15 | 1     | 0   | 1897 | 明治30 | 4     | 5   | 1912 | 明治45 | 17         | 18         |
| <b>総計</b> |      |       |     |      |      |       |     |      |      | <b>242</b> | <b>287</b> |

※ 神経病に関する「図書・そのほか」資料目録の詳細は「参考資料3」を参照。

明治期におけるヒステリーの「図書・そのほか」の総件数は239件で、神経病は287件であるが、各年度別の推移をグラフで表すと以下のようである。



従来の研究において指摘されてきた通り、明治30年代後半になるとヒステリーと神経病に関する文献の両方が共に増えていることが分かる。渡会好一は日清戦争(1894-1895)と日露戦争(1904-1905)の影響で神経病者が増えたと指摘している。「神経病」の文献数が25件で、最も多かった1903(明治36)年は日露戦争が勃発する前年であるが、25件のうち、単行本は3件のみで、22件は学术论文であるが、中でも『中外医事新報』に掲載された論文が15件を占めている。また、渡会は「明治三〇(一八九七)年を境に前・後期に分けて人口百万あたりの自殺者数を比較し、後期における増加率<sup>36</sup>を挙げ、「明治三一年以後の後期に発生率が目だって増えている」<sup>37</sup>と自殺者増加を指摘し、「四四パーセントの青年男女が「精神錯乱」の結果、自殺したこと」<sup>38</sup>になっていると、当時は自殺を精神錯乱と見なしていたと述べている。精神病者が増加した影響で、それに関する医学書の発行も増加したとみることができると考えられるが、「記事」ではどういう状況であったろうか。

| 西暦   | 和暦   | ヒステリー | 神経病 | 西暦   | 和暦   | ヒステリー | 神経病 | 西暦   | 和暦        | ヒステリー      | 神経病        |
|------|------|-------|-----|------|------|-------|-----|------|-----------|------------|------------|
| 1868 | 明治元  |       |     | 1883 | 明治16 | 0     | 1   | 1898 | 明治31      | 3          | 3          |
| 1869 | 明治2  |       |     | 1884 | 明治17 | 0     | 9   | 1899 | 明治32      | 1          | 4          |
| 1870 | 明治3  |       |     | 1885 | 明治18 | 4     | 1   | 1900 | 明治33      | 0          | 4          |
| 1871 | 明治4  |       |     | 1886 | 明治19 | 0     | 2   | 1901 | 明治34      | 4          | 2          |
| 1872 | 明治5  |       |     | 1887 | 明治20 | 1     | 1   | 1902 | 明治35      | 4          | 3          |
| 1873 | 明治6  |       |     | 1888 | 明治21 | 1     | 3   | 1903 | 明治36      | 10         | 2          |
| 1874 | 明治7  |       |     | 1889 | 明治22 | 0     | 1   | 1904 | 明治37      | 2          | 2          |
| 1875 | 明治8  | 0     | 5   | 1890 | 明治23 | 0     | 3   | 1905 | 明治38      | 4          | 3          |
| 1876 | 明治9  | 0     | 7   | 1891 | 明治24 | 0     | 4   | 1906 | 明治39      | 17         | 43         |
| 1877 | 明治10 | 0     | 1   | 1892 | 明治25 | 0     | 8   | 1907 | 明治40      | 8          | 13         |
| 1878 | 明治11 | 0     | 7   | 1893 | 明治26 | 0     | 3   | 1908 | 明治41      | 14         | 8          |
| 1879 | 明治12 | 0     | 9   | 1894 | 明治27 | 0     | 3   | 1909 | 明治42      | 15         | 6          |
| 1880 | 明治13 | 0     | 10  | 1895 | 明治28 | 0     | 4   | 1910 | 明治43      | 16         | 8          |
| 1881 | 明治14 | 1     | 9   | 1896 | 明治29 | 0     | 4   | 1911 | 明治44      | 11         | 5          |
| 1882 | 明治15 | 0     | 6   | 1897 | 明治30 | 0     | 3   | 1912 | 明治45      | 7          | 1          |
|      |      |       |     |      |      |       |     |      | <b>総計</b> | <b>123</b> | <b>212</b> |

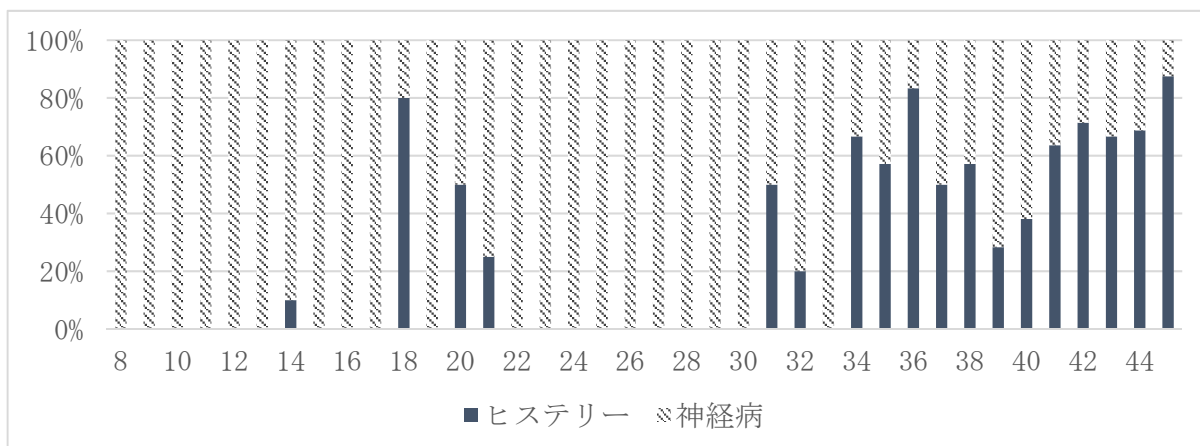
※ 神経病に関する「記事」資料目録の詳細は「参考資料4」を参照。

<sup>36</sup> 同前掲注3、6頁。

<sup>37</sup> 同前掲注3、6頁。

<sup>38</sup> 同前掲注3、6頁。

ヒステリーの関連記事数は総122件で、神経病は総212件であるが、年度別の推移をみるとヒステリーの記事数が徐々に増え、神経病の記事数を上回っていることが分かる。年度別の「ヒステリー」記事数と「神経病」記事数を合せた件数を100%とし、その割合を比較すると神経病からヒステリーへと移行していくことが明らかにみえるので、以下のグラフを参照してもらいたい。



神経病という言葉が用いられている記事について簡単に触れておくと、最初となるのは1875(明治8)年2月5日付の記事であるが、「百性が見たといふ幽霊とは全く神経病」<sup>39</sup>とあるように怪異を病理として解釈するという「怪異＝病理」図式の影響がうかがえる。『読売新聞』や『朝日新聞』の他に、『仮名読新聞』では怪談話が掲載されていたが、「幽霊が自らの行いによって見えてしまう神経病と解釈されて」<sup>40</sup>いたという。おそらく当初は神経病という言葉が用いられているところに「怪異＝病理」という図式が支配的であったのではないかと考えられる。神経病の記事内容をキーワードでまとめると、「気が狂う」「狂乱」といった狂気としての神経病、「獣が人に化ける」「幽霊」「キツネがついた」「天狗」といった俗信や怪異としての神経病、「身投げ」「自殺」に関する記事では、自殺の原因としての神経病、さらに「殺す」「切る」といった記事では犯罪をもたらした原因としての神経病というようにまとめることができる。「神経病」が用いられた対象となるのは、女性が主な対象となっていた「ヒステリー」に比べ、「父」「息子」「娘」「義母」等、年齢や性別は

<sup>39</sup> 『読売新聞』(朝刊)、1875年2月5日付、2面。

<sup>40</sup> 三浦正雄によると、1878(明治11)年11月6日付の『仮名読新聞』に「猫々奇聞」という怪談話が載せられていたが、その中に「嗚呼猫嫁業の罪作り凡夫盛りに崇りはなけれど一度衰えを示す時は神経病も身から出た錆とやいはん」と記されていたという。同前掲注10、267(50)頁。

関係なく様々であったことが分かった。

神経病という言葉がヒステリーという言葉より先に流行したのは、日本に流入したのが早かったからでもあったろうが、明治維新後、怪異や俗信といった旧思想的な要素を病理という新思想へ入れ替えようとしたために成立した「怪異＝病理」という図式の下で神経病という言葉が違和感なく民衆に伝わったのは、おそらく「神経病」という造語の影響であろう。それに加え、「知識を啓発し、文明開化を推進し、読者の見聞を広める」<sup>41</sup>ことを目的にして用いられた「新聞」というメディアを媒介に神経病という言葉が広がり、やがて流行になったと考えられる。しかし、言説の動向からみると、神経病という言葉の流行はあまり長く続かなかつたように思われるが、おそらく神経病という言葉を媒介に「怪異」であるか、「病理」であるかに悩まされていた民衆が、政府の啓蒙政策により、もはや「怪異」という存在の有無に悩まされなくなったためであるようにも思われる。神経病という言葉が媒介にあらゆる「怪異」の存在を疑ってきたことが、かえって「怪異」の存在を信じなくなるにつれ、「神経病」の必要性もなくなったのではないかと考えられる。

さて、神経病という言葉が流行した時に、民衆に多く読まれたとされている三遊亭円朝『真景累ヶ淵』において神経病はどのように用いられているであろうか。

#### 第4節 『真景累ヶ淵』における神経病

近代落語の祖といわれる三遊亭円朝『真景累ヶ淵』は、1690(元禄3)年に出版された『死霊解脱物語聞書』の影響を受けて創作された怪談断である。当初『累ヶ淵後日の怪談』というタイトルで1859(安政6)年に創作されたが、1887(明治20)年から1888(明治21)年にかけて『やまと新聞』に速記本として連載され、同年単行本として出版された。『真景累ヶ淵』は深見新左衛門が皆川宗悦を殺害する事件から始まり、その悪縁が新左衛門の息子新五郎と新吉、宗悦の娘豊志賀とお園にまで降りかかるという話である。お園に片思いをしていた新五郎は思いかけずお園を殺害し、新吉は間接的ではあるが、豊志賀を死に至らしめる。豊志賀の死後、「この恨みは新吉のからだにまつわって、この後女房を持てば七人まではきっと取り殺すからそう思え」<sup>42</sup>と新吉を恨んだ豊志賀の怨念が作品の主な内容となっている。

『真景累ヶ淵』という題名は『累ヶ淵後日の怪談』から改題されたものだが、その経緯については以下のように記されている。

<sup>41</sup> 山田俊治「序章 2 明治新聞事情」『大衆新聞がつくる明治の〈日本〉』日本放送出版協会、2002年、18頁。

<sup>42</sup> 三遊亭円朝「真景累ヶ淵」『三遊亭円朝全集 第1巻』角川書店、1975年5月、379頁。

“真景累ヶ淵”は、前期、“累ヶ淵後日の怪談”を改題したものである。この改題は、当時の有名な漢学者にして、また、社会的有識者だった信夫恕軒の助言によってなされた。“真景”は“神経”で“怪談”という言葉を引き取ったことである。

43

『真景累ヶ淵』の「解説」において久保田万太郎は「怪談を引き取って」いた社会的有識者信夫恕軒の助言を受けて、「神経」を同音語としている「真景」へと改題したと解説している。さらに、「神経、あるいは神経病をもってする“幽霊”への解明は、(中略)時のながれにしたがったままで、かならずしも、この開化論を、簡単に肯定したと思えない」<sup>44</sup>と指摘している。渡会好一は「『真景累ヶ淵』にあらわれる幽霊が病んだ神経の生む妄想だというのは、せいぜい表層だけにとどまる。『真景累ヶ淵』の基層にあるところを洗い出すなら、幽霊は怨念をいだいて死んだ人が執念から出てくるという伝統的な信仰であり、幽霊は妄想(神経病)ではなく、「真景」つまり、真実うたがいなしの実景だと信じられていると思われる。神経ではなくて真景なのだ」<sup>45</sup>と述べている。円朝は「怪異＝病理」という図式を意識したうえで『真景累ヶ淵』を描いたのだが、怪異を解釈するために神経病を用いているようにし、結果的には怪異を強調するために用いたということができよう。具体的にどのような場面において用いているのか、作品を通じて検討してみたい。

『真景累ヶ淵』において登場人物を中心に話が始まってから神経病という言葉が用いられているのは全部で5カ所であるが、まとめると以下のようなものである。

#### (1) 宗悦殺人事件

新左衛門が宗悦を殺し、その現場を目撃した奥方が描かれている場面において「神経病」が用いられている。

深見新左衛門の奥方は、ああ宗悦はかわいそうな事をした、どうも実に情ない、お殿様がお手討ちにあそばさないでもよいものを、別に恨みがある訳でもないに、御酒の上とはいいながら気の毒なことをしたと絶えず奥方が思いますところから、い

---

<sup>43</sup> 久保田万太郎「解説」『真景累ヶ淵』岩波書店、2007年7月、475頁(執筆時期は1956(昭和31)年4月である)。

<sup>44</sup> 同前掲注43、476-477頁。

<sup>45</sup> 同前掲注3、97頁。

わゆるただいま申す神経病で、何となくふさいで少しも気がはずみませんこと  
ざいます。<sup>46</sup>

続く内容では、神経病で衰弱した奥方を治療するために按摩師が出入りすることになるが、その按摩師が突然姿を消してしまう。奥方の病気がますます重くなっていく中で、新左衛門が宗悦を殺した同じ日に盲人の按摩師が現われる。新左衛門は盲人の按摩師に奥方の治療を頼んだが、奥方を治療する能力はなく、按摩しかできないと言われ、奥方の治療の代りに、自分の按摩を頼む。盲人の按摩師に按摩してもらっていた新左衛門は、突然その盲人の按摩師が死んだ宗悦に見えて切りつけると、切りつけられたのは奥方であった。以上のような一連の過程は科学的かつ論理的な説明が難しくなっている。神経病である奥方は、幽霊をみるべきであったにもかかわらず、宗悦の幽霊を見ておらず、かえって新左衛門が宗悦の幽霊を見たのである。さらに、宗悦の幽霊を見たのが新左衛門であることも注目値する。新左衛門は、宗悦を殺害したことに對して不安や恐怖、または罪責感を感じておらず、普段の生活をしている間に宗悦の幽霊を見ているので「幽霊などの怪異は実在するものではなく、幽霊などの怪異を見る人が神経病という〈心の病理〉であることによるものである」<sup>47</sup>という説に反する場面であるといえる。

## (2) 豊志賀の死

宗悦の長女豊志賀と新左衛門の次男新吉は、それぞれ父親の関係や新五郎がお園を殺したことを知らないまま、夫婦同然の深い関係となる。しかし、豊志賀は弟子の一人であったお久と新吉が親しげにしていることを見て「愷氣りんきのほむらは絶える間はなく、ますます逆上して、目の下へぼつりとおかしなできものができて」<sup>48</sup>しまう。豊志賀の看病をしていた新吉は、ますます醜くなる豊志賀を避けて逃げてしまい、一人で残された豊志賀はついに死ぬ。神経病という言葉は豊志賀と新吉の「因縁」について語る際に用いられている。

ただいまではたいていのことは神経病といってしまつて少しも怪しいことはござりません。明らかな世の中でございますが、昔は幽霊が出るのは祟りたたがあるからだ、怨みの一念三世に伝わると申す因縁話をたびたび承りましたことがございま

<sup>46</sup> 同前掲注42、342頁。

<sup>47</sup> 同前掲注10、268(49)頁。

<sup>48</sup> 同前掲注42、363頁。

す。豊志賀は実に執念深い女で、前申し上げたとおり皆川宗悦の惣領娘でございます。ここに居候にまいっていて夫婦同様になって居た新吉というのは、深見新左衛門の次男、これも敵同士の因縁でかようなことにあいなります。<sup>49</sup>

豊志賀の怨みにより、新吉に不幸がはじまるとされる第21章の冒頭部において言及されている神経病という言葉は「幽霊と云うものは無い、全く神経病だと云うことになりましたから、怪談は開化先生方はお嫌いなさる事でございます」<sup>50</sup>と、すでに第1章の冒頭部において類似した文脈で用いられている。同じ文脈で神経病という言葉を再度言及しているのは、宗悦と新左衛門からはじまった「因縁」が、その娘や息子にまで継がれていったこと、さらには、「執念深い女」の豊志賀は怨霊となり、新吉や新吉の女たちに取り憑かるといった新たな「因縁」のはじまりをも強調するために用いられているといえる。

### (3) お累と蛇

豊志賀は「女房を持てば七人まではきっと取り殺すからそう思え」<sup>51</sup>という書置きを新吉に残したが、不思議にもその書置きの通り、新吉に不幸が続く。豊志賀の怨恨による不幸の最初といえるのは、お久の死である。豊志賀の墓参りで出会ったお久と駆け落ちをする途中、累が与右衛門に鎌で殺されたといわれる「累ヶ淵」で、お久の顔から豊志賀の顔を見て、思わず鎌でお久を殺してしまう。お久に次いで、怨恨の犠牲となるのはお累であるが、新吉とはお久の墓参りで出会うとされている。お累は新吉に一目惚れをしてしまうが、その時突然現われた蛇に驚き、何が出ても蛇とってしまうという神経病になる。お累に再び蛇が現われた時に、顔に火傷を負ってしまい、豊志賀と同様に醜い顔となる。

九月半ばになりましたは田舎でもあまり蛇は出ぬものでございますが、二度ほど出ましたので、墓場で驚きましたから何が出ても蛇と思い、ただいま申す神経病、

累「あれー」

と駆け出して逃げるとたんおふくろがとめようとしたはずみ、田舎では大きなろりが切っております、上からは自在がかかって薬罐の湯がたぎっていたところへ

---

<sup>49</sup> 同前掲注42。

<sup>50</sup> 同前掲注42。

<sup>51</sup> 同前掲注42。

もろにかえりまして、片面から肩へ熱湯を浴びました。<sup>52</sup>

新吉は借金返済という条件でお累の婿になることにし、婚礼の晩を迎えるが、そこでお累の恐ろしい顔を見て驚く。新吉はお累の顔が半面火傷で恐ろしい顔になったことを見ては、醜い顔になったお累も、「累が淵」で殺したお久も、「やっぱり豊志賀が祟り性を引いて、あくまでもおれを恨むことか」<sup>53</sup>とと思っている途端に、再び蛇があらわれる。その蛇は「与助という下男が研ぎすまして、弁慶へ挿しておいた」<sup>54</sup>鎌にまといつき、二、三度からまっでは、二つに切れて縁側へ落ちる。新吉が蛇の頭を打つと蛇の形は見えなくなり、その光景を見ていたお累は怖い紛れに新吉に縋り付き、そのまま一晚を過ごす、たった一晚でお累は身重になる。お累の神経病の場合は合理的に説明できそうであったが、お累にしか見えなはずの蛇が新吉にも見えてしまったこと、さらに、その蛇は生き物でもなければ、幻影のように目の前で消えてしまったところを二人とも目撃したことから神経病では理解できない状況となっている。

#### (4) 新吉と夢

お累との夫婦生活を過ごしていた新吉は或る日、伯父勘蔵が危篤と聞き、勘蔵に会いに行く。勘蔵はそれまで隠していた新吉の出生に関することや兄の新五郎が行方不明であること等を新吉に明かして死ぬ。新吉は勘蔵を送り、羽生村に帰ろうとしたが、乗っていた駕籠が同じ道をまわるばかりで、おかしい様子だったので、途中で降りて一人で歩いていると、一人の男に声を掛けられる。偶然出会ったその男は、新吉の兄新五郎であった。新五郎はお園を殺した罪で牢獄に入っていたが、脱獄して二年になるのだと近況を語る。新吉もそれまでのことを新五郎に語り、お累との婚礼についても伝えるのだが、それを聞いた新五郎はお累は自分を告発した三蔵の娘であるといい、新吉に帰らずに一緒に盗賊になると誘う。新吉は兄の提案をすぐに断ったが、新吉に断られた新五郎が短刀を引き抜き、新吉を殺そうとするので、新吉は逃げ出す。新吉は追っかけてくる新五郎に咽喉笛を刺されるが、それは新吉の夢だったのである。

新吉の夢の中で兄新五郎は「三蔵に恨みをかけたとみえて、その仇の家へわたしが養子に

---

<sup>52</sup> 同前掲注42、400頁。

<sup>53</sup> 同前掲注42、407頁。

<sup>54</sup> 同前掲注42、407頁。

来た夢でそのことを知らせ、早く縁を切らなければ三蔵の家へ祟る」<sup>55</sup>と罵ったが、実際にお累が産んだ子供は「兄新五郎の顔に生写」<sup>56</sup>していたのである。

そのころは恨み祟りということがあるのあるいは生まれ変わるといふこともあるなどと、人が迷いを生じましていろいろに心配をいたしたり、除けをいたすようなことがありました時分のことで、いわゆるただいま申す神経病でございますから、新吉はただそのことがくよくよ心にかかりまして、…（後略）…<sup>57</sup>

神経病という言葉は、新吉の夢の中で新吉を殺そうとした兄新五郎の顔が、現実において生まれた子供の顔にそっくりしていたので、不安や恐怖を感じる新吉に用いられている。神経病と言えるためには、兄の顔にそっくりな息子は新吉の心の病によって見てしまった幽霊でなければならぬと考えられるが、息子は実存している人物である。つまり、現実において息子という実存する人物を媒介に、生まれ変わるといふ輪廻転生があらわれており、そうした怪異を間接的に経験した新吉に用いられている神経病は病理としての意味を持たず、「怪異」をより強調するための機能として働いていると考えられる。

#### (5) 新吉と功德

新吉は「女房の身の上子どもの上まで、こういう祟りのあるのは、みなこれもおれの因果が報うことである」<sup>58</sup>と気味が悪くなり、やがて病気になる。新吉は「どうも家にいればいるほど気分が悪」<sup>59</sup>いので、寺参りに行きはじめる。その翌年となる寛政8年2月3日に、新吉は法蔵寺へ参詣に行ったが、和尚から病気が治らないのは死霊の祟りがあるからなので、無縁墓の掃除をして香花を手向けると病気は治ると言われる。

新吉はこれから願にかけて、法蔵寺へ行っては無縁の墓を掃除して水をあげ香花をたむけます。とそこが気のせい、神経病だからだんだん数を掃除するに従って気分も快くなってまいります。<sup>60</sup>

---

<sup>55</sup> 同前掲注42、418頁。

<sup>56</sup> 同前掲注42、418頁。

<sup>57</sup> 同前掲注42、418頁。

<sup>58</sup> 同前掲注42、418頁。

<sup>59</sup> 同前掲注42、419頁。

<sup>60</sup> 同前掲注42、419頁。

新吉の不安や恐怖から発した「神経病」は和尚の信仰的かつ宗教的な助言を信じさせ、無縁の墓を掃除する等の「祓い」を行わせている。「病理」という立場から「神経病」を考えれば、和尚に言われた通りにしたことで、新吉の不安や恐怖が消えて神経病が治癒されたというように読み取れるが、「怪異」からみると、功德を積んだことで新吉にまつわる祟りが解けたというようにも読み取れる。しかし、それ以降の展開では、3月27日に例の通り墓参りに出掛けた新吉は、そこでお賤という女性に出会う。お賤は新吉が貸本屋で働いていた時に目かけた人であるが、「累の墓」<sup>61</sup>に願掛けに参っていたところで新吉に再会したのである。その後、二人は親密な関係となり、それによってまた新たな悪縁が始まるのである。つまり、新吉が功德を積もうとして掃除していた墓は累の墓であり、その墓で新吉とお賤が再開したことで、「神経病」は「怪異」として読み取れると考えられる。

以上のように、人間の病として特定の対象を必要とする神経病という言葉は『真景累ヶ淵』において因縁や輪廻といった怪異と思われる現象にまで広く用いられていた。神経病に次いでヒステリーが流行する時は、もはや「怪異」であるか、「病理」であるかという議論については興味を持たなくなる時代となり、「病理」としての意味が支配的になると考えられるが、ヒステリーの特徴から『真景累ヶ淵』を読み直すことで、神経病からヒステリーへの造形に影響を及ぼしたと見られる要素について検討してみたい。

## 第5節 「ヒステリー」で読む『真景累ヶ淵』

「神経病」と「ヒステリー」の使い方の相違点をあえていえば、「対象」の限定ではないかと考えられる。つまり、ヒステリーは女性という人物に限られ、用いられる傾向があり、神経病は誰にでも使われる用語であったという点である。さらに、神経病という言葉が怪しい現象が現われる際に用いられていたという点で、神経病という言葉から想起できるイメージは数多くあったと考えられる。

さて、『真景累ヶ淵』において神経病という言葉が用いられている場面を中心に、女性人物を特定すると、新左衛門の奥方、豊志賀、お累の三人をあげることができるが、三人ともヒステリーと解釈できるかという点と必ずそうとは言い切れない。序章において述べたように、ヒステリーは夫婦や恋人関係における愛情や葛藤のような状況において用いられる傾向があったが、その点に注目し、『真景累ヶ淵』においてヒステリーとみられる人物

---

<sup>61</sup> 同前掲注42、419頁。

について検討してみたい。

新左衛門の奥方は、宗悦の死骸を目撃したために神経病となっており、お累はお久の墓前で突然現われた蛇に驚かされ、神経病となっているため、ヒステリーに該当しない。一方で、豊志賀の場合は、豊志賀と新吉にまで降りかかったという宗悦と新左衛門からはじまった因縁と豊志賀の怨恨により、新吉と新吉と関係した女性に不幸が相次ぐという因縁に、神経病という言葉が用いられていたが、後者の場合は豊志賀が夫婦同然であった新吉と弟子のお久の仲を疑い、嫉妬したことにより、病気となり、新吉を怨み崇りながら死ぬことから新たな「因縁」が始まっている。物語の構造上で、嫉妬深い女性にヒステリーが多く用いられているので、豊志賀をヒステリーとみることができると考えられる。具体的にどのように描かれているのか、豊志賀と新吉のエピソードに触れながら検討してみたい。

富本の師匠として名乗っていた宗悦の長女豊志賀は、妹お園の死後、男が多く言い寄っても心を開かなかった。しかし、それが却って男嫌いで堅いと評判となり、豊志賀の下へ大勢の男たちが集まってきたのであった。一方で、伯父勘藏のもとで育った新左衛門の次男新吉は「伯父のところにいるよりは、芸人の家にいるのはいきでおもしろいから楽しみも楽しみだ」<sup>62</sup>とし、豊志賀の所で手伝いをしていた。この二人の悪縁が始まるのは、雨の日の寒さで二人が同衾し、深い関係となる「十一月二十日の晩」<sup>63</sup>であり、その日は豊志賀の妹お園が新吉の兄新五郎に殺された日でもあった。それぞれ父親の関係や新五郎がお園を殺したことを知らないまま、お園の命日、一夜を過ごすことで夫婦同然の深い関係となる。

三十九歳になる者が、二十一歳になる若い男とわけがあって見ると、息子のよう  
な、亭主のような、色男のような、弟のような情が合併して、さあ新吉がだんだん  
かわいいから、むちゃくちゃ新吉へ自分の着物を直して着せたりなにかいたしま  
す、もと居候だから新吉が先へ起きて飯ごしらえをしましたが、この頃は豊志賀が  
先へ起きておまんまをたくようになり、枕元で一服つけて

豊「さあ一服おあがりよ」

新「へエありがとう」

豊「何だよへえなんて、もうお起きよ」

新「あいよ」

---

<sup>62</sup> 同前掲注42、363頁。

<sup>63</sup> 同前掲注42、363頁。

などとおいおい増長して、師匠のどてらを着て大あぐらをかいて、師匠が楊枝箱をあてがうとすわってて楊枝をつかいうがいをするなどと、どんな紙くず買いが見てもいい人とは見えません。<sup>64</sup>

豊志賀は18歳も離れている年下の新吉にますます情が深くなっていく一方、新吉は「別に行くところもないことでございますから、少し年を取った女房を持った心持でいました」<sup>65</sup>とあるように、豊志賀に特別な感情を持っておらず、自分の安定な生活を営為するための同棲であったといえる。二人が住んでいたその家に、稽古を学びに出入りしていた18歳のお久は、美女ではないが、「笑うと口のわきへえくぼ」<sup>66</sup>ができ、「男ぼれのする愛らしい娘」<sup>67</sup>である。

新吉の顔を見てはにこにこ笑うから、新吉もうれしいからにやりと笑う。その互に笑うのを師匠が見るとうわべへは表わさないが、なにかわけがあるかと思って心ではやきます。この心でやくのはいちばん毒で、むやむや修羅を燃やして胸にたく火の絶える間がございせんから、のぼせて頭痛がするとか、血の道が起るとかいうことのみでございます。<sup>68</sup>

豊志賀は新吉とお久が互いに笑っているのを見て妬みを抱いたことで「頭痛」や「血の道」に悩まされる。女性の嫉妬という感情にともなう「頭痛」や「血の道」といった症状は、ヒステリーの症状としてよく挙げられるが、特に、ヒステリーが生殖器病とも認識され、明治期においてはヒステリーと血の道を同じ病気として扱っている。豊志賀の妬みはますます激しくなり、ついに顔に腫物ができてしまう。医者に病気を見せたものの、「そのころは医術がひらけませんから、十分に療治も届」<sup>69</sup>かず、顔の腫物は段々腫れあがり、豊志賀も衰弱していくので、新吉は「もと師匠の世話になった事を思って、よく親切に看病」<sup>70</sup>する。

---

<sup>64</sup> 同前掲注42、364-365頁。

<sup>65</sup> 同前掲注42、365頁。

<sup>66</sup> 同前掲注42、365頁。

<sup>67</sup> 同前掲注42、365頁。

<sup>68</sup> 同前掲注42、365頁。

<sup>69</sup> 同前掲注42、366頁。

<sup>70</sup> 同前掲注42、366頁。

豊「あい、新吉さん、わたしはねどうも死にたいよ、わたしのようなこんなお婆さんを、おまえがよく看病をしておくれで、わたしはおまえのような若いきれいな人に看病されるのは気の毒だ気の毒だと思うと、なお病気が重ってくる、ね、わたしが死んだらさぞおまえが楽々すると思うから、ほんとうにわたしは一時も早く楽に死にたいと思うが、どうも死にきれないね」

新「つまらないことを言うもんじゃあない、おまえが死んだらわたしが楽をしようなどとそんなことで看病ができるものではない、わくわくそんなことを思うからのぼせるんだ、できものさえなおってしまやあいいのだ」<sup>71</sup>

新吉は心から豊志賀の快癒を願い、看病していたが、「死にたい」と連発し、さらには「おまえの真底からほれているお久さんとも会われるだろう」<sup>72</sup>と新吉とお久の仲を疑いつづける豊志賀のヒステリックなところに飽きてしまい、豊志賀から逃げ出し、伯父勘蔵の家に戻る。新吉が豊志賀から逃げ出した理由は腫物で醜くなった顔のためではなく、「師匠おまえがいろいろなことを言いさえしなければ」<sup>73</sup>とあるように、豊志賀のヒステリックな態度にあったということができよう。しかし、一人残され、孤独に死んでいった豊志賀の怨みは非常に強く、「女房を持てば七人まではきつと取り殺すからそう思え」<sup>74</sup>という書置きの通りに、新吉に不幸をもたらすのである。

以上のように、豊志賀と新吉のエピソードからヒステリーと思われる要素を探ってみた。このエピソードでは、豊志賀と新吉の二人の人物が中心となっているように思われるが、この物語に欠かせない存在としてお久を指摘しておきたい。お久が実際に登場する場面は少ないが、豊志賀の嫉妬心やヒステリーを誘発させた存在になっているといえる。堤邦彦は「男女の愛憎と裏切りに起因する霊異の物語」<sup>75</sup>は江戸期から散在しており、特に「一人の男をはさんだ二人の女(多くは妻・妾)の確執をつづる古態の二人妻」<sup>76</sup>という構図の物語が多くあるとし、物語の中で「女の恨み」は男の非道そのものよりも、むしろ「家の婦」としての妻の座を否定され、地位をおびやかされた正妻の怒りと悲しみの情によって引き起こされ

---

<sup>71</sup> 同前掲注42、366-368頁。

<sup>72</sup> 同前掲注42、368頁。

<sup>73</sup> 同前掲注42、375頁。

<sup>74</sup> 同前掲注42、379頁。

<sup>75</sup> 堤邦彦「女霊の江戸怪談史—仁義なき「後妻打ち」の登場」『ナイトメア叢書2 幻想文学、近代の魔界へ』一柳廣孝・吉田司雄編、青弓社、2006年5月、78頁。

<sup>76</sup> 同前掲注75。

る」<sup>77</sup>と述べている。豊志賀と新吉は婚礼をあげてはいないが、「夫婦同然」であったこと、新吉という一人の男をはさんで豊志賀とお久という二人の女性が三角関係の構図をとっていたこと、新吉に裏切られ、死んだ豊志賀の怨霊が新吉に取り憑かり、新吉だけでなく、新吉の「妻」となりえる女性たちを死に至らしめていたということを踏まえれば、『真景累ヶ淵』も「男女の愛憎と裏切りに起因する霊異の物語」の類例として数えられるであろう。

しかし、こうした物語の構図は単に怪談の領域だけに限らない。科学的に説明不可能な超自然的な現象を取り除けば、「一人の男をはさんだ二人の女(多くは妻・妾)の確執をつづる古態の二人妻」という構図の物語を探すのはあまり難しくない。たとえば、自然主義文学といわれる岩野泡鳴の「五部作」においても主人公田村義雄と本妻の千代子と妾のお鳥の三角関係が描かれている。特に、序章において触れたように1906(明治36)年に発表された泡鳴の「焰の舌」の中でヒステリーが用いられており、「怪異=病理」の図式の影響がうかがえる<sup>78</sup>と述べたが、「五部作」において「鬼女の笑い——執念深い呪ひの女——(中略)このやうにヒステリーの高ぶつて来た女」<sup>79</sup>と妻のヒステリーについて描写されているところは一見怪談の一場面のようにも思われる。

以上のように『真景累ヶ淵』において「ヒステリー」と読める人物像や場面について検討してみた。『真景累ヶ淵』における豊志賀と新吉、そしてお久の物語は、日本の怪談史において好まれていた男女の愛憎や二人妻の話をテーマにしていた。その中で、豊志賀はお久に嫉妬したあげく、ヒステリーの女となり、新吉を苦しませていた。このような構図を取った物語では、嫉妬の化身となり、怒りや恨みといった激情的な感情をあらわした豊志賀(妻)のような女性に対してヒステリーとしている。次の章では、その代表的な作品として岩野泡鳴の「五部作」があるので、この作品を中心にヒステリーの妻について探してみたい。さらに、そのような物語の構図を取っていない作品の中では、妻のヒステリーがどのように描かれているのかについても検討してみたい。

---

<sup>77</sup> 同前掲注75。

<sup>78</sup> 岩野泡鳴「焰の舌」(1906)において「猛 それでなげやア、ヒステリイなどいふ神経病の一種で、お化けや幽霊を自分で拵らへて、自分でそれを苦む仲間にあなたを数へ入れますぞ。」と記されている。

岩野泡鳴「焰の舌」『明治文學全集86 明治近代劇集』筑摩書房、1969年3月、184頁。

<sup>79</sup> 岩野泡鳴「発展」『岩野泡鳴全集 第二巻』臨川書店、1994年10月、97頁。

## 第2章 ヒステリーの妻たち

男女の区別なく罹患するものとされた神経病は明治末期から大正期にかけて、おおまかにいって、女の「ヒステリー」と男の「神経衰弱」と二分化され、文学作品に登場する。当初、「狐憑病」を説明するための付随的な存在であった「ヒステリー」は独自の位置を占めるようになる。子宮を持っている女性はその対象となり、中でも家庭の中の女性である妻に多く用いられていた。おそらく、当時の良妻賢母思想や『青鞥』を中心として活躍した「新しい女」たちの登場とも相まって、社会が求める「妻」や「母」の役割を果たしているか否かという問題において、そうでない女性に押される烙印のような機能として「ヒステリー」が用いられていたといえる。また、ヒステリーの言説では欲求不満を原因とするフロイトの性病因論が紹介され、女性の性欲とヒステリーを関連づけて語られる傾向もあった。本章では、以上のような特性を持つヒステリーが妻という人物像を媒介にどのようにあらわれているのかについて考察を行いたい。

### 第1節 岩野泡鳴「五部作」—ヒステリーと「永続」しない愛—

岩野泡鳴「五部作」は『発展』『毒薬を飲む女』『放浪』『断橋』『憑き物』の五つの作品から成っており、1908(明治41)年5月頃から1909(明治42)年末頃までの期間を素材にした自伝的小説である。主人公田村義雄は、父の死後、家業を継いで下宿屋の二代目の店主となるが、その経営は妻の千代子に任せて、某商業学校に英語の教師として勤めながら文学に専念する。就職のために紀州から上京してきた清水お鳥と義雄が関係を結んでしまい、義雄とお鳥の関係を疑っていた千代子は嫉妬したあげく「ヒステリの高ぶつて来た」<sup>1</sup>「執念深い呪ひの女」<sup>2</sup>に変貌し、千代子と義雄の間に凄惨な争いが始まる。

「五部作」においては義雄と妻の千代子、妾のお鳥の三人の男女関係が主に描かれているが、「五部作」以降の実際の話では、泡鳴は妻の幸子とも、お鳥のモデルであった妾の増田しも江とも別れ、「新しい女」の遠藤清子と同棲し、のちに清子を第二の妻とする。しかし、泡鳴はそれにとどまらず清子とも別れ、蒲原英枝と結婚し、第三の妻を迎えるが、英枝とも長く続かず、荒木郁子と親しくなり、家庭不和をもたらす。泡鳴は1920(大正9)年に大腸穿孔で死んでしまうが、彼がもし死ななかつたならば、郁子は第四の妻になったかもしれない。

泡鳴は一人の女性だけを愛しつづけることができず、死ぬ直前までも新たな相手を探し求

<sup>1</sup> 岩野泡鳴「発展」『岩野泡鳴全集 第二巻』臨川書店、1994年10月、83頁。

<sup>2</sup> 同前掲注1。

めていたかのように見えるが、こうした傾向は彼の主張する「刹那主義」から出ているのではないかと考えられる。泡鳴の女性遍歴の第一なる幸子は「五部作」において千代子として登場し、ヒステリーの女として描かれているが、夫の義雄に愛されず、憎悪の対象となっている。「五部作」において千代子のヒステリーはどのように描かれ、義雄との夫婦関係においてどのような影響を及ぼしているかについて分析を行い、泡鳴の女性に対する考え方について考察してみたい。

## 1. 泡鳴と「五部作」

まず、「五部作」について簡略に紹介しておきたい。「五部作」は作品が制作・発表された時期や事件と各作品の事件の順序が一致していない<sup>3</sup>。まとめると以下のようなものである。

| 作品名(事件順) | 刊 | 事 件                       | 初出(発表)                                 | 備考         |
|----------|---|---------------------------|----------------------------------------|------------|
| 発展       | 3 | 1908(明治41)年5月初旬<br>～12月中旬 | 1911(明治44)年12月15日<br>～1912(明治45)年3月26日 | 大阪新報       |
| 毒薬を飲む女   | 4 | 1909(明治42)年4月中旬<br>～6月初旬  | 1914(大正3)年6月                           | 中央公論       |
| 放浪       | 1 | 1909(明治42)年8月中旬<br>～9月末   | 1910(明治43)年7月                          | 東雲堂        |
| 断橋       | 2 | 1909(明治42)年9月末<br>～10月末   | 1911(明治44)年1月1日<br>～2月28日              | 前篇「毎日電報」   |
|          |   |                           | 1911(明治44)年3月2日<br>～16日                | 後篇「東京日日新聞」 |
| 憑き物      | 5 | 1909(明治42)年10月末<br>～11月中旬 | 1912(明治45)年5月～7月                       | 「寝雪」『新小説』  |
|          |   |                           | 1910(明治43)年1月                          | 「川本氏」『趣味』  |
|          |   |                           | 1918(大正7)年5月                           | 「憑き物」『新潮』  |

本論では、物語の事件の順序に合わせて論じたいと思うが、『発展』『毒薬を飲む女』『放浪』『断橋』『憑き物』の順で、梗概をまとめておきたい。

主人公田村義雄は、父の死後、継いで経営していた下宿屋「日の出館」を妻の千代子に任せて英語の教師を勤めながら著作に専念していた。年上の妻や病気で死んでいく子供は義雄

<sup>3</sup> 「五部作」は作品の制作・発表時期や事件の順序などが複雑であるため、先行研究では「五部作」の成立過程や創作の背景について論じられているのが多いが、大久保典夫の『岩野泡鳴の時代』(1973年)、伴悦の『岩野泡鳴—「五部作の世界」—』(1982年)、鎌倉芳信の『岩野泡鳴研究』(1994年)などの単独の研究書が代表的である。しかし、泡鳴の全般的な研究からみると、泡鳴その人を論じたものが多く、「五部作」をまともに論じたものは今でも少ない状況である。「五部作」を論じる際に、泡鳴の伝記に関して触れざるをえないのは、おそらく「五部作」が泡鳴の伝記的な小説であるためでもあるが、一貫して一人の目を通して描くという「一元描写」方法を用いて「美的装飾を一切排除し」「直接的で無雑」に描かれているため、「泡鳴＝義雄」という図式がより強く認識され、「五部作」を作家から引き離し、独立したものとするのを妨げているからだと考えられる。

を苦しませ、家庭から離させる決定的な理由となった。そうした中で、女優になるために上京し、下宿屋に泊まっていた清水お鳥に惹かれ、関係を結ぶ。しかし、お鳥は義雄から性病をうつされてしまう。お鳥との仲を疑っていた千代子と義雄の間に争いが始まり、ますます激しくなる。(発展)

嫉妬でヒステリーを起す千代子は義雄とお鳥を苦しませる存在にほかならなかった。義雄とお鳥の隠れ家を千代子が訪ねて来て、子供が重病だという。病院に駆けつけると、すでに赤ん坊は死んでおり、他の子供たちも病に臥せていた。彼は子供の死を悲しむどころか、「死んだものなんか、掃き溜めへほうり投げて置いてもいい位のものだ。」<sup>4</sup>と切り切る。また死にかかっている子供の枕許で「もし生の悲痛に堪へるだけの活気がないとすれば、こいつも今のうちに死んだ方がましなのに」<sup>5</sup>と考える義雄であった。ある時、音楽倶楽部へお鳥と参加していると、そこへ千代子がやってきて、お鳥と罵り合い、彼や友人を困惑させ、義雄に恥をかかせる事があった。彼は、妻に絶望し、お鳥にも嫌気がさしてきた。お鳥を知人に譲ってもいいと思ったりもしたが、若くて美しいお鳥に未練が残るのであった。その友人賀集と義雄とに、物のような扱いにされ、板挟みになったお鳥はアヒサンを飲んで自殺を図るが、幸いにも助かる。義雄は既に過ぎ去った人生が空しく思えてきて、今の自分が欲している金銭的な満足を求めて、樺太の缶詰事業に専念する。ついに、義雄は下宿屋を抵当にして得た金を持って樺太へ向かう。(毒薬を飲む女)

樺太での事業は、資金難や助力者の欠如等が原因で失敗する。北海道に帰った義雄は、もう一度事業を挙げるために、札幌の女学校の教師をしている友人宅に泊まりながら時を待つが、無資本のためにうまくいかない。一人異郷憂鬱を晴らそうとして薄野遊廓に通って敷島という妓と知り合い、惹かれる。そして義雄は、東京には帰らず、今の放浪をこの女と一緒に続けてもかまわないと思う。(放浪)

失意の義雄の生活は無意味に積み重ねられていく。事業は木材を始め、何も彼の思うには任せなかった。そのような彼の心を紛らせるものは敷島との情事であった。その間、収穫といえるのは道会議員遠藤長之助に随行して半月ほど北海道の各地を巡行したことであった。そこから帰ってみると、待ち切れなかったお鳥が東京から追いかけてきていた。お鳥は病気を治してくれとからむのであった。あとは痴話喧嘩のみであった。義雄はお鳥から逃れて敷島に会って気持を慰めるのであった。(断橋)

義雄は金を工面してお鳥を病院に入れた。北海道の病院では、周囲の者から自尊心をくす

---

<sup>4</sup> 岩野泡鳴「毒薬女」『岩野泡鳴全集 第二巻』臨川書店、1994年10月、127頁。

<sup>5</sup> 同前掲注4、128頁。

ぐられる。彼女は彼を憎みながらも、やはり心の底では愛し、たよりにしていた。ある時、義雄は中学校で演説をし、伊藤博文を豊臣秀吉に比しながら自説の刹那主義を説き、自己を語った。「豊大間も伊藤公も、現在の発展的思想に於いては全く僕に属してゐるのだ——乃ち、僕自身の物である」<sup>6</sup>と叫んだ時、満堂の生徒が一斉に笑った。怒った彼は睨みつけながら、「おれは宇宙の帝王だ！否、宇宙その物だ！笑ふとはなんだ？」<sup>7</sup>と怒った。これが原因となって彼は発狂したという噂をたてられた。その噂が立った時、お鳥は心配のあまりに彼のもとへかけつけた。彼は病気で苦しんでいるお鳥に誘われ、抱き合つて豊平川に投身自殺を図るが、二人の体は雪の上に落ちて死ねなかった。義雄は友人から旅費を得、お鳥を盛岡の病院に入れ、やつのことで帰京する。帰ってからお鳥に情人があることが分り、その証拠の電報を妻の千代子に送らせて無言の縁切状とする。義雄はお鳥がそれを受け取ったときの顔を想像するのであった。(憑き物)

## 2. 千代子のヒステリー

千代子は夫の義雄に任せられた下宿屋を経営していた。「あの家は息子さんでは持つて行けますまいよ」<sup>8</sup>という風評を耳にした千代子は、「所天の名誉を恥かしめまい」<sup>9</sup>と思い、下宿屋の経営に献身する。しかし、義雄はそれを有難いと思うどころか、自分の新しい発展となる事業について、千代子が少しでも助言を与えたりすると、千代子に暴言や暴行を加えた。権威主義的な義雄と三つ年上の妻千代子の間では論争が絶え間なく続いていたが、論争は主に千代子が義雄の意見や言葉に肯定せず反論することから始まっていた。二人の価値観の相違が論争の第一の原因といえるが、千代子の義雄に対する反論は義雄にとっては自分を子供扱いにし、教えるための「教訓」にすぎなかったためである。

『また教訓か』と目の色を変えかけたが、同じ調子で、『分らない奴だ、ねえ——。お前などア時代の変遷と云ふことが実際に分らない。政治上や文学上のことは別としても、教育界に於てだ、お前の教育を受けたり、お前が学校を教へたりしてゐた時代は女子はむかし通り消極的に教へられて満足してゐた。然し、現代の若い女は積極的な教育を受けようとしてゐる。優しい女学校ででも教師、生徒間に衝突が起

<sup>6</sup> 岩野泡鳴「憑き物」『岩野泡鳴全集 第二巻』臨川書店、1994年10月、403頁。

<sup>7</sup> 同前掲注6。

<sup>8</sup> 同前掲注1、3頁。

<sup>9</sup> 同前掲注1、3頁。

るのは、古い頭脳の教師連がこの心を解しないからだ。恋の問題に於ても、ただ男から愛せられて喜んでゐたのが、自分からも愛することができなければ満足しなくなつた。』

『わたしだつて、自分から愛してゐます、わ。』

『ところが、その問題だ——段々年を取るに従つて男女の情愛は表面に見えなくなるとしても、愛してゐると云ふ言葉だけで、実際はそんな気色もないのでは困る。男は世故に長けて来ると共に段々情愛を深めて行くものだが、今の四十以上の女は皆当り前のやうに男に対する心を全く子供に向けてしまう。』

『でも、子供は所天の物でしょうが——』

『いや、子供は子供で、所天その物ではない——そんな古臭い傾向の家庭では、男は、平凡な人間でない限り』と、そこに語調を強めて、『深い／＼情愛を空しく葬つてゐなければならぬ。——』

『何だ、詰らない』といふやうな振りをして、馨はその座敷の前を通り、食事をせがみに行つた。<sup>10</sup>

千代子は強気で義雄に対抗するが、義雄もそれに負けず、二人の間では激しい論争が続く。作品の中で二人の最初の論争ともいえるこの場面では、義雄が妻から離れていく根本的な理由が示されている。義雄は夫婦関係において男は「世故に長けて来ると共に段々情愛を深めて行く」のだが、女は「男に対する心を全く子供に向けてしまう」ので、夫婦間の愛が続かないと指摘している。千代子は「子供は所天の物でしょうが」と子供に対する愛は夫に対する愛でもあると訴えるが、義雄は子供は夫の物ではないと反論する。千代子の考え方について古臭い傾向であるとし、「お前は相当の教育を受けたのだが、その道学者的教育の性質が却つて邪魔をするのだ」<sup>11</sup>という。千代子の年齢からみると、教育の時期は明治20年代から30年代の間であると考えられるが、その時期は良妻賢母思想を基盤として教育が行われた時期で、おそらく千代子は義雄が「古い」と思っている良妻賢母思想を身につけた女性として認識されている。

つまり、義雄が千代子を離れていく理由は、千代子の良妻賢母的な傾向にあったといえる。良妻の千代子によって、それまで築いてきた、または成し遂げていた自分自身の業績は「あなたは何でも自分でやつて来たと思つてるんでしょが、ね、みんなわたしのお蔭ですよ」

---

<sup>10</sup> 同前掲注1、7頁。

<sup>11</sup> 同前掲注1、7頁。

<sup>12</sup>と否定され、義雄はみっともない失敗者に転落してしまったのである。世間の言う「良妻」は家庭を維持するために努める千代子のような女性を指して用いられたと思われるが、夫の義雄にとっては「良妻」とは思えなかったであろう。実際に泡鳴が幸子の良妻賢母的な傾向を嫌って「新しい女」を探し求めていたのであれば、第二の妻である清子と一生を過ごすことができたろうが、清子にも満足し得られず、別れたのをみると、おそらくそれだけではなかったようである

『……………』かの女の引ツ詰つた束髪や、色気のない着物が神経質の段々高まつて行く顔を剥き出しにして見せるので、義雄は少しあふ向いて最も侮辱の睨みを与へた。

『その婆々じみたつらを見ろ!』

『あなたに』と、千代子は恨めしさうにして、口のあたりをぴり付かせて、早口に、『かうされたんですよ。』少しゆつくりして、『あなたのせいですから、こんな』と、顔を突き出し、『お婆アさんでも——』可愛がつて下さいと云ひかけるらしかった。<sup>13</sup>

義雄の目に映った千代子は「色気のない」「婆々じみたつら」に過ぎなかった。千代子は同居している継母の世話や育児、家業の下宿屋まで、相当の苦勞をしていた。実際に幸子は「岩野の継母と云ふのが中々強か者でした上に、弟は放蕩を始める、きつい小姑は私を苛める、私は其中に這入つて苦勞を仕抜いた揚句の果、ヒステリーになつて、まるで狂人のやうになりました」<sup>14</sup>と言う。泡鳴は恋愛観において肉体的な愛を重視していたが、おそらく美しくもなく、生気もない老いた妻に愛欲を感じられないということが妻を離れる原因になったと考えられる。

『なんぼ若いツたツても、あんな意地の悪さうな、のツそりした女ぢやア——』

『ぢやア、手めへは何だ——鬼子母神のお化け見たやうなざまをしやアがつて——おれの女房なら、女房らしくなれ!』

---

<sup>12</sup> 同前掲注1。

<sup>13</sup> 同前掲注1、15頁。

<sup>14</sup> 「第一の妻の泡鳴観(其二)」『岩野泡鳴全集 別巻』臨川書店、1997年4月、353頁(初出は、「萬朝報」1915年9月15日)。

『あなたも亭主らしくおなりなさいよ。』

『馬鹿をいふな——貴様のやうなとげ／＼しい婆々アに、もう誰れが構つてみよう？ どんな見難い女でも、まだしもしとやかで、若けりやアいい。』<sup>15</sup>

「家庭」のために苦勞してきた妻に対して「婆々ア」といい、「見難い女でも、まだしもしとやかで、若けりやアいい」と怒鳴る義雄は、やがて20代の若いお鳥と関係を結ぶ。しかし、お鳥との関係も長く持たず、終わってしまう。

### 3. 妻になれなかった妾のお鳥

お鳥のモデルであるしも江は、実際にも泡鳴と結婚することはできなかった。泡鳴は二番目の妻として清子を選んだのである。義雄の愛人お鳥は、義雄に性病を移され、苦しい日々を過ごしていた。さらに、義雄の妻千代子に義雄との不倫関係を気づかれ、千代子からも、世間からも悪口を言われていた。お鳥は妾に思われてしまうのを嫌い、妻になることを願っていたが、義雄は二人に「愛」だけあればいいと思っていたので、お鳥をなかなか妻にはしてくれないのである。

『あたいが——目かけか——何ぞのやうに——思はれて——しまうぢやないか？』

『思ふものにやア思はせて置く、さ。』

『あたいが詰らん！』

『そりやア』と、落ち付いて、『お前がまだ世間に対する浮気ごころがあるからで——世間のものが何て云つたツて構うものか、ね。お前を愛するおれにさへしツかり手頼つてありやアいい。』

『そんなうまいことばかり言ふても、口さきばかりだから、あかん。』

『何も』と、ほほ笑みながら、『口さきばかりで胡魔化したことはないよ。』

『ある！ ある！ 妻子と別居すると言ふて、別居もしやせんし、あたいを学校にやつてやると云ふて、ちツともその手続きをして呉れせん。』

『そりやア、まだ夏期休暇中ぢやアないか！』

『休暇中から手をまはして置けばえい。』

『大丈夫——そんな心配はすな。』

---

<sup>15</sup> 同前掲注1、22頁。

『へん！』馬鹿にしたやうな、また納得したやうな声を出して、お鳥はあごをしやくつた。

『いやな癖だ』と、義雄は心で卑しみながら、縁を立つて来て、また机の前に坐わつた。<sup>16</sup>

義雄が離婚しない限り、お鳥は義雄の妾としてしかいられなくなる。義雄はお鳥が怒鳴る理由を「感づいてゐないではない」<sup>17</sup>が、「顔の欠点などは見えないので、義雄もあの可愛い女が自分の物になつてゐる」<sup>18</sup>と美しいお鳥を所有していることに満足しているだけで、「お鳥のやうな女を正式の妻に直さうとは夢にも考へてゐない」<sup>19</sup>のである。お鳥が「本妻にして呉れ、して呉れ」<sup>20</sup>と訴えても、義雄には「子供が母に何かをねだるのを見てゐると同じやうに」<sup>21</sup>うるさいと思うだけである。こうした論争が繰り返されるにつれ、お鳥の神経はいらいらしてきて気違いじみた状態となる。義雄は「神経の強い」<sup>22</sup>「お鳥のまた痛みを訴へ出した面倒」<sup>23</sup>やお鳥の生活費と病院費等で疲労を感じ、お鳥からも離れたくなる。つまり、義雄はお鳥の肉体だけに満足してただけで、お鳥を妻にする気はもはやなくなつたのである。

さて、妾の立場となつたお鳥の心理状態や性病による身体的な苦痛からくる精神状態からみると、お鳥もヒステリーということができると考えられるが、お鳥はヒステリーとされていらない。泡鳴が「男女間の趣味」において妻たるものは「家にばかり」<sup>24</sup>いるため、「ヒステリイや子宮病」<sup>25</sup>に取り憑かれるような女性であると述べているように、ヒステリーは家庭内の女性の病として妻のものとされている。お鳥は千代子と同様に「やがては、またヒステリ性に落ちる」<sup>26</sup>、いわば予備のヒステリー女で、まだヒステリー女の完全体になっていない状態として「癩」と記されている。癩がヒステリー症状の一つとみなされていたことを考えれば<sup>27</sup>、ゆくゆくはヒステリーになりそうなお鳥も、義雄の妻となるにはふさわしくな

---

<sup>16</sup> 同前掲注1、55頁。

<sup>17</sup> 同前掲注1、55頁。

<sup>18</sup> 同前掲注1、56頁。

<sup>19</sup> 同前掲注4、135頁。

<sup>20</sup> 同前掲注4、135頁。

<sup>21</sup> 同前掲注4、135頁。

<sup>22</sup> 同前掲注1、51頁。

<sup>23</sup> 同前掲注1、104頁。

<sup>24</sup> 岩野泡鳴「男女間の趣味」『岩野泡鳴全集 第十一巻』臨川書店、1996年8月、415頁。

<sup>25</sup> 同前掲注24。

<sup>26</sup> 同前掲注6、426頁。

<sup>27</sup> 船越は明治期におけるヒステリー言説について「ヒステリーを日本在来の女性病である血の道や癩

かったようである。

#### 4. 義雄における理想の妻

妻千代子という存在は、義雄の代りに家業を継いでやってくれたり、継母や子供の生活を家長の代りに担ってくれたりして「所天の名誉」を守ってくれた有難い存在である。しかし、義雄は「それをあり難いと思ふのではなく、ただ自分自身の新しい発展が自由に出来るのを幸ひ」<sup>28</sup>と思うだけである。義雄は、千代子と結婚してから一家の家長としての役割を果たすどころか、自分自身の発展のために、女優の養成や蟹の缶詰事業等に手掛けたのである。それはあくまでも「有形的な事業をして、名誉と金銭とを自分の内容的実力と共に両得して見たい」<sup>29</sup>という自己の願望からである。千代子にとって義雄は、家業があるにも継がず、自分勝手な行動をしながらも反省せず、隠し女と遊び回っているだけの情けない夫であり、死んでいく子供には無情な父である。重なる義雄の発展の失敗は、妻の千代子には義雄が無能な家長であるという証拠にほかならなかったのである。千代子は無能な家長の代りに担ってきた家長としての役割で疲れ果てていたと考えられるが、さらに、「発展」を言い訳に浮気をし、妾という存在を作った夫に対する失望や憤怒が千代子をヒステリーにさせたということができよう。そうした千代子について義雄は以下のように語っている。

鬼女の笑い——執念深い呪ひの女——深夜、髪を乱したあたまに蠟燭を三本立て、口に髪剃りを喰はへ、片手に藁人形、片手にかな槌を持った丑満参りを想像して、義雄はぞつとした。このやうにヒステリーの高ぶつて来た女なら、それくらゐのことは田舎なら仕かねまいと。<sup>30</sup>

千代子の実在のモデルである泡鳴の最初の妻幸子はヒステリックなところはあったというが、「泡鳴氏の作品中に度々出て来る——無智な嫉妬深い年上の下宿屋の女房さんの——モデルほどに憎くはな」<sup>31</sup>かったという。むしろ「無情の泡鳴氏を能く理解した女」<sup>32</sup>であっ

---

などと関連づけ、女性の病であることを印象づけている」と述べている。

船越幹央「ヒステリー——メディアのなかの病——『青弓社ライブラリー13 偏見というまなざし——近代日本の感性——』坪井秀人編、青弓社、2001年4月、78頁。

<sup>28</sup> 同前掲注1、3頁。

<sup>29</sup> 同前掲注1、101頁。

<sup>30</sup> 同前掲注1、83頁。

<sup>31</sup> 同前掲注14、352頁。

<sup>32</sup> 同前掲注14、352頁。

たとされている。「五部作」においてはヒステリーを起す千代子は、まるで怨霊を想起させるほど恐ろしい姿で描かれているが、結末に近づいては以下のように語られている。

義雄は自分の本妻が段々ヒステリになるに従って、自分は段々にそれをいやになつた経験を思ひ出した。そして再び第二のヒステリ面を見てみなければならないやうなことになるのは、忍び切れないと思ふ。然し、本妻をも、お鳥をも、ヒステリなどにするのは自分だ、自分の熱刻もしくは冷刻な性質からのことだ。自分が愛するものに全身全力をうち込む代りには、その愛するものを全く占領してしまはなければ承知しない。この自分の性質を知つて、妻でも、お鳥でも、それに合する様に努めた時代がある。然し自分には満足が出来なかつた。自分の深刻なと思はれる心中まで、いづれの女も十分に這入つて来る資格がなかつた。自分に向けるべき愛を、妻は子供の方に多く裂いてしまつた。お鳥は病気の為めに子供が出来るをりがなかつたのはいいが、妻が子供に愛を裂いたと同じ程度で、かの女自身に愛を保留してゐた。自分はそのいづれにも満足が出来ない。その満足出来ないところに満足させようと努めたのが、女どもの精神と神経とを過労させた。そこに、妻のヒステリやお鳥の癩を増長させる原因があつた。然しそのヒステリや癩が増長するだけ、自分の渠等に対する反感も亦増長した。<sup>33</sup>

義雄は千代子をヒステリー持ちにし、お鳥を癩持ちにしたのは「自分だ」と、一見自分を責め、反省しているかのように見える。しかし、専ら義雄に向けるべき愛を子供に注いだ妻や、自分自身に向けたお鳥に、いづれも満足することができず、それによって二人をも満足させることができなかつたことが、やがて二人の病気を増長させる原因になつたという。さらに、「これは自分の悪いのではない、女どもが自分の熱中する全人的性格に這入つて来ない浅薄な根性ツ骨が悪いのだ」<sup>34</sup>と考え、病に苦しむのは「浅薄な女どもの運命」<sup>35</sup>と語っている。これはまさに、泡鳴の女性観や結婚観、さらには恋愛観を支えている思想であると同時に、女性遍歴を正当化するための口実であるといえる。

泡鳴は「五部作」の義雄を通して「刹那主義」を貫こうとしたが、「神秘的半獣主義」において以下のように唱えている。

---

<sup>33</sup> 同前掲注6、426頁。

<sup>34</sup> 同前掲注6、426頁。

<sup>35</sup> 同前掲注6、426頁。

愛なるものは、その解釈の如何に拘らず、刹那的だといふことには一致して居る。

(中略) 愛情は万物と共に刹那的の表現であるから、今の花嫁は一分後の老婆である。一分後の花婿は、また一分前の老爺であつたかも知れない。一たび冷えた愛情が再び熱して来る時はあらうが、もう、先きの愛情とは一つでないのである。僕等は永続的結婚の成立を確立することが出来ない。一夫一婦とは、その瞬間に於いてのみ真理である。<sup>36</sup>

「五部作」における千代子は、社会が求めている良妻賢母ではあっても、良妻賢母思想を受けて築いた古臭い傾向の「家庭」に飽きてしまった夫に、ヒステリー持ちと烙印を押され、やがて捨てられる。それは「刹那主義」を唱えては自分勝手な人生を生きていこうとする夫義雄が、「新しい発展」を求め、さらには性的欲求を満たすことのできる、生き生きとした「妾」を持つために、妻のヒステリーを口実にしているからである。つまり、「五部作」において義雄がヒステリーを口実にしている限り、夫婦という関係は義雄の手によっていつでも破れることができ、維持することが不可能になっていると考えられる。そういう意味で、ヒステリーは物語中の人物が、泡鳴の言う「刹那主義」的な人生に送ることになる契機となり、またそれを正当化する重要な要素になっていると言えるのである。

## 第2節 夏目漱石『道草』一夫婦間の永続的な愛と葛藤一

夏目漱石『道草』は、1915(大正5)年6月3日から同年9月14日まで「東京朝日新聞」と「大阪朝日新聞」に連載された長編小説であり、漱石の実生活をもとにした自叙伝的小説といわれている。漱石の妻鏡子は作品の中でお住として登場しており、ヒステリーが起る女性とされている。ヒステリーは漱石が職業作家になってから発表した『虞美人草』をはじめ、『それから』『門』『行人』の登場人物にも見られる。特に『道草』におけるヒステリーは作品の中で重要な役割を担っている。『道草』におけるお住のモデルでもある漱石の妻鏡子は実際にヒステリーを病んでいたが、流産の経験によりヒステリーが激しくなり、自殺を図るが、未遂におわる。こうした妻のヒステリーに対する経験が作品に反映されているといえる。

漱石は1914(大正3)年11月頃の「日記及断片」において「妻〔は〕ヒステリーに罹るくせがあつたが何か小言でもいふと屹度厠の前〔で〕引つ繰り返つたり縁側で斃れたりする」<sup>37</sup>と妻のヒステリーについて言及している。『道草』においても、時によって妻のヒステリー

<sup>36</sup> 岩野泡鳴「神秘的半獣主義」『岩野泡鳴全集 第九巻』臨川書店、1995年8月、40-41頁。

<sup>37</sup> 夏目漱石「日記及断片」『漱石全集 第二十六巻』岩波書店、1957年6月、143頁。

に困惑したり、心配したりする健三が描かれているが、結果的には健三とお住の夫婦関係に「緩和剤」として作用していると言える。

作品が発表された当初、赤木桁平は「最も色濃く描かれてゐるのは、勿論健三と細君との夫婦関係」<sup>38</sup>であり、「健三と細君の交渉には、常に性格の「必然」とサイコロヂーの「必然」とが伴うてゐる。(中略)そこに健三と細君との変な夫婦関係を描かうとした作者の成功がある」<sup>39</sup>と評しているが、『道草』において夫婦関係は主なテーマとなっており、ヒステリーは夫婦間の心理的作用として働いている重要なキーワードとなっていると考えられる。

健三とお住の夫婦関係について論じる際にヒステリーは必要不可欠ではないかと考えられるが、『道草』の研究においては、ヒステリーを単独的に論じている江種満子の論を除いては大抵軽く触れる程度にとどまっている。平成期から現在に至るまでフェミニズム、ジェンダー論の立場から論じられた『道草』の研究が増えつつある中で、「近代という時代のセクシュアリティ」<sup>40</sup>の特徴の一つでもあるヒステリーの観点から『道草』を論じた研究は乏しい状況であると言える。本論では、漱石と鏡子におけるヒステリーについて検討したうえで、『道草』の健三とお住の夫婦関係においてヒステリーがどのような役割を果たしているのかを分析したい。

## 1. 鏡子のヒステリー

『道草』は1903(明治36)年から1905(明治38)年(もしくは、1906(明治39)年)にわたる3年間(もしくは、4年間)という期間が対象となっており、漱石がイギリスの留学から帰国した時期であるというのは通説となっている<sup>41</sup>が、相原和邦は取材時期を上記のような「期間のみを限定し、当時の漱石自身の実生活を<直接に、赤裸々に>表現したとする通説は、はたして全面的に当を得たものであろうか」<sup>42</sup>と述べ、大正年間、特に1914(大正3)年から1915(大正4)年にかけての「日記及断片」において『道草』の素材と思われる箇所があるとし、「取材時期が明治三〇年代末のみならず大正三年の前後に及んでいる」<sup>43</sup>と指摘している。本論では、鏡子のヒステリーから影響を受けた漱石のヒステリー観を探ることを目的としているため、荒正人「漱石研究年譜」(以下、「年譜」と略す)及び夏目鏡子『漱石の思い

<sup>38</sup> 赤木桁平「『道草』を読む」『読売新聞』(朝刊)、1915年10月24日付、7面。

<sup>39</sup> 同前掲注38。

<sup>40</sup> 江種満子「『道草』のヒステリー」『国語と国文学』71(12)、1994年12月、3頁。

<sup>41</sup> 小宮豊隆「『道草』解説」『漱石全集 第八巻』漱石全集刊行会、1937年。

<sup>42</sup> 相原和邦「『道草』の性格と位置」『漱石作品論集成 第十一巻 道草』桜楓社、1991年6月、70頁(初出は、「文学研究」28、1968年11月・「文学研究」31、1970年6月)。

<sup>43</sup> 同前掲注42。

出』(以下、『思い出』と略す)を参考にし、ヒステリーやそれに関係のある事件などをできるだけ多く収集し、検討を行いたい。

まず、『思い出』にはヒステリーについて直接言及されていないため、「年譜」の記録と対照しながら検討してみたい。まず、「年譜」では、鏡子のヒステリーは1896(明治29)年の9月頃からあらわれている。1896(明治29)年9月25日、漱石は正岡子規宛てに「内君の病を看護して 一句 枕邊や星別れんとする晨」<sup>44</sup>という句稿を送っているが、「年譜」ではこの句に対して「悪阻の看病ではなく、ヒステリーの発作によるものかと思われる」<sup>45</sup>と解釈がつけられている。9月の初めに、漱石と鏡子は一週間ほどの予定で、九州を旅行したとされているが、鏡子は『思い出』において以下のように回想している。

九月に入ると早々一週間ばかりの予定で、一緒に九州旅行を致しました。(中略)其頃の九州の宿屋温泉宿の汚さ、夜具の襟なども垢だらけで、浴槽はぬるぬるすべつて、気持ちの悪いつたらありません。ひどく不愉快なので、私は懲り懲りしまして、それ以来九州旅行は誘はれても行く気になれませんでした。<sup>46</sup>

鏡子は九州旅行について「ひどく不愉快」であったと回想しているが、江藤淳は「鏡子は(中略)九州の宿屋や温泉宿を不愉快がって、この旅行をあまり楽しまなかった。彼女はおそらく、人の出入りも多く、万事派手好みの中根家の生活から、夫婦に下女一人という地方都市の地味な学究の生活に突然移植されて、とまどいもし、また疲れてもいた。彼女は熊本に帰って間もなく病臥した」<sup>47</sup>と指摘しているが、おそらく九州旅行での不愉快な経験を含め、新たな生活に見馴れず、さらにその生活に満足し得られなかったのがヒステリーの原因となったようにも思われる。漱石は病気になった鏡子を看病して夜明けを迎えたかのように「枕邊や星別れんとする晨」と書いているが、ヒステリーが重症化する前の状態ではあるものの、妻のヒステリーにあまり触れたことがないためなのか、妻を心配する漱石の思いが込められている。

1897(明治30)年6月末、漱石の実父直克が死去し、そのため7月に漱石と鏡子は上京することになった1897(明治30)年7月下旬から8月上旬頃、鏡子は流産するとされているが、おそら

<sup>44</sup> 夏目漱石『漱石全集 第十二巻』岩波書店、1967年3月、585頁。

<sup>45</sup> 荒正人『漱石文学全集 別巻 漱石研究年表』集英社、1974年10月、116頁。

<sup>46</sup> 夏目鏡子『漱石の思い出』岩波書店、1929年11月、31頁。

<sup>47</sup> 江藤淳「星別れんとする晨」『漱石とその時代 第二部』新潮社、1970年9月、322頁。

く、これが原因でヒステリーが重症化したのではないかと考えられる。流産については以下のように記されている。

鏡は妊娠しているとは知らず、長い汽車旅に揺られたことも原因となって、東京に着いて間もなく流産する。（「年譜」）<sup>48</sup>

丁度其時私は身重だつたのですが、長途の旅行がいけなかつたのか流産してしましました。（『思い出』）<sup>49</sup>

上京して間もなく鏡子が流産したということは、両方とも記録が一致しているため、明らかであると考えられるが、鏡子が妊娠について認知していたかという問題については、『思い出』では明記されておらず、流産の事実だけ確認できる内容しか書かれていない。「年譜」では、さらに、鏡子の流産について「注」を加えて以下のように記されている。

正岡子規の十月九日の句に、「水の月物かたまらで流れけり」「手のものを取り落としたり水の月」がある。子規が没する十日ほど前に、河東碧梧桐は正岡子規のマッサージをしながら聞いた話として、この句は正岡子規の「自分の切ない情緒の記憶」であり、「其の事の始終を漱石に依頼しておいた結果」が流産ということになった。河東碧梧桐は、鏡婦人の流産も人工流産だったらしいと云っている（河東碧梧桐『回想の子規』）。この真偽は断定しがたい。<sup>50</sup>

河東碧梧桐の説について「この真偽は断定しがたい」と指摘されているが、おそらく「人工流産」であるためには、鏡子が妊娠について認知していたという仮説が先行しなければならないからであろう。鏡子の流産については、妊娠に気づいていたかどうかという問題と自然流産か、それとも人工流産かという問題が明らかになっていないまま残されている。流産した鏡子を一人残して熊本に帰ることになった漱石は、その際に「月に行く漱石妻を忘れたり」<sup>51</sup>という俳句を残しているが、「妻を遺して独り肥後に下る」<sup>52</sup>という前書きがついて

---

<sup>48</sup> 同前掲注45、121-122頁。

<sup>49</sup> 同前掲注46、47頁。

<sup>50</sup> 同前掲注45、122頁。

<sup>51</sup> 同前掲注44、613頁。

<sup>52</sup> 同前掲注44、613頁。

いるため、おそらく熊本到着の前後に書かれたものだと考えられる。月光の美しさに妻のことは忘れてしまうというように読まれるこの句は、消えてしまった子への悲しみや流産で苦しむ妻への心配を忘れたいという気持ちで書いたもののように思われる。

一方、鏡子はこの時期について以下のように記している。

帰り際に、其頃紅葉山人の「金色夜叉」が「読売新聞」に連載されてゐた最中で、上京してそれをずっと読んでゐたのですが、熊本のやうな田舎には「読売新聞」が行かないので、それを毎日東京から送れと申し附けて参りました。ところが毎日となると些細なことなのでかへつて怠り勝ちになつて、三回分も四回分も纏めて送つたりして、ひどく手紙で怒られたことがあります。<sup>53</sup>

流産して健康が悪くなって帰られない妻に「金色夜叉」が連載されている新聞を毎日送れと命じ、それに従わない妻を責めたというこのエピソードからは、妻を心配するという漱石の姿は見当たらない。鏡子がこのエピソードを残した理由は、おそらく当時の漱石の不人情を告発するためでもあったと考えられるが、このエピソードからみると、漱石の「月に行く漱石妻を忘れて」という句は、不注意で流産してしまった(もしくは意図的に落としてしまった)妻を恨むという不愉快な気持ちから妻のことは忘れていたいという気持ちで書いたもののようにも思われる。

鏡子の健康が一時回復し、1897(明治30)年10月25日頃熊本に帰ったとされているが、鏡子が熊本に不在だった時の漱石について女中から聞いた鏡子は以下のように記している。

女中はテルといふ名で、色の朝黒い二十七八の女でしたが、よく忠実に働いてくれるのはいいが、これが私にまけない大層な朝寝坊です。で私の留守中朝飯もたべさせずに学校へ出したことがしばしばあつたそうですが、…(後略)…<sup>54</sup>

女中は「大層な朝寝坊」で、「私にまけない」とあるように、鏡子も女中と同じく朝寝坊をしていたとみられるが、朝寝坊して漱石に朝食を食べさせなかったというようなことは、漱石と鏡子の結婚当初からあったとされている。

---

<sup>53</sup> 同前掲注46、48頁。

<sup>54</sup> 同前掲注46、50頁。

私は昔から朝寝坊で、夜はいくら遅くてもいいのですが、朝早く起こされると、どうも頭が痛くて一日中ぼおつとしてゐるといふ困った質でした。新婚早々ではあるし、夫は早く起きてきまつた時刻に学校へ行くのですから、何とか努力して早起きをしようとおつとめるのですが、何しろ小さい時からの習慣か体質かで、それが並外づれてつらいのです。(中略)時々朝のご飯もたべさせないで学校へ出したやうな例も少なくありませんでした。<sup>55</sup>

鏡子は朝寝坊の対処として「これではならないといふので、枕元の柱に八角時計をもつて来てねてみますと、チンと半時間打つ度に驚いて起き上がつたり」<sup>56</sup>したが、「結局眠り不足と気疲れとで、ほんとにしばらくの間ぼんやりしてゐました」<sup>57</sup>と健康の悪化を訴えている。しかし、鏡子は漱石に「お前はオタンチンノパレオラガスだよ」<sup>58</sup>と揶揄われ、「オタンチンノパレオラガスといふ言葉は、そんなことを言はれなくたつて後々までも、妙に思ひ出の深い言葉となつて頭に残つて居りました」<sup>59</sup>と回想しているが、鏡子にとっては、結婚後、馴れていない生活に困っていた自分を心配するよりも、嘲弄する漱石の態度が一種の衝撃を与え、一生忘れられないやうな夫の姿として残されたのではないかと考えられる。おそらくこのような生活を繰り返すことで鏡子のヒステリーは、激しくなつたであろう。

ここでは、漱石にとって鏡子のヒステリーは朝寝坊と密接な関係があると認識していたという可能性が浮かんでくる。鏡子の朝寝坊は、結婚以前からあつたとされているが、結婚後の生活変化により、寝不足となつた鏡子は不機嫌となり、それが漱石にはヒステリーとして認識されたという可能性は否定できないであろう。このような鏡子のヒステリーは、漱石の生活にも関係しており、自然に漱石に生活的な不満を抱かせたということになるだろう。1899(明治32)年の元日、河東乗五郎宛てに送つた「我に許せ元日なれば朝寝坊」<sup>60</sup>という句には、朝寝坊することに我慢できない漱石の気持ちがうかがえる。

鏡子のヒステリー症状は、流産後に激しくなつたと考えられる。1898(明治31)年4月頃、山川信次郎らは小天温泉を訪れるが、漱石は「鏡のヒステリーを心配して同行しなかつた」<sup>61</sup>とされており、同年6月末頃は未遂に終わっているものの、鏡子は白川の井川淵に投身自

<sup>55</sup> 同前掲注46、28頁。

<sup>56</sup> 同前掲注46、28頁。

<sup>57</sup> 同前掲注46、28頁。

<sup>58</sup> 同前掲注46、29頁。

<sup>59</sup> 同前掲注46、29頁。

<sup>60</sup> 夏目漱石「漢詩文」『漱石全集 第十八巻』岩波書店、1986年3月、60頁。

<sup>61</sup> 同前掲注45、127頁。

殺を図るにいたっている。投身自殺未遂事件は「年譜」の記録から見るには、ヒステリーが原因であるように考えられるが、大岡昇平はこの事件について以下のように述べている。

鏡子夫人の熊本時代の身投げについて、ヒステリー患者に自殺の例はないのですから、「複雑な原因があったかと想像される」と、集英社版「漱石文学全集」別巻（昭和四十九年）の荒正人作成の「年譜」にあります。朝のことですから、下流に漁師が出ているのを見て、助けられるのを予期しての狂言自殺であればヒステリーにはあり得るのです。（中略）ヒステリー患者が暴れるのは芝居なのです。私は古い先輩の愛人のヒステリーの話を書き聞いていますが、その先輩は路面電車が来るところへ愛人に突飛ばされた、と述べている。ひどいものです。

そんな次第で、投身自殺自体には大して問題はないのですが、漱石は学問にこり固まって、鏡子夫人にあまり構わなかったのではないかと思われる。すると鏡子夫人は、自分はただ父の地位と金のために貰われたので、夫は自分を愛していないのではないか、と思う。それらの不満が重なったのではないか、と思います。<sup>62</sup>

自分を愛していないという不満がヒステリーの原因となり、やがて「狂言自殺」をしたという大岡の解釈は、全面的に否定することはできないが、全面的に肯定することもできない。自殺未遂事件の以前に、鏡子に流産の経験があったということに注目する必要があると考えられる。初めての妊娠で流産の経験は、一種の外傷性ヒステリーとなったと考えられるが、流産による出血などは、当時出産によって命を失う女性が多かったということを考えれば、鏡子としては間接的な死の経験であったと考えられる。さらに、子供を失った悲哀、妊娠や出産に対する恐怖等も生じていたと考えられる。身体的な損傷から精神的な損傷へと広がり、それによってヒステリーは激しくなり、自殺を図ったということは、ヒステリー患者に自殺の例がないから（自殺の例がまったくないわけではないが）<sup>63</sup>とあって、その自殺が芝居であるといえるだろうか。この事件の詳細については、明らかになってはいないものの、『道草』においてお住が妊娠や出産から死を想起し、恐れる場面（30章）やヒステリーの朦朧状態で自殺を図るかのような場面（54章）などをみる限りでは、鏡子の自殺が芝居ではないことを含め、

<sup>62</sup> 大岡昇平「「自伝」の効用—『道草』をめぐって」『漱石作品論集成 第十一巻 道草』桜楓社、1991年6月、264頁（初出は、「新潮」81(1)、1984年1月）。

<sup>63</sup> 第一章において述べたように、自殺者の増加や自殺の原因を神経疾患によるものと考えられ、ヒステリーの関連記事では、自殺の要因としてヒステリーが挙げられている。

ヒステリーが夫に対する不満だけによるものではなく、流産の経験が深く関係していることが分かる。

さて、漱石が妻のヒステリーについて直接言及しているのは、それから大分時間が過ぎてからの1914(大正3)年11月頃の「日記及断片」からであるが、以下のようである。

木曜の面会日の晩に下女が一寸といふからみんなを待たせて行つて見ると、妻が茶の間に寝てゐる。心臓がさつき急に痛くなつたから医者<sup>に</sup>電話をかけてくれといふ。尤も今は何ともないが要心のためだからといふ。私はすぐ電話をかけた。心臓痙攣ではあるまいかと聞いたら医者<sup>の</sup>いふには心臓痙攣でそんなにしてゐられる訳のものではない 思ふにリョウマチ位な處だらう。若し痛くなつたら私の持薬に用ひてゐる薬を飲ませ<sup>原</sup>らと云つた。然るに私の粉薬は無論重曹剤で酸を中和する胃病の薬である。私は妻に其旨を話したら妻は別段怪しい顔もしなかつた。此前も胸がいたいとか頭がどうかで医者を迎へてやつたら医者は診察して何うもないやうな事を云つた 其時医者<sup>の</sup>顔にはありありとこんな馬鹿気た事で人をわざわざ呼んで騒がせる方があるかと云はぬばかりの表情があつた。其前から妻〔は〕ヒステリーに罹るくせがあつたが何か小言でもいふと屹度厠の前〔で〕引つ繰り返つたり縁側で斃れたりする 其度数が重なると私は彼女の誠実をさへ疑つた。今医者<sup>の</sup>様子を見た私は果たせるかなと思つた。翌日妻は私が起きたら横になつてゐた。私はわざわざ大きなあくびをした。それ切り妻に何とも云はなかつた。妻もやがて起きて平生の如くにしてゐた。<sup>64</sup>

『道草』を連載する約半年前の時期でもあるが、漱石は妻の病状を心配するどころか、「馬鹿げた事」であるとし、「ヒステリーに罹るくせ」があるなど、怒りさえ感じられるほどの語調で妻の病気を虚病であるかのように語っている。高橋正雄は、この時期の漱石について「妻や女中を対象にした被害妄想を抱いていた」<sup>65</sup>とし、日記という私的な場では「思う存分妄想的な鬱憤を晴らしている」<sup>66</sup>一方、書簡という公的な場では「温厚篤実な紳士としての側面を見せている」<sup>67</sup>と述べている。漱石のこうした「二重見当識的な振る舞い」<sup>68</sup>

<sup>64</sup> 同前掲注37。

<sup>65</sup> 高橋正雄「大正3年11月の夏目漱石一日記と書簡の比較―」『日本病跡学雑誌』73、2007年、66頁。

<sup>66</sup> 同前掲注65、68頁。

<sup>67</sup> 同前掲注65、68頁。

<sup>68</sup> 同前掲注65、68頁。

は〈私的〉と〈公的〉とに分かれてあらわれているが、この時期の漱石は「大抵的には破綻を感じさせないほど病状が軽かった」<sup>69</sup>という。さて、『道草』は小説という〈公的〉な場としての意味を持っている一方で、漱石自身の実体験を素材にした自伝的な小説という特性をも持っている作品であるが、その中でヒステリーはどのようにあらわれているのかについて検討を行いたい。

## 2. 「緩和剤」としてのヒステリー

『道草』において妻のヒステリー症状が描かれているのは、主に50、54、78章であるが、これらの場面では妻がヒステリーによって朦朧状態となり、そうした妻を夫の健三が心配や同情で介護するような様子が描かれている。まず、50章では以下のようなようである。

健三は細君の肩を揺つた。細君は返事をせずに只首丈をそろりと動かして心持健三の方に顔を向けた。けれども其所に夫の存在を認める何等の輝きもなかつた。

「おい、己だよ。分るかい」

斯ういふ場合に彼の何時でも用ひる陳腐で簡略でしかもぞんざいな此言葉のうちには、他に知れないで自分にばかり解つてゐる憐憫と苦痛と悲哀があつた。それから跪まづいて天に禱る時の誠と願もあつた。

「何うぞ口を利いて呉れ。後生だから己の顔を見て呉れ」

彼は心のうちで斯う云つて細君に頼むのである。然し其痛切な頼みを決して口へ出して云はうとはしなかつた。<sup>センチメンタル</sup>感傷的な気分デモンストラチーフに支配されやすいくせに、彼は決して外 表 的 になれない男であつた。<sup>70</sup>

「何うかしたのか」<sup>71</sup>という健三の問いに対し、お住は何も答えず「眼を開けて天井を見」<sup>72</sup>ているだけである。健三は同じ問いを繰り返したが、それでもお住はヒステリーの発作で朦朧とした状態となっている。その後、健三が再び呼び掛けたら、お住は夢から覚めた人のように、漸く意識を取り戻している。妻にヒステリーの発作が起つた際に、健三は「憐憫と苦痛と悲哀」を感じるとされている。妻に対する生活的な不満や葛藤は払拭したかのように、

<sup>69</sup> 同前掲注65、68頁。

<sup>70</sup> 夏目漱石「道草」『漱石全集 第十巻』岩波書店、2003年1月、151-152頁。

<sup>71</sup> 同前掲注70、150頁。

<sup>72</sup> 同前掲注70、150頁。

妻のヒステリーを心配している夫の健三が描かれている。次の54章では、以下のように描かれている。

或晩彼は不図眼を覚まして、大きな眼を開いて天井を見詰めてゐる細君を見た。彼女の手には彼が西洋から持つて帰つた髪剃があつた。彼女が黒檀の鞘に折り込まれた其刃を真直に立てずに、たゞ黒い柄だけを握つてゐたので、寒い光は彼の視覚を襲はずに済んだ。それでも彼はぎよつとした。半身を床の上に起して、いきなり細君の手から髪剃を<sup>も</sup>撈ぎ取った。

「馬鹿な真似をするな」

斯ういふと同時に、彼は髪剃を投げた。髪剃は障子に箆め込んだ硝子に中つて其一部分を摧いて向ふ側の縁に落ちた。細君は茫然として夢でも見てゐる人のやうに一口も物を云はなかつた。（中略）

其時代には発作の起るたびに、神の前に己れを懺悔する人の誠を以て、彼は細君の膝下に跪づいた。彼はそれを夫として最も親切で又最も高尚な処置と信じてゐた。

「今だつてその原因が判然分りさえすれば」

彼には斯ういふ慈愛の心が充ち満ちてゐた。けれども不幸にしてその原因は昔のやうに単純には見えなかつた。彼はいくらでも考えなければならなかつた。到底解決の付かない問題に疲れて、とろとろと眠ると又すぐ起きて講義をしに出掛けなければならなかつた。彼は昨夕の事について、つひに一言も細君に口を利く機会を得なかつた。細君も日の出と共にそれを忘れてしまつたやうな顔をしてゐた。<sup>73</sup>

お住がヒステリーで朦朧とした状態になると、自害や自殺未遂のような行為が誘発されることもあったため、健三は常に安心して寝ることができない。或る晩もふと目を覚ますと、妻は朦朧状態で、手には髪剃が持たれていたので、健三はそれを妻から奪いとり、手の届かないように投げつける。健三は妻の身の安全を脅かすようなヒステリー発作が起るたびに、ヒステリーがおさまることを心から切実に願うのである。昔は妻のヒステリーの原因が見えていたが、今では「昔のやうに単純には見えなかつた」という。おそらく、健三には妻のヒステリーの原因が流産によるものだと単純に分かつていたのが、今では様々なことが複雑に絡まり合い、解決の付かない問題になつたのであろう。原因不明のヒステリーを治そうとし

---

<sup>73</sup> 同前掲注70、164-165頁。

でも治療法が見つからない夫は、常に妻から目を放さずにはいられないのである。妻のヒステリーは健三にとって、形式上の夫としての役割にとどまらず、人生を共に生きていく伴侶者としての役割を果たさせる動力になっているが、そうした動力には夫の妻に対する同情や憐憫を含め、妻にしか感じられない愛情という感情が潤滑油になっていると考えられる。それがいわゆる夫婦関係の「緩和剤」として作用し、次の78章では以下のように描かれている。

幸にして自然は緩和剤としての歇私的里を細君に与えた。発作は都合好く二人の関係が緊張した間際に起つた。健三は時々便所へ通ふ廊下に俯伏になつて倒れている細君を抱き起して床の上迄連れて来た。真夜中に雨戸を一枚明けた縁側の端に蹲踞つてゐる彼女を、後から両手で支へて、寢室へ戻つて来た経験もあつた。

そんな時に限つて、彼女の意識は何時でも朦朧として夢よりも分別がなかつた。瞳孔が大きく開いてゐた。外界はたゞ幻影のやうに映るらしかつた。

枕辺に坐つて彼女の顔を見詰めてゐる健三の眼には何時でも不安が閃めいた。時としては不憫の念が凡てに打ち勝つた。彼は能く気の毒な細君の乱れかゝつた髪に櫛を入れて遣つた。汗ばんだ額を濡れ手拭で拭いて遣つた。たまには気を確にするために、顔へ霧を吹き掛けたり、口移しに水を飲ませたりした。

発作の今よりも劇しかつた昔の様も健三の記憶を刺戟した。

或時の彼は毎夜細い紐で自分の帯と細君の帯とを繋いで寐た。紐の長さを四尺程にして、寐返りが充分出来るやうに工夫された此用意は、細君の抗議なしに幾晩も繰り返された。<sup>74</sup>

二人は生活や考え方の食い違いで葛藤を繰り返し、緊張した状態にいる時もあるが、その都度、ヒステリーが二人の関係を和らげる「緩和剤」として作用している。お住のヒステリー症状は「いわゆるヒステリー性もうろう状態、ICD-10<sup>75</sup>で言うところの解離性障害」<sup>76</sup>であるというが、こうした朦朧状態を同伴するヒステリーの症状を媒介に夫婦愛が成立している。健三はヒステリーで朦朧状態となった妻に心配や同情を惜しまなかつたのであり、妻を介護する際には他人の手を借りず、一人で妻の面倒を見ている。妻を介護する際に行われる

---

<sup>74</sup> 同前掲注70、237-238頁。

<sup>75</sup> ICD-10は疾病及び関連健康問題の国際統計分類(ICD)10次改訂版で、世界保健機構で疾病と症状などを分類したものである。

<sup>76</sup> 高橋正雄「熊本時代の夏目漱石—介護者としての側面—」『日本病跡学雑誌』55、1998年、41-42頁。

行為は、或る時は夫婦の性生活として営まれている。普段は妻に冷淡ともとれる態度を見せていた健三であるが、妻が朦朧とした状態のヒステリーになった時には、心配の眼で妻の顔を見詰めていたり、乱れかかった髪に櫛を入れてやったり、汗ばんだ額を拭いてやったり、顔に霧を吹き掛けたり、口移しに水を飲ませたりするなど、ロマンチックな夫となる。妻のヒステリーを心配して「細い紐」を繋いだ健三とそれを抗議なしに受け入れるお住をみると、「細い紐」は二人を夫婦縁で繋いでいる「赤い糸」のようにも思われる。

健三のお住に対する切実な思いは、お住にも伝わっていたはずであるが、夫の介護によってヒステリーの症状がおさまることから、夫の愛情で満たされ、守られた妻が心身の安定を回復したとみることができると考えられる。柄谷行人は、健三とお住の関係は「「自然」が与えるヒステリーによって緩和される」<sup>77</sup>が、健三にとって夫婦は「お互いの意志だけではどうすることもできないような相互規定性としてあったのだから、その伸縮を支配するものに対して怖え、また頼りにするほかなかったのだ」とし、「それを漱石は「自然」とよんだ」<sup>78</sup>と述べている。

ヒステリーを媒介に成立した夫婦という関係は、夫婦という名のもとで形成された形式的かつ事務的な関係を超越し、その根源を「自然」に置いているため、不可避性や不可逆性をも帯びていると考えられる。一方で、喘息で苦しんでいる姉の夏に対して、姉の夫の比田は不人情的な態度を取っているが、健三は喘息を媒介にあらわれている夏と比田の関係とヒステリーを媒介にして形成された自分とお住の関係とを比べ、不人情的な比田を非難しているように描かれている。つまり、「自然」というのはヒステリーという病的かつ生理的な現象自体を指しているというより、ヒステリーを媒介にして自然にあらわれる一種の感情、特に夫婦間の愛情という感情を指していると考えられる。

さて、夫の妻に対する愛情は妻がヒステリーで朦朧とした状態、つまり、妻が自由に体を動かさないほどの重症化した状態に著しく現れ、その場面において夫婦愛が色濃く描かれている。江種満子は、ヒステリーの発作を起こした妻は救いを求める弱者の立場に置かれており、発作による妻の朦朧状態は健三「自身のなかの「我」の検閲が妻に優しくしても恥ではない」<sup>79</sup>と許可を下ろしやすくしているため、健三は「心置きなく愛情」<sup>80</sup>を表現し、「妻もそのような夫を受け入れる」<sup>81</sup>ことができるようになっているとヒステリーを媒介にあら

<sup>77</sup> 柄谷行人「意識と自然——漱石試論(I)」『畏怖する人間』冬樹社、1984年12月、50頁。

<sup>78</sup> 同前掲注77、51頁。

<sup>79</sup> 同前掲注40、9頁。

<sup>80</sup> 同前掲注40、8頁。

<sup>81</sup> 同前掲注40、8頁。

われている力学関係について述べている。男女または夫婦という関係にのみならず、病気の重症度によって「病気」を媒介にあらわれる医者と患者または介護者と病人という力学関係が成立しているとみてよいのではないかと考えられる。

『道草』には、以上のような重症状態のヒステリーが描かれている場面のほかに、こうしたヒステリーを健三が恐れる場面においてもヒステリーが用いられている。

### 3. 夫と妻のヒステリー

『道草』においては朦朧状態を伴う重症のヒステリーが直接描かれている場面のほかに、ヒステリーがあらわれる場面がいくつかある。前者は上記で述べたように実質的な病気としての様子を中心に描かれているが、後者は健三とお住の生活様式や考え方等の食い違いによる葛藤状況においてあらわれる。特に、前者はヒステリーの発作で朦朧状態となったため、健三のなすがままにされているお住が描かれているが、後者ではヒステリーを用いて夫に打ち勝とうとする強気の妻として描かれている。柄谷が「妻君のヒステリーは彼らの不和から生じているにすぎない」<sup>82</sup>と指摘している箇所は、前者のような朦朧状態のヒステリーには当てはまらず、おそらく後者の方に近いと考えられるが、敢えて言うとヒステリーの発作が起きた状態であるとは言いがたい。

健三とお住の日常生活においてヒステリーはどのようにあらわれているのか。まず、次の場面は、鏡子の習慣的な朝寝坊を想起させる場面であると考えられるが、以下のように描かれている。

細君はよく寐る女であつた。朝もことによると健三より遅く起きた。健三を送り出してから又横になる日も少なくはなかつた。斯うして飽く迄眠りを貪ぼらないと、頭が痺れたやうになつて、其日一日何事をしても判然しないといふのが、常に彼女の弁解であつた。健三は或は左右かも知れないと思つたり、又はそんな事があるものかと考へたりした。ことに小言を云つたあとで、寐られるときは、後の方の感じが強く起つた。

「不貞寐をするんだ」

彼は自分の小言が、歇私的里性の細君に対して、何う反応するかを、よく観察してやる代りに、単なる面当のために、斯うした不自然の態度を彼女が彼に示すもの

---

<sup>82</sup> 同前掲注77、50頁。

と解釈して、苦々しい囁きを口の内で洩らす事がよくあつた。

「何故夜早く寐ないんだ」

彼女は宵つ張であつた。健三に斯う云はれる度に、夜は眼が冴えて寐られないから起きてゐのだといふ答弁を屹度した。さうして自分の起きてゐたい時迄は必ず起きて縫物の手を已めなかつた。

健三は斯うした細君の態度を悪んだ。同時に彼女の歇私的里を恐れた。<sup>83</sup>

「よく寐る女」であるお住を健三は理解できない状態である。妻がよく寝ることに対して生活上の不満を持っている健三は、妻が寝るのは「面当」のためだと思い、こうした妻の不自然な態度をも憎んでいる。健三はその都度、小言でも言ってやりたいのだが、控えているように思われる。健三はしばらく妻の蒼白い寝顔を見詰めていたが、ヒステリー性朦朧状態ではなく、ただ寝ていると思ひ、「御住」とも呼ばずに、黙って立ち上る。ここで注目したいのは、ヒステリーの語られ方である。お住のヒステリーはお住自身の立場からは語られておらず、健三の立場に合わせて語られている。特に、お住が「寐る」ことについて様々な「弁解」をしても、健三には単なる面当のためだと解釈され、「苦々しい囁きを口の内で洩らす事がよくあつた」とされているところでは、一種の被害妄想性がうかがわれる。一方で、次の場面では妻の「寐る」ことが不愉快で堪らない健三が描かれているが、これと類似した傾向がみられる。

三番目の子を妊娠している妻はお腹が段々大きくなり、気分も変り易い状態となっている。特に、出産の時期が近づくと、「死んだ健三の兄の細君の事」<sup>84</sup>や「長女を生む時に同じ病で苦しんだ」<sup>85</sup>事が思い出され、「今度はことによると助からないかも知れませんよ」<sup>86</sup>と一種の死の恐怖さえ感じている。そうした妻に対して健三は「それが女の義務なんだから仕方がない」<sup>87</sup>と世間並な返事をするが、自らも「出鱈目に過ぎなかつた」<sup>88</sup>と苦笑いする。おそらく妊娠や出産による身体的かつ精神的な変化は日常生活にも影響を及ぼし、お住のヒステリーを激化する要因になったと考えられるが、そうした妻を慰めることが健三にはできないのである。

---

<sup>83</sup> 同前掲注70、88-89頁。

<sup>84</sup> 同前掲注70、162頁。

<sup>85</sup> 同前掲注70、162頁。

<sup>86</sup> 同前掲注70、161頁。

<sup>87</sup> 同前掲注70、162頁。

<sup>88</sup> 同前掲注70、162頁。

さて、健三も気分が急変することがあったため、時によると、不快そうに「寐てゐる」お住が癪に障って堪らなくなり、わざと「極食に要らざる用を命じて見たり」<sup>89</sup>するのであるが、お住は身重だったのもあったろうが、ちっとも動かずに、「勝手にしろ」<sup>90</sup>という態度をとっていた。それが健三の気を焦り立たせるのを知っていながらも、妻は「魚か蛇のやうに」<sup>91</sup>沈黙を守っているのである。二人の間では沈黙だけが流れている状態であるものの、眼からはお互いを憎んでいることが分かる状態である。

「詰りしぶといのだ」

健三の胸には斯んな言葉が細君の凡ての特色でもあるかのやうに深く刻み付けられた。彼は外の事を丸で忘れて仕舞はければならなかつた。しぶといといふ觀念丈があらゆる注意の焦点になつて来た。彼は余所を真闇にして置いて、出来る丈強烈な憎悪の光を此四字の上に投げ懸けた。細君は又魚か蛇のやうに黙つて其憎悪を受取つた。従つて人目には、細君が何時でも品格のある女として映る代りに、夫は何うしても気違染みた癩癩持として評価されなければならなかつた。

「貴夫がさう邪慳になさると、また歇私的里を起しますよ」

細君の眼からは時々斯んな光が出た。何ういふものか健三は非道くその光を怖れてゐた。同時に劇しくそれを悪んでゐた。我慢な彼は内心に無事を祈りながら、外部では強ひて勝手にしろといふ風を装つた。其強硬な態度のどこかに何時でも仮装に近い弱点があるのを細君は能く承知してゐた。<sup>92</sup>

「夫に打ち勝たうとする」<sup>93</sup>お住は、ねばり強く夫に立ち向かつた。二人は一言も交わさずに、沈黙で一貫していたが、その沈黙の中には二人の憎しみが激しくぶつかり合っていたといえる。お住の眼から「歇私的里」を読み取つた健三は、それを怖れる傍らに、自分の弱点を手に取り、脅かす妻を憎んでいる。沈黙の争いにおけるヒステリーは、朦朧状態のヒステリーが起こつた際に夫に救いを求める弱者の立場であつた妻のお住が、自分のヒステリーを怖れる夫を利用し、夫に打ち勝つための戦略として活用しているように描かれている。そうした妻に対して健三は強硬な態度を取るが、内部では妻の「無事を祈」っていたため、論

---

<sup>89</sup> 同前掲注70、162頁。

<sup>90</sup> 同前掲注70、162頁。

<sup>91</sup> 同前掲注70、162頁。

<sup>92</sup> 同前掲注70、163-164頁。

<sup>93</sup> 同前掲注70、164頁。

争を続けることはできないでいる。

しかし、ここでも妻は「貴夫がさう邪慳になさると、また歇私的里を起しますよ」と実際に発言しているわけではなく、健三が「細君の眼」から読み取ったものに過ぎない。お住は健三と同様に、沈黙で一貫しているだけで、その沈黙から健三自身がヒステリーで夫を脅かし、打ち勝とうとする妻を想像しているのである。健三にとって妻の脅迫の手とされているのは、朦朧状態を伴うヒステリーであって、妻には意図的には起すことができない症状である。例えば、重症化したヒステリーを語る際には「彼女の歇私的里は、自然と軽くなつた」「歇私的里の発作に冒された」「歇私的里の起つた時」「歇私的里を細君に与えた」というふうに語られており、ヒステリーは生じたものであって、妻の意志で起すことはできない、まさに病気としての意味が強く、妻はそうした病気に晒される受け身の立場なのである。その病気から妻を救っているのは当然夫の健三であるとされている。一方で、日常的な生活において妻に対する不満を示す場合や健三自身が不機嫌の時には、ヒステリーは妻が意図的に起こすものであるかのような、一種の被害妄想的な語り方がなされるのである。

『道草』におけるヒステリーには漱石と鏡子の結婚当初から子供の妊娠や流産、さらには、『道草』を執筆している現在に至るまでの生活が反映されており、ヒステリーを媒介にあらわれている夫婦の様相には、過去と現在が混在していると考えられる。ヒステリーがこのように様々なあらわれ方をするがために、論者によってお住を「弱者」と解釈したり、あるいは正反対に夫を脅かす「強気」の妻<sup>94</sup>であると解釈したりすることになるのではないかと考えられる。妻に対する解釈がヒステリーのあらわれ方によって分かれるのはともかくとして、妻のヒステリーが「家庭」の破綻を引き起こすことなく、「家庭」を築き、維持する原動力になっているのは注目に値すると考えられる。

#### 4. 家庭におけるヒステリー

以上のようなヒステリーにまつわる異なる傾向は、『道草』においては愛と憎しみという相反する感情が交じり合っており、お住の朦朧状態のヒステリーを心配して恐れる健三の「愛」が原動力となっているため、二人の間で争いが絶え間なく続いていても、夫婦という関係は崩されずに維持されている。さらに、ヒステリーを媒介に成立す

---

<sup>94</sup> 作者は彼自身の分身である健三よりも、むしろお住の側に勝利をあたえようとしているかに見える。彼にとって、「恐れる」のは常に男であり、「恐れない」のは女であった。そしてこと日常生活に関するかぎり、「恐れない」者は常に勝利者なのだ。

江藤淳「『道草』—日常的な生活と思想—」『漱石作品論集成 第十一巻 道草』桜楓社、1991年6月、23頁(初出は、「三田文学」46巻8号、1956年8月)。

る夫婦の性生活は、子供という結実につながり、父と母という名のもとで、共に子供を守り続けるであろう。

結末においては、健三がついに島田に百円を渡し、「私儀今般貴家御離縁に相成、実父より養育料差出候に就ては、今後とも互に不実不人情に相成ざる様心掛度と存候」<sup>95</sup>と書かれた「書付」をもらうが、その後、健三とお住は以下のような対話を交わしている。

彼女は大事なものでも保存するやうな口振で斯う答へた。健三は彼女の所置を咎めもしない代りに、賞める気にもならなかつた。

「まあ好かつた。あの人だけは是で片が付いて」

細君は安心したと云はぬばかりの表情を見せた。

「何が片付いたつて」

「でも、あゝして証文を取つて置けば、それで大丈夫でせう。もう来る事も出来ないし、来たつて構ひ付けなければ夫迄ちやありませんか」

「そりや今迄だつて同じ事だよ。左右しやうと思へば何時でも出来たんだから」

「だけど、あゝして書いたものを此方の手に入れて置くと大変違ひますわ」

「安心するかね」

「えゝ安心よ。すつかり片付いちやつたんですもの」

「まだ中々片付きやしないよ」

「何うして」

「片付いたのは上部丈ぢやないか。だから御前は形式張つた女だといふんだ」

細君の顔には不審と反抗の色が見えた。

「ぢや何うすれば本当に片付くんです」

「世の中に片付くなんてものは殆んどありやしない。一遍起つた事は何時迄も続くのさ。たゞ色々な形に変わるから他にも自分にも解らなくなる丈の事さ」

健三の口調は吐き出すやうに苦々しかつた。細君は黙つて赤ん坊を抱き上げた。

「おゝ好い子だ好い子だ。御父さまの仰やる事は何だかちつとも分りやしないわね」

細君は斯う云ひ云ひ、幾度か赤い頬に接吻した。<sup>96</sup>

---

<sup>95</sup> 同前掲注70、315頁。

<sup>96</sup> 同前掲注70、316-318頁。

百円の支払いでもらった「書置」では、形式上の関係は片づいても、島田が義父であったことやその家で過ごした日々のこと、さらに、島田が突然現れ、金銭的な問題に遭った現在のこと等の全てを決してなかったことにすることはできない。健三にとっては、すべてのことは自らの意志によるものではなく、「自然」によって形成されるからである。そのため、人の手によって片づけられるような関係というのは存在しないのである。

健三とお住は価値観が合わず、お互いに冷淡な態度をとる時もあるが、それでも夫婦という関係のもとに築き上げられた家族の意味は「色々な形に変るから他にも自分にも解らなくなるだけ」であり、「何時までも続く」のである。健三の話を聞いて「御父さまの仰やる事は何だかちつとも分りやしないわね」とは言っているものの、その後、赤ん坊の「赤い頬に接吻」するお住からは、健三のいう「形の変化」がうかがわれる。お住は妊娠や出産により、死の恐怖に襲われ、ヒステリーを起していたが、今や子供を愛する母の「形」をしている。それは結婚によって担わされた表面的な役割によって作られたものではない。人と人が出会い、夫と妻になり、父と母になること等の全ては、形式的な役割だけで維持できるものではなく、その中で働きかけている力によって定着していくのである。健三とお住の関係においてはヒステリーがその力の役割を果たしているといえる。

『道草』における妻のヒステリーは、婦人病を媒介にあらわれていることや妻のヒステリーを怖れる夫が描かれていることなどからみると、一般的なヒステリーのイメージに符合しているように思われる。しかし、泡鳴の「五部作」における妻のヒステリーのように、夫が家庭を離れる理由にはなっていない。漱石の描く妻のヒステリーは、自分以外は「他人」であると考えている夫が、「家庭」という名のもとで他人である「妻」と生活を続けることを可能とさせている動力として働いている。ヒステリーが出て来る物語が、否定的な結果をもたらしている傾向がある中で、漱石の用いたヒステリーは夫婦にとって肯定的な作用をもたらしているように思われる。

### 第3節 芥川龍之介「二つの手紙」—ドッペルゲンガーとの関係性を中心に—

芥川龍之介「二つの手紙」は1917(大正6)年9月、雑誌「黒潮」第2巻に発表された短編小説である。「二つの手紙」が発表された時期のヒステリー言説は、もはや「幽霊＝神経病」の図式から離れ、実在性に富んだ病気としてのヒステリーが主流であったといえる。こうした中で、芥川の「二つの手紙」においては「ドッペルゲンガー＝ヒステリー」という図式が用いられたのである。「二つの手紙」は警察署長宛てに送られた二通の手紙が何らかの経緯で「予」の手に入り、「ここ」に公開されたという形で書かれている。手紙の書き手は佐々

木という大学教授で、一通目には、世間のうわさとなっている妻の姦通事件はドッペルゲンガーの仕業であるので、世間からの非難を止めてほしいという訴えが書かれている。二通目には、世間の非難に耐えられなかった妻がついに失踪となったが、おそらく自殺したのだとし、警察署長の怠慢や世間の圧迫が妻を死なせたと恨みながら超自然的現象の研究に努めるとの決意を示した内容が書かれている。そして、その決意を冷笑するはずの署長に向けて再び説教を始めるが、その部分は「予」によって不必要とされ、内容は途中で終わっている。

「二つの手紙」を読んでもみれば語り手の佐々木が狂人であることに気づくのは難しくないであろう。それは単に、佐々木が持ち出したドッペルゲンガーという超自然的な現象が現実の知識から見て非現実だと判断されるからではない。手紙の中では妻の不品行についてドッペルゲンガーの仕業だと主張する佐々木の立場と姦通事件と見ている世間の立場が佐々木によって語られ、判断が難しくなっている。さらに、手紙の外側にいるもう一人の語り手の「予」が、佐々木の手紙を途中の部分まで公開した上で、それ以後の部分の公開は不必要だとするような不真面目な態度を取ることで、公開された手紙を読む読者や「二つの手紙」を読む読者に佐々木が狂人であり、手紙の内容は狂人の妄想によるものだという判断を促す効果がもたらされている。つまり、芥川は「二つの手紙」の創作において、佐々木が狂人として読まれるような仕掛けを作っているように思われるが、こうした仕掛けは読者を混乱させ、様々な解釈を可能にしている。例えばドッペルゲンガーを説明しようとして持ち出した妻のヒステリーがかえって妻の不倫を想起させていることやドッペルゲンガーの体験を語ろうとしたのがかえって妻の不倫現場を証明してしまうことになっていることである。このような仕掛けを可能にしているのは妻のヒステリーとドッペルゲンガー現象を関連づけているからであると考えられる。本論では、ドッペルゲンガー発現の一因として挙げられている妻のヒステリーを中心に作品を分析し、作品においてヒステリーがどのような役割を果たしており、どのような意味を持つのかについて考察を行いたい。

## 1. 「二つの手紙」という物語

「二つの手紙」について言及されている先行論では、佐々木の狂気とその表象として用いられているドッペルゲンガーを中心に様々な解釈や分析が行われている。小堀桂一郎は社会的地位のある佐々木がドッペルゲンガーを信じているのは彼の擬制であって、それは職業からくる自負心が妻の不貞を認めるのを妨げたためであると指摘している<sup>97</sup>。石割透はそれに

---

<sup>97</sup> 小堀桂一郎「諸国物語と芥川―「アンドレアス・タマイエルが遺書」と「二つの手紙」―」『国文学 解釈と教材の研究』15(15)、学灯社、1970年、105-111頁。

反論して、不名誉な事実を隠蔽するためにドッペルゲンガーの現象を持ち出したというわけではなく、「妻に対する絶対的ともいえるプラトニックな信頼があり、そうした彼の内なるロマンチズムが、彼にく二重人格という現象を強いてもち出させた」<sup>98</sup>と述べている。

今野喜和人は「二つの手紙」が「分身(double、doppelgaenger)という世界文学の中で出現頻度の高いモチーフを扱った」<sup>99</sup>作品であり、「このモチーフの日本における代表例としてしばしば言及される存在」<sup>100</sup>であるにもかかわらず、「失敗」作の烙印を押されてしまっており、「創作上の必要から、また身体の問題病理学的観察から生まれたドッペルゲンガーへの芥川の持続的な、また並々ならぬ関心を思うとき、本作品の扱いはこれまであまりにも軽すぎたし、本格的な解析の手を待っているように思われてならない」<sup>102</sup>と指摘している。今野は、佐々木が体験したと主張するドッペルゲンガー現象を信じさせるために挙げている幾つかの実例が、イギリスの女性作家キャサリン・クロウの『自然の夜の側面』を典拠としていることを明らかにし、「二つの手紙」で語り手が「開陳しているドッペルゲンガーの説明は、これもまた畢竟「創造的想像力」のテーマに行き着くもの」<sup>103</sup>であり、「二つの手紙」はこうして西洋における想像力をめぐるイマジネールの波及の中に、無視できない一つの位置を占めるようになる」<sup>104</sup>と述べている。実例の中には「ヒステリカルな素質のある女には、殊にかう云ふ奇怪な現象が起り易いのでございます」<sup>105</sup>と妻のヒステリーとドッペルゲンガーの関係性について言及した実例も含まれているが、「夢遊病患者の意志によつて」「現れる」<sup>106</sup>ドッペルゲンガーの発現の一因としてヒステリーが挙げられている。

一柳廣孝は「二つの手紙」が「ドッペルゲンガーと探偵小説との屈折した接触の様態を見いだすことができる」<sup>107</sup>作品であるとし、「探偵小説の定型を踏まえながら、それをずらし、転倒させた探偵小説のパロディーである」<sup>108</sup>と述べている。一柳は今野の先行論を踏まえつつ、「近代スピリチュアリズム＝心霊学が心霊の科学的解明をその目的の一つとしていたよ

---

<sup>98</sup> 石割透「芥川龍之介—中期作品の位相(1)「さまよへる猶太人」「二つの手紙」「或日の大石内蔵之助」をめぐって—」『駒沢短大國文』16、駒澤大学、1986年、25頁。

<sup>99</sup> 今野喜和人「芥川龍之介「二つの手紙」の世界—クロウ夫人『自然の夜の側面』の寄与—」『人文論集』48(2)、静岡大学、1997年、149頁。

<sup>100</sup> 同前掲注99。

<sup>101</sup> 同前掲注99。

<sup>102</sup> 同前掲注99。

<sup>103</sup> 同前掲注99、169頁。

<sup>104</sup> 同前掲注99、169頁。

<sup>105</sup> 芥川龍之介「二つの手紙」『芥川龍之介全集 第二巻』岩波書店、1995年12月、243頁。

<sup>106</sup> 同前掲注105、243頁。

<sup>107</sup> 一柳廣孝「さまよえるドッペルゲンガー—芥川龍之介「二つの手紙」と探偵小説—」『探偵小説と日本近代』吉田司雄編著、青弓社、2004年、119頁。

<sup>108</sup> 同前掲注107、126頁。

うに、クロウの書もまた、そのレベルで一定の科学的地平を有している」<sup>109</sup>とし、「靈術理論におけるヒステリーとは、しばしば特異な精神状態に入ったことを示す指標と考えられた。これらの要素を顧慮すれば、「二つの手紙」発表時に、ヒステリーとドッペルゲンガーをめぐるなんらかの「合理」的な解釈格子が成立した可能性はある」<sup>110</sup>と述べている。

明治初期に「怪異＝病理」という図式がすでに成立していたため、大正期においてはもはや珍しい図式ではないであろう。但し、怪異の位置に分身というドッペルゲンガー現象を用いたことやその現象が妻のヒステリーから起因していると設定したのは、ヒステリーの立場からみると、当時のヒステリーが主に医学的な概念から女性の病として用いられている中で、古めかしい「怪異＝病理」という図式をわざわざ用いたということになる。さて、ドッペルゲンガー現象の根拠として用いられている妻のヒステリーはどのように語られているであろうか。「二つの手紙」に触れながら検討を行いたい。

## 2. 妻のヒステリーとドッペルゲンガー現象

一通目の手紙の中で佐々木は正気であることを信じさせるために、自分自身の個人情報に詳細に記し、身分を明らかにしているが、その情報にはドッペルゲンガー発現の一因として主張することになる妻のヒステリーについて語られている。

私は私自身のドッペルゲンゲルと書きました。が、詳しく云へば、私及私の妻のドッペルゲンゲルと申さなくてはなりません。私は当区——町——丁目——番地居住、佐々木信一郎と申すものでございます。年齢は三十五歳、職業は東京帝国文科大学哲学科卒業後、引続き今日まで、私立——大学の倫理及英語の教師を致して居ります。妻ふさ子は、丁度四年以前に、私と結婚致しました。当年二十七歳になりますが、子供はまだ一人もございません。こゝで私が特に閣下の御注意を促したいのは、妻にヒステリカルな素質があると云ふ事でございます。これは結婚前後が最も甚しく、一時は私とさへ殆ど語を交へない程、憂鬱になつた事もございましたが、近年は発作も極めて稀になり、氣象も以前に比べれば、余程快活になつて参りました。所が、昨年の秋から又精神に何か動揺が起つたらしく、この頃では何かと異常な言動を發して、私を窘める事も少くはございません。唯、私が何故妻のヒステリイを力説するか、それはこの奇怪な現象に対する私自身の説明と、ある関係があるから

<sup>109</sup> 同前掲注107、123頁。

<sup>110</sup> 同前掲注107、124頁。

で、その説明については、いづれ後で詳しく申上る事に致しませう。<sup>111</sup>

8歳という年齢差や結婚して4年目になるものの、二人の間に子供がいないという情報から夫婦仲が悪いということを感じさせているように思われる。さらに、結婚前後にヒステリー症状が最も激しかったことは、ふさ子が佐々木との結婚を望んでいなかったことや結婚の前からすでに恋人がいたことの可能性を示唆しているように思われる。このような読解が可能なのは、性的な欲求不満を原因とするヒステリーのイメージだけではなく、妻に対する客観的な事実に対して佐々木の立場と世間の立場とが対立して解釈されているからであろう。ドッペルゲンガー発現の一因としてヒステリーがあげられたことによって、ドッペルゲンガーと対をなしている姦通事件では、性的な欲求不満を満たすために、不倫をしたとみることが可能になっている。このような構造とともに、ドッペルゲンガーを証明しようとしてあげている佐々木自身の事例において不自然な記述があり、それによってドッペルゲンガーに対する信憑性が低くなったことがヒステリーと姦通事件との関係性を強調させる結果となっていると考えられる。

## 2. 1. 第一の出現

「第一の出現」はヒステリーの発症で憂鬱になった妻のために、友人夫婦に譲ってもらった切符で有楽座の慈善演芸会に参加した日のことである。「昨年十一月七日、時刻は略午後九時と九時三十分との間」<sup>112</sup>と日付や時刻が明記されている。演芸会に参加していたことを証明するために、演芸会で行われていたプログラムについて「又実際音曲にも踊にも興味のない私は、云はゞ妻の為に行つたやうなものでございますから、プログラムの大半は徒に私の退屈を増させるばかりでございました。（中略）唯、私の記憶によりますと、仲入りの前は、寛永御前仕合と申す講談でございました」<sup>113</sup>とその現場でいなければ知ることのできない演芸会の内容について説明している。

その後、佐々木が妻を一人残してトイレに行き、そのトイレから戻ってくる時、廊下で妻の傍にいるドッペルゲンガーを目撃する。第二の私は佐々木を後ろにして立っていたため、顔は見えなかったが、佐々木は自分と同じ服装で同じ姿勢を装っていることから「恐らくそ

---

<sup>111</sup> 同前掲注105、233頁。

<sup>112</sup> 同前掲注105、234頁。

<sup>113</sup> 同前掲注105、234頁。

の顔も亦、私と同じだった事でございませう」<sup>114</sup>と推察している。しかし、第二の私が幻影ではなく、妻の情人であったのであれば、その廊下には多くの電燈が昼のような光を放っており、大勢の人が通っていたため、妻の情人を目撃した人は数多くいるはずである。それがおそらく姦通事件のうわさの始まりといえる。

第二の私は幸いにも妻の視線と佐々木の視線が合った後、視界から消え去ったとあるが、不倫の相手や妻が佐々木に気づいて逃げ去ったと考えることもできよう。また、第二の私を見た佐々木は「私の錯愕は、その為に、一層驚くべきものになりました。私の恐怖は、その為に、一層恐るべきものになりました」<sup>115</sup>と語っているが、妻の情人を初めて見た時の感情として解釈しても無難であろう。佐々木は自分が見たドッペルゲンガーを「妻に打明けようかどうかと迷」<sup>116</sup>ったが、打明けられず「口を嚙まうと決心」<sup>117</sup>する。この「決心」はドッペルゲンガーを見たという事を打明けないということになるが、妻の不倫(=秘密)を打ち明けられないというようにも読まれる。佐々木がその秘密を打ち明けず、口を嚙まうと決心できたのは、自分の妻に対する愛だけでなく、「妻が私を愛してゐなかつたなら」<sup>118</sup>と妻の自分に対する愛への信頼をも含まれている。つまり、佐々木は妻の不倫を初めて目撃した時、妻の愛を信頼し、「すべてを幻覚と云ふ名で片づけて」<sup>119</sup>、妻の不倫を許してあげようという「決心」をしたのだが、「恰も私のその油断を戒めでもするやうに」<sup>120</sup>、第二の私が再び目の前に現われる。

## 2. 2. 第二の出現

「第二の出現」は翌年1月17日の木曜日、正午ごろである。その日は佐々木の登校日で午後の授業はなかったが、突然旧友が訪ねてきたため、一緒に駿河台下の或るカフェーへ向かう。その電車から降りる時に、大時計は12時15分を指していたが、ちょうどその時に再びドッペルゲンガーが現われる。今回は第二の私だけではなく第二の妻と見られるドッペルゲンガーも現われるが、妻は黒いコートに、焦茶の絹の襟巻をしており、第二の私は当時自分と同じ服装の鼠色のオーバーコートに、黒のソフトをかぶっていると詳しく説明されている。佐々木は二人を目撃する前に、「第一の出現」の時と同じく衝撃を受けて茫然とした状態で、

---

<sup>114</sup> 同前掲注105、235頁。

<sup>115</sup> 同前掲注105、235頁。

<sup>116</sup> 同前掲注105、235頁。

<sup>117</sup> 同前掲注105、236頁。

<sup>118</sup> 同前掲注105、236頁。

<sup>119</sup> 同前掲注105、237頁。

<sup>120</sup> 同前掲注105、237頁。

恐怖と不安におそわれたとし、それはドッペルゲンガーが現われる「前兆」と説明しているが、おそらく二人が大時計の近くにいたことを考えれば、その「前兆」は二人を目撃していたために起こったとみることができる。

妻の眼が第二の私の顔を甘えるように見ているのを目撃した佐々木は「如何に恐怖に充ちた眼で、眺めましたらう。如何に憎悪に燃えた心で、眺めましたらう」<sup>121</sup>と多少感情的に記しているが、妻の不品行を疑わないと訴えた佐々木の立場としては、実際の妻であったとしたら妻は第二の私を佐々木自身と思っていたはずであり、妻ではなく第二の妻であったとしても、幻影にすぎないはずであったにもかかわらず、愛に満ちている自分自身と妻の姿に恐怖と憎悪を感じている。二人の幻影が世間のうわさを生むからとして憎むということも考えられるが、佐々木は当時の第二の私の位置を「再現するだけの勇気がない」<sup>122</sup>と言っていることから、二人の仲の好い姿に対する感情だったといえよう。その時の第二の私を再現できない理由は、権威のある自分が他人の目を意識してできないというように読まれるが、一方では夫婦仲が悪く、妻から甘えてもらったことがなかったために再現ができないというようにも読まれる。佐々木は「思はず、友人の肘をとらへたなり」<sup>123</sup>、二人の跡を追おうとしたが、ちょうど外濠線の電車が目の前を塞いだため、追えなくなったことに対して「神明の冥助」<sup>124</sup>のことだという。憎悪に狂い、二人の幻影を追おうとした佐々木としては口惜しいことであり、二人の幻影には「神明の冥助」のことであるといえよう。当時同行していた佐々木の友人は佐々木と同じ現場を目撃したことができたと考えられるが、その友人によって狂人とうわさを立てられ、「第二の出現」の信憑性が疑われる。

佐々木はドッペルゲンガーが現われた同じ時間帯の正午前後に妻が外出していなかったことを証明するために「その前日から、頭痛がすると申して、兎角ふさぎ勝ちであつた」<sup>125</sup>とヒステリーの症状をあげ、ヒステリー発症とドッペルゲンガー発現の関係性を想起させているように思われる。しかし、それに続けて「妻が私に外出の有無を問はれて、眼を大きくしながら、「いゝえ」と云つた顔」<sup>126</sup>は「世間の云ふやうに、妻が私を欺いてゐるのなら、あゝ云ふ、子供のやうな無邪気な顔は、決して出来るものではございません」<sup>127</sup>と妻に対する信頼を根拠に証明しようとする非論理的な態度は読者に疑念を持たせている。また、妻の他に

---

<sup>121</sup> 同前掲注105、238頁。

<sup>122</sup> 同前掲注105、238頁。

<sup>123</sup> 同前掲注105、238頁。

<sup>124</sup> 同前掲注105、238頁。

<sup>125</sup> 同前掲注105、239頁。

<sup>126</sup> 同前掲注105、239頁。

<sup>127</sup> 同前掲注105、239頁。

召使っている下女にも確認したとされているものの、下女は「家」において権力者である妻によって動かされる可能性がある。さらにそれまでドッペルゲンガーを信じさせるために「権威」を強調してきた佐々木が「権威」のない「下女」の証言をそのまま受け入れたことには違和感があるだろう。佐々木の妻に対する信頼はドッペルゲンガーを証明することに当って、佐々木に非論理的な態度を取らせることで、読者に疑念を持たせている。「第一の出現」と「第二の出現」では、妻にヒステリー症状があつて、その後にドッペルゲンガーが現われている。つまり、性的な欲求不満によってヒステリーが発症し、欲求を満たすために不倫をしたということになるため、ドッペルゲンガーが現われるのはヒステリー発症後になる。しかし、「第三の出現」においては、妻ではなく、佐々木が神経症に悩まされるとされている。

### 2. 3. 第三の出現

「第三の出現」は手紙を書く一週間前である2月13日の火曜日、午後7時ごろである。佐々木は宿直を予定していたが、放課後、激しい胃痙攣に悩まされ、校医に診てもらおうと帰宅するようにと忠告されたため、車で帰ることになった。当日は午後から降りはじめた雨が家に着いた時は雨に風が加わり、たたきつけるような吹き降りであった。佐々木は門の前で車賃を払い、玄関まで駆けて行った。玄関はいつもの通り、内から釘がさしてあつたが、外から釘を抜くことができる佐々木はいつもと違って、自ら開けて中に入る。当然、家の中にいる人は気づかないはずであるのに、その理由は大方雨の音にまぎれ、開く音が聞こえなかったためであるという。佐々木は茶の間へ行く間に、習慣通りに書斎に手提鞆を置こうとして行ったが、そこでドッペルゲンガーを目にする。

書斎の風景は普段と変わらなかったが、書斎に女と男がいるとはあまりにも意外な光景であった。佐々木はその時の風景について詳細に説明しながらも、「咫尺の間に見た」<sup>128</sup>女と男の顔は「鋭い明暗を作つて」<sup>129</sup>いたとして説明を避けているような印象を与えている。午後七時前後という時間帯や激しい雨が降っていたことを考えれば北向きの窓からくる冷たい光が、二人の「顔の前にある、黄いろい絹の笠をかけた電燈」<sup>130</sup>より明るいとは考えられず、部屋の中の二人の顔が全く見えない状態であつたとは言いがたい。それに比べ、二人が読ん

---

<sup>128</sup> 同前掲注105、241頁。

<sup>129</sup> 同前掲注105、241頁。

<sup>130</sup> 同前掲注105、241頁。

でいたとされている「奇怪な現象を記録して置いた、私の日記」<sup>131</sup>は「机の上に開いてある本の形」<sup>132</sup>を見ただけで「すぐにそれがわかりました」<sup>133</sup>と判明している。ほぼ同じ位置にいた二人の男女はぼやけて見えて、本の形をしているだけのものが「日記」であることはすぐに分かったというわけである。

ドッペルゲンガーを認める基準として最も重要なのは、同じ人物であるかを識別できる顔である。佐々木は手紙においてドッペルゲンガーが自分と同じ服装であったと確認してあげているものの、顔についてはうやむやにしている。ドッペルゲンガーの顔が佐々木自身と妻ふさ子の顔と同じであったと言及するだけで、ドッペルゲンガーに対する信憑性を高めることができるにもかかわらず、佐々木はなかなかそう言ってくれない。ドッペルゲンガーの顔について説明する際に顔は見えていないが、それは確かにドッペルゲンガーだと断言するというような非論理的な態度を示すことで、当初妻の無実を晴らそうとして送った手紙の目的とは正反対の結果を導いている。佐々木はドッペルゲンガーを見た衝撃で失神してしまうが、その直後の様子について以下のように記している。

私はこの光景を一瞥すると同時に、私自身にもわからない叫び声が、自ら私の唇を衝いて出たやうな記憶がございます。又、その叫び声につれて、二人の幻影が同時に私の方を見たやうな記憶もございます。もし彼等が幻影でなかつたなら、私はその一人たる妻からでも、当時の私の容子を話して貰ふ事が出来たでございませう。しかし勿論それは不可能な事でございます。唯、確かに覚えてゐるのは、その時私のはげしい眩暈を感じたと云ふ事より外に、全く何もございませぬ。私はその儘、そこに倒れて、失神してしまつたのでございます。その物音に驚いて、妻が茶の間から駆けつけて来た時には、あの呪ふべき幻影ももう消えてゐたのでございませう。妻は私をその書齋へ寝かして、早速氷嚢を額へのせてくれました。<sup>134</sup>

上記の記述では、いくつかの疑問がある。まず、佐々木が失神し、倒れた時の物音を聞いて妻が茶の間から駆けつけて来たとあるが、佐々木はそれを確認できない。茶の間に行く途中で書齋に寄つたため、妻がそこにいたとはっきりと言うことはできないであろう。さらに、

---

<sup>131</sup> 同前掲注105、241頁。

<sup>132</sup> 同前掲注105、241頁。

<sup>133</sup> 同前掲注105、241頁。

<sup>134</sup> 同前掲注105、241-242頁。

佐々木は失神後の風景を直接見たかのように「妻は私をその書齋へ寝かして、早速氷嚢を額へのせてくれました」と言っているが、書齋にいたことや氷嚢が額にのってあることは、意識が戻った後でも確認できることであるが、「早速」に行動したというのは佐々木にはわかるはずがない。

佐々木が目撃したのがドッペルゲンガーでなければ、妻とその情人は佐々木の日記を読んでいたことになり、佐々木が姦通事件をドッペルゲンガーの仕業と認識していることを分かることになる。佐々木にはドッペルゲンガーの「一人たる妻から」「当時の私の容子を話して貰ふ事」は「不可能」であると思われていたが、妻は佐々木が失神した理由を分かっているかのように、佐々木が目覚めると「突然声を立てて泣き出し、自分の貞操を疑っていると佐々木を責める。そのため、佐々木は妻に自分の異常な言動について説明せざるを得なくなり、ついにドッペルゲンガーについて打ち明けることになる。佐々木から「ドッペルゲンゲルの存在が可能かと云ふ事」<sup>135</sup>を聞いた妻は「やつと得心が行」<sup>136</sup>き、「唯あなたがお気の毒ね」<sup>137</sup>と云っては「ぢつと私の顔を見つめたきり、涙を乾かし」<sup>138</sup>たという。「第三の出現」の場合は自宅で起こったとされているため、佐々木の他に目撃者がいない状態であるが、失神後の風景が佐々木以外の第三者に記されているような点からみると、佐々木の妄想にすぎないという解釈もできると考えられる。佐々木が体験したとして挙げられている三つの事例には、不自然さや違和感がうかがえるが、それに気づいた読者は、佐々木は狂人であり、姦通事件は明らかなものとして理解するであろう。

### 3. ヒステリーとドッペルゲンガー、そして死

3月上旬に送られた二通目の手紙の全文は、以下のようである。

——警察署長閣下、

閣下の怠慢は、私たち夫妻の上に、最後の不幸を齎しました。私の妻は、昨日突然失踪したがり、未になつたかわかりません。私は危みます。妻は世間の圧迫に耐へ兼ねて、自殺したのではごぞいますまいか。

世間は遂に、無辜の人を殺しました。さうして閣下自身も、その悪む可き幫助者

---

<sup>135</sup> 同前掲注105。

<sup>136</sup> 同前掲注105。

<sup>137</sup> 同前掲注105。

<sup>138</sup> 同前掲注105、241頁。

の一人になられたのでございます。

私は今日限り、当区に居住する事を止めるつもりでございます。無為無能なる閣下の警察の下に、この上どうして安んじてゐる事が出来ませう。

閣下、私は一昨日、学校も辞職しました。今後の私は、全力を挙げて、超自然的現象の研究に従事するつもりでございます。閣下は恐らく、一般世人と同様、私のこの計画を冷笑なさる事とせう。しかし警察署長の身を以て、超自然的なる一切を否定するのは、恥すべき事ではございませんまいか。

閣下はまず、人間が如何に知る所の少ないかを御考へになるべきとせう。たとへば、閣下の使用せられる刑事の中にさへ、閣下の夢にも御存知にならない伝染病を持つてゐるものが、大勢居ります。殊にそれが、接吻によつて、迅速に伝染すると云ふ事実は、私以外に殆ど一人も知つてゐるものはございません。この例は、優に閣下の傲慢なる世界観を破壊するに足りませう。……

× × ×

それから、先は、殆ど意味をなさない、哲学じみた事が、長々と書いてある。これは不必要だから、ここには省く事にした。<sup>139</sup>

手紙は途中で「予」によって略されているため、実際にどのような内容がどれぐらい書かれているのかは分からないが、おそらく「閣下の傲慢なる世界観を破壊する」という目的に合わせて書かれているはずであろう。手紙を書いた日の前日、妻は失踪となり、妻が失踪となった日の前日は佐々木が学校を辞職している。つまり、佐々木が学校を辞めた翌日、妻は失踪したことになる。佐々木は妻が「世間の圧迫に耐へ兼ねて、自殺した」と言っているが、手紙において不自然さや違和感に気づいている読者は、大胆に不倫をしてきた妻が自殺をしたとは考えられず、情人と逃げたと推察することができるであろう。妻が失踪した日は、佐々木が辞職した翌日で、おそらく佐々木は在宅していた可能性があると考えられるが、妻がいなくなったことについては一通目の手紙のように詳しく記していない。さらに、警察署長宛ての手紙であるにもかかわらず、失踪した妻に対する捜査を依頼もせず、自殺したと自ら妻の失踪事件を終結させているように思われるが、それまで最愛の妻のために世間と闘っ

---

<sup>139</sup> 同前掲注105、246-247頁。

てきた夫佐々木の立場としては不自然である。

佐々木はドッペルゲンガーの体験談を記述する前に、ドッペルゲンガーに対する信憑性を高めるためにいくつかの実例を挙げているが、その中にはドッペルゲンガーと死について言及されている実例も含まれている。

ベツカアはある夜五六人の友人と、神学上の議論をして、引用書が必要になったものでございますから、それをとりに独りで自分の書斎へ参りました。すると、彼以外の彼自身が、いつも彼のかける椅子に腰をかけて、何か本を読んでゐるではございませんか。ベツカアは驚きながら、その人物の肩ごしに、読んでゐる本を一瞥致しました。本はバイブルで、その人物の右手の指は「爾の墓を用意せよ。爾は死すべければなり」と云ふ章を指さして居ります。ベツカアは友人のゐる部屋へ帰つて来て、一同に自分の死の近づいた事を話しました。さうして、その語通り、翌日の午後六時に、静に息をひきとりました。<sup>140</sup>

数学の教授であるベツカアの実例は佐々木が体験したとして挙げられている「第三の出現」の実例と類似しているように思われるが、「第三の出現」においては妻のふさ子ではなく、佐々木がベツカアと同様に書斎でドッペルゲンガーを見ている。ベツカアの実例通りであれば、死ぬことになるのは佐々木であるはずだが、佐々木は死なない。ベツカアの例の通りに佐々木が死んでいれば、おそらく佐々木の主張するドッペルゲンガー現象はある程度信頼性を持つことができたであろう。

佐々木は「第一の出現」以来、「一種の不安に襲はれはじめました。それは前に掲げました実例通り、ドッペルゲンゲルの出現は、屢々当事者の死を予告するからでございます。しかし、その不安の中にも、一月ばかりの日数は、何事もなく過ぎてしまひました」<sup>141</sup>と、「第二の出現」について記述する前にベツカアの実例について言及し、死について想起させようとするかのように書かれている。ベツカアの実例と類似している「第三の出現」では体験を詳述した後、妻のヒステリーに関連して以下のように記している。

妻のやうにヒステリカルな素質のある女には、殊にかう云ふ奇怪な現象が起り易いのでございます。その例もやはり、記録に乏しくはございません。例へば著名なソ

---

<sup>140</sup> 同前掲注105、231頁。

<sup>141</sup> 同前掲注105、237頁。

ムナンビユウルのAuguste Mullerなどは、屢々その二重人格を示したと云ふ事です。但さう云ふ場合には、その夢遊病患者の意志によつて、ドツペルゲンゲルが現れるのでございますから、その意志が少しもない妻の場合には、当てはまらないと云ふ非難もございませう。(中略) フランツ・フォン・バアデルがDr. Wernerに与えまして手紙によりますと、エツカルツハウズンは、死ぬ少し前に、自分は他の人間の二重人格を現す能力を持つてゐると、公言したさうでございます。して見ますれば、第二の疑問は、第一の疑問と同じく、妻がそれを意志したかどうかと云ふ事になつてしまふ訳でございませう。所で、意志の有無と申す事は、存外不確なものでございますまいか。成程、妻はドツペルゲンゲルを現さうとは、意志しなかつたのに相違ございませぬ。しかし、私の事は始終念頭にあつたでございませう。あるいは私とどこかへーしょに行く事を、望んで居つたかも知れません。これが妻のやうな素質を持つてゐるものに、ドツペルゲンゲルの出現を意志したと、同じやうな結果を齎すと云ふ事は、考へられない事とございませうか。少くとも私はさうありさうな事だと存じます。<sup>142</sup>

夢遊病患者に関する例では、当事者の意志によつてドツペルゲンゲルが現われるとされている。佐々木はドツペルゲンゲルについて「意志が少しもない妻の場合には、当てはまらなく、もし、意志があつて妻のドツペルゲンゲルが現われたとしても第二の私については説明ができないと指摘している。この疑問点についてエツカルツハウズンの例を挙げ、「死ぬ少し前に、自分は他の人間の二重人格を現す能力を持つてゐると、公言した」とし、妻がドツペルゲンゲルを現わそうと意志はしなかつたものの、佐々木自身のことを始終念頭に置いていたため、第二の私が現われたと説明している。ベツカアの例では、ドツペルゲンゲルは当事者の死を予告するとされていたが、エツカルツハウズンの例では死期が近い人はドツペルゲンゲルを現わす能力を持っているとされている。書齋でドツペルゲンゲルを見たベツカアは死に、佐々木は死ななかつた理由はヒステリカルな素質を持っている妻がドツペルゲンゲルを現わしたためである。つまり、第一の私と第二の妻を佐々木が見たとしても、死ぬことになるのはドツペルゲンゲルを発現させたヒステリーの妻ふさ子である。ふさ子はドツペルゲンゲルを見ていなかったものの、佐々木に見せたことになるので、どうやら死ぬことになる。

---

<sup>142</sup> 同前掲注105、243-244頁。

二通目の手紙において、佐々木が妻の失踪を自殺したと見ているのも、ドッペルゲンガーが死を想起させたからだと考えられるが、ここではドッペルゲンガーが現われたためではなく、「世間の圧迫に耐へ兼ねて」自殺したとされている。一通目の手紙において妻の姦通事件について世間がどのように話しているのかについて触れておいたのに対し、二通目の手紙においては妻が失踪または自殺したことについて世間の立場が分かるような記述が見られないため、実際に妻がどのような状態であるのかが分かるような記述は佐々木の妄想した記述しかないものの、妻が現在不在であることは確かなものになっている。

佐々木は現在住んでいるところから引っ越し、超自然的現象の研究に努める計画を立てているため、手紙では実際の妻の不在に対する真相は明らかになっていない状態で終わっている。一通目では、佐々木が最愛の妻の潔白を晴らすために狂人扱いにされながらも、ドッペルゲンガーを主張していたわけだが、二通目においては、最愛の妻がたった一日不在しているだけで失踪したとし、その失踪はおそらく自殺したためだと思っていることに違和感はあるが、ドッペルゲンガーを信じている佐々木にとって死の形はどうかであれ、妻の死による不在はすでに予測可能なことであり、それはドッペルゲンガーが現われた結果だと考えられているであろう。先行研究では、最愛の妻が不倫したことを信じるができなかった佐々木がドッペルゲンガーを妄想したと解釈し、ヒステリーは妻の姦通事件を裏付ける根拠としてみている。本研究では、佐々木がヒステリーをどのように考え、ドッペルゲンガーとどのように関連づけているのかについて分析し、佐々木の妄想の形成過程について考察した。ドッペルゲンガーは妻のヒステリー発症後に現われたとされている点やヒステリカルな素質を持っている妻によって、佐々木自身のドッペルゲンガーをも現してしまったとされている点から、ドッペルゲンガーという妄想自体を可能にしているのは妻のヒステリーであると佐々木は考えているということが分かった。

以上のように「二つの手紙」におけるヒステリーについて検討してみた。佐々木が警察署長宛てに送った手紙の内容で中核をなしているのは、妻の姦通事件であり、その事件の真相にドッペルゲンガーという怪異現象が関わっているという佐々木の主張である。ヒステリーはドッペルゲンガー現象を裏づける根拠として用いられている一方で、欲求不満を原因とするヒステリーとしても読み取られ、姦通事件を裏づける根拠としても働いている。ヒステリーを媒介にドッペルゲンガー現象と姦通事件とが対立している中で、佐々木がドッペルゲンガーを主張するために挙げている佐々木自身の事例に不自然さや違和感がうかがわれ、佐々木の主張は信憑性が損なわれてしまう。それによってドッペルゲンガー現象は佐々木の妄想であり、佐々木は狂人であると判断することが可能となっている。佐々木の主張するドッペ

ルゲンガー現象や姦通事件、さらには妻の失踪がヒステリーがなければ成り立たない仕組みとなっており、ヒステリーは「二つの手紙」という物語において欠かせない要素であると考えられる。

#### 第4節 広津和郎『神経病時代』—「性格破産者」との相関関係を中心に—

『神経病時代』は1917(大正6)年10月「中央公論」に発表された広津和郎の代表作である。『神経病時代』というタイトルや主人公定吉を媒介にして描かれている性格破産者という人物像はチェーホフの『決闘』『イワーノフ』からの影響であると言われているが、特に『決闘』と『神経病時代』においては類似している箇所が伺えると指摘されている。当時の翻訳事情から『神経病時代』の執筆までに「チェーホフのロシア人観を色濃く反映した後期の作品」<sup>143</sup>の中で、「「性格破産」という一般的テーマにとどまらず、広津の苦悩と焦燥の最大の源であった家庭問題ともからんで、最も注目されるのが『決闘』である」<sup>144</sup>と指摘されている。

『決闘』の影響については早くから西垣勤によって指摘されているが、「神経病時代」という言葉がラエーフスキーによって言及されており、二つの作品の作中人物たちが、主人公を含め、相川とフォンのような人物にも似通っていること、相川の発言の場面が類似していることが挙げられている。渡辺聡子は西垣勤の指摘を踏まえつつ、広津が読んだとみられる『決闘』は小山内薫が訳したもので、1909(明治42)年11月8日から1910(明治43)年1月30日にかけて『読売新聞』に連載されたが、西垣が指摘したところの「神経病時代」という言葉は「神経過敏時代」と訳されていると述べている。しかしながら、「「神経病時代」と「神経過敏時代」の類似は、広津がここから題名をとった可能性をかなり大きいものとして示すに充分だろう」<sup>145</sup>と述べている。『神経病時代』というタイトルをとったとみるのは、チェーホフに感銘した広津であるから、当然のようにも考えられる。

しかし、一方では「神経病」という訳語が明治期にすでに流行していたこと、さらに『決闘』が連載された明治末期においては神経病者が急増していたこと、それによって明治初期の流行語「神経病」が明治末期から大正期にかけては「神経衰弱」と「ヒステリー」とに二分化され、再びブームになっていたという、当時の日本の国内状況の影響もあったとみるこ

<sup>143</sup> 渡辺聡子「広津和郎『神経病時代』の誕生とチェーホフの『決闘』」『ロシア・ソビエト研究』15、1989年、71頁。

<sup>144</sup> 同前掲注143。

<sup>145</sup> 同前掲注143、76頁。

とができよう。そうした社会的な状況下に、男性の間では煩悶、苦悩、憂鬱といった形で「神経衰弱」が流行病のように広がっており、多くの女性はヒステリーとされていたといえる。特に、『神経病時代』が発表された大正期においては、フロイトの説が紹介されるなど、ヒステリーと性欲とが関連づけられ、欲求不満が病因の一つとして挙げられていた時期である。

『神経病時代』では主人公定吉が、『決闘』では主人公ラエーフスキーが同じく性格破産者として描かれているが、弱い性格のために直面せざるを得ない様々な問題によって定吉は「憂鬱」となり、ラエーフスキーは「ヒステリー」となっている点で相違している。さらに、ヒステリーは『決闘』において性格破産者の神経病として用いられているが、『神経病時代』においては妻よし子の神経病として用いられている。つまり、両作品には性格破産者とヒステリーが同じく描かれているが、ヒステリーとされている対象は異なっている。本論では、その相違点に注目し、両作品においてヒステリーがどのように描かれており、性格破産者とどのように関わっているのかについて探してみたい。

## 1. 広津和郎と「性格破産者」たる者

評論家として知られていた広津は『神経病時代』を発表し、文壇にデビューしたのだが、「「神経病時代」の不満足から生れた「二人の不幸者」」においてこの作品を失敗作であると自己評価をくだしている。永吉和隆は広津の自己評価について「同時代評を見るとこうした自己評価は主観的でも謙虚さでもなかった」<sup>146</sup>といい、「主人公への集中的な感情移入、類型的な人物造形、抽象的な時代描写といった観念性は、広津が「粗雑」になった原因として挙げる紙数や時間的制約の問題だけに帰することはできない」<sup>147</sup>と指摘している。一方、新見満雄は「広津がどのような自己評価をくだそうとも文学史的に見れば作家広津の文壇的処女作であり、それにふさわしい出来ばえであることは間違いない。何故ならば、この作品が広津の生活史につちかわれた思想的蓄積、人間洞察の鋭さ、歴史感覚の豊かさとならないまぜになって多彩な作品世界を構成しているからなのである」<sup>148</sup>と述べている。

『神経病時代』は「中途半端な、方々に空き間のあるようなものが出来上ってしまった」<sup>149</sup>という意味では完成度の低い、作家広津のデビュー作ではあるが、人間広津の世界観や人

<sup>146</sup> 永吉和隆「「性格破産者」批判における「社会」表象について—広津和郎『神経病時代』—」『国文学研究』169、2013年3月、49頁。

<sup>147</sup> 同前掲注146。

<sup>148</sup> 新見満雄「「神経病時代」論—広津和郎の作家的出発—」『日本文学』24(9)、1975年、24頁。

<sup>149</sup> 広津和郎「「神経病時代」の不満足から生れた「二人の不幸者」」『廣津和郎全集 第十三巻』

間観を反映し、社会問題を鋭く批判しようとした作品であると考えられる。広津は自身自身を含む知識青年の弱い性格から、いわゆる性格破産者という人物像を描こうとしたといえる。山田昭夫は『神経病時代』において描かれている性格破産者の問題は広津の作品における第一主題であるとし、「性格破産者の発生的根拠はどこにあったか、(中略)世紀末的人間像という言葉があるが、この問題は、何といたっても〈世紀末〉という文化現象の日本的特徴として顧みる必要がある」<sup>150</sup>と指摘している。世紀末的文化現象については「自然科学の急速・複雑な発展がもたらした近代生活における機械文明・物質主義によって人間性が痛めつけられ、不健全な享楽や逃避によってますます神経衰弱的状态においこまれていった世界的頹廢現象」<sup>151</sup>であると説明を加えているが、このような世紀末的文化現象は「近代日本の大正期の文化現象にも、多かれ少なかれ認められる」<sup>152</sup>と述べている。

広津の性格破産者は世紀末的文化現象から生まれた人物像であり、『神経病時代』においては大正期という近代社会を生きる性格破産者の苦悩や煩悶を象徴するものとして憂鬱という「神経病」が用いられているといえる。性格破産者という言葉は、広津が訳した『接吻外八篇』(1916)の序文に収録された「チェエホフの強み」<sup>153</sup>の中で以下のように登場している。

チェエホフ程彼の住んでいた当時の露西亜を根本から理解した作家はなかった。そして彼が当時の到底救う事の出来ない露西亜の消極的廢滅の病原菌として発見したものは、社会状態の不幸と云う事でもなければ、政府の圧迫と云う事でもなく、もっと根本的な、人間の性格の廢滅と云う事であった。彼は或人から、「現代露西亜が最も要求すべきものは何か？」と訊ねられた時、その間に直接には答えずに、「現代露西亜の最大不幸は性格の破産だ！」と云った。性格の破産！これはチェエホフの見た当時の露西亜の墮落の病原菌だったのである。<sup>154</sup>

「露西亜の墮落の病原菌」は「性格の破産」として日本に流入したといえるが、渡辺聡子

---

中央公論社、1974年11月、45頁。

<sup>150</sup> 山田昭夫「広津和郎論—第一主題の作品について—」『日本文学研究資料叢書 私小説』有精堂、1983年5月、22頁。

<sup>151</sup> 同前掲注150。

<sup>152</sup> 同前掲注150。

<sup>153</sup> 橋本迪夫によると「チェエホフの強み」は1916(大正5)年の3月号『新公論』に発表された「チェエホフ小論」を改作したものであるとされている。

広津和郎『廣津和郎全集 第八卷』中央公論社、1974年11月、541頁。

<sup>154</sup> 広津和郎「チェエホフの強み」『廣津和郎全集 第八卷』中央公論社、1974年11月、73頁。

は「そもそもこの言葉自体はチェーホフからとったものだ」<sup>155</sup>が、「チェーホフの側から調べてみると、そのものずばりの言葉はないものの、広津の言う「性格破産者」のイメージによく符合する発言がある」<sup>156</sup>ものとしてスヴォーリンに宛てた手紙を指摘している。「チェーホフの自作『イワーノフ』について解説しながら非常に熱っぽくロシア人論を展開した」<sup>157</sup>長文の手紙にはイワーノフのような人たちは問題の解決力がないため、その問題が重なり、疲れ果ててしまい、ついに自分を見失ってしまうとされている。さらに「チェーホフは、ロシア人が学校を出るとすぐ、自分の手に余る大きな思想や理想的事業にとりかかり、過度に熱中する結果、三〇や三五歳という若さでもう疲れ果て、気力を失い、何もかも否定し始めるという「過度の興奮」と「早すぎる疲労」を、現代ロシアの問題としている」<sup>158</sup>と述べている。

以上のように性格破産者はチェーホフからの影響であると考えられるが、『神経病時代』の創作において直接影響があったといえるのは性格破産者の人物が描かれている『決闘』ではないかと考えられる。『神経病時代』の定吉には『決闘』の主人公「ラエフスキーが色濃く投影して」<sup>159</sup>おり、定吉やラエフスキーは物事に対して意見というものを持たない、理想を抱いておらず、人生に対して堅固した主義を持っていない弱い性格の所有者として描かれている。先述したように、両作品において性格破産者という人物像は類似しているものの、両作品において同様に用いられているヒステリーはラエフスキーと定吉の妻よし子の神経病となっている。まずは『決闘』においてヒステリーがどのように描かれているのかについて検討してみたい。

## 2. 『決闘』における「性格破産者」とヒステリー

チェーホフ『決闘』の主人公ラエフスキーは人妻のナジェージュダと愛の逃避行を執行する。しかし、ナジェージュダと一緒に暮して2年になると、厭になってしまい、ラエフスキーは「厭になつた女と一緒にいるのは実際辛い」<sup>160</sup>と思う。さらに、ナジェージュダの亭主がいたため、正式に結婚ができない状態であったが、近頃、その亭主が脳軟化症で死んだという手紙が送られたため、ナジェージュダと結婚も事実上、可能になったのである。しかし、ナ

---

<sup>155</sup> 同前掲注143、69頁。

<sup>156</sup> 同前掲注143、69-70頁。

<sup>157</sup> 同前掲注143、69頁。

<sup>158</sup> 同前掲注146、70頁。

<sup>159</sup> 同前掲注143、76頁。

<sup>160</sup> 小山内薫訳「決闘(チェーホフ作)(一)の一」『読売新聞』(朝刊)、1909年11月8日付、1面。

ジェージダに飽きてしまったラエーフスキーは、彼女との結婚を避けるために、亭主の死亡についても知らせないでいる。ラエーフスキーはナジェージダの白い頸と髪の毛を見て堪らず厭な気持ちになり、「アンナ、カレニナが自分の亭主の厭になつた時に、その耳まで厭になつたといふ事」<sup>161</sup>を思い出し、共感するに至る。

ラエーフスキーはナジェージダと手を切ってペテルブルグに行きたいと思うが、金銭的な問題ですぐに実行できず、親しい関係であったサモイレンコに金曜日までにお金を借りて、土曜日に発つという計画を立てる。軍医であったサモイレンコはラエーフスキーを助けたいと思うが、金銭的に余裕がないため、動物学者のフォン・コーレンにお金を借りようとしたが、フォン・コーレンに断われる。サモイレンコがお金をラエーフスキーに渡すつもりであることに気づいていたフォン・コーレンは、ラエーフスキーはナジェージダを捨てて一人で逃亡するつもりだと、彼に騙されていると言い、彼にお金を渡す前に、ナジェージダと一緒に行くか、先に彼女を行かせなければお金を貸すことは出来ないと提案することで真実を確認してみろと言う。サモイレンコはフォン・コーレンから言われた通りに提案したが、ラエーフスキーは彼女と一緒に行く気がないように、答えずにその場を避ける。

ラエーフスキーは金曜日までにお金をもらい、土曜日に発つことで苦しい現実から逃れることができると期待していたが、サモイレンコに自分の計画が見破られてしまう。計画の失敗を恐れ、不安になってきたラエーフスキーは「金曜日…金曜日…」<sup>162</sup>と金曜日のことしか考えられなくなった状態で、客間に戻り、ナジェージダやフォン・コーレンらと郵便屋さんごっこをすることになる。

ラアエウスキイは手紙を二つ受取つたその一つを開けたら、斯う書いてあつた。

(立つてはいけないよ、好い子だから。)  
「誰が書いたのかしら。」と彼は考へる。

「勿論サモイレンコオではない……が、助祭でもない。奴は俺の立たうとしてる事を知る筈がない。フォン・コオレンかな。」

動物学者は机に凭り掛つて、ピラミットの絵をかいてみた。ラアエウスキイには、彼の眼が笑つてるやうに見える。

「サモイレンコオの奴が必と洩したに違ひない。」とラアエウスキイは然う思ふ。最一つの手紙も、同じやうな金釘流で、いやに尻尾を永く、曲り拗つて書いてあつた。曰く(それに誰かが土曜日に行くのを厭がるよ。)

<sup>161</sup> 小山内薫訳「決闘(チェーホフ作)(二)の二」『読売新聞』(朝刊)、1909年1月14日付、5面。

<sup>162</sup> 小山内薫訳「決闘(チェーホフ作)(十二)の一」『読売新聞』(朝刊)、1909年12月25日付、5面。

『俺を嘲弄してるな。』とラアエウスキイは思ふ。『金曜日、金曜日……』偶と何かが咽喉に塞へた。彼は襟を爪探つて、咳をしようとした。が、咳の代りに笑が込上げて来た。

『ハ、ハ、ハ』と彼は笑ひ出す。『ハ、ハ、ハ。何を笑つてるんだ。』と彼は考へる。『ハ、ハ、ハ。』彼は手で口を塞いで、自ら抑へようとした。けれども笑は胸と咽喉とを塞いで来て、逆も止める事が出来ない。

『何といふ莫迦な事だ。』彼は又吹出しながら、斯う思う。『気でも狂つたのかしら、でなけれや如何したんだ。』

彼の笑は段々聲が高くなつた、そして小犬の吠えるやうに響いた。彼は立たうとした、が、立つ力も無かつた、彼の右の手は、心にもなく、卓の上を怪しげに動いた。そして慄へながら紙を掴んだ。彼は人々の驚異の眼と、サモイレンコオの真面目な、吃驚した顔と、動物学者の冷い嘲弄に充ちた凝視とに気が附いた。そして自分のヒステリイに罹つた事が分つた。

『何といふ恥辱な事だ。』と彼は思ふ、暖い涙の頬に流れるのを覚えながら……  
「ああ、ああ、何といふ恥辱な事だ。こんな事は今迄決して無かつたのに……」<sup>163</sup>

ラエーフスキーは自分の逃亡計画が、誰か(フォン・コーレンと思ひながらも)に気づかれたことに驚きながら、逃げようとした自分を手紙で嘲弄し、侮辱しようとしていると思ひ、怒りに満ち、痙攣的なヒステリー発作を起す。ラエーフスキーは笑いと泣きが混ぜ合つたヒステリーの発作を、普段嫌っていたフォン・コーレンを含め、その場にいた人々に目撃され、恥辱に満ちる。

その翌日、逃亡を諦めることができなかつたラエーフスキーは、サモイレンコに、提案したことに従うと再び嘘をつき、お金をもらつつもりで、サモイレンコの所へ訪れる。そこでフォン・コーレンに遭遇する。

不意とフォン・コオレンは首を上げて、ラアエウスキイの顔を見て、そして尋ねる

『その後身体の工合は如何だ。』

『大層好い。』とラアエウスキイは赤くなつて答へる。『なアに、元々別に大した事は無かつたんだ……』

---

<sup>163</sup> 同前掲注162。

『僕はたつた昨日まで、ヒステリイは女に限るものだと思つてゐた、だから初は僕、舞踏病にでも罹つたのかと思つた。』

ラアエウスキイは苦笑をしながら、然う思ふ。『何といふ不作法な奴だ。人が感情を害するのを知つてゐながらあんな事を言ふんだ。』

『然う全く可笑しかつたね。』と、ラアエウスキイはまた笑ひながら言ふ。『僕は今朝まで笑ひ通しに笑つてゐる。ヒステリイで妙な事は、自分でそれを可笑しいと思つて、腹の中で笑ひながら、同時に又泣く事だ。吾人の神経は吾人の主人だ、神経は吾人に向つて勝手な真似をするんだ。この天に於いて文明は吾人に向つて実に不思議な務をした……』

ラアエウスキイはフォン・コオレンの真面目な注意的な態度に気がつくつと、不快になつて来た。動物学者は何か珍奇な標本でも研究するやうに、凝とラアエウスキイを見詰めてゐた。ラアエウスキイは、フォン・コオレンに対する嫌悪の情に関係になく、如何しても苦笑を留める事が出来ないので困つた。

『實際を言へば、』と。彼は続けて言ふ。『ヒステリイを起したのには直接の原因が随分あつたんだ、然も重い原因があつた人だ……この頃僕の健康は著しく損はれてをる……この疲労に加へて、普段金の不足だ……共通の趣味を持つてる人のゐない事だ……この境遇は知事の境遇よりも悪い……』<sup>164</sup>

フォン・コーレンはラエーフスキーのヒステリーを心配しているかのように声を掛けては、「女に限るものだ」と思つていたヒステリーが、珍しくも男にあらわれると思えなかつたというような反応を示した。ラエーフスキーは自分をまた侮辱しようとしていると思われ、不愉快でたまらなかつたが、自分がヒステリーであることは確かなので、それには反論できず話を続ける。ラエーフスキーは自分がヒステリーを起した原因について、体調の不良や金銭問題、さらに、話し合える人がいないことを挙げて訴えるやうに話した。それを聞いたフォン・コーレンがまさに君は絶望的な状態であると言うので、ラエーフスキーは再び屈辱と憤怒にさらわれる。ラエーフスキーは「昨日の顔を、あの嘲弄と嫌悪とに満ちた顔を思出し」<sup>165</sup>つつ、「自分を憎んでゐ、賤しんでゐ、嘲つてゐる事が、今初めて確になつたやうに感じた。彼は動物学者を俱不戴天の敵だ」<sup>166</sup>と思う。しかし、ラエーフスキーは自分の感情を表

<sup>164</sup> 小山内薫訳「決闘(チェーホフ作)(十四)の二」『読売新聞』(朝刊)、1909年12月30日付、1面。

<sup>165</sup> 小山内薫訳「決闘(チェーホフ作)(十四)の三」『読売新聞』(朝刊)、1909年12月31日付、1面。

<sup>166</sup> 同前掲注165。

せず、「どうも僕には君の調子が分らん……」<sup>167</sup>とフォン・コーレンには届かぬ消極的な反論に止まっている。その批判的的になったのは、自分の秘密を守らなかったサモイレンコで、ラエーフスキーはサモイレンコに怒鳴り、お金を貸せと激昂する場面が以下のように描かれている。

『君は何も僕の事で気を揉む必要は無いんだ。』と、ラアエウスキイは、言ひ続ける。『僕などに決して注意を払ふ事はないんだ。僕の生活方法に就いて誰が世話を焼く義務がある。成程僕はこの土地を去らうとしてをる。成程僕には借金がある、僕は酒を飲む、僕は人の妻君と一緒にゐる、僕はヒステリー持だ、僕は賤しい、僕は決して或人達のやうな深い思想家ぢやない、けれども誰がそれに世話を焼く義務がある。僕の人格を尊重し給へ。』

『まあ堪忍し給へ、君……』と、サモイレンコは恰ど三十五まで数た所と言ふ。

『だが……』

『僕の人格を尊重し給へ。』と、ラアエウスキイは遮つて、『始終誰かの噂ばかりしてるんだ。始終「おお。」とか「ああ。」とか嘆声ばかり発してゐるんだ。始終穿鑿ばかりしてるんだ、探偵ばかりしてるんだ、そんな深切な憐憫は……少しも有難くないんだ。近頃、ある男が僕に金を貸さうとしてをる、併しその男は、浮浪人にでも持出しさうな条件を僕に持出してゐるんだ。何の事はない、僕は脅迫されてゐるんだ。僕はもう何も入らない……』

ラアエウスキイは非常に激して、震へながら叫つた。そして又ヒステリイが起りやしないかと心配した。<sup>168</sup>

ラエーフスキーは愛のない結婚を避けて「この土地を去らうとしてを」り、すでにたくさんの借金があり、放蕩をして酒を飲み、人妻と一緒に逃避生活をしており、さらに、ヒステリー持ちであることが多くの人に知らされており、賤しくて「深い思想家ぢやない」と自己嫌悪的に語っている。さらに、激昂して叫びながらも、再び「ヒステリイが起りやしないか」と恐れている。ラエーフスキーのヒステリーの原因として考えられるのは、一つ目に、逃げようとした計画が予定通りに進まないことに対して不安が生じたからであろう。二つ目は、問題の解決力がないために図った逃亡計画が他人(フォン・コーレン)に気づかれたことに対

---

<sup>167</sup> 同前掲注165。

<sup>168</sup> 小山内薫訳「決闘(チェーホフ作)(十四)の四」『読売新聞』(朝刊)、1910年1月1日付、7面。

して羞恥心を感じたことである。さらには、その他人から嘲弄や侮辱されたことに対する憤怒と羞恥が発作としてあらわれているといえる。つまり、女性の病であるヒステリーは男と女、強と弱という対比から弱さを喩える表現として用いられており、性格破産者のラーフスキーの弱さを強調している。

結末においては、ラーフスキーが自分を侮蔑するフォン・コーレンに決闘を申し出る。その決闘はフォン・コーレンとの戦いであったが、おそらくラーフスキーには自分自身の弱さとの戦いであったのではないかと考えられる。ラーフスキーは緊張感や恐怖感におそわれながらも、それまで自分自身を苦しませていた憎悪と侮蔑に立ち向かい、戦おうとする。どちらが勝ったとも言えない状態で決闘は終わったが、ラーフスキーは家に帰ると「牢獄から出て来た人か、病院から出て来た人のやうに」<sup>169</sup>長年見慣れていた風景が「一度も経験した事のないやうな」<sup>170</sup>風景として見えてきた。さらに、飽きてしまい、厭でたまらなかつたナジェージュダにも優しくなり、「御前は俺の妻だ。御前より外に俺に妻は無い。」<sup>171</sup>と言った。おそらくラーフスキーのヒステリーは決闘後に治癒されたであろう。

一方、『神経病時代』においては定吉とヒステリーがどのように描かれているであろうか。

### 3. 『神経病時代』における妻のヒステリー

『神経病時代』の主人公鈴木定吉は近頃憂鬱になり「周囲の何も彼もがつまらなくて、淋しくて、味気なくて、苦し」<sup>172</sup>く感じていた。定吉を憂鬱にさせる原因の一つは妻よし子との結婚生活である。よし子と結婚する前に、他の少女に恋をしていた定吉は、彼女に「打明ける勇氣」<sup>173</sup>がなかったため、告白を実行できず「躊躇し悶々としていた」時に、大胆に誘いかけてくるよし子によって「その時まで持っていたものを彼女によって初めて失い汚してしまい」<sup>174</sup>憂鬱に襲われる。山田昭夫は「鈴木は自分の純潔を〈失い汚してしまった〉と感じているのだから、当初から愛は不在だったといわなければならない」<sup>175</sup>と述べている<sup>176</sup>。

<sup>169</sup> 小山内薫訳「決闘(チェーホフ作)(十九)の二」『読売新聞』(朝刊)、1910年1月26日付、5面。

<sup>170</sup> 同前掲注169。

<sup>171</sup> 同前掲注169。

<sup>172</sup> 広津和郎「神経病時代」『廣津和郎全集 第一巻』中央公論社、1973年12月、104頁。

<sup>173</sup> 同前掲注172、112頁。

<sup>174</sup> 同前掲注172、113頁。

<sup>175</sup> 山田昭夫「和郎の「神経病時代」とその妻」『国文学 解釈と鑑賞』40(13)、1975年12月、106頁。

<sup>176</sup> 光石亜由美は「女性の貞操を議論することから、女性の処女性を〈奪う——奪われる〉といった価値体系に転換させたのが「青鞥」の処女論争であるが、ここでは男性の「童貞」も〈奪われる／汚される〉といった観点から捉えられている」と指摘している。

光石亜由美「広津和郎「神経病時代」論—トルストイ『クロイツェル・ソナタ』と『性慾論』をめぐる—」『情報表現論集』(1)、1998年3月、39頁。

定吉はよし子に断われなかったことの結果として愛のない結婚生活を余儀なくされたのだが、その生活の中で定吉を最も苦しませていたのが妻のヒステリーである。

定吉の妻となったよし子は「二日か三日に一度、あるいは毎日」<sup>177</sup>ヒステリーの発作を起したが、ヒステリーの原因については次のように記されている。

……昨夜も亦例のように、彼の妻の不機嫌が始まったのであった。それはいつでも何というはっきりした原因があるのではなかった。後で考えて見ると、何であったか思い出せない程些細な事からいつも始まるのであった。よし子は先ず最初に何という事もなくその不機嫌の気分を襲われて来るのである。<sup>178</sup>

よし子のヒステリーは、はっきりとした原因はなく、思い出せない程些細な事で突然不機嫌になるとされている。しかし、実際には「過度の病的な不節制からくるヒステリイ患者なんだ！」<sup>179</sup>、「彼の妻はあの肉欲的なヒステリイの発作を起こした」<sup>180</sup>とあるように、性的な欲求不満が原因となっている。ヒステリーの原因について直接言及している場面において些細な事とみなし、原因不明であるかのように語られているのは、性的欲求不満によるものであることを強調させる結果になったといえる。次に、よし子のヒステリーの徴候は以下のように描かれている。

その眼の陰が一層はげしくなって、頬の辺りに筋肉が硬ばったような無愛想な表情が浮んで来る。眉と眉との間がピクリピクリと痙攣する。唇が少し尖がて来る。そして眼だけ何処か部屋の一方をじっと瞬きもせず見つめながら、そのくせ顔は真正面から彼の顔に向けられる。

この兆候が現われ始めると、定吉の心はいつでも惴えて来るのであった。<sup>181</sup>

ヒステリーの徴候は、眼の陰、頬の辺り、眉と眉との間、唇というように、顔に集中してあらわれているが、こうした妻の顔の変貌ぶりは、定吉に嫌悪感を抱かせる可能性をはらんでいると言える。さらに、定吉は妻にヒステリー徴候があらわれることを恐れているが、そ

---

<sup>177</sup> 同前掲注172、127頁。

<sup>178</sup> 同前掲注172、115頁。

<sup>179</sup> 同前掲注172、117頁。

<sup>180</sup> 同前掲注172、127頁。

<sup>181</sup> 同前掲注172、116頁。

の理由については以下のように記されている。

「あなた」と彼女は囁いた。彼女の声は急にやさしくなって、かすかな震えを帯びていた。と、突然眼前の物全体が自分の上に崩れ落ちて来たような心持が定吉はした。定吉の頭は渦を巻いた。（中略）

昨夜のような発作のあった翌朝は、彼女は機嫌がよくて、にこにこしてゐた。<sup>182</sup>

定吉は妻がヒステリー発作を起こした日は、妻の欲求不満を満足させるという方法を選び、妻のヒステリーを鎮めている。高橋正雄によると、定吉は「妻の発作が性的な欲求不満に基づくものであり、性的な欲求を満たしてやれば症状は治まること」<sup>183</sup>を認識し、「妻の発作を治めるために性的な欲求に応えるという対応」<sup>184</sup>を取っており、その行為が却ってヒステリーの「強化因子となって彼女の発作を慢性・持続化させている」<sup>185</sup>という。つまり、定吉を憂鬱にさせ、苦しませている妻のヒステリーは、妻の性的な欲求に応えてしまった定吉自身によって持続化しているのである。

以上のように『神経病時代』におけるよし子のヒステリーは定吉の弱さの対照的な位置におかれ、一種の力学関係を形成している。こうした力学関係の形成はヒステリーと性欲とを関連づけたことにより可能であったと考えられるが、『決闘』において弱さを強調するために用いられたヒステリーとは正反対の様相を帯びているという点で、ヒステリーというキーワードはチェーホフから得られたいうことができてもヒステリーの性質はチェーホフからの影響ではないということができると考えられる。

妻のヒステリーの発作があった翌日、定吉は寢床の中で考える。

「ああ、これが生活か！」と定吉は心の中で呟いた。彼の頭に「クロイツェル・ソナタ」が浮んで来た。「そうだ、あの女はトルストイの云うヒステリイ患者なんだ！」

「だが、この自分は？」と彼はまた考えた。「彼女がヒステリイでそして俺は？この俺は何だ？」——定吉は何が何だかまるで解らない気がした。頭が混乱して、

---

<sup>182</sup> 同前掲注172、117-118頁。

<sup>183</sup> 高橋正雄「精神医学的にみた近代日本文学(第6報)―岩野泡鳴・広津和郎・佐藤春夫・宇野浩二―」『聖マリアンナ医学研究誌』12(87)、2012年、81頁。

<sup>184</sup> 同前掲注183。

<sup>185</sup> 同前掲注183。

ただ浅猿しくて、ただ不愉快だった。彼は続け様に頭を振った。と、今度はこういう考がチラと浮んで来た。「クロイツェル・ソナタ」を書いたトルストイだって、屹度その夫人から自分と同じような不快を経験したに違いない。……だが、それは尚一層変挺な浅猿しい憂鬱に彼を導いた。彼は急いでその考を打消そうと試みた。

「トルストイは俺じゃない、俺のような弱虫じゃない！」と腹の中で云って見たが、もう間に合わなかった。彼は狼狽した。そして何ものかを駆足で追っかけでもするように、「トルストイは偉大なんだ。偉大な宗教家なんだ！」と、とうとう自分の耳にきこえるように、声に出して云った。<sup>186</sup>

直接言及されていることから分かるように、広津の描いたヒステリーはトルストイ『クロイツェル・ソナタ』の影響を受けたとみることができよう。光石亜由美によると「定吉夫婦の関係を『クロイツェル・ソナタ』によって語らせるという方法の必然性」<sup>187</sup>はトルストイが「『性欲論』（又は『男女両性観』）という文脈で、男女の性的関係の倫理家、性欲論者として読まれていた」<sup>188</sup>という時代的な影響であるというが、おそらく夫婦の不和と妻のヒステリーを関連づけて語ろうとしたのはトルストイ『クロイツェル・ソナタ』からの影響であったと考えられる。しかし、その結末は相違している。

#### 4. 『神経病時代』における「性格破産者」とヒステリー

『クロイツェル・ソナタ』はトルストイの晩年の中編小説である。不貞の妻を嫉妬したあげく殺してしまった主人公ポズドヌイシェフの告白からなっており、当時の結婚問題及び性欲問題について厳しく批判したものである。妻は性的欲求不満を原因とするヒステリーとされており、ヒステリーをおさめるために行う肉体関係は夫婦の不和を一時的に和らげる作用をしている点で『神経病時代』と類似しているが、『クロイツェル・ソナタ』では出産や育児を女性の偉大なる業績であるとし、その時期に行う性行為は女性や子供に害を与えることであり、道徳的に純潔ではない行為であるとヒステリーの妻に対して道徳や倫理で追及しようとしている。青山太郎によると「一八八八年三月二〇日付ヂェルトコフ宛ての手紙から察するに、この頃のトルストイの性愛に関する考え方は未だ比較的穏やかなもので、結婚にお

---

<sup>186</sup> 同前掲注172、117頁。

<sup>187</sup> 同前掲注176、34頁。

<sup>188</sup> 同前掲注176、34頁。

ける性交は罪ではなく、むしろ神の意志である」<sup>189</sup>と考えていたのが、「ひとたび或る理念に取り憑かれたらそれをとことん突きつめずにはいられぬマクシマリストでしたから、その後幾度かの中絶と改変を経て、一八八九年夏に作品がほぼ完成した時、そこに表明された理念は、夫婦間においてすら性交は慎むべきであるという極端な主張に達してい」<sup>190</sup>たという。

トルストイの「過剰なまでの性行為に対する拒否感」<sup>191</sup>によって、正常な夫婦の性生活を営もうとする妻は肉欲的なヒステリーという烙印を押されたとみることもできよう。『クロイツェル・ソナタ』においては、そうした肉欲的なヒステリーを起す妻を殺すことによって、トルストイの唱える禁欲主義が「教訓話」として描かれている。つまり、『クロイツェル・ソナタ』におけるヒステリーは妻に不節制という烙印を押し、処罰することに一種の妥当性を与え、禁欲主義を唱えるために用いられた手段であるといえる。広津は「怒れるトルストイ」の中で『クロイツェル・ソナタ』を以下のように評している。

彼は「クロイツェル・ソナタ」が人生に或る利益を与えた事を自信している。現代文明の虚偽、殊に結婚生活の虚偽をあげて問題を提出したところには、多少の利益を与えたと云えるだろう。けれども、それ以上にそれは却って人生に焦燥を与えている。静かな靈魂の所有者には「クロイツェル・ソナタ」は何でもない。恐ろしくイライラする退屈な物語であるに過ぎない。けれどもみずからの焦燥を支配する事が出来ずに悩んで、バラバラになった統一のつかない良心を虫歯の神経のように露出している人間には、それは鎮痛剤にあらずして胡椒のような刺戟物である。

192

結婚生活の虚偽性による家庭問題、つまり愛のない結婚生活において問題とされている夫婦間の性生活の問題を、肉欲的なヒステリーを起す妻を殺すことによって解決しようとしたトルストイの作品は「静かな靈魂の所有者」には「恐ろしくイライラする退屈な物語」としか考えられない。トルストイが提示したヒステリーの妻を殺すという極端で非現実的な解決方法は、一般の読者には一種の快感を与えることはできても、実現することは不可能であろう。広津の批判しているところは、単にその方法だけにあらず、トルストイ自身の思想を刺

---

<sup>189</sup> 青山太郎「ロシアの性愛論Ⅰ—トルストイの『クロイツェル・ソナタ』—」『言語文化論究』(6)、1995年3月、151頁。

<sup>190</sup> 同前掲注189。

<sup>191</sup> 同前掲注176、39頁。

<sup>192</sup> 同前掲注184。

激的に表現した表し方、または描き方にあるのではないかと考えられる。こうしたトルストイの対照的な人物としてはチェーホフを考えていたといえよう。そのため、広津は二人を比較・対照して論じる傾向があったが、その評論について触れておこう。

1916(大正5)年5月『新公論』に発表された「チェエホフの強み」の内容に多少の訂正を加え、再び論じた1916(大正5)年12月『トルストイ研究』に発表された「トルストイとチェーホフ」は、トルストイとチェーホフを比較して論じたものである。広津はこの二人を比較して論じる理由について「チェーホフの傾向を述べるためには、彼とまるで正反対の傾向に行ったトルストイを引合いに出す事が便利でもあり、又意味のある事でもあるから」<sup>193</sup>と説明している。二人の容貌についても、チェーホフは「華奢ではあるけれども、決して浮ついたところの少しもない、真面目な、おちついた背広姿で立っている。ジェントルで、しずかで、如何にもひねくれずに教養を積んだ人の聡明を表しているその眼や唇」<sup>194</sup>と表現している一方で、トルストイは「憤怒に燃え初めそうに思われる表情」<sup>195</sup>、「強い力を以て押つかぶせて来る厳肅さに先ず心を撃たれる」<sup>196</sup>と表現している。広津は二人を正反対の性向として認識し、対照して論じやすいと思ったであろうし、二人のうち「トルストイよりもチェーホフに同感を持って」<sup>197</sup>たとあるように、チェーホフに影響を受けて描かれた性格破産者とトルストイに影響を受けたヒステリーが『神経病時代』において対照的な立場におかれていたことも広津にとっては自然な成り行きであったようにも思われる。

さて、ヒステリーの妻を殺すことで終わった『クロイツェル・ソナタ』に対し、『神経病時代』においてはどのような結末になったろうか。当然、性格破産者の定吉はポズドヌイシェフのようにヒステリーの妻を殺すことはできなかった。定吉は妻と離縁して静かな田舎へ行こうと企んでいたが、妻には一言も言えず、かえって妻に妊娠を知らせられる。ヒステリーを媒介に持続的な肉体関係を持ったことが、おそらく妻の妊娠という結果になったと考えられる<sup>198</sup>。定吉は自分の理想とした生活が挫折し、「恐ろしい絶望」<sup>199</sup>や「苦しさ」<sup>200</sup>を感

---

<sup>193</sup> 同前掲注184、117頁。

<sup>194</sup> 同前掲注184、118頁。

<sup>195</sup> 同前掲注184、118頁。

<sup>196</sup> 同前掲注184、118頁。

<sup>197</sup> 同前掲注184、118頁。

<sup>198</sup> 坪井秀人は「主人公の男は中途半端なモノガミストとして生理的欲求を妻に依存してもいう。愛のない性、それがこの物語ではその結末で皮肉にも生殖に結びついてしまうのである」と述べている。坪井秀人『性が語る』名古屋大学出版会、2012年2月、64頁。

<sup>199</sup> 同前掲注172、153頁。

<sup>200</sup> 同前掲注172、153頁。

じていながらも、一方では「妻のために下女を雇ってやらなければならない」<sup>201</sup>と考える場面で終わっている。

定吉はよし子のヒステリーに苦しんだ。しかし、よし子の立場から考えると、愛する夫との性生活は極く正常的であり、そこに虚偽はなかったといえよう。かえって定吉は弱い性格のために、最初恋していた少女に告白できず、積極的なよし子に断われなかったために、愛のない結婚を成立させた。性的欲求不満による妻のヒステリーをおさめるために行っていた肉体関係は妻のヒステリーを持続化させていた。性格破産とヒステリーにより形成された悪循環から逃れることは定吉には到底不可能である。一方で、虚偽に満ちた結婚生活に苦しむ定吉は妻のヒステリーを憎みながらも愛のない性生活を持続していたことで、妻が妊娠するという更なる問題に直面する。しかし、自分の望んでいた離婚をあきらめ、現在の生活を維持しようとする定吉の姿からは、また同じことが繰り返されることを暗示している。以上のように『神経病時代』における妻のヒステリーは性格破産者の煩悶や苦悩をもたらしていると同時に、性格破産者の弱さを強調していると考えられる。

以上のように本章では、「妻」に用いられたヒステリーについて検討した。妻という人物像は、一人の人間として個性を持っていながらも、家庭という領域において欠かせない存在として 社会から、または夫から妻としての資格や条件が求められていた。第1節、第2節で取り上げた作品では、妻のヒステリーは家庭や夫婦関係の維持もしくは破綻の要因となっていた。第3節の作品では、妻のヒステリーとドッペルゲンガーを関連付けているが、結果としては家庭の破綻を引き起こしている。第4節の作品では、一人の知識人の苦悩を描こうとした物語に家庭という問題を取り入れ、その中でヒステリーの妻に悩まされる主人公を描いた。妻のヒステリーを収めるために行った性的行為は妊娠とつながり、家庭の維持という結果となった。それぞれの物語のストーリーや人物の性格等は異なっているものの、妻のヒステリーが契機・発端となり、家庭に何等かの変化をもたらしていたという点は共通していることが分かった。

---

<sup>201</sup> 同前掲注172、153頁。

### 第3章 女の語るヒステリー

明治末期から大正期にかけて数多くのヒステリー言説が作られていた。病理としてのヒステリーをテーマとする様々な医学書や学術論文が発表され、それをもとにヒステリーを診断し、治療するなど、実生活においても自然に受け入れられていたと考えられる。ただし、ヒステリーの症状が人によって様々な形であらわれ、女性であればヒステリーと疑われやすい状態であった誰もが一度はヒステリーになった経験を持つことができたであろう。一方で、ヒステリーは医学分野だけでなく、文学作品において登場し、既存の言説の範疇からあまり外れない状態で、作家によって再創造され、作家個人の思想や価値観を反映した形で表現された。第2章において男性作家の作品において描かれているヒステリーを探ってみたが、本章ではヒステリーというレッテルが貼られた女性自身が語るヒステリーについて探ってみた。

#### 第1節 岩野清「枯草」―「新しい女」の恋とヒステリー―

岩野清「枯草」は1912(明治45)年2月『青鞥』に発表された小説である。清は、平塚らいてう、田村俊子らとともに1911(明治44)年に創刊された『青鞥』を中心に活発な文芸活動を行っていた「新しい女」の一人であり、「五部作」の著者である岩野泡鳴の二番目の妻として、のちに同居請求訴訟で注目を集めた人物でもある。第2章において論じた岩野泡鳴「五部作」は、岩野泡鳴の最初の妻である竹腰幸子と妾の増田しも江の話が中心となっているが、その後、泡鳴は本妻も妾も捨てて、また新たな女性を求め、岩野清に出会うのである。一番目の妻と離婚していない状態で、清と泡鳴の同棲生活は始まったのであり、「枯草」は大阪へ移転した時の生活が反映されている作品である。その中で主人公として登場する小夜子はヒステリーの女として描かれているが、本論では、岩野清『愛の争闘』を参考にしながら清の描いたヒステリーの女性について検討を行いたい。

##### 1. 清における「ラブ」

岩野清は15歳で教員伝習所を卒業し、16歳の時に東京府尋常小学校本科准教員の免許を取得し、教員となる。21歳の時に花畑尋常高等小学校を退職し、22歳の時は新橋の鉄道の調査科で勤務し、その後は電報通信社の社会部に入社するなど、早くから経済的に独立した女性として成長していった。清の文筆活動は人民新聞社発行の『人民』(のちに『人民新聞』と改題)紙からはじめられたが、本格的な活動は電報通信社を辞職し、人民新聞社に入社する

23歳の頃からであるといえる。1905(明治38)年6月に書いた「男哲学」を始め、同年に執筆した記事は「独断妄語」「可憐なる女子の為に作業局に問ふ」「筆のちり」「廂髪の運命」「婦人の欠点」等、多数である。同年12月には今井歌子らとともに婦人倶楽部の第一回会合を開催し、その後は治安警察法改正に関する請願運動(第二回)などの婦人運動にも参加することになる。

清は『人民』において記者または編集者として活動していたのだが、ここで中尾五郎という人に出会い、恋人関係となる。坂井博美によると、「女性の地位向上に対する清の関心の高さ」<sup>1</sup>は、「中尾五郎の存在も影響を与えていた」<sup>2</sup>という。人民新聞社政治部の編集主任であった中尾五郎は婦人雑誌記者倶楽部に出席し、「婦人問題関係の記事を執筆するなど、「婦人問題」にも関心を寄せていた」<sup>3</sup>という。しかし、中尾は当時の良妻賢母主義を批判し、「女性の高等教育や社会的活動への参入の必要性」<sup>4</sup>を唱えてはいたが、「あくまで家庭責任を中心として生活しつつ、さらに女性の特性を活かして社会に貢献する生き方を理想とし」<sup>5</sup>ていたという。

清は既婚者であった中尾と「プラトニックラブ」<sup>6</sup>を求めたために、葛藤はあったようだが、結果的には「精神性を重んじる恋愛」<sup>7</sup>を維持し続けることができたという。しかし、清はいつまでも中尾と不倫の関係ではいられなかったため、妻とは別れて自分を選ぶように中尾を促したが、社会的体面を理由に断られる。清のプラトニックラブは中尾という「醜い人間の手に落ちて、遂に破綻の運命を齎され」<sup>8</sup>る。「恋を命としてみた」<sup>9</sup>清は「遂に国府津の海に身を投じ」<sup>10</sup>るが、「意地悪い運命の手に引出され」<sup>11</sup>、未遂に終わる。清にとって愛とは、肉体的な愛は伴わなくても、いわゆる精神的な愛でさえあれば、いつまでも「清くしかも熱烈であ」<sup>12</sup>りつづけることができる無限の価値のあるものであったといえよう。

清の自殺未遂は1909(明治42)年7月のことで、岩野泡鳴と出会うのは同年12月1日となって

---

<sup>1</sup> 坂井博美「第一章 「愛の争闘」前史」『「愛の争闘」のジェンダー力学』ペリかん社、2012年12月、61頁。

<sup>2</sup> 同前掲注1。

<sup>3</sup> 同前掲注1、62頁。

<sup>4</sup> 同前掲注1、62頁。

<sup>5</sup> 同前掲注1、63頁。

<sup>6</sup> 岩野清「愛の争闘」『叢書『青鞥』の女たち 第4巻』不二出版、1985年11月、1頁。

<sup>7</sup> 同前掲注1、63頁。

<sup>8</sup> 同前掲注6。

<sup>9</sup> 同前掲注6、2頁。

<sup>10</sup> 同前掲注6、2頁。

<sup>11</sup> 同前掲注6、2頁。

<sup>12</sup> 同前掲注6、2頁。

いる。友人の紹介で清の家に訪れた泡鳴は清には一面識もない人であったが、突然「小説を書いて見る気はないか」<sup>13</sup>と勧めたという。その後、12月5日に、再び清を訪れた泡鳴は重大な相談があるという言葉を残し、その翌日、再び訪れては自分の家庭の事情を話し、同棲することと同時に結婚という二つの条件を清子に出す。清は愛のない結婚は「自分を辱かしめ、又男を欺むく罪悪だ」<sup>14</sup>と思い、後者は断るが、「岩野氏が私の人格を尊重し、私の意志を強制しない限り差支ないと思」<sup>15</sup>い、前者は承諾する。その日から三日後、二人は大久保で同棲しはじめるが、のちに愛し合い、ついには結婚することになる。当時、泡鳴は妻の幸子と別居はしていたものの、既婚の状態であったということもあり、二人の同棲は「萬朝報」に「変物同士の同棲 肉が勝つか霊が勝つか」<sup>16</sup>と報じられ、世間を騒がせた。清も泡鳴の事情を承知していたうえで、条件を受け取ったものであるから、覚悟はしていたと思われるが、そこまでして愛してもいない泡鳴との同棲を決めたのは、「破れた恋に、多くの思ひ出をもつ此家、私にはここを恋と共に捨て去らうとする心が頻りであった」<sup>17</sup>と、中尾との恋を忘れるためでもあったようである。清は泡鳴と同棲することにより、中尾との思い出のある家から逃れることができたのである。

当時の社会的な背景からみると、清と泡鳴の条件付きの同棲は、センセーショナルな事件の一つとして扱われていたと思われるが、泡鳴の女性問題はすでに世間に知られていたため、泡鳴のような人との同棲を決めた清に世間は注目したのではないかと考えられる。清が「半獣主義者と云はれてゐる岩野氏と同棲するのを」<sup>18</sup>清の元恋人であった中尾は自分に対する復讐と思っていたほどであったというので、清の処女性を疑うような噂が広がっていたと考えられる。泡鳴は潔白を晴らそうとしたためなのか、「僕の恋愛観」というタイトルで以下のように語っている。

僕のは矢張り霊なるものは別に存在してゐるものではないから、肉のはたらきの上に総ての之れまでに云ふ霊力が含まれてゐるものであると考へてゐる。斯う云ふ考は自然主義が思想に確定する事実である。然し遠藤清子はロマンチストである

---

<sup>13</sup> 同前掲注6、2頁。

<sup>14</sup> 同前掲注6、3頁。

<sup>15</sup> 同前掲注6、3頁。

<sup>16</sup> 『愛の争闘』の1909(明治42)年12月12日付の日記には「昨日の萬朝記者への話は、私の云つたのは、私の霊が岩野氏を愛す時まで肉を許さない、と云ふのだつた。大抵は誤りないからここに切抜を貼っておく。」とあり、当時「萬朝報」に報じられた記事の内容が記されている。

同前掲注6、8-11頁。

<sup>17</sup> 同前掲注6、2頁。

<sup>18</sup> 同前掲注6、14頁。

(中略) 此れまでは新聞の婦人記者、或は女政客として知られてゐたんだ。然し思想はロマンチスト的であるから、恋愛も神聖である可だと主張してゐる。霊愛は霊丈で成立つと云ふ風に考へてゐる。

さう云ふ二つの思想が今、此所で同棲してゐるんだ。二人の間に兎に角或る種類の恋愛が成立つてゐる事は事実だ。然し僕の望む肉交と云ふものはない。<sup>19</sup>

「肉のはたらき」を重視する泡鳴自身の恋愛観と、霊的な愛を重視する清の恋愛観とを比較しながら、噂のようなことは起きていないと説明している。清はこうした泡鳴の説明について、霊的な愛を求めたあまり、肉的な愛を全く否定し、「肉に落ちてはならないと云つたのではない」<sup>20</sup>と自分の恋愛観について付言している。おそらく霊的な愛を通じ、結婚が心決められたら、肉的な関係を許したであろう。

## 2. 清と泡鳴における「愛の争闘」

肉体的な関係を排除した二人の同棲生活はあまり長く続かなかつたようである。当初、泡鳴は精神的な愛を重視する清の意思を尊重するという立場を取っているように見えたが、肉体関係への願望は徐々に露骨になっていき、「これ程に私が熱愛を捧げてゐる誠意が通じないのかと男泣きに泣きながら訴へ」<sup>21</sup>たり、「独りの冷たい蒲団の中から目覚めた時、(中略) 堪らなく寂しい」<sup>22</sup>と言ひ、清を苦しませて同室に寝ることと清の手に接吻することを許してもらつたりしている。清は肉体的な愛を求めつづける泡鳴を苦しませていると罪悪感を抱き、「断然岩野氏に許さう」<sup>23</sup>と決心するに至る。清の決心は1910(明治43)年2月4日付の日記に記されているが、実際に肉体関係がその日にあったかについては明記されていない。「肉が勝つか霊が勝つか」という「争闘」で世間に注目されていた清と泡鳴であつたからこそ、二人の肉体関係がいつ始まったのかは常に話題であつたと考えられる。その件については、今でも様々な議論<sup>24</sup>がなされているが、ここでは、明確な事実関係を再検討する

---

<sup>19</sup> 同前掲注6、17頁。

<sup>20</sup> 同前掲注6、20頁。

<sup>21</sup> 同前掲注6、21頁。

<sup>22</sup> 同前掲注6、21頁。

<sup>23</sup> 同前掲注6、69頁。

<sup>24</sup> 先行論では二人の同棲生活について語られている清の『愛の争闘』と「岩野庵日記」や泡鳴の「征服被征服」を中心に検討が行われているが、二人の初めての肉体関係は1910(明治43)年11月11日で二人が同居してから約1年後であるとみている論があるが、多少の削減や加筆がみられ、虚構性が指摘されている『愛の争闘』の記述を論拠としているため、現在は「岩野庵日記」と「征服被征服」の記録が一致していることから1909(明治42)年12月27日から始まったとみる見解が支持されている。し

というより、清にとって泡鳴との同棲生活はどのようなものであったのか、それによって清自身の思想や理念にどのような変化があったのかに焦点を当てて検討を行いたい。

まずは、精神的な愛を重視してきた清にとって肉体的な愛はどのようなものであったろうか。『愛の争闘』が刊行されたのが1915(大正4)年であるため、おそらく執筆する際には清自身の書いた記録または記憶に頼っていたと考えられるが、坂井博美は「岩野庵日記」と比較し、『愛の争闘』において修正された肉体関係の記述について「清のごまかしには、泡鳴を容易には受け入れず「処女性」を永く保ったと表明することで、自分の優位性を社会に示そうとする意図があったものと思われる。(中略)しかし、同時に、この虚構はそれだけ泡鳴との性愛をめぐる問題のなかで受けた傷が深かったこともあらわしている」<sup>25</sup>と述べている。多くの女性に出会い、肉体的な愛を求めてきた泡鳴に比べ、唯一無二の恋人であった中尾の要求にも応じず、精神的な愛を求めてきた清に、泡鳴との初めての肉体関係は一生忘れられない経験であったと考えられる。おそらく清はその日をはっきりと覚えていた可能性が高い。『愛の争闘』が日記の形式で実在を取り扱っているものの、虚構性がうかがわれるとし、日記としては認められないとしても、清にとって一種の「回想録」として見ることはできると考えられる。

先行論では、性的関係があったとされる1909(明治42)年12月27日の翌日に書かれた内容が「泡鳴庵日記」と「征服被征服」の両資料において同一であると指摘されているが、翌日の28日付の日記に「われは君の偽りなき告白、抑へがたき男性の要求、熱烈なる君のセコンドラブに訴へられて、われは犠牲となりぬ」<sup>26</sup>と書かれていることから、清が泡鳴に応じたのは一種の犠牲であり、霊と肉の争闘においては敗北したという意識が増していたと述べられている。その「泡鳴庵日記」より後に書かれた『愛の争闘』においては、27日付の日記に以下のように書かれている。

昨夜悪夢に襲はれた。黒い蛇が私を追つて来た。生来蛇は大嫌なので一生懸命に

---

かし、清によって明確に記されている史料は未だに見つかっていないため、いずれも「推定」でしかいられない。もう一人の当事者である泡鳴の場合は、清の「岩野庵日記」と類似している箇所が多いと指摘されている点から、「征服被征服」は清の記録を依存しているという可能性が問われている。さらに、清の『愛の争闘』の読了後に書いた書評において「著者との肉交的關係」は「十二月三十日から出来た」(岩野泡鳴「『愛の争闘』(岩野清子著)」『岩野泡鳴全集 第十三巻』臨川書店、1996年12月、309頁。)という記述と「征服被征服」で述べた27日と異なっていることから、泡鳴発信の情報からも明確な答えを得られない。

<sup>25</sup> 同前掲注1、126頁。

<sup>26</sup> 岩野泡鳴「征服被征服」『岩野泡鳴全集 第四巻』臨川書店、1995年12月、220頁(坂井によると、岩野清「泡鳴庵日記」198頁にも、同一の文が掲載されているという)。

遁げたけれど、遂に追詰められて進退谷まつた。怖ろしさに声を上げた。そのため夢は醒めた。

私は終日此夢が何のヒントを意味するかと考へ続けた。最近になつては、岩野氏は毎日苦悶を訴へる。或時は私を無情だと云つて責める。或時は、『友人間では、今迄許さない処を見ると、彼女は生理的不具者なのだらうとも云つてゐる。或物は秘すべき欠点があるために、余儀なく拒絶してゐるのではないかと云つてゐるが』、と私を探ぐるやうにも云ふ。私は寧ろ左様云ふ当推量を喜んで受けてゐた。私は成るべく此儘にしてみたい。氏の熱情の嬉しくないではない。今更中尾に未練がある訳でもない。恋愛の極度まで満たされた時は、既に恋の終りになつた時のやうに思ふ。満たされない中こそ男は熱があるが、若し満たされたら此人も世間普通の暴君になつて仕舞ふだらう。私は恋の亡骸を抱いて、暗く淋しい生活に埋れて仕舞ひたくない。

然し私に復活の光りを与へたのは氏の熱情である。再び生の意味を見出さしめたのも氏の愛の力である。私はどうしたらいいのだらう。<sup>27</sup>

泡鳴と肉体関係のあつたとされている27日には悪夢について書かれているが、その日が実際に肉体関係が行われた日であつたとしたら、清はその経験を悪夢と回想しているように読まれる。黒い蛇から逃げても、ついに追い詰められるという恐ろしい夢が、「何のヒントを意味するか」と終日考え続けていたとあるが、おそらく肉体関係を予期する予知夢であつたというようにも読み取れる。続く内容では、清が肉体関係に応じないことに対して、友人間の話だと言いながら「生理的不具者なのだらう」「秘すべき欠点があるため」と清を何か問題のある異常者のように泡鳴は追い詰めている。当時の男性中心社会では清のように、精神的な愛を求める女性に対して、根拠のない噂を流し、異常者のような扱いをし、苦しませ、やがて半強制的に肉体関係を許させたのであろう。

もし、この日に肉体関係が行われたとしたら、少なくとも清の意思は反映されず、泡鳴の欲望を満たすために行われた行為にすぎなかつたであらう。泡鳴の欲望が満たされたということは、泡鳴が清を「征服」したという成就感を満喫し、「恋愛の極度まで満たされ」たことを意味すると同時に、清に対する「熱」が冷めるのは時間の問題であることをも意味する。つまり、清との肉体関係は、泡鳴にとって恋の終焉と同様であつたと思われるが、当時の清

---

<sup>27</sup> 同前掲注6、28頁。

には分からなかったものの、『愛の争闘』を書く時点では、それが「既に恋の終り」であったと回想することができたのではないかと考えられる。

しかし、清が心身を許したからといって、二人の間の争闘が終わったわけではなかったようである。尾形明子は「取り乱す清子の様子を泡鳴は意地悪く観察するが、中尾への連綿と続く清子の未練は、心と心の繋りなど発想にすらなく、ただ清子の肉体をのみ求める泡鳴への不満、苛立ちから発していた。プラトニックな愛の最期に性愛を置く清子と、性愛を男女の愛の中心とする泡鳴の最期まで続く、くい違いである」<sup>28</sup>と指摘しているが、二人の恋愛観の相違は二人の夫婦生活において多大なる影響を及ぼしており、やがて離別の一因となる。「枯草」は清と泡鳴が東京から大阪へ移転し、同棲生活を続けていた時期を扱っているが、二人の「くい違い」がもたらした不幸な生活が描かれている。

### 3. 「池田日記」からみる「争闘」

「枯草」は清と泡鳴が大阪に移転し、生活していた時に書かれた小説である。『愛の争闘』には、清が大阪に滞在していた1911(明治44)年4月29日から翌1912(大正元)年9月2日までの約一年半の期間のうち、1911(明治44)年5月の約一ヶ月間の生活が「池田日記」として記されている。「枯草」は『愛の争闘』には書かれていない11月の末の生活が描かれているが、まず、清は『愛の争闘』において大阪での生活についてどのように回想しているのかということについて検討しておきたい。

東京から遠く離れた事のない清にとっては、「用開きの人々の大阪弁も、物の名の変つてゐること」<sup>29</sup>等、生活が「みな新たになつたやうなき」<sup>30</sup>がする。当初は新しい光景が「興味を惹」<sup>31</sup>き、好奇の目で大阪を見ていたが、長くは続かなかつたようである。大阪へ移住する前に、東京から送った荷物がまだ届いてなく、食事を用意する道具がなかったので、店に行ったが、意思疎通の問題にぶつかり、「主人が東京者だと云ふ」<sup>32</sup>店を見つけ、ようやく「通じたには通じた」<sup>33</sup>という。さらに「大阪人のしまりのない態度や、歯ぎれの悪い言葉も不快だつた」<sup>34</sup>と地元の住民とも馴染めなかつたようである。清は知友が一人もいなかったため、ひたすら泡鳴の帰宅を待つだけであつた。泡鳴が仕事で帰宅が遅くなると、「自

<sup>28</sup> 尾形明子『自らを欺かず—泡鳴と清子の愛—』筑摩書房、2001年4月、46頁。

<sup>29</sup> 同前掲注6、423頁。

<sup>30</sup> 同前掲注6、423頁。

<sup>31</sup> 同前掲注6、423頁。

<sup>32</sup> 同前掲注6、424頁。

<sup>33</sup> 同前掲注6、424-425頁。

<sup>34</sup> 同前掲注6、430頁。

分達の愛の生活を制限されてゐるやうでいやだった」<sup>35</sup>と思われるほどであった。大阪で滞在しはじめた時期は、泡鳴のほかに頼れる人はいなかったようである。しかし、泡鳴の帰宅は遅くなる一方で、さらには神経過敏で不機嫌な日が多く、頼りたくも頼ることのできない日が多かったとされている。5月11日付の日記には以下のように記されている。

私には何だか一向見当がつかない。(中略)『どうなすつたの』とたづねても返事がなかった。(中略)

私は暗い心を抱いて、故郷遠く去つた身の頼りなさと、解き難い主人の怒とを思ひくらしながら悶々とした。

月にあこがれ、山や水や非情のものにあこがるる若い心をもつた私と『おれはもうそんな時代はすぎてしまつたのだ。そんな初心な単純な事にあこがれるロマンチストにはなれない。』と云ふ人と暮してゐる、趣味の上の不一致から起る心の淋しさを、常に物足りなく思つてゐる。只故郷を雲の遠くに離てて、老いた父、兄、且つは又会心の友をはなれて、只一人の人の真心を信じて、此他郷に朝夕を送つてゐる私は、何を心の糧としよう。君のために社会を敵とし、誤解冷罵を身に担つて君の熱情に捧げた身を、何事ぞ明白に、斯くありたしと云ひもせず、無言沈黙の中に隔ての垣を作るとは。<sup>36</sup>

泡鳴は今朝の出掛けには機嫌がよかつたものの、「どうした事か不機嫌の様子」<sup>37</sup>で帰宅した。清は帰宅した夫に「留守中のことを色々お話するけれど、義理一遍の返答を、さも面倒臭さうにするばかり」<sup>38</sup>であった。泡鳴は夕食を済ませると、すぐに書斎へ入ってしまったため、夫婦間の対話は断絶する状態となる。唯一の頼りであった泡鳴の態度に対して、清は「君のために社会を敵とし、誤解冷罵を身に担つて君の熱情に捧げた身を、何事ぞ明白に、斯くありたしと云ひもせず、無言沈黙の中に隔ての垣を作る」と思う。「ロマンチスト」としての生き方を求める清と「ロマンチストにはなれない」という泡鳴の立場の相違から生じた問題であったと考えられる。おそらく、清は自身の求める精神的な愛を尊重されなくなったにせよ、泡鳴とはすでに肉体関係を持った夫婦同然の関係であったため、その沈黙を破

---

<sup>35</sup> 同前掲注6、434頁。

<sup>36</sup> 同前掲注6、440-441頁。

<sup>37</sup> 同前掲注6、439頁。

<sup>38</sup> 同前掲注6、439頁。

ろうと努めていたと考えられる。しかし、清の望む通りにはなれなかったであろう。

然し主人の不平の源は他にあることを知つてゐる。私の浮き立たない顔がそれだと知つてゐる。然し私は君のとがった言葉や、いらいらするのを見せられると、無関心ではゐられない。感ずる以上は、平和の時のやうに心から打とけてはゐられない。さうするのが優しい女と云ふのだらう。けれど私は感情を絶対になくす事は出来ない。生きた魂をもつてゐる以上、相手の如何なる不法な我儘をも、無関心で見つてゐる訳にはゆかない。

私としては只それを、主人につきつけないやうにしてゐるだけである。心に不快をもつことが絶対にいけないと云へば、私は死より外はない。

それでも無言の縄がとけたので、少しは主人の気分も直つたらしい。昨日の夕がたから二十九時間私達は無言の行をしたのだつた。

然し雲行の変り易い主人の気分は、いつ又淋しい顔を見合せるかもしれない。今夜の中にもどうなるか受合へないと私は心で思つた。

『淋しかった。』と主人は私の手を堅く握つて晴々した顔をした。かう急に御機嫌が直つたのでホッとしたやうなものの、又例の衝動が起つてゐるのではないかと気味が悪かつた。<sup>39</sup>

泡鳴は不機嫌な時には常に「俯いてねてゐる」<sup>40</sup>で「時々深く歎息してゐる」<sup>41</sup>た。清は夫の「神経過敏なのは性質だから」<sup>42</sup>と敢て思い、「それにつれて沈鬱になつてならないと思」<sup>43</sup>つた。夫の悩みに触れようと務め、「そんなら新聞記者をやめて、東京にお帰りになつたらいいでせう」<sup>44</sup>と逆らわないように言ったが、「東京に帰つたつて食へない」<sup>45</sup>という返事が返される。清は、泡鳴が仕事を辞めたいと思ひながらも辞められないのは、「私があるからだ」<sup>46</sup>と思ひ、自分が去ることで済むことであれば「いつでも別れてあげる」<sup>47</sup>とまで

---

<sup>39</sup> 同前掲注6、450頁。

<sup>40</sup> 同前掲注6、448頁。

<sup>41</sup> 同前掲注6、449頁。

<sup>42</sup> 同前掲注6、449頁。

<sup>43</sup> 同前掲注6、449頁。

<sup>44</sup> 同前掲注6、449頁。

<sup>45</sup> 同前掲注6、449頁。

<sup>46</sup> 同前掲注6、449頁。

<sup>47</sup> 同前掲注6、449頁。

思う。早くから経済活動をしていた清は「私だけを生活して行く力はある」<sup>48</sup>と  
てあげたいが、それを「云つてしまつて好いか悪いか」<sup>49</sup>と迷った末に、社会的な体面を重  
視する男の泡鳴の気に障ると思ひ、話すのを辞める。

しかし、清は泡鳴の不機嫌なのは仕事のためではなく、不機嫌の泡鳴を見ている自分自身  
の「浮き立たない顔」のためであると思う。夫を尊敬する妻の役割は、夫が外で何があつた  
らうと、夫の体面を保たせるために無関心でいるべきである。しかし、夫と対等な関係であ  
る妻の清としては、「相手の如何なる不法な我儘をも、無関心でみてゐる訳にはゆかない」  
のである。ともかくこの日は「無言の縄がとけた」が、その後の泡鳴の行動が清の気に障る。  
29時間も続いた苦しい沈黙の争闘が終わるや否や泡鳴は「淋しかつた」と又例の衝動が起つ  
たが、「肉的でない」清はそれによって気味が悪くなる。夫の不機嫌からなる「沈黙の争闘」  
や夫の頻繁なる不在は、清の理想とした愛から遠ざかっていく中で、「理性に於ては侮蔑し  
てゐる女の腐肉に執着をもつやうな盲目な」泡鳴の恋による肉体関係まで余儀なくされると  
いう生活に耐えることのできなかつた清は、やがてヒステリー病者になる。

#### 4. 「枯草」における妻のヒステリー

「枯草」の主人公小夜子は、長年家事を手伝ってくれていた下女が病気で帰郷したので、  
一人で家事を担っていた。広い庭の掃除や座敷、縁側の雑巾がけ等、先が見えない家事は小  
夜子にとって苦しい労働であつた。特に、11月末頃の朝は空気が冷たいので、毎朝湯殿に水  
を汲み込まなければならなかつたので、疲れ果てていた。友達に「お姫様の手のやうだ」<sup>50</sup>  
と言われていた小夜子の手は、今は松の皮のようにひびだらけで、風でも吹いたら手がこわ  
ばって血がにじみ出たりもした。その手を見るたびに小夜子は「自分で自分を哀れむやうな  
心持にな」<sup>51</sup>る。その日は珍しくも夫が朝から書齋にいたので、明るいうちに溜めてある買  
い物に出ようと、急いで台所を片付けていた。都会から遠く離れたところに住んでいるので、  
日用品を買うために五六町先きまで出なければならなかつたからである。それに、家を空け  
て出るのは、夫に厳しく止められているので、下女がいなくなつてからは夫の帰宅を待ち、  
買い物に出ていた。夫が昼食を済ますと、またしても出かけようとする様子だったので、小

<sup>48</sup> 同前掲注6、449頁。

<sup>49</sup> 同前掲注6、449頁。

<sup>50</sup> 岩野清「枯草」『青鞥』2(2)、青鞥社、1912年2月、43頁。

<sup>51</sup> 同前掲注50。

夜子は「疍走つた声」<sup>52</sup>で「今日は買物があるんですからお出掛けなさらないで下さい」<sup>53</sup>と言ったが、夫は4時には帰ってくると投げるように言って、出かけてしまった。小夜子は「あんまり思ひやりがなさすぎる」<sup>54</sup>夫の後ろ姿が恨めしく思われた。普段から頼れる人のいない異郷の生活で淋しがる自分を慰めてもくれない無情な夫であったので、小夜子はもう期待しないと思いつつも、夫が帰ってくると話した4時を心待ちしていた。しかし、その日も期待はずれであった。

ぬれた板の間をふいたり、茶の間を片付けたりして、それでも四時を心待ちしてゐた。

然し良人は五時がなっても帰って来なかつた。暮れやすい冬の日、もう暗くなってゐた。

所在なさに小夜子は鏡台の前に座った。灰や埃で白くなつた丸髻、臉の落ちくぼんだ目、艶も赤味もない鉛の様な皮膚がうつつた。

『これが私の顔かしら、丸でヒステリー病者だ。』かう思ふと、小夜子は、此頃の自分の心の淋しさを考へないわけにはいかなかつた。<sup>55</sup>

夫のために、老父を残し、住み慣れた東京を去ってきた小夜子であった。さらに「奮い道徳に囚はれた世間の人々から受ける嘲笑」<sup>56</sup>を、人には涙を隠して心強く忍んで来た。夫に大したことを望んで出京を決めたわけではなかつた。ただ「誠心のあるやさしい慰め」<sup>57</sup>や心を温められる「愛の熱」<sup>58</sup>があればそれで十分であった。しかし、それどころか、最近では小夜子に冷淡な態度をとっているだけでなく、暇があれば玉突で帰宅が遅くなっていたので、小夜子の好きな月の夜の散歩にも付き合えず、いつも小夜子を一人にさせていた。小夜子は下女がいなくなったこの一ヶ月間は一人の時間をすべて家事に費やしていたので、心身ともに疲れていた。若くて生き生きとしていた過去の自分の姿は、もはや過酷な労働や夫への恨みや淋しさで疲れきって衰えた姿となっていた。その姿が映された「鏡」には一人の「ヒステリー病者」がいるだけであった。

---

<sup>52</sup> 同前掲注50。

<sup>53</sup> 同前掲注50。

<sup>54</sup> 同前掲注50、44頁。

<sup>55</sup> 同前掲注50、45頁。

<sup>56</sup> 同前掲注50、45頁。

<sup>57</sup> 同前掲注50、45頁。

<sup>58</sup> 同前掲注50、45頁。

小夜子は「鏡」に映されている自分自身を「ヒステリー病者」と他者化し、その姿を見つめている。鏡の中の「ヒステリー病者」を小夜子は哀れむであろう。その悲惨な姿の「ヒステリー病者」にさせたのは夫であるが、それを治せるのも夫であることを知ると、小夜子の心の淋しさはより増していく。夫の愛情を渴望する小夜子は、やがて「枯草」になる。小夜子自身は潤いのない生活が続き、枯草になっていくのに、夫は「玉突きで楽しさうに高笑ひしてゐる」<sup>59</sup>と思うと小夜子は夫がいつそ憎くなった。

夫が帰宅したのは7時過ぎであった。小夜子は、わざと出迎もせず鏡台の側に座り、「ヒステリー病者」と一緒に夫を迎えた。夫はそうした小夜子に見馴れているように、「又か」と舌打ちをして、見向きもしないでいる小夜子の後方に帽子と外套を手荒く放り出し、用意してある夕飯の膳の前に座り、無言で食事しはじめた。二人の沈黙を破ったのは、妻の苦い顔が不快でたまらなくなった夫であった。夫は小夜子が「ヒステリー病者」となったのは、「どうせ貧乏で今の処思ふやうに物見遊山もさせられない。それだから元気がないむつつりした顔ばかりしてゐるのだらう」<sup>60</sup>と「物質の不満足」<sup>61</sup>が原因と思っていた。しかし、小夜子のヒステリーは物質的な不満足が原因ではなかった。

小夜子は又小夜子で、私の不機嫌はそんな物質の不満足ではない。たとへ下女のようにひびあかぎれに手足があれやうが、米の一升買ひをするやうな貧乏をしようが、そんな事はなんでもない。只、一日中、猫の子一匹ゐない程の淋しい家の中に、閉ぢ籠ってゐる、頼りない異郷住ひの心細さを察してくれたら、せめて、暇のある時は、夫婦らしい同情のある言葉でもかけてくれてもよささうなもの、良人の価値を信じてゐればこそ、かうして世間を敵として忍んでゐるのに、物見遊山に行かれなから、不足らしい不機嫌な顔をしてゐるのだなどと、浅はかな邪推をされるのがつらくも口惜しくもなつた。

『わたくしは、貧乏位で不足顔するのぢやありません。心から愛情をもって向ってくれる人なら、土方でも車力でも、私は満足してゐます。あなたと一緒になつてから、もう二年近くなりますが、只の一度だつて、「淋しかつたらう」とも、云はれた事はないのです。』

堰きとめた水を、一度に開いたやうに、今迄唾のやうに沈黙してゐた小夜子はい

<sup>59</sup> 同前掲注50、46頁。

<sup>60</sup> 同前掲注50、47頁。

<sup>61</sup> 同前掲注50、47頁。

きにかう吐き出した。<sup>62</sup>

夫の愛情が込められた「淋しかつたらう」といった言葉で一人ぼっちになった自分を慰めてくれたら過酷な家事や貧乏な生活にはいくらでも耐えられる小夜子であった。夫は扶養義務による疲労を玉突きのような外遊に慰めてもらっていたが、「家庭の犠牲」になった小夜子は、その犠牲に対する対価を夫に求めていたので、不在や「無情」で押し通している夫には期待できない状態であったといえる。上記で触れた1911(明治44)年5月13日付の「池田日記」には、「淋しかつた」と言いながら肉体的な愛を求めていた泡鳴について書かれているが、「枯草」においては「淋しかつたらう」と夫に言われ、精神的な愛を求めようとする小夜子が描かれている。

『帰ってくるつもりぢやあみたんだ。然し出掛けにいった言葉を考へると、「帰って来て頂戴ね」とでもいふなら可愛らしいが、疍走つたヒステリックの声で、つんげんと云はれたと思ふと、意地になって、わざと遅く帰つてやれと思ふ氣になつたんだ。』

若い女なら、若い女らしく、甘ったれやうな調子でも云ふのなら、却て可愛らしくていいのに、と良人は思ふのだ。

『わたしには、そんな、醜業婦のやうな甘つたれた口はきけないのです。』

小夜子は、かういつて、再び口を閉ぢてしまつた。どうせ男には、女の心持ちはわからないんだ。女の望んである温かい愛情、それを度外にして、只、肉の満足を与えたり、生活の保證をしてやりさへすれば充分だと思つてゐるらしい。女はそれでは満足できないのが分らないのだ。然しいくらそれを話しても、良人の一步も譲らないやうな態度をみると、もう、くどく、くり返す氣にはなれなかつた。

『どちらかの思想に同化してしまはな以上、こんな衝突はいつまでもたえないんだ。淋しい生活を続けなければならないのだ。』

話しあつたので、始めよりは、いくらか感情の静まつた良人に引かへて、小夜子は夜中こんな自問自答をして、心をいらいらさしてゐた。<sup>63</sup>

夫は帰宅が遅くなつたことについて、「可愛らしく」頼まれず、「疍走つたヒステリック

---

<sup>62</sup> 同前掲注50、47-48頁。

<sup>63</sup> 同前掲注50、50-51頁。

の声」で頼まれたことに意地になり、わざと遅れたという。小夜子にとって夫の望む可愛らしい女性というのは「醜業婦」にほかならなかった。妻の求める精神的な愛を度外視し、妻から肉欲的な満足ばかりを得ようとし、妻にお金を与えて生活を保証することで十分だと思っている夫に、若くて可愛らしい女でいてほしいと望まれた小夜子は「醜業婦」に転落してしまったような気がして堪らなかったであろう。夫は小夜子と話し合った後、ある程度感情が静まったようだが、一方で小夜子は一步も譲らない夫の態度を見て、精神的な愛と肉欲的な愛の「どちらかの思想に同化してしまはしない」限り、争闘はいつまでも続き、自分はいつまでも一人ぼっちで淋しい生活を余儀なくされるであろうと思い、心がいらいらして夜遅くまで眠れなかったようである。

1911(明治44)年11月末頃の生活を取り扱ったこの「枯草」は3ヶ月後の1912(明治45)年2月で発表されたという点では、二人の同棲生活が生々しく描かれたものではないかと考えられる。さらに、この時期は泡鳴に新しく相手ができる二人の関係が破綻する以前であり、清の父親や下女とも同居していなく、たった二人だけが生活していた時期でもあったという意味で、同棲生活に対する心境や状況がよく反映されていると考えられる。二人が同棲しはじめた時期から成り立っていた「愛の争闘」は1年半後の大坂での生活においても同じく繰り返し、続いていたといえる。

さて、「枯草」が執筆・発表された時期は、泡鳴が清と同棲してから執筆しはじめた「五部作」のうち、『憑き物』の一部である「川本氏」や『放浪』に継ぎ、『発展』が『大阪新報』に連載されていた時期とも重なっている。特に『発展』には、ヒステリーの妻を憎み、家庭に飽きていた夫の義雄が不在を繰り返し、やがて若い女優志望者のお鳥と関係を結ぶという話が描かれている。「五部作」において夫の視点から語られている妻のヒステリーは、ヒステリーの妻の醜さが強調され、夫の求める肉体的な愛が不可能となり、新たな愛を求めてお鳥と関係を結ぶしかなかったという、夫の行動に一種の妥当性や合理性を与えており、妻のヒステリーは女性の運命であるとされている。一方で、妻の視点から語られた「枯草」では、二人の離別の一因でもあった恋愛観の相違が泡鳴と清の同棲生活においてどのような問題をもたらしていたのかがヒステリーを媒介にしてあらわれていた。妻のヒステリーの原因は苛酷な家事労働や生活の窮乏にあるわけではなく、夫の無情さや冷淡さによる淋しい生活、さらに、妻を肉体的な欲求を満たすための手段に転落させてしまった夫の考え方によるものであるとされている。小夜子のヒステリーにともなう醜さや神経質な鋭敏さは、泡鳴の作品において家事によって精彩を失った妻に性的魅力を感じられない夫が妻に醜いといい、自分に愛情を求める妻の言動に対してヒステリーであると描いたことに影響をうけた誇張表

現とみることができると考えられるが、一方では運命から逃れることのできなかつた妻・清の実際としてみることもできると考えられる。以上のように、清と泡鳴の考え方の差がヒステリーを媒介にあらわれているが、こうしたヒステリーが二人の間の「争闘」をいつまでも繰り返させ、続かせる原因になっていると考えられる。

清と泡鳴は、二人が同棲を始めた時から、別居後、二人の間で起きた同居請求訴訟と離婚請求訴訟の事件、さらに、二人の生活を取り扱った評論や小説等、二人の一步も譲らない性格のために、死ぬまで絶え間なく「愛の争闘」を続けることになった。精神的な愛と肉体的な愛の争闘であったともいえるが、二人の思想的な相違からなる「争闘」が世間の注目を集めたというのは、二人だけの問題に限らず、当時の社会における男女の問題としてもあったからであろう。家庭問題や夫婦問題について触れている作品の中では、主に夫でありながら作家でもあった男性たちの立場で語られ、妻のヒステリーよる葛藤や不和が強調されがちであったといえる。夫の立場から語られた妻のヒステリーが主流をなしている中で、妻の立場から妻自身のヒステリーが語られたのが清の「枯草」である。

「枯草」では、妻のヒステリーを描くだけにとどまらず、妻の立場からヒステリーの原因についても語られている。当時のヒステリーの原因については、主に婦人病や性的欲求不満があげられていたが、清は精神的な愛の欠如と肉欲的な愛だけを重視する夫の思想を原因と指摘している。『道草』において、夫婦の不仲を和らげる緩和剤の役割をヒステリーが担い、夫婦の性愛を成立させている一方で、「枯草」においては精神的な愛の欠如を原因とする妻のヒステリーは、夫の沈黙や不在とつながり、精神的な愛が満たされていない状態で夫との肉体関係を余儀なくされ、夫婦の仲を悪化させている。

岩野清の「枯草」におけるヒステリーは、男性によって語られたヒステリーの負の側面をそのまま維持したうえで、そうしたヒステリーの原因を外部的な要因からではなく、思想や精神のような内部的な要因から追究したという意味では、当時の男性によって作り上げられた妻のヒステリーのイメージと対照的であると言える。おそらく、ヒステリーの妻に家庭不和の責任を負わせ、夫自身の言動に免罪符を与えていた泡鳴のような夫たちには歓迎されない作品であったろう。

## 第2節 与謝野晶子「姑と嫁に就て」—女性教育とヒステリー—

与謝野晶子は秀麗な歌を詠う歌人であり、社会問題を論じる評論家であり、思想家である。幼年時代の父母からの差別的な教育観に屈せず、劣悪な環境と条件の中で、絶えず本を読み、学び続けた。晶子の初歌集である『みだれ髪』は自分の経験した性愛を表現したものだが、

当時の女性に閉鎖的な社会に対する反発であり、一種の挑発であったと考えられる。また、日露戦争に参戦しなければならない弟を思いながら歌った「君死にたまふことなかれ」は当時の軍国主義に高揚している状況下で発表された作品であったため、好戦派から反発を買ったが、晶子は志を曲げなかった。こうした晶子の活動に世間が注目するのは当然であったと考えられる。晶子が女性であったために経験せざるをえなかった幼年時代の痛ましい女性差別は、自然に晶子に女性教育への関心を抱かせ、様々な評論活動を通じての婦人運動へと晶子を導いた。こうした活動によって培われた教育観は1921(大正10)年に設立された文化学院を通じて実現されたと考えられる。

以上のように晶子は女性として生きながら女性に不合理な社会に反旗を翻しており、社会問題の改善に努めてきたといえる。本論では、晶子が芸術方面から社会問題に関心を寄せはじめた1915年頃に発表された「姑と嫁に就て」の評論を中心に検討を行いたい。特に、評論において言及されたヒステリーを媒介にして、女性問題をどのように認識しているのか、さらにその問題を解決するために唱えた女性教育思想はどのように展開されたのかについて考察を行いたい。「姑と嫁に就て」は1915(大正4)年8月に報道された中根澄子という女性による姑殺人未遂事件を取り扱ったものであるが、晶子の評論を検討する前に、まずはこの事件について触れておきたい。

## 1. 中根澄子の姑殺人未遂事件

中根澄子の姑殺人未遂事件は1915(大正4)年8月8日から12日までの五日間にかけて朝日新聞に連載されている。この事件が実際に起きたのは同年7月6日というが、事件が起きてから約一ヶ月後に連載式で報道された記事の内容には、事件当日のこととともに、事件の被害者と加害者となった姑と嫁の不仲の原因について追究した内容も含まれている。事件の加害者である嫁の中根澄子と被害者となった姑のしげ子、そして澄子の夫でありながらしげ子の息子である芳次郎まで、この三人にまつわる葛藤は姑殺人未遂事件という結果を生み、澄子はついに懲役に処されるのである。

この事件が報道された1915(大正4)年8月8日付の記事<sup>64</sup>は「中根澄子(上)」と澄子の本名をタイトルに用い、「姑を斬った新らしい女」「どうした運命の導きか」という副題をつけ、澄子の実物写真も添付されている。報道された最初の段落には事件の概要として加害者と被害者の情報と事件当日の大略的な内容がまとめられているが、以下のようなものである。

---

<sup>64</sup> 『朝日新聞』(東京/朝刊)、1915年8月8日付、5面(以下、書誌情報は同一である)。

横浜市岡野町七電線会社技師工学士中根芳次郎氏(二十九)の夫人で大阪プール女学校の出身なる澄子(廿三)は大正二年四月芳次郎氏と結婚したが非常に派出好みな上に虚栄心に富み昨年从此春迄目覚める様な風をして近代劇研究会に通ひ芸名を山本ハンナーと名乗つてゐたが、姑しげ子(五十二)が之を憂ひてわざわざ来賓し俸に迫つて離縁話を極めた為め澄子は一時に逆上して七月六日の朝七時四十分良人が秘蔵の黒鞘の短刀と剃刀とを揮つてしげ子に斬りつけ自分も咽喉や胸部に突き立てた。

虚栄心の強い嫁を憂い、離婚話を持ち出した姑に逆上した嫁が刀を振り、傷害を負わせたというのが事件当日の顛末である。さらに、この事件の公判についても言及されているが、「——新しき虚栄の女——近所劇の女優——それに関する殺人未遂罪斯う揃つては世の中の視聴をいやでも聳動せずには置かぬ、二百枚の傍聴券は午前六時半開門と同時に交付済」になつたとあるように、この事件に対する世間の関心は高かつたことがわかる。そのため、連載記事の全般は主に公判で行われた審問や応答の内容をもとにまとめられている。

澄子は神戸西ノ宮の町長で兵庫県会議員の父・田澤熊衛と溫柔な人柄の母・たか子の間に生まれ、四人の兄と一人の妹がいた。二番目の兄は亡くなり、直ぐ上の兄は病身のために廃人同様になっていたという。澄子は神戸の小学校に入ったが、1年間は寄宿生活をし、その後は実家から通っていた。芳次郎と縁談が極まつたのは澄子がプール女学校を卒業する3ヶ月前で、学校の成績は平均「甲」であり、体操や図画は嫌いな科目であったが、博物、物理、数学などは好きであったと記されている。家庭環境も良く、教育もあり、学問好きなので、理智も相応に発達しているはずの澄子が恐ろしい殺人罪で起訴されているのは「どうした運命の導きであらう？」と問いかけたところで、一回目の連載が終る。

二回目の連載となる8月9日付の記事<sup>65</sup>には「無理解で成立した平凡な結婚」「現代化した「不如帰」の主人公」と紹介されている。澄子と芳次郎の結婚は、もとより懇意の間であった両家の父親のすすめで「新しい女としては当然条件となるべき筈の「双互の理解」を待たずして成立つたものであつた」という。澄子は「妻たるべき心の準備が出来てゐない」状態で、「自分で進んだ結婚ではありませんが一旦夫婦となつた以上良人の家を死場所と心得て居りました」と裁判長の前で答えたという。澄子は「神経過敏」であつたものの、夫の「芳次郎との間は至極円満」で、夫は澄子をよく理解してくれたそうである。しかし、「姑を交へた中根家の空気は全然私の実家とは違つたもの」で、「中根の家は冷たい氷室のやうに私

---

<sup>65</sup> 『朝日新聞』(東京/朝刊)、1915年8月9日付、5面(以下、書誌情報は同一である)。

には思はれ」たという。澄子は「姑との第一の衝突は——形には未に見はれませんでしたが一——必然的に要求する滋養物に要する費用といふ点」であったという。記者は芳次郎の月収で「衣食に奢る新嫁は慮りのある姑としては黙視難るのも亦当然であった」と言い、二回目の連載を結んでいる。

三回目となる8月10日付の記事<sup>66</sup>では、近代劇研究会に通いはじめた澄子が贅沢な洋装の格好していることが、「昔気質な姑のしげ子には苦々しくて堪まらなく、「虚栄から可愛い倅を苦める放縦な女奴と一図に憎さが嵩じ」、「若夫婦を監視の役目で約二月横浜の新居に逗留した」と姑の行動について記されている。さらに、芳次郎の妹は澄子が当時肺病で苦しんでいることを知っていながらも、無理やり訪れてきては数日も滞在したが、そのことで芳次郎は妹に絶交状を送ったという。しかし、芳次郎の妹が姉に鬱憤を洩らし、妹の「言葉に道理があると思つた」姉まで澄子を憎み、母のしげ子に知らせたことで、不仲はより深まったという。

8月11日付の記事<sup>67</sup>では、姑のしげ子が澄子を罵ったり、悪口で侮辱したりするなど、数々の皮肉や厭味で澄子を苦しめたことについて記されている。要するに、事件になるまでの経緯でありながら、澄子の犯罪動機にもなるであろう。8月12日付の最後の連載記事<sup>68</sup>には、しげ子が芳次郎に澄子との離縁を迫ったが、澄子に愛情を持っている芳次郎は「お前を棄てはしない」といい、しげ子から逃れようとしてしばらく銭湯に行っていたが、帰ってくると又も連れ込まれ、激しく口説き立てられ、ついに「どうも阿母さんのいふ通りにするより仕方がない」と澄子と離縁することを約束してから母の口説きがようやく終わったという。翌朝、二人は震える声で「御機嫌よう」と別れの言葉を交わした後、別れるところであったが、姑のしげ子が便所へ立った隙に澄子が箆笥から短刀を取り出し、懷中に隠したのである。その時の心情について以下のように記されている。

姑が便所へ立った隙に彼女は箆笥の底を探つて紫紐のついた黒鞆の九寸前五分を出して懷中に仕舞つた切れ味を疑つて更に剃刀をも取つて帯の間へ隠した、「死場所」を去られた彼女は一刻も生きては居られぬと思つたのである、いろいろな思想がごちやごちやと渦を巻いて激しく眩暈を感じた一睡もせぬ脳神経はしびれる様であつた、…（後略）…

<sup>66</sup> 『朝日新聞』（東京/朝刊）、1915年8月10日付、5面（以下、書誌情報は同一である）。

<sup>67</sup> 『朝日新聞』（東京/朝刊）、1915年8月11日付、5面（以下、書誌情報は同一である）。

<sup>68</sup> 『朝日新聞』（東京/朝刊）、1915年8月12日付、5面（以下、書誌情報は同一である）。

弁護士は澄子を弁護して「彼女は強度のヒステリーで夫が多くは月経の際に発したそして当日は恰も月経時であつた」のであり、さらに「彼女の祖母と叔母とが、精神病者である事」を述べて罪の軽減を主張したが、検事は被告の澄子の意識は「飽迄も明瞭で日本固有の道徳を無視した虚栄と放縦とから」家庭の崩壊をもたらし、親族を傷つけたという憎むべき犯罪として重刑を求めたという。記者は連載記事を以下のように結んでいる。

同じ日の同じ法廷に立つた無智な放火の女と共に彼女は今何を感じなにを思つてゐるであらうか「一生を監獄に閉ぢこめて終ひたい」と公判廷で言つた彼女、命長からざるべき病身の彼女！

無智な放火罪の女と理智な殺人未遂罪の澄子が罪人として同じ法廷に立っていると語った記者は、澄子が法廷に立っていることに対する不条理性を訴えているかのように思われる。さらに、「一生を監獄に閉ぢこめて終ひたい」と言つた澄子は病身に違いなく、どうかこの哀れな新しい女の罪を軽減してほしいと訴えているようにも思われる。以上のように報道された記事を読んだ晶子はどのように思ったであろうか。

## 2. 「姑と嫁に就て」—姑と嫁のヒステリー—

1915(大正4)年8月『太陽』に掲載された「姑と嫁に就て」において、晶子は中根澄子の殺人未遂事件について以下のように記している。

無教育な階級の婦人間に於てさへ類例を見出し難いことであるのに、工学士の妻として多少の教育もあり、女優として立たうと決心して居た程新代の芸術に対する渴仰もある婦人が、かう云ふ惨事を引起すに至つたに就ては何か特別な理由がなくてはならない。<sup>69</sup>

この評論は嫁の澄子が姑のしげ子に傷害を負わせ、「惨事」を引き起こしてしまったことには「特別な理由」があり、その理由を探ることによって、現在晶子自身が考える姑と嫁の問題、さらには女性の問題について述べたものであったといえる。

この事件が世間の注目を集めただけに、この事件を取り扱う新聞の記事が多かつたようで

---

<sup>69</sup> 与謝野晶子「姑と嫁に就て」『定本與謝野晶子全集 第十五巻』講談社、1980年5月、85頁。

あるが、晶子は上記で触れた『朝日新聞』を含め、この事件を報道した諸新聞が被告人に同情をもって「憎んで掛らずに、力めて細かに事件の真実を伝えよう」<sup>70</sup>としてくれたので、「被告と同じ女性の一人として感謝する」<sup>71</sup>と冒頭で語っている。ということは、晶子自身もまた被告人の澄子に同情をもって、この評論を書きおろしていくことを示唆していることにもなる。

晶子は報道された諸新聞記事の内容をもとに「特別な理由」について追究していくが、第一に指摘したのは、いわゆる無智な姑である。明治以前の思想をそのまま固執する姑が現代の教育を受けた若い嫁の心理に同感するどころか、絶えず反感を持ち、家風を前に持ち出して自分の旧思想を権威的に振り回し、嫁の個性を蹂躪し、抑圧し、そうした自分の行動に対して罪意識すら持たないことを指摘している。さらに、あらゆる干渉と疑心や口汚く罵るなど、嫁を苦しめる「世に謂ふ姑根性を可成多く備へた人」<sup>72</sup>であると評している。中根家の姑と嫁の如く、無智な姑のもとで多大なる苦痛に耐えながら生きていく嫁を知っていると、「姑に対する新聞紙の報道を誇張だとは思はない」<sup>73</sup>と付している。「新旧思想の過渡期に生れたあはれな」<sup>74</sup>嫁は「姑の無情非理を知りつつ」<sup>75</sup>、反抗することができず、「忍従の態度を取る外に賢い孝養の法がなかつた」<sup>76</sup>と述べている。

そのため晶子は第二の指摘として、夫が積極的にかかわるべきであったとし、夫は息子の立場として「母の旧思想を説破し、其苛酷な干渉を諫止して、夫婦の間の生活は専ら夫婦の間で決すべきものであることを宣明」<sup>77</sup>する役割を果たすべきであったと語っている。そうして時代錯誤的な思想から母を救い出し、現代に適した賢母であり、新しい母へ導くことができたなら、悲劇の運命は避けることができたのだが、中途半端な態度をとっていたために、母の恥を世に知らせ、妻を罪人にしてしまい、自らをも不幸へ導いたと晶子は言う。

晶子は、嫁が姑に直接傷害を負わせてしまったことについては、夫が同意しないにもかかわらず、姑や母の権威で嫁と離縁させようとしなかつたのであれば、温良な嫁は逆上しなかつたはずであるとし、逆上すると同時に刃物を取って姑に投げつけたのは、殺意をもって行った行動ではなく、「猛烈なヒステリーの発作」<sup>78</sup>のためだと主張する。

---

<sup>70</sup> 同前掲注69。

<sup>71</sup> 同前掲注69。

<sup>72</sup> 同前掲注69。

<sup>73</sup> 同前掲注69、86頁。

<sup>74</sup> 同前掲注69、86頁。

<sup>75</sup> 同前掲注69、86頁。

<sup>76</sup> 同前掲注69、86頁。

<sup>77</sup> 同前掲注69、87頁。

<sup>78</sup> 同前掲注69、88頁。

投げた物が偶ま刃物であつた為に大それた刃傷沙汰になつたが、ヒステリーの不可抗力に襲はれた其時の気分は、何でもいいから手当り次第に投げ散して鬱積した心の蒸気を狂的に洩さずには居られないのである。そして其不可抗力に襲はれて無茶苦茶なことをしてしまった後の甚しい悔恨と不快さは之を経験しない人に到底理解の出来相にないことである。意識の自制を失つた際とは云へ、姑に刃物を投げ付けて負傷させたやうな結果を作つたのであるから、其瞬時の後に自己に返つた若い妻が教育ある婦人だけに其悔恨が心を嚙んだことも異常であつたに違ひない。法廷に於て被告が誠心誠意の涙に咽んだと云ふのは同情されることである。<sup>79</sup>

殺人未遂事件はヒステリーの発作という「不可抗力」によるものであつたらうと述べているが、晶子も「或時期に往往はげしいヒステリーに襲はれる」<sup>80</sup>ことがあつたとし、澄子の「心理を十分に想像することが出来る」<sup>81</sup>と語っている。嫁が姑に傷害を負わせたが、ヒステリーの発作という「不可抗力」によるものであると、当時の澄子が「正常」の状態ではなかつたことを主張しているように思われるが、晶子の主張するところには、今に言えば心神耗弱の状態であり、おそらく澄子には責任能力がないことを強調しているように思われる。晶子自身がヒステリーの「不可抗力に襲はれて無茶苦茶なことをしてしまった後の甚しい悔恨と不快さ」<sup>82</sup>を経験したことから、法廷において「誠心誠意の涙に咽んだ」<sup>83</sup>澄子の心理に同感し、同情することは自然な成り行きであつたと考えられるが、単に感情に訴えているというより、ヒステリーの発作という「不可抗力」の状態であつたことを勘案して減刑を考えてほしいと訴えているのではないかと考えられる。さらに、晶子はこの事件に対する責任が澄子にだけあるわけではなく、事件の発端に最も大きな影響を与えた姑とその姑の悪態を傍観した夫にも責任があると主張しており、澄子に懲役8年刑を下した「在来の道徳や習慣を其不用な部分までも背景にして居る日本の法律」<sup>84</sup>にも懸念を示しているように思われる。晶子はこうした悲劇が「姑と嫁のある日本の家庭の大多数に伏在して居る」<sup>85</sup>と指摘し、根本的な問題の原因について以下のように述べている。

---

<sup>79</sup> 同前掲注69、88-89頁。

<sup>80</sup> 同前掲注69、88頁。

<sup>81</sup> 同前掲注69、88頁。

<sup>82</sup> 同前掲注69、89頁。

<sup>83</sup> 同前掲注69、89頁。

<sup>84</sup> 同前掲注69、89頁。

<sup>85</sup> 同前掲注69、89頁。

姑根性を脱しない大多数の姑達に就て、私は一概に憎悪のみを以て対しようとは思はない。之は私が姑と云ふ者を持たない境遇に居て、姑に対する気兼苦勞の実感を経験しないからでもあらうが、私は憎悪の外に気の毒などと思ふ感が附随して居る。なぜなら彼等の大多数の姑達は一方には教へられざる婦人であり、一方には老後の索寞、月経閉鎖期前後の悲哀、其他種種の事情から精神の平衡を欠き、若しくはヒステリイ症に罹つて居る婦人だからである。<sup>86</sup>

「姑根性」のような旧思想を保っているのは、無智のためであるとし、日本の教育が青年教育にばかり偏っていることを指摘したうえで、老婦人たちにも現代の思想について持続的に教育すべきであると述べている。晶子は無智から生じた「姑根性」による姑の悪態を強く非難している一方で、早くに夫と死別したり、夫がいても愛情がなくなっていたりして心寂しくなった姑が自分の子供に執着して嫁に嫉妬したり、月経閉鎖前後の「ヒステリイ的」<sup>87</sup>な諸症状のせいで嫁を苦しませてしまうことに同情し、「かう云ふ後天的理由で畸人化され病人化された姑其人は寧ろ気の毒に感ぜられる」<sup>88</sup>と語っているが、ヒステリーについては以下のように説明している。

ヒステリイは今日までの所、多数の婦人の或時期(月経時、妊娠時、分娩後、子宮病時)や或境遇(久しい間の独身、異常な災厄)に伴ふ共通の発作症である。其れに強烈なものと微弱なものとあり、又遺伝から来るものと特発するのとあるが、其れが或事を誘因として遽かに迫つて来る時には、人は意識の統一を失つて自分で自分が制し切れなくなるものである。<sup>89</sup>

晶子の語るヒステリーには先天性と後天性が混在している。上記で述べた姑の嫁に対する態度の問題については後天的な原因を強調しているが、「かう云ふ種種の理由の下に悪性になり、不良になつて居る多数の姑根性」<sup>90</sup>もまた、教育を通じて「明るく快濶な性情の人と改造する」<sup>91</sup>ことができれば、「嫁苛りに心を勞するやうな時代遅れの生活に甘んじ」<sup>92</sup>な

---

<sup>86</sup> 同前掲注69、90頁。

<sup>87</sup> 同前掲注69、92頁。

<sup>88</sup> 同前掲注69、92頁。

<sup>89</sup> 同前掲注69、88頁。

<sup>90</sup> 同前掲注69、92頁。

<sup>91</sup> 同前掲注69、92頁。

<sup>92</sup> 同前掲注69、93頁。

くなるだけではなく、「欧米の老婦人達が若い婦人と協力して諸種の社会事業や婦人問題に努力するやうに、日本の老婦人も何かの有用な事業に活動しようとするかも知れない」<sup>93</sup>と述べている。社会的な活動は人を「若返らせる回春薬の最上の物」<sup>94</sup>であり、それによって「孤独の悲哀や、僻みや、老婦人の生理的変化から得た病的心理なども大に減少され緩和される」<sup>95</sup>と語っている。

晶子の中根家に起こった事件に対する批評を目的にして文章を書いたというより、その事件を媒介にあらわれた嫁姑問題を、さらには日本の社会問題として考えていたことを論じようとしたが、特に、在来の道德習慣をもとに作られた教育や法律などが人間の平等のために存在しておらず、そうした社会の中で女性が依然として抑圧されながら生きていくしかない現実を非難していると考えられる。女性の自由なる生活のために不平等な社会と向き合わなければならないのは女性自身であるのに、無智な女性はその不平等に気づくことすらできない状態であるため、無智から脱することのできる教育を優先にしなければならないと考えたのではないかと思われる。しかし、既存の教育方針が賢母良妻を育成することに偏っていることもまた、改善すべき問題であるため、教育方針の整備をも必要だと思っているわけである。晶子は以後も女性に対する教育の必要性や改造について訴えつづけるが、1921(大正10)年に設立された「文化学院」に携わり、それまで理想としてきた「教育」の実践を試行する機会を得ることとなった。

### 3. 教育思想とヒステリー

1908(明治41)年の『明星』の廃刊後、晶子は雑誌や新聞を通じて、主に随筆と評論を発表した。1912(大正元)年、ヨーロッパ旅行以後、「芸術方面よりも実際生活に繋がった思想問題と具体的問題」<sup>96</sup>、すなわち、社会問題に関心を持ち、「さらなる学習(西洋近代哲学思想)を重ねて人間学的考察を行い、新思想を形成し」<sup>97</sup>、それを基盤として教育思想や教育論を樹立したという。晶子の評論活動において教育という分野は主に女性問題とともに取り上げられているが、こうした活動は晶子にとって「婦人運動に参加すること」<sup>98</sup>の一環であった。

---

<sup>93</sup> 同前掲注69、93頁。

<sup>94</sup> 同前掲注69、93頁。

<sup>95</sup> 同前掲注69、93頁。

<sup>96</sup> 辻秀子「与謝野晶子の教育思想」『社会学研究科紀要』26、1986年、60頁。

<sup>97</sup> 平子恭子「与謝野晶子の道德教育論—修身教科書への考察を教育勅語尊奉—」『日本の教育史学』40(0)、1997年、130頁。

<sup>98</sup> 同前掲注96。

晶子の初評論集に収められた「婦人と思想」は、1911(明治44)年1月『太陽』に発表されたものである。晶子は「日本人にはまだ考へると云ふことが甚しく欠けてゐる」<sup>99</sup>が、特に、「日本婦人には其欠点が著しく感ぜられる」<sup>100</sup>と語っている。「考へる」ことができないのは教育が足りないからであるというが、女性に対する教育の不足は「女子に高等教育は不必要だ、手芸教育が必要だ、女子は柔順に教育しなければならぬ」<sup>101</sup>といい、女性を男子に隷属すべきものと規定した保守的思想によるものであると指摘している。保守的な立場は女性への高等教育が女子政権運動のような弊害をもたらすとし、女性教育を制限しているが、それに加えて「目前の問題に対しても我国の中流婦人は何事をも知らない」<sup>102</sup>という現状に慨嘆している。

苟<sup>いやしく</sup>も在来の如き高等下女の位地に甘んぜざる限り、中流婦人が率先して自己の目を覚し、自己を改造して婦人問題の解決者たる新資格を作らねばならぬ。其れには何よりも先ず想ふ婦人、考へる婦人、頭脳<sup>いんぱん</sup>の婦人となり、兼ねて働く婦人、行ふ婦人、手の婦人となることが急務である。<sup>103</sup>

晶子は旧思想の問題を指摘している一方で、そうした思想に固執している明治期の教育を受けたという中流婦人の「多数が矢張首なし女である」<sup>104</sup>といい、「何等の思想をも持たない人」<sup>105</sup>であると批判し、女性に自ら考える力を持つことを勧めている。本格的に社会問題を論じはじめた1912年以前から、旧思想や女性の無智を問題視していたことがわかる。

1916(大正5)年1月に発表された「婦人改造と高等教育」においては、「理性的に自制することに力めたならヒステリイに由つて自他の苦痛を作ることは屹度半減するに至るでせう」<sup>106</sup>と語り、社会的男性の支配から逃れ、一個の人間として自由な生活を営むために、さらには、ヒステリーによる「自他の苦痛」を減らすために、教育は必ず行われるべきであるとしている。

また、1921(大正10)年1月に発表された「文化学院の設立に就て」の中では、教育目的に

---

<sup>99</sup> 与謝野晶子「婦人と思想」『定本與謝野晶子全集 第十四巻』講談社、1980年3月、13頁。

<sup>100</sup> 同前掲注99。

<sup>101</sup> 同前掲注99、17頁。

<sup>102</sup> 同前掲注99、18頁。

<sup>103</sup> 同前掲注99、18頁。

<sup>104</sup> 同前掲注99、16頁。

<sup>105</sup> 同前掲注99、16頁。

<sup>106</sup> 同前掲注99、186-187頁。

ついて以下のように述べられている。

私達の学校の教育目的は、画一的に他から強要されること無しに、個人個人の創造能力を、本人の長所と希望とに従って、個別的に、みづから自由に発揮せしめる所にあります。これまでの教育は功利生活に偏して居ましたが、私達は、功利生活以上の標準に由つて教育したいと思ひます。即ち貨幣や職業の奴隷とならずに、自己が自己の主人となり、自己に適した活動に由つて、少しでも新しい文化生活を人類の間に創造し寄与することの忍苦と享樂とに生きる人間を作りたいと思ひます。

107

晶子の言うところでは「完全な個人を作ることが唯一の目的」<sup>108</sup>であるというが、まさに男女ともに同じ環境で平等な立場で教育され、一個の人間として成長できれば、「人格者として優劣の差別があると思ふのは俗解であつて、各その可能を尽した以上、彼れも此れも「完全な個人」として互に自ら安住することが出来る」<sup>109</sup>平等な社会が成立するのである。さらに、女性教育については以下のように述べられている。

中学部の女学生に対する教育は、女子を以上の意味の完全な個人にまで導く基礎教育を施すのですから、女性と云ふ性別に由つて、教育の質と種類とを男子の中学生より低下し若くは削減しようとは思ひません。これまでの良妻賢母主義の教育は、人間を殺して女性を誇大視し、男子の隷属者たるに適するやうに、わざと低能扱ひの教育を施して居ました。私達は男子と同等に思想し、同等に活動し得る女子を作る必要から、女性としての省慮をその正当な程度にまで引き下げ、大概の事は人間として考へる自主独立の意識を自覚せしめようと思ひます。之が私達の学校で、従来的高等女学校の課程に依らずに、特に中学部女生徒と呼ぶ所以です。<sup>110</sup>

旧思想をもとにして形成された良妻賢母主義という弊害を強く非難してきた晶子は、それまで培われてきた教育思想や教育観をもとに新しい教育を「文化学院」にて実行することに

---

<sup>107</sup> 与謝野晶子「文化学院の設立に就て」『定本與謝野晶子全集 第十八巻』講談社、1980年11月、280頁。

<sup>108</sup> 同前掲注107。

<sup>109</sup> 同前掲注107。

<sup>110</sup> 同前掲注107、280-281頁。

なったのである。「人間として考える自主独立の意識」をもった女性が社会へ進出し、男性と同等な立場でいられること、さらにはそうした女性を偏見の眼で見つめず、自然に受け入れる男性を同時に育成していくのが「文化学院」の目的であったようにも思われる。

以上、晶子の評論の中でヒステリーの問題と関係づけてあらわれている晶子の教育思想について検討してみた。まず、晶子はヒステリーを疾病的な概念に準じ、当時の女性の病であるという言説に従っているが、女性の病という点を女性の社会的な問題として認識し、その原因や解決方を女性個人から追究したのではなく、社会の思想や教育から模索したという点に大きな特徴があると考えられる。特に、ヒステリーの苦痛を減らすことのできる方法として提示した女性の教育は、単に、当時の女性に対する不平等な教育制度を「改造」することにとどまらず、男女ともに平等に学べる環境を作り、根本的な男女差別をなくすことが真の目的であったと考えられる。晶子は文化学院の設立を通じて理想とした男女平等の教育を実践することにより、真の女性解放を目指したと考えられる。

### 第3節 宮本百合子「縫子」—働く女性のヒステリー—

宮本百合子はプロレタリア文学の代表的な作家であり、国家からの検閲や弾圧にも屈従せず文学活動を続け、多くの作品を残している。百合子の多事多難であった人生と同様、その作品の世界も多彩であったといえる。百合子は家族の反対にもかかわらず、アメリカの遊学中に出会った15歳年上の荒木茂と結婚するが、「互いを高め合い、豊かにそれぞれの仕事を伸ばすことの出来る愛」<sup>111</sup>を期待していた百合子は、「学習院の制服を着て満足し、植木をいじり、学問への情熱も理想もない」<sup>112</sup>荒木の小市民的な生き方に失望し、やがて離婚を決めた。

荒木との結婚生活を素材にした自伝的小説『伸子』は「婦人の人間としての自立と独立、成長を求める立場に立って、市民的結婚の桎梏と矛盾を追求したもの」<sup>113</sup>であり、「近代日本文学の中で特別な地位を要求できる婦人解放のための文学の中でもすぐれたもののひとつ」<sup>114</sup>であると評されている。一方で、近藤宏子は女中のような「貧しい彼女らの身の上の話」

---

<sup>111</sup> 尾形明子「宮本百合子の手紙—百合子と湯浅芳子—」『国文学 解釈と鑑賞』71、2006年4月、191頁。

<sup>112</sup> 同前掲注111。

<sup>113</sup> 宮本賢治「八百編の中から」『宮本百合子 時代と生涯』多喜二・百合子研究会編、新日本出版社、1976年12月、10頁。

<sup>114</sup> 江口渙「小説「伸子」の今日的意義」『宮本百合子 時代と生涯』多喜二・百合子研究会編、新日本出版社、1976年12月、82頁。

<sup>115</sup>は「女性解放を願う作家には、限りない宝庫のように思われる」<sup>116</sup>が、そうした女性たちは、「登場するとすれば、主人公の言動を補助したり、場の状況を説明するための道具の一つとしてだった」<sup>117</sup>と指摘している。そうした意味で「伸子と佃が暮す借家で家事労働を支えたはず」<sup>118</sup>の女中に名前すら与えられなかった『伸子』も近藤の指摘を退けることはできないように思われるが、近藤の先行論に対し、大河晴美は百合子の作品の中で「女中や元女中を主人公にした短編が五篇、老若二人の女中を構成上不可欠な人物として取り上げた短編が一篇ある」<sup>119</sup>と指摘し、六篇のうち女性雑誌に掲載された「黄昏」「ある日」「格子縞の毛布」「氷蔵の二階」の四篇を中心に考察したうえで、以下のように述べている。

「伸子」の陰となり、「勤労下層階級の生活に注目した作品系列」という分類に紛れて目立たない短編ではあるが、主婦と同じ女性である女中の境遇や内面、社会問題化していた女中不足の影響と性別役割分業を担う主婦と女中の関係、女中と女中ではない女性の類似、女中と職業婦人に共通する孤独を捉え、「伸子」にはない角度から、百合子の女性認識を表した小説として評価できるのではないだろうか。<sup>120</sup>

大河は末尾に、論じた作品の系列に属する作品として「縫子」を指摘しているが、本節では、大河の先行論を踏まえつつ、「縫子」の主人公である縫子のヒステリーを媒介にあらわれている婦人問題について検討したい。

## 1. 近代日本における女性教育と労働

まず、作品を考察する前に近代日本における女性の教育及び労働はどのように展開されていたかについてごく簡単に触れておきたい。女性の教育とその問題については、すでに第2節において触れてみたが、主に与謝野晶子が主張した教育改革を中心にまとめたものであるため、本項では女性の職業との関係の観点から、女性史総合研究会編『日本女性史』第4巻の近代編<sup>121</sup>を参考にしながら検討してみたい。

---

<sup>115</sup> 近藤宏子「百姓的イデオロギー」『重治・百合子覚書 あこがれと苦さ』社会評論社、2002年9月、56頁。

<sup>116</sup> 同前掲注115。

<sup>117</sup> 同前掲注115。

<sup>118</sup> 大河晴美「女中・元女中を描いた小説群―「黄昏」「或る日」「格子縞の毛布」「氷蔵の二階」をめぐって」『国文学 解釈と鑑賞』71、2006年4月、90頁。

<sup>119</sup> 同前掲注118、90-91頁。

<sup>120</sup> 同前掲注118、96-97頁。

<sup>121</sup> 女性史総合研究会編『日本女性史 第4巻 近代』東京大学出版会、1982年5月。

女性に対する教育が本格化するのには明治20年代後半とされている。日清戦争直前に「国民的統合と産業革命期に即応する労働力の育成」<sup>122</sup>という二つの課題をもとに進められた教育改革には、女性に対する教育をも含まれていた。以前から施行されていた学制<sup>123</sup>による女性の教育は実用性がないという理由で民衆にあまり受け入れられず、30%という低調な就学率にとどまったというが、その問題を補完するために加えたのが裁縫教育であり、それによって女性の就学率を高めることができたという。

裁縫教育は「実生活上の必要からの技術の習得を目的としたのみでなく、これによって得られる女子としての“躰”が重視されたものである」<sup>124</sup>とあり、「こうした教育に対する伝統的な期待をとりいれることによって就学の促進をはかることは、同時に教務教育の段階ですでに男女の特性を考慮し、教育内容における差別を公認することを意味し、女子教育＝裁縫教育という考え方が女子教育の中にながく引き継がれることになった」<sup>125</sup>という。さらに、女子の実業教育についても考案されたが、女教師、看護婦、産婆等のような特殊な職業を除いては、主に「裁縫・刺繍・機織などの分野に限られ、その他の職業分野への進出の可能性は閉ざされた」<sup>126</sup>状態であったという。女性のために設けられた教育政策は「儒教的な女性観」<sup>127</sup>をもとにした良妻賢母育成に偏っていたのであり、女性の職業といってもその教育に相応する限られた役割でしかできなく、労働に対する賃金や労働時間などの労働条件においても不平等であったという。

明治末期には職業を求める女性や女性解放論者により職業が勧められるという雰囲気は形成されていたが、それに対して以下のような動きがあったという。

女子教育の基本は良妻賢母主義にあり、「良妻賢母は最も自然な職業」であるとい  
って天職を職業と言いかえ、職業的自覚をもって家庭を守るべきことをとき、“職  
業熱”をすりかえようとしている。<sup>128</sup>

---

<sup>122</sup> 永原和子「良妻賢母主義教育における「家」と職業」『日本女性史 第4巻 近代』女性史総合研究会編、東京大学出版会、1982年5月、151頁。

<sup>123</sup> 学制は、1872(明治5)年に頒布された日本最初の教育法令で、教育令の公布により、1879(明治12)年に廃止される。

同前掲注121、9頁。

<sup>124</sup> 同前掲注122、152頁。

<sup>125</sup> 同前掲注122、152頁。

<sup>126</sup> 同前掲注122、153頁。

<sup>127</sup> 同前掲注122、153頁。

<sup>128</sup> 同前掲注122、171頁。

いわゆる「家事職業論」というのは、男性に比べ、劣等な女性ができることは家事であり、男性と女性が「分業的に働く事で社会や国家の役に立つ、男は外に働き進んで収入を殖し、女は家にあつて出づるを制する勤儉節約によって国家経済に両面から協力」<sup>129</sup>すべきだと主張したものである。女性が職業を持つということは、「家庭を放棄し品性を喪失するばかりでなく」<sup>130</sup>、「次代の国民の元気を沮喪する国家的損失」<sup>131</sup>をもたらすことになるため、働く女性が世間から非難を浴びせられるのは避けがたいことであつたらう。

「縫子」では家事や裁縫のような実用性のある教育を主とした実科高等女学校を卒業し、女中ではないものの、「家」に縛られ、よその家を転々しながら過酷な労働生活を余儀なくされ苦しむ女性が描かれている。次の項では、近代日本における女性教育がもたらした社会的な弊害の一例として「縫子」に照明を当ててみたい。

## 2. 働く縫子とヒステリー

大河は「女中・元女中を描いた小説群」として「黄昏」「ある日」「格子縞の毛布」「氷蔵の二階」を挙げているが、「縫子」もこれらの系列に属しており、この作品を「最後に百合子の小説は女中から遠ざかる」<sup>132</sup>と指摘している。「縫子」は1926(大正15)年11月「新潮」に発表された短編小説で、「離婚後の間借り住まいや湯浅芳子と同居した家で臨時の手伝いをしていて寿子をモデル」にしたものであるとされており、それは百合子の日記から確認することができる。

1924(大正13)年11月18日付

仕事にかかる。何だかうまくゆかず——出だしがしっくりしない故だろう、それに、寿子が入りし心を散す。中止。<sup>133</sup>

1926(大正15)年1月19日付

二時頃寿子が来てから、Y口やかましく小言を云って不快なので、瓜生にジアリン、臭剥など買いにゆく。<sup>134</sup>

---

<sup>129</sup> 同前掲注122、174頁。

<sup>130</sup> 同前掲注122、174-175頁。

<sup>131</sup> 同前掲注122、175頁。

<sup>132</sup> 同前掲注118、91頁。

<sup>133</sup> 宮本百合子「日記1 1924年」『宮本百合子全集 第二十三巻』新日本出版社、1979年5月、793頁。

<sup>134</sup> 宮本百合子「日記2 1926年」『宮本百合子全集 第二十四巻』新日本出版社、1980年7月、87頁。

1924(大正13)年11月18日付の日記は「離婚後」に対応し、1926(大正15)年1月19日付の日記は「湯浅芳子と同居」に対応する。さらに、百合子が「離婚後」、しばらく住んでいたのは「小石川区高田老松町のある裁縫屋の二階」<sup>135</sup>とされているが、『縫子』の主人公縫子は裁縫師の母のもとで裁縫の仕事を手伝っており、「二階の掃除をすませ、緩くり前かけなどをもって六畳に出て見る」<sup>136</sup>という冒頭部の内容とも一致している。以上の記録に基づき、冒頭を読み直すと縫子が掃除した二階というのは、実際には百合子が起居していたところであったと推定することができると考えられる。二階について言及されているのは、冒頭の部分だけではあるが、縫子が母のもとで裁縫の仕事をしている一方で、借家の主人の家の手伝いをするなどの「下の働き」をしていたので、二階の掃除もその仕事の一つであったと類推することができる。

二階の掃除を済ませた縫子が出てみると針子たちはほとんど来ていた。挨拶する針子たちに向かって「お早う」と答えた縫子は「自分の場所と定まっている地袋の前に坐」<sup>137</sup>り、火鉢を引き寄せ、手を焙じりながら、掃除で濡れた爪あかぎれの繻帯をほどいていた。部屋は針子の一人である米が千代乃について突然尋ねたことを皮切りに、千代乃の話で盛り上がっていたが、縫子はあまり興味を持っていないようである。一緒に働いていた千代乃は来年結婚するつもりだと自分から言っていたが、同僚には言わずに(もしくは言えずに)昨夜婚礼を挙げたのである。千代乃の婚礼は夕方の8時ごろであったが、千代乃の母親が「見て貰いたくって仕様がな」<sup>138</sup>く、婚礼が行われていた「お店をすっきり開けっぴろげて」<sup>139</sup>あったので、お湯から帰っていた縫子と同じ針子のでふに偶然見かけられたのである。礼服を着ている千代乃の様子を想像しながら、米は同情と羨望をあらわし、同じ針子の内気で年若なのぶもその様子が気になっているようであった。縫子は「てふが得意で喋るのがだんだんいやになり」<sup>140</sup>、見えなかったと答えたが、てふは「お婿さんよかずっと立派だったわよ。お婿さん、ありゃあきつと千代乃さんより小っちゃいに決ってるわ」<sup>141</sup>と言って皆を笑わせた。

二十歳前後の針子たちは「嫁に行くのがいいか、養子がいいか」<sup>142</sup>という二つの選択肢か

---

<sup>135</sup> 本多秋五「宮本百合子—その生涯と作品—」『宮本百合子 作品と生涯』多喜二・百合子研究会編、新日本出版会、1976年12月、25頁。

<sup>136</sup> 宮本百合子「縫子」『宮本百合子全集 第二巻』新日本出版社、1979年6月、579頁。

<sup>137</sup> 同前掲注136。

<sup>138</sup> 同前掲注136、581頁。

<sup>139</sup> 同前掲注136、581頁。

<sup>140</sup> 同前掲注136、582頁。

<sup>141</sup> 同前掲注136、582頁。

<sup>142</sup> 同前掲注136、582頁。

ら自分の未来を決めなければならなかったため、千代乃の結婚が他人事ではなかったろう。針子たちはどちらがいいのかと議論をはじめ、興に乗り、話し合っていたが、一方で縫子はその様子を「ぼんやり眺めてい」<sup>143</sup>るだけであった。

縫子はよく何も手につかずぼんやりしていることの多い娘であった。左の人指し指と薬指とに白金巾のきれっ端でちょいちょいと繻帯し、小さい蝶でもついているような手を大火鉢にかざし、その甲に頬ぺたをのせて皆の方を眺めている。火気のため、彼女の薄皮で色白な顔が上気せうるんだようになった。それでもそうやっている。<sup>144</sup>

縫子は濡れた繻帯をいじりながら、ぼんやりしていたが、それを見て「可哀そう」<sup>145</sup>と同情している人がいれば、「悲観してるの？」<sup>146</sup>と揶揄うようにしている人もいた。縫子は「眠くなっちゃった」<sup>147</sup>と生欠伸をしてごまかそうとしたが、針子たちにすぐに気づかれ、「高く笑いこけ」<sup>148</sup>られる。そうした態度によって、縫子は周りの人達から「いつからとなくヒステリー娘だと思われ」<sup>149</sup>ていた。

機嫌のいい時面と向って「縫子さん、またヒステリー起しちゃいけませんよ」などと出入りの細君が云っても、彼女はちっとも怒らなかった。万事心得た年のいった娘らしく笑って「へえ、へえ」などと冗談に紛らして答えた。自分でもヒステリーをそれなら承認しているのだろうか？<sup>150</sup>

縫子は自らをヒステリーと認めてはいなかったが、縫子にとって「本当のヒステリー」<sup>151</sup>の女は桃代と思われていた。縫子の家族は山科という秋田の大金持ちが所有している東京の別宅を借りて住んでいるが、桃代はその借家の主人の娘である。母親のなみが家主から頼ま

---

<sup>143</sup> 同前掲注136、582頁。

<sup>144</sup> 同前掲注136、582-583頁。

<sup>145</sup> 同前掲注136、583頁。

<sup>146</sup> 同前掲注136、583頁。

<sup>147</sup> 同前掲注136、583頁。

<sup>148</sup> 同前掲注136、583頁。

<sup>149</sup> 同前掲注136、583頁。

<sup>150</sup> 同前掲注136、583頁。

<sup>151</sup> 同前掲注136、584頁。

れる縫物をなかだちとし、「家賃三十四円の借家人と家主以上の関係」<sup>152</sup>が成立していたが、縫物だけでは済まず、縫子も働かされる。

女中や下男などに気に喰わないことがあると寒中でも水をぶっかけた。秋田ではそれでも働く人に事は欠かなかつたろうが、東京では山科の家の門だけ明いている訳ではない、と皆逃げ去る。困ると、縫子を迎えに来た。下の働きをさせるより、桃代の相手役に頼まれるのであった。年の大して違わない——縫子は二十三であったから——話相手の他人が入ると、桃代は水をかぶせるほどの癩癩は一遍も何故か起さなかった。おそろしく——一緒に並んで歩くのが極りわるいほど盛装して妻三郎の活動を見に行く位のものであった。<sup>153</sup>

桃代と年の近い縫子は、逃げてしまった女中の代りに「下の働き」をすることはあまりなかったものの、何故か話相手に対しては桃代はヒステリーを起さないで、時々気晴らしに動員されていた。縫子は「ただどうかした拍子で時々云うに云われず一切合財生活の事々が詰らなくなってくるだけ」<sup>154</sup>の自分のヒステリーと、「気に喰わないことがあると寒中でも水をぶっかけ」<sup>155</sup>のような乱暴ぶった桃代のヒステリーとを比較し、「そういうのこそヒステリーらしいヒステリーだ」<sup>156</sup>と思うのである。しかし、縫子の同僚や家族には縫子の倦怠感や疲労感に満ちている様子がすでにヒステリーと認識されているようだが、さらにはそうした縫子の様子に慣れているため、縫子のヒステリーを心配したりはしなくなっている。再び倦怠感を感じた縫子は下の家に戻り、休息をとるが、家族の無関心により、ヒステリーはかえって激しくなる。

### 3. 「家」における縫子のヒステリー

縫子は針子たちのいるところから何も言わずに出て来て家に戻り、御飯を食べると再び蒲団に入る。家は二間しかないため、臥せている縫子がすぐに目に見えるはずであるが、母親や妹の登美、針子たちは大したことではないように、「枕元に蹲んで話しかけ」<sup>157</sup>たりもし

---

<sup>152</sup> 同前掲注136、584頁。

<sup>153</sup> 同前掲注136、584頁。

<sup>154</sup> 同前掲注136、584頁。

<sup>155</sup> 同前掲注136、584頁。

<sup>156</sup> 同前掲注136、584頁。

<sup>157</sup> 同前掲注136、585頁。

ない。

変に放任されて、縫子は寝ている。彼女は侮蔑というほどでもない家じゅうの侮蔑にそうやって遠巻きにされつつ醒めているのか、うとうとしているのか。力が萎えて体がしゃんと立たない。大儀に寝がえりを打つ時など涙が眼尻から冷たく流れ落ちた。<sup>158</sup>

同僚や家族は縫子のヒステリーを「理解していると見え、誰一人真面目に心配」<sup>159</sup>してくれないのである。縫子は倦怠感がある上に、侮蔑された感じまでし、憂鬱となり、ヒステリーは激しくなる。そのまま一夜を過ごし、翌日になったが、縫子のヒステリーは収まらず、朝の六時半に起きた妹の登美が縫子を起しても「縫子はひどく充血した眼を開いて陰気に寝たまま、着換えしている妹を眺めてい」<sup>160</sup>るだけである。

私立女学校の三年生である登美は縫子が起きないせいで、登校の準備が進まず、縫子の代りに朝食の支度も余儀なくされたが、縫子は枕についたまま、「憤ってでもいるように」<sup>161</sup>催促する妹を凝っと見ては夜具を引きかぶってしまうのである。登美は仕様がなく母のなみを起してからようやく登校の準備ができたのだが、なみは「歯の工合でも悪そうに引かかる国訛の残っている声」<sup>162</sup>で「——また例のでしょう」<sup>163</sup>と縫子のヒステリーに不機嫌をあらわす。家族には縫子がヒステリーで「寝ついたということは、よその家庭で電球が一つこわれたという位の感情しか家じゅうに惹起さないらし」<sup>164</sup>く、父の勘次郎も「どうした」<sup>165</sup>と言ったぎり、縫子の夜具の裾の方で着換えてはいつもの通り出勤する。家族にとって縫子のヒステリーは又例のことで、大したこともなければ、別に心配する必要のない、いつもの風景であったといえる。かえって縫子がヒステリーを起すたびに、家族の日常が普段より慌ただしくなり、予定通りに進まないで、不満を抱いていたであろう。

それから家に一人残された縫子は、お茶漬けを食べながら、目に入って来る自然の風景に癒され、ようやくヒステリーが軽くなる。

---

<sup>158</sup> 同前掲注136、585頁。

<sup>159</sup> 同前掲注136、585頁。

<sup>160</sup> 同前掲注136、585頁。

<sup>161</sup> 同前掲注136、585頁。

<sup>162</sup> 同前掲注136、586頁。

<sup>163</sup> 同前掲注136、586頁。

<sup>164</sup> 同前掲注136、586頁。

<sup>165</sup> 同前掲注136、586頁。

脹れぼったい重い瞼でその日の澄んだいろを見ながら、くちゃくちゃふてた食べようをしているうちに、縫子は涙をこぼしだした。胸にしみ入るような淋しさがあつた。日の光があまり透明で晩秋らしいからだろうか。—— 一人でいると、心がどろろかなくなってしまったような縫子にも、こういう風に自然から迫って来るものを感じることが出来た。彼女は何故涙がこぼれるか人に話して聞かされないと同じに、何故自分がこんなひどい無気力に圧倒されるか自分にすら説明出来ない。日のいろを眺め涙を勝手に頬へ流していると、縫子は少し楽な気分になった。<sup>166</sup>

縫子は無気力に支配されながらも、その原因については自らも分からないでいる。しかし、確かなのは、ヒステリーは縫子を家族や同僚から疎外させ、孤独にさせていることである。さらに、そうした状況が反復的に繰り返されていることである。家族や同僚の無関心により発したヒステリーは、一人残された時に偶然目に入った自然の風景により、自分が存在しているという感覚を得て、ようやく治まるのである。その後、縫子は再び床に入り、ぐっすり眠ることができる。

縫子は西日が彰子に当り、針子たちも帰宅したごろに、母のなみと今泉という懇意な細君の低い話声がして目覚める。なみが縫子のことで悩んでいることを今泉の細君に話しているようであったが、その話が縫子に聞こえたのである。縫子が実科を出てすぐ勤め先が決まり、働いていたものの、朝起きるのが辛かったために、長く続かなかつたという話やお琴やお花やお稽古ごとでも好きなことがあれば好かろうにという話を、縫子は床の中から他人事のように聞いていた。その時、突然今泉の細君が大きな声で「今にちゃんとした方でも見付かって身がきまれば大丈夫なおりますよ」<sup>167</sup>と縫子に向けて話しているかのように言う。縫子は「心持を悪くし」<sup>168</sup>、「耳まで夜具をかぶり、再び物懶く目を瞑った」<sup>169</sup>が、今度は母のなみの声が聞こえる。

なみは今泉の細君が話したことに對し、「縫子には義理がありますから」<sup>170</sup>嫁に行かせることも、養子して跡を立てさせることも難しいという。縫子には二度目の母親であったなみは「あまり平らかな気持すぎて縫子のことを話すのでさえどこやら永年世話したお針子の一

---

<sup>166</sup> 同前掲注136、587頁。

<sup>167</sup> 同前掲注136、588頁。

<sup>168</sup> 同前掲注136、588頁。

<sup>169</sup> 同前掲注136、588頁。

<sup>170</sup> 同前掲注136、588頁。

人のことでも話す」<sup>171</sup>ように言う。なみは縫子のヒステリーに対して無関心であるだけでなく、縫子そのものにも無関心であるようである。縫子が「他人事」のように聞いていたのも、おそらく継母のなみの態度によるものであり、さらに、家事や裁縫などの実用性を重視した教育が行われる実科高等女学校を卒業したのも、娘の縫子のためというより、まさに縫子を「実用性」のある人間として養育するためであったのではないかと考えられる。

縫子は労働者として「家」という職場において労働を余儀なくされている。結婚や養子で新たな「家」に移っても、いつまでも働きつづけねばならないのである。縫子は労働を望まなくても、労働から逃れたくても「生れたままの弱い不活潑な心」<sup>172</sup>の持主であるため、「家」から離れることができない。ヒステリーはそうした縫子の「生存の苦しさ」<sup>173</sup>を象徴するものであると考えられる。

以上のように本章では、女性作家の文学作品の中でヒステリーがどのように描かれているのかについて検討した。ヒステリーとされる女性を描いたヒステリーの様相そのものは当時のヒステリー言説の内容と大して異ならない。しかし、ヒステリーを生み出す状況に対する批判や改善策を示唆している点で、一歩進んだ形で表現していたと言える。岩野清の場合は鏡に映された自分の姿を他者化し、それを見つめながら「丸でヒステリー病者だ」と比喻している点に特徴がある。これは自分をヒステリー病者としてみている夫の視点を認識していたうえで、自分は夫の考えるヒステリー病者ではないことを訴える箇所でもあったと考えられるが、「枯草」は主人公の小夜子を通じてヒステリー病者に見えるしかない状況について語りながら、自分の価値観と示したという意味では、男性の語るヒステリーを鋭く批判した作品であったと考えられる。

与謝野晶子の場合は姑嫁葛藤という問題においてヒステリーの持つ意味を単に個人の問題だけでなく、社会全体の問題として捉えたという点に特徴がある。これが自分の具現しようとした女性の教育思想にも影響を及ぼし、そうした教育思想を反映した学校を設立した。宮本百合子の場合は、無気力という症状を伴うヒステリーを用いて、女性の家庭内の労働が当然視された現実の中で、抵抗一つもできない縫子の苦しい人生を描いている。特に、宮本の描いたヒステリーの場合は、ヒステリーが男女の問題と関連付けられて用いられているのではなく、専ら女性個人の自我と現実とに焦点を当てているという点に特徴がある。

---

<sup>171</sup> 同前掲注136、588頁。

<sup>172</sup> 同前掲注136、597頁。

<sup>173</sup> 同前掲注136、597頁。

各作者によってヒステリーの用い方は異なっているものの、岩野清は「枯草」の小夜子のヒステリーを通じて、肉体的な愛を重んじ、精神的な愛は尊重しない恋愛観に対して批判した。与謝野晶子は姑と嫁のヒステリーを通じて女性の社会的な問題を認識したことで、不平等な教育制度の改造を試みた。宮本百合子は縫子のヒステリーを通じて女性の労働に対する不合理な処遇と劣悪な労働環境について指摘した。女性作家の作品の中で、ヒステリーは単に女性の感情を代弁する役割ではなく、作家自身の求める理想と関連づけられていたという点に共通の特徴があると考えられる。

## 第4章 ヒステリー患者と物語

ヒステリーはヒポクラテスの医学書に初めて登場した時から現在にいたるまで、数多くの医学者らによって定義され、研究されてきた。一方、作家たちは、医学者らの手によって蓄積されたヒステリーに関する医学的知識を、治療目的ではなく、物語を形成するための要素として創作に取り入れていった。本章では、そのような作家の作品において医学的知識がどのように機能しているかという観点から、ヒステリーの要素が果たす役割について考察を行いたい。

### 第1節 有島武郎『或る女』—葉子の破滅を中心に読み直す—

有島武郎の代表作である『或る女』は、1911年(明治44)年1月から1913(大正2)年3月まで「或る女のグリンプス」(以下、「グリンプス」と略す)という表題で、雑誌「白樺」に16回にわたって連載されていたが、この連載が改稿され、1919(大正8)年3月に『或る女』前編として叢文閣より出版された。次いで、それ以降の内容が書き下ろされ、同6月に『或る女』後編として、同じく叢文閣より出版された。『或る女』の主人公葉子は、婚約者木村をたずねてアメリカに渡航中、既婚者であった絵島丸の事務長倉地に心ひかれ、不倫を起してしまう。結末にいたっては、婦人病の手術の失敗やヒステリーの激化の結果、身体も精神も破滅して行く葉子が描かれている。

葉子を破滅させる重要な要因となっているヒステリーについては、多くの先行研究の中で論じられている。江頭太助は、有島が改稿加筆の際に、参考にしたと言われるハヴロック・エリス(Havelock Ellis)の『性の心理』(*Studies in Psychology of Sex*)の影響について論じ、ヒステリー研究の影響を指摘している<sup>1</sup>。坪井秀人は『或る女』に著しく見られる「ヒステリーと女性の気質と身体(とりわけ子宮)とを短絡させる思考は、同時代の医学的知見から見ても時代錯誤的な水準にあった」<sup>2</sup>という山本芳明の見解に賛同しながらも、「この頃の医学のディスクールは倫理的あるいは文学的なディスクールから十分には自立しておらず、むしろ倫理的・文学的な価値観が医学的判断に影響し、あるいは医学的な〈真実性〉の装いが倫理的判断を規定するというのが実情であった」<sup>3</sup>と指摘している。また、小坂晋は「『或

<sup>1</sup> 江頭太助「H・エリスの『性の心理学的研究』の影響—『或る女』研究の視点—」『有島武郎の研究』朝文社、1992年6月。

<sup>2</sup> 坪井秀人「第二章 ヒステリーの時代—『或る女』のマッド・シーン—」『性が語る』名古屋大学出版会、2012年2月、51頁。

<sup>3</sup> 同前掲注2。

る女』と『アンナ・カレーニナ』—比較対比研究序説—」の中で、「構造上、両作品の共通点は、(中略)激烈なヒステリーで破滅して行く漸層的な手法である」<sup>4</sup>と指摘している。

以上のように、『或る女』研究においてヒステリーは一つの重要なキーワードとして定着していることが分かる。有島は主人公葉子を破滅させる主な要因としてヒステリーを用いているが、なぜヒステリーを葉子の破滅の要因にしたのか、時代的にヒステリーが流行したとしても、性科学的な知識を用いてまでヒステリーにした理由はなぜだろうか。本論では、ヒステリーについての医学的な知識が『或る女』においてどのように用いられているのかを検討したい。

### 1. 「或る女のグリンプス」におけるヒステリー観

「或る女のグリンプス」が発表された明治末期は、それ以前から頻繁に言及されていた神経病という広義の枠組みから抜け出る形で、女性の神経病としてヒステリーが注目されはじめた時期である。当時、ヒステリーについて記されていた通俗医学書においては「狐憑病＝ヒステリー」という図式や新聞に神経病と報じられていた事件や事故などがヒステリーの事例として紹介されていたといえる。ヒステリーのイメージは、そのあらわれの特徴の興味深さが好奇心を呼び、ヒステリー患者に対する一種のステレオタイプ化を進めたと考えられる。

まず、「グリンプス」において田鶴子にあらわれている病的症状は、ヒステリーと婦人病を中心に語られている。当時のヒステリー言説では婦人病と関連づけて論じられたのが多く、婦人病の伝統的な概念として用いられていた「血の道」と理解されていたが、有島の描いたヒステリーにおいてもこうした言説の特徴がうかがえる。田鶴子が悲しみに暮れ、泣き出す場面が以下のように描かれている。

急に……急に何処をどう潜んで来たとも知れぬいやな淋しさが伏兵のやうに田鶴子を襲った。船に乗つてから春の草のやうに萌え出した元気はぼつきりと追つたやうにしをれてしまつた。(中略)今は船室に戻る気力もなく、右手でしつかりと額を抑へて、手欄に顔を伏せながら念じでもするやうに眼をつぶつて見ても、云ひやうない苦しさ淋しさはやまなかつた。田鶴子はすぐに殊に自分に激しかつた悪阻<sup>つはり</sup>の苦痛を思ひ起した……定子……(中略)背を波うたして深い悲しい溜息が出るのを

<sup>4</sup> 小坂晋「『或る女』と『アンナ・カレーニナ』—比較対比研究序説—」『岩手大学教育学部研究年報』(26)、1966年12月、26頁。

やめようとしても甲斐がなかった。<sup>5</sup>

乗船してから三日目の夕方に、初めて食堂に出た田鶴子は「事務長の挙動を仔細に見る事に気を奪われて居た」<sup>6</sup>が、事務長倉地の冷淡な態度に「淋しさ」を感じ、「悲哀が何処からともなく襲ひ入」<sup>7</sup>り、ヒステリックに泣き出す。ヒステリーの症状としては、ヒステリー一言説の中でもよく挙げられている頭痛や嘔吐の症状が用いられているが、嘔吐の症状に対しては「悪阻の苦痛」とあるように、妊娠した時の嘔吐の症状と同じような症状として表現されている。次の場面は、倉地の心を確認した田鶴子がシアトルに上陸せず、倉地と一緒に帰国するために、船医の興緑が考え出した仮病を使い、木村を騙そうと決心する場面である。

田鶴子は黙つて、皆んなの云ふ事を聞いてみる中に、興緑の云ふ事がやはり一番實際的だと考へた。而して慣々しい調子で興緑を見やりながら、

「興緑さん、さう仰れば私仮病ぢやないんですの。此間中から診ていたゞかうか知らと幾度か思つたんですけれども、あんまり大袈裟な様で我慢して居たんですが、どう云ふもんでせう——少しは船に乗る前からでしたけれども——お腹の此所が妙に時々痛むんですの」

と云ふと、夫れを聞きながら寝台に曲がりこんだ男はひとりでにやりにやり笑つて居た。田鶴子は一寸其男を睨らむやうにして一緒に笑つた。（中略）

倉地と二人になつてから事務長は軽々と田鶴子を膝の上に乗せて、後れ毛をいたづらしながら、

「本統かな腹の痛むのは。子宮だらう」「まさか」

二人は顔を見合はして笑つた。（中略）

田鶴子は冗談のやうにして興緑に病気の事を云つたが、実際可なり長い間子宮を害しているらしかつた。腰を冷やしたり、感情が激昂した跡には屹度収縮するやうな痛みを下腹部に感じて居た。船に乗つた当座は暫く忘れるやうに此不快な痛みからのがれることが出来て、幾年ぶりかで欠陥のない健康なよろこびを味へたのであつたが、近頃は段々とひどく痛みを覚えるやうになつて来た。<sup>8</sup>

<sup>5</sup> 有島武郎「或る女のグリンプス」『有島武郎全集 第二巻』筑摩書房、1980年2月、132-133頁。

<sup>6</sup> 同前掲注5、132頁。

<sup>7</sup> 同前掲注5、133頁。

<sup>8</sup> 同前掲注5、182-183頁。

実際長い間子宮を害していた田鶴子は仮病ではないことを訴えるのだが、誰も信じようとしない。倉地だけが田鶴子の言葉を聞き、妊娠を疑うが、田鶴子は倉地に出会う前から腹部に痛みを感じていて、自分の子宮に異常があるとすでに認識していたため、妊娠の可能性を否定する。子宮に異常があると疑える症状として「腰を冷やしたり、感情が激昂した跡には屹度収縮するやうな痛みを下腹部に感じて居た」とされているが、この表現からヒステリーと婦人病を関連付けていることが分かる。こうした有島のヒステリー観からみると『或る女』後編において「船の中にいる時にヒステリーになったのではないかと疑った事が二三度ある」<sup>9</sup>と回想する場面や「グリンプス」及び『或る女』前編において「ヒステリーに罹つて居るのではないか」<sup>10</sup>と疑う場面は、ヒステリーだけでなく、婦人病が重くなっていくことを暗示する場面としてみることもできると考えられる。

当時の文学作品において感情をあらわす形容用語として用いられがちであったヒステリーは「グリンプス」においては婦人病による痙攣や麻痺などの身体的な症状に伴う憂鬱や憤怒といった精神的な症状として用いられている。「グリンプス」では、主に婦人病による苦痛が甚だしく、ヒステリーは婦人病の一部として用いられている程度で、ヒステリーよりは婦人病が強調されているような印象がある。以上のような有島のヒステリー観は、『或る女』においてどのように変化したであろうか。

## 2. 母系によるヒステリーの遺伝性

「グリンプス」の中で婦人病と関連づけて用いられていたヒステリーは、改作後の『或る女』においても一貫してあらわれている一方で、さらに新たな特徴がうかがえる。明治末期から大正期にかけてあらわれているヒステリー言説の中で、目をひくのは遺伝性という考え方である。1910(明治43)年に刊行された児玉修治『健脳法』には、精神病の原因について以下のように記されている。

父母又は祖父母が神経病者であつたとか、或は精神病系統であつたとか、乃至糖尿病、ヒステリー、大酒家等は何れも脳に故障を生じてゐるものだから、それが子々孫々にまで禍をのこすやうになる。<sup>11</sup>

<sup>9</sup> 有島武郎「或る女」『有島武郎全集 第四巻』筑摩書房、1979年11月、258頁。

<sup>10</sup> 同前掲注5、118頁(『或る女』74頁に同様)。

<sup>11</sup> 児玉修治「第四 神経衰弱と其症状」『健脳法』内外出版協会、1910年9月、43-44頁。

また、杉江董『ヒステリーの研究と其療法』(1915)には、「遺伝中、最も多きは直接遺伝、即ち両親からの遺伝であつて、両親にヒステリー、神経病、精神病がある場合である」<sup>12</sup>と記されている。このようなヒステリーの遺伝性は「グリンプス」ではあらわれておらず、『或る女』からあらわれているといえる。特に、母親の親佐から葉子へ継がれるヒステリーの遺伝性は「嫉妬」という感情を媒介にあらわれている。

親佐と葉子の敵対関係という設定は改作する以前の「グリンプス」においても同じく用いられているが、この場合はヒステリーの遺伝の根拠とはいえない状態である。しかし、同じような関係設定が『或る女』においてはヒステリーの遺伝性をあらわす要素となっている。

殊に葉子の母が前から木部を知つてゐて、非常に有為多望な青年だと讃めそやしたり、公衆の前で自分の子とも弟ともつかぬ態度で木部をもてあつかつたりするのを見ると、葉子は胸の中でせゝら笑つた。(中略)

その中に二人の間柄はすぐ葉子の母に感づかれた。葉子に對して兼ねてからある事では一種の敵対を持つてさえゐるやうに見えるその母が、この事件に對して嫉妬とも思はれる程嚴重な故障を持ち出したのは、不思議でないと思ふべき境を乗り越してゐた。世故に慣れ切つて、落付き拂つた中年の婦人が、心の底の動揺に刺戟されてたくらみ出すと見える残酷な譎計<sup>わるだくみ</sup>は、年若い二人の急所をそろそろと窺ひよつて、腸も通れとつき刺してくる。<sup>13</sup>

木部に対して自分の子とも弟ともつかぬ態度を取っていた母の親佐が、木部と葉子の関係に気づき、嫉妬するというような場面が描かれている。この場面は「グリンプス」でも同じように描かれているが<sup>14</sup>、『或る女』においては「一種の敵対」、「嫉妬」の言葉の増補によって、親佐の葉子に対するヒステリックな心理状態がより強調されている。この場面では親佐がヒステリーであるような症候は詳細に描かれていないが、同じ線上にあるといえる葉子と愛子の敵対関係についての場面と類似していることから、親佐も葉子と同様にヒステリーであったということができると考えられる。

『或る女』の後編において、葉子が弟同様の少年である岡と妹の愛子との関係を疑い、嫉

<sup>12</sup> 杉江董『ヒステリーの研究と其療法』島田文盛館、1915年7月、10頁。

<sup>13</sup> 同前掲注9。

<sup>14</sup> 同前掲注5、70頁。

妬してヒステリーを起す場面は、親佐が葉子と木部の関係に気づき、嫉妬する場面と類似している。また、「親佐と葉子との二人に同時に慇懃を通じてみると云ふ、全紙に互つた不倫極る記事」<sup>15</sup>が報じられる場面では、噂に過ぎないスキャンダルであっても、親佐と葉子が一人の男をはさんで競っているようなライバル関係におかれているが、葉子と愛子も同様な関係におかれている。

倉地が外妾を二人持つてると云ふ噂は初耳ではあるけれども、それは新聞の記事であつてみればあてにはならない。その外妾二人というのが、美人屋敷と評判のあつたそこに住む自分と愛子位の事を想像して、記者ならば云ひそうな事だ。唯さう軽くばかり思つてしまった。<sup>16</sup>

娘である葉子に対する親佐の心理状態や異性相手に対して競争しているような葉子との関係設定は、妹である愛子に対する葉子の心理状態や関係設定と軌を一にしているといえる。つまり、葉子の愛子に対する嫉妬心は葉子を妄想させ、ヒステリーを激化しているが、このようなヒステリーの症状は葉子と同じ立場であつた親佐にもあつたといえよう。また、『或る女』において「性質が母親と何処か似過ぎてゐる為か」<sup>17</sup>と親佐との性質の類似さが増補されており、「グリンプス」において不明であつた親佐の死因が「親佐が病気になつて危篤に陥つた」<sup>18</sup>と改作されているのは、おそらくヒステリーによって破滅して行く葉子が、母の親佐と同様に死ぬという伏線をあらわしたのではないかと考えられる。

「グリンプス」と『或る女』に同じく用いられている親佐と葉子の敵対関係は、『或る女』において葉子と愛子の敵対関係を強調することによってヒステリーの遺伝性をあらわす要素となっているといえる。親佐と葉子のヒステリーは嫉妬という感情を媒介にあらわれているが、おそらく改作の際に参考にしたといわれるハヴロック・エリスの『性の心理』の影響からではないかと考えられる。『性の心理』からヒステリーと女性の性生活・性本能との関係性に関する新たな知識を得て、「グリンプス」においてヒステリーと婦人病という身体的な症状を中心に語っていたのを、『或る女』において婦人病に加え、ヒステリーと女性の性質を関連づけて語り、女性として生きることの苦しみが次の世代へ継がれていくということ

---

<sup>15</sup> 同前掲注9、26頁。

<sup>16</sup> 同前掲注9、433頁。

<sup>17</sup> 同前掲注9、25頁。

<sup>18</sup> 同前掲注9、26頁。

強調させていると考えられる。

### 3. 満たされない欲求という溝

有島武郎の1916(大正5)年3月27日付の日記には「本棚に置いて自慢できる本は何冊か買った」<sup>19</sup>と記されているが、その「何冊か」の中にはハヴロック・エリスの『性心理學の研究』が含まれていたという。次の日の3月28日付の日記には、次のように記されている。

午から夜遅くまで『ローマ史』(Roman History)少しとエリスの『性心理學の研究』(Psychology of Sex)を全部読む。特に後者から多くの知識と示唆を與えられた。性生活における女性の心理や、ヒステリーと性本能との間の関係など、いくつかの事實を学んだ。これはうまく扱えば稀に見る文學作品に仕上がるだろう。『或る女のグリンプス』を書き變えるのに有用な點が數々得られた。<sup>20</sup>

「多くの知識と示唆を與えられた」という記述から具体的な内容を計ることができないため、『性の心理』のどの部分が参考にされたかということは『性の心理』の影響に関する研究において常に問題とされている。江頭は「性生活における女性の心理」「ヒステリーと性本能との間の関係」の二項目に焦点を絞り、その二項目を満足させる研究は『性の心理』全七巻のうち、第一巻の「Auto-erotism」の章であるとし、「Auto-erotism」の章を中心に考察を進めている<sup>21</sup>。以上の先行論を踏まえつつ、ヒステリーについて再検討を行いたいと思うが、本論では有島の日記から得られた「性生活における女性の心理」と「ヒステリーと性本能との間の関係」の二項目からキーワードを絞り、そのキーワードを中心に『性の心理』の影響について考察を行いたい。なぜなら『性の心理』に関する記述が見られるのは有島の日記だけであり、『性の心理』から得られた具体的な知識としてはっきりといえるのは、この二項目のみであるからである。有島が『性の心理』から影響を受けたとして挙げている二項目からキーワードを絞ってみると、反復的に用いられている「性」という言葉が見出され

<sup>19</sup> 有島武郎「観想録 第五卷〔訳〕」『有島武郎全集 第十卷』筑摩書房、1981年10月、457頁。

<sup>20</sup> エティエンヌ・トリヤ『ヒステリーの歴史』安田一郎・横倉れい訳、青土社、1998年5月、48頁。

<sup>21</sup> 江頭は『性の心理』の影響によって、葉子のヒステリー性が強調されていると指摘し、「ヒステリーによる妄想の契機を作るために、愛子を葉子の憎悪の対象として設定したこと」、「葉子のヒステリー症の原因を、婦人病の生理的苦痛による性飢餓の状態としたこと」、「ヒステリーによる妄想を「神経衰弱になりやすい心的状態」の適用によって引き出していること」を指摘し、「羞恥心の進化」と「自体愛」の二つを主たる適用の対象とし、「性的周期性の現象」の月経による「性欲の昂進及び癩癖性興奮性ということ」をヒステリー症状の中で間接的に適用している」としている。

同前掲注1、80-81頁。

る。つまり、女性の「性生活」、女性の病であるヒステリーと「性本能」の二項目が指しているのは、女性の「性欲」ではないかと考えられる。

『性の心理』の影響によって変化した有島のヒステリー観が『或る女』においてどのようにあらわれているかについて考察を行う際には、ヒステリーの症状ではなく、ヒステリーの原因に焦点を当ててみようと思うが、その理由については当時のヒステリー言説に触れながら説明しておこう。糸左近『無薬療法』の中でヒステリーとして挙げられている症状についてまとめてみると以下のようである。

#### 「精神的症状」

嫉妬深くなる、我儘になる、感情が変わる、懦弱になる、物を銜う様になる、記憶が悪くなる、嘔吐になる、欺かれ易くなる、臆病になる、迷信になる、幻覚錯覚がある等

#### 「肉体的症状」

頭痛、眩暈、月経不順、汗かき、妙な癖が出る、便秘する、睡眠不良、消化不良、顔色が悪くなる、熱が出る、痙攣、麻痺、知覚喪失、人事不省、身体衰弱等<sup>22</sup>

糸左近が挙げているヒステリーの症状は、「グリンプス」と『或る女』においても同じく見られる症状である。このような症状の類似からみると、有島がヒステリーについての知識を糸左近の『無薬療法』から得たとみても違和感がないほど、ヒステリーについての症状は類型化されている。つまり、ヒステリーの症状は多様であるため、ヒステリーの症状に対する記述から『性の心理』を参考にしたと判断することは非常に難しいと考えられる。一方で、ヒステリーの原因の中では、内科的もしくは外科的要因もあるが、患者自身がある出来事からショックを受けたことによる精神的要因もある。特に、精神的要因の場合は、患者自身の経験したことがヒステリーの原因となるため、個人差が大きい。ヒステリーの原因から考えると、「グリンプス」のヒステリーにはなく、『或る女』のヒステリーにはあるといえるのは、ヒステリーに付加された性欲である。性欲は『性の心理』から得られた女性の「性生活」「性本能」と無関係ではないであろう。つまり、『性の心理』から得られた最も重要な知識というのは、女性の性欲とヒステリーの関係性であり、それが『或る女』の改作において大きな影響を及ぼしたと考えられる。

---

<sup>22</sup> 糸左近「ヒステリー」『無薬療法』田村奈良吉発行、1907年12月、72頁。

明治期におけるヒステリーの病因論は、子宮説が主に述べられ、婦人病や生殖器による病からなるというのが一般的であり、性欲の関係については「決して情の昂進ではない」<sup>23</sup>、「色情の亢進は甚だ稀にして、往々色情感覚の完全なる冷静を認む」<sup>24</sup>とあるように否定されている。ヒステリーの原因を性的欲求不満によるものとする性病因論<sup>25</sup>が一般的に用いられるのは、主に大正期からであり、有島が『性の心理』を購入した1916(大正5)年という年もまたその時期であるという点では、当時のヒステリー言説に従ったようにも思われるが、性欲と関連づけられたヒステリーは『或る女』においてどのように描かれているのかについて検討してみよう。

或る朝、思いがけなく早起きをした葉子は甲板で偶然と岡に会う。岡は倉地が葉子に何か頼みたいことがあると言っていたことを伝えるのだが、それを名分にし、倉地に会おうとする葉子は「胸に時ならぬときめきを覚えて、眉の上の所にさつと熱い血の寄つて来るのを感じ」<sup>26</sup>る。葉子は岡に頼んで倉地を起そうとするが、それに失敗した岡のお陰で葉子は直接倉地の部屋へ向かう。事務室の戸の前に来て「ノックをする隙もないやうなせかせかした気分になつてみた」<sup>27</sup>葉子はほとんど無意識に部屋に入る。岡の声で寢床から起き上がったらしい倉地から要件について聞いていた葉子は、倉地の部屋に飾っていた倉地の妻子の写真を見て「自分の敵がどんな獣物であるかを見極めてやるぞといふ激しい敵愾心が急に燃えあが」<sup>28</sup>るのである。その時、葉子は突然倉地に襲われる。

葉子は倉地の大きな胸と太い腕とで身動きもできないやうに抱きすくめられてみた。もとより葉子はその朝倉地が野獣のようなassaultに出る事を直覚的に覚悟して、むしろそれを期待して、そのassaultを、心ばかりでなく、肉体的な好奇心をもって待ち受けていたのだつたが、かくまで突然、なんの前ぶれもなく起こつて来ようとは思ひも設けなかつたので、女の本然の羞恥から起こる貞操の防衛に駆られ

---

<sup>23</sup> 同前掲注22。

<sup>24</sup> 石田昇「第六編 ひすてりー狂」『新撰精神病学』南江堂、1910年6月、199頁。

<sup>25</sup> 大正期に刊行されたヒステリー関係の文献の中で著名な杉江董『ヒステリーの研究と其療法』では性病因論に代表されるフロイトの学説について「嘗て小児期に於て受けた精神的外傷、殊に情欲に関して被むつた迫害、例へば猥褻、強姦等の被害に際し、充分に羞恥、憤怒等の感動を外に発散せず、寧ろ抑圧して置く様なことがあると、それが後日になつて、不識の裡に強激な刺戟となつて、ヒステリーを起す様なことがある」と紹介されている。

杉江董「第一章 ヒステリーの意義」『ヒステリーの研究と其療法』1915年7月、6頁。

<sup>26</sup> 同前掲注9、120頁。

<sup>27</sup> 同前掲注9、121頁。

<sup>28</sup> 同前掲注9、125頁。

て、熱しきつたような冷えきつたような血を一時に体内に感じながら、（中略）葉子はわれにもなく異常な興奮にがたがた震え始めた。

\* \* \*

（中略）倉地が部屋の戸に鍵をかけようとしているところだった。鍵が合わないので、

「糞つ」

と後ろ向きになつてつぶやく倉地の声が最後の宣告のように絶望的に低く部屋の中に響いた。（中略）

葉子はいきなり寝床の上に丸まって倒れた。そしてうつぶしになつたまま痙攣的に激しく泣き出した。倉地がその泣き声にちよつとためらつて立つたまま見ている間に、葉子は心の中で叫びに叫んだ。

「殺すなら殺すがいい。殺されたつていい。殺されたつて憎みつづけてやるからいい。わたしは勝つた。なんといつても勝つた。こんなに悲しいのをなぜ早く殺してはくれないのだ。この哀しみにいつまでもひたつていたい。早く死んでしまいたい。……」<sup>29</sup>

改作されたこの場面では、「グリンプス」において倉地の肉体美に惹かれながらも倉地の突発的な行動により羞恥心を感じた田鶴子が、倉地に対して懸命に抵抗を試みる。しかし、抵抗は失敗し、倉地の熱い唇を感じた田鶴子は羞恥心により、痙攣的に激しく泣き出す場面として描かれている<sup>30</sup>。改作後の『或る女』においては、倉地の突発的な行動に葉子は羞恥心を感じながらも、野獣のようなassaultに出る事を期待している。倉地に対して懸命に抵抗する場面は削除されており、「異常な興奮にがたがた震え始めた」と増補されたこの描写からみると、葉子は性的興奮が高まっていたといえよう。倉地との接吻があった場面は「\* \* \*」の印に改変され、曖昧になっており、その次の場面では興奮した倉地が部屋の戸に鍵をかけようとするが、それに失敗し、「糞つ」とつぶやく。その倉地の声が葉子に最後の宣告のように絶望的に低く響いたと改訂・増補されている。その後、残酷な悲哀により、痙攣的に激しく泣き出す葉子のヒステリーが描かれている。

---

<sup>29</sup> 同前掲注9、125-126頁。

<sup>30</sup> 同前掲注5、157-158頁

『性の心理』の「羞恥心の進化」の項に、エリスがオーストリアの精神医学者アドラーの研究を引用して「女性の性的衝動は羞恥心によって抑圧されるので、抑圧は絶えず克服されなければならないことになる」<sup>31</sup>と述べられている。江頭は「羞恥心の進化」から、羞恥心は女性の媚態を発達させ、魅惑的武器となっており、女性の色情的衝動の一表現として用いられていると指摘し、「羞恥心を倉地に対する葉子の媚態として表現し、またそれを「不可犯性」として倫理的にとらえた」<sup>32</sup>と述べている。

「グリンプス」では、倉地に征服された田鶴子は「本然の羞恥から起る冷刻な侮蔑心がむらむらと胸に湧」<sup>33</sup>き、「血が一時に氷になつた」<sup>34</sup>とあるように主に屈辱、侮蔑といった羞恥心が原因でヒステリー発作を起す。一方『或る女』では「熱しきつたような冷えきつたような血を一時に体内に感じながら」倉地から自分の貞操を守ることでできた葉子が「なんといつても勝つた」と絶叫しながらヒステリー発作を起す。改訂・増補されたこの場面では、葉子は性的衝動が羞恥心によって抑圧され、自ら性的行動を行おうとはしないが、倉地に手籠めにされるまで自分の性的欲求が満たされることを期待しているのである。しかし、戸に鍵をかけることに失敗した倉地によって、期待していたことは挫折し、性的欲求は満足し得られなくなったのである。つまり、この場面であらわれているヒステリーの原因は、倉地に抱かれるのを期待していたのが、失敗で終わり、自分の欲求を満たせなかったことが原因であったと考えられる。初めて葉子への欲望を表面にあらわした倉地と、そうした倉地に渴望していることに気付いた葉子はこの事件以後、親密な関係となる。有島は『性の心理』を参考にして得られた知識から、女性の本能を強調する性欲を既存のヒステリー観に付加したと考えられるが、このようなヒステリーは『或る女』において、倉地に対する性的欲求が満たされないとヒステリー発作を起すという形で描かれている。

以上のように「グリンプス」から『或る女』にいたるまで、有島のヒステリー観は婦人病、母系遺伝、性欲と関連づけられており、いずれも女性という性別を強調している。しかし、ヒステリーを女性の病として婦人病と関連づけたことや『或る女』に改作後、付加された母系によるヒステリーの遺伝性、欲求不満を原因とするヒステリーはいずれも「女性の性(そしてヒステリー)をめぐる強力な偏見と差別の連鎖」<sup>35</sup>を助長する結果をもたらしている

---

<sup>31</sup> ハヴロック・エリス「羞恥心の進化」『性の心理 Vol.1 羞恥心の進化』佐藤晴夫訳、未知谷、1996年10月、32頁。

<sup>32</sup> 同前掲注1、96頁。

<sup>33</sup> 同前掲注5、175頁。

<sup>34</sup> 同前掲注5、175頁。

<sup>35</sup> 吉田禎吾・板橋作美「憑きものと社会構造」『日本民俗文化資料集成 第7巻 憑きもの』谷川健一編、三一書房、1990年3月、51頁。

いえる。さらに、重くなる婦人病とともに、ヒステリーも激しくなり、結末にいたっては絶叫しながら死んでいく葉子が描かれている。

次に、有島のヒステリー観を踏まえ、有島がヒステリーを通じて描こうとした葉子の破滅とはどのような意味をもつのかについて、有島の女性論を中心に検討してみたい。

#### 4. 有島武郎の女性解放思想

有島は「日本の男性作家の中で最も深い共感と同情をもって女性を書いた作家」<sup>36</sup>であると評されており、『或る女』の葉子という人物にはそうした有島の女性観が反映されているといえる。有島は女性についての文章を多数残している。有島の評論類を収めた筑摩書房版『有島武郎全集』の七、八、九、十五巻を中心に、有島の女性論を考察した江種満子は有島の女性論について次のように述べている。

有島は、資本主義社会の利益追求のシステムが一夫一婦の近代家族という家族制度を作り出し、その制度は女性に苛酷な拘束を加える性差別構造を根幹として成り立ち、結婚という性の形、貞操という性の道徳によって女性の行動の自由を奪い、女性の欲望の自由を奪い、永遠に性差別が続くことを求めて知的なたくらみをこらしてきたことを見抜いた。そしてそのことを、おそれることなく語り続けた。近代の知のたくらみが隠したものを暴きつづけた。<sup>37</sup>

有島の女性論は性の自由こそ女性の解放につながる道であるとし、経済的かつ政治的な女性の権利などについては、根本的な女性の解放につながらないことを指摘している<sup>38</sup>。つまり、女性が性の自由を確保することに真の女性解放の意味があるということであろう。

宮本侑佳は女性の自立と解放に関する有島の評論から女性観を捉え、女性登場人物の分析を行ったが、『或る女』について以下のように記している。

---

<sup>36</sup> 江種満子「有島武郎の女性論」『文教大学国文』(37)、2008年3月、45頁。

<sup>37</sup> 同前掲注36。

<sup>38</sup> 江種は「当時、やはり平塚らいてうを中心として進められていた婦人参政権を要求する運動に対しては、「婦人参政権を獲得しても、女性が男性化したにすぎない」と批判する。女性は「女性独自の社会」を生み出せるはず、という考え方が有島の内部に根強くあったことはたしかである。つまり、女性が家庭の性別役割労働から解放されることに賛同しながら、公的な政治の場に性別を超えて参入することには否定的だったのだ。」と述べている。

同前掲注36、51-52頁。

有島は女性解放に関する評論の中で、女性は真の解放にあたり女性独自の社会を構築することが必要であり、「女子の天才」こそがその女子のみの世界を創り上げられるのだ、としている。「何時でも現在を一番楽しく過ごすのを生れながら本能としてゐる」葉子は、「女子の天才」への道を歩んでいたかもしれない。しかし結局「天才」にはなりきれなかった。気の進まない結婚をし、アメリカで安定した生活を手にすることと、周囲の反対を押し切って愛する相手と日本で暮らすこと、この二つの選択肢から後者を選んだ瞬間、葉子は目覚めようとする女性としての頂点を迎えると同時に、破滅への道に踏み出したのである。<sup>39</sup>

宮本は、葉子が「二つの選択肢」から「アメリカで安定した生活を手にすること」を選ばず、「愛する相手」の倉地を選ぶことによって、「天才」にはなりきれなかった」と指摘しているが、このような解釈は「女子の天才」をどのように理解するかによって異なってくると思われる。ここでいう「女子の天才」は、有島が1920(大正9)年1月号の『婦人之友』に発表した「内部生活の現象」の中で用いた言葉であるが、その内容は次のようである。

私は女子の天才に、換言すれば獨特の本能的生活に女性の解放を期待せずには居られません。天才とは自分自身を明確に知りぬき、さうしてそれを明かな形で表現し得る人の事です。女性に就いて云へば、女子が今まで男子から被つてゐた凡ての感化影響から全然獨立して、女性自身として考へ且つ行ふことです。これが本當の女子の覺醒であり解放でなければなりません。女性の固有の立場から人類の生活を觀察し、解決することです。(中略)かくして男子の立場からの生活様式と、女子の立場からのそれとが調和結合した、その上に人類の生活が建て上げられた時に、初めて男女は同じ水準の上に同じ權利と義務とを共有して、完全な生活を建設し得るものと私は信じます。

だから私の女性に望む所は、女性の中から眞の天才が現はれることです。即ち女子が知的生活から本能的生活に突入して、そこには本當の自己を見出すことです。

40

---

<sup>39</sup> 宮本侑佳「有島武郎作品における女性像の諸相と変遷—「お末の死」から「星座」まで」『国語国文薩摩路』(54)、2010年3月、156頁。

<sup>40</sup> 有島武郎「内部生活の現象」『有島武郎全集 第八卷』筑摩書房、1980年10月、445-446頁。

有島は「女子の天才」という言葉を用い、女性の「本能的生活」を強調しているが、「自己を愛し、自己を知る」<sup>41</sup>ことが天才の重要な要件となっている。また、『惜しみなく愛は奪ふ』の中で「個性は外界の刺戟によらず、自己必然の衝動によつて自分の生活を開始する。私はこれを本能的生活 (Impulsive Life) と仮称しよう」<sup>42</sup>と述べている。有島はこのような「本能的生活」を葉子を通じて描いているが、「間違つてみた……かう世の中を歩いて来るんぢやなかつた。然しそれは誰れの罪だ。分らない。」<sup>43</sup>という葉子の独白から彼の思想が当時の社会には受け入れられないことが示唆されていると考えられる。つまり、有島の女性に対する「本能的生活」という思想は社会に受け入れ難く、そうした思想の限界性が葉子を媒介にあらわれているのではないかと考えられる。さらに、その思想が反映された作品の中の女性人物たちが、当時の女性読者に理解され得なかつたことについて有島は次のように記している。

私はよく女性の人から私の創作中に出て来る女性について批難を受ける。その人達のいふ所に従えば、私の描出する女性は概していふと、いつでも私の描出する男性よりも低い水準にあるか、ひねくれた性格を持つてゐる。女性は私によつてある侮蔑をうけてゐる、とのことだ。私は嘗て異性に対してそんな先入的な僻見を抱いてゐたつもりはないのだけれども、結果は或はさうなつてゐるのかもしれない<sup>44</sup>

女性の解放が性の自由を確保することから始まるという有島の思想は、当時の社会が女性に求めていた道徳や倫理の基準から考えると、多少不純なものであつたろう。こうした有島の思想は女性の貞操論からもうかがえるが、以下のようなものである。

貞操であれ、何であれ、ある道徳が要求される場合には、その道徳自身の為めに、要求されなければならない。その要求の背後に、他の目的が潜んでゐたならば、その要求は不純なものであつて、道徳夫自身に対する冒瀆である。人はこのやうな種類の道徳的要求に服従すべき義務を有さないし、また、服従するのが恥辱である。

(中略)

---

<sup>41</sup> 同前掲注40、442頁。

<sup>42</sup> 有島武郎「惜しみなく愛は奪ふ」『有島武郎全集 第八巻』筑摩書房、1980年10月、165頁。

<sup>43</sup> 同前掲注9、435頁。

<sup>44</sup> 有島武郎「三つの希望」『有島武郎全集 第八巻』筑摩書房、1980年10月、247頁。

ある種類の女子貞操論者に云はせると、未婚の女子は、恋愛を経験してはならない。一度、結婚した以上は、総ての軛を一身に背負つて、家庭の仕事に専一でなければならぬ。何等かの事情で良人と別れた以上は、生涯、独身を通さなければいけない。これが、彼等の主張する不文律である。しかしながら、実際の心の働きに於ける、女子の貞操とは、そんなものではないと、私は思っている。生涯に一度だけより、恋愛を経験しないと云ふことは、この上もない崇高な、さうして、幸福な運命である。けれど全ての人が、常にかくの如き運命を以て、恵まれて居ない。恋愛が二度来るとも、三度来るともあるだらう。その時、その人が当面の問題に対して、如何に真剣で、忠実であるかが、この場合大切である。これが貞操である。

45

有島は、当時の恋愛や結婚において要求される女性の貞操の観念、その観念自体に問題があると指摘し、貞操上の自由を主張している。有島が女性に求められている性に対する倫理をまさに女性の自由を抑圧するものとして認識し、葉子の愛に対する執着と渴望、そして不倫という社会的な問題を「問題」として認識していることから、不倫を問題視していなかったとみてよいであろう。しかし有島と当時の社会の間に生じた性に対する思想的なズレは、葉子の欲求不満によるヒステリーや不倫、そして破滅という結末は自業自得や勸善懲悪として捉えられてしまうという結果をもたらしている。

有島の立場から葉子のヒステリーと破滅を読み直すと、どのように解釈できるであろうか。有島は1907(明治47)年3月23日の日記に『アンナ・カレーニナ』を読了した後、アンナについて次のように記している。

彼女の生涯は嵐のようである。否、暴風雨である。彼女は、もし弱者に会うならば、それを打ち控くであろうし、強者に会えば自ら打ち控かれるであろう。而も彼女は、両者を避けようとはしない所か、そのどれかを捉える事を寧ろ好んでいる。

(中略) 世間は彼女を知っていないのだ。彼女はこの世に属しているものではないのだ。一迷子の天使とでも言うがよかろう。可哀想な魂よ！！<sup>46</sup>

<sup>45</sup> 有島武郎「感想—貞操上の自由—」『有島武郎全集 第九卷』筑摩書房、1980年10月、247頁。

<sup>46</sup> 有島武郎「観想録 第十五卷〔訳〕」『有島武郎全集 第十二卷』筑摩書房、1981年4月、215-216頁。

アンナに同情していた有島は、アンナと同様に葉子を破滅させたのである。先述したように、有島の描いた葉子のヒステリーは「女性」であることを強調するために、婦人病、母系遺伝、欲求不満が用いられており、そのヒステリーと葉子の破滅とを関連づけたことにより、象徴的な意味をもつことになる。自ら命を絶ち、悲劇的な人生の終幕をつげたアンナに対し、葉子は婦人病を治療するために手術を受けるなど、最後まで生きようと努める。しかし、葉子の手術は失敗に終り、「痛い痛い痛い……痛い」<sup>47</sup>と苦しみながら絶叫するところで幕が降りる。女性を象徴する子宮と、その手術の失敗は女性としての人生の終末を意味しており、最後まで生きようとした葉子の意志は自分が選んだ人生は間違っておらず、その自分を非難する世の中こそが間違っていると訴えているようにも読み取れる。このような生きたいという葉子の絶叫は葉子の悲劇性をより強めているように思われる。

有島武郎が当時の家父長社会において自由な人生を生きていけない女性に憐憫と同情を持ち、女性のために声を挙げていたフェミニストであったということは周知の事実である。『或る女』の葉子という人物の誕生もおそらくそうした有島の女性に対する思想の影響からであろう。有島は当時の女性が、女性という理由で経験せざるをえなかった悲惨の人生を強調するために女性の固有病であるヒステリーを用いた。しかし、葉子のヒステリーと破滅という結末は不倫を犯した葉子に罰が与えられたという一種の勸善懲悪として捉えられ、逆効果をもたらしたということは否定できない。

しかしながら、葉子を通じてあらわれている有島の女性解放思想というのは、社会的な権利を確保するというような表面的かつ実利的なところにあるわけではなく、社会に奪われてしまった女性自身の人生に対する自由を、中でも自由な愛を営為できる権利を取り戻すことにあったということを踏まえれば、有島の描こうとした葉子のヒステリーは単に病という意味にとどまらず、女性の自由な人生に対する渴望と哀歎の象徴としてみる可以考虑えられる。

## 第2節 佐藤春夫『更生記』—ヒステリーをめぐる物語の展開—

佐藤春夫『更生記』は1929(昭和4)年5月から10月まで、「福岡日日新聞」に連載された長編小説である。精神分析を題材にした日本最初の長編小説といわれるこの作品は、精神病学の猪股助教授がヒステリー患者の辰子を治療するために、医学生の大場とその姉時子、探偵の須藤兄弟の助力を得ながら主にヒステリーの原因を探るという話である。精神分析の創始

---

<sup>47</sup> 同前掲注9、453頁。

者であり、ヒステリー研究で著名なフロイトの理論だけでなく、クレペリンの精神病学の理論も用いられている。『更生記』が連載される約一ヶ月前の4月にはフロイト著作が邦訳され刊行されたが、その影響を受けて人気を博したかという点、そのようにはならなかったという。当時、『更生記』について言及している評論等がわずかであったということでも注目されなかったことが分かったと考えられるが、現在にいたるまでも研究があまり行われていないという現状からも『更生記』は読者にあまり好評を得られなかった作品であるといえよう。

『更生記』という作品は、先行論も少ない現状ではあるが、「この時期の精神医学的見地と日本の思想界との間の関係のあり方を色濃く反映している」<sup>48</sup>と評されている点やヒステリーという要素の観点からみると、研究する価値のある作品であると考えられる。『更生記』を精神病理学的な視点から論じられた新田篤の研究を参考にしながら『更生記』におけるヒステリーについて検討を行いたい。本論ではヒステリーに対する医学的な知識が作品にどのように反映されているのかについて先行論を踏まえつつ、医学的な意味のヒステリーが作品の中心素材として用いられた場合、物語がどのように展開されていくのか、その変化に焦点を当てて検討を行いたい。

## 1. 『更生記』におけるヒステリー

佐藤春夫の『更生記』が単行本として刊行された時、『読売新聞』の広告文には「恋に疲れた女性の心理を解剖し精刻を極めた」<sup>49</sup>と記されている。当時、『更生記』について言及した批評の一つである谷川徹三の「佐藤春夫氏の長編小説」では以下のように記されている。

筋の運びのために選ばれる場面が、一方では全体の筋の運びにしつくり合ひながら、しかも、それぞれにその場面としての価値をもつてゐることである。

通俗小説は筋の運びの為に場面を「慥へ上げる」。しかもその筋が全体の構成に於て不自然な隙間をもつてゐるので、その慥へ上げられた場面は妙にちぐはぐである。筋のために慥へ上げた限り、全体との必然的關係に於いてありさうであるが、事實はさうでない。頭の悪いせいもあらうし、心理的洞察の行届かないせいもあらうが、とにかく内面的な裏づけの必然性がないのである。これが一般に通俗小説を安つぽくさせる所以なのである。

然るに佐藤氏の作品に於いてはこの欠陥を立派に免れてゐる。一一の場面は、そ

<sup>48</sup> 新田篤「第四章 佐藤春夫「更生記」における精神分析と精神医学」和泉選書、2015年4月、131頁。

<sup>49</sup> 『読売新聞』（朝刊）、1930年10月24日付、11面。

の場面自身としての自然さと共に、全体との必然的關係に於いて内面的に生かされてゐる。しかもその場面が、全体の異常な事件や筋にも拘はらず、しばしば全く日常的な平凡な場面において生かされてゐるのである。<sup>50</sup>

『更生記』は「半通俗的な」<sup>51</sup>小説ともいわれているが、谷川は通俗小説が物語の構成において不自然な隙間を持ち、それが小説を「安つぽくさせ」<sup>52</sup>ているとし、それに比べ『更生記』は「必然的な關係に於いて生かされてゐる」と評している。つまり、描かれた場面は全体的な内容において各々意味するところが「必然的」にあり、不必要な場面のない、因果關係に徹底した構造を持っていると言っているように思われる。そのような構造を持つ物語に仕上がったのは、『更生記』がヒステリーを中心に物語が展開されているからであると考えられる。

『更生記』においてはヒステリー患者との遭遇をはじめとし、ヒステリー患者の治療のために、症状を分析し、原因となる過去の事件を追跡していく一連の過程が描かれている。そのため、現在という時空間において発現するヒステリーの症状には、ヒステリーの原因となる手掛かりが間接的にあらわれており、その手掛かりをもって原因となる過去を追跡したり、事件の真相を明かしたりすることができるのである。こうした物語の構成はヒステリーを用いることで可能であったと考えられるが、特に、辰子のように心的外傷を主な原因とするヒステリーは病症があらわれる時点と病因となる事件に時間差が存在するため、病症を分析し、治療を行える現在という時点では必ず過去を探らなければならない構造を取ることになる。具体的にヒステリーを媒介に物語がどのように展開されていくのか、作品を通じて検討してみたい。

## 2. 第一のヒステリー発作

まず、『更生記』における初場面となる「大場の話」では、物語のスタートラインとしてヒステリー患者との遭遇について描かれている。精神的に不安定な身元不明の女性(=辰子)と遭遇し、保護している大場という学生が精神病理学の助教授である猪股に患者のことを相

---

<sup>50</sup> 『読売新聞』(朝刊)、1931年2月5日付、4面。

<sup>51</sup> 磯貝英夫は「実際にも、この時評と前後して、その作風をかなり変えることになる。「更生記」をはじめとする、半通俗的な長編がつぎつぎと書かれることになるのだが、これらは、かれなりの文学社会化の実践のころみであったと克てもよいではないか」と述べている。

磯貝英夫「私小説論の系議——第一期——」『国語と国文学』40(4)、1963年4月、27頁。

<sup>52</sup> 同前掲注51。

談する。大場はその女性がヒステリーとは気づいていない状態で、遭遇した時の状況や家で保護している間の女性の言動について説明する。大場が当時の状況を一人で説明している場面であるにも関わらず、当時の対話内容は直接話法が取り入れられているため、その女性が直接話した内容を含めて、その状況を演じているかのように描かれている。

さて、大場の話を聞いた猪股は「その婦人がきつとひどいヒステリーだらうと思ひ当つたのだ」<sup>53</sup>と云い、ヒステリーの原因について、未遂には終わったものの、自殺を図ろうとしたことや「どこか、御近所に赤ちやんがゐらつしやいますね」<sup>54</sup>と赤ん坊の泣き声が聞こえるという幻聴を聞いていることから、流産による心的外傷を原因と思われていたが、女性の年が20代半ば程度に見えると聞いてから、「それだけ年をとつてゐるなら、も少し深いわけがありさうだね」<sup>55</sup>とその診断をやめ、ヒステリー患者に興味を持ち始める。それから突然猪股は「その婦人といふのは相当に美人だね」<sup>56</sup>と大場に向つて云い、大場は猪股の発言に動揺しながら「美人です。美人の方でせう」<sup>57</sup>と答える。一見、猪股がヒステリー患者が「美人」であることに関心を持っているかのように見えるが、猪股はあくまでも精神病理学を研究している人として、物語の最後まで人の言動を分析しつづけるという態度を一貫してみせている。美人であるかを聞いたのは大場の言動からその女性に対する心理を読み取ったことをあらわしただけのことである。

猪股はヒステリー患者について「あの美しい患者を、まるで捨て犬か猫の子のやうに思つてしまつてゐた」<sup>58</sup>と考へていることや「研究の資料」<sup>59</sup>として見ていること等から、患者を分析するにあつてその患者が美人であることは別に影響を与えないとしても、そのことに触れているのは、のちに「なまめいた目つきなどをするのも、ヒステリーの特徴だからね」<sup>60</sup>という発言を根拠づけるためであつたと考へられる。また、こうしたヒステリーの特徴は、その患者に関心を持っている大場のような人物との関係形成において影響を与えているため、物語の展開に一定の役割を担っているといえる。

さて、二人はヒステリー患者が泊っている大場の家に訪れるが、二人が家に着いた時に、患者はヒステリー弓の状態となり、その瞬間を観察する猪股が以下のように描かれている。

---

<sup>53</sup> 佐藤春夫「更生記」『佐藤春夫全集 第三巻』講談社、1966年10月、76頁。

<sup>54</sup> 同前掲注53、71頁。

<sup>55</sup> 同前掲注53、73頁。

<sup>56</sup> 同前掲注53、73頁。

<sup>57</sup> 同前掲注53、73頁。

<sup>58</sup> 同前掲注53、84頁。

<sup>59</sup> 同前掲注53、90頁。

<sup>60</sup> 同前掲注53、81頁。

「よく見たまへ。あれが所謂ヒステリー弓だ。心配はいらないよ。それに僕はもうわざわざ骨を折って診察するまでもないわけだ。よく見なさい。頭を反らして後頭部と足とで全身を支へて、全身が弓状に張り切つて曲つてゐる。あんな形はしてゐるが着物の裾などは注意をしてさうはしたくない様子はしてゐない。癲癇やなどと違つてちやんと意識して倒れたのだからね。それからあの手だ。握つてゐるだらう。拇指を外側にして普通の物を握む時と同じだらう。癲癇性の痙攣なら拇指を掌の内へ握り込むものだと言はれてゐるよ。——これは典型的なヒステリー性痙攣発作だよ」<sup>61</sup>

『更生記』において初めて登場するヒステリー発作の場面であるが、一回目のヒステリー発作は、ヒステリー弓の状態であらわれている。猪股の観察による説明は、クレペリンの影響を受けたとみられる下田光造、杉田直樹『最新精神病学』の中の内容と類似していると新田篤によって指摘されている<sup>62</sup>。ヒステリー発作は猪股と大場が家に到着したのと同時に起きたため、二人にはその経緯が分からないが、女性と一緒にいた大場の姉時子からその経緯について聞くことができるようになっている。

「わたくし、さつきから襖をすけて注意して居りましたのですけれど、別にこれといふ事もございませんでした。ただあなた方のお靴の音がすると、『あ、到頭！』とか何とかそんな事を申したきり、倒れたのでございます。ですから私は亦、到頭なにかお薬の効き目でも現はれたのかと存じまして本当にびつくりいたしました」

63

---

<sup>61</sup> 同前掲注53、78-79頁。

<sup>62</sup> 新田篤は「更生記」に言及されているフロイトのヒステリー論を取り上げ、クレペリン『精神医学』の影響や佐藤が参照した精神病学の文献を明らかにし、これらの知見をもとに、日本文学が近代精神医学の人間観をどのように用いたかを考察したが、新田篤によると、佐藤が取り入れたヒステリー療法の知識は「フロイト初期の代表的なヒステリー論『ヒステリー研究』によるもの」であり、『ヒステリー研究』の中で提唱されている「心的外傷」とその抑圧」がヒステリーの原因となっているという。「更生記」の中では「辰子が乳房で子供を殺したという偽造を行った」ことによって、乳房が心的外傷となり、乳房痛で表現されているが、乳房痛はクレペリンの指摘するヒステリーの症状であるため、フロイトとクレペリン理論の組み合わせであると指摘している。

新田篤「佐藤春夫「更生記」における精神分析と精神医学」『精神医学史研究』16(2)、2012年、115-125頁(のちに、『日本近代文学におけるフロイト精神分析の受容』和泉選書、2015年4月に収録)。

<sup>63</sup> 同前掲注53、79頁。

患者は猪股と大場の靴の音に驚き、「到頭！」と一言を残して発作を起したのだが、猪股は時子話を聞いて、ヒステリー発作は足音によるものであると判明する。猪股は患者が足音を聞いて警官だと勘違いして発作を起したとみて、警官を恐れたことがヒステリー発作の原因であると判断している。警官という端緒は、猪股が大場に聞いた話から推定したもので、大場とヒステリー患者が線路で遭遇した時に大場を警官だと思い、警戒していたことや「警察へお出でになるのではございますまいね」<sup>64</sup>と言及したことから推察できたであろう。猪股は「婦人を決して警察の人などに渡さないやうにして下さい」<sup>65</sup>と大場姉弟に頼むのだが、それは大場たちに話すというよりも、発作の状態でも「周囲の事情」<sup>66</sup>に気が付いているはずの患者に一種の暗示として聞かせ、「彼女を安心させようとする」<sup>67</sup>ためであったとされている。患者は警察に対する恐怖によりヒステリーを起したが、ヒステリーの原因となる事件に犯罪と関わりがあることを想起させる場面であると考えられるが、ヒステリー症状の分析を通じて病因となる事件を徐々に探っていくというような形で展開されるため、この場面においてはヒステリーの原因と関係があるということを暗示する程度の内容にとどまっている。

第一のヒステリー発作以後、患者の身元を確認するために警察署に出した家出人捜索願の届け出により、大場が誘拐や監禁の疑いで取り調べとなり、猪股も警察署に出席することになる。誤解はすぐに解け、警察の助力を得て、身元不明のヒステリー患者が青野家という名家の令嬢であることが分かる。当日、猪股は患者の兄である青野男爵に会うことが出来たが、兄の怪しげな態度から、まずは家族との関係からヒステリーの原因を探ることにする。

以上のように、身元不明のヒステリー患者であった辰子が警察を恐れたために、すぐに通報できず、その間大場が猪股教授に相談したことや警察と勘違いして起したヒステリー発作、その発作を見てヒステリーと確信した猪股が辰子に興味を持ち、本格的に原因を探る契機となったこと、さらに、通報が遅くなったことで大場が警察に疑われ、猪股が警察署に出席した当日、辰子の身分が確認できたと同時に、彼女の家族の一人である兄に会えたという一連の過程からみるには、辰子のヒステリーの原因の一つである警察への恐怖が、物語の展開において重要な要素になっていると考えられる。

さて、青野男爵や辰子にヒステリーの原因を探ることのできる手掛かりを得た猪股は、そ

---

<sup>64</sup> 同前掲注53、72頁。

<sup>65</sup> 同前掲注53、79頁。

<sup>66</sup> 同前掲注53、79頁。

<sup>67</sup> 同前掲注53、79頁。

の端緒をもって7、8年前の青野家について追跡していく。そうした中で、辰子の第二のヒステリー発作が起る。

### 3. 第二のヒステリー発作

大場の家で暮していた辰子が転居を希望したため、大場姉弟と辰子は三人で暮す貸家を探しに出かける。ヒステリーの発作は貸家の案内者と物件をまわる途中に起こるが、以下のようである。

「辰子さんにみて頂くとすれば、ほんたうに今の家では手狭ですものね」

姉がさう言ひ出した序でに、大場は言つた。

「それに隣の細君は身重だから、今に子供を産むにちがひないが、さうなるとうるさいですからね」

大場はそれを辰子に向つて言ひながら相手の顔色を注意してみた。辰子は返事をしなかつたが、しかしこれと言つて特別の表情をも示さなかつた。しかし、気のせいか彼女は少しづつ憂鬱になつて行つたやうにも思へぬではない。さうして二軒目に見た空家のなかで、辰子はたうとう全身痙攣の発作を現はしてしまつたのだ。最も驚愕したものは貸家の案内者であつた。大場は二度目の経験だからさほどでもなかつたが、場所が場所だけに途方にくれてしまつた。彼は教科書の教へるとほりに先づ卵巣部を強圧して強い刺戟を与へて発作を一時反射的にでも阻止してみようと試みたけれども、無効であつた。家主が近所の医者を呼んでくれたが、それは場末の開業医だけに、大場と同様に困却してゐたが、それでもスコボラチンの皮下注射が奏効して、かれこれ二時間ばかりの後には蒼ざめ切つた辰子を人力車に乗せて帰るだけの事は出来た。<sup>68</sup>

一軒目の空家を見る際、大場は辰子が転居を希望するのは大場の隣人の妊婦を避けるためであると気づき、辰子のヒステリーの原因が出産や子供と関係があるのではないかと思ひ、確認するために意図的に隣人のことを話し出すが、辰子の様子に大した変化はない。しかし、辰子は段々憂鬱になっていき、二軒目に見た空家の中で全身痙攣の発作を起してしまうのであつた。大場は辰子の二回目の発作を報告し、猪股の意見を聞くために学校に訪れる。大場

---

<sup>68</sup> 同前掲注53、137-138頁。

は辰子を試すつもりで話した妊婦のことよりも、二軒目の部屋の風景によって元恋人である「浜地と逢った場所の記憶が蘇って、それが辰子を刺戟したのであらう」<sup>69</sup>と意見を出す、猪股は「そんな事もあるかも知れない」<sup>70</sup>と軽く賛成した切りで「寧ろ、辰子を刺戟したものはやはり、赤ん坊の話である」<sup>71</sup>という意見に傾く。

猪股はヒステリーの発作と「赤ん坊の話」の関連の可能性を想像し、男爵家の医者であった高橋医師を訪れ、辰子の妊娠や出産の有無等を確認する。高橋医師と対面し、辰子の病状について尋ねたところ、辰子のヒステリー性痙攣は、主に6月から9月ごろの夏に著しく見られたが、特に「夏の季節関係のある物品を極度に恐怖」<sup>72</sup>したこと、またその「ある物品」が「ハンケチ」<sup>73</sup>であることを知る。辰子がハンケチに刺戟されることを知った猪股は、二回目の発作の際に大場がハンケチを所持していたことを確認し、二回目の発作がそのハンケチからであることを確信する。辰子の子供が生まれたのは「翌年の四月でございました。その男の子はたった三月生きてゐたのでございます」<sup>74</sup>とあるため、子供が死んだのは6月または7月であると想定できた。

ヒステリーの発作と関連があると思われる赤ん坊の話から出産の可能性を導き出し、青野家の医師に会い、出産を確認したうえで、赤ん坊の死をも確認し、さらに「ハンケチ」が関係していることも判明した。辰子のヒステリーの原因となる事件というのは「子供の死」と関係があり、その死をめぐり、また新たな事実が浮かび上がったのである。

#### 4. 「子供の死」の秘密

辰子には浜地英三郎という情人がいた。二人の同棲同様の生活による恋愛事件は、諸新聞に報道されたが、その詳細は真実というより憶測と捏造が乱舞する内容であった。その記事に接した辰子の父は名家の名誉を確保するためであったのか、それとも娘の無辜を信じたためであったのか、浜地を誘拐罪で告訴する。辰子と浜地の恋愛事件は刑事事件と一変し、二人は取り調べを受けるようになる。浜地は辰子との恋人関係を主張したが、辰子が沈黙することによって誘拐事件は一時既定の事実となったが、浜地が辰子からの手紙を検事局に提出することによって誘拐という汚名をそそぐことができる。しかし、誘拐事件ではなく恋愛事

---

<sup>69</sup> 同前掲注53、139頁。

<sup>70</sup> 同前掲注53、139頁。

<sup>71</sup> 同前掲注53、139頁。

<sup>72</sup> 同前掲注53、146頁。

<sup>73</sup> 同前掲注53、146頁。

<sup>74</sup> 同前掲注53、184頁。

件と明らかになった時は、「世間はもうこの問題の興味には飽きてしまつて」<sup>75</sup>「好奇心を煽る筈の新聞紙が皆知らん顔をしてしまつた」<sup>76</sup>ため、この事件は有耶無耶に終わってしまう。

その後、浜地は精神的に不安定となり、精神病院に入院する。辰子と浜地の恋愛事件は、島田清次郎と舟木芳江との恋愛事件という実在の事件を素材にしたと言われているが、実際の事件においても「新聞や雑誌で事件の真相をめぐって島田や芳江の写真や手紙も公開されながら、憶測が飛び交つ」<sup>77</sup>ていたとされている。西川貴子は「この事件は辰子の病の直接的な原因とはなっておらず、事件後、辰子が浜地とは別の男と結婚し、二人の間にできた赤ん坊をその男が殺害して「狂人」となったこと」<sup>78</sup>がヒステリーの主な原因であると指摘している。

辰子の夫は浜地との恋愛事件をすでに知っていて、結婚してからも辰子を信じることができないうでいた。二人の間に生まれた子供にさえ、「浜地に似てゐる」<sup>79</sup>と疑っていたが、夫が学業等で「ひどい神経衰弱」<sup>80</sup>になったことも重なり、二人の間で口争いが続いていた或る日、事件が起きたのである。

その日も、夕方からどんな事が原因であつたかそれさへはつきりしないやうなことから、喧嘩がはじまつてしまつたのでした。宵の口から寝かしつけてあつた子供は、何におどろいたのか、わたくしどもの口争ひの最中に不意に目をさまして、火のつくやうに泣き出したのでした。その時あの人はいきなり立ちあがると、ものも言はずに揺籃のそばへ歩き寄り、『うるさい!』とか何とか一言云つたかと思ひますと、子供はそのまま泣かなくなつてしまつたのでした。何をしたのだからわたくしは見て居りませんでした。急に静かになつたその様子がへんに思へたので、やがてそばへ行つて見ますと、子供の――子供の口のなかから、へんなものが出てゐるのです。よく見ますとハンケチの端なのです。わたくしはおどろいてそれを口か引き出し、いそいで子供を抱き上げたのです。ぐんにやりと抱かれた子供はもう泣き声一つ立

---

<sup>75</sup> 同前掲注53、126頁。

<sup>76</sup> 同前掲注53、126頁。

<sup>77</sup> 西川貴子「佐藤春夫「更生記」論―「狂気」をめぐる語り―」『同志社国文学』(81)、2014年11月、267頁。

<sup>78</sup> 同前掲注77。

<sup>79</sup> 同前掲注53、184頁。

<sup>80</sup> 同前掲注53、186頁。

てませんでした。<sup>81</sup>

辰子が「ハンケチ」を恐れた理由は、辰子の夫が泣き出す子供の口にハンケチを入れて殺してしまったからである。夫の子供殺しは、当時の喧嘩が浜地の子供だろうという夫の疑いからはじまったのであれば、それまで蓄積された夫の怒りが子供にまで及んだ結果としてみることも出来ようが、普段夫が精神的に衰弱状態であったということを踏まえると、うっかり殺してしまったとみることもできよう。辰子は動きのない子を抱き、様々な措置を取り、救おうとしたが、ついに子供は死んでしまう。

子供のぐにやぐにやの両手をさまざまに動かしてみたり、顔や胸に湿った手拭を当ててみたり——そんな事がどんな役に立つと思つたものか自分でも知りませんが、さまざまなものも無意味なことを、わたくしは殆んど半時間ばかりも、ひとりでやって居りましたでせう。いいえ。あの人も気がついてさすがに驚き狼狽して、わたくしに手を貸さうとしたのを、わたくしは手荒らく跳ねのけて寄せつけなかつたのです。子供は手足ももうすっかり冷たくなつて居りましたし、お医者に見せなければならぬのは、最初から無論気がついてはゐたのですが、わたしにはそれが怖ろしなかつたのです。わたしの頭には、この問題がまたしても新聞に書き立てられるといふその一事が、すぐに思ひ浮ぶと一緒に、どうせもう死んでしまったこの子を、うっかり慌てて医者に見せるのは考へものだと思ひました。いや、医者に見せれば事件は人に知られても、子供はもしや生き返らないものでもないと思へなほして、しかし生き返つてもこの子供は決して生涯幸福ではない——何故かわたしははつきりとそんなことを決定的に考へたりしました。こんなさまざまなことを考へつづける一方で、わたくしは、只今もお話したやうなさまざまの手当をひとりでしてゐたのでした。<sup>82</sup>

「子供の死」にまつわる心的外傷には、夫によって殺されてしまった子供に対する辰子の悲痛な気持や衝撃という側面と、夫が子供を殺したという真実を隠すために行った辰子の偽装の意識という側面が共存していると考えられる。辰子は夫を愛しなかったものの、夫の子

---

<sup>81</sup> 同前掲注53、184-185頁。

<sup>82</sup> 同前掲注53、185頁。

供を懐妊したと知った時に「新しい希望が湧いた」<sup>83</sup>と喜んでいて、子供に対して愛情を持っていたと考えられるので、まずは、子供の死を目撃したことの衝撃、または子供の死という事実自体が心的外傷を生んだとみることができる。さらに、意識のない子供を発見した辰子は、冷たくなっている子供を医者に見せなければならぬと気づいてはいたが、「この問題がまたしても新聞に書き立てられる」ことを恐れ、子供は「どうせもう死んでしまつ」ているし、もし医者に見せて生き返るとしても新聞に書き立てられるはずだから「生涯幸福ではない」と判断し、「子供の死」を偽装する。

しかし、辰子が選んでとった処置は、子供のためにでもなければ、夫のためでもなかったといえる。その処置は浜地の時と同じく、「自分の体面」<sup>84</sup>のためであり、それは「身を捨てても人を愛するなどといふ高尚な感情」<sup>85</sup>を持たない自分のせいであると告白している。つまり、自分の体面を保つために、愛する人を裏切り、真実を隠したことによる罪悪感がヒステリーの原因となっていたといえる。また、「子供の死」をも偽装したため、更なる罪悪感と殺人という犯罪との関りから生じる恐怖がヒステリーを激化させたのではないかと考えられる。

以上のように『更生記』においてヒステリーを中心に物語がどのように展開していくのかについて検討した。精神病理学者の猪股はヒステリーに興味を持ち、ヒステリーの治療のために、患者辰子の過去を追跡していった。ヒステリーの症状があらわれる際に、辰子に刺激を与えたとみられる要素を特定し、その要素からヒステリーの原因を推察した。誰にも明かすことのできなかつたヒステリー患者の過去の出来事を、患者自らに告げさせることでヒステリーが治るとされていたため、物語の結末では辰子の独白が大半を占めていたが、ヒステリーの原因となったのは、辰子自身の体面を保つために、愛する人を裏切り、子供の死を偽造したことの罪悪感からであることが分かった。猪股という学者は美貌のヒステリー患者にではなく、学問的な興味からヒステリーという病に惹かれていた。分析する者と分析される者の間に密接な心理的作用は見られなく、医学的な見地からヒステリーを忠実に分析した物語であると考えられる。

一方、次の節で取り扱う三島の『音楽』も患者と精神分析医を主人公にした物語で、『更生記』と類似した展開方式が見られるが、『音楽』では分析者の患者に対する微妙な感情が治療に影響を及ぼす等、登場人物間の心理的作用が著しくみられる。詳しくは、次の節にお

---

<sup>83</sup> 同前掲注53、183頁。

<sup>84</sup> 同前掲注53、187頁。

<sup>85</sup> 同前掲注53、187頁。

いて検討してみたい。

### 第3節 三島由紀夫『音楽』—分析医と患者のヒステリーをめぐる—

三島由紀夫『音楽』は雑誌「婦人公論」に1964(昭和39)年1月号から12月号まで連載された長編小説である。小説は精神分析医の汐見和順が「冷感症」に悩む弓川麗子の症例を記録した〈女性の冷感症の一症例に関する手記〉として描かれており、麗子の「冷感症」は主に食欲不振、吐気、チック(顔面痙攣)といったヒステリー症状としてあらわれている。『音楽』は三島由紀夫の代表作『仮面の告白』『金閣寺』などに比べると、先行論はあまりにも少なすぎるとい印象があるが、おそらく『音楽』は「三島由紀夫氏の作品系列のなかで、主流に属するものとは言いがたい」<sup>86</sup>からであろう。加藤邦彦は主流でない理由について「平易な文体」にこそあるが、一方でこの作品が精神分析を題材としている点も見逃すわけにはいかない。(中略)そのことでこの小説は「推理小説のごときサスペンス」としての性質を備え、「エンターテインメントとしても上乘の作」となっている。三島はエンターテインメント小説と目される作品をいくつか書いているが、それらが三島の「主流」でないことはいまでもない<sup>87</sup>と述べている。

『音楽』は日本の「精神医療の未来を先取りしたような作品」<sup>88</sup>であり、「最も早期に精神分析医を主人公とした作品」<sup>89</sup>で、「今日隆盛を極める都会の精神科クリニックを描いたという点でも先駆的な作品」<sup>90</sup>であると評されている。西昌樹は「サイコセラピー空間を旋りて」の中で「三島は作中でフロイト、シュテーケル、メダルト・ボス等に言及し、さらに性的興奮の恍惚の表情を聖テレジアの彫像のそれに比しているが、これは精神分析とエロティシズムへの強い関心を示している」<sup>91</sup>と述べている。また、一方ではフロイトに憧れていた三島由紀夫が『音楽』では「実存主義的見地からは正常人、異常人は等価で、フロイトのように一方は正常、他方は要治療の退行現象とする「アコギな」真似はできないはずと、語り手の精神科医に述べさせて」<sup>92</sup>フロイトを非難していると指摘している。

---

<sup>86</sup> 渋谷龍彦「解説」『音楽』新潮社、1970年2月、257頁。

<sup>87</sup> 加藤邦彦「冷感症の時代—三島由紀夫『音楽』と「婦人公論」—」『梅光学院大学公開講座論集 第59集 三島由紀夫を読む』笠間書院、2011年3月、121頁。

<sup>88</sup> 高橋正雄「精神医学的にみた近代日本文学(第20報)—三島由紀夫—」『聖マリアンナ医学研究誌』16(91)、2016年、50頁。

<sup>89</sup> 同前掲注88。

<sup>90</sup> 同前掲注88。

<sup>91</sup> 西昌樹「サイコセラピー空間を旋りて(「仮面の告白」「金閣寺」「音楽」ほか)」『国文学 解釈と教材の研究』38(5)、1993年5月、36頁。

<sup>92</sup> 同前掲注91、36頁。

朴秀浄は三島由紀夫が性科学・性欲学に興味を示し、その知識を渉猟したことに注目し、『仮面の告白』と『禁色』の中の同性愛言説の受容について論じているが、その中で「『仮面の告白』や『禁色』は、三島由紀夫における西洋性科学の受容と展開の一側面をたどる上で重要な作品である。(中略)三島は『禁色』連載終了後も引き続き性科学書に没頭し、女性の冷感症を題材とする『音楽』では、ウィルヘルム・シュテーケルの『性の分析—女性の冷感症』全二巻を引いている。そのため、三島が書いた文学作品と創作の際に参照した研究書とを照らし合わせる実証的な研究はますます重要になってくる」<sup>93</sup>と述べている。

作品の中では、フロイトやシュテーケルなどの学者の名前やその理論が用いられている場面が多数描かれているが、特に三島は作品についてのインタビューの中で「シュテーケル(心理学者)が、文明が進歩すればするほど、女性は不感症が、男性は不能者が増加する、というイミのことを言っていますが、その徴候がじわじわ現われてきていると考えます。それを背後にこの小説を組み立てました」<sup>94</sup>とシュテーケルの影響について言及している。主人公の汐見が「冷感症」を治療するためにシュテーケルの著作を参考にしており、その一部を直接引用しているが、これらと密接な関係のあるシュテーケルの著作としては、三島由紀夫の蔵書目録にも収録されている『性の分析—女性の冷感症—』があげられる。

『音楽』において精神分析は主な題材となっており、中でも精神病理学者のシュテーケルについては三島自身が言及しているなど、多少の影響があったと考えられるが、まだその影響について詳しく論じられた先行論がないため、まずは三島由紀夫が創作の際に参考にしたとみられるシュテーケル『性の分析—女性の冷感症—』が作品の中でどのような影響を及ぼしているのかについて考察を行いたい。それから麗子の「冷感症」の主な症状として用いられているヒステリーが、分析医と患者の関係において、どのような役割を果たしているかに注目し、考察を行いたい。

## 1. 『性の分析—女性の冷感症—』の受容

ヴィルヘルム・シュテーケル(Wilhelm Stekel)の一連の著作、『衝動及び情緒生活の障害』(原題: *Störungen des Trieb-und Affektlebens*)の中の第3部として収録されている『性の分析—女性の冷感症—』(原題: *Die Geschlechtskälte der Frau*)は全2巻として1920(大正9)年に発表された。三島が参考にしたと見られるのは、『定本三島由紀夫書誌』

<sup>93</sup> 朴秀浄「三島由紀夫における同性愛言説の受容—『仮面の告白』と『禁色』を中心に—」『比較文学』(61)、2018年、72-73頁。

<sup>94</sup> 三島由紀夫「解題」『決定版 三島由紀夫全集 第11巻』新潮社、2001年10月、625-626頁。

の「第五部 蔵書目録」の内容によると、松井孝史が訳し、第1巻が1955(昭和30)年6月に、第2巻が1956(昭和31)年2月に三笠書房より出版されたものであるという。その著作の巻頭には、シュテークルを紹介して以下のように記されている。

シュテークルはウィーンの精神科の開業医、フロイドの最初の高弟であり同志であつた五名の中の一人で、アードラーと共に「精神分析中央雑誌」を編集していたが、後になつてフロイドと説を異にして、アードラー、ユングに次いで師と袂を分ち、独自の主張をもつて一生を神経症者の治療にささげた。<sup>95</sup>

シュテークルはフロイトの高弟であつたものの、「フロイトの教義のうちに、実際と背馳するもののあるのを感じ」<sup>96</sup>、フロイト学派の脱退者となる。三島にとつても「フロイトは中学生のころ私の座右の書」<sup>97</sup>であつたが、早くも1941(昭和16)年の「学習院中等科在学中に「精神分析は飽きました」といい、それへの態度は終始批判的」<sup>98</sup>であつたとされている。三島がフロイトの精神分析に「始終批判的」であつたのはフロイトの精神分析が「図式主義」<sup>99</sup>的であつたためだと考えられるが、シュテークルに興味を持った理由もおそらくシュテークルが図式主義の下で「ことごとくしりぞける」<sup>100</sup>というフロイトの教義から離れ、「直観」<sup>101</sup>という体験的把握を重視したためであると考えられる。

『性の分析』の序文には「女性の冷感症をあつかつているのであるが、それよりはむしろ、恋愛そのものの精神病理学であり、精神分析を基礎とした恋愛哲学であり、医学者シュテークルの恋に悩むもの、性障害に苦しむものへ注ぐ惻々たる人間愛の記録である」<sup>102</sup>と紹介されているが、三島はおそらくシュテークルと同じような理由から「冷感症」に興味を持ち、『音楽』を創作するに至つたのであろう。澁澤龍彦が指摘しているように『音楽』は「精神分析の理論に則つた小説ではあるけれども、もう一つの面から見れば、在来の精神分析の理

---

<sup>95</sup> ヴィルヘルム・シュテークル『性の分析—女性の冷感症— 第一巻』松井孝史訳、三笠書房、1955年6月、3頁。

<sup>96</sup> 同前掲注95、6頁。

<sup>97</sup> 三島由紀夫「フロイト「芸術論」」『決定版 三島由紀夫全集 第28巻』新潮社、2003年3月、202頁。

<sup>98</sup> 同前掲注87、121頁。

<sup>99</sup> 同前掲注97。

<sup>100</sup> 同前掲注95、9頁。

<sup>101</sup> 同前掲注95、9頁。

<sup>102</sup> 同前掲注95、5頁。

論のみによってはなかなか割り切ることのできない、人間精神の不条理さ」<sup>103</sup>をも描いている作品であるといえる。

シュテューケルは「冷感症」が起きるのは《私は出来ない》《私はしてはならない》《私はいやです》といった「秘められた命令」や「反抗」などが「性衝動を圧倒し、その自然の流れをはばむ」<sup>104</sup>ためであると述べている。また、「冷感症の心因的原因のうちで、重要な一つの動機を見出す」<sup>105</sup>ことが「冷感症」を治療するにあたって最も重要であると述べている。その重要な一つの動機は「感情生活が幼児期の理想に固着している」<sup>106</sup>という幼児期の経験の影響から「その最初の理想であるところの両親とか兄弟姉妹とかに、あくまでも忠実であるためにも恋愛不感と誤認する。すなわち実現する希望がないために、固定化してしまうところの、満たされない願望」<sup>107</sup>であるとされている。そのため、「幼児期の固着は弛緩することはあつても、けつして完全に排除されることはないのだ」<sup>108</sup>とまで断言している。

「冷感症」の肉体的な障害としては「食慾不振、嘔吐、善餓症などというヒステリー症状においていちじるしい」<sup>109</sup>とヒステリーについて言及されており、「外傷後のヒステリー性精神病」の項には「ティック症」<sup>110</sup>があげられている。

『音楽』においては「冷感症」の麗子が幼児期から実兄に執着しており、その兄との近親相姦的な関係を持つことによって生じた「兄の子を生みたい」<sup>111</sup>という願望は兄以外の男性との関係を拒否させ、「冷感症」の原因となっている。汐見は「シュテューケルの言ふ如く、「すべての神経症者は自分の家族に悩み、ある知患者がFamilitis(家族熱)と呼んだほどひろく伝播してゐるこの病気の痕跡を示してゐる」」<sup>112</sup>と『性の分析』第7章「幼児期への固着」の「家族の奴隷」の項から直接引用し、「麗子には、(中略)この種の近親相姦的外傷の存在をはつきりつかめずにゐた」<sup>113</sup>と診ている。引用された内容の続きでは「家族の奴隷はその交際範囲を家族のみに限局する」<sup>114</sup>と記されているため、麗子と実兄との近親相姦的な関係が「冷感症」の根本的な問題となっていることがわかる。

---

<sup>103</sup> 同前掲注88、261頁。

<sup>104</sup> 同前掲注95、178頁。

<sup>105</sup> 同前掲注95、177頁。

<sup>106</sup> 同前掲注95、23頁。

<sup>107</sup> 同前掲注95、23頁。

<sup>108</sup> 同前掲注95、43頁。

<sup>109</sup> 同前掲注95、107頁。

<sup>110</sup> 同前掲注95、108頁。

<sup>111</sup> 三島由紀夫「音楽」『決定版 三島由紀夫全集 第11巻』新潮社、2001年10月、205頁。

<sup>112</sup> 同前掲注111、58頁。

<sup>113</sup> 同前掲注111、58頁。

<sup>114</sup> 同前掲注95、229頁。

また、麗子の「冷感症」の肉体的な障害としては「食欲不振」「嘔気」「チック(tic)」といったヒステリーの諸症状があらわれている。いずれもシュテーケルの理論を適用したものだと考えられる。医師の汐見は「音楽がきこえない」とする麗子の「冷感症」について「わけのわからぬこと」<sup>115</sup>「不感症の問題については、あまり重大に考へてゐなかつた」<sup>116</sup>と興味を持っていないような態度をとっているが、ヒステリーについては「彼女の軽微なヒステリー徴候にのみ心を奪はれて」<sup>117</sup>いたと関心を示している。医師の汐見と患者の麗子の関係においてヒステリーはどのような影響を及ぼしているのだろうか。

## 2. 麗子のヒステリー

麗子が汐見の診療所に訪れたのは、或る秋の日の朝である。夏ごろから食欲不振や吐き気などの症状に悩み、病院を転々したが、ついに原因不明の状態ですべて精神分析科医の汐見を訪れたのである。汐見は麗子に初めて対面したとき、麗子の美しさに驚き、麗子のファッションや化粧、顔立ちなど、麗子の隅々までを観察していた。汐見が麗子に挨拶した時、美しい麗子の頬にチックが走るのを見て見ぬふりをしたが、自身のチックに気づいた麗子は「内心の狼狽」<sup>118</sup>を見せざるを得なかった。汐見はそのような麗子について以下のように語っている。

不真面目な比喻かもしれないが、この瞬間の彼女は、ちらと狐であることを見破られた美女といふ趣きがあった。

明るい晩秋の窓外には、オフィスや劇場やホテルなどのビルが櫛比して、訪れる人は誰しも近代的な診療所だと感心するこの待合室で、こんな幻想が浮んだのは、ずいぶん不似合いなことである。<sup>119</sup>

汐見は近代的な診療所で麗子の美しさに魅せられ、狐という幻想に囚われる。社会が急速に発達するにつれ、精神疾患に悩む患者も加速的に増大し、汐見の診療所に訪れる患者数も多くなるのだが、殊にこの頃の新しい傾向として「無用の告白癖、いはば精神的露出症とでも言ふべきものを満足させるために」<sup>120</sup>訪れる数多くの女性患者に悩まされていると汐見は

---

<sup>115</sup> 同前掲注111、17頁。

<sup>116</sup> 同前掲注111、33頁。

<sup>117</sup> 同前掲注111、33頁。

<sup>118</sup> 同前掲注111、14頁。

<sup>119</sup> 同前掲注111、14-15頁。

<sup>120</sup> 同前掲注111、12頁。

語っている。麗子はそのような患者の一人であったといえるが、汐見は患者の麗子に一目惚れしたかのように患者以上の特別な感情を持つようになる。

汐見は明らかに明るい微笑を浮かべようとしたのだが、正にその瞬間、その頬にチックが走る麗子を見る。そのチックは「まぎれもないヒステリーの兆候である」<sup>121</sup>とすぐに判明するが、それに比べて音楽が聞こえないという「冷感症」の症状に対しては「突然、わけのわからぬことを言ひ出した」<sup>122</sup>と戸惑っているような様子を見せている。汐見は麗子の言う「音楽」に対して、単にオーガズムの美しい象徴であるか、渴望するオーガズムとの間には、「一筋縄で行かない隠された象徴関係があるのではないか？」<sup>123</sup>という「科学者としての探求欲」<sup>124</sup>から自由連想法という精神分析的な療法を用いて最初の治療を施す。

しかし、精神分析に詳しい麗子が「行きあたりばつたりの性的象徴を濫用したり」<sup>125</sup>したため、「明らかに彼女の作為が働らき、作為と無意識とが、ふしぎな具合にまざり合つて」<sup>126</sup>しまい、第一回の自由連想法は失敗に終わる。その後も、麗子に試した自由連想療法は麗子の治療には役立たず、医師と患者の「対決」<sup>127</sup>の手段としてしか用いられなくなる。汐見は「豊富な臨床経験から不感症を縦横に論じたシュテーケルの本を改めて読んでみて、世間で漠然と呼ばれているこの不感症といふ名が、いかに多義的で、いかに複雑多岐であるかを、私は思ひ知つた」<sup>128</sup>と「冷感症」の治療の難しさについて訴える。

麗子の音楽が聞こえないとする「冷感症」の症状は、嘘だと言う患者麗子の一言で「果してさうか？」<sup>129</sup>と分析医の汐見に疑問を抱かせるほどわかりにくく、顔面痙攣ですぐわかるヒステリーとは対照をなしている。さらに、麗子自身も顔面痙攣に気づいていて、特に「チックを起すまいとすると却つてチックが起る」<sup>130</sup>という「典型的なヒステリー性反対意志のいたづら」<sup>131</sup>に悩まされている。しかし、ヒステリーが激しくなるにつれ、チックは患者麗子には気づかれなくなり、分析医の汐見の目にしか映らなくなる。

---

<sup>121</sup> 同前掲注111、14頁。

<sup>122</sup> 同前掲注111、17頁。

<sup>123</sup> 同前掲注111、28頁。

<sup>124</sup> 同前掲注111、102頁。

<sup>125</sup> 同前掲注111、33頁。

<sup>126</sup> 同前掲注111、33頁。

<sup>127</sup> 同前掲注111、142頁。

<sup>128</sup> 同前掲注111、33頁。

<sup>129</sup> 同前掲注111、28頁。

<sup>130</sup> 同前掲注111、17頁。

<sup>131</sup> 同前掲注111、17頁。

「何が怖いんです」

と私はやさしく彼女の目を見た。そのとき、久々に彼女の頬に、一瞬ちらとチックが走った。

この小さな稲妻のやうな痙攣は、私には見えない奇怪な小鳥のやうに思われる。この小鳥が彼女につきまといつて離れず、やつとしばらくどこかへ飛去つてゐたのに、又元の巣に姿をあらはし、翼の一閃と共に、再び彼女の病んだ心に、その温かい暗いねぐらにもぐり込んだのである。

医師としてはまことに不都合な心理であるが、治療の失敗を示すこの兆候が、私の心に落胆よりも、一種の勝利の喜びに似たものを与えたことは否定できない。遠いところへ永久に去つてしまつたやうに思はれた麗子が、又私の懐ろへ戻つてきた、それが何よりのしるしだつたからである。

しかしこのチックは麗子自身には気づかれなかつた。<sup>132</sup>

麗子自身には気づかれなかつたチックは、治療の失敗を示す兆候であるとされているが、それは汐見には「医師としてはまことに不都合な心理である」ものの、「落胆よりも、一種の勝利の喜びに似たもの」を与えたとされている。つまりそれは、ヒステリーの病気が治つたとして汐見のもとを訪れなくなるはずであつた麗子が汐見の「懐ろへ戻つてきた」証拠を暗示するものとなり、汐見の麗子への執着をつなぎとめておくものとなつたのである。

### 3. 汐見とヒステリー

汐見は最初から「冷感症」の音楽が聞こえないという症状よりもヒステリーに興味を持っていた。麗子のヒステリー徴候は顔面痙攣のチックだけではなく、食欲不振や嘔気も含んでいるが、汐見はこれらの徴候に対して「何ら内科的疾患によるものではなく、ヒステリー症候群にちがひないことはわかつてゐる」<sup>133</sup>とはっきりとした診断を下している。汐見にとっては表面的にあらわれる分かりやすさが自信を持たせたのではないかと考えられる。そのため、ヒステリーの診断に自信を持っていた汐見が麗子のヒステリーに直面した際には、冷静な医師として精神分析的な能力が発揮できると思ったであろう。しかし、それは麗子が患者としていられる時のみであつて、麗子に対して「医師として不都合な心理」を抱いていた汐見には精神分析的な能力は無用の長物であつたらう。

---

<sup>132</sup> 同前掲注111、94-95頁。

<sup>133</sup> 同前掲注111、37頁。

麗子の第一回目の治療が失敗に終わった後の或る夜、汐見は同じ診療所で働いている恋人の山内明美と一緒に過ごしていた。その晩、汐見は「へんな影響を受けてみたようで」<sup>134</sup>「行為のあひだの或る瞬間に」<sup>135</sup>「レコードの音楽が尽き」<sup>136</sup>、「針が盤面の音のない溝を軽くこすっていつまでも廻つてゐる、そのかすれた音をきみたやうな気」<sup>137</sup>がするのであった。慌てて妄想から抜け出し、気づくと汐見の寝室には「蓄音機もなければ、レコードもまはつてゐなかつた」<sup>138</sup>とされている。一見汐見は「音楽」を聴いたかのように見えるが、その「音楽」は音楽とはいえない、ただの「かすれた音」にすぎず、音楽が終つたのは、記憶がさかのぼることもできないほど遠い昔で、「音楽はずつと昔に死んでしまつてゐ」<sup>139</sup>たのである。いつかはその「かすれた音」も聴こえなくなり、汐見は麗子のように音楽を聴けなくなるのであろう。

汐見のこのような妄想は、今まで「精神的自由」<sup>140</sup>を享受してきたと信じきっていたのが、麗子を知ってから、そうではなかつたということを実感したための現象ではないかと考えられる。「精神的自由」を求めて麗子に執着しつづけた汐見は、やがて明美との情事のさい、明美の顔から似ても似つかぬ麗子の顔を見出してしまふ。その顔は麗子がヒステリーを起した時と類似しているとされているが、以下のものである。

麗子の恍惚とした顔を一度として眺めたことのない私としては、どんな想像を描くのも自由な筈であるが、それにしても明美の顔の上にそれを見るときは！

あとでこれを考へて、私が戦慄を禁じえないのは、それが果して、私の幻覚にとどまるものか、あるひは、明美の無意識の力が総動員されて、そのとき、恍惚に陥つた麗子の顔を表現してみせたのではないかといふ疑問である。性的昂奮とヒステリーとの類似さを、あまり推し進めてはいけぬが、宗教的ヒステリー患者における手足の聖痕の発現が、ヒステリー性症候群のうちの、限局性的水泡形成や、皮下組織の毛細管出血から説明されないでもないやうに、明美の肉体は無意識のうちに、麗子の顔を完全に演じてみたのかもしれないのである。<sup>141</sup>

---

<sup>134</sup> 同前掲注111、37頁。

<sup>135</sup> 同前掲注111、37頁。

<sup>136</sup> 同前掲注111、37頁。

<sup>137</sup> 同前掲注111、37頁。

<sup>138</sup> 同前掲注111、37頁。

<sup>139</sup> 同前掲注111、37頁。

<sup>140</sup> 同前掲注111、36頁。

<sup>141</sup> 同前掲注111、85-86頁。

麗子に化けた明美に対して「聖テレジアに似た聖らかな顔つき」<sup>142</sup>とまで聖化して喩えた汐見は、その夢から目覚められず、麗子は疑いもなく聖女になり、そこでは「音楽」を聴いていたと妄想に陥っている。汐見の麗子に対する特別な感情は治療の際に、より執着的にあらわれているが、以下のようなのである。

これは久しく私の待つてゐた瞬間であり、今度こそこの薄明のなかで美しい白狐の尻尾をうかんでやろうと待ち構へてゐた機会の到来であつた。（中略）

私には負け惜しみの自信があり、どんなに深く彼女の肉体を知つた男よりも、私のはうがよく知つてゐるといふ、すべての男に対する軽蔑感があつた。どんなに詳細に彼女の肉体の褻に分け入り、どんなに隈なく彼女の美しい皮膚を味はつても、男たちは決して私のやうに彼女の真の深所へ、彼女のもつとも深いをののきと歓喜に触れることはできない。<sup>143</sup>

麗子の精神を分析するという事は、いわゆる麗子の精神を征服することを意味し、麗子と肉体的な関係をもつ男性たちよりも、麗子の精神を支配している自身こそ麗子の「深いおののきと歓喜に触れること」ができるのだというように、それが男の「矜り」<sup>144</sup>であるかのように語られている。汐見に映された分析室の寝椅子に横たわっている麗子は「夜の天空から眺め」<sup>145</sup>られた「夜の、灯火燦然とした大都会に似てゐ」<sup>146</sup>て、その風景は「体全体にきらめく汗の滴を宿した」<sup>147</sup>「ものうげに横たはる女体」<sup>148</sup>のようであつた。汐見は麗子に治療を重ねるにつれ、医師としての職業は麗子を征服するための「仮面」<sup>149</sup>に過ぎなくなり、やがて麗子を治さなければならないという医師の本分を忘れ、麗子を欲する一人の男として治療の失敗を期待するにいたる。

肝臓癌で死んだ又従兄の葬式後、東京に戻ってきた麗子は、汐見の診療所に訪れては又従兄の死から音楽を聴いたと言う。麗子は死を一種の神聖な儀式として受け入れている一方で、人が死なないと音楽を聴くことができないと訴える。麗子自身は「人を犠牲にしてゆく怖ろ

---

<sup>142</sup> 同前掲注111、86頁。

<sup>143</sup> 同前掲注111、157頁。

<sup>144</sup> 同前掲注111、48頁。

<sup>145</sup> 同前掲注111、158頁。

<sup>146</sup> 同前掲注111、157頁。

<sup>147</sup> 同前掲注111、157頁。

<sup>148</sup> 同前掲注111、157頁。

<sup>149</sup> 同前掲注111、99頁。

しい不吉な女」<sup>150</sup>であり、「死の匂ひを嗅ぎつけていそいと飛んでゆく鴉」<sup>151</sup>であると自らを責め立てながらも、それは宿命であると言う。麗子は「冷感症」について自らが原因を究明し、治せる方法が見つかったと言っているが、それは彼女の「チック」によって無効となり、再び麗子の治療は失敗となる。汐見は麗子が治らない限り、麗子を自分のもとに居させることができるという安堵と、他の誰でもなく麗子の精神を征服できる自身こそ麗子の「冷感症」を治させることのできる唯一の男であるという喜びに充ちるのである。また、このチックは麗子自身には気づかれず、汐見にだけ見えたことによって、麗子自身よりも汐見の方が麗子をより知っているという意味を付加し、汐見に征服感を与えている。さらには、欲望が満たされないが為にあらわれている麗子のヒステリーは、汐見の欲望を満足させているという点で、相互的に作用しているともいえよう。高橋正雄は「医師のもとを訪れた女性の不感症は、この医師の治療というよりは、かつて愛していた兄の淪落した姿に幻滅したのを契機に治癒」<sup>152</sup>されると述べているが、おそらく麗子のヒステリーを媒介にしてあらわれている汐見の麗子に対する欲望が、麗子を治療したくない、治療してはいけないという無意識を働かせ、治療を妨げたからであるということができよう。

三島由紀夫『音楽』は精神分析医を主人公にし、〈女性の冷感症の一症例に関する手記〉として描き出された小説である。三島は『音楽』を創作する際に、シュテーケル『性の分析—女性の冷感症—』を参考にしたとされているが、精神分析的な理論だけでなく、「冷感症」そのものを恋愛問題として扱っている点も影響があったと考えられる。麗子の「冷感症」は恋愛の精神的な障害として用いられているが、それにもなっている食欲不振や吐気、チックといったヒステリーの諸症状は肉体的な障害として用いられている。

医師の汐見は「冷感症」に対してあまり興味を持っていないような態度をとっている一方で、ヒステリーには最初から興味を示しており、より積極的な態度をとっている。特に、ヒステリー性顔面痙攣としてあらわれているチックは患者のヒステリーが治っていないことの証拠となっており、医師の汐見にとっては一種の征服感を与え、麗子に対する欲望をも満足させている。つまり、汐見の欲望は麗子のヒステリーを媒介にしてあらわれており、その欲望からの無意識は医師としての本分を忘れさせ、麗子の治療を妨げている。結果として「兄の子を生みたい」という麗子の願望が満たされなかったことや汐見の麗子への欲望が汐見の無意識を働かせ、治療がうまく行われなかったことを踏まえれば、麗子の「冷感症」は治癒

---

<sup>150</sup> 同前掲注111、94頁。

<sup>151</sup> 同前掲注111、94頁。

<sup>152</sup> 同前掲注88、51頁。

されていないとみることもできよう。こうした解釈は、幼児期の固着は完全に取り除かれることはないというシュテューケルの理論にも符合するところであると考えられる。

三島由紀夫『音楽』においてヒステリーは麗子の「冷感症」の主な症状として用いられ、顔面のチックとしてあらわれている。性的欲求不満を原因にしているヒステリーは欲求を満足させることによって治癒されるが、美人の麗子を欲していた汐見は、自分の手によって麗子が治癒されることを願望し、ヒステリーの症状があらわれるたびに欲望が増していった。しかし、汐見は麗子のヒステリーが「兄の子を生みたい」という願望から発した「冷感症」の二次的な症状であることを徐々に分かるようになり、麗子に対する欲望をも消えていった。結末では、兄に再会した麗子の病気が治ったように描かれているが、幼児期の固着は完全に取り除かれることはないというシュテューケルの理論からみると、実兄の子を産みたいという近親相姦的な麗子の願望が満たされなかったという意味で治癒できなかったという解釈ができると思われる。

以上のように本章では、医学的な知識を基盤としたヒステリーが作品においてどのような役割を果たしているのかについて検討した。有島武郎『或る女』においてヒステリーは主人公葉子を破滅させる要因として用いられていた。有島は婦人病を原因とするヒステリーに、『性の心理』から得られた「性欲」という知識を付加し、女性という性別を強調するために用いた。葉子のヒステリーは女性の自由な人生に対する渴望と哀歎の象徴として有島の女性解放思想がよく反映されていた。医学的な知識をもとにヒステリーの分析を主な素材とした佐藤春夫『更生記』では、ヒステリーの症状から得られた端緒をもってヒステリーの原因となった過去の事件を追跡していくという点から物語の展開に重要な要素として作用していた。三島由紀夫は『性の分析』から得られた知識で「冷感症」を創作の素材とし、その病気の主な症状としてヒステリーを用いた。分析医が患者を治療するために過去を追跡していくという点で『更生記』と類似した展開方式であったが、分析医の患者に対する感情が治療を妨げたというところが異なっていた。ヒステリーは患者の欲求不満をあらわしていると同時に、分析医の欲望が投影されていた。

創作においてヒステリーは、人物のそのときの心理や感情を反映させたものであり、周囲の人物たちの行動に影響を及ぼす要因となりうるのだという観点から主に描かれていた。本章においては、そうした観点に加えて、ヒステリーの症状を医学などのやや専門的な見地から追究しようとする観点が感じられる作品を分析した。これらの作品では、語り手、あるいは書き手である作家がヒステリーについて一定の深い知識を持っており、その知識が作品内

の物語の展開に大きな役割を持っていることが感じられる。換言すれば、こうした作品においては、ヒステリーを人物たちを右往左往させる要因として語るに終始するのではなく、ヒステリーの原因や意味を追究しようとする方向性が感じられるのである。

## 終章

以上、日本近代文学においてヒステリーという言葉がどのように登場し、その内実がどのように表現されているのかについて考察した。各章の結論を振り返ると次のようである。

第1章では、ヒステリーという用語の流行の前哨的な役割として、明治期に流行したとされている神経病の言説を分析し、ヒステリーの表現に影響を及ぼしたとみられる要素について検討した。第1節から第3節までは、ヒステリーと神経病の言説を中心に考察した。明治初期に流行していた神経病という用語は明治末期になると徐々に用いられなくなるが、一方で婦人の神経病として指摘されていたヒステリーに対する言及が徐々に増えていくことが、関連文献や記事の推移から確認できた。神経病という用語の流行には、怪異を病理として解釈しようとする動きに反発した怪談の領域において、批判しようとして皮肉った口調で神経病という用語を用いたことが、かえって大衆化を促したという結果をもたらした。神経病が文学においてどのように用いられていたのかを第4節の三遊亭円朝『真景累ヶ淵』において考察を行った結果、神経病という言葉が本来は特定の人物を対象にして用いられる用語であるにもかかわらず、因縁や輪廻といった怪異と思われる現象にまで広く用いられていたことがわかった。第5節では女性の病であるとされたヒステリーの特徴から『真景累ヶ淵』を読み直し、ヒステリーの表現に影響を及ぼしたとみられる要素について検討してみた。男女の愛憎や二人妻の話をテーマにした豊志賀と新吉、お久の物語において、ヒステリー持ちの女として解釈できるのは、新吉に執着し、お久を嫉妬したあげく、怨霊に変貌した豊志賀のようなタイプであることが確認できた。同様な構図をとっている物語において、豊志賀のような立場にある女性はヒステリー持ちとされていたが、その代表的な人物は「妻」である。

第2章では、ヒステリーという言葉が流行した明治末期から大正期の文学における妻のヒステリーについて検討した。神経病という設定が特定の現象に用いられたのに対し、ヒステリーという設定は主に特定の人物、つまり、子宮を持つ女性とその対象となっていたが、中でも「家庭」の中の女性である「妻」について多く用いられていた。妻という人物像を媒介にヒステリーがどのようにあらわれているのかについて考察した結果、まず、第1節の岩野泡鳴「五部作」において主人公義雄の妻千代子は当時の社会が求める良妻賢母であったにもかかわらず、夫の目には生き生きとしない、醜いヒステリー女として映じていた。当時のヒステリーが良妻賢母思想に従わないような、進歩的な女性に対して用いられる側面があったのに対し、「五部作」においては、妻に飽きてしまった夫が新しい相手と関係を結ぶための口実としてヒステリーが用いられた。一方で、妻になることを願っていた新しい相手のお鳥

は癪持ちであるという理由で、やがてお鳥からも離れるようになるが、結局、お鳥の癪も千代子のヒステリーと異ならなかった。義雄が千代子ともお鳥とも関係が続けられなかった理由は、刹那主義に立脚した恋愛観のせいで、男女の関係を維持して家庭を築くことができなくなっていたからである。ヒステリーは夫が妻に飽きてしまったことによってあらわになってくる妻の欠点をあらわしたものであり、新たに別の女性を探し求めることを正当化するための口実だったのである。

第2節の夏目漱石『道草』では、作者漱石と鏡子におけるヒステリーについて検討したうえで、『道草』の健三とお住の夫婦関係においてヒステリーがどのような役割を果たしているのかについて分析した。『道草』においてヒステリーは愛と憎しみという相反する感情としてあらわれるが、両方とも妻の朦朧状態のヒステリーを心配して恐れる健三の愛情と深くつながったものであるため、二人の間で言い争いが絶え間なく続いても、夫婦という関係は崩さずに維持できていた。鏡子は流産後、激しいヒステリーに悩まされ、未遂には終わったものの、自殺を図った経験があり、『道草』におけるお住の朦朧状態のヒステリーは、その経験の反映であると想定できる。ヒステリーを媒介に成立する夫婦の性生活は、子供というかすがいに結実し、父と母として家庭を築き、維持することにつながった。この顛末は、泡鳴の「五部作」において妻のヒステリーが夫を家庭から離させ、結果的に家庭の破綻をもたらしたのと対照的である。しかし、いずれも夫の立場から一方的に語られたもので、ヒステリーとされた妻自身の気持ちはほとんど表現されていないという点では共通していた。泡鳴「五部作」や漱石『道草』は、家父長社会において妻や母として家庭に属さなければならない立場に置かれている女性たちのヒステリーが、家庭の破綻または家庭の維持という重大な問題に関係している要素として描かれていると言えよう。

第3節の芥川龍之介「二つの手紙」では、夫の佐々木が妻の姦通事件をドッペルゲンガーの仕業であると主張する際に、妻のヒステリーを根拠としている点に注目して分析を行った。さらに、「ドッペルゲンガー＝ヒステリー」という図式は、神経病という概念の流行時に形成された「怪異＝病理」という図式と類似していたが、病理としてのヒステリーという考え方が普及した大正期においてこの図式がどのように活用されているのかについても検討してみた。三回にわたるドッペルゲンガーの出現に対する記述では、ドッペルゲンガーの信憑性を読者に信じさせるには多少不自然で、違和感のある記述が複数存在しており、それにより、佐々木自身は狂人であり、ヒステリーの妻が不倫を起したという結果をもたらしていた。佐々木の狂気は「ドッペルゲンガー＝ヒステリー」という関係を信じている点に認められるのであり、妻の姦通事件がドッペルゲンガーの仕業であるという主張は、妻のヒステリーが

なければ成立しない仕組みになっていた。しかし、結末に至って、妻の失踪事件に対して真相を明らかにしようとせず、すぐに事件を片づけようとした佐々木の態度から「ドッペルゲンガー＝ヒステリー」を掲げて狂人の振りをしたとも考えられる。「ドッペルゲンガー＝ヒステリー」という図式をもとに構成された物語は、読者に判断を委ね、様々な解釈を可能にし、一種のオープンエンディングの効果をもたらしているのである。

第4節の広津和郎『神経病時代』では、性格破産者の主人公定吉とヒステリー妻との相関関係に注目して考察した。性格破産者という人物像はチャーホフから影響を受けたもので、その点で定吉は『決闘』の主人公ラエーフスキーと類似している。『決闘』ではラエーフスキーが弱い性格のためにヒステリーとなっていたが、『神経病時代』では妻のよし子が欲求不満のためにヒステリーとなっている。性欲と関連づけたヒステリーはトルストイ『クロイツェル・ソナタ』から影響を受けたもので、弱い性格のために、肉欲的なヒステリー妻との性的関係を拒めない定吉が描かれている。定吉が性的関係に応じることにより、一時的に妻のヒステリーはおさまるものの、根本的な問題解決にはならず、かえってヒステリーを持続させる結果をもたらし、悪循環となっている。『クロイツェル・ソナタ』ではヒステリーの妻を殺すことで問題を解決したが、『神経病時代』ではヒステリーの妻が妊娠し、定吉にとって更なる問題となっている。妻のヒステリーは性格破産者の煩悶や苦悩をもたらしていると同時に、性格破産者の弱さを強調しているのである。

第3章では、ヒステリーとレッテルが貼られた女性自身が語るヒステリーについて探ってみた。第1節では、作家岩野泡鳴の元妻であった岩野清「枯草」を中心に、主人公小夜子のヒステリーについて検討してみた。「枯草」では、妻のヒステリーを描くだけにとどまらず、妻の立場からヒステリーの原因についても語られていたが、当時のヒステリーの原因として主に挙げられている婦人病や性的欲求不満ではなく、精神的な愛の欠如と肉欲的な愛だけを重視する夫の思想に苦しめられたことが原因としてあげられている。漱石の『道草』においては、夫婦の不仲を和らげる緩和剤としてヒステリーの設定が用いられ、夫婦の性愛を成立させているが、「枯草」においては夫はヒステリーの妻を避けて沈黙や不在を貫き、妻のほうは、精神的な愛を重視せず、肉体的な愛だけを求める夫によって、ヒステリーが激しくなるという悪循環が繰り返され、ヒステリーは夫婦の不仲の原因となっていた。岩野清の「枯草」におけるヒステリーは、男性によって語られたヒステリーの醜さを保ちつつ、ヒステリーの原因を精神的な要因から追究したという意味で、当時の男性によって作り上げられた妻のヒステリーのイメージに対抗するものとなった。

第2節では、与謝野晶子の評論「姑と嫁に就て」を中心に、ヒステリーがどのように捉え

られていたのかについて検討した。晶子における女性問題の認識がうかがわれるこの評論は、姑と嫁という関係を旧思想と新思想という視点から眺めつつ、女性の教育問題について論じたものである。晶子は、ヒステリーは疾病の一つであるという当時の言説に従っていたが、女性の病という点を女性の社会的な問題として捉え、その原因や解決方法を社会の思想や教育の側面から模索した。文化学院設立を通じて、男女ともに同等の水準の教育を与え、真の女性解放を目指したのも、その例であった。

第3節では、プロレタリア文学家である宮本百合子「縫子」の主人公・縫子のヒステリーと彼女の労働環境との関係について考察した。縫子のヒステリーは、労働による疲労感や過酷な運命の自覚が原因であった。家事や裁縫などの実用的な技術を身につける教育を重視した実科高等女学校を卒業した縫子は、家族のために、労働搾取に近い形で働かされた。本節では、一家の娘であるという理由で、不合理な労働条件のもとで働かされ、そうした状況から逃げることもできない女性の「生存の苦しさ」がヒステリーという形であらわれた様相を検討した。

第4章では、ヒステリーと関連した医学知識を取り入れた作品及び精神医学を素材にした作品について考察を行った。第1節では、有島武郎『或る女』の主人公葉子を破滅させた要因となっているヒステリーについて考察を行った。「或る女のグリンプス」を改作した作品である『或る女』は、改作の際にハヴロック・エリスの『性の心理』を参考にしたもので、医学書を参考にして改作した『或る女』と改作前の「或る女のグリンプス」を対照・比較した結果、「グリンプス」の中で見られる婦人病と関連づけたヒステリー観は『或る女』においても一貫してあらわれていたが、改作後は、母系による遺伝性や性欲の要素が付加されていた。有島は女性の真の解放とは性の自由であると主張していたため、女性の固有病であるヒステリーを媒介に女性という理由で経験せざるをえなかった女性の悲惨な人生を強調しようとした。しかし、葉子のヒステリーと破滅という結末は不倫を犯した葉子に罰が与えられたという一種の勧善懲悪として捉えられ、逆効果をもたらした。しかしながら、葉子のヒステリーを通じてあらわそうとしたのが社会に奪われてしまった女性自身の人生における自由を、中でも自由な恋愛を経験する権利を取り戻すことにあるということを考えれば、葉子のヒステリーは単に病という意味にとどまらず、女性の自由な人生に対する渴望と哀歎の象徴としてみることができると考えられる。

第2節では、『更生記』においてヒステリーを中心に物語がどのように展開していくのかについて検討した。精神病理学者の猪股は患者辰子のヒステリーを分析し、ヒステリーの治療のために、辰子の過去を追跡していった。ヒステリーの症状があらわれる際に、辰子に刺

激を与えたとみられる要素を特定し、その要素からヒステリーの原因を推察した。辰子のヒステリーは自身の体面を保つために、愛する人を裏切り、子供の死を偽装したことによる罪悪感が原因となっており、患者自身に真実を告げさせることで治療できた。学者の猪股が学問的な興味から研究対象としてヒステリー患者の辰子を分析したという点からみると、『更生記』はヒステリーの医学的解明の過程をプロットに据えた作品であると言える。

第3節では、三島由紀夫が創作の際に参考にしたとみられるシュテーケル『性の分析—女性の冷感症—』が『音楽』の中でどのような影響を及ぼしているのかについて考察し、麗子の「冷感症」の主な症状として用いられているヒステリーが分析医と患者の関係において、どのような役割を果たしているかについて検討した。分析医の汐見は「冷感症」に対してあまり興味を持たず、顔面のチックとしてあらわれるヒステリーから患者の病態を判断していた。麗子のヒステリーは欲求不満を原因にしているため、麗子の欲求を満足させることがヒステリーの治療法であった。分析医の汐見は麗子のヒステリーを治せるのは、他の誰でもなく、自分にならなければならないと願望し、ヒステリー症状があらわれるたびに、麗子に対する欲望は増していき、それがやがてヒステリーの治療を妨げる要因となった。

『音楽』におけるヒステリーには麗子自身の欲望だけでなく、汐見の欲望も投影されていたといえるが、麗子のヒステリーが「冷感症」による二次的な症状であり、その根本には実兄の子供を産みたいという近親相姦的な願望から発していることが徐々に分かるようになり、汐見の欲望をも徐々に消えていく。結果としては「兄の子を生みたい」という麗子の願望が満たされなかったことや麗子への欲望が汐見の無意識に影響し、治療がうまく行われなかったことを踏まえれば、麗子の「冷感症」は治癒されていないという解釈も可能だろう。さらに、こうした解釈は幼児期の固着は完全に取り除かれることはないと言ったシュテーケルの理論にも符合するところでもあった。ヒステリーと関わる事件を追跡していくという点で『更生記』と類似しているが、『音楽』の場合は分析医が患者に魅了され、理性的な思考ができず、治療に集中できない状態として描かれていた。しかし、最終的には『更生記』と同様に、患者が完治したか否かという問題に焦点があてられた状態で終わっているため、物語の展開の様相は類似していると言える。

日本近代文学においてヒステリーは時代とともに変化してきた。江戸時代末期に医学領域で病気概念として初めて登場したヒステリーは、明治維新後の近代日本においては、新旧思想が混在した過渡期的形態で狐憑きと結びついて解釈された。しかし、近代化が進むにつれ、旧時代的な民俗信仰の概念は人々の間では次第に消えていき、疾病としてのヒステリーが残った。しかしそれは、単なる医学的症例の一つとして捉えられたのではなく、当人の人

生や周囲の人間への影響などにかかわる様々な付加的要素や装飾が加えられて様々な形で理解され、文学の領域内で物語を形成する上で利用価値の高い要素として活用されるにいたった。

従来、文学作品に出て来るヒステリーの研究はおおむね、単独の作品においてヒステリーがどのように機能しているかという点について単発的に考察されていた。本論文では、ヒステリーが出て来る作品群を、ヒステリーが当該作品に対してどのような意味を持っているかという観点から分類してみた。その結果、文学史において、ヒステリーの表現のされ方に、ある種の変化や、傾向、流れがあることが確認できた。また、日本において、ヒステリーという言葉が登場し、流行語となり、多くの人々によって語られた時期までを辿りながら、ヒステリーという語にまつわるイメージの変容について考察した。ヒステリーという語にまつわる多くのイメージの変遷について、文学作品に即しながら、ある程度、解明できたのではないかと考えている。

本論文の考察を通じて分かったのは、ヒステリーは創作において多様な人物像やストーリーなどの形成に多大な影響を与えていたことである。長い間多くの人々に語られ、様々な特徴を蓄積してきたヒステリーは、創作の道具として活用しやすいだけでなく、作家が創作の意図に合わせてヒステリーの特徴を選別し再創造することができるという点で、作家個人の独創性を保つことを可能にしていたことが分かった。ヒステリーという一つの要素が多くの作品の中で様々な役割を果たしており、それを通じて作家の思想や時代像等をうかがうことができるということを踏まえれば、ヒステリーの研究は様々な研究の方向性を提示しており、学際的研究が可能であることから無限なる学問的価値を持っていると考えられるが、本研究もその一環として見てもらいたい。

## 参考文献

### 【単行本】（出版年順）

- 門脇眞枝『狐憑病新論』博文館、1902年9月。
- 糸左近「ヒステリー」『無薬療法』田村奈良吉発行、1907年12月。
- 石田昇「第六編 ひすてりー狂」『新撰精神病学』南江堂、1910年6月。
- 児玉修治「第四 神経衰弱と其症状」『健脳法』内外出版協会、1910年9月。
- 杉江董『ヒステリーの研究と其療法』島田文盛館、1915年7月。
- 夏目鏡子『漱石の思い出』岩波書店、1929年11月。
- 小宮豊隆「『道草』解説」『漱石全集 第八巻』漱石全集刊行会、1937年。
- 中貞夫「十九 宇田川玄眞」『杉田玄白の生涯 日本科学の先駆者』小学館、1942年12月、  
212-224頁。
- ヴィルヘルム・シュテーケル『性の分析—女性の冷感症— 第一巻』松井孝史訳、三笠書房、  
1955年6月。
- 夏目漱石「日記及断片」『漱石全集 第二十六巻』岩波書店、1957年6月、143頁。
- 金子準二『日本精神病学書史明治編 日本裁判精神病学書史明治編』日本精神病院協会、  
1965年1月。
- 尾崎紅葉「新続金色夜叉」『明治文學全集18 尾崎紅葉集』福田清人編、筑摩書房、  
1965年4月。
- 福沢諭吉「日本婦人論」『明治文學全集8 福沢諭吉集』富田正文編、筑摩書房、1966年3月。
- 福地櫻痴「買収政略大策士」『明治文學全集11 福地櫻痴集』柳田泉編、筑摩書房、  
1966年6月。
- 三宅花圃「萩桔梗」『明治文學全集81 明治女流文學集』塩田良平編、筑摩書房、  
1966年8月。
- 佐藤春夫「更生記」『佐藤春夫全集 第三巻』講談社、1966年10月。
- 北原白秋「邪宗門」『明治文學全集74 明治反自然派文學集(一)』野田宇太郎編、筑摩書房、  
1966年12月。
- 北原白秋「思ひ出」『明治文學全集74 明治反自然派文學集(一)』野田宇太郎編、筑摩書房、  
1966年12月。
- 北原白秋「東京景物詩」『明治文學全集74 明治反自然派文學集(一)』野田宇太郎編、  
筑摩書房、1966年12月。

夏目漱石「俳句」『漱石全集 第十二巻』岩波書店、1967年3月。

近藤元「南方の花」『明治文學全集64 明治歌人集』山崎敏夫編、筑摩書房、1968年9月。

小栗風葉「寝白粉」『明治文學全集65 小杉天外 小栗風葉 後藤宙外集』伊藤整編、筑摩書房、1968年10月。

小栗風葉「恋ざめ」『明治文學全集65 小杉天外 小栗風葉 後藤宙外集』伊藤整編、筑摩書房、1968年10月。

柳川春葉「秋裕」『明治文學全集22 硯友社文学集』佐々木徹編、筑摩書房、1969年1月。

山岸荷葉「紺暖簾」『明治文學全集22 硯友社文学集』佐々木徹編、筑摩書房、1969年1月。

坪内逍遙「妹と背かゞみ」『明治文學全集16 坪内逍遙集』稲垣達郎編、筑摩書房、1969年2月。

岩野泡鳴「焰の舌」『明治文學全集86 明治近代劇集』秋庭太郎編、筑摩書房、1969年3月。

水野葉舟「おみよ」『明治文學全集72 水野葉舟 中村星湖 三島霜川 上司小剣集』吉田精一編、筑摩書房、1969年5月。

草村北星「濱子」『明治文學全集93 明治家庭小説集』瀬沼茂樹編、筑摩書房、1969年6月。

澁澤龍彦「解説」『音楽』新潮社、1970年2月。

江藤淳「星別れんとする晨」『漱石とその時代 第二部』新潮社、1970年9月。

徳田秋声「二十四五」『明治文學全集68 徳田秋声集』吉田精一編、筑摩書房、1971年1月。

高瀬文淵「詩篇 若葉」『明治文學全集23 山田美妙 石橋忍月 高瀬文淵集』福田清人編、筑摩書房、1971年8月。

島崎藤村「家」『明治文學全集69 島崎藤村集』笹淵友一編、筑摩書房、1972年6月。

広津和郎「神経病時代」『廣津和郎全集 第一巻』中央公論社、1973年12月。

荒正人『漱石文学全集 別巻 漱石研究年表』集英社、1974年10月。

広津和郎「「神経病時代」の不満足から生れた「二人の不幸者」」『廣津和郎全集 第十三巻』中央公論社、1974年11月。

広津和郎「チェエホフの強み」『廣津和郎全集 第八巻』中央公論社、1974年11月。

三遊亭円朝「真景累ヶ淵」『三遊亭円朝全集 第1巻』角川書店、1975年5月。

宮本賢治「八百編の中から」『宮本百合子 時代と生涯』多喜二・百合子研究会編、新日本出版社、1976年12月。

江口渙「小説「伸子」の今日的意義」『宮本百合子 時代と生涯』多喜二・百合子研究会編、新日本出版社、1976年12月。

本多秋五「宮本百合子—その生涯と作品—」『宮本百合子 時代と生涯』多喜二・百合子

- 研究会編、新日本出版社、1976年12月。
- 長塚節「開業医」『明治文學全集54 伊藤左千夫 長塚節集』本林勝夫編、筑摩書房、1977年6月。
- 内田魯庵「くれの廿八日」『明治文學全集24 内田魯庵集』筑摩書房、1978年3月。
- 宮本百合子「日記1 1924年」『宮本百合子全集 第二十三卷』新日本出版社、1979年5月。
- 宮本百合子「縫子」『宮本百合子全集 第二卷』新日本出版社、1979年6月。
- 有島武郎「或る女」『有島武郎全集 第四卷』筑摩書房、1979年11月。
- 有島武郎「或る女のグリンプス」『有島武郎全集 第二卷』筑摩書房、1980年2月。
- 与謝野晶子「婦人と思想」『定本與謝野晶子全集 第十四卷』講談社、1980年3月。
- 与謝野晶子「姑と嫁に就て」『定本與謝野晶子全集 第十五卷』講談社、1980年5月。
- 宮本百合子「日記2 1926年」『宮本百合子全集 第二十四卷』新日本出版社、1980年7月。
- 有島武郎「感想—貞操上の自由—」『有島武郎全集 第九卷』筑摩書房、1980年10月。
- 有島武郎「内部生活の現象」『有島武郎全集 第八卷』筑摩書房、1980年10月。
- 有島武郎「惜しみなく愛は奪ふ」『有島武郎全集 第八卷』筑摩書房、1980年10月。
- 有島武郎「三つの希望」『有島武郎全集 第八卷』筑摩書房、1980年10月。
- 有島武郎「観想録 第十五卷〔訳〕」『有島武郎全集 第十二卷』筑摩書房、1981年4月。
- 有島武郎「観想録 第五卷〔訳〕」『有島武郎全集 第十卷』筑摩書房、1981年10月。
- 永原和子「良妻賢母主義教育における「家」と職業」『日本女性史 第4巻 近代』  
女性史総合研究会編、東京大学出版会、1982年5月。
- 山田昭夫「広津和郎論—第一主題の作品について—」『日本文学研究資料叢書 私小説』  
日本文学研究資料刊行会編、有精堂、1983年5月。
- 柄谷行人「意識と自然——漱石試論（I）」『畏怖する人間』冬樹社、1984年12月。
- 岩野清『叢書『青鞥』の女たち 第4巻 愛の争闘』不二出版、1985年11月。
- 夏目漱石「漢詩文」『漱石全集 第十八巻』岩波書店、1986年3月。
- 吉田禎吾・板橋作美「憑きものと社会構造」『日本民俗文化資料集成 第7巻 憑きもの』  
谷川健一編、三一書房、1990年3月。
- エレイン・ショーウォーター「序章 女の病い」『心を病む女たち—狂気と英国文化—』  
山田晴子・藺田美和子共訳、朝日出版社、1990年10月。
- 相原和邦「『道草』の性格と位置」『漱石作品論集成 第十一巻 道草』玉井敬之他編、  
桜楓社、1991年6月。
- 大岡昇平「「自伝」の効用—『道草』をめぐる—」『漱石作品論集成 第十一巻 道草』

- 玉井敬之他編、桜楓社、1991年6月。
- 江藤淳「「道草」—日常的な生活と思想—」『漱石作品論集成 第十一巻 道草』  
玉井敬之他編、桜楓社、1991年6月。
- 江頭太助「H・エリスの『性の心理学的研究』の影響—『或る女』研究の視点—」  
『有島武郎の研究』朝文社、1992年6月。
- ブラム・ダイクストラ『倒錯の偶像—世紀末幻想としての女性悪—』富士川義之・藤巻明・  
松村伸一・北沢格・鶴飼信光共訳、パピルス、1994年4月。
- 岩野泡鳴「発展」『岩野泡鳴全集 第二巻』臨川書店、1994年10月。
- 岩野泡鳴「毒薬女」『岩野泡鳴全集 第二巻』臨川書店、1994年10月。
- 岩野泡鳴「憑き物」『岩野泡鳴全集 第二巻』臨川書店、1994年10月。
- 岩野泡鳴「神秘的半獣主義」『岩野泡鳴全集 第九巻』臨川書店、1995年8月。
- 芥川龍之介「二つの手紙」『芥川龍之介全集 第二巻』岩波書店、1995年12月。
- 岩野泡鳴「征服被征服」『岩野泡鳴全集 第四巻』臨川書店、1995年12月。
- 吉田城「序論」『神経症者のいる文学』名古屋大学出版会、1996年7月。
- 岩野泡鳴「男女間の趣味」『岩野泡鳴全集 第十一巻』臨川書店、1996年8月。
- ハヴロック・エリス「羞恥心の進化」『性の心理 Vol.1 羞恥心の進化』佐藤晴夫訳、  
未知谷、1996年10月。
- 岩野泡鳴「『愛の争闘』（岩野清子著）」『岩野泡鳴全集 第十三巻』臨川書店、1996年12月。  
「第一の妻の泡鳴観(其二)」『岩野泡鳴全集 別巻』臨川書店、1997年4月。
- エティエンヌ・トリヤ『ヒステリーの歴史』安田一郎・横倉れい共訳、青土社、1998年5月。
- 前田愛「音読から黙読へ—近代読者の成立」『近代読者の成立』岩波書店、2001年2月。
- 尾形明子「霊が勝つか、肉が勝つか」『自らを欺かず—泡鳴と清子の愛—』筑摩書房、  
2001年4月。
- 船越幹央「ヒステリー—メディアのなかの病—」『青弓社ライブラリー13 偏見という  
まなざし—近代日本の感性—』坪井秀人編、青弓社、2001年4月。
- 三島由紀夫「音楽」『決定版 三島由紀夫全集 第11巻』新潮社、2001年10月。
- 三島由紀夫「解題」『決定版 三島由紀夫全集 第11巻』新潮社、2001年10月。
- 山田俊治「序章 2 明治新聞事情」『大衆新聞がつくる明治の〈日本〉』日本放送出版  
協会、2002年。
- 朝倉喬司「序章 いま、なぜ毒婦なのか？」『毒婦の誕生—悪い女と性欲の由来—』洋泉社、  
2002年。

近藤宏子「百姓的イデオロギー」『重治・百合子覚書 あこがれと苦さ』社会評論社、  
2002年9月。

夏目漱石「道草」『漱石全集 第十巻』岩波書店、2003年1月。

三島由紀夫「フロイト「芸術論」」『決定版 三島由紀夫全集 第28巻』新潮社、  
2003年3月。

渡会好一「序章 文化の記号としての神経病・脳病の物語」『明治の精神異説—精神病・  
神経衰弱・神がかり—』岩波書店、2003年3月。

渡会好一「第二章 民衆と神経病」『明治の精神異説—精神病・神経衰弱・神がかり—』  
岩波書店、2003年3月。

一柳廣孝「さまよえるドッペルゲンガー—芥川龍之介「二つの手紙」と探偵小説—」  
『探偵小説と日本近代』吉田司雄編著、青弓社、2004年。

堤邦彦「女霊の江戸怪談史—仁義なき「後妻打ち」の登場」『ナイトメア叢書2 幻想文学、  
近代の魔界へ』一柳廣孝・吉田司雄編、青弓社、2006年5月。

川村邦光編著「第1章 近代日本における憑依の系譜とポリティクス」『憑依と近代と  
ポリティクス』青弓社、2007年2月。

久保田万太郎「解説」『真景累ヶ淵』岩波書店、2007年7月。

谷口基「式 開化期怪談の苦闘」『怪談異譚—怨念の近代—』水声社、2009年8月。

坪井秀人「第二章 ヒステリーの時代—『或る女』のマッド・シーン—」『性が語る』  
名古屋大学出版会、2012年2月。

坂井博美「第一章 「愛の争闘」前史」『「愛の争闘」のジェンダー力学』ペリかん社、  
2012年12月。

坂井博美「第三章 セクシュアリティをめぐる攻防—『愛の争闘』の虚構性の検討を  
中心に—」『「愛の争闘」のジェンダー力学』ペリかん社、2012年12月。

新田篤「第四章 佐藤春夫「更生記」における精神分析と精神医学」『日本近代文学  
におけるフロイト精神分析の受容』和泉選書、2015年4月。

## 【雑誌・論文】

岩野清「枯草」『青鞞』2(2)、青鞞社、1912年2月。

新福尚武「ヒステリーの定義—精神神経科—ヒステリーの定義—第6回日本精神身体医学会  
総会より—」『精神身体医学』6(1)、1966年2月。

小坂晋「『或る女』と『アンナ・カレーニナ』—比較対比研究序説—」『岩手大学教育学部

- 研究年報』(26)、1966年12月。
- 小堀桂一郎「諸国物語と芥川—「アンドレアス・タアマイエルが遺書」と「二つの手紙」—」  
『国文学 解釈と教材の研究』15(15)、学灯社、1970年。
- 新見満雄「神経病時代」論—広津和郎の作家的出発— 『日本文学』24(9)、1975年。
- 山田昭夫「和郎の「神経病時代」とその妻」 『国文学 解釈と鑑賞』40(13)、1975年12月。
- 石割透「芥川龍之介—中期作品の位相(1)「さまよへる猶太人」「二つの手紙」「或日の大  
石内蔵之助」をめぐって—」 『駒沢短大国文』16、駒澤大学、1986年
- 辻秀子「与謝野晶子の教育思想」 『社会学研究科紀要』26、1986年。
- 渡辺聡子「広津和郎『神経病時代』の誕生とチェーホフの『決闘』」 『ロシア・ソビエト研  
究』15、1987年3月。
- 山本芳明「ヒステリーの時代—『或る女』序説」 『学習院大学文学部研究年報』36、1990年  
3月。
- Durham Valerie L. 「明治初期の毒婦物における悪女造型のレトリック-2-」 『東京経済大学  
人文自然科学論集』(88)、1991年7月。
- 西昌樹「サイコセラピー空間を旋りて(「仮面の告白」「金閣寺」「音楽」ほか)」 『国文学  
解釈と教材の研究』38(5)、1993年5月。
- 江種満子「『道草』のヒステリー」 『国語と国文学』71(12)、1994年12月。
- 青山太郎「ロシアの性愛論 I—トルストイの『クロイツェル・ソナタ』—」 『言語文化論究』  
(6)、1995年3月。
- 石井直志「精神病理の世紀末《ヒステリー》考—「ボヴァリー夫人」から「或る女」まで」  
『国文学解釈と教材の研究』40(11)、1995年9月。
- 今野喜和人「芥川龍之介「二つの手紙」の世界—クロウ夫人『自然の夜の側面』の寄与—」  
『人文論集』48(2)、静岡大学、1997年。
- 平子恭子「与謝野晶子の道德教育論—修身教科書への考察を教育勅語尊奉—」 『日本の教育  
史学』40(0)、1997年。
- 高橋正雄「熊本時代の夏目漱石—介護者としての側面—」 『日本病跡学雑誌』55、1998年。
- 光石亜由美「広津和郎「神経病時代」論—トルストイ『クロイツェル・ソナタ』と『性慾論』  
をめぐって—」 『情報表現論集』(1)、1998年3月。
- 佐々木亨「西南戦争と草双紙—『鳥追阿松海上新話』の出現をめぐって—」 『近世文藝』  
69(0)、1999年。
- 佐々木亨「『鳥追阿松海上新話』の読者の成立—新聞の宣伝効果—」 『国文学研究』(130)、

2000年3月。

小西由里「抑圧された言語と性—ヒステリーという表象—」『Perspective』1、2001年3月。

小西由里「『或る女』におけるヒステリー」『近畿大学日本語・日本文学』4、2002年3月。

小西由里「ヒステリーと女子教育についてのノート(一)—岩野泡鳴「焰の舌」を中心に—」

『近畿大学日本語・日本文学』5、2003年3月。

大河晴美「女中・元女中を描いた小説群—「黄昏」「或る日」「格子縞の毛布」「氷蔵の二階」をめぐる—」『国文学 解釈と鑑賞』71、2006年4月。

尾形明子「宮本百合子の手紙—百合子と湯浅芳子—」『国文学 解釈と鑑賞』71、2006年4月。

石原千秋「百年前の男と女—雑書から覗く明治・大正(10) 男は神経衰弱、女はヒステリー—」『本』31(7)、2006年7月。

高橋正雄「大正3年11月。の夏目漱石—日記と書簡の比較—」『日本病跡学雑誌』73、2007年。

三浦正雄「神経病としての怪談—日本近現代怪談文学史(1)—」『埼玉学園大学紀要 人間学部篇』(7)、2007年12月。

江種満子「有島武郎の女性論」『文教大学国文』(37)、2008年3月。

島田和幸「糸左近著「生理と病理」について—明治末期に出版された人体に関する啓蒙書について—」『形態科学』13(1)、人類形態科学研究会、2009年。

宮本侑佳「有島武郎作品における女性像の諸相と変遷—「お末の死」から「星座」まで—」『国語国文薩摩路』(54)、2010年3月。

加藤邦彦「冷感症の時代—三島由紀夫『音楽』と「婦人公論」—」『梅光学院大学公開講座 論集 第59集 三島由紀夫を読む』笠間書院、2011年3月。

高橋正雄「精神医学的にみた近代日本文学(第6報)—岩野泡鳴・広津和郎・佐藤春夫・宇野浩二—」『聖マリアンナ医学研究誌』12(87)、2012年。

小稲絵梨奈「日本における男女共学論の歴史と背景—小泉郁子の思想—」『教育学研究論集』(7)、2012年3月。

永吉和隆「「性格破産者」批判における「社会」表象について—広津和郎『神経病時代』—」『国文学研究』169、2013年3月。

三浦正雄「三遊亭円朝『真景累ヶ淵』の怪異観—日本近現代怪談文学史(8)—」『埼玉学園大学紀要 人間学部篇』(13)、2013年12月。

西川貴子「佐藤春夫「更生記」論—「狂気」をめぐる語り—」『同志社国文学』(81)、

2014年11月。

高橋正雄「精神医学的にみた近代日本文学(第20報)—三島由紀夫—」『聖マリアンナ医学研究誌』16(91)、2016年。

朴秀浄「三島由紀夫における同性愛言説の受容—『仮面の告白』と『禁色』を中心に—」『比較文学』(61)、2018年。

### 【その他】

『読売新聞』(朝刊)、1875年2月5日付、2面。

エルヴィン・フォン・ベルツ「狐憑病説」『官報』470、1885年1月。

『朝日新聞』(東京/朝刊)、1885年2月5日付、1面。

「帰宅後の花井お梅」『朝日新聞』(東京/朝刊)、1903年4月12日付、5面。

「其後のお梅」『朝日新聞』(東京/朝刊)、1903年4月13日付、5面。

「其後のお梅」『朝日新聞』(東京/朝刊)、1903年4月14日付、5面。

「神経の衛生」『読売新聞』(朝刊)、1906年6月9日付、3面。

「神経の衛生」『読売新聞』(朝刊)、1906年6月25日付、3面。

小山内薫訳「決闘(チェーホフ作)(一)の一」『読売新聞』(朝刊)、1909年11月8日付、1面。

小山内薫訳「決闘(チェーホフ作)(十二)の一」『読売新聞』(朝刊)、1909年12月25日付、5面。

小山内薫訳「決闘(チェーホフ作)(十四)の二」『読売新聞』(朝刊)、1909年12月30日付、1面。

小山内薫訳「決闘(チェーホフ作)(十四)の三」『読売新聞』(朝刊)、1909年12月31日付、1面。

小山内薫訳「決闘(チェーホフ作)(十四)の四」『読売新聞』(朝刊)、1910年1月1日付、7面。

小山内薫訳「決闘(チェーホフ作)(二)の二」『読売新聞』(朝刊)、1910年1月14日付、5面。

小山内薫訳「決闘(チェーホフ作)(十四)の四」『読売新聞』(朝刊)、1910年1月26日付、5面。

『朝日新聞』(東京/朝刊)、1915年8月8日付、5面。

『朝日新聞』(東京/朝刊)、1915年8月9日付、5面。

『朝日新聞』(東京/朝刊)、1915年8月10日付、5面。

『朝日新聞』(東京/朝刊)、1915年8月11日付、5面。

『朝日新聞』(東京/朝刊)、1915年8月12日付、5面。

赤木桁平「『道草』を読む」『読売新聞』(朝刊)、1915年10月24日付、7面。

『読売新聞』（朝刊）、1930年10月24日付、11面。

『読売新聞』（朝刊）、1931年2月5日付、4面。

## 参考資料

### 1. 明治期におけるヒステリー「図書・そのほか」【目録】(発行年月順)

| 番  | タイトル                                  | 分類 | 著・編 [等]                                        | 出版       | 発行年月 |      |    | 備考<br>(掲載誌・巻・号等)        |
|----|---------------------------------------|----|------------------------------------------------|----------|------|------|----|-------------------------|
|    |                                       |    |                                                |          | 西暦   | 和暦   | 月  |                         |
| 1  | 華氏内科摘要                                | 図書 | 桑田衛平 [訳述];<br>島村鼎 [関]                          | 不明       | 1872 | 明治5  |    |                         |
| 2  | 華氏内科摘要                                | 図書 | ハーツホーン;<br>長谷川泰 [訳]                            | 不明       | 1875 | 明治8  | 11 |                         |
| 3  | 華氏内科摘要                                | 図書 | 桑田衛平 [訳述]                                      | 不明       | 1875 | 明治8  |    |                         |
| 4  | 精神病約説                                 | 図書 | 顯理貌德斯<br>禮(ヘンリー・モウズ<br>レイ(英)) [撰];<br>神戸文哉 [訳] | 京都癲狂院    | 1876 | 明治9  | 10 |                         |
| 5  | 内科簡明                                  | 図書 | コンスプリユツク;<br>林洞海/石川櫻所/<br>石黒正恵訳 [他]            | 不明       | 1876 | 明治9  |    | 第二巻 第三編                 |
| 6  | 洋漢病名一覽                                | 図書 | 栗原順庵                                           | 博文堂      | 1878 | 明治10 | 10 | 前編                      |
| 7  | 婦人病論                                  | 図書 | 山崎元脩                                           | 運沼善兵衛    | 1879 | 明治12 | 10 |                         |
| 8  | 新撰方彙                                  | 図書 | 加藤寧蔭                                           | 英蘭堂      | 1880 | 明治13 | 7  |                         |
| 9  | 弊私的里論                                 | 雑誌 | ヘルツ                                            | 弘医会      | 1881 | 明治14 | 6  | 『弘医月報』(9)               |
| 10 | 病理各論                                  | 図書 | 三宅秀                                            | 島村利助     | 1881 | 明治14 | 12 |                         |
| 11 | 内科病論                                  | 図書 | ヘルツ [他]                                        | 伊勢錠五郎    | 1882 | 明治15 | 12 |                         |
| 12 | 歌私的里及治法                               | 雑誌 | 櫻井郁次郎                                          | 弘医会      | 1883 | 明治16 | 2  | 『弘医月報』(27)              |
| 13 | 婦人病論 改正挿図                             | 図書 | 山崎元脩                                           | 運沼善兵衛    | 1883 | 明治16 | 7  | 中編                      |
| 14 | 狐憑病説                                  | 雑誌 | エルヴイン・フォン・<br>ヘルツ                              | 官報       | 1885 | 明治18 | 1  | 470                     |
| 15 | 「ヒステリー」病論                             | 雑誌 | 阿久津                                            | 順天堂醫事研究会 | 1885 | 明治18 | 6  | 『順天堂醫事研究会雑誌』M18(4)      |
| 16 | 「ヒステリー」病論                             | 雑誌 | 順天堂醫事研究会 編                                     | 順天堂醫事研究会 | 1885 | 明治18 | 6  | 『順天堂醫事研究会雑誌』M18(5)      |
| 17 | 「ヒステリー」病論(前集ノ續キ)                      | 雑誌 | 順天堂醫事研究会 編                                     | 順天堂醫事研究会 | 1885 | 明治18 | 7  | 『順天堂醫事研究会雑誌』M18(6)      |
| 18 | 歌私的里ノ説附其療法                            | 雑誌 | 順天堂醫事研究会 編                                     | 順天堂醫事研究会 | 1886 | 明治19 | 10 | 『順天堂醫事研究会雑誌』<br>M19(35) |
| 19 | 歌私的里ノ説附其療法 (續集)                       | 雑誌 | 順天堂醫事研究会 編                                     | 順天堂醫事研究会 | 1886 | 明治19 | 11 | 『順天堂醫事研究会雑誌』<br>M19(36) |
| 20 | 歌私的里説附其療法 (續集)                        | 雑誌 | 順天堂醫事研究会 編                                     | 順天堂醫事研究会 | 1886 | 明治19 | 11 | 『順天堂醫事研究会雑誌』<br>M19(37) |
| 21 | 歌私的里説附其療法 (續集)                        | 雑誌 | 順天堂醫事研究会 編                                     | 順天堂醫事研究会 | 1886 | 明治19 | 12 | 『順天堂醫事研究会雑誌』<br>M19(38) |
| 22 | 歌私的里説附其療法 (續集)                        | 雑誌 | 順天堂醫事研究会 編                                     | 順天堂醫事研究会 | 1886 | 明治19 | 12 | 『順天堂醫事研究会雑誌』<br>M19(39) |
| 23 | 精神病学                                  | 図書 | シュウレ [他];<br>江口襄<br>[抄訳・纂訳]                    | 英蘭堂      | 1887 | 明治20 | 1  |                         |
| 24 | 磁石ノ感動ニ由テ一患者ノ「ヒステリー」症候ヲ<br>他ノ患者ニ轉移スルノ説 | 雑誌 | 平野千代吉                                          | 順天堂醫事研究会 | 1887 | 明治20 | 4  | 『順天堂醫事研究会雑誌』M20(8)      |

| 番  | タイトル                       | 分類 | 著・編 [等]                 | 出版        | 発行年月 |      |    | 備考<br>(掲載誌・巻・号等)         |
|----|----------------------------|----|-------------------------|-----------|------|------|----|--------------------------|
|    |                            |    |                         |           | 西暦   | 和暦   | 月  |                          |
| 25 | 重症癡私の里及神經衰弱ノ療法             | 雑誌 | ブルカルト ; 小澤弘             | 日本医史学会    | 1888 | 明治21 | 1  | 『中外医事新報』(187)            |
| 26 | 重症癡私の里及神經衰弱ノ療法(續稿)         | 雑誌 | ブルカルト ; 小澤弘             | 日本医史学会    | 1888 | 明治21 | 1  | 『中外医事新報』(188)            |
| 27 | 男子「ヒステリー」                  | 雑誌 | 順天堂醫事研究会 編              | 順天堂醫事研究会  | 1888 | 明治21 | 4  | 『順天堂醫事研究会雑誌』<br>M21(32)  |
| 28 | 「シムロ」ハ癲癩及歇私の里ニ有効ナルヤ        | 雑誌 | 日本医史学会 編                | 日本医史学会    | 1888 | 明治21 | 10 | 『中外医事新報』(206)            |
| 29 | 右ニ因テ歇私の里ノ一症                | 雑誌 | 川上                      | 北越医学会事務所  | 1888 | 明治21 | 12 | 北越医会会報. (12)             |
| 32 | 男性「ヒステリー」                  | 雑誌 | 同好会                     | 同好会       | 1889 | 明治22 | 12 | 同好医会雑誌. (6)              |
| 33 | 婦人病示要                      | 図書 | 磯籙抄訳                    | 金原寅作      | 1890 | 明治23 | 2  |                          |
| 34 | 歇私の里性癲癩ノ療法                 | 雑誌 | 日本医史学会 編                | 日本医史学会    | 1890 | 明治23 | 3  | 『中外医事新報』(239)            |
| 35 | 歇私の里性胃痛ニ精神的療法ヲ施シテ快治ヲ得タル實驗  | 雑誌 | 高橋軍平                    | 私立奨進医会    | 1890 | 明治23 | 4  | 『私立奨進医会雑誌』第2年(1)         |
| 36 | 歇私の里治験                     | 雑誌 | 内藤啓之助                   | 私立奨進医会    | 1890 | 明治23 | 5  | 『私立奨進医会雑誌』第2年(2)         |
| 37 | 歇私の里ノ痙攣發作ト癲癩症トノ鑑別          | 雑誌 | 小室匡世                    | 徳島医学会     | 1890 | 明治23 | 9  | 『徳島医学会雑誌』(3)             |
| 38 | 歇私の里性咽頭麻痺實驗                | 雑誌 | 南浦大助                    | 北越医学会事務所  | 1890 | 明治23 | 10 | 『北越医会会報』(32)             |
| 39 | 歇私の里病者ノ視野                  | 雑誌 | 日本医史学会 編                | 日本医史学会    | 1891 | 明治24 | 2  | 『中外医事新報』(261)            |
| 40 | 歇私の里ノ一奇症                   | 雑誌 | 日本医史学会 編                | 日本医史学会    | 1891 | 明治24 | 7  | 『中外医事新報』(272)            |
| 41 | 歇私の里性睡眠                    | 雑誌 | 日本医史学会 編                | 日本医史学会    | 1891 | 明治24 | 9  | 『中外医事新報』(276)            |
| 42 | 男子歇私の里ニ就テ                  | 雑誌 | 江馬賤男 ; 森和十郎             | 日本医史学会    | 1892 | 明治25 | 2  | 『中外医事新報』(285)            |
| 43 | ひすてりいヲ癲癩ト譯シひすてりい狂ヲ癲癩狂ト譯スヘシ | 雑誌 | 呉秀三                     | 日本医史学会    | 1892 | 明治25 | 4  | 『中外医事新報』(289)            |
| 44 | 信陽医学会報告                    | 図書 | 信陽医学会事務所                | 信陽医学会事務所  | 1892 | 明治25 | 5  | 第1巻                      |
| 45 | 内科新書(儒氏)                   | 図書 | テオドル・フォン・<br>シュルゲンゼン[他] | 谷口謙       | 1892 | 明治25 | 8  | 巻2                       |
| 46 | 「ヒステリー」ノ釋語                 | 雑誌 | 高橋金一郎                   | 日本医史学会    | 1892 | 明治25 | 8  | 『中外医事新報』(298)            |
| 47 | [寸珍百種 第10編] 通俗簡易治療法        | 図書 | 松尾連 編[他]                | 博文館       | 1892 | 明治25 | 11 |                          |
| 48 | 「ヒステリー」ニ就テ(常會演説)           | 雑誌 | 榊俣 ; 村井福太郎              | 順天堂醫事研究会  | 1892 | 明治25 | 11 | 『順天堂醫事研究会雑誌』<br>M25(141) |
| 49 | 「ヒステリー」ニ就テ(前號續)            | 雑誌 | 榊俣 ; 村井福太郎              | 順天堂醫事研究会  | 1892 | 明治25 | 11 | 『順天堂醫事研究会雑誌』<br>M25(142) |
| 50 | [六]ヒステリーノ一奇症               | 雑誌 | 多田寛                     | 済生学舎医事新報社 | 1893 | 明治26 | 7  | 『済生学舎医事新報』(7)            |
| 51 | 島根県下狐憑病取調報告                | 雑誌 | 島村俊一                    | 東京医学会雑誌   | 1893 | 明治26 |    | 東京医学会雑誌 6(16)            |
| 52 | 「狐憑病に就テ」                   | 雑誌 | 榊俣                      | 哲学会/有斐閣   | 1893 | 明治26 | 8  | 『哲学雑誌』8(78)              |
| 53 | 歇私の里癲癩                     | 雑誌 | 日本医史学会 編                | 日本医史学会    | 1893 | 明治26 | 9  | 『中外医事新報』(323)            |

| 番  | タイトル                                                                  | 分類 | 著・編 [等]                       | 出版           | 発行年月 |      |    | 備考<br>(掲載誌・巻・号等)              |
|----|-----------------------------------------------------------------------|----|-------------------------------|--------------|------|------|----|-------------------------------|
|    |                                                                       |    |                               |              | 西暦   | 和暦   | 月  |                               |
| 54 | 愛媛県聯合医会報告                                                             | 図書 | 愛媛聯合医会                        | 愛媛聯合医会       | 1893 | 明治26 | 11 |                               |
| 55 | 歇私的里癩痢                                                                | 雑誌 | 徳島医学会                         | 徳島医学会        | 1893 | 明治26 | 11 | 『徳島医学会雑誌』(15)                 |
| 56 | 歇私的里性左半身知覚麻痺側ニ特發性環疔天泡瘡(Pemphigus)及ヒ疼痛紅斑(Erythromelalgie)等ノ諸症ヲ併發シタル一奇症 | 雑誌 | 佐々木政吉;<br>山田鐵藏                | 日本医史学会       | 1894 | 明治27 | 1  | 『中外医事新報』(331)                 |
| 57 | 男生歇私的里ノ一症(承前)                                                         | 雑誌 | 本堂恒次郎;<br>古川市次郎               | 日本医史学会       | 1894 | 明治27 | 1  | 『中外医事新報』(332)                 |
| 58 | 内科学(鼈氏)                                                               | 図書 | エ・ベルツ 著[他]                    | 金原医籍         | 1894 | 明治27 | 2  | 下巻1                           |
| 59 | 男性歇私的里ノ一症(承前)                                                         | 雑誌 | 本堂恒次郎;<br>古川市次郎               | 日本医史学会       | 1894 | 明治27 | 2  | 『中外医事新報』(333)                 |
| 60 | ヒステリー性黒内障                                                             | 雑誌 | 永原玄古                          | 眼科雑誌局        | 1894 | 明治27 | 4  | 『眼科雑誌』1(6)                    |
| 63 | 歇私的里性筋消瘦ニ就テ                                                           | 雑誌 | ルヒルト                          | 日本医史学会       | 1894 | 明治27 | 11 | 『中外医事新報』(352)                 |
| 64 | 現今「ヒステリー」ノ見解ニ就テ                                                       | 雑誌 | ペーヨット;<br>菅野徹三                | 順天堂醫事研究會     | 1895 | 明治28 | 1  | 『順天堂醫事研究會雑誌』(194)<br>M28(194) |
| 65 | 現今「ヒステリー」ノ見解ニ就テ(前號續)                                                  | 雑誌 | ペー・ヨット・<br>モエビウス;<br>菅野徹三[意訳] | 順天堂醫事研究會     | 1895 | 明治28 | 2  | 『順天堂醫事研究會雑誌』(195)<br>M28(195) |
| 66 | 歇私的里ニ伴フ眼瞼下垂ノ電氣療法                                                      | 雑誌 | 中村重四郎                         | 順天堂醫事研究會     | 1895 | 明治28 | 3  | 『順天堂醫事研究會雑誌』(198)<br>M28(198) |
| 67 | 売薬製劑備考                                                                | 図書 | 小泉栄次郎;<br>伊藤増太郎 編             | 英蘭堂          | 1895 | 明治28 | 4  |                               |
| 68 | 歌舞伎新報                                                                 | 雑誌 | 岡野碩 編                         | 玄鹿館          | 1895 | 明治28 | 10 | 『歌舞伎新報第2巻』                    |
| 69 | 「ヒステリー」ニ原因スル「パラオクロメース」                                                | 雑誌 | 順天堂醫事研究會 編                    | 順天堂醫事研究會     | 1896 | 明治29 | 4  | 『順天堂醫事研究會雑誌』(223)             |
| 70 | (6)歇私的里性疼痛及療法                                                         | 雑誌 | 済生学会医事新報社 編                   | 済生学会医事新報社    | 1896 | 明治29 | 5  | 『済生学会医事新報』(41)                |
| 71 | 結核ト「ヒステリー」トノ關係                                                        | 雑誌 | 日本医史学会 編                      | 日本医史学会       | 1896 | 明治29 | 7  | 『中外医事新報』(391)                 |
| 72 | 歇私的里ノ一例                                                               | 雑誌 | 高橋剛吉                          | 第四高等學校十全會    | 1896 | 明治29 | 11 |                               |
| 73 | 小兒歇斯的里                                                                | 雑誌 | 田文生                           | 順天堂醫事研究會     | 1896 | 明治29 | 12 | 『順天堂醫事研究會雑誌』(240)             |
| 74 | ヒステリー症ノ危険                                                             | 雑誌 | フルニール・ソリエー                    | 日本医史学会       | 1897 | 明治30 | 1  | 『中外医事新報』(404)                 |
| 75 | 男性歇私的里ノ精神療法ニ因テ速治セシ一例                                                  | 雑誌 | 西廣吉                           | 日本医史学会       | 1897 | 明治30 | 2  | 『中外医事新報』(405)                 |
| 76 | 小兒期ニ於ケル「ヒステリー」                                                        | 雑誌 | 順天堂醫事研究會                      | 順天堂醫事研究會     | 1897 | 明治30 | 8  | 『順天堂醫事研究會雑誌』<br>(255)M30(255) |
| 77 | 売薬製劑備考                                                                | 図書 | 高木与八郎;<br>小泉栄次郎 編             | 英蘭堂          | 1897 | 明治30 | 11 |                               |
| 78 | 實驗 歇私的里患者ヨリ蝮蛇蠱虫絹糸頭髮兔毛布片等ヲ吐瀉シタル一異症                                     | 雑誌 | 岸根健藏                          | 日本医史学会       | 1899 | 明治32 | 1  | 『中外医事新報』(451)                 |
| 79 | 歇斯的里大癩癩ノ一症例                                                           | 雑誌 | 細見慶吉                          | 緒方病院医事研究会事務所 | 1899 | 明治32 | 4  | 『緒方病院研究会医事会報』(88)             |
| 80 | 首頸發作ヲ隨伴スル歇私的里ノ實驗<br>明治三十二年四月總會ニ於テ演述                                   | 雑誌 | 中村重四郎                         | 順天堂醫事研究會     | 1899 | 明治32 | 4  | 『順天堂醫事研究會雑誌』(296)<br>M32(296) |
| 81 | 歇私的里熱ノ一例                                                              | 雑誌 | チツバ                           | 日本医史学会       | 1899 | 明治32 | 10 | 『中外医事新報』(470)                 |

| 番   | タイトル                  | 分類 | 著・編〔等〕         | 出版                | 発行年月 |      |    | 備考<br>(掲載誌・巻・号等)         |
|-----|-----------------------|----|----------------|-------------------|------|------|----|--------------------------|
|     |                       |    |                |                   | 西暦   | 和暦   | 月  |                          |
| 82  | 一種ノ發作性ヒステリー性震顫ノ一例     | 雑誌 | 藤井助雄           | 第四高等學校十全會         | 1900 | 明治33 | 1  |                          |
| 83  | 「ヒステリー」の心理的説明         | 雑誌 | 日本児童学会         | 日本児童学会            | 1900 | 明治33 | 2  | 『児童研究』2(6)               |
| 84  | 二年十一月ナル女兒ノ歇私的里        | 雑誌 | 長塚玄春           | 日本小児科学会           | 1900 | 明治33 | 12 | 『児科雑誌』(24)               |
| 85  | アイヌ人及其説話              | 図書 | ジエー・パチエラ       | 教文館               | 1901 | 明治34 | 9  | 中編                       |
| 86  | 男性歇斯的里ニ就テ             | 雑誌 | 木村俊司           | 静岡県医学会            | 1902 | 明治35 | 5  | 『静岡県医学会会報』(3)            |
| 87  | 狐憑病新論                 | 図書 | 門脇眞枝           | 博文館               | 1902 | 明治35 | 9  |                          |
| 88  | 歇斯的里ニ於ケル管狀視野ニ就テ       | 雑誌 | 日本眼科学会 編[他]    | (日本眼科学会, 1902-11) | 1902 | 明治35 | 11 | 『日本眼科学会雑誌』6(11)          |
| 89  | 歇斯的里性失明ニ就テ            | 雑誌 | 日本眼科学会 編[他]    | 日本眼科学会            | 1903 | 明治36 | 2  | 『日本眼科学会雑誌』7(2)           |
| 90  | 實驗 歇斯的里性黒内障治験         | 雑誌 | 山口治太郎;<br>中條資俊 | 日本眼科学会            | 1903 | 明治36 | 4  | 『中外医事新報』(554)            |
| 91  | 「ヒステリー」性關節病ノ二例        | 雑誌 | 河合静夫           | 横井文庫              | 1903 | 明治36 | 4  | 『好生館醫事研究會雑誌』10(2)        |
| 92  | 実用催眠学                 | 図書 | 竹内楠三[訳] 編      | (大学館, 1903)       | 1903 | 明治36 | 6  |                          |
| 95  | 「ヒステリー」症ト「ヒステリー」性     | 雑誌 | 三宅鑛一           | 順天堂醫事研究會          | 1904 | 明治37 | 1  | 『順天堂醫事研究會雑誌』<br>M37(373) |
| 96  | 催眠術新治療法               | 図書 | 山本止 編          | 山本止               | 1904 | 明治37 | 2  |                          |
| 97  | 半側性巨體症兼歇斯的里ノ一例        | 雑誌 | 牧田太            | 日本眼科学会            | 1904 | 明治37 | 3  | 『中外医事新報』(576)            |
| 98  | 「ヒステリー」症ノ眞性及假性ノ主徴     | 雑誌 | ハツチゲル          | 日本医史学会            | 1904 | 明治37 | 3  | 『中外医事新報』(575)            |
| 99  | 男性歇斯的里ニかたればしーヲ發セル治験   | 雑誌 | 能勢静太           | 日本神経学会事務所         | 1904 | 明治37 | 4  | 『神経学雑誌』3(1)              |
| 100 | 歇斯的里亞性鼓脹              | 雑誌 | ライモンド          | 日本医史学会            | 1904 | 明治37 | 4  | 『中外医事新報』(578)            |
| 101 | 催眠術治療自在               | 図書 | 竹内楠三           | 大学館               | 1904 | 明治37 | 7  |                          |
| 102 | 男性歇私的里                | 雑誌 | 大日本催眠学会 編      | 大日本催眠学会           | 1904 | 明治37 | 8  | 『催眠学界』(1)                |
| 103 | 小兒「ヒステリー」             | 雑誌 | 田中實            | 芸備医学会             | 1904 | 明治37 | 10 | 『芸備医事』第9年(10)(101)       |
| 104 | 歇私的里の治験               | 雑誌 | 大日本催眠学会 編      | 大日本催眠学会           | 1904 | 明治37 | 11 | 催眠学界. (4)                |
| 105 | 歇私的里性吐糞症              | 雑誌 | シュワルツ;<br>石川貞吉 | 日本神経学会事務所         | 1905 | 明治38 | 1  | 『神経学雑誌』3(10)             |
| 106 | 小兒ヒステリー               | 雑誌 | 田中實            |                   | 1905 | 明治38 | 1  |                          |
| 107 | 犯罪論及女性犯人              | 図書 | 鈴木券太郎          | 井列堂               | 1905 | 明治38 | 3  |                          |
| 108 | 分娩後に發したる「ヒステリー」性痙攣の一例 | 雑誌 | 鈴木政            | 日本助産学協会           | 1905 | 明治38 | 4  | 助産学雑誌. (64)              |
| 109 | 精神の病理                 | 図書 | 竹内楠三           | 尚友館               | 1905 | 明治38 | 5  |                          |
| 110 | 「ヒステリイ」ノ二例            | 雑誌 | 産科婦人科学会 編      | 産科婦人科学会           | 1905 | 明治38 | 5  | 産科婦人科学雑誌. 7(5)           |

| 番   | タイトル                                                         | 分類 | 著・編〔等〕                     | 出版        | 発行年月 |      |    | 備考<br>(掲載誌・巻・号等)   |
|-----|--------------------------------------------------------------|----|----------------------------|-----------|------|------|----|--------------------|
|     |                                                              |    |                            |           | 西暦   | 和暦   | 月  |                    |
| 111 | 大歌私的里ト脊髄癆ノ共發 ノンネ                                             | 雑誌 | 日本神経学会事務所 編                | 日本神経学会事務所 | 1905 | 明治38 | 5  | 『神経学雑誌』4(2)        |
| 112 | 歌私的里性熱ニ就テ                                                    | 雑誌 | 土屋岩保                       | 日本医史学会    | 1905 | 明治38 | 6  | 『中外医事新報』(605)      |
| 113 | 男女学問病                                                        | 図書 | 糸左近                        | 金刺芳流堂     | 1905 | 明治38 | 7  |                    |
| 114 | 男女学問病                                                        | 図書 | 糸左近                        | 金刺芳流堂     | 1905 | 明治38 | 8  |                    |
| 115 | 比斯的里性單眼複視                                                    | 雑誌 | 山口秀高                       | 日本医史学会    | 1905 | 明治38 | 8  | 『中外医事新報』(610)      |
| 116 | 男女学問病                                                        | 図書 | 糸左近                        | 金刺芳流堂     | 1905 | 明治38 | 10 |                    |
| 117 | 女哲学                                                          | 図書 | 笹の屋主人                      | 嵩山房       | 1905 | 明治38 | 10 |                    |
| 118 | 比斯的里性言語障碍并ニ比斯的性訥吃ニ就テ/皮質癲癇ニ類似セル比斯的里性痙攣ニ就テ 比斯的里性神経衰弱及婦人比斯的里ニ就テ | 雑誌 | メルツパッヘル/<br>ウォルテール/<br>ヘンク | 医学中央雑誌刊行会 | 1905 | 明治38 | 10 | 『醫學中央雑誌』(32)       |
| 119 | 催眠心理学概論                                                      | 図書 | 福来友吉                       | 成美堂       | 1906 | 明治39 | 3  |                    |
| 120 | ヒステリー症                                                       | 雑誌 | 精神学院 編                     | 精神学院      | 1906 | 明治39 | 4  | 『心の友』1(4)          |
| 121 | 通俗治療法 四季応用                                                   | 図書 | 糸左近                        | 博文館       | 1906 | 明治39 | 5  |                    |
| 122 | 緊張狂に「ヒステリー」を兼ねたる患者の「デモン<br>トラチオン」                            | 雑誌 | 北林貞道                       | 芸備医学会     | 1906 | 明治39 | 5  | 『芸備医事』第11年(5)(120) |
| 123 | ひすてりーノ發熱 フォッス, 法庭ニ於ケルひすて<br>りー家ノ證言ノ價値ニ就テ                     | 雑誌 | ピランヂー                      | 日本神経学会事務所 | 1906 | 明治39 | 5  | 『神経学雑誌』5(2)        |
| 126 | 神経病臨床講義                                                      | 図書 | シャルコー<br>(沙祿可)[述][他]       | 東京医事新誌局   | 1906 | 明治39 | 9  |                    |
| 127 | 原著 日本ニ於ケルひすてりー狂ニ就テ                                           | 雑誌 | 井村忠介                       | 日本神経学会事務所 | 1906 | 明治39 | 9  | 『神経学雑誌』5(6)        |
| 128 | 新撰精神病学                                                       | 図書 | 石田昇[他]                     | 南江堂       | 1906 | 明治39 | 10 | 前編上                |
| 129 | 近世法曹界逸話                                                      | 図書 | 法律経済新報社 編                  | 法律経済新報社   | 1906 | 明治39 | 10 |                    |
| 130 | 機能的神経症殊ニひすてりート女子生殖器病<br>トノ關係                                 | 雑誌 | マイエル                       | 日本神経学会事務所 | 1906 | 明治39 | 11 | 『神経学雑誌』5(8)        |
| 131 | ひすてりい患者ノ供覽                                                   | 雑誌 | レマーク;<br>山口高三郎             | 日本神経学会事務所 | 1906 | 明治39 | 12 | 『神経学雑誌』5(9)        |
| 132 | 歌私的里性熱ノ一例ニ就テ(明治三十九年<br>三月稿)                                  | 雑誌 | 吉本清太郎                      | 日本神経学会事務所 | 1906 | 明治39 | 12 | 『神経学雑誌』5(9)        |
| 133 | 抄録 神経病学 ひすてりー熱ニ就テ                                            | 雑誌 | ゲー・フォン・ヴォツス                | 日本神経学会事務所 | 1907 | 明治40 | 1  | 『神経学雑誌』5(10)       |
| 134 | 細君をヒステリーには誰がした                                               | 雑誌 | 東京バック社 編                   | 東京バック社    | 1907 | 明治40 | 3  | 『東京バック』3(7)        |
| 135 | 神経病臨床講義. 前編下                                                 | 図書 | シャルコー(沙祿<br>可)[述][他]       | 東京医事新誌局   | 1907 | 明治40 | 5  |                    |
| 136 | 一、ヒステリー性黒内障ノ一例                                               | 雑誌 | 日本眼科学会 編[他]                | 日本眼科学会    | 1907 | 明治40 | 6  | 『日本眼科学会雑誌』11(6)    |
| 137 | 本會第十一回總集會第一日及第二日ノ演<br>説大要                                    | 雑誌 | 日本眼科学会 編[他]                | 日本眼科学会    | 1907 | 明治40 | 7  | 『日本眼科学会雑誌』11(7)    |
| 138 | ひすてりー性精神病                                                    | 雑誌 | レッケ                        | 日本神経学会事務所 | 1907 | 明治40 | 8  | 『神経学雑誌』6(5)        |

| 番   | タイトル                  | 分類 | 著・編〔等〕                          | 出版           | 発行年月 |      |    | 備考<br>(掲載誌・巻・号等)         |
|-----|-----------------------|----|---------------------------------|--------------|------|------|----|--------------------------|
|     |                       |    |                                 |              | 西暦   | 和暦   | 月  |                          |
| 139 | 一、外傷性歇私的里ノ二例          | 雑誌 | 日本眼科学会 編[他]                     | 日本眼科学会       | 1907 | 明治40 | 8  | 『日本眼科学会雑誌』11(8)          |
| 140 | 軍隊ニ於ケル歇私的里ニ就テ         | 雑誌 | 尼子四郎                            | 芸備医学会        | 1907 | 明治40 | 10 | 芸備医事. 第12年(10)(137)      |
| 141 | 歇私的里性脊柱側彎             | 雑誌 | ハー・ストラウス                        | 日本医史学会       | 1907 | 明治40 | 10 | 『中外医事新報』(661)            |
| 142 | 無薬療法                  | 図書 | 糸左近                             | 田村奈良吉        | 1907 | 明治40 | 12 |                          |
| 143 | 外科ニ於ケルひすてりー           | 雑誌 | カウシュ                            | 日本神経学会事務所    | 1908 | 明治41 | 2  | 『神経学雑誌』6(11)             |
| 144 | ヒステリー之女よ 青柳有美         | 雑誌 | ほのほ会 編[他]                       | ほのほ会         | 1908 | 明治41 | 4  | 『火柱』1(2)                 |
| 145 | 「ヒステリー」性發汗ニ就テ         | 雑誌 | ハンス・クルシュマン                      | 日本医史学会       | 1908 | 明治41 | 4  | 『中外医事新報』(673)            |
| 146 | 歇私的里性半身不遂症ニ就テ         | 雑誌 | エルンスト・シウルチエ<br>[講述];<br>栗根久[抄訳] | 芸備医学会        | 1908 | 明治41 | 6  | 『芸備医事』第13年(6)(145)       |
| 147 | 歇私的里論                 | 雑誌 | ピンスワングル                         | 日本神経学会事務所    | 1908 | 明治39 | 6  | 『神経学雑誌』5(3)              |
| 148 | 「ヒステリー」性失聲症ノ精神的療法ニ就キテ | 雑誌 | 久保猪之吉                           | 九州帝國大學醫學部雑誌部 | 1908 | 明治41 | 7  | 『福岡醫科大學雑誌』2(1)           |
| 149 | 「ヒステリ」性假性蟲様垂炎         | 雑誌 |                                 | 順天堂醫事研究會     | 1908 | 明治41 | 7  | 『順天堂醫事研究會雑誌』<br>M41(426) |
| 150 | 歇私的里性半身不遂症ニ就テ         | 雑誌 | エルンスト・シウルチエ<br>[講述];<br>栗根久[抄訳] | 芸備医学会        | 1908 | 明治41 | 7  | 『芸備医事』第13年(7)(146)       |
| 151 | ヒステリー之女               | 雑誌 | 青柳有美                            | 中学文壇社        | 1908 | 明治41 | 7  | 『中学文壇』第10年(13)(245)      |
| 152 | 自用電氣療法新編              | 図書 | 東京電氣治療法研究會編輯部                   | 東京電氣治療法研究會   | 1908 | 明治41 | 8  |                          |
| 153 | 歇私的里性半身不遂症ニ就テ(承前)     | 雑誌 | エルンスト・シウルチエ<br>[講述];<br>栗根久[抄訳] | 芸備医学会        | 1908 | 明治41 | 8  | 『芸備医事』第13年(8)(147)       |
| 154 | 歇私的里性假性蟲様突起炎          | 雑誌 | ローター                            | 日本医史学会       | 1908 | 明治41 | 9  | 『中外医事新報』(684)            |
| 157 | 外傷性ひすてりー              | 雑誌 | アウグスタイン                         | 日本神経学会事務所    | 1908 | 明治41 | 10 | 『神経学雑誌』7(7)              |
| 158 | 叢談 外科ニ於ケル歇私的里ニ就テ      | 雑誌 | カウシュ                            | 日本医史学会       | 1908 | 明治41 | 10 | 『中外医事新報』(686)            |
| 159 | 「ヒステリー」性慢性蟲様垂炎ニ就テ     | 雑誌 | カル・ウルバン                         | 医学書院         | 1908 | 明治41 | 11 | 『臨床彙講』(29)               |
| 160 | ひすてりーノ新説              | 雑誌 | アシャッフエンブルグ                      | 日本神経学会事務所    | 1908 | 明治41 | 11 | 『神経学雑誌』7(8)              |
| 161 | 外科ニ於ケル歇私的里ニ就テ(承前)     | 雑誌 | カウシュ                            | 日本医史学会       | 1908 | 明治41 | 11 | 『中外医事新報』(687)            |
| 162 | 「ヒステリー」病ノ療法           | 雑誌 | マイエル                            | 医学書院         | 1908 | 明治41 | 12 | 『臨床彙講』(30)               |
| 163 | 原著 兒童「ヒステリー」ニ就テ       | 雑誌 | 藁科松伯                            | 日本児童学会       | 1908 | 明治41 | 12 | 『児童研究』12(6)              |
| 164 | 歇私的里性發汗症              | 雑誌 | ハー・クルシュマン                       | 日本医史学会       | 1908 | 明治41 | 12 | 『中外医事新報』(689)            |
| 165 | 歇私的里ノ療法               | 雑誌 | マイエル                            | 東京医学校編輯部     | 1909 | 明治42 | 1  | 『東洋医事新報』(23)             |
| 166 | 射撃ニ因スル「ヒステリー」ニ就テ      | 雑誌 | ハムタルシュミット[述]<br>武田全一[抄訳]        | 芸備医学会        | 1909 | 明治42 | 1  | 『芸備医事』第14年(1)(152)       |

| 番   | タイトル                                | 分類 | 著・編〔等〕              | 出版        | 発行年月 |      |    | 備考<br>(掲載誌・巻・号等) |
|-----|-------------------------------------|----|---------------------|-----------|------|------|----|------------------|
|     |                                     |    |                     |           | 西暦   | 和暦   | 月  |                  |
| 167 | ひすてりー性夢中遊行症ニ於ケル放火                   | 雑誌 | キュレール               | 日本神経学会事務所 | 1909 | 明治42 | 1  | 『神経学雑誌』7(10)     |
| 168 | 歇私的里性假性蟲様垂炎                         | 雑誌 | ローター                | 治療新報社     | 1909 | 明治42 | 1  | 『治療新報』8(1)(82)   |
| 169 | 實驗 歇斯的里性上下肢交叉麻痺ノ二例                  | 雑誌 | 志賀樹太郎               | 日本医史学会    | 1909 | 明治42 | 2  | 『中外医事新報』(694)    |
| 170 | 歇斯的里ノ療法(承前)                         | 雑誌 | フオンエ ;マイエル          | 東京医学校編輯部  | 1909 | 明治42 | 3  | 『東洋医事新報』(24)     |
| 171 | 「ヒステリー」狂鑑定ノ一例                       | 雑誌 | 神保三郎 ; 氏原佐藏         | 東京医学校編輯部  | 1909 | 明治42 | 3  | 『東洋医事新報』(24)     |
| 172 | 歇斯的里ノ治療法                            | 雑誌 | マイエル [講演] ; 杉江董 [訳] | 医学書院      | 1909 | 明治42 | 4  | 『臨床彙講』(34)       |
| 173 | 歇斯的里及偏癱ノ同時性存在                       | 雑誌 | フドベルニヒ              | 日本神経学会事務所 | 1909 | 明治42 | 5  | 『神経学雑誌』8(2)      |
| 174 | 小兒歇斯的里                              | 雑誌 | 柳瀬實次郎               | 日本医史学会    | 1909 | 明治42 | 5  | 『中外医事新報』(700)    |
| 175 | 通俗婦人病療養法                            | 図書 | 石井磨                 | 大学館       | 1909 | 明治42 | 6  |                  |
| 176 | 実地応用簡易電気療法                          | 図書 | 池園徳太郎 編             | 広島電気療法講習会 | 1909 | 明治42 | 6  |                  |
| 177 | 歇斯的里ノ研究第三版                          | 雑誌 | フロイエル ; フロイド        | 日本神経学会事務所 | 1909 | 明治42 | 6  | 『神経学雑誌』8(3)      |
| 178 | 一、外傷性歇私的里ノ一例                        | 雑誌 | 日本眼科学会 編[他]         | 日本眼科学会    | 1909 | 明治42 | 8  | 『日本眼科学会雑誌』13(7)  |
| 179 | 「ヒステリー」性朦朧状態中ニ己ガ實子ヲ殺セシ一婦人ノ精神病的鑑定例一例 | 雑誌 | 三宅鑛一                | 医事新聞社     | 1909 | 明治42 | 9  | 『医事新聞』(789)      |
| 180 | ひすてりー性潮熱ノ補遺                         | 雑誌 | シュワープ               | 日本神経学会事務所 | 1909 | 明治42 | 9  | 『神経学雑誌』8(6)      |
| 181 | 精神病鑑定例                              | 図書 | 呉秀三                 | 吐鳳堂       | 1909 | 明治42 | 10 | 第4集              |
| 182 | ひすてりーノ臨牀學補遺                         | 雑誌 | ヴォッス                | 日本神経学会事務所 | 1909 | 明治42 | 11 | 『神経学雑誌』8(8)      |
| 183 | 心霊の研究                               | 図書 | 江口津                 | 日高有倫堂     | 1909 | 明治42 | 12 |                  |
| 184 | 品子                                  | 図書 | 中村兵衛                | 大学館       | 1910 | 明治43 | 1  |                  |
| 185 | 最新学校衛生学                             | 図書 | 駿河尚庸                | 吐鳳堂       | 1910 | 明治43 | 1  |                  |
| 186 | 脳病神経衰弱はヒステリー症の素人診断治療法               | 雑誌 | 常持爲治                | サンデー社     | 1910 | 明治43 | 1  | 『サンデー』(59)       |
| 189 | ヒステリーの後家                            | 雑誌 | 覆面子                 | 南米協会      | 1910 | 明治43 | 4  | 『植民世界』1(1)       |
| 190 | 小兒之眼病及其療法                           | 図書 | 堤友久 編               | 南江堂       | 1910 | 明治43 | 5  |                  |
| 191 | 家事実習法                               | 図書 | 天野誠斎                | 実業之日本社    | 1910 | 明治43 | 5  |                  |
| 192 | 小兒「ヒステリー」ニ就テ                        | 雑誌 | 杉浦稔                 | 日本小児科学会   | 1910 | 明治43 | 5  | 『兒科雑誌』(120)      |
| 193 | 新撰精神病学                              | 図書 | 石田昇[他]              | 南江堂       | 1910 | 明治43 | 6  |                  |
| 194 | 異常高熱ノ臨牀的實驗(ヒステリー性熱)                 | 雑誌 | 吉本清太郎 ; 大内兆         | 日本神経学会事務所 | 1910 | 明治43 | 7  | 『神経学雑誌』9(4)      |
| 195 | 婦人病者の心得 子宮病血の道自宅病法                  | 図書 | 笹岡省三 編[他]           | 笹岡省三      | 1910 | 明治43 | 8  |                  |

| 番   | タイトル                                       | 分類 | 著・編〔等〕               | 出版           | 発行年月 |      |    | 備考<br>(掲載誌・巻・号等)         |
|-----|--------------------------------------------|----|----------------------|--------------|------|------|----|--------------------------|
|     |                                            |    |                      |              | 西暦   | 和暦   | 月  |                          |
| 196 | 女ばかりの衛生                                    | 図書 | 糸左近                  | 三立社出版部〔他〕    | 1910 | 明治43 | 9  |                          |
| 197 | 健脳法                                        | 図書 | 児玉修治                 | 内外出版協会       | 1910 | 明治43 | 9  |                          |
| 198 | ひすてりー患者二血汗ヲ見タル一例                           | 雑誌 | エンゲ                  | 日本神経学会事務所    | 1910 | 明治43 | 9  | 『神経学雑誌』9(6)              |
| 199 | 労働保険性歇私的里                                  | 雑誌 | アルミン・スタイルエター<br>ール   | 日本医史学会       | 1910 | 明治43 | 9  | 『中外医事新報』(731)            |
| 200 | 本會第十四回演説大要                                 | 雑誌 | 日本眼科学会 編〔他〕          | 日本眼科学会       | 1910 | 明治43 | 11 | 『日本眼科学会雑誌』14(11)         |
| 201 | 歇私的里患者二慢性皮膚出血ヲ現シタル<br>例症                   | 雑誌 | ビンデル                 | 日本医史学会       | 1910 | 明治43 | 12 | 『中外医事新報』(738)            |
| 202 | 興味多キ比斯的里性筋肉短縮ノ一例                           | 雑誌 | 丹羽元亮                 | 医事月報社        | 1911 | 明治44 | 1  | 『医事月報』5(1)               |
| 203 | 慢性皮膚出血ヲ呈セル男性歇私的里ノ<br>一症例                   | 雑誌 | ビンデル                 | 医学中央雑誌刊行会    | 1911 | 明治44 | 1  | 『醫學中央雑誌』(101)            |
| 204 | ひすてりーノ本態及療法ニ就キテ                            | 雑誌 | ロムベルグ                | 日本神経学会事務所    | 1911 | 明治44 | 1  | 『神経学雑誌』9(10)             |
| 205 | 頭痛ノ診断及其療法                                  | 図書 | 加藤耕蔵 編               | 南江堂          | 1911 | 明治44 | 2  | 『近世医学叢書』第38編             |
| 206 | 神経衰弱症の警戒                                   | 図書 | 日常百珍拾銭叢書刊行会          | 日常百珍拾銭叢書刊行会  | 1911 | 明治44 | 2  |                          |
| 207 | (一九四)ひすてりー性腺腫状態中二己ガ實子<br>ヲ殺セシ一婦人ノ精神病的鑑定例一例 | 雑誌 | 三宅鑛一                 | 日本神経学会事務所    | 1911 | 明治44 | 2  | 『神経学雑誌』9(12)             |
| 208 | 神経病臨床講義 後編                                 | 図書 | シャルコー(沙禄可)<br>〔述〕〔他〕 | 東京医事新誌局      | 1911 | 明治44 | 3  |                          |
| 209 | 所謂「ヒステリー」性大發作ノ一例ニ就テ                        | 雑誌 | 内村盛太郎                | 長崎医学専門学校研理会  | 1911 | 明治44 | 3  | 『長崎医学専門学校研理会雑誌』<br>(100) |
| 210 | 再び稀有なる男子大歇私的里                              | 雑誌 | 眼科臨床医報社 編            | 眼科臨床医報社      | 1911 | 明治44 | 5  | 『眼科臨床医報』6(第5折)(65)       |
| 211 | 幼兒外傷性「ヒステリー」ノ一例及小兒「ヒス<br>テリー」ニ就テ           | 雑誌 | 大久保直穆                | 医事月報社        | 1911 | 明治44 | 5  | 『医事月報』5(5)               |
| 212 | 最新法医学講義                                    | 図書 | 片山国嘉                 | 南江堂          | 1911 | 明治44 | 6  |                          |
| 213 | 上氣道「ヒステリー」ノ一例                              | 雑誌 | デー・アー・ボボヴロチ          | 九州帝國大學醫學部雑誌部 | 1911 | 明治44 | 6  | 『福岡醫科大學雑誌』5(1)           |
| 214 | 「ヒステリー」ノ症候ニ就テ                              | 雑誌 | ゴールドブラッド             | 医事月報社        | 1911 | 明治44 | 6  | 『医事月報』5(6)               |
| 215 | 難病患者の福音                                    | 図書 | 精神学院                 | 精神学院         | 1911 | 明治44 | 7  |                          |
| 216 | 耳科学                                        | 図書 | 池田昌克和辻春次             | 南江堂          | 1911 | 明治44 | 7  |                          |
| 217 | 諸病自宅療法                                     | 図書 | 長命堂薬房 編              | 松尾長命堂        | 1911 | 明治44 | 8  |                          |
| 218 | 小兒「ヒステリー」ニ就テ                               | 雑誌 | 戸川篤次                 | 医事新聞社        | 1911 | 明治44 | 8  | 『医事新聞』(835)              |
| 221 | 臨床暗示術                                      | 図書 | 横井円二                 | 精神科学会        | 1911 | 明治44 | 11 |                          |
| 222 | 「ヒステリー」及其療法                                | 雑誌 | 黒澤良臣                 | 医事新聞社        | 1911 | 明治44 | 11 | 『医事新聞』(842)              |
| 223 | 神経衰弱と頭痛めまひ                                 | 図書 | 佐野彪太                 | 広文堂          | 1911 | 明治44 | 12 | 『最新衛生叢書』第3編              |
| 224 | 「ヒステリー」及其療法(承前)                            | 雑誌 | 黒澤良臣                 | 医事新聞社        | 1911 | 明治44 | 12 | 『医事新聞』(843)              |

| 番   | タイトル                           | 分類 | 著・編〔等〕           | 出版          | 発行年月 |      |    | 備考<br>(掲載誌・巻・号等)         |
|-----|--------------------------------|----|------------------|-------------|------|------|----|--------------------------|
|     |                                |    |                  |             | 西暦   | 和暦   | 月  |                          |
| 225 | 「ヒステリー」及其療法(承前)                | 雑誌 | 黒澤良臣             | 医事新聞社       | 1911 | 明治44 | 12 | 『医事新聞』(844)              |
| 226 | 「ヒステリー」及其療法(承前)                | 雑誌 | 黒澤良臣             | 医事新聞社       | 1912 | 明治45 | 1  | 『医事新聞』(845)              |
| 227 | 三浦内科学纂録                        | 図書 | 三浦謹之助            | 南江堂         | 1912 | 明治45 | 2  | 『近世医学叢書』第56編             |
| 228 | 外傷性神経症<br>(一名外傷性「ヒステリー」症)ノ實驗   | 雑誌 | 玉井四郎             | 順天堂醫事研究會    | 1912 | 明治45 | 2  | 『順天堂醫事研究會雑誌』<br>M45(470) |
| 229 | 「ヒステリー」及其療法(承前)                | 雑誌 | 黒澤良臣             | 医事新聞社       | 1912 | 明治45 | 2  | 『医事新聞』(847)              |
| 230 | ひすてりー及其療法(承前)                  | 雑誌 | 黒澤良臣             | 医事新聞社       | 1912 | 明治45 | 2  | 『医事新聞』(848)              |
| 231 | 「ヒステリー」症(痙攣及ビ失聲)               | 雑誌 | 三浦謹之助；<br>及能謙一   | 日本神経学会事務所   | 1912 | 明治45 | 2  | 『神経学雑誌』11(2)             |
| 232 | 近世耳鼻咽喉科学                       | 図書 | 岩田一；<br>吉井丑三郎[他] | 南山堂         | 1912 | 明治45 | 3  |                          |
| 233 | ヒステリー性鼓腸、嘔吐及吃逆ヲ呈セル<br>一患者供覽    | 雑誌 | 坂井千春             | 京都医事衛生社     | 1912 | 明治45 | 3  | 『京都医事衛生誌』(216)           |
| 234 | 男性「ヒステリー」患者供覽                  | 雑誌 | 寺尾秀三             | 金澤醫學専門學校十全會 | 1912 | 明治45 | 3  |                          |
| 235 | 「ヒステリー」及療法(承前)                 | 雑誌 | 黒澤良臣             | 医事新聞社       | 1912 | 明治45 | 3  | 『医事新聞』(849)              |
| 236 | 「ヒステリー」及其療法(承前)                | 雑誌 | 黒澤良臣             | 医事新聞社       | 1912 | 明治45 | 3  | 『医事新聞』(850)              |
| 237 | 「ヒステリー」性鼓腸嘔吐及ビ吃逆ヲ呈セル<br>一患者ノ供覽 | 雑誌 | 坂井千春             | 京都医学会       | 1912 | 明治45 | 4  | 『京都医学雑誌』9(2)             |
| 238 | 「ヒステリー」及其療法(承前)                | 雑誌 | 黒澤良臣             | 医事新聞社       | 1912 | 明治45 | 4  | 『医事新聞』(852)              |
| 239 | 「ヒステリー」及其療法(承前)                | 雑誌 | 黒澤良臣             | 医事新聞社       | 1912 | 明治45 | 5  | 『医事新聞』(853)              |
| 240 | 「ヒステリー」及其療法(承前)                | 雑誌 | 黒澤良臣             | 医事新聞社       | 1912 | 明治45 | 5  | 『医事新聞』(854)              |
| 241 | 變り者                            | 図書 | 榊保三郎             | 実業之日本社      | 1912 | 明治45 | 6  |                          |
| 242 | 「ヒステリー」及其療法(承前)                | 雑誌 | 黒澤良臣             | 医事新聞社       | 1912 | 明治45 | 6  | 『医事新聞』(855)              |

2. 明治期におけるヒステリー「記事」【目録】(種別順-発行日順)

| 番  | 社名 | タイトル                                                 | 発行日  |      |    |    | 種別 | 社/刊種  | 面 |
|----|----|------------------------------------------------------|------|------|----|----|----|-------|---|
|    |    |                                                      | 西暦   | 和暦   | 月  | 日  |    |       |   |
| 1  | 朝日 | ○今の開明の世に左様……(広島県医師におきた不思議な出来事去十七日の続き)【大阪】            | 1881 | 明治14 | 5  | 18 | 記事 | 大阪/朝刊 | 4 |
| 2  | 読売 | キツネつき病の説 伝染性の軽度精神障害症の一種類=続き                          | 1885 | 明治18 | 1  | 31 | 記事 | 朝刊    | 2 |
| 3  | 読売 | キツネつき病の説 全治の時期を告知 秘密の術、神仏の法を用いず=終わ                   | 1885 | 明治18 | 2  | 1  | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 4  | 朝日 | 狐憑病説                                                 | 1885 | 明治18 | 2  | 4  | 記事 | 大阪/朝刊 | 3 |
| 5  | 朝日 | 狐憑病説 (訂正/1日二面1段目 4日三面4段目)【大阪】                        | 1885 | 明治18 | 2  | 5  | 記事 | 大阪/朝刊 | 1 |
| 6  | 朝日 | 寄書 宝塚温泉の記【大阪】                                        | 1887 | 明治20 | 11 | 13 | 記事 | 大阪/付録 | 1 |
| 7  | 読売 | 頭髮が自然に切れ、伸びない娘、病院で原因究明中/東京・下谷=6月24日続報                | 1888 | 明治21 | 9  | 28 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 8  | 朝日 | 内箱おのぶの精神病鑑定                                          | 1898 | 明治31 | 2  | 1  | 記事 | 東京/朝刊 | 4 |
| 9  | 朝日 | 内箱おのぶ放免せらる                                           | 1898 | 明治31 | 2  | 2  | 記事 | 東京/朝刊 | 4 |
| 10 | 朝日 | 電気療法の話(承前)                                           | 1898 | 明治31 | 6  | 28 | 記事 | 東京/朝刊 | 7 |
| 11 | 朝日 | 蓮抽梅結 勤続二十七年=6日付3面「蚊雷蛙鼓」に一部「取消」                       | 1899 | 明治32 | 6  | 3  | 記事 | 東京/朝刊 | 3 |
| 12 | 朝日 | 子爵夫人入水して死す                                           | 1901 | 明治34 | 5  | 13 | 記事 | 東京/朝刊 | 5 |
| 13 | 読売 | 煙草屋の女房、子供を送り出してから石油を被り火を付けて自殺/東京・浅草                  | 1901 | 明治34 | 7  | 1  | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 14 | 読売 | 家相見の言葉で次々病人…とんだ迷信男に罰金/東京                             | 1901 | 明治34 | 7  | 3  | 記事 | 朝刊    | 4 |
| 15 | 朝日 | 老婆咽喉を突く                                              | 1901 | 明治34 | 8  | 15 | 記事 | 東京/朝刊 | 5 |
| 16 | 読売 | 「迷信世界」=29 野毛山の不動(連載)                                 | 1902 | 明治35 | 6  | 5  | 記事 | 朝刊    | 4 |
| 17 | 朝日 | 催眠術雑話                                                | 1902 | 明治35 | 7  | 23 | 記事 | 東京/朝刊 | 3 |
| 18 | 朝日 | 催眠術雑話                                                | 1902 | 明治35 | 7  | 26 | 記事 | 東京/朝刊 | 3 |
| 19 | 朝日 | 山代山中粟津片山津北国温泉巡り(10) 山中温泉 市川玩球                        | 1902 | 明治35 | 7  | 28 | 記事 | 東京/朝刊 | 3 |
| 20 | 朝日 | 女丈夫の自殺                                               | 1903 | 明治36 | 3  | 2  | 記事 | 東京/朝刊 | 3 |
| 21 | 朝日 | 娘の投身<画>                                              | 1903 | 明治36 | 3  | 14 | 記事 | 東京/朝刊 | 5 |
| 22 | 朝日 | 狂ひ                                                   | 1903 | 明治36 | 3  | 27 | 記事 | 東京/朝刊 | 5 |
| 23 | 朝日 | 法界節婦人                                                | 1903 | 明治36 | 4  | 2  | 記事 | 東京/朝刊 | 5 |
| 24 | 朝日 | 帰宅後の花井お梅                                             | 1903 | 明治36 | 4  | 12 | 記事 | 東京/朝刊 | 5 |
| 25 | 朝日 | 其後のお梅                                                | 1903 | 明治36 | 4  | 13 | 記事 | 東京/朝刊 | 5 |
| 26 | 朝日 | 其後のお梅                                                | 1903 | 明治36 | 4  | 14 | 記事 | 東京/朝刊 | 5 |
| 27 | 朝日 | 西比利人民の滅亡                                             | 1903 | 明治36 | 5  | 18 | 記事 | 東京/朝刊 | 3 |
| 28 | 朝日 | 女房劇薬を服す                                              | 1903 | 明治36 | 10 | 25 | 記事 | 東京/朝刊 | 3 |
| 29 | 朝日 | 小学教員妻女の自殺                                            | 1903 | 明治36 | 12 | 12 | 記事 | 東京/朝刊 | 3 |
| 30 | 朝日 | 時局雑俎 日本人の体格論                                         | 1904 | 明治37 | 6  | 10 | 記事 | 東京/朝刊 | 7 |
| 31 | 朝日 | 大森少佐夫人自殺余聞                                           | 1904 | 明治37 | 8  | 11 | 記事 | 東京/朝刊 | 5 |
| 32 | 朝日 | 実子を殺害し夫を傷く                                           | 1905 | 明治38 | 2  | 8  | 記事 | 東京/朝刊 | 6 |
| 33 | 朝日 | 楽屋すずめ                                                | 1905 | 明治38 | 6  | 24 | 記事 | 東京/朝刊 | 7 |
| 34 | 朝日 | 涼み台                                                  | 1905 | 明治38 | 7  | 19 | 記事 | 東京/朝刊 | 6 |
| 35 | 朝日 | 神経衰弱予防法(17) 狩野病院長 狩野謙吾氏談                             | 1905 | 明治38 | 12 | 23 | 記事 | 東京/朝刊 | 5 |
| 36 | 読売 | 特務曹長の妻、身投げ ヒステリー/東京・赤坂                               | 1906 | 明治39 | 1  | 25 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 37 | 読売 | ヒステリーか 理髪屋の女房、遺書残し短銃自殺/横浜                            | 1906 | 明治39 | 3  | 14 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 38 | 朝日 | 諾威人妻の自殺                                              | 1906 | 明治39 | 3  | 20 | 記事 | 東京/朝刊 | 7 |
| 39 | 朝日 | 神経衰弱予防法(42) 狩野病院長 狩野謙吾氏談                             | 1906 | 明治39 | 3  | 30 | 記事 | 東京/朝刊 | 5 |
| 40 | 読売 | 「神経の衛生」=1 神経とはどんなもの/医学士・田村化三郎談(連載)                   | 1906 | 明治39 | 6  | 9  | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 41 | 読売 | 「神経の衛生」=6 ヒステリー/医学士・田村化三郎談(連載)                       | 1906 | 明治39 | 6  | 15 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 42 | 読売 | 「神経の衛生」=7 ヒステリー=続き/医学士・田村化三郎談(連載)                    | 1906 | 明治39 | 6  | 17 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 43 | 読売 | 「神経の衛生」=8 ヒステリー=続き/医学士・田村化三郎談(連載)                    | 1906 | 明治39 | 6  | 18 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 44 | 読売 | 「神経の衛生」=14 神経性心悸亢進/医学士・田村化三郎談(連載)                    | 1906 | 明治39 | 6  | 25 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 45 | 読売 | 「神経の衛生」=15 神経性食道麻痺/医学士・田村化三郎談(連載)                    | 1906 | 明治39 | 6  | 26 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 46 | 読売 | 「神経の衛生」=16 胃痙(神経性胃痛)/医学士・田村化三郎談(連載)                  | 1906 | 明治39 | 6  | 27 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 47 | 読売 | 「神経の衛生」=32 神経病の治療法/医学士・田村化三郎談(連載)                    | 1906 | 明治39 | 8  | 5  | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 48 | 読売 | 「神経の衛生」=34 神経病の治療法=続き/医学士・田村化三郎談(連載)                 | 1906 | 明治39 | 8  | 11 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 49 | 読売 | 「神経の衛生」=35 神経病の治療法=続き/医学士・田村化三郎談(連載)                 | 1906 | 明治39 | 8  | 15 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 50 | 朝日 | 戸山病院内の縊死騒ぎ                                           | 1906 | 明治39 | 8  | 24 | 記事 | 東京/朝刊 | 6 |
| 51 | 読売 | 「第3回通俗学術講談会」催眠術の原理及びその実験/福来友吉(連載)                    | 1906 | 明治39 | 11 | 14 | 記事 | 朝刊    | 5 |
| 52 | 朝日 | サラゼン氏逸話 宝石商の倅 伊藤公の推挙 気の毒なる夫人 柿と月桂樹 御馳走好と質素 交際と従僕 <写> | 1906 | 明治39 | 12 | 4  | 記事 | 東京/朝刊 | 6 |
| 53 | 朝日 | 未亡人の死因(疑ふべき症状)                                       | 1907 | 明治40 | 2  | 21 | 記事 | 東京/朝刊 | 6 |
| 54 | 朝日 | 予備海軍大佐の妻入水す                                          | 1907 | 明治40 | 3  | 5  | 記事 | 東京/朝刊 | 6 |
| 55 | 読売 | 上野公園に怪美人 帝国医科大学学生に失恋、彷徨す/東京                          | 1907 | 明治40 | 3  | 11 | 記事 | 朝刊    | 3 |

| 番   | 社名 | タイトル                                         | 発行日  |      |    |    | 種別 | 社/刊種  | 面 |
|-----|----|----------------------------------------------|------|------|----|----|----|-------|---|
|     |    |                                              | 西暦   | 和暦   | 月  | 日  |    |       |   |
| 56  | 読売 | 失恋女（6日付）について、夫の弁明                            | 1907 | 明治40 | 4  | 12 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 57  | 読売 | 海軍機関少尉の留守宅で深夜に夫人が2階から飛び降りる／東京                | 1907 | 明治40 | 5  | 1  | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 58  | 読売 | 〔肺の衛生〕＝9 肺病の初期＝3／田村化三郎談（連載）                  | 1907 | 明治40 | 6  | 16 | 記事 | 朝刊    | 5 |
| 59  | 読売 | 〔肥える法、痩せる法〕＝4 病者と無病者／田村化三郎談                  | 1907 | 明治40 | 11 | 1  | 記事 | 朝刊    | 5 |
| 60  | 朝日 | 巢鴨の瘋癲病院（3） 足りないのと誇大狂、狂人と天才                   | 1907 | 明治40 | 11 | 30 | 記事 | 東京／朝刊 | 5 |
| 61  | 朝日 | 法廷の初美人 令嬢の窃盗被告 涙に哽反る ヒステリー性狂 前夫の喚問           | 1908 | 明治41 | 1  | 8  | 記事 | 東京／朝刊 | 6 |
| 62  | 朝日 | 恐ろしき歌私的里 実子を絞殺したる末 母に冥途の路伴を迫る                | 1908 | 明治41 | 3  | 31 | 記事 | 東京／朝刊 | 6 |
| 63  | 朝日 | 中学校長の割腹 山村院長の談                               | 1908 | 明治41 | 6  | 25 | 記事 | 東京／朝刊 | 4 |
| 64  | 読売 | 婦人病の新福音 婦人病は手術が・難産時の新療法・医学者間の一問題（ほか）         | 1908 | 明治41 | 7  | 4  | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 65  | 読売 | 〔通俗大学講座〕精神病講話＝1／医学博士・三宅鉦一氏講述（連載）             | 1908 | 明治41 | 7  | 20 | 記事 | 朝刊    | 1 |
| 66  | 読売 | 〔胃腸の衛生〕＝25 胃アトニーの話／田村化三郎談（連載）                | 1908 | 明治41 | 7  | 26 | 記事 | 朝刊    | 5 |
| 67  | 読売 | 婦人の涙 ヒステリーなど、その原因は男子にあり                      | 1908 | 明治41 | 8  | 2  | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 68  | 朝日 | 脳病新薬                                         | 1908 | 明治41 | 8  | 14 | 記事 | 東京／朝刊 | 7 |
| 69  | 朝日 | 女房の咽喉斬                                       | 1908 | 明治41 | 8  | 22 | 記事 | 東京／朝刊 | 6 |
| 70  | 読売 | 〔潜める意識の研究〕＝7／文学博士・福来友吉氏談（連載）                 | 1908 | 明治41 | 10 | 23 | 記事 | 朝刊    | 5 |
| 71  | 読売 | 〔潜める意識の研究〕＝9／文学博士・福来友吉氏談（連載）                 | 1908 | 明治41 | 10 | 25 | 記事 | 朝刊    | 5 |
| 72  | 読売 | 〔潜める意識の研究〕＝10／文学博士・福来友吉氏談（連載）                | 1908 | 明治41 | 10 | 27 | 記事 | 朝刊    | 5 |
| 73  | 朝日 | 娘の劇薬自殺                                       | 1908 | 明治41 | 11 | 2  | 記事 | 東京／朝刊 | 6 |
| 74  | 読売 | 神経衰弱の注射療法                                    | 1908 | 明治41 | 11 | 25 | 記事 | 朝刊    | 5 |
| 75  | 朝日 | 厭世自殺の予防（6） 狩野病院長 狩野謙吾氏談                      | 1909 | 明治42 | 4  | 11 | 記事 | 東京／朝刊 | 3 |
| 76  | 朝日 | 厭世自殺の予防（11） 狩野病院長 狩野謙吾氏談                     | 1909 | 明治42 | 4  | 19 | 記事 | 東京／朝刊 | 8 |
| 77  | 朝日 | 厭世自殺の予防（12） 狩野病院長 狩野謙吾氏談                     | 1909 | 明治42 | 4  | 20 | 記事 | 東京／朝刊 | 3 |
| 78  | 朝日 | 婦人轢死を図る                                      | 1909 | 明治42 | 6  | 10 | 記事 | 東京／朝刊 | 5 |
| 79  | 読売 | 病を苦にして投身 神経障害から25歳の若妻が川へ飛び込む／横浜市             | 1909 | 明治42 | 6  | 12 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 80  | 朝日 | 動物界消息                                        | 1909 | 明治42 | 6  | 28 | 記事 | 東京／朝刊 | 6 |
| 81  | 読売 | 主婦が劇薬自殺／東京                                   | 1909 | 明治42 | 7  | 6  | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 82  | 朝日 | 閻魔を罵る狂女                                      | 1909 | 明治42 | 7  | 18 | 記事 | 東京／朝刊 | 5 |
| 83  | 朝日 | 鎌倉死美人の身許                                     | 1909 | 明治42 | 7  | 19 | 記事 | 東京／朝刊 | 5 |
| 84  | 朝日 | 残暑の狂人病院（1） 社会外の社会                            | 1909 | 明治42 | 8  | 21 | 記事 | 東京／朝刊 | 6 |
| 85  | 朝日 | 通俗医談 珍らしい病氣（3） 入沢医学博士談 ヒステリー患者の硬直<写>         | 1909 | 明治42 | 8  | 26 | 記事 | 東京／朝刊 | 6 |
| 86  | 朝日 | 演芸風聞録                                        | 1909 | 明治42 | 8  | 30 | 記事 | 東京／朝刊 | 7 |
| 87  | 朝日 | 東京の女（19） 催眠術中の女 下谷芸妓兼三州桑次に施術（下谷）桑次<写> 堤貞子<写> | 1909 | 明治42 | 9  | 17 | 記事 | 東京／朝刊 | 5 |
| 88  | 朝日 | 集会（本日）                                       | 1909 | 明治42 | 10 | 12 | 記事 | 東京／朝刊 | 2 |
| 89  | 朝日 | 催眠術の流行（12） 両手を上げて御陀仏の姿 何でも癒るとは駄法螺            | 1909 | 明治42 | 12 | 6  | 記事 | 東京／朝刊 | 6 |
| 90  | 朝日 | 倫敦タイムズ特電 露国皇后病状                              | 1910 | 明治43 | 1  | 20 | 記事 | 東京／朝刊 | 2 |
| 91  | 読売 | 〔編集室より〕とうくわ                                  | 1910 | 明治43 | 1  | 20 | 記事 | 朝刊    | 2 |
| 92  | 朝日 | 資産家の妻変死 短銃にて肺を射つ妊娠八月                         | 1910 | 明治43 | 3  | 12 | 記事 | 東京／朝刊 | 5 |
| 93  | 読売 | 女教師の憤死 剃刀を以て舌を切り硫酸を飲んで自殺・侮辱されたのが原因／東京        | 1910 | 明治43 | 7  | 7  | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 94  | 朝日 | 現代人の疲労（1） 市民生活の一大問題 ヒステリーは疲労の子               | 1910 | 明治43 | 7  | 25 | 記事 | 東京／朝刊 | 6 |
| 95  | 朝日 | 現代人の疲労（4） 其結果は早熟早老 男の女買と女の異装                 | 1910 | 明治43 | 7  | 31 | 記事 | 東京／朝刊 | 6 |
| 96  | 朝日 | 現代人の疲労（6） 醜悪なる屋外広告 神経病の注射療法                  | 1910 | 明治43 | 8  | 3  | 記事 | 東京／朝刊 | 6 |
| 97  | 朝日 | 現代人の疲労（7） 進歩した東西屋の広告 新聞の記事も亦其一例              | 1910 | 明治43 | 8  | 4  | 記事 | 東京／朝刊 | 6 |
| 98  | 朝日 | 現代人の疲労（8） 狂者と変質者の文芸 頭と陰部許りの人間                | 1910 | 明治43 | 8  | 5  | 記事 | 東京／朝刊 | 6 |
| 99  | 朝日 | 鎌倉の投身女 危い所を助けられた                             | 1910 | 明治43 | 8  | 28 | 記事 | 東京／朝刊 | 4 |
| 100 | 朝日 | 滋養「大納言粋」                                     | 1910 | 明治43 | 9  | 1  | 記事 | 東京／朝刊 | 7 |
| 101 | 朝日 | 医師の妻電車自殺 原因はヒステリー症                           | 1910 | 明治43 | 10 | 6  | 記事 | 東京／朝刊 | 5 |
| 102 | 読売 | 夫婦喧嘩の末にヒステリー女房が自殺／東京                         | 1910 | 明治43 | 11 | 11 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 103 | 朝日 | 養育院の放火女                                      | 1910 | 明治43 | 12 | 3  | 記事 | 東京／朝刊 | 5 |
| 104 | 朝日 | 軍医正の妻投身す                                     | 1910 | 明治43 | 12 | 14 | 記事 | 東京／朝刊 | 5 |
| 105 | 朝日 | 金杉の女腹切                                       | 1910 | 明治43 | 12 | 23 | 記事 | 東京／朝刊 | 4 |
| 106 | 朝日 | 警察の無駄骨 嫉妬から強盗の訴へ                             | 1911 | 明治44 | 1  | 8  | 記事 | 東京／朝刊 | 5 |
| 107 | 朝日 | 投身美人の身許 女は教員の妾                               | 1911 | 明治44 | 1  | 15 | 記事 | 東京／朝刊 | 5 |
| 108 | 朝日 | 学界の奇観（3） 千里眼問題の真相 丸亀にて 鶴峰生                   | 1911 | 明治44 | 1  | 24 | 記事 | 東京／朝刊 | 4 |
| 109 | 朝日 | 四百四病間違つた手当 神経衰弱 医学博士 土田卯三郎氏談                 | 1911 | 明治44 | 5  | 15 | 記事 | 東京／朝刊 | 6 |
| 110 | 朝日 | 四百四病間違つた手当（続） 神経衰弱 医学博士 土田卯三郎氏談              | 1911 | 明治44 | 5  | 16 | 記事 | 東京／朝刊 | 6 |
| 111 | 朝日 | 少将夫人の自殺 主人は満州守備の不在中                          | 1911 | 明治44 | 6  | 25 | 記事 | 東京／朝刊 | 5 |
| 112 | 朝日 | 朝日川柳集 蓮花庵選                                   | 1911 | 明治44 | 7  | 5  | 記事 | 東京／朝刊 | 7 |

| 番   | 社名 | タイトル                                            | 発行日  |      |    |    | 種別 | 社/刊種  | 面 |
|-----|----|-------------------------------------------------|------|------|----|----|----|-------|---|
|     |    |                                                 | 西暦   | 和暦   | 月  | 日  |    |       |   |
| 113 | 朝日 | 間違つた手当 子供の神経病 医学博士 佐野彪太氏述                       | 1911 | 明治44 | 8  | 19 | 記事 | 東京/朝刊 | 6 |
| 114 | 読売 | ヒステリーで自損自死の娘の継母拘引 隔て無い養育知る隣人が釈放嘆願/東京            | 1911 | 明治44 | 9  | 13 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 115 | 朝日 | 美人お京出廷せず 博徒の情婦斬事件                               | 1911 | 明治44 | 9  | 27 | 記事 | 東京/朝刊 | 5 |
| 116 | 読売 | 病死か絞殺か 生活に苦しむ青年の悶死/東京                           | 1911 | 明治44 | 11 | 25 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 117 | 朝日 | 芸妓政代の自殺 失恋と借金に煩悶して<写>                           | 1912 | 明治45 | 3  | 5  | 記事 | 東京/朝刊 | 5 |
| 118 | 朝日 | 学会見物(続) 脚気、癩病、比的里                               | 1912 | 明治45 | 4  | 6  | 記事 | 東京/朝刊 | 4 |
| 119 | 朝日 | いろいろの自殺者 生活難 アンチヘブリン 若い職人 洋服を着た男 脳病患者 放蕩者 ヒステリー | 1912 | 明治45 | 4  | 15 | 記事 | 東京/朝刊 | 5 |
| 120 | 朝日 | 花嫁別荘にて自殺 東洋美術会社長の妻                              | 1912 | 明治45 | 6  | 18 | 記事 | 東京/朝刊 | 5 |
| 121 | 読売 | 金竜館内で友人に斬りつけた女、ヒステリーで傷害罪/東京・浅草                  | 1912 | 明治45 | 6  | 27 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 122 | 朝日 | 校丁の妻の自殺                                         | 1912 | 明治45 | 6  | 29 | 記事 | 東京/朝刊 | 5 |
| 123 | 朝日 | 嬰兒を絞殺して自分は縊死す                                   | 1912 | 明治45 | 11 | 12 | 記事 | 東京/朝刊 | 5 |
| 124 | 朝日 | (広告) 山崎帝国堂 神精液 神経病精神病子宮血の道ヒステリー脳病全治             | 1898 | 明治31 | 12 | 4  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 125 | 読売 | [広告] 婦人のヒステリー 神経病 脳病 頭痛 神精液/山崎帝国堂               | 1900 | 明治33 | 1  | 12 | 広告 | 朝刊    | 5 |
| 126 | 読売 | [広告] ヒステリーの必治保証薬 神精液/東京市神田区 山崎帝国堂               | 1900 | 明治33 | 5  | 9  | 広告 | 朝刊    | 5 |
| 127 | 朝日 | (広告) 津村順天堂 中将湯 子宮血の道ヒステリー 十年越しの難病全治             | 1903 | 明治36 | 4  | 1  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 128 | 読売 | [広告] 中将湯 婦人病 ヒステリー のぼせ/津村順天堂                    | 1903 | 明治36 | 5  | 3  | 広告 | 朝刊    | 8 |
| 129 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                      | 1906 | 明治39 | 3  | 6  | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 130 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                      | 1906 | 明治39 | 3  | 9  | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 131 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                      | 1906 | 明治39 | 3  | 11 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 132 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                      | 1906 | 明治39 | 3  | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 133 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                      | 1906 | 明治39 | 4  | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 134 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                      | 1906 | 明治39 | 4  | 8  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 135 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                      | 1906 | 明治39 | 4  | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 136 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                      | 1906 | 明治39 | 9  | 3  | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 137 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                      | 1906 | 明治39 | 9  | 8  | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 138 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                      | 1906 | 明治39 | 9  | 17 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 139 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 ヒステリー 生殖器障害                      | 1906 | 明治39 | 10 | 1  | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 140 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 ヒステリー 生殖器障害                      | 1906 | 明治39 | 10 | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 141 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                      | 1906 | 明治39 | 10 | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 142 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                      | 1906 | 明治39 | 10 | 21 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 143 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                      | 1906 | 明治39 | 11 | 7  | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 144 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                      | 1906 | 明治39 | 11 | 10 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 145 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                      | 1906 | 明治39 | 11 | 20 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 146 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                      | 1906 | 明治39 | 11 | 22 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 147 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                      | 1906 | 明治39 | 12 | 7  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 148 | 朝日 | (広告) 医士 児島宗説 婦人血の道 ヒステリー 男子神経衰弱 ヒポコンドリー 梅毒 りん病  | 1906 | 明治39 | 12 | 10 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 149 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                      | 1906 | 明治39 | 12 | 11 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 150 | 朝日 | (広告) 医士 児島宗説 婦人 血の道 ヒステリー 男子 神経衰弱 梅毒ほか          | 1906 | 明治39 | 12 | 13 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 151 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                      | 1907 | 明治40 | 1  | 7  | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 152 | 朝日 | (広告) 医師児島宗説 婦人血の道ヒステリー 男子神経衰弱ノイラスチニー ヒポコンドリーほか  | 1907 | 明治40 | 1  | 16 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 153 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                      | 1907 | 明治40 | 1  | 20 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 154 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                      | 1907 | 明治40 | 1  | 21 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 155 | 朝日 | (広告) 児島宗説 婦人血の道 ヒステリー                           | 1907 | 明治40 | 2  | 14 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 156 | 朝日 | (広告) 東亜医院 暖注療法 ロイマチス 神経痛 神経衰弱 ヒステリー病ほか          | 1907 | 明治40 | 2  | 20 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 157 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                      | 1907 | 明治40 | 3  | 11 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 158 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                      | 1907 | 明治40 | 3  | 25 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 159 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                      | 1907 | 明治40 | 4  | 17 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 160 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経弱衰 生殖器障害 ヒステリー                      | 1907 | 明治40 | 5  | 23 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 161 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経弱衰 生殖器傷害 ヒステリー                      | 1907 | 明治40 | 5  | 31 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 162 | 読売 | [広告] 医療 神経衰弱 ヒステリー 生殖器障害/東京本郷 狩野病院              | 1907 | 明治40 | 6  | 9  | 広告 | 朝刊    | 4 |
| 163 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                      | 1907 | 明治40 | 7  | 3  | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 164 | 読売 | [広告] 神経衰弱・生殖器障害/狩野病院                            | 1907 | 明治40 | 7  | 7  | 広告 | 朝刊    | 8 |
| 165 | 朝日 | (広告) 第二診察所 婦人血の道ヒステリー 男子神経衰弱 梅毒ほか               | 1907 | 明治40 | 7  | 19 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 166 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経弱衰生殖器障害ヒステリー                        | 1907 | 明治40 | 8  | 4  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 167 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                      | 1907 | 明治40 | 8  | 23 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 168 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱生殖器障害ヒステリー                        | 1907 | 明治40 | 8  | 27 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 169 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                      | 1907 | 明治40 | 9  | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |

| 番   | 社名 | タイトル                                                                  | 発行日  |      |    |    | 種別 | 社/刊種  | 面 |
|-----|----|-----------------------------------------------------------------------|------|------|----|----|----|-------|---|
|     |    |                                                                       | 西暦   | 和暦   | 月  | 日  |    |       |   |
| 170 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                                            | 1907 | 明治40 | 9  | 13 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 171 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                                            | 1907 | 明治40 | 9  | 18 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 172 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                                            | 1907 | 明治40 | 10 | 4  | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 173 | 朝日 | (広告) 東京血液療院 喘息 神経衰弱 ヒステリー                                             | 1907 | 明治40 | 10 | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 174 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                                            | 1907 | 明治40 | 10 | 6  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 175 | 朝日 | (広告) 東京血液療院 喘息 神経衰弱 ヒステリー                                             | 1907 | 明治40 | 10 | 10 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 176 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                                            | 1907 | 明治40 | 10 | 23 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 177 | 朝日 | (広告) 加納病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                                            | 1907 | 明治40 | 10 | 25 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 178 | 読売 | [広告] 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー/東京市本郷区 狩野病院                                     | 1907 | 明治40 | 11 | 3  | 広告 | 朝刊    | 8 |
| 179 | 朝日 | (広告) 東京血液療院 喘息 神経衰弱 ヒステリー                                             | 1907 | 明治40 | 11 | 6  | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 180 | 読売 | [広告] ゼンソク 神経衰弱 ヒステリー-最新治療/東京日本橋 東京血液療院                                | 1907 | 明治40 | 11 | 12 | 広告 | 朝刊    | 4 |
| 181 | 朝日 | (広告) 第二診察所 婦人血の道ヒステリー 男子神経衰弱ノイラスチニー ヒポコンデリーほか                         | 1907 | 明治40 | 11 | 13 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 182 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                                            | 1907 | 明治40 | 11 | 13 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 183 | 朝日 | (広告) 東京血液療院 院長ドクトル松井滋雄 喘息 神経衰弱 ヒステリー                                  | 1907 | 明治40 | 11 | 14 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 184 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                                            | 1907 | 明治40 | 11 | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 185 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー 入院随時                                       | 1907 | 明治40 | 12 | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 186 | 朝日 | (広告) 東京血液療院 喘息神経衰弱ヒステリー                                               | 1907 | 明治40 | 12 | 8  | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 187 | 朝日 | (広告) 第二診察所 婦人血の道ヒステリー 男子神経衰弱                                          | 1907 | 明治40 | 12 | 8  | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 188 | 朝日 | (広告) 製剤発売本舗 鼻の薬元祖 寿仁堂福岡薬房 脳病ヒステリー薬 脳鼻液 根治的鼻薬                          | 1907 | 明治40 | 12 | 12 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 189 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                                            | 1907 | 明治40 | 12 | 13 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 190 | 朝日 | (広告) 第二診察所 婦人血の道ヒステリー 男子神経衰弱ノイラスチニー ヒポコンデリー                           | 1907 | 明治40 | 12 | 17 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 191 | 読売 | [広告] 脳鼻液 脳病 ヒステリー 鼻薬/日本橋区浜町 寿仁堂福岡薬房                                   | 1908 | 明治41 | 1  | 1  | 広告 | 朝刊    | 4 |
| 192 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                                            | 1908 | 明治41 | 1  | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 193 | 朝日 | (広告) 第二診察所 婦人血の道 ヒステリー 男子神経衰弱ほか                                       | 1908 | 明治41 | 1  | 8  | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 194 | 朝日 | (広告) 第二診察所 婦人血の道 ヒステリー 男子神経衰弱ほか                                       | 1908 | 明治41 | 1  | 10 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 195 | 朝日 | (広告) 寿仁堂薬房 脳鼻液 脳病喘息 ヒステリー 神経衰弱                                        | 1908 | 明治41 | 2  | 3  | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 196 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                                            | 1908 | 明治41 | 2  | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 197 | 朝日 | (広告) 平田章之丞 生殖器科 神経衰弱 ヒステリーほか                                          | 1908 | 明治41 | 2  | 23 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 198 | 朝日 | (広告) 平田章之丞 生殖器科神経衰弱ヒステリーほか                                            | 1908 | 明治41 | 3  | 4  | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 199 | 朝日 | (広告) 平田章之丞 明治療院設 生殖器科 神経衰弱病 ヒステリー リウマチス                               | 1908 | 明治41 | 3  | 7  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 200 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                                            | 1908 | 明治41 | 3  | 7  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 201 | 朝日 | (広告) 平田章之丞 男子婦人生殖器科 神経衰弱 ヒステリー病ほか                                     | 1908 | 明治41 | 3  | 13 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 202 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                                            | 1908 | 明治41 | 3  | 13 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 203 | 朝日 | (広告) 第二診察所 婦人血の道子宮諸病・ヒステリー・神経衰弱症ほか                                    | 1908 | 明治41 | 3  | 16 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 204 | 朝日 | (広告) 平田章之丞 男子婦人生殖器科・神経衰弱・ヒステリーほか                                      | 1908 | 明治41 | 3  | 21 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 205 | 朝日 | (広告) 医学博士 土田卯三郎 脳脊髄病・神経衰弱・ヒステリーほか                                     | 1908 | 明治41 | 3  | 24 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 206 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                                            | 1908 | 明治41 | 3  | 26 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 207 | 朝日 | (広告) 弘済院 中南定太郎 脳神経衰弱 ヒステリー新療法                                         | 1908 | 明治41 | 4  | 3  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 208 | 朝日 | (広告) 施本所 弘済院中南定太郎 脳神経衰弱 ヒステリーの療法 医学博士 森友道 レーベン                        | 1908 | 明治41 | 4  | 10 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 209 | 朝日 | (広告) 施本所弘済院中南定太郎 脳神経衰弱 ヒステリー新療法                                       | 1908 | 明治41 | 5  | 2  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 210 | 朝日 | (広告) 第二診察所 婦人血の道 子宮諸病 ヒステリー症 男子神経衰弱症 梅毒 りん病 痔疾                        | 1908 | 明治41 | 5  | 7  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 211 | 朝日 | (広告) 第二診察所 婦人血の道 子宮諸病ヒステリー症 男子神経衰弱症 梅毒 りん病ほか                          | 1908 | 明治41 | 5  | 11 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 212 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                                            | 1908 | 明治41 | 5  | 13 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 213 | 朝日 | (広告) 小森医院 脳病 脊髄病 脚気 神経病 ヒステリーほか                                       | 1908 | 明治41 | 5  | 13 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 214 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                                            | 1908 | 明治41 | 5  | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 215 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                                            | 1908 | 明治41 | 5  | 23 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 216 | 朝日 | (広告) 施本所 弘済院 中南定太郎 レーベン 神経性諸病 ヒステリー症ほか                                | 1908 | 明治41 | 6  | 1  | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 217 | 朝日 | (広告) 救世堂薬院 脳神経病新論 脳神経衰弱症とヒステリー症 (婦人血の道) の自宅療法                         | 1908 | 明治41 | 6  | 2  | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 218 | 朝日 | (広告) 本舗 津村順天堂 中将湯 子宮病 ヒステリー 月経不順ほか                                    | 1908 | 明治41 | 6  | 4  | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 219 | 朝日 | (広告) 施本所 弘済院 中南定太郎 レーベン 脳神経衰弱 ヒステリー症                                  | 1908 | 明治41 | 6  | 9  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 220 | 読売 | [広告] 塗擦新治療 ヒステリー 神経病 午前宅診/芝区 小森医院                                     | 1908 | 明治41 | 6  | 15 | 広告 | 朝刊    | 4 |
| 221 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                                            | 1908 | 明治41 | 6  | 20 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 222 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                                            | 1908 | 明治41 | 6  | 26 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 223 | 朝日 | (広告) 日本薬学会模範製剤発行本舗 楽天堂薬房 代理店 尾崎 大木会社 玉置会社ほか 蘇生丸 神経衰弱 婦人ヒステリー 子宮病血の道ほか | 1908 | 明治41 | 6  | 28 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 224 | 朝日 | (広告) 弘済院中南定太郎 弘済薬院薬品部 福井甚蔵ほか 脳神経衰弱ヒステリー新療法 レーベン                       | 1908 | 明治41 | 7  | 2  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 225 | 読売 | [広告] 脳神経ヒステリー、病者に冊子進呈/東京・東両国 救世堂薬院                                    | 1908 | 明治41 | 7  | 6  | 広告 | 朝刊    | 3 |
| 226 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                                            | 1908 | 明治41 | 7  | 12 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |

| 番   | 社名 | タイトル                                            | 発行日  |      |    |    | 種別 | 社/刊種  | 面 |
|-----|----|-------------------------------------------------|------|------|----|----|----|-------|---|
|     |    |                                                 | 西暦   | 和暦   | 月  | 日  |    |       |   |
| 227 | 朝日 | (広告) 第二診療所 婦人血の道子宮諸病ヒステリー症 男子神経衰弱症              | 1908 | 明治41 | 7  | 17 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 228 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                      | 1908 | 明治41 | 7  | 20 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 229 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                      | 1908 | 明治41 | 7  | 22 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 230 | 朝日 | (広告) 弘済院 中南定十郎 森識 脳神経衰弱ヒステリー-新療法 レーベン           | 1908 | 明治41 | 8  | 1  | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 231 | 朝日 | (広告) 第二診療所 子宮諸病 ヒステリー症 神経衰弱症 梅毒 りん病 痔疾          | 1908 | 明治41 | 8  | 4  | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 232 | 朝日 | (広告) 救世堂薬院 脳神経衰弱ヒステリー 生殖器障害の病者を救う               | 1908 | 明治41 | 8  | 7  | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 233 | 朝日 | (広告) 弘済院 脳神経衰弱ヒステリー                             | 1908 | 明治41 | 10 | 7  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 234 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー 新築落成                 | 1908 | 明治41 | 11 | 13 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 235 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                      | 1908 | 明治41 | 11 | 23 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 236 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                      | 1908 | 明治41 | 12 | 7  | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 237 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                      | 1909 | 明治42 | 1  | 10 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 238 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 ヒステリー 生殖器障害                      | 1909 | 明治42 | 1  | 13 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 239 | 朝日 | (広告) 狩野病院 新築落成 神経衰弱 ヒステリー 生殖器障害                 | 1909 | 明治42 | 1  | 16 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 240 | 朝日 | (広告) 狩野病院 新築落成 神経衰弱 ヒステリー 生殖器障害                 | 1909 | 明治42 | 1  | 19 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 241 | 朝日 | (広告) 狩野病院 新築落成 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                 | 1909 | 明治42 | 2  | 14 | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 242 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                      | 1909 | 明治42 | 2  | 16 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 243 | 朝日 | (広告) 狩野病院 新築落成 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                 | 1909 | 明治42 | 2  | 22 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 244 | 朝日 | (広告) 狩野病院 新築落成 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                 | 1909 | 明治42 | 3  | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 245 | 朝日 | (広告) 東京精養院 脳 神経痛 ヒステリー 胃腸脚気                     | 1909 | 明治42 | 3  | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 246 | 朝日 | (広告) 製剤本舗杉森堂薬房 脳鼻華 脳病 神経衰弱 頭痛 ヒステリー ぜんそく        | 1909 | 明治42 | 3  | 16 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 247 | 朝日 | (広告) 東京静養院 脳 神経痛 ヒステリー 胃腸 脚気                    | 1909 | 明治42 | 3  | 25 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 248 | 朝日 | (広告) 施本所 弘済院中南定太郎 脳病神経衰弱ヒステリー-の新療法              | 1909 | 明治42 | 4  | 1  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 249 | 朝日 | (広告) 東京精養院 脳 神経痛 ヒステリーほか                        | 1909 | 明治42 | 4  | 3  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 250 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー 病院新築落成案内             | 1909 | 明治42 | 4  | 3  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 251 | 朝日 | (広告) 東京精養院 脳 神経痛 ヒステリーほか                        | 1909 | 明治42 | 4  | 10 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 252 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                      | 1909 | 明治42 | 4  | 11 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 253 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                      | 1909 | 明治42 | 4  | 16 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 254 | 朝日 | (広告) 東京精養院 脳 神経痛 ヒステリーほか                        | 1909 | 明治42 | 4  | 17 | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 255 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                      | 1909 | 明治42 | 4  | 22 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 256 | 朝日 | (広告) 東京精養院 脳 神経痛 ヒステリーほか                        | 1909 | 明治42 | 4  | 24 | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 257 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                      | 1909 | 明治42 | 4  | 25 | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 258 | 朝日 | (広告) 東京精養院 脳 神経痛 ヒステリー テンカンほか                   | 1909 | 明治42 | 5  | 1  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 259 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                      | 1909 | 明治42 | 5  | 3  | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 260 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                      | 1909 | 明治42 | 5  | 6  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 261 | 朝日 | (広告) 東京精養院 脳神経症 ヒステリー テンカン 胃腸 脚気                | 1909 | 明治42 | 5  | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 262 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                      | 1909 | 明治42 | 5  | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 263 | 朝日 | (広告) 土田卯三郎 脳病 脊髄病 ヒステリーほか                       | 1909 | 明治42 | 5  | 29 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 264 | 朝日 | (広告) 東京精養院 脳神経衰弱 テンカン ヒステリー 胃腸 脚気               | 1909 | 明治42 | 6  | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 265 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー 新築落成                 | 1909 | 明治42 | 6  | 12 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 266 | 朝日 | (広告) 狩野病院 新築落成 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                 | 1909 | 明治42 | 6  | 18 | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 267 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー 新築落成                 | 1909 | 明治42 | 6  | 20 | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 268 | 朝日 | (広告) 岡田順天堂 克快丸 かつけ ビックリ丸 月経不順 痲病梅毒 神脳 脳神経 ヒステリー | 1909 | 明治42 | 6  | 28 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 269 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                      | 1909 | 明治42 | 7  | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 270 | 朝日 | (広告) 精神学院 脳神経衰弱 ヒステリー リウマチスほか                   | 1909 | 明治42 | 7  | 6  | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 271 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                      | 1909 | 明治42 | 7  | 10 | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 272 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                      | 1909 | 明治42 | 7  | 20 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 273 | 読売 | [広告] ヒステリー、神経衰弱の良薬 神脳/発売 東京市神田区 万生院             | 1909 | 明治42 | 7  | 29 | 広告 | 朝刊    | 4 |
| 274 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                      | 1909 | 明治42 | 8  | 27 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 275 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                      | 1909 | 明治42 | 9  | 6  | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 276 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                      | 1909 | 明治42 | 9  | 13 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 277 | 朝日 | (広告) 土田卯三郎 脳病 脊髄病 神経衰弱 ヒステリー 中風 神経痛 運動障害ほか      | 1909 | 明治42 | 9  | 13 | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 278 | 朝日 | (広告) 土田卯三郎 脳病 脊髄病 神経衰弱 ヒステリー 中風 神経痛 運動障害ほか      | 1909 | 明治42 | 9  | 17 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 279 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                      | 1909 | 明治42 | 9  | 21 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 280 | 朝日 | (広告) 土田卯三郎 脳病 脊髄病 ヒステリーほか                       | 1909 | 明治42 | 9  | 30 | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 281 | 朝日 | (広告) 弘済院 中南定太郎 レーベン 脳神経衰弱 ヒステリー-最新治療法に就て        | 1909 | 明治42 | 10 | 4  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 282 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                      | 1909 | 明治42 | 10 | 7  | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 283 | 朝日 | (広告) 弘済院 ヒステリー-新療法レーベン                          | 1909 | 明治42 | 11 | 11 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |

| 番   | 社名 | タイトル                                                   | 発行日  |      |    |    | 種別 | 社/刊種  | 面  |
|-----|----|--------------------------------------------------------|------|------|----|----|----|-------|----|
|     |    |                                                        | 西暦   | 和暦   | 月  | 日  |    |       |    |
| 284 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                             | 1909 | 明治42 | 11 | 25 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 285 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                             | 1909 | 明治42 | 12 | 4  | 広告 | 東京/朝刊 | 1  |
| 286 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                             | 1909 | 明治42 | 12 | 6  | 広告 | 東京/朝刊 | 1  |
| 287 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                             | 1909 | 明治42 | 12 | 19 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 288 | 朝日 | (広告) 弘済院 脳神経衰弱 ヒステリー-新療法                               | 1910 | 明治43 | 1  | 9  | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 289 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                             | 1910 | 明治43 | 1  | 12 | 広告 | 東京/朝刊 | 1  |
| 290 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                             | 1910 | 明治43 | 1  | 18 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 291 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                             | 1910 | 明治43 | 1  | 23 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 292 | 朝日 | (広告) 弘済院 中南貞太郎 脳神経衰弱ヒステリー-新療法 レーベン                     | 1910 | 明治43 | 2  | 6  | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 293 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                             | 1910 | 明治43 | 2  | 9  | 広告 | 東京/朝刊 | 1  |
| 294 | 読売 | [広告] 脳病神経衰弱、ヒステリー-新療法薬 レーベン/弘済院 中南定太郎                  | 1910 | 明治43 | 3  | 5  | 広告 | 朝刊    | 4  |
| 295 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 ヒステリー 生殖器障害                             | 1910 | 明治43 | 4  | 6  | 広告 | 東京/朝刊 | 6  |
| 296 | 朝日 | (広告) 弘済院 中南定太郎 レーベン 脳病神経衰弱ヒステリー-療法 日向次作                | 1910 | 明治43 | 4  | 12 | 広告 | 東京/朝刊 | 6  |
| 297 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                             | 1910 | 明治43 | 4  | 20 | 広告 | 東京/朝刊 | 6  |
| 298 | 読売 | [広告] 脳病神経衰弱 ヒステリー-新療法/脳神経系統専門 医学士 森繁吉識                 | 1910 | 明治43 | 5  | 4  | 広告 | 朝刊    | 5  |
| 299 | 朝日 | (広告) 弘済院 中南定太郎 レーベン 脳病神経衰弱 ヒステリー-療法 脳神経系統専門医学士 森繁吉識    | 1910 | 明治43 | 5  | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 6  |
| 300 | 読売 | [広告] 脳病神経衰弱 ヒステリー-療法/海軍重医少監従五位勲四等 日向次作                 | 1910 | 明治43 | 5  | 20 | 広告 | 朝刊    | 4  |
| 301 | 朝日 | (広告) 脳脊髄病院 神経衰弱 ヒステリー 中風ほか                             | 1910 | 明治43 | 6  | 27 | 広告 | 東京/朝刊 | 8  |
| 302 | 朝日 | (広告) 弘済院中南定太郎 脳病神経衰弱 ヒステリー-新療法                         | 1910 | 明治43 | 7  | 4  | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 303 | 朝日 | (広告) 狩野病院 神経衰弱 生殖器障害 ヒステリー                             | 1910 | 明治43 | 7  | 11 | 広告 | 東京/朝刊 | 6  |
| 304 | 朝日 | (広告) 脳脊髄病院 医学博士土田卯三郎 神経衰弱 ヒステリー 中風                     | 1910 | 明治43 | 8  | 10 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 305 | 朝日 | (広告) 本舗 楽天堂薬房 発売元 売薬化粧品 玉置合名会社 脳病 神経衰弱 ヒステリー 蘇生脳鼻水     | 1910 | 明治43 | 8  | 11 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 306 | 朝日 | (広告) 弘済院中南定太郎 脳病神経衰弱ヒステリー-新療法                          | 1910 | 明治43 | 9  | 1  | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 307 | 読売 | [広告] 神経衰弱・ヒステリー-自宅療養法/弘済院 南定太郎                         | 1910 | 明治43 | 10 | 5  | 広告 | 朝刊    | 11 |
| 308 | 朝日 | (広告) 本舗 金沢巖 特約店 大木合名会社 脳神経衰弱に ヒステリー                    | 1910 | 明治43 | 10 | 17 | 広告 | 東京/朝刊 | 6  |
| 309 | 朝日 | (広告) 医学博士 土田卯三郎 脳脊髄病院 神経衰弱 ヒステリー 中風                    | 1910 | 明治43 | 12 | 26 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 310 | 朝日 | (広告) 発売 小林商店 特約店 石浦菊次郎 玉置合名会社 大木合名会社 活力素 神経衰弱 ヒステリー 便秘 | 1911 | 明治44 | 2  | 11 | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 311 | 朝日 | (広告) 脳脊髄病院 神経衰弱ヒステリー-中風                                | 1911 | 明治44 | 2  | 24 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 312 | 朝日 | (広告) 脳脊髄病院 土田卯三郎 神経衰弱ヒステリー-中風                          | 1911 | 明治44 | 2  | 28 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 313 | 朝日 | (広告) 脳脊髄病院 土田卯三郎 神経衰弱 ヒステリー 中風ほか                       | 1911 | 明治44 | 3  | 27 | 広告 | 東京/朝刊 | 6  |
| 314 | 朝日 | (広告) 脳脊髄病院 土田卯三郎 神経衰弱 ヒステリー 中風ほか                       | 1911 | 明治44 | 3  | 31 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 315 | 朝日 | (広告) 脳脊髄病院 神経衰弱 ヒステリー-ほか                               | 1911 | 明治44 | 4  | 28 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 316 | 朝日 | (広告) 弘済院 中南定太郎 脳神経衰弱ヒステリー-良剤 レーベン 療法書無代進呈              | 1911 | 明治44 | 7  | 3  | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |

3. 明治期における神経病「図書・そのほか」【目録】(発行年月順)

| 番  | タイトル               | 分類 | 著・編[等]                             | 出版     | 発行年月 |      |    | 備考<br>(掲載誌・巻・号等) |
|----|--------------------|----|------------------------------------|--------|------|------|----|------------------|
|    |                    |    |                                    |        | 西暦   | 和暦   | 月  |                  |
| 1  | 日講記聞神経病論           | 図書 | 虞魯斯[原本];<br>高橋正純[訳述];<br>岡澤貞一郎[校訂] | 大阪府病院  | 1868 | 明治元  |    |                  |
| 2  | 西国立志編 原名・自助論       | 図書 | 斯邁爾斯(スマイルス)[他]                     | 須原屋茂兵衛 | 1870 | 明治3  |    | 第4冊 第5編          |
| 3  | 外科拾要               | 図書 | 拘刺児偏 編[他]                          | 和泉屋市兵衛 | 1873 | 明治6  |    | 5                |
| 4  | 神経病論 日講記聞          | 図書 | (合衆國)虞魯斯原本,<br>高橋正純,岡澤貞一<br>郎校訂    | 書籍會社   | 1874 | 明治7  |    |                  |
| 5  | 病理摘要               | 図書 | ハルツホールン[他]                         | 行余堂    | 1875 | 明治8  |    | 5卷之上下            |
| 6  | 小児科(斯泰涅爾)          | 図書 | スタインル[他]                           | 島村利助   | 1876 | 明治9  |    | 3                |
| 7  | 政府八神経病二惱マサル、勿レ     | 雑誌 | 共同社 編                              | 共同社    | 1879 | 明治12 | 5  | 『近事評論』(192)      |
| 8  | 眼科必携               | 図書 | 須准歌児[他]                            | 島村利助   | 1879 | 明治12 |    | 10               |
| 9  | 眼科必携               | 図書 | 須准歌児[他]                            | 島村利助   | 1879 | 明治12 |    | 9                |
| 10 | 原病学各論              | 図書 | 越爾蔑噠斯(エルメンズ)[他]                    | 大阪公立病院 | 1879 | 明治12 |    | 14               |
| 11 | 医学七科問答 外科学         | 図書 | 律度羅(リュドロ)[他]                       | 東京医学会社 | 1879 | 明治12 |    |                  |
| 12 | 内科審論               | 図書 | クンツェー[他]                           | 鞭駝舎仮局  | 1880 | 明治13 |    | 前編第1(1冊)         |
| 13 | 病理各論               | 図書 | 満私歌児篤[他]                           | 松村九兵衛  | 1880 | 明治13 |    | 卷之2              |
| 14 | 電気療法(必爾遜)          | 図書 | ヒルソン[他]                            | 熊谷玄旦   | 1881 | 明治14 |    |                  |
| 15 | 神経病ノ療法             | 雑誌 | 医事新聞社                              | 医事新聞社  | 1883 | 明治16 | 12 | 『医事新聞』(34)(105)  |
| 16 | 内科枢要               | 図書 | 謨亜納屈(モアナック)[他]                     | 島村利助   | 1883 | 明治16 |    | 2                |
| 17 | 漢洋病名対照録            | 図書 | 落合泰蔵 纂著                            | 英蘭堂    | 1883 | 明治16 |    |                  |
| 18 | 万病素人療治の心得          | 図書 | 壮合風子                               | 島村利助等  | 1885 | 明治18 |    |                  |
| 19 | 小僧殺横浜奇談 今古実録       | 図書 | 編輯人不詳                              | 栄泉社    | 1885 | 明治18 |    |                  |
| 20 | 大岡仁政録 今古実録. 花咲屋藤作伝 | 図書 | 栄泉社 編                              | 栄泉社    | 1886 | 明治19 |    |                  |
| 21 | 小僧殺横浜奇談 今古実録       | 図書 | 編輯人不詳                              | 明進堂    | 1886 | 明治19 |    |                  |
| 22 | 養生誘導草              | 図書 | 尾立方実                               | 沢本駒吉   | 1888 | 明治21 |    |                  |
| 23 | 診候描寫圖              | 図書 | 三宅秀                                | 三宅秀    | 1888 | 明治21 |    |                  |
| 24 | 避病安全 附・医者先の懸       | 図書 | 野中良一[他]                            | 挽蘇堂    | 1888 | 明治21 |    |                  |
| 25 | 神経病遺傳記雛形           | 雑誌 | 同好会                                | 同好会    | 1889 | 明治22 | 10 | 『同好医会雑誌』(5)      |
| 26 | 神経病診断法(續)          | 雑誌 | 榊椒                                 | 同好会    | 1889 | 明治22 | 12 | 『同好医会雑誌』(6)      |
| 27 | 小学生徒教育修身の話         | 図書 | 江東散史 編                             | 開文堂    | 1889 | 明治22 |    |                  |
| 28 | 皮膚病学               | 図書 | 河本重次郎,<br>石黒宇宙治                    | 英蘭堂    | 1889 | 明治22 |    |                  |
| 29 | 血族結婚ト神経病           | 雑誌 | 日本医史学会 編                           | 日本医史学会 | 1890 | 明治23 | 7  | 『中外医事新報』(247)    |

| 番  | タイトル                            | 分類 | 著・編〔等〕         | 出版           | 発行年月 |      |    | 備考<br>(掲載誌・巻・号等)     |
|----|---------------------------------|----|----------------|--------------|------|------|----|----------------------|
|    |                                 |    |                |              | 西暦   | 和暦   | 月  |                      |
| 30 | 神経病学ニ於ケル瞬間診断                    | 雑誌 | 順天堂醫事研究会 編     | 順天堂醫事研究会     | 1890 | 明治23 | 8  | 『順天堂醫事研究会報告』(88)     |
| 31 | 内科類症鑑別                          | 図書 | 寺尾国平 編[他]      | 寺尾国平         | 1890 | 明治23 |    |                      |
| 32 | 薬物示要                            | 図書 | 長田伊佐           | 金原寅作         | 1890 | 明治23 |    | 上編                   |
| 33 | 衛生手函                            | 図書 | 岸田吟香 編         | 岸田吟香         | 1890 | 明治23 |    |                      |
| 34 | 神経病ノ瞬間診断                        | 雑誌 | I.H            | 日本医史学会       | 1891 | 明治24 | 11 | 『中外医事新報』(280)        |
| 35 | 神経病ノ瞬間診断(續)                     | 雑誌 | I.H            | 日本医史学会       | 1891 | 明治24 | 12 | 『中外医事新報』(281)        |
| 36 | 修身道の話 教育                        | 図書 | 鈴木万治郎 編        | 鈴木万治郎        | 1892 | 明治25 |    |                      |
| 37 | 電気療法 新纂実用                       | 図書 | リーゲル[他]        | 山田良叔         | 1892 | 明治25 |    |                      |
| 38 | (7)鼻咽喉腔ニ係ル反射神経病                 | 雑誌 | 済生学舎医事新報社 編    | 済生学舎医事新報社    | 1893 | 明治26 | 1  | 『済生学舎医事新報』(1)        |
| 39 | 叢話                              | 雑誌 | 博文館            | 博文館          | 1893 | 明治26 | 2  | 『日本之少年』5(4)          |
| 40 | 喫茶と神経病 / 陸盧道人                   | 雑誌 | 博文館 編          | 博文館          | 1893 | 明治26 | 7  | 『婦女雑誌』3(14)          |
| 41 | 療病全書                            | 図書 | クツエ, シルリング[他]  | 朝香屋          | 1893 | 明治26 |    | 第2巻                  |
| 42 | 眼科類症診断                          | 図書 | 本木淳            | 誠之堂          | 1893 | 明治26 |    |                      |
| 43 | 学校衛生法綱要                         | 図書 | 瀬川昌書           | 瀬川昌書         | 1893 | 明治26 |    |                      |
| 44 | お笑ひ草 改良落語                       | 図書 | 竹の屋主人          | 学友館          | 1894 | 明治27 |    |                      |
| 45 | 神経病診断表                          | 図書 | 三浦謙之助          | 三浦謙之助        | 1894 | 明治27 |    |                      |
| 46 | 電気療法                            | 図書 | 舟岡英之助 編[他]     | 舟岡英之助        | 1894 | 明治27 |    |                      |
| 47 | 神経病診断法トシテ頭蓋及背椎ノ打診及導音作用ニ就テ       | 雑誌 | 木村荒雄           | 順天堂醫事研究会     | 1895 | 明治28 | 1  | 『順天堂醫事研究会雑誌』(193)    |
| 48 | 内科完璧(洙氏)                        | 図書 | ユリウス・シュワルベ[他]  | 南江堂          | 1895 | 明治28 |    | 巻1                   |
| 49 | 壳薬製造全書                          | 図書 | 照林作次郎 編        | 薬業協会         | 1895 | 明治28 |    |                      |
| 50 | 普通看病学                           | 図書 | ビルロード[他]       | 吐鳳堂          | 1895 | 明治28 |    |                      |
| 51 | 精神病学集要                          | 図書 | 呉秀三 編          | 呉秀三          | 1895 | 明治28 |    | 後                    |
| 52 | 眼球結膜ノ血管神経病性浮腫                   | 雑誌 | ブラツク           | 眼科雑誌局        | 1896 | 明治29 | 5  | 『眼科雑誌』2(11)          |
| 53 | 脊髄勞ノ療法(余カ神経病「クリニック」ニ於テ)         | 雑誌 | ウイヘルムエルブ,カテ    | 順天堂醫事研究会     | 1896 | 明治29 | 8  | 『順天堂医学』M29(231)      |
| 54 | 脊髄勞ノ療法(余カ神経病「クリニック」ニ於テ)(前號續)    | 雑誌 | ウイヘルムエルブ,カテ    | 順天堂醫事研究会     | 1896 | 明治29 | 8  | 『順天堂医学』M29(232)      |
| 55 | 脊髄勞ノ療法(余カ神経病「クリニック」ニ於テ)(前號續)    | 雑誌 | ウイヘルムエルブ,カテ    | 順天堂醫事研究会     | 1896 | 明治29 | 9  | 『順天堂医学』M29(234)      |
| 56 | 脊髄勞ノ療法ニ就テ(余カ神経病「クリニック」ニ於テ)(前號續) | 雑誌 | ウイヘルムエルブ,カテ    | 順天堂醫事研究会     | 1896 | 明治29 | 10 | 『順天堂医学』M29(236)      |
| 57 | 診候描写図. 神経病皮膚病之部                 | 図書 | 三宅秀 摸写         | 三宅秀          | 1896 | 明治29 |    |                      |
| 58 | 生殖器病と神経病との關係                    | 雑誌 | 緒方病院医事研究会事務所 編 | 緒方病院医事研究会事務所 | 1897 | 明治30 | 6  | 『緒方病院研究会医事会報』(65/66) |
| 59 | 検眼鏡用法                           | 図書 | 河本重次郎          | 河本重次郎        | 1897 | 明治30 |    |                      |

| 番  | タイトル                       | 分類 | 著・編〔等〕             | 出版        | 発行年月 |      |    | 備考<br>(掲載誌・巻・号等)  |
|----|----------------------------|----|--------------------|-----------|------|------|----|-------------------|
|    |                            |    |                    |           | 西暦   | 和暦   | 月  |                   |
| 60 | 内科彙講. 神経系統篇                | 図書 | 川原汎                | 半田屋医籍     | 1897 | 明治30 |    |                   |
| 61 | 眼科治療学                      | 図書 | エム・オーレマン[他]        | 朝香屋       | 1897 | 明治30 |    |                   |
| 62 | 精神病学要略                     | 図書 | 呉秀三 編訳             | 吐鳳堂       | 1897 | 明治30 |    |                   |
| 63 | 袖珍内科臨床錦囊                   | 図書 | ハインリヒ・シュミット[他]     | 南江堂       | 1898 | 明治31 |    |                   |
| 64 | 眼科攬要 衛生綱鑑                  | 図書 | 斎藤輝雄               | 日本研医学会事務所 | 1898 | 明治31 |    |                   |
| 65 | 薬剤療法汎論                     | 図書 | ペンツォールト 等著[他]      | 朝香屋       | 1898 | 明治31 |    |                   |
| 66 | 医家綱鑑                       | 図書 | 飯高芳康,<br>青木純造 編[訳] | 朝香屋書店     | 1898 | 明治31 |    |                   |
| 67 | 天才論                        | 図書 | ツェザレ・ロムプロソオ[他]     | 普及舎       | 1898 | 明治31 |    |                   |
| 68 | 音楽と神経病                     | 雑誌 | 中央公論新社 編           | 中央公論新社    | 1899 | 明治32 | 9  | 『中央公論』14(9)(128)  |
| 69 | 坐骨神経病療法                    | 雑誌 | エル・イス              | 日本医史学会    | 1899 | 明治32 | 11 | 『中外医事新報』(472)     |
| 70 | 詳約内科各論                     | 図書 | 斎藤芳三郎 編[他]         | 南江堂       | 1899 | 明治32 |    |                   |
| 71 | 神経病と讀書                     | 雑誌 | 順天堂医学会 編           | 順天堂醫事研究會  | 1900 | 明治33 | 1  | 『順天堂医学』M33(314)   |
| 72 | 臨床必携新薬主治類纂                 | 図書 | 恩田重信 編             | 金原医籍      | 1900 | 明治33 |    |                   |
| 73 | 眼科学                        | 図書 | [河本重次郎] [著]        | 河本重次郎     | 1900 | 明治33 |    |                   |
| 74 | 通俗治療救急法                    | 図書 | 金沢巖 編              | 博文館       | 1900 | 明治33 |    |                   |
| 75 | 鐵道の危難に因する損傷性神経病の報告を望む      | 雑誌 | 私立奨進医会事務所 編[他]     | 私立奨進医会事務所 | 1901 | 明治34 | 1  | 『医談』(59)          |
| 76 | イムバツコ(アイノ人に於ける一種の官能神経病)に就て | 雑誌 | 榎保三郎               | 東京人類學會雜誌  | 1901 | 明治34 | 4  | 『東京人類學會雜誌』16(181) |
| 77 | 臺灣の生蕃に於ける一種の官能神経病          | 雑誌 | 伊能嘉矩               | 東京人類學會雜誌  | 1901 | 明治34 | 6  | 『東京人類學會雜誌』16(183) |
| 78 | 鼻ヨリ起ル眼病殊ニ視神経病ニ就テ           | 雑誌 | 日本眼科学会 編[他]        | 日本眼科学会    | 1901 | 明治34 | 7  | 『日本眼科学会雜誌』5(7)    |
| 79 | 第二十九回獨逸眼科學會報告              | 雑誌 | 日本眼科学会 編[他]        | 日本眼科学会    | 1901 | 明治34 | 11 | 『日本眼科学会雜誌』5(11)   |
| 80 | 家禽病理書                      | 図書 | 津野慶太郎 編            | 有隣堂       | 1901 | 明治34 |    |                   |
| 81 | 内科全書(斯氏)                   | 図書 | アドルフ・ストリュムベル[他]    | 松崎留吉      | 1901 | 明治34 |    | 巻4                |
| 82 | 神経病學會                      | 雑誌 | 醫海時報社 編            | 醫海時報社     | 1902 | 明治35 | 3  | 『醫海時報』(407)       |
| 83 | 講義 神経病ノ看護法                 | 雑誌 | 富士川游               | 日本神経学会事務所 | 1902 | 明治35 | 4  | 『神経学雑誌』1(1)       |
| 84 | 神経病學及精神病学部會                | 雑誌 | M、N、生              | 医事新聞社     | 1902 | 明治35 | 4  | 『医事新聞』(612)       |
| 85 | 神経病學及精神病学 緊張狂              | 雑誌 | 呉秀三                | 日本神経学会事務所 | 1902 | 明治35 | 6  | 『神経学雑誌』1(2)       |
| 86 | 講義 神経病ノ看護法                 | 雑誌 | 富士川游               | 日本神経学会事務所 | 1902 | 明治35 | 8  | 『神経学雑誌』1(3)       |
| 87 | 講義 神経病ノ看護法                 | 雑誌 | 富士川游               | 日本神経学会事務所 | 1902 | 明治35 | 10 | 『神経学雑誌』1(4)       |
| 88 | 神経病                        | 雑誌 | 中内蝶二               | 大日本学術協會   | 1902 | 明治35 | 11 | 『教育学術界』6(2)       |
| 89 | 末梢神経病                      | 雑誌 | 江浦榮齋               | 日本神経学会事務所 | 1902 | 明治35 | 12 | 『神経学雑誌』1(5)       |

| 番   | タイトル                                    | 分類 | 著・編 [等]                    | 出版        | 発行年月 |      |    | 備考<br>(掲載誌・巻・号等)  |
|-----|-----------------------------------------|----|----------------------------|-----------|------|------|----|-------------------|
|     |                                         |    |                            |           | 西暦   | 和暦   | 月  |                   |
| 90  | 検眼鏡用法                                   | 図書 | 河本重次郎                      | 河本重次郎     | 1902 | 明治35 |    |                   |
| 91  | 警世放言                                    | 図書 | 中江兆民(篤介)[他]                | 松村三松堂     | 1902 | 明治35 |    |                   |
| 92  | 实用小児病学                                  | 図書 | 平出謙吉 編                     | 半田屋医籍     | 1902 | 明治35 |    |                   |
| 93  | 最新名家処方                                  | 図書 | 村山熊次 編[他]                  | 明文館       | 1902 | 明治35 |    |                   |
| 94  | 重症官能性神経病ノ豫後及治療法追加(承前)                   | 雑誌 | オツペンハイム [述];<br>三宅鑛一 [訳]   | 日本医史学会    | 1903 | 明治36 | 1  | 『中外医事新報』(548)     |
| 95  | 重症官能性神経病ノ豫後及治療追加                        | 雑誌 | オツペンハイム [述];<br>三宅鑛一 [訳]   | 日本医史学会    | 1903 | 明治36 | 1  | 『中外医事新報』(547)     |
| 96  | 神経病学 精神的似而非脳膜炎 讀書不能<br>及書寫不能症ヲ伴ヘル失語症ノ一例 | 雑誌 | スタルク                       | 日本神経学会事務所 | 1903 | 明治36 | 2  | 『神経学雑誌』1(6)       |
| 97  | 重症官能性神経病ノ豫後及治療法追加(承前)                   | 雑誌 | オツペンハイム [述];<br>三宅鑛一 [訳]   | 日本医史学会    | 1903 | 明治36 | 2  | 『中外医事新報』(550)     |
| 98  | 神経病 (完結)                                | 雑誌 | 中内蝶二                       | 大日本学術協会   | 1903 | 明治36 | 3  | 『教育学術界』6(6)       |
| 99  | 神経病ノ療法                                  | 雑誌 | ヒルシュクローン [述];<br>水野鐵次郎 [訳] | 日本医史学会    | 1903 | 明治36 | 3  | 『中外医事新報』(552)     |
| 100 | 神経病 (承前)                                | 雑誌 | 中内蝶二                       | 大日本学術協会   | 1903 | 明治36 | 4  | 『教育学術界』6(5)       |
| 101 | 神経病ノ療法(承前)                              | 雑誌 | ヒルシュクローン [述];<br>水野鐵次郎 [訳] | 日本医史学会    | 1903 | 明治36 | 4  | 『中外医事新報』(553)     |
| 102 | 妊娠ト神経病                                  | 雑誌 | ヒルシュクローン [述];<br>水野鐵次郎 [訳] | 日本神経学会事務所 | 1903 | 明治36 | 4  | 『神経学雑誌』2(1)       |
| 103 | 神経病ノ療法(承前)                              | 雑誌 | ヒルシュクローン [述];<br>水野鐵次郎 [訳] | 日本医史学会    | 1903 | 明治36 | 5  | 『中外医事新報』(555)     |
| 104 | 療法 神経病ノ療法(承前)                           | 雑誌 | ヒルシュクローン [述];<br>水野鐵次郎 [訳] | 日本医史学会    | 1903 | 明治36 | 6  | 『中外医事新報』(557)     |
| 105 | 神経病ノ療法                                  | 雑誌 | ヒルシュクローン [述];<br>水野鐵次郎 [訳] | 日本医史学会    | 1903 | 明治36 | 7  | 『中外医事新報』(559)     |
| 106 | 神経病性脊椎側彎症                               | 雑誌 | ホツファー                      | 日本医史学会    | 1903 | 明治36 | 7  | 『中外医事新報』(560)     |
| 107 | 教育病理学 神経病性児童ノ學校                         | 雑誌 | 松原三郎                       | 日本神経学会事務所 | 1903 | 明治36 | 8  | 『神経学雑誌』2(3)       |
| 108 | 神経病ノ療法(承前)                              | 雑誌 | ヒルシュクローン [述];<br>水野鐵次郎 [訳] | 日本医史学会    | 1903 | 明治36 | 8  | 『中外医事新報』(561)     |
| 109 | 神経病ノ療法(承前)                              | 雑誌 | ヒルシュクローン [述];<br>水野鐵次郎 [訳] | 日本医史学会    | 1903 | 明治36 | 9  | 『中外医事新報』(563)     |
| 110 | 神経病ノ療法(承前)                              | 雑誌 | ヒルシュクローン [述];<br>水野鐵次郎 [訳] | 日本医史学会    | 1903 | 明治36 | 10 | 『中外医事新報』(565)     |
| 111 | 神経病ノ療法(承前)                              | 雑誌 | ヒルシュクローン [述];<br>水野鐵次郎 [訳] | 日本医史学会    | 1903 | 明治36 | 11 | 『中外医事新報』(567)     |
| 112 | 官能的神経病ノ婦人生殖器ニ對スル關係                      | 雑誌 | ベー・クレエヒ                    | 日本医史学会    | 1903 | 明治36 | 12 | 『中外医事新報』(570)     |
| 113 | 機能的神経病ト女子生殖器ノ關係ニ就テ 他                    | 雑誌 | 順天堂医学会 編                   | 順天堂醫事研究會  | 1903 | 明治36 | 12 | 『順天堂醫事研究會雑誌』(372) |
| 114 | 神経病ノ療法(承前)                              | 雑誌 | ヒルシュクローン [述];<br>水野鐵次郎 [訳] | 日本医史学会    | 1903 | 明治36 | 12 | 『中外医事新報』(569)     |
| 115 | 神経病学總論                                  | 雑誌 | 日本神経学会 編                   | 日本神経学会    | 1903 | 明治36 | 12 | 『神経学年報』2(5 (附録))  |
| 116 | 家畜病理通論                                  | 図書 | 生駒藤太郎                      | 有隣堂       | 1903 | 明治36 |    |                   |
| 117 | 独逸伯林医科大学治療新書                            | 図書 | クロネル 等編[他]                 | 金原医籍      | 1903 | 明治36 |    |                   |
| 118 | 病理通論                                    | 図書 | 昆海母[他]                     | 山田良叔      | 1903 | 明治36 |    | 巻下                |
| 119 | 神経病学                                    | 雑誌 | 日本神経学会事務所 編                | 日本神経学会事務所 | 1904 | 明治37 | 2  | 『神経学雑誌』2(6)       |

| 番   | タイトル                                              | 分類 | 著・編〔等〕                               | 出版          | 発行年月 |      |    | 備考<br>(掲載誌・巻・号等)    |
|-----|---------------------------------------------------|----|--------------------------------------|-------------|------|------|----|---------------------|
|     |                                                   |    |                                      |             | 西暦   | 和暦   | 月  |                     |
| 120 | 伯林精神及神経病學會                                        | 雑誌 | 日本神経学会事務所 編                          | 日本神経学会事務所   | 1904 | 明治37 | 6  | 『神経学雑誌』3(3)         |
| 121 | 神経病ノ電気療法                                          | 雑誌 | ウインケル                                | 日本医史学会      | 1904 | 明治37 | 7  | 『中外医事新報』(584)       |
| 122 | 維也納精神病及神経病學會, 伯林精神病及神経病學會                         | 雑誌 | ベツル;ユリウス;ツァッペルト、ヘンネベルグ;ザイヘル;ウエストハイメル | 日本神経学会事務所   | 1904 | 明治37 | 9  | 『神経学雑誌』3(6)         |
| 123 | 伯林精神病及神経病學會                                       | 雑誌 | 日本神経学会事務所 編                          | 日本神経学会事務所   | 1904 | 明治37 | 10 | 『神経学雑誌』3(7)         |
| 124 | 神経病學總論                                            | 雑誌 | 日本神経学会事務所 編                          | 日本神経学会事務所   | 1904 | 明治37 | 12 | 『神経学雑誌』3(9)         |
| 125 | 内科全書(鳴氏)                                          | 図書 | メーリング 編[他]                           | 南江堂         | 1904 | 明治37 |    | 第5巻 末梢神経編           |
| 126 | 新撰電気療法                                            | 図書 | 舟岡英之助[他]                             | 蒼虬堂[ほか]     | 1904 | 明治37 |    |                     |
| 127 | 医術開業試験問題答案集. 後期 内科学之部                             | 図書 | 松尾繁 編[他]                             | 朝陽堂         | 1904 | 明治37 |    |                     |
| 128 | 電気療法                                              | 図書 | 富士川游                                 | 吐鳳堂         | 1904 | 明治37 |    |                     |
| 129 | 催眠術治療自在                                           | 図書 | 竹内楠三                                 | 大学館         | 1904 | 明治37 |    |                     |
| 130 | クロバトキン神経病                                         | 雑誌 | 珍聞館 編                                | 珍聞館         | 1905 | 明治38 | 2  | 『團團珍聞』(1524)        |
| 131 | 神経病者ト室外安静療法                                       | 雑誌 | 兵庫縣醫會事務所 編                           | 兵庫縣醫會事務所    | 1905 | 明治38 | 2  | 『兵庫縣醫會雑誌』(105)      |
| 132 | 伯林精神病及神経病學會                                       | 雑誌 | 日本神経学会事務所 編                          | 日本神経学会事務所   | 1905 | 明治38 | 3  | 『神経学雑誌』3(12)        |
| 133 | 精神及神経病者ノ酸素療法ニ就テ                                   | 雑誌 | アルト                                  | 医学中央雑誌刊行会   | 1905 | 明治38 | 3  | 『醫學中央雑誌』(25)        |
| 134 | 神経病治療法                                            | 雑誌 | 千葉医学専門学校校友会                          | 千葉医学専門学校校友会 | 1905 | 明治38 | 5  | 『千葉医学専門学校校友会雑誌』(32) |
| 135 | 水雷爆發ニ因スル外傷性神経病ノ一例                                 | 雑誌 | 雨宮量七郎                                | 日本神経学会事務所   | 1905 | 明治38 | 7  | 『神経学雑誌』4(4)         |
| 136 | 原著 振子知覺計ヲ用イテ神経病患者ニ施行シタル知覺検査ノ報告                    | 雑誌 | 榑保三郎                                 | 日本神経学会事務所   | 1905 | 明治38 | 9  | 『神経学雑誌』4(6)         |
| 137 | 學校及神経病                                            | 雑誌 | 井イルデルムート                             | 日本医史学会      | 1905 | 明治38 | 9  | 『中外医事新報』(611)       |
| 138 | 健康ナル者及一ノノ神経病及精神病者ニ於ケル疲労ノ形式, 外傷性神経病ニ於ケル眼症状         | 雑誌 | ブロイクニク、シャルベッキー                       | 日本神経学会事務所   | 1905 | 明治38 | 10 | 『神経学雑誌』4(7)         |
| 139 | 眼科神経病學備考                                          | 雑誌 | 日本眼科学会 編[他]                          | 日本眼科学会      | 1905 | 明治38 | 10 | 『日本眼科学会雑誌』9(10)     |
| 140 | 電話と神経病                                            | 雑誌 | 岡田和一郎                                | 衛生新報社       | 1905 | 明治38 | 10 | 『衛生新報』(22)          |
| 141 | 伯林精神病神経病學會 / , 西南獨逸神経病精神病學會 / , 西南獨逸神経病及精神病醫集談會 / | 雑誌 | 日本神経学会事務所 編                          | 日本神経学会事務所   | 1905 | 明治38 | 11 | 『神経学雑誌』4(8)         |
| 142 | 神経病學總論                                            | 雑誌 | 日本神経学会事務所 編                          | 日本神経学会事務所   | 1905 | 明治38 | 12 | 『神経学雑誌』4(9)         |
| 143 | 内科類症鑑別                                            | 図書 | 寺尾国平 編[他]                            | 南江堂         | 1905 | 明治38 |    |                     |
| 144 | 新撰家事問答                                            | 図書 | 近藤正一 編                               | 博文館         | 1905 | 明治38 |    |                     |
| 145 | 井上内科新書                                            | 図書 | 井上善次郎                                | 吐鳳堂         | 1905 | 明治38 |    | 第3巻 神経病篇            |
| 146 | 神経病患者ニ於ケル振子觸覺計測定                                  | 雑誌 | 榑保三郎                                 | 日本医史学会      | 1906 | 明治39 | 3  | 『中外医事新報』(624)       |
| 147 | 維也納精神病及神経病學會                                      | 雑誌 | 日本神経学会事務所 編                          | 日本神経学会事務所   | 1906 | 明治39 | 3  | 『神経学雑誌』4(12)        |
| 148 | 維納精神病及神経病學會                                       | 雑誌 | 日本神経学会事務所 編                          | 日本神経学会事務所   | 1906 | 明治39 | 6  | 『神経学雑誌』5(3)         |
| 149 | 精神病及ビ神経病患者ニ於ケルあせとん尿ノ意義                            | 雑誌 | ホツペー                                 | 日本神経学会事務所   | 1906 | 明治39 | 7  | 『神経学雑誌』5(4)         |

| 番   | タイトル                         | 分類 | 著・編〔等〕                  | 出版        | 発行年月 |      |    | 備考<br>(掲載誌・巻・号等) |
|-----|------------------------------|----|-------------------------|-----------|------|------|----|------------------|
|     |                              |    |                         |           | 西暦   | 和暦   | 月  |                  |
| 150 | 神経病学 外傷後ノ進行性筋麻痺              | 雑誌 | ホッフマン                   | 日本神経学会事務所 | 1906 | 明治39 | 8  | 『神経学雑誌』5(5)      |
| 151 | 神経纖維説及び其臨牀的神経病理學ト精神病學トニ於ケル意義 | 雑誌 | ハルトマン                   | 日本神経学会事務所 | 1906 | 明治39 | 9  | 『神経学雑誌』5(6)      |
| 152 | 産褥神経病ニ就テ                     | 雑誌 | ミュンツェル                  | 日本神経学会事務所 | 1906 | 明治39 | 11 | 『神経学雑誌』5(8)      |
| 153 | 鳴氏内科全書                       | 図書 | メーリング 編                 | 南江堂       | 1906 | 明治39 |    |                  |
| 154 | 神経病診断及治療学                    | 図書 | 石川貞吉 編著                 | 南江堂       | 1906 | 明治39 |    |                  |
| 155 | 神経病診断及治療学                    | 図書 | 石川貞吉                    | 南江堂       | 1906 | 明治39 |    |                  |
| 156 | 実用小児病学                       | 図書 | 平出謙吉 編                  | 半田屋医籍     | 1906 | 明治39 |    |                  |
| 157 | 按摩術全書                        | 図書 | 奈良徳太郎[他]                | 南江堂       | 1906 | 明治39 |    |                  |
| 158 | 医家宝典                         | 図書 | 梅原信正                    | 集古堂       | 1906 | 明治39 |    |                  |
| 159 | 井上内科新書                       | 図書 | 井上善次郎著                  | 吐鳳堂       | 1906 | 明治39 |    | 第3巻 神経病篇         |
| 160 | 研究 ○學齡兒童の神経病に就きて             | 雑誌 | 高田他家雄                   | 日本児童学会    | 1907 | 明治40 | 1  | 『児童研究』10(1)      |
| 161 | 抄録 神経病学 ひすてりー熱ニ就テ            | 雑誌 | ゲー・フォン・ヴォツス             | 日本神経学会事務所 | 1907 | 明治40 | 1  | 『神経学雑誌』5(10)     |
| 162 | 神経病学總論                       | 雑誌 | 日本神経学会事務所 編             | 日本神経学会事務所 | 1907 | 明治40 | 2  | 『神経学雑誌』5(11)     |
| 163 | 研究 ○學齡兒童の神経病に就きて(承前)         | 雑誌 | 高田他家雄                   | 日本児童学会    | 1907 | 明治40 | 2  | 『児童研究』10(2)      |
| 164 | 神経病学 原因不明ナルジャックソン氏癲癇ノ誤診例及腦腫瘍 | 雑誌 | ヘンネベルグ                  | 日本神経学会事務所 | 1907 | 明治40 | 3  | 『神経学雑誌』6(1)      |
| 165 | お株さんの神経病                     | 雑誌 | 東京バック社 編                | 東京バック社    | 1907 | 明治40 | 5  | 『東京バック』3(12)     |
| 166 | 神経病の治療法——(神経衰弱症)             | 雑誌 | 婦人雑誌社 編                 | 婦人雑誌社     | 1907 | 明治40 | 5  | 『婦人雑誌』22(5)      |
| 167 | 萬國精神及神経病学會                   | 雑誌 | 醫海時報社 編                 | 醫海時報社     | 1907 | 明治40 | 6  | 『醫海時報』(680)      |
| 168 | 神経病患者診察法及一般神経病斷法             | 雑誌 | ベー、シュステル                | 医事新聞社     | 1907 | 明治40 | 6  | 『医事新聞』(736)      |
| 169 | 神経病患者診察法及一般神経病斷法             | 雑誌 | ベー、シュステル                | 医事新聞社     | 1907 | 明治40 | 7  | 『医事新聞』(738)      |
| 170 | 精神病性神経病ノ精神療法綱概               | 雑誌 | チークホック [述];森田正馬 [訳]     | 医学書院      | 1907 | 明治40 | 7  | 『臨床彙講』3(1)(13)   |
| 171 | 神経病者ノ作業的療法                   | 雑誌 | 日本医史学会 編                | 日本医史学会    | 1907 | 明治40 | 8  | 『中外医事新報』(658)    |
| 172 | 神経病患者診察法及一般神経病斷法             | 雑誌 | ベー、シュステル                | 医事新聞社     | 1907 | 明治40 | 8  | 『医事新聞』(740)      |
| 173 | 神経病患者診察法及一般神経病斷法             | 雑誌 | ベー、シュステル                | 医事新聞社     | 1907 | 明治40 | 9  | 『医事新聞』(742)      |
| 174 | 神経病診斷學ニ於ケル進歩                 | 雑誌 | エル・ウーエー・ウーベル [述];石川貞吉 訳 | 日本医史学会    | 1907 | 明治40 | 10 | 『中外医事新報』(662)    |
| 175 | ドレスデンニ於ケル獨逸神経病醫會第一回年會        | 雑誌 | 日本神経学会事務所 編             | 日本神経学会事務所 | 1907 | 明治40 | 11 | 『神経学雑誌』6(8)      |
| 176 | 神経病診斷學ニ於ケル進歩(承前)             | 雑誌 | ウーエーベル [講];石川貞吉 [訳]     | 日本医史学会    | 1907 | 明治40 | 11 | 『中外医事新報』(663)    |
| 177 | 内科類症鑑別                       | 図書 | 寺尾国平 編[他]               | 南江堂       | 1907 | 明治40 |    |                  |
| 178 | 催眠術治療法 一名・催眠術自宅療法            | 図書 | 古屋鉄石                    | 大日本催眠術協會  | 1907 | 明治40 |    |                  |
| 179 | 神経病診斷法ノ進歩                    | 雑誌 | ウーエーバー [講];眞嶋隆輔 [訳]     | 医学書院      | 1908 | 明治41 | 1  | 『臨床彙講』4(19)      |

| 番   | タイトル                                     | 分類 | 著・編 [ 等 ]                | 出版         | 発行年月 |      |    | 備考<br>(掲載誌・巻・号等) |
|-----|------------------------------------------|----|--------------------------|------------|------|------|----|------------------|
|     |                                          |    |                          |            | 西暦   | 和暦   | 月  |                  |
| 180 | 神経病ノ豫後                                   | 雑誌 | オツペンハイム                  | 日本医史学会     | 1908 | 明治41 | 2  | 『中外医事新報』(670)    |
| 181 | 神経病診断法ノ進歩                                | 雑誌 | ウエーベル [講];<br>眞島隆輔 [訳]   | 医学書院       | 1908 | 明治41 | 2  | 『臨床彙講』(20)       |
| 182 | 神経病患者ノ高山療法ノ適應                            | 雑誌 | ノルダ                      | 日本神経学会事務所  | 1908 | 明治41 | 2  | 『神経学雑誌』6(11)     |
| 183 | 神経病診断法ノ進歩(承前)                            | 雑誌 | ウエーベル [講];<br>眞島隆輔 [訳]   | 医学書院       | 1908 | 明治41 | 3  | 『臨床彙講』(21)       |
| 184 | 神経病学總論                                   | 雑誌 | 日本神経学会事務所 編              | 日本神経学会事務所  | 1908 | 明治41 | 3  | 『神経学雑誌』6(12)     |
| 185 | 外國學會 アムステルダムニ開催ノ精神神経病<br>學心理學精神病者看護法萬國大會 | 雑誌 | 日本神経学会事務所 編              | 日本神経学会事務所  | 1908 | 明治41 | 4  | 『神経学雑誌』7(1)      |
| 186 | 神経病ト胃病ノ關係                                | 雑誌 | 土田卯三郎                    | 日本消化機病学会雑誌 | 1908 | 明治41 | 5  | 『日本消化機病学会雑誌』7(1) |
| 187 | 神経病診断法ノ進歩(承前)                            | 雑誌 | ウエーベル [講];<br>眞島隆輔 [訳]   | 医学書院       | 1908 | 明治41 | 6  | 『臨床彙講』(24)       |
| 188 | 神経病ニ應用ス可キ睡眠劑                             | 雑誌 | ST生                      | 医事新聞社      | 1908 | 明治41 | 8  | 『医事新聞』(763)      |
| 189 | 藥品 神経病ニ應用スベキ化學的催眠藥                       | 雑誌 | チーヘン                     | 日本医史学会     | 1908 | 明治41 | 8  | 『中外医事新報』(682)    |
| 190 | 第十三回中央獨逸精神病及神経病學會                        | 雑誌 | 日本神経学会事務所 編              | 日本神経学会事務所  | 1908 | 明治41 | 8  | 『神経学雑誌』7(5)      |
| 191 | 神経病学ニ於ケル活動寫眞                             | 雑誌 | ライヘル                     | 日本神経学会事務所  | 1908 | 明治41 | 9  | 『神経学雑誌』7(6)      |
| 192 | 藥品 神経病ニ應用スベキ化學的催眠藥                       | 雑誌 | チーヘン                     | 日本医史学会     | 1908 | 明治41 | 9  | 『中外医事新報』(683)    |
| 193 | 近時の催眠藥に就て神経病学上の知見                        | 雑誌 | チーヘン                     | 三共         | 1908 | 明治41 | 10 | 『治療薬報』(40)       |
| 194 | 伯林精神病及神経病學會                              | 雑誌 | 日本神経学会事務所 編              | 日本神経学会事務所  | 1908 | 明治41 | 10 | 『神経学雑誌』7(7)      |
| 195 | 精神性神経病ト多發性硬化症トノ類症鑑別                      | 雑誌 | ヘルレル [述];<br>氏家信 [訳]     | 日本神経学会事務所  | 1908 | 明治41 | 11 | 『神経学雑誌』7(8)      |
| 196 | 神経病学總論                                   | 雑誌 | 日本神経学会事務所 編              | 日本神経学会事務所  | 1908 | 明治41 | 12 | 『神経学雑誌』7(9)      |
| 197 | 種々ナル神経病及精神病ニ於ケル小兒皮質<br>ノ組織學的變化ニツキテ       | 雑誌 | 高洲謙一郎                    | 日本医史学会     | 1908 | 明治41 | 12 | 『中外医事新報』(689)    |
| 198 | 家庭治療法 素人調劑                               | 図書 | 薬学研究会 編                  | 生々社出版部     | 1908 | 明治41 |    |                  |
| 199 | 腦力養成法                                    | 図書 | 漆山又四郎                    | 東亜堂        | 1908 | 明治41 |    |                  |
| 200 | 理学的療法 簡明示要                               | 図書 | ブックスバウム[他]               | 南江堂        | 1908 | 明治41 |    |                  |
| 201 | 新式簡明催眠術教科書                               | 図書 | 大日本催眠術協會 編               | 大日本催眠術協會   | 1908 | 明治41 |    | 上巻               |
| 202 | 実用小兒病学                                   | 図書 | 平出謙吉 編                   | 半田屋医籍      | 1908 | 明治41 |    |                  |
| 203 | 峨山禪師言行録                                  | 図書 | 日種讓山 編                   | 宝文館        | 1908 | 明治41 |    |                  |
| 204 | 一休和尚                                     | 図書 | 竹庵道人                     | 井上一書堂      | 1908 | 明治41 |    |                  |
| 205 | 井上小内科書                                   | 図書 | 井上善次郎                    | 吐鳳堂        | 1908 | 明治41 |    |                  |
| 206 | 最近実験養鶏法                                  | 図書 | 横山春平                     | 博文館        | 1908 | 明治41 |    |                  |
| 207 | 催眠術治療法 一名・催眠術自宅療法                        | 図書 | 古屋鉄石                     | 大日本催眠術協會   | 1908 | 明治41 |    |                  |
| 208 | 神経病臨牀圖譜                                  | 雑誌 | シェーボルン;<br>クリーゲル         | 日本神経学会事務所  | 1909 | 明治42 | 1  | 『神経学雑誌』7(10)     |
| 209 | 神経病学 内臓疾患ニ於ケル感覺                          | 雑誌 | ブルームフィールド [述];<br>齋藤玉男 訳 | 日本神経学会事務所  | 1909 | 明治42 | 2  | 『神経学雑誌』7(11)     |

| 番   | タイトル                              | 分類 | 著・編〔等〕                     | 出版        | 発行年月 |      |    | 備考<br>(掲載誌・巻・号等) |
|-----|-----------------------------------|----|----------------------------|-----------|------|------|----|------------------|
|     |                                   |    |                            |           | 西暦   | 和暦   | 月  |                  |
| 210 | 結核ト精神病竝ト神経病                       | 雑誌 | コロシコー                      | 日本神経学会事務所 | 1909 | 明治42 | 3  | 『神経学雑誌』7(12)     |
| 211 | 血族結婚ト神経病                          | 雑誌 | アブラハム                      | 日本神経学会事務所 | 1909 | 明治42 | 4  | 『神経学雑誌』8(1)      |
| 212 | 外傷性神経病ノ他覺的初期症状トシテノ白色皮膚紋畫症         | 雑誌 | ヤロセウスキー                    | 日本神経学会事務所 | 1909 | 明治42 | 5  | 『神経学雑誌』8(2)      |
| 213 | 外傷性神経病ノ他覺的症狀知見補遺精神病學              | 雑誌 | ヤンスキー [述];<br>池田隆徳 [訳]     | 日本神経学会事務所 | 1909 | 明治42 | 6  | 『神経学雑誌』8(3)      |
| 214 | 頸部肋骨ト神経病性體質トノ關係                   | 雑誌 | グードハート                     | 日本神経学会事務所 | 1909 | 明治42 | 7  | 『神経学雑誌』8(4)      |
| 215 | 虚弱性變質ト耳症候トニ關聯セル結核性神経病             | 雑誌 | ロツリモー                      | 日本神経学会事務所 | 1909 | 明治42 | 8  | 『神経学雑誌』8(5)      |
| 216 | 伯林精神病及神經病學會                       | 雑誌 | 日本神経学会事務所 編                | 日本神経学会事務所 | 1909 | 明治42 | 9  | 『神経学雑誌』8(6)      |
| 217 | 外國學會 維也納精神病及神經病學會                 | 雑誌 | 日本神経学会事務所 編                | 日本神経学会事務所 | 1909 | 明治42 | 10 | 『神経学雑誌』8(7)      |
| 218 | 伯林精神病及神經病學會                       | 雑誌 | 日本神経学会事務所 編                | 日本神経学会事務所 | 1909 | 明治42 | 11 | 『神経学雑誌』8(8)      |
| 219 | 神經病學總論                            | 雑誌 | 日本神経学会事務所 編                | 日本神経学会事務所 | 1909 | 明治42 | 12 | 『神経学雑誌』8(9)      |
| 220 | 近世眼科學                             | 図書 | 小川劍三郎                      | 吐鳳堂       | 1909 | 明治42 |    | 第3卷              |
| 221 | 金沢医学専門学校目録. 和漢書, 洋書編              | 図書 | 金沢医学専門学校 編                 | 金沢医学専門学校  | 1909 | 明治42 |    |                  |
| 222 | 普通看病学                             | 図書 | 佐伯理一郎                      | 吐鳳堂       | 1909 | 明治42 |    |                  |
| 223 | 不思議の研究 一名・精神鍛鍊術                   | 図書 | 古屋鉄石                       | 博士書院      | 1909 | 明治42 |    |                  |
| 224 | 新撰臨牀病理學                           | 図書 | 田中祐吉                       | 吐鳳堂       | 1909 | 明治42 |    | 下卷               |
| 225 | 井上内科新書                            | 図書 | 井上善次郎                      | 吐鳳堂       | 1909 | 明治42 |    | 第3卷 神経病篇         |
| 226 | 精神病鑒定例                            | 図書 | 呉秀三                        | 吐鳳堂       | 1909 | 明治42 |    | 第2集              |
| 227 | 通俗家庭之療治                           | 図書 | 中野道成 編                     | 日本医事協会    | 1909 | 明治42 |    |                  |
| 228 | 伯林精神病及神經病學會, 第十八回佛國及佛語國精神病竝ニ神經病學會 | 雑誌 | 日本神経学会事務所 編                | 日本神経学会事務所 | 1910 | 明治43 | 1  | 『神経学雑誌』8(11)     |
| 229 | 伯林精神病及神經病學會                       | 雑誌 | 日本神経学会事務所 編                | 日本神経学会事務所 | 1910 | 明治43 | 3  | 『神経学雑誌』8(13)     |
| 230 | 少年ノ神経病者及精神病者ノ教育治療                 | 雑誌 | 土池田隆徳                      | 日本神経学会事務所 | 1910 | 明治43 | 4  | 『神経学雑誌』9(1)      |
| 231 | 神經病學教科書                           | 雑誌 | クルシュマン                     | 日本神経学会事務所 | 1910 | 明治43 | 5  | 『神経学雑誌』9(2)      |
| 232 | 健康者及神經病患者ノ皮膚溫度ノ測定ニ就テ              | 雑誌 | クラウス; ガンテル [述];<br>伊藤暁 [訳] | 日本神経学会事務所 | 1910 | 明治43 | 6  | 『神経学雑誌』9(3)      |
| 233 | 子宮及ビ其附屬機ノ疾病ト官能性神経病トノ關係            | 雑誌 | 緒方十右衛門                     | 日本医史学会    | 1910 | 明治43 | 7  | 『中外医事新報』(727)    |
| 234 | 神経病及精神病診斷必携                       | 雑誌 | チンバル                       | 日本神経学会事務所 | 1910 | 明治43 | 8  | 『神経学雑誌』9(5)      |
| 235 | 伯林精神病及ビ神經病學會                      | 雑誌 | 日本神経学会事務所 編                | 日本神経学会事務所 | 1910 | 明治43 | 9  | 『神経学雑誌』9(6)      |
| 236 | 精神、神経病科                           | 雑誌 | 医事新聞社 編                    | 医事新聞社     | 1910 | 明治43 | 9  | 『医事新聞』(813)      |
| 237 | 官能的神経病                            | 雑誌 | 日本神経学会事務所 編                | 日本神経学会事務所 | 1910 | 明治43 | 12 | 『神経学雑誌』9(9)      |
| 238 | 家畜治療宝典                            | 図書 | 渡辺閑一郎 編                    | 有隣堂       | 1910 | 明治43 |    |                  |
| 239 | 健腦法                               | 図書 | 児玉修治                       | 内外出版協会    | 1910 | 明治43 |    |                  |

| 番   | タイトル                                         | 分類 | 著・編 [ 等 ]            | 出版            | 発行年月 |      |    | 備考<br>(掲載誌・巻・号等) |
|-----|----------------------------------------------|----|----------------------|---------------|------|------|----|------------------|
|     |                                              |    |                      |               | 西暦   | 和暦   | 月  |                  |
| 240 | 内科類症鑑別                                       | 図書 | 寺尾国平 編[他]            | 南江堂           | 1910 | 明治43 |    |                  |
| 241 | 靈妙感応術奥義                                      | 図書 | 佐々木高明                | 春江堂           | 1910 | 明治43 |    |                  |
| 242 | 癩麻質斯及其療法                                     | 図書 | 長谷川与一郎 編             | 南江堂           | 1910 | 明治43 |    |                  |
| 243 | 病人之慰藉                                        | 図書 | 田村化三郎 [述][他]         | 読売新聞日就社       | 1910 | 明治43 |    |                  |
| 244 | 新撰臨床病理学                                      | 図書 | 田中祐吉                 | 吐鳳堂           | 1910 | 明治43 |    | 下                |
| 245 | 新纂歯科学講義 口腔外科学                                | 図書 | 東京歯科医学専門学校出版部 編      | 東京歯科医学専門学校出版部 | 1910 | 明治43 |    |                  |
| 246 | 井上内科新書                                       | 図書 | 井上善次郎著               | 吐鳳堂           | 1910 | 明治43 |    |                  |
| 247 | 神経病學會と兒童研究會                                  | 雑誌 | 醫海時報社 編              | 醫海時報社         | 1911 | 明治44 | 2  | 『醫海時報』(897)      |
| 248 | 第十五回中央獨逸精神病及神経病學會                            | 雑誌 | 日本神経学会事務所 編          | 日本神経学会事務所     | 1911 | 明治44 | 2  | 『神経学雑誌』9(12)     |
| 249 | 社會醫學上ヨリ觀タル外傷性官能的神経病ニ就テ                       | 雑誌 | 石川貞吉                 | 鉄道院           | 1911 | 明治44 | 4  | 『保健彙報』(3)        |
| 250 | 外國學會 獨逸神経病醫家會第三回總會                           | 雑誌 | 日本神経学会事務所 編          | 日本神経学会事務所     | 1911 | 明治44 | 4  | 『神経学雑誌』10(1)     |
| 251 | 神経病及精神病患者ニ於ケル臨牀的記憶測定法並ニ其價值。記憶測定法ノ診斷的及豫後診斷的價值 | 雑誌 | ランシュベルグ              | 日本神経学会事務所     | 1911 | 明治44 | 6  | 『神経学雑誌』10(3)     |
| 252 | 神経病診斷學                                       | 雑誌 | 鹽谷不二雄 [訳]            | 臨床医学社         | 1911 | 明治44 | 7  | 『最近之臨床医学』(2)     |
| 253 | 第三十五回西南獨逸神経病醫家及精神病醫家巡回學會                     | 雑誌 | 日本神経学会事務所 編          | 日本神経学会事務所     | 1911 | 明治44 | 8  | 『神経学雑誌』10(5/6)   |
| 254 | 神経病診斷學                                       | 雑誌 | 鹽谷不二雄 [訳]            | 臨床医学社         | 1911 | 明治44 | 9  | 『最近之臨床医学』(4)     |
| 255 | 職業撰擇神経病, 小兒ノ營養性神経病                           | 雑誌 | ステケル,<br>ホーホジングル     | 日本神経学会事務所     | 1911 | 明治44 | 9  | 『神経学雑誌』10(7)     |
| 256 | 機質的神経病ノ鑑別診斷ニ用ヒラル、『四反應』ノ現況                    | 雑誌 | ノン子                  | 日本神経学会事務所     | 1911 | 明治44 | 10 | 『神経学雑誌』10(8/9)   |
| 257 | 神経病診斷學ニ就テ                                    | 雑誌 | 鹽谷不二雄                | 臨床医学社         | 1911 | 明治44 | 10 | 『最近之臨床医学』(5)     |
| 258 | 神経病ニ來ル温調節障礙, 電撃後ノ神経病ニ就テ                      | 雑誌 | ピアハ・パウエル,<br>クラウゼ・カー | 日本神経学会事務所     | 1911 | 明治44 | 11 | 『神経学雑誌』10(10)    |
| 259 | 神経病学                                         | 雑誌 | 日本神経学会事務所 編          | 日本神経学会事務所     | 1911 | 明治44 | 12 | 『神経学雑誌』10(11/12) |
| 260 | 近世外科総論                                       | 図書 | エーリヒ・レキセル[他]         | 南江堂           | 1911 | 明治44 |    | 中巻               |
| 261 | 男女の衛生 実験治療                                   | 図書 | 梶山杏丘 編               | 岡村書店          | 1911 | 明治44 |    |                  |
| 262 | 神経病臨床講義                                      | 図書 | シャルコー (沙祿可) [述][他]   | 東京医事新誌局       | 1911 | 明治44 |    | 前編上              |
| 263 | 神経病臨床講義                                      | 図書 | シャルコー (沙祿可) [述][他]   | 東京医事新誌局       | 1911 | 明治44 |    | 前編下              |
| 264 | 神経病臨床講義                                      | 図書 | シャルコー (沙祿可) [述][他]   | 東京医事新誌局       | 1911 | 明治44 |    | 後編               |
| 265 | 実用家禽新書                                       | 図書 | 藤本義衛                 | 日本種苗出版部       | 1911 | 明治44 |    |                  |
| 266 | 日本医学会誌                                       | 図書 | 日本医学会 編              | 日本医学会         | 1911 | 明治44 |    | 第3回              |
| 267 | 井上内科新書                                       | 図書 | 井上善次郎                | 吐鳳堂           | 1911 | 明治44 |    | 第3巻              |
| 268 | 諸病自宅療法                                       | 図書 | 長命堂薬房 編              | 桧尾長命堂         | 1911 | 明治44 |    |                  |
| 269 | 學校家庭參考實用資料                                   | 図書 | 永松豊山                 | 東枝吉兵衛         | 1911 | 明治44 |    |                  |

| 番   | タイトル               | 分類 | 著・編〔等〕          | 出版          | 発行年月 |      |   | 備考<br>(掲載誌・巻・号等) |
|-----|--------------------|----|-----------------|-------------|------|------|---|------------------|
|     |                    |    |                 |             | 西暦   | 和暦   | 月 |                  |
| 270 | 獨逸ニ於ケル神經病者ノ増加ニ就テ   | 雑誌 | 鉄道院 編           | 鉄道院         | 1912 | 明治45 | 1 | 『保健彙報』(6)        |
| 271 | 巴理神經病學會            | 雑誌 | 日本神経学会事務所 編     | 日本神経学会事務所   | 1912 | 明治45 | 1 | 『神経学雑誌』11(1)     |
| 272 | 二三ノ神經病ノ原因トシテノ體質ノ價値 | 雑誌 | マルグリエス          | 日本神経学会事務所   | 1912 | 明治45 | 2 | 『神経学雑誌』11(2)     |
| 273 | 電信交換手ノ災害神經病ノ豫後ト治療  | 雑誌 | バイエル            | 日本神経学会事務所   | 1912 | 明治45 | 3 | 『神経学雑誌』11(3)     |
| 274 | 神經病自宅療法            | 雑誌 | ベルグマン           | 日本神経学会事務所   | 1912 | 明治45 | 4 | 『神経学雑誌』11(4)     |
| 275 | 先天性神經病及精神病ノ遺傳      | 雑誌 | 福田 美明           | 金澤醫學専門學校十全會 | 1912 | 明治45 | 5 | 『十全會雜誌』17(5)     |
| 276 | 神經病性體質者の職業の選定に就て   | 雑誌 | 石川貞吉            | 日本医師協会事務所   | 1912 | 明治45 | 6 | 『刀圭新報』3(10)      |
| 277 | 外傷性神經病ノ鑑定及處置       | 雑誌 | エルベン            | 日本神経学会事務所   | 1912 | 明治45 | 6 | 『神経学雑誌』11(7)     |
| 278 | 看病と養生              | 図書 | 伊藤尚賢            | 伊藤尚賢著 博文館   | 1912 | 明治45 |   |                  |
| 279 | 近世眼科学              | 図書 | 小川劍三郎           | 吐鳳堂         | 1912 | 明治45 |   | 第3巻              |
| 280 | 内科全書(愛氏)           | 図書 | ヘルマン・アイヒホルスト[他] | 朝香屋         | 1912 | 明治45 |   | 第11              |
| 281 | 内科全書(愛氏)           | 図書 | ヘルマン・アイヒホルスト[他] | 朝香屋         | 1912 | 明治45 |   | 第12              |
| 282 | 臨床病理学              | 図書 | 田中祐吉            | 吐鳳堂         | 1912 | 明治45 |   | 下巻               |
| 283 | 神経病学枢機             | 図書 | 荒木蒼太郎           | 吐鳳堂         | 1912 | 明治45 |   | 上                |
| 284 | 神経病学枢機             | 図書 | 荒木蒼太郎           | 吐鳳堂         | 1912 | 明治45 |   | 下                |
| 285 | 神経衰弱及其療法           | 図書 | 石川貞吉            | 南山堂         | 1912 | 明治45 |   |                  |
| 286 | 最近之臨牀講義集           | 図書 | 臨牀医学社 編         | 宮沢書店        | 1912 | 明治45 |   |                  |
| 287 | 通俗神経衰弱予防と其療法       | 図書 | 鴨田脩治            | 日本薬学協会      | 1912 | 明治45 |   |                  |

4. 明治期における神経病「記事」【目録】(種別順-発行日順)

| 番  | 社名 | タイトル                                                      | 発行日  |      |    |    | 種別 | 社/刊種  | 面 |
|----|----|-----------------------------------------------------------|------|------|----|----|----|-------|---|
|    |    |                                                           | 西暦   | 和暦   | 月  | 日  |    |       |   |
| 1  | 読売 | [投書] 1月24日付投書の神経病に触れ、実話あれこれ=秩父弁の狂歌つき                      | 1875 | 明治08 | 2  | 5  | 記事 | 朝刊    | 2 |
| 2  | 読売 | [投書] 獣が人に化けることはない 健全な精神こそ分別の心をつけられる                       | 1875 | 明治08 | 3  | 3  | 記事 | 朝刊    | 2 |
| 3  | 読売 | 債務者の死に自責のてんぷら屋 病床で幽霊の夢に毎夜うなされる/東京・浅草                      | 1875 | 明治08 | 5  | 24 | 記事 | 朝刊    | 1 |
| 4  | 読売 | [投書] 引越しの方で迷い身投げ騒ぎ 理を説かれ神経病が治癒/埼玉県越谷                      | 1875 | 明治08 | 8  | 5  | 記事 | 朝刊    | 2 |
| 5  | 読売 | [投書] 爪を火に入れて気が狂うと心配する神経病の人に、医者もやってみせ治す                    | 1875 | 明治08 | 12 | 10 | 記事 | 朝刊    | 2 |
| 6  | 読売 | 毎夜現れる先妻の亡霊 気味悪くなった亭主、後妻を離縁/東京・鉄砲町                         | 1876 | 明治09 | 4  | 26 | 記事 | 朝刊    | 2 |
| 7  | 読売 | 「天狗にいたずらされた小僧」はウソ 実はてんかんと神経病だった/神奈川県                      | 1876 | 明治09 | 7  | 5  | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 8  | 読売 | 加持、祈とうで病を治療して悪化 医者診察も手遅れで死亡/東京・中橋                         | 1876 | 明治09 | 7  | 27 | 記事 | 朝刊    | 2 |
| 9  | 読売 | キツネがついたと、大勢で神経病の女を殴打 巡査の説諭受ける/東京                          | 1876 | 明治09 | 7  | 29 | 記事 | 朝刊    | 1 |
| 10 | 読売 | 幽霊屋敷?を大家が安値で売りに出す 正体が白猫とわかり急に撤回/東京・浅草                     | 1876 | 明治09 | 9  | 13 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 11 | 読売 | [投書] 夢の話=続き フランスの農家の子、気に病む母を機転で救う                         | 1876 | 明治09 | 10 | 20 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 12 | 読売 | [投書] キツネつきには逆らわず、心の落ち着き与えることが大事                           | 1876 | 明治09 | 11 | 18 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 13 | 読売 | 石屋夫婦が神経病の元役人を懸命に看病 ようやく府が引き取る                             | 1877 | 明治10 | 11 | 22 | 記事 | 朝刊    | 2 |
| 14 | 読売 | 病人が絶えない家を売却、買った人々も不幸続き、神経病か/愛知県                           | 1878 | 明治11 | 2  | 15 | 記事 | 朝刊    | 2 |
| 15 | 読売 | 真向かいの鬼瓦が気になり病気を募らせた男、対抗に鍾馭の図を掲げて全快/東京                     | 1878 | 明治11 | 2  | 19 | 記事 | 朝刊    | 4 |
| 16 | 読売 | 神経病の娘を抱え生活苦の老父、がらくた食器類を売って糊口をしのぐ/東京                       | 1878 | 明治11 | 2  | 24 | 記事 | 朝刊    | 2 |
| 17 | 読売 | 非業の死をとげた男女を祭る「三美稲荷」 壊した村民が次々病死/宮崎県                        | 1878 | 明治11 | 5  | 10 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 18 | 読売 | 陸軍軍医監・橋本綱常が湯治先の有馬温泉で変死 神経病が高じ滝から転落=訂正                     | 1878 | 明治11 | 7  | 3  | 記事 | 朝刊    | 2 |
| 19 | 読売 | 元神主の祈とうを受ける神経病の嫁、火の中に倒され大やけど/千葉県                          | 1878 | 明治11 | 9  | 4  | 記事 | 朝刊    | 1 |
| 20 | 読売 | [投書] 医学の専門家が10日付「娼妓の奇病」について所見                             | 1878 | 明治11 | 9  | 20 | 記事 | 朝刊    | 4 |
| 21 | 読売 | 蘇生薬を考案したと称するカナダの青年、公開実験試みてあえなく死ぬ                          | 1879 | 明治12 | 3  | 23 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 22 | 朝日 | 東京寄書○今は昔予が相識れる(神経病を癒す技術 東京浅草 春雨軒 春風道人稿)【大阪】               | 1879 | 明治12 | 4  | 5  | 記事 | 大阪/朝刊 | 4 |
| 23 | 朝日 | ○疑心暗鬼を生ずとは……(母が大事か、妻が大事か 板垣みに悩む米商) <画> 【大阪】 = 17日付朝刊4面に訂正 | 1879 | 明治12 | 4  | 8  | 記事 | 大阪/朝刊 | 3 |
| 24 | 読売 | 宿病人が出刃包丁で腹を刺し、病院へ運ばれる/東京・駒込                               | 1879 | 明治12 | 5  | 13 | 記事 | 朝刊    | 1 |
| 25 | 朝日 | ○神経病より果は人に……(思い違いで他人に大げか) = 13日付朝刊4面に訂正 【大阪】              | 1879 | 明治12 | 7  | 12 | 記事 | 大阪/朝刊 | 4 |
| 26 | 朝日 | ○又或人の報知に拠れ……(寺務改正を発令した覚えなしと法主) 【大阪】                       | 1879 | 明治12 | 7  | 13 | 記事 | 大阪/朝刊 | 4 |
| 27 | 読売 | 病気で隠居中の華族の河辺教長が、病状悪化で位記返上を願ひ出る                            | 1879 | 明治12 | 7  | 16 | 記事 | 朝刊    | 2 |
| 28 | 読売 | [雑譚] 亡妻の夢から仏像を拾った車夫の話 一笑に付してはならぬ/放誕子                      | 1879 | 明治12 | 9  | 24 | 記事 | 朝刊    | 1 |
| 29 | 朝日 | ○四百四種の病の中に……(神経病を苦しめ首つり自殺) 【大阪】                           | 1879 | 明治12 | 9  | 26 | 記事 | 大阪/朝刊 | 1 |
| 30 | 読売 | 病死した女房の霊に毎夜呼び起こされ?衰弱 子供残して建具職人が急死/東京                      | 1880 | 明治13 | 2  | 20 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 31 | 読売 | 寄席「宇田川亭」の隣家で怪談話 煮豆屋も青い火、火の玉に移転/東京=訂正                      | 1880 | 明治13 | 3  | 11 | 記事 | 朝刊    | 2 |
| 32 | 読売 | 邸内の稲荷が繁盛して贅沢の土族 家族6人が突然、裸踊りなどの狂乱/東京                       | 1880 | 明治13 | 3  | 11 | 記事 | 朝刊    | 2 |
| 33 | 朝日 | ○府下東区梅檀木橋今……(歓喜天の訃か神経病に) 【大阪】                             | 1880 | 明治13 | 4  | 10 | 記事 | 大阪/朝刊 | 3 |
| 34 | 読売 | 妻を気絶させ行方不明の乱心男、家出日を命日とした法事中に水死体で漂流/東京                     | 1880 | 明治13 | 4  | 15 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 35 | 朝日 | ○府下東区博労町二丁……(信迎のあまり病を生じる) 【大阪】                            | 1880 | 明治13 | 6  | 20 | 記事 | 大阪/朝刊 | 3 |
| 36 | 読売 | 元貸座敷で女の泣く声など怪現象 女郎が首つり自殺した部屋と評判/東京・千住                     | 1880 | 明治13 | 7  | 3  | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 37 | 朝日 | ○宇都宮英信氏が門戸……(宇都宮英信氏の名前で知事あてに出したはがき、他人のいたずらか) 【大阪】         | 1880 | 明治13 | 8  | 10 | 記事 | 大阪/朝刊 | 2 |
| 38 | 読売 | ヤモリが陰門から体内にと信じ込んだ下女の神経病が、名医の一計で快癒/大阪                      | 1880 | 明治13 | 9  | 11 | 記事 | 朝刊    | 2 |
| 39 | 読売 | 芸者屋のだんな、女房の亡霊に悩まされ、愛人と別れて身代限り/神奈川県川崎                      | 1880 | 明治13 | 11 | 24 | 記事 | 朝刊    | 2 |
| 40 | 読売 | 病馬を買って殺し皮を売る男 妻の異常行動に「ウマの祟り」と近所で陰口/東京                     | 1881 | 明治14 | 1  | 15 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 41 | 朝日 | ○富める時は他人も集……(かつての馴染み客が路頭に迷って助けを求めてきたが) <画> 【大阪】           | 1881 | 明治14 | 3  | 6  | 記事 | 大阪/朝刊 | 3 |
| 42 | 朝日 | ○岡崎猫行灯云々の話前の続き <画> 【大阪】                                   | 1881 | 明治14 | 3  | 29 | 記事 | 大阪/朝刊 | 2 |
| 43 | 読売 | 上京して写真撮影の住職 ぼんやり写る女の顔に自殺者の祟りを恐れ法会                         | 1881 | 明治14 | 4  | 21 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 44 | 朝日 | ○お門違で迷惑の罹つ……(新川良山医師と間違ふことなかれ) 【大阪】                        | 1881 | 明治14 | 6  | 30 | 記事 | 大阪/朝刊 | 3 |
| 45 | 読売 | 神経病の女房の妹、水死体で見つかる/東京・深川                                   | 1881 | 明治14 | 7  | 15 | 記事 | 朝刊    | 2 |
| 46 | 朝日 | ○臆病柔弱の性質より……(モグラの穴にも怯え、発狂の末に自殺) <画> 【大阪】                  | 1881 | 明治14 | 7  | 21 | 記事 | 大阪/朝刊 | 3 |
| 47 | 読売 | 浅草の井生村楼で明12日、国友会の演説会 論題は「神経病の結果」など/東京                     | 1881 | 明治14 | 11 | 11 | 記事 | 朝刊    | 2 |
| 48 | 読売 | 既報の凶賊・矢口新十郎の困い女、もらった衣類を盗まれ精神錯乱/東京・浅草                      | 1881 | 明治14 | 12 | 16 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 49 | 読売 | 大蔵省官員が自宅でノド突き自殺/東京・本所                                     | 1882 | 明治15 | 1  | 4  | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 50 | 読売 | 父親亡くし途方に暮れる姉妹を世話する炭屋、蒸発した実母の出番を拒否/横浜                      | 1882 | 明治15 | 1  | 27 | 記事 | 朝刊    | 2 |
| 51 | 読売 | 神経病の老女が首つり自殺/東京・麹町                                        | 1882 | 明治15 | 4  | 2  | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 52 | 朝日 | ○府下の力士に此者あ……(強力も病に克てず) 【大阪】                               | 1882 | 明治15 | 5  | 4  | 記事 | 大阪/朝刊 | 2 |
| 53 | 朝日 | ○昨日の紙上に端緒を……(力士松の音に入れ揚げ途方にくれる芸妓) 【大阪】                     | 1882 | 明治15 | 5  | 5  | 記事 | 大阪/朝刊 | 2 |
| 54 | 読売 | 蛇の卵を食べたと思ひ込み、錯乱した女の話/東京・赤羽=訂正29日                          | 1882 | 明治15 | 8  | 18 | 記事 | 朝刊    | 2 |
| 55 | 朝日 | ○前号の欄外に取敢へ……(鶏肉店の出刃包丁で割腹自殺) 【大阪】                          | 1883 | 明治16 | 9  | 23 | 記事 | 大阪/朝刊 | 2 |
| 56 | 朝日 | ○独相ビスマーク候は……(黄疸で神経病が次第に重くなる) 【大阪】                         | 1884 | 明治17 | 1  | 9  | 記事 | 大阪/朝刊 | 2 |
| 57 | 朝日 | ○一昨日午前十時六……(線路に飛び出し重傷) 【大阪】                               | 1884 | 明治17 | 4  | 10 | 記事 | 大阪/朝刊 | 1 |
| 58 | 読売 | 刺殺犯・冬朔の重罪公判 妻おぬいが夫の神経病について陳述=続き                           | 1884 | 明治17 | 4  | 13 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 59 | 読売 | 刺殺犯・冬朔の重罪公判 被告の神経病鑑定を別室で実施へ=続き                            | 1884 | 明治17 | 4  | 15 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 60 | 読売 | 同衾は一方の神経組織を書す 西洋人が理学の通法と説く                                | 1884 | 明治17 | 5  | 21 | 記事 | 朝刊    | 2 |

| 番   | 社名 | タイトル                                   | 発行日  |      |    |    | 種別 | 社/刊種  | 面 |
|-----|----|----------------------------------------|------|------|----|----|----|-------|---|
|     |    |                                        | 西暦   | 和暦   | 月  | 日  |    |       |   |
| 61  | 読売 | 沼で大蛇を殺し神経病になった農民、娘を水中に投げ込み殺す/埼玉県       | 1884 | 明治17 | 5  | 27 | 記事 | 朝刊    | 2 |
| 62  | 朝日 | ○是は我子に名残を惜……(怪談將軍塚地蔵の松 白狐の祟りで神経病む)【大阪】 | 1884 | 明治17 | 6  | 19 | 記事 | 大阪/朝刊 | 2 |
| 63  | 読売 | 狂気と天才は紙一重 西洋の名士・豪傑の挙動を外国新聞から紹介         | 1884 | 明治17 | 12 | 2  | 記事 | 朝刊    | 2 |
| 64  | 読売 | 法律学が男が小刀でノド突き自殺 神経病が悪化/東京・浅草           | 1884 | 明治17 | 12 | 24 | 記事 | 朝刊    | 2 |
| 65  | 朝日 | 狐憑病説(訂正/1日二面1段目 4日三面4段目)【大阪】           | 1885 | 明治18 | 2  | 5  | 記事 | 大阪/朝刊 | 1 |
| 66  | 読売 | 神経病が人命を絶つか否かの人体実験の話/明治日報               | 1885 | 明治18 | 8  | 12 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 67  | 読売 | カラス妻の特効 スコットランド産から抽出した成分が、脳病、神経病に効くとか  | 1886 | 明治19 | 4  | 16 | 記事 | 朝刊    | 2 |
| 68  | 読売 | 東京・麻布の髪結い職人がコレラ過敏症で入院                  | 1886 | 明治19 | 8  | 15 | 記事 | 朝刊    | 2 |
| 69  | 朝日 | 十字架の像【大阪】                              | 1887 | 明治20 | 3  | 5  | 記事 | 大阪/朝刊 | 1 |
| 70  | 朝日 | 剪刀にて咽喉を突く【大阪】                          | 1888 | 明治21 | 3  | 2  | 記事 | 大阪/朝刊 | 4 |
| 71  | 朝日 | 住友氏【大阪】                                | 1888 | 明治21 | 4  | 8  | 記事 | 大阪/朝刊 | 1 |
| 72  | 読売 | 義弟の胸に出来たこぶを短刀で切断した男 過失致死罪で罰金刑の後無罪/大審院  | 1888 | 明治21 | 5  | 20 | 記事 | 朝刊    | 2 |
| 73  | 朝日 | 因果物語り                                  | 1889 | 明治22 | 4  | 7  | 記事 | 東京/朝刊 | 4 |
| 74  | 朝日 | 引札の神経病                                 | 1890 | 明治23 | 6  | 22 | 記事 | 東京/朝刊 | 4 |
| 75  | 朝日 | 雑報 取消/                                 | 1890 | 明治23 | 6  | 26 | 記事 | 東京/朝刊 | 1 |
| 76  | 読売 | 殺人罪で懲役5年の英国人船員、病気を理由に10か月で本国へ解放        | 1890 | 明治23 | 7  | 12 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 77  | 読売 | 入り婿が先夫の霊に悩まされ病気に 枕元に刃物を置いて全快/東京        | 1891 | 明治24 | 3  | 31 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 78  | 読売 | 津田三蔵、大阪在住中にも神経病の様子/大津事件                | 1891 | 明治24 | 5  | 18 | 記事 | 朝刊    | 2 |
| 79  | 朝日 | 小よしの神経病                                | 1891 | 明治24 | 6  | 4  | 記事 | 東京/朝刊 | 4 |
| 80  | 朝日 | 官令 内務省訓令第二十一号                          | 1891 | 明治24 | 9  | 4  | 記事 | 東京/朝刊 | 5 |
| 81  | 読売 | 神経病の父親、鎌で息子を切り、自らも槍の穂で刺す 父子とも重体/山口県    | 1892 | 明治25 | 2  | 24 | 記事 | 別刷    | 1 |
| 82  | 朝日 | 大鰻の神経病                                 | 1892 | 明治25 | 3  | 30 | 記事 | 東京/朝刊 | 3 |
| 83  | 読売 | 妹が姉を取り殺した チフスで相次いで死亡した2人に、近所のうわさ/東京    | 1892 | 明治25 | 8  | 31 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 84  | 朝日 | 半可通の死神=9月27日3面に取消                      | 1892 | 明治25 | 9  | 24 | 記事 | 東京/朝刊 | 3 |
| 85  | 朝日 | 法学社会の一大疑問                              | 1892 | 明治25 | 9  | 29 | 記事 | 東京/朝刊 | 1 |
| 86  | 朝日 | 娘の神経病                                  | 1892 | 明治25 | 10 | 22 | 記事 | 東京/朝刊 | 3 |
| 87  | 朝日 | 邪慳の養母神経病を煩らふ                           | 1892 | 明治25 | 12 | 13 | 記事 | 東京/朝刊 | 3 |
| 88  | 朝日 | 邪慳の養母神経病を煩ふ(つづき)                       | 1892 | 明治25 | 12 | 14 | 記事 | 東京/朝刊 | 3 |
| 89  | 読売 | 男泣かせの美人妻が強度の男性恐怖症 実は零落子爵に飽きた? =訂正19日   | 1893 | 明治26 | 2  | 16 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 90  | 朝日 | 華族酒井伯愛妾の自殺                             | 1893 | 明治26 | 6  | 16 | 記事 | 東京/朝刊 | 3 |
| 91  | 朝日 | 幽霊探偵首なき死骸(2)                           | 1893 | 明治26 | 10 | 31 | 記事 | 東京/朝刊 | 3 |
| 92  | 読売 | 1年に同じ恐ろしい夢を10回も見ると/米国・シカゴ              | 1894 | 明治27 | 2  | 2  | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 93  | 読売 | 中村時蔵が化物屋敷に移る 深夜にザーッと怪音、たちまち神経病に…実は/京都  | 1894 | 明治27 | 4  | 12 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 94  | 朝日 | 北村透谷氏逝く                                | 1894 | 明治27 | 5  | 17 | 記事 | 東京/朝刊 | 3 |
| 95  | 読売 | 高知では7人殺し 神経病の医師が実母、義弟家族、自分の長男などを惨殺     | 1895 | 明治28 | 6  | 25 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 96  | 朝日 | 高知県の七人殺し                               | 1895 | 明治28 | 6  | 26 | 記事 | 東京/朝刊 | 3 |
| 97  | 朝日 | 戦時用建築物の発明                              | 1895 | 明治28 | 7  | 20 | 記事 | 東京/朝刊 | 1 |
| 98  | 朝日 | 神経病より旧悪露頭                              | 1895 | 明治28 | 8  | 9  | 記事 | 東京/朝刊 | 3 |
| 99  | 朝日 | お幸の神経病                                 | 1896 | 明治29 | 3  | 14 | 記事 | 東京/朝刊 | 4 |
| 100 | 読売 | 怪談血染めの手拭い 神奈川県下料理屋の便所で毎夜、過去に神経病の死者     | 1896 | 明治29 | 8  | 22 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 101 | 朝日 | 水死者の素性                                 | 1896 | 明治29 | 9  | 30 | 記事 | 東京/朝刊 | 4 |
| 102 | 朝日 | 露国副領事の自殺                               | 1896 | 明治29 | 11 | 17 | 記事 | 東京/朝刊 | 2 |
| 103 | 朝日 | 無惨なる轢死者                                | 1897 | 明治30 | 9  | 3  | 記事 | 東京/朝刊 | 4 |
| 104 | 朝日 | 下婢遭難の原因分る                              | 1897 | 明治30 | 9  | 26 | 記事 | 東京/朝刊 | 4 |
| 105 | 朝日 | 小岩村の父殺し神経病に罹る                          | 1897 | 明治30 | 10 | 24 | 記事 | 東京/朝刊 | 5 |
| 106 | 読売 | 神経病の銀行員が4000円を盗み、貧民街にまく/新潟             | 1898 | 明治31 | 5  | 1  | 記事 | 朝刊    | 4 |
| 107 | 朝日 | 電気療法の話                                 | 1898 | 明治31 | 6  | 26 | 記事 | 東京/朝刊 | 7 |
| 108 | 朝日 | 奇病                                     | 1898 | 明治31 | 6  | 30 | 記事 | 東京/朝刊 | 5 |
| 109 | 朝日 | 鹿を指して狸となす                              | 1899 | 明治32 | 2  | 18 | 記事 | 東京/朝刊 | 5 |
| 110 | 朝日 | 大森強盗殺人犯白状の顛末(つづき)                      | 1899 | 明治32 | 4  | 10 | 記事 | 東京/朝刊 | 5 |
| 111 | 朝日 | 黒白一変                                   | 1899 | 明治32 | 5  | 30 | 記事 | 東京/朝刊 | 3 |
| 112 | 朝日 | 神経と神経/社説                               | 1899 | 明治32 | 12 | 3  | 記事 | 東京/朝刊 | 2 |
| 113 | 読売 | 北海道に奇病ツッコニバツコ(蛇婆) 蛇を連想、錯乱、類似病も=続く      | 1900 | 明治33 | 1  | 21 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 114 | 読売 | 北海道に奇病ツッコニバツコ(蛇婆) 臆燥、憑狂、テンカン…と諸説=終わり   | 1900 | 明治33 | 1  | 22 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 115 | 読売 | 脚気から神経病を併発し投身自殺・幼児が誤って川へ転落死/東京         | 1900 | 明治33 | 8  | 24 | 記事 | 朝刊    | 4 |
| 116 | 朝日 | 質屋の主人自殺す<画>                            | 1900 | 明治33 | 11 | 27 | 記事 | 東京/朝刊 | 5 |
| 117 | 読売 | 不景気と精神病者 本年半年間で財産上に起因する患者が増加/東京脳病院     | 1901 | 明治34 | 7  | 12 | 記事 | 朝刊    | 2 |
| 118 | 朝日 | 陸軍少尉の投身                                | 1901 | 明治34 | 11 | 22 | 記事 | 東京/朝刊 | 4 |
| 119 | 読売 | 海水浴に関する注意 15 医学博士 呉秀三談=終わり             | 1902 | 明治35 | 8  | 4  | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 120 | 朝日 | 大谷派法主の重患                               | 1902 | 明治35 | 8  | 24 | 記事 | 東京/朝刊 | 3 |
| 121 | 朝日 | 長雨の為め縊死す                               | 1902 | 明治35 | 9  | 5  | 記事 | 東京/朝刊 | 3 |
| 122 | 読売 | [非社会主義論]=2 新天地とは何ぞや=上/駒込学人(連載)         | 1903 | 明治36 | 3  | 21 | 記事 | 朝刊    | 1 |
| 123 | 朝日 | 角筈の惨劇余聞                                | 1903 | 明治36 | 5  | 2  | 記事 | 東京/朝刊 | 5 |

| 番   | 社名 | タイトル                                      | 発行日  |      |    |    | 種別 | 社/刊種  | 面 |
|-----|----|-------------------------------------------|------|------|----|----|----|-------|---|
|     |    |                                           | 西暦   | 和暦   | 月  | 日  |    |       |   |
| 124 | 朝日 | 神経病者縊死す                                   | 1904 | 明治37 | 3  | 20 | 記事 | 東京/朝刊 | 3 |
| 125 | 朝日 | 便所内の神経病                                   | 1904 | 明治37 | 4  | 11 | 記事 | 東京/朝刊 | 5 |
| 126 | 読売 | 露將軍の近況 露都のクロバトキンが神経病                      | 1905 | 明治38 | 2  | 12 | 記事 | 朝刊    | 2 |
| 127 | 朝日 | 敵総帥病む                                     | 1905 | 明治38 | 2  | 13 | 記事 | 東京/朝刊 | 2 |
| 128 | 朝日 | 白痴児                                       | 1905 | 明治38 | 2  | 20 | 記事 | 東京/朝刊 | 8 |
| 129 | 読売 | 人間体力の盛衰 松本亦太郎文学博士の演説大要、数学的計算には握力計使用       | 1906 | 明治39 | 4  | 11 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 130 | 読売 | 新式電気帯 医療電業商會が発売 安価で神経病、慢性病に効果と好評/東京       | 1906 | 明治39 | 4  | 13 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 131 | 朝日 | 四方山                                       | 1906 | 明治39 | 4  | 22 | 記事 | 東京/朝刊 | 6 |
| 132 | 読売 | [神経の衛生] = 1 神経とはどんなもの/医学士・田村化三郎談(連載)      | 1906 | 明治39 | 6  | 9  | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 133 | 読売 | [神経の衛生] = 2 軽度の神経衰弱症/医学士・田村化三郎談(連載)       | 1906 | 明治39 | 6  | 10 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 134 | 読売 | [神経の衛生] = 4 神経病と精神病の区別/田村化三郎談(連載) = 訂正12日 | 1906 | 明治39 | 6  | 11 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 135 | 読売 | [神経の衛生] = 3 高度の神経衰弱症/田村化三郎談(連載) = 訂正12日朝刊 | 1906 | 明治39 | 6  | 12 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 136 | 読売 | [訂正]「神経の衛生」の記事 = 6月11日付、同12日付朝刊各3面        | 1906 | 明治39 | 6  | 12 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 137 | 読売 | [神経の衛生] = 5 ヒポコンデリー/医学士・田村化三郎談(連載)        | 1906 | 明治39 | 6  | 13 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 138 | 読売 | [神経の衛生] = 6 ヒステリー/医学士・田村化三郎談(連載)          | 1906 | 明治39 | 6  | 15 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 139 | 読売 | [神経の衛生] = 7 ヒステリー = 続き/医学士・田村化三郎談(連載)     | 1906 | 明治39 | 6  | 17 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 140 | 読売 | [神経の衛生] = 8 ヒステリー = 続き/医学士・田村化三郎談(連載)     | 1906 | 明治39 | 6  | 18 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 141 | 読売 | [神経の衛生] = 9 パセドウ病/医学士・田村化三郎談(連載)          | 1906 | 明治39 | 6  | 19 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 142 | 読売 | [神経の衛生] = 10 書癩、偏頭痛/医学士・田村化三郎談(連載)        | 1906 | 明治39 | 6  | 20 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 143 | 読売 | [神経の衛生] = 11 舞蹈病/医学士・田村化三郎談(連載)           | 1906 | 明治39 | 6  | 21 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 144 | 読売 | [神経の衛生] = 12 パーキンソン病/医学士・田村化三郎談(連載)       | 1906 | 明治39 | 6  | 23 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 145 | 読売 | [神経の衛生] = 13 その他の神経病/医学士・田村化三郎談(連載)       | 1906 | 明治39 | 6  | 24 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 146 | 読売 | [神経の衛生] = 14 神経性心悸亢進/医学士・田村化三郎談(連載)       | 1906 | 明治39 | 6  | 25 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 147 | 読売 | [神経の衛生] = 15 神経性食道麻痺/医学士・田村化三郎談(連載)       | 1906 | 明治39 | 6  | 26 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 148 | 読売 | [神経の衛生] = 16 胃癩(神経性胃痛)/医学士・田村化三郎談(連載)     | 1906 | 明治39 | 6  | 27 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 149 | 読売 | [神経の衛生] = 17 喘息/医学士・田村化三郎談(連載)            | 1906 | 明治39 | 7  | 1  | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 150 | 読売 | [神経の衛生] = 18 喘息 = 続き/医学士・田村化三郎談(連載)       | 1906 | 明治39 | 7  | 2  | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 151 | 読売 | [神経の衛生] = 19 喘息 = 続き/医学士・田村化三郎談(連載)       | 1906 | 明治39 | 7  | 3  | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 152 | 読売 | [神経の衛生] = 20 喘息 = 続き/医学士・田村化三郎談(連載)       | 1906 | 明治39 | 7  | 4  | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 153 | 読売 | [神経の衛生] = 21 神経病と婦人科病/医学士・田村化三郎談(連載)      | 1906 | 明治39 | 7  | 6  | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 154 | 読売 | [神経の衛生] = 22 神経病の原因、神経質/医学士・田村化三郎談(連載)    | 1906 | 明治39 | 7  | 11 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 155 | 読売 | [神経の衛生] = 23 神経質 = 続き/医学士・田村化三郎談(連載)      | 1906 | 明治39 | 7  | 13 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 156 | 読売 | [神経の衛生] = 24 神経質 = 続き/医学士・田村化三郎談(連載)      | 1906 | 明治39 | 7  | 14 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 157 | 読売 | [神経の衛生] = 25 神経質 = 続き/医学士・田村化三郎談(連載)      | 1906 | 明治39 | 7  | 17 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 158 | 読売 | [神経の衛生] = 26 神経質 = 続き/医学士・田村化三郎談(連載)      | 1906 | 明治39 | 7  | 27 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 159 | 読売 | [神経の衛生] = 27 神経質 = 続き/医学士・田村化三郎談(連載)      | 1906 | 明治39 | 7  | 28 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 160 | 読売 | [神経の衛生] = 29 神経病の原因/医学士・田村化三郎談(連載)        | 1906 | 明治39 | 7  | 31 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 161 | 読売 | [神経の衛生] = 29 神経病の原因 = 続き/医学士・田村化三郎談(連載)   | 1906 | 明治39 | 8  | 4  | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 162 | 読売 | [神経の衛生] = 32 神経病の治療法/医学士・田村化三郎談(連載)       | 1906 | 明治39 | 8  | 5  | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 163 | 読売 | [神経の衛生] = 32 神経病の治療法 = 続き/医学士・田村化三郎談(連載)  | 1906 | 明治39 | 8  | 6  | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 164 | 読売 | [神経の衛生] = 33 神経病の治療法 = 続き/医学士・田村化三郎談(連載)  | 1906 | 明治39 | 8  | 10 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 165 | 読売 | [神経の衛生] = 34 神経病の治療法 = 続き/医学士・田村化三郎談(連載)  | 1906 | 明治39 | 8  | 11 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 166 | 読売 | [神経の衛生] = 35 神経病の治療法 = 続き/医学士・田村化三郎談(連載)  | 1906 | 明治39 | 8  | 15 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 167 | 読売 | [神経の衛生] = 36 神経質の矯正法/医学士・田村化三郎談(連載)       | 1906 | 明治39 | 8  | 17 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 168 | 読売 | [神経の衛生] = 37 神経質の矯正法 = 続き/医学士・田村化三郎談(連載)  | 1906 | 明治39 | 8  | 18 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 169 | 読売 | [神経の衛生] = 38 神経質の矯正法 = 続き/医学士・田村化三郎談(連載)  | 1906 | 明治39 | 8  | 19 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 170 | 読売 | [神経の衛生] = 39完 神経質の矯正法 = 続き/医学士・田村化三郎談(連載) | 1906 | 明治39 | 8  | 20 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 171 | 朝日 | 千葉那古町大火(千葉)                               | 1906 | 明治39 | 12 | 27 | 記事 | 東京/朝刊 | 4 |
| 172 | 朝日 | 留学生任命(二月十八日)                              | 1907 | 明治40 | 2  | 20 | 記事 | 東京/朝刊 | 3 |
| 173 | 朝日 | 花時と精神病(東京脳病院長後藤省吾氏談)                      | 1907 | 明治40 | 4  | 26 | 記事 | 東京/朝刊 | 5 |
| 174 | 読売 | 気候と関係ある? 神経・精神病 中国留学生はホームシックに             | 1907 | 明治40 | 4  | 26 | 記事 | 朝刊    | 3 |
| 175 | 朝日 | 雨期の脳病患者 斎藤ドクトル談                           | 1907 | 明治40 | 6  | 25 | 記事 | 東京/朝刊 | 6 |
| 176 | 読売 | [肺の衛生] = 23 肺病と神経との関係 = 1/田村化三郎談(連載)      | 1907 | 明治40 | 7  | 10 | 記事 | 朝刊    | 5 |
| 177 | 読売 | [肺の衛生] = 25 不治の肺病患者に対する忠告 = 1/田村化三郎談(連載)  | 1907 | 明治40 | 7  | 13 | 記事 | 朝刊    | 5 |
| 178 | 読売 | [肥える法、痩せる法] = 2 肥瘦の原理/田村化三郎談              | 1907 | 明治40 | 10 | 30 | 記事 | 朝刊    | 5 |
| 179 | 読売 | [肥える法、痩せる法] = 3 肥える原因、痩せる原因/田村化三郎談        | 1907 | 明治40 | 10 | 31 | 記事 | 朝刊    | 5 |
| 180 | 読売 | [肥える法、痩せる法] = 4 病者と無病者/田村化三郎談             | 1907 | 明治40 | 11 | 1  | 記事 | 朝刊    | 5 |
| 181 | 読売 | [肺の衛生] = 81 健康者の予防法 = 2/田村化三郎談(連載)        | 1907 | 明治40 | 11 | 5  | 記事 | 朝刊    | 6 |
| 182 | 読売 | [肥える法、痩せる法] = 14 睡眠/田村化三郎談                | 1907 | 明治40 | 11 | 12 | 記事 | 朝刊    | 5 |
| 183 | 読売 | [肥える法、痩せる法] = 24 住居/田村化三郎談                | 1907 | 明治40 | 11 | 27 | 記事 | 朝刊    | 5 |
| 184 | 読売 | [肥える法、痩せる法] = 41 空気/田村化三郎談                | 1907 | 明治40 | 12 | 25 | 記事 | 朝刊    | 5 |
| 185 | 読売 | [肥える法、痩せる法] その8 境遇と肥瘦の関係/田村化三郎談           | 1908 | 明治41 | 2  | 17 | 記事 | 朝刊    | 1 |
| 186 | 読売 | [台所の科学] = 42 茶の種類と其の製法/農学博士・沢村真談(連載)      | 1908 | 明治41 | 2  | 22 | 記事 | 朝刊    | 5 |

| 番   | 社名 | タイトル                                              | 発行日  |      |    |    | 種別 | 社/刊種  | 面 |
|-----|----|---------------------------------------------------|------|------|----|----|----|-------|---|
|     |    |                                                   | 西暦   | 和暦   | 月  | 日  |    |       |   |
| 187 | 読売 | [肥える法、痩せる法] その1 2 神経質の人/田村化三郎談                    | 1908 | 明治41 | 2  | 24 | 記事 | 朝刊    | 1 |
| 188 | 朝日 | 清国紳士縊死(大阪)                                        | 1908 | 明治41 | 3  | 2  | 記事 | 東京/朝刊 | 2 |
| 189 | 朝日 | 自殺と殺人(承前) 自殺の科学的研究 ドクトル 富士川游 自殺の法則 原因と動機 自殺気質 予防法 | 1908 | 明治41 | 6  | 18 | 記事 | 東京/朝刊 | 4 |
| 190 | 読売 | [胃腸の衛生] = 1 7 胃拡張の話 = 1 / 田村化三郎談(連載)              | 1908 | 明治41 | 6  | 23 | 記事 | 朝刊    | 5 |
| 191 | 読売 | [胃腸の衛生] = 2 6 神経性胃病の話/田村化三郎談(連載)                  | 1908 | 明治41 | 7  | 30 | 記事 | 朝刊    | 5 |
| 192 | 朝日 | 幽霊が出る出る 薄情女房の神経病                                  | 1908 | 明治41 | 9  | 23 | 記事 | 東京/朝刊 | 6 |
| 193 | 朝日 | 交趾支那知事自殺                                          | 1909 | 明治42 | 2  | 2  | 記事 | 東京/朝刊 | 2 |
| 194 | 朝日 | 当世医者気質(1 2) (1) 私立病院 風水軒主人<画>                     | 1909 | 明治42 | 2  | 22 | 記事 | 東京/朝刊 | 6 |
| 195 | 朝日 | 動物界消息                                             | 1909 | 明治42 | 4  | 26 | 記事 | 東京/朝刊 | 6 |
| 196 | 読売 | 錦秋女学校開校式▽脳神経病新薬発見▽「鉄道青年」発刊▽実業道德講演会ほか              | 1909 | 明治42 | 5  | 31 | 記事 | 朝刊    | 2 |
| 197 | 読売 | [雑誌摘録] 野球界の神経病 宋代に於ける理の字                          | 1909 | 明治42 | 7  | 2  | 記事 | 朝刊    | 5 |
| 198 | 読売 | [ロンドン電] モロッコ、スペイン軍が激戦▽露国皇后が神経病▽リプトン卿渡米            | 1909 | 明治42 | 10 | 4  | 記事 | 朝刊    | 2 |
| 199 | 朝日 | 露国皇后不予(同上)                                        | 1910 | 明治43 | 1  | 19 | 記事 | 東京/朝刊 | 2 |
| 200 | 朝日 | 露后神経病否認                                           | 1910 | 明治43 | 1  | 21 | 記事 | 東京/朝刊 | 2 |
| 201 | 朝日 | ホホフルト氏の来朝<写>                                      | 1910 | 明治43 | 3  | 31 | 記事 | 東京/朝刊 | 3 |
| 202 | 読売 | 宗教界 実践の宗教を説く/文学博士・村上专精                            | 1910 | 明治43 | 4  | 1  | 記事 | 朝刊    | 5 |
| 203 | 朝日 | 米国婦人の勝訴 汽車の動揺の為め脳病 賠償金二千二百余円                      | 1910 | 明治43 | 5  | 3  | 記事 | 東京/朝刊 | 5 |
| 204 | 読売 | 米国電報 ル氏と反逆党▽拳闘失敗の原因 ジェファリノ敗因は旧傷のため神経病             | 1910 | 明治43 | 7  | 10 | 記事 | 朝刊    | 2 |
| 205 | 朝日 | 現代人の疲労(6) 醜悪なる屋外広告 神経病の注射療法                       | 1910 | 明治43 | 8  | 3  | 記事 | 東京/朝刊 | 6 |
| 206 | 朝日 | 子供に関するいろいろ 不良少年の研究(3) 遺伝と不良少年(下) 春泥生              | 1910 | 明治43 | 10 | 23 | 記事 | 東京/朝刊 | 6 |
| 207 | 朝日 | 鉄を脊負つて井戸に入る                                       | 1911 | 明治44 | 6  | 8  | 記事 | 東京/朝刊 | 5 |
| 208 | 朝日 | 間違つた手当 子供の神経病 医学博士 佐野彪太氏述                         | 1911 | 明治44 | 8  | 19 | 記事 | 東京/朝刊 | 6 |
| 209 | 朝日 | 間違つた手当 子供の神経病 医学博士 佐野彪太氏述                         | 1911 | 明治44 | 8  | 22 | 記事 | 東京/朝刊 | 6 |
| 210 | 朝日 | 間違つた手当 子供の神経病 医学博士 佐野彪太氏述                         | 1911 | 明治44 | 8  | 24 | 記事 | 東京/朝刊 | 6 |
| 211 | 朝日 | 間違つた手当 子供の神経病 医学博士 佐野彪太氏述                         | 1911 | 明治44 | 8  | 25 | 記事 | 東京/朝刊 | 6 |
| 212 | 朝日 | 養命酒                                               | 1912 | 明治45 | 7  | 29 | 記事 | 東京/朝刊 | 7 |
| 213 | 朝日 | (広告) 本多栄 神経病 【大阪】                                 | 1880 | 明治13 | 3  | 19 | 広告 | 大阪/朝刊 | 4 |
| 214 | 朝日 | (広告) 本多栄 神経病治療 【大阪】                               | 1880 | 明治13 | 3  | 20 | 広告 | 大阪/朝刊 | 4 |
| 215 | 朝日 | (広告) 本多栄 神経病治療 【大阪】                               | 1880 | 明治13 | 3  | 23 | 広告 | 大阪/朝刊 | 4 |
| 216 | 朝日 | (広告) 本多謹白 神経病治療広告 【大阪】                            | 1880 | 明治13 | 4  | 14 | 広告 | 大阪/朝刊 | 4 |
| 217 | 朝日 | (広告) 本多謹白 神経病治療広告 【大阪】                            | 1880 | 明治13 | 4  | 15 | 広告 | 大阪/朝刊 | 4 |
| 218 | 朝日 | (広告) 本多謹白 神経病治療 【大阪】                              | 1880 | 明治13 | 4  | 16 | 広告 | 大阪/朝刊 | 4 |
| 219 | 朝日 | (広告) 医師本多 神経病治療 【大阪】                              | 1880 | 明治13 | 8  | 29 | 広告 | 大阪/朝刊 | 4 |
| 220 | 朝日 | (広告) 癩医本多謹白 神経病治療 【大阪】                            | 1880 | 明治13 | 12 | 9  | 広告 | 大阪/朝刊 | 4 |
| 221 | 朝日 | (広告) 癩医本多 神経病治療 【大阪】                              | 1880 | 明治13 | 12 | 17 | 広告 | 大阪/朝刊 | 4 |
| 222 | 朝日 | (広告) 癩医本多 神経病治療 【大阪】                              | 1880 | 明治13 | 12 | 18 | 広告 | 大阪/朝刊 | 4 |
| 223 | 朝日 | (広告) 癩医本多 癩症神経病治療 【大阪】                            | 1881 | 明治14 | 1  | 12 | 広告 | 大阪/朝刊 | 4 |
| 224 | 朝日 | (広告) 癩医本多 神経病治療 【大阪】                              | 1881 | 明治14 | 1  | 23 | 広告 | 大阪/朝刊 | 4 |
| 225 | 朝日 | (広告) 本多栄 神経病 小児かん虫 【大阪】                           | 1881 | 明治14 | 3  | 20 | 広告 | 大阪/朝刊 | 4 |
| 226 | 朝日 | (広告) 癩医本多栄 神経病 小児かん虫病治療 【大阪】                      | 1881 | 明治14 | 6  | 11 | 広告 | 大阪/朝刊 | 4 |
| 227 | 朝日 | (広告) 癩医 本多栄 神経病 小児かん虫病治療 【大阪】                     | 1881 | 明治14 | 7  | 16 | 広告 | 大阪/朝刊 | 4 |
| 228 | 朝日 | (広告) 本多栄 有雅彦太郎 かん病 神経病治療 【大阪】                     | 1881 | 明治14 | 11 | 15 | 広告 | 大阪/朝刊 | 4 |
| 229 | 朝日 | (広告) 本多栄 有雅彦太郎 かん病 神経病治療 【大阪】                     | 1881 | 明治14 | 11 | 17 | 広告 | 大阪/朝刊 | 4 |
| 230 | 朝日 | (広告) 本多栄 有雅彦太郎 かん病 神経病治療 【大阪】                     | 1881 | 明治14 | 11 | 20 | 広告 | 大阪/朝刊 | 4 |
| 231 | 朝日 | (広告) 本多栄 有雅彦太郎 神経病治療 【大阪】                         | 1881 | 明治14 | 12 | 21 | 広告 | 大阪/朝刊 | 4 |
| 232 | 朝日 | (広告) 本多栄 かん病 神経病治療 【大阪】                           | 1882 | 明治15 | 1  | 22 | 広告 | 大阪/朝刊 | 4 |
| 233 | 朝日 | (広告) 本多出張所 神経病治療医 【大阪】                            | 1882 | 明治15 | 2  | 19 | 広告 | 大阪/朝刊 | 4 |
| 234 | 朝日 | (広告) 本多栄 本多出張所 神経病治療医 【大阪】                        | 1882 | 明治15 | 3  | 19 | 広告 | 大阪/朝刊 | 4 |
| 235 | 朝日 | (広告) 本多栄 神経病 治療出張 【大阪】                            | 1882 | 明治15 | 6  | 16 | 広告 | 大阪/朝刊 | 4 |
| 236 | 朝日 | (広告) 本多栄 神経病治療医出張 【大阪】                            | 1882 | 明治15 | 8  | 16 | 広告 | 大阪/朝刊 | 4 |
| 237 | 朝日 | (広告) 本田栄 転居 小児癩科 神経病 【大阪】                         | 1882 | 明治15 | 11 | 5  | 広告 | 大阪/朝刊 | 4 |
| 238 | 朝日 | (広告) 福山熊七 神経病・子宮病等に泉州の名医本多国手が出張治療の案内 【大阪】         | 1882 | 明治15 | 11 | 19 | 広告 | 大阪/朝刊 | 4 |
| 239 | 朝日 | (広告) 出張所木づに事福山熊七 神経病并子宮病を名医本多栄国手出張治療 【大阪】         | 1883 | 明治16 | 5  | 2  | 広告 | 大阪/朝刊 | 4 |
| 240 | 朝日 | (広告) 療病館 神経病 婦人病 【大阪】                             | 1884 | 明治17 | 4  | 12 | 広告 | 大阪/朝刊 | 4 |
| 241 | 朝日 | (広告) 本多病院監事 きちがひ治療 神経病専治医本多栄氏設置 【大阪】              | 1884 | 明治17 | 7  | 23 | 広告 | 大阪/朝刊 | 4 |
| 242 | 朝日 | (広告) 本多病院監事 きちがひ治療 神経病専治医本多栄氏設置 【大阪】              | 1884 | 明治17 | 7  | 25 | 広告 | 大阪/付録 | 2 |
| 243 | 朝日 | (広告) 高橋盛大堂 神経病 【大阪】                               | 1884 | 明治17 | 10 | 26 | 広告 | 大阪/朝刊 | 4 |
| 244 | 朝日 | (広告) 本家佐藤衛生館 神経病の特効薬 【大阪】                         | 1885 | 明治18 | 1  | 22 | 広告 | 大阪/朝刊 | 4 |
| 245 | 朝日 | (広告) 本多栄 治療医 神経病 子宮病 【大阪】                         | 1886 | 明治19 | 2  | 18 | 広告 | 大阪/朝刊 | 4 |
| 246 | 朝日 | (広告) 本多栄 治療医 神経病 子宮病 【大阪】                         | 1886 | 明治19 | 2  | 25 | 広告 | 大阪/朝刊 | 4 |
| 247 | 読売 | [広告] 精神病・神経病など治療/東京牛込区東五軒町・東京養心病院 烏山巍             | 1890 | 明治23 | 11 | 24 | 広告 | 別刷    | 2 |
| 248 | 読売 | [広告] 精神病・神経病など治療/東京牛込区東五軒町・東京養心病院 烏山巍             | 1890 | 明治23 | 11 | 26 | 広告 | 別刷    | 1 |
| 249 | 読売 | [広告] 精神病・神経病など治療/東京牛込区東五軒町・東京養心病院 烏山巍             | 1890 | 明治23 | 11 | 28 | 広告 | 朝刊    | 4 |

| 番   | 社名 | タイトル                                                       | 発行日  |      |    |    | 種別 | 社/刊種  | 面  |
|-----|----|------------------------------------------------------------|------|------|----|----|----|-------|----|
|     |    |                                                            | 西暦   | 和暦   | 月  | 日  |    |       |    |
| 250 | 朝日 | (広告) 小松川病院 精神神経病専門治療                                       | 1891 | 明治24 | 8  | 25 | 広告 | 東京/朝刊 | 6  |
| 251 | 朝日 | (広告) 小松川病院 精神神経病専門治療                                       | 1891 | 明治24 | 9  | 3  | 広告 | 東京/朝刊 | 6  |
| 252 | 朝日 | (広告) 小松川病院 精神神経病専門治療                                       | 1891 | 明治24 | 9  | 9  | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 253 | 朝日 | (広告) 小松川病院 精神神経病専門治療                                       | 1891 | 明治24 | 9  | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 254 | 朝日 | (広告) 小松川病院 精神神経病専門治療                                       | 1891 | 明治24 | 9  | 22 | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 255 | 朝日 | (広告) 小松川病院 精神神経病専門治療                                       | 1891 | 明治24 | 9  | 30 | 広告 | 東京/朝刊 | 6  |
| 256 | 読売 | [広告] 精神病 神経病 治療/東京・小松川 小松川病院                               | 1892 | 明治25 | 9  | 11 | 広告 | 朝刊    | 3  |
| 257 | 朝日 | (広告) 医学士 三浦謹之助 帰朝及び転居 神経病診療                                | 1892 | 明治25 | 12 | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 6  |
| 258 | 朝日 | (広告) 原幸太郎 家伝之秘法 即効 肺病 胃病 神経病ほか                             | 1893 | 明治26 | 9  | 8  | 広告 | 東京/朝刊 | 6  |
| 259 | 朝日 | (広告) 渡辺道純 精神病、神経病                                          | 1894 | 明治27 | 8  | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 6  |
| 260 | 読売 | [広告] 精神病の往診治療/東京市浅草区北清島町・渡辺道純                              | 1894 | 明治27 | 9  | 11 | 広告 | 朝刊    | 6  |
| 261 | 朝日 | (広告) 瘋癲病院 瘋癲 癲癩 神経病                                        | 1895 | 明治28 | 10 | 29 | 広告 | 東京/朝刊 | 6  |
| 262 | 朝日 | (広告) 本舗いろは堂 脳病神経病治療薬                                       | 1896 | 明治29 | 5  | 17 | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 263 | 読売 | [広告] 三宅秀撰「診候描写図」神経病皮膚病之部/島利、丸善書店                           | 1896 | 明治29 | 6  | 8  | 広告 | 朝刊    | 7  |
| 264 | 朝日 | (広告) 本家柳沢休左衛門 代理店大木口哲 売薬卸売大木合名会社 脳病神経病ライン                  | 1896 | 明治29 | 8  | 21 | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 265 | 朝日 | (広告) 瘋癲病院 神経病                                              | 1896 | 明治29 | 8  | 26 | 広告 | 東京/朝刊 | 6  |
| 266 | 朝日 | (広告) 瘋癲病院 瘋癲病 癲癩病 神経病                                      | 1896 | 明治29 | 11 | 8  | 広告 | 東京/朝刊 | 6  |
| 267 | 朝日 | (広告) 瘋癲病院 瘋癲 癲癩 神経病                                        | 1896 | 明治29 | 11 | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 268 | 朝日 | (広告) 瘋癲病院 瘋癲病 癲癩病 神経病                                      | 1896 | 明治29 | 11 | 22 | 広告 | 東京/朝刊 | 6  |
| 269 | 朝日 | (広告) 師岡診療所 注射新治療 呼吸器病 神経病 腰痛                               | 1897 | 明治30 | 1  | 3  | 広告 | 東京/朝刊 | 10 |
| 270 | 朝日 | (広告) 師岡診療所 注射新治療 呼吸器病 神経病ほか                                | 1897 | 明治30 | 3  | 13 | 広告 | 東京/朝刊 | 8  |
| 271 | 読売 | [広告] 新治療法 電気力治療 神経病 脳病 生殖器病/生司院                            | 1897 | 明治30 | 11 | 14 | 広告 | 朝刊    | 6  |
| 272 | 朝日 | (広告) 発行所 森玉林堂薬房 特約店 大木合名会社 津村順天堂 山崎帝国堂 安川晃栄堂ほか 脳病神経病頭痛 健脳丸 | 1898 | 明治31 | 1  | 9  | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 273 | 朝日 | (広告) 瘋癲病院 きちがい病院 瘋癲病 神経病                                   | 1898 | 明治31 | 2  | 2  | 広告 | 東京/朝刊 | 8  |
| 274 | 朝日 | (広告) 大木口哲本店 大木合名会社 脳病神経病ライン 柳沢薬館製                          | 1898 | 明治31 | 7  | 9  | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 275 | 読売 | [広告] 脳病神経病の主薬 プライン/大坂 柳沢薬館製 大木口哲                           | 1898 | 明治31 | 7  | 17 | 広告 | 朝刊    | 6  |
| 276 | 朝日 | (広告) 大木口哲本店 柳沢薬館 脳病 神経病 プライン                               | 1898 | 明治31 | 8  | 24 | 広告 | 東京/朝刊 | 8  |
| 277 | 読売 | [広告] 肺病 神経病 注射新治療/東京市芝区 幸島内科医院                             | 1898 | 明治31 | 9  | 7  | 広告 | 朝刊    | 6  |
| 278 | 朝日 | (広告) 幸島内科医院 注射新治療広告 肺病 脳脊髄諸病 神経病                           | 1898 | 明治31 | 9  | 8  | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 279 | 朝日 | (広告) 師岡診療所 呼吸器病 脳病 神経病                                     | 1898 | 明治31 | 9  | 12 | 広告 | 東京/朝刊 | 8  |
| 280 | 朝日 | (広告) 生司院 生殖器病専門 遺精 夢精 手淫の害 早漏 勃起衰弱 梅毒 淋病 脳神経病              | 1898 | 明治31 | 11 | 18 | 広告 | 東京/朝刊 | 8  |
| 281 | 朝日 | (広告) 山崎帝国堂 神精液 神経病精神病子宮血の道ヒステリー脳病全治                        | 1898 | 明治31 | 12 | 4  | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 282 | 読売 | [広告] 神経病や血の道に「神精液」/東京・神田区花房町 山崎帝国堂                         | 1898 | 明治31 | 12 | 14 | 広告 | 朝刊    | 5  |
| 283 | 朝日 | (広告) 発売元 山崎帝国堂 卸売店 大木合名会社 永井永進堂 子宮血の道ぶらぶら病 頭痛 脳病 神経病 神精液   | 1899 | 明治32 | 1  | 22 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 284 | 朝日 | (広告) 本舗山崎帝国堂 特約大木合名会社 神精液 頭痛脳病神経病ほか                        | 1899 | 明治32 | 3  | 20 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 285 | 朝日 | (広告) 山崎帝国堂 大木合名会社 神経病 神精液                                  | 1899 | 明治32 | 4  | 26 | 広告 | 東京/朝刊 | 8  |
| 286 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 精神神経病                                           | 1899 | 明治32 | 9  | 13 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 287 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病                                      | 1899 | 明治32 | 9  | 14 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 288 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病                                  | 1899 | 明治32 | 9  | 17 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 289 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病                                  | 1899 | 明治32 | 9  | 18 | 広告 | 東京/朝刊 | 8  |
| 290 | 朝日 | (広告) 本舗 柳沢薬館 大木会社 安川 佐々木ほか 脳病神経病の主薬 プライン                   | 1899 | 明治32 | 10 | 14 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 291 | 朝日 | (広告) 製造本舗 内藤清八 神経病虚弱病眼病 精製鯊肝油                              | 1899 | 明治32 | 11 | 2  | 広告 | 東京/朝刊 | 3  |
| 292 | 読売 | [広告] 婦人のヒステリー 神経病 脳病 頭痛 神精液/山崎帝国堂                          | 1900 | 明治33 | 1  | 12 | 広告 | 朝刊    | 5  |
| 293 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病専門治療                              | 1900 | 明治33 | 6  | 22 | 広告 | 東京/朝刊 | 8  |
| 294 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病脊髄病神経病精神病専門治療                                 | 1900 | 明治33 | 6  | 24 | 広告 | 東京/朝刊 | 3  |
| 295 | 朝日 | (広告) 柳沢薬館 脳病 神経病 プライン                                      | 1900 | 明治33 | 7  | 20 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 296 | 朝日 | (広告) 柿沢薬館 大木本店 安川薬店ほか 脳病・神経病 プライン                          | 1900 | 明治33 | 8  | 21 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 297 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳 脊髄 神経病ほか                                      | 1900 | 明治33 | 9  | 18 | 広告 | 東京/朝刊 | 8  |
| 298 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか                                    | 1900 | 明治33 | 9  | 26 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 299 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか                                    | 1900 | 明治33 | 9  | 29 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 300 | 朝日 | (広告) 師岡診療所 注射新治療 呼吸器病 脳病 神経病                               | 1900 | 明治33 | 10 | 7  | 広告 | 東京/朝刊 | 8  |
| 301 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病                                  | 1900 | 明治33 | 10 | 7  | 広告 | 東京/朝刊 | 8  |
| 302 | 朝日 | (広告) 柳沢薬館 大木口哲本店 大木合名会社ほか プライン 脳病 神経病                      | 1900 | 明治33 | 10 | 9  | 広告 | 東京/朝刊 | 4  |
| 303 | 朝日 | (広告) 宇津木病院 脳病 脊髄病 神経病                                      | 1900 | 明治33 | 10 | 9  | 広告 | 東京/朝刊 | 8  |
| 304 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病                                      | 1900 | 明治33 | 10 | 13 | 広告 | 東京/朝刊 | 4  |
| 305 | 朝日 | (広告) 柳沢薬館 大木口哲本店 大木合名会社 安川晃栄堂ほか プライン 脳病 神経病                | 1900 | 明治33 | 10 | 13 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 306 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病                                  | 1900 | 明治33 | 10 | 19 | 広告 | 東京/朝刊 | 4  |
| 307 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病脊髄病神経病精神病専門                                   | 1900 | 明治33 | 10 | 31 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 308 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病                                      | 1900 | 明治33 | 11 | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 4  |
| 309 | 読売 | [広告] 脳病脊髄病神経病精神病/東京田端 東京脳病院                                | 1900 | 明治33 | 11 | 5  | 広告 | 朝刊    | 8  |
| 310 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病                                      | 1900 | 明治33 | 11 | 8  | 広告 | 東京/朝刊 | 8  |
| 311 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病                                      | 1900 | 明治33 | 11 | 10 | 広告 | 東京/朝刊 | 4  |
| 312 | 読売 | [広告] 注射新治療/東京神田明神下 師岡診療所                                   | 1900 | 明治33 | 12 | 5  | 広告 | 朝刊    | 5  |

| 番   | 社名 | タイトル                                                 | 発行日  |      |    |    | 種別 | 社/刊種  | 面  |
|-----|----|------------------------------------------------------|------|------|----|----|----|-------|----|
|     |    |                                                      | 西暦   | 和暦   | 月  | 日  |    |       |    |
| 313 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病脊髄病神経病精神病専門                             | 1900 | 明治33 | 12 | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 314 | 読売 | [広告] 精神病治療/東京田端 東京脳病院                                | 1900 | 明治33 | 12 | 15 | 広告 | 朝刊    | 6  |
| 315 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病                            | 1901 | 明治34 | 1  | 3  | 広告 | 東京/朝刊 | 10 |
| 316 | 読売 | [広告] 脳病、脊髄病、神経病、精神病専門/東京市田端・東京脳病院                    | 1901 | 明治34 | 1  | 4  | 広告 | 朝刊    | 6  |
| 317 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病                            | 1901 | 明治34 | 1  | 8  | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 318 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳神経病                                      | 1901 | 明治34 | 1  | 19 | 広告 | 東京/朝刊 | 4  |
| 319 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病脊髄病神経病                                  | 1901 | 明治34 | 2  | 7  | 広告 | 東京/朝刊 | 4  |
| 320 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病脊髄病神経病                                  | 1901 | 明治34 | 2  | 10 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 321 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 背髄病 神経病 精神病                            | 1901 | 明治34 | 2  | 13 | 広告 | 東京/朝刊 | 8  |
| 322 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか                              | 1901 | 明治34 | 3  | 6  | 広告 | 東京/朝刊 | 8  |
| 323 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか                              | 1901 | 明治34 | 3  | 11 | 広告 | 東京/朝刊 | 8  |
| 324 | 朝日 | (広告) 宇津木病院 脳 脊髄 神経病専門                                | 1901 | 明治34 | 3  | 13 | 広告 | 東京/朝刊 | 4  |
| 325 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか                              | 1901 | 明治34 | 3  | 17 | 広告 | 東京/朝刊 | 4  |
| 326 | 朝日 | (広告) 宇津木病院 脳 脊髄 神経病専門                                | 1901 | 明治34 | 3  | 19 | 広告 | 東京/朝刊 | 4  |
| 327 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか                              | 1901 | 明治34 | 3  | 23 | 広告 | 東京/朝刊 | 4  |
| 328 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか                              | 1901 | 明治34 | 3  | 26 | 広告 | 東京/朝刊 | 4  |
| 329 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか                              | 1901 | 明治34 | 3  | 30 | 広告 | 東京/朝刊 | 4  |
| 330 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか                              | 1901 | 明治34 | 4  | 12 | 広告 | 東京/朝刊 | 8  |
| 331 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか                              | 1901 | 明治34 | 4  | 14 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 332 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか                              | 1901 | 明治34 | 4  | 16 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 333 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか                              | 1901 | 明治34 | 4  | 18 | 広告 | 東京/朝刊 | 8  |
| 334 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか                              | 1901 | 明治34 | 4  | 20 | 広告 | 東京/朝刊 | 4  |
| 335 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか                              | 1901 | 明治34 | 4  | 22 | 広告 | 東京/朝刊 | 8  |
| 336 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 神経病 精神病専門                               | 1901 | 明治34 | 5  | 1  | 広告 | 東京/朝刊 | 4  |
| 337 | 読売 | [広告] 神経病 精神病/東京田端 東京脳病院                              | 1901 | 明治34 | 5  | 3  | 広告 | 朝刊    | 6  |
| 338 | 読売 | [広告] 神経病 精神病/東京小松川 小松川精神病院                           | 1901 | 明治34 | 5  | 8  | 広告 | 朝刊    | 6  |
| 339 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脊髄病 神経病 精神病                               | 1901 | 明治34 | 5  | 16 | 広告 | 東京/朝刊 | 4  |
| 340 | 朝日 | (広告) 丹平商会 健脳丸 脳病 神経病                                 | 1901 | 明治34 | 5  | 17 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 341 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか                              | 1901 | 明治34 | 5  | 21 | 広告 | 東京/朝刊 | 4  |
| 342 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病、脊髄病、神経病、精神病専門                          | 1901 | 明治34 | 5  | 25 | 広告 | 東京/朝刊 | 8  |
| 343 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病脊髄病神経病 精神病専門                            | 1901 | 明治34 | 6  | 2  | 広告 | 東京/朝刊 | 4  |
| 344 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 神経病精神病専門                                | 1901 | 明治34 | 6  | 2  | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 345 | 読売 | [広告] 神経病 精神病/東京府下小松川 小松川精神病院                         | 1901 | 明治34 | 6  | 5  | 広告 | 朝刊    | 6  |
| 346 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病・脊髄病・神経病・精神病                            | 1901 | 明治34 | 6  | 9  | 広告 | 東京/朝刊 | 8  |
| 347 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 神経病 精神病                                 | 1901 | 明治34 | 6  | 10 | 広告 | 東京/朝刊 | 8  |
| 348 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病                            | 1901 | 明治34 | 6  | 14 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 349 | 読売 | [広告] 神経病 元気衰弱 貧血 輸入プラニール/東京市本郷区 長江                   | 1901 | 明治34 | 6  | 16 | 広告 | 朝刊    | 6  |
| 350 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病                            | 1901 | 明治34 | 6  | 21 | 広告 | 東京/朝刊 | 4  |
| 351 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか                              | 1901 | 明治34 | 7  | 3  | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 352 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 精神病 神経病                                 | 1901 | 明治34 | 7  | 9  | 広告 | 東京/朝刊 | 8  |
| 353 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 精髄病 神経病 精神病                            | 1901 | 明治34 | 7  | 10 | 広告 | 東京/朝刊 | 4  |
| 354 | 読売 | [広告] 精神病、神経病/東京・小松川 小松川精神病院                          | 1901 | 明治34 | 7  | 10 | 広告 | 朝刊    | 3  |
| 355 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病                                | 1901 | 明治34 | 7  | 17 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 356 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 精神病 神経病                                 | 1901 | 明治34 | 7  | 18 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 357 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか                              | 1901 | 明治34 | 7  | 24 | 広告 | 東京/朝刊 | 4  |
| 358 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか                              | 1901 | 明治34 | 7  | 31 | 広告 | 東京/朝刊 | 8  |
| 359 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか                              | 1901 | 明治34 | 8  | 18 | 広告 | 東京/朝刊 | 4  |
| 360 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか                              | 1901 | 明治34 | 8  | 24 | 広告 | 東京/朝刊 | 8  |
| 361 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか                              | 1901 | 明治34 | 8  | 27 | 広告 | 東京/朝刊 | 8  |
| 362 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか                              | 1901 | 明治34 | 8  | 29 | 広告 | 東京/朝刊 | 8  |
| 363 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか                              | 1901 | 明治34 | 9  | 8  | 広告 | 東京/朝刊 | 4  |
| 364 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか                              | 1901 | 明治34 | 9  | 11 | 広告 | 東京/朝刊 | 8  |
| 365 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか                              | 1901 | 明治34 | 9  | 16 | 広告 | 東京/朝刊 | 4  |
| 366 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか                              | 1901 | 明治34 | 9  | 19 | 広告 | 東京/朝刊 | 8  |
| 367 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか                              | 1901 | 明治34 | 9  | 22 | 広告 | 東京/朝刊 | 4  |
| 368 | 朝日 | (広告) 王子精神病院 脳病 脊髄病 神経病ほか                             | 1901 | 明治34 | 9  | 28 | 広告 | 東京/朝刊 | 8  |
| 369 | 朝日 | (広告) 本舗 金沢巖 発売 大木合名会社 大木口哲 特約 帝国堂 福井 佐々木ほか 血精 胃病脳神経病 | 1901 | 明治34 | 10 | 3  | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 370 | 朝日 | (広告) 王子精神病院 脳病 脊髄病 神経病ほか                             | 1901 | 明治34 | 10 | 6  | 広告 | 東京/朝刊 | 8  |
| 371 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか                              | 1901 | 明治34 | 10 | 6  | 広告 | 東京/朝刊 | 8  |
| 372 | 朝日 | (広告) 宇津木病院 脳 脊髄 神経病専門                                | 1901 | 明治34 | 10 | 8  | 広告 | 東京/朝刊 | 4  |
| 373 | 朝日 | (広告) 宇津木病院 脳脊髄神経病                                    | 1901 | 明治34 | 10 | 16 | 広告 | 東京/朝刊 | 8  |
| 374 | 読売 | [広告] 医療 脊髄病、神経病、精神病/東京田端 東京脳病院                       | 1901 | 明治34 | 10 | 24 | 広告 | 朝刊    | 6  |
| 375 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか                              | 1901 | 明治34 | 10 | 27 | 広告 | 東京/朝刊 | 4  |

| 番   | 社名 | タイトル                                                           | 発行日  |      |    |    | 種別 | 社/刊種  | 面 |
|-----|----|----------------------------------------------------------------|------|------|----|----|----|-------|---|
|     |    |                                                                | 西暦   | 和暦   | 月  | 日  |    |       |   |
| 376 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか                                        | 1901 | 明治34 | 11 | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 377 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病                                          | 1901 | 明治34 | 11 | 10 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 378 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病                                          | 1901 | 明治34 | 11 | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 379 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病                                          | 1901 | 明治34 | 11 | 20 | 広告 | 東京/朝刊 | 4 |
| 380 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病                                          | 1901 | 明治34 | 11 | 26 | 広告 | 東京/朝刊 | 3 |
| 381 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 精神病専門 脳病・脊髄病・神経病                                    | 1901 | 明治34 | 12 | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 382 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 神経病・精神病専門                                         | 1901 | 明治34 | 12 | 8  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 383 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 神経病・精神病専門                                         | 1901 | 明治34 | 12 | 11 | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 384 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病脊髄病神経病                                            | 1901 | 明治34 | 12 | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 4 |
| 385 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病                                          | 1902 | 明治35 | 1  | 1  | 広告 | 東京/朝刊 | 4 |
| 386 | 読売 | [広告] 神経病 精神病専門/東京府下小松川 小松川精神病院                                 | 1902 | 明治35 | 1  | 19 | 広告 | 朝刊    | 5 |
| 387 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊椎病 神経病 精神病                                      | 1902 | 明治35 | 1  | 22 | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 388 | 朝日 | (広告) 東京戸山病院 精神病 神経病                                            | 1902 | 明治35 | 2  | 1  | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 389 | 朝日 | (広告) 本舗 金沢巖 特約 大木合名会社 胃病 脳神経病 健胃血精                             | 1902 | 明治35 | 2  | 8  | 広告 | 東京/朝刊 | 4 |
| 390 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病                                      | 1902 | 明治35 | 2  | 9  | 広告 | 東京/朝刊 | 4 |
| 391 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 神経病 精神病                                           | 1902 | 明治35 | 2  | 13 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 392 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病                                      | 1902 | 明治35 | 2  | 17 | 広告 | 東京/朝刊 | 4 |
| 393 | 朝日 | (広告) 本舗 医科大学薬学卒業薬学得業士 金沢巖 特約 大木合名会社 健胃血精 胃病 脳神経病               | 1902 | 明治35 | 2  | 17 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 394 | 朝日 | (広告) 本舗 薬学得業士 金沢巖 特約 大木合名会社 健胃血精 胃病 脳神経病                       | 1902 | 明治35 | 2  | 19 | 広告 | 東京/朝刊 | 4 |
| 395 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病                                      | 1902 | 明治35 | 2  | 23 | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 396 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脊髄病 神経病 精神病                                         | 1902 | 明治35 | 2  | 28 | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 397 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病                                      | 1902 | 明治35 | 3  | 9  | 広告 | 東京/朝刊 | 4 |
| 398 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 神経病 精神病                                           | 1902 | 明治35 | 3  | 9  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 399 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか                                        | 1902 | 明治35 | 3  | 16 | 広告 | 東京/朝刊 | 4 |
| 400 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 神経病 精神病                                           | 1902 | 明治35 | 3  | 20 | 広告 | 東京/朝刊 | 4 |
| 401 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病                                      | 1902 | 明治35 | 3  | 23 | 広告 | 東京/朝刊 | 4 |
| 402 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 精神病神経病専門                                          | 1902 | 明治35 | 4  | 3  | 広告 | 東京/朝刊 | 4 |
| 403 | 読売 | [広告] 医療機関 精神病神経病専門/小松川精神病院                                     | 1902 | 明治35 | 4  | 4  | 広告 | 朝刊    | 6 |
| 404 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病                                      | 1902 | 明治35 | 4  | 6  | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 405 | 読売 | [広告] 医療機関 脳病 脊髄病 神経病 精神病専門/東京田端 東京脳病院                          | 1902 | 明治35 | 4  | 6  | 広告 | 朝刊    | 8 |
| 406 | 読売 | [広告] 脳病 脊髄病 神経諸病専門 電気療法水治法/神田淡路町 宇津木病院                         | 1902 | 明治35 | 4  | 7  | 広告 | 朝刊    | 4 |
| 407 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 精神病 神経病専門                                         | 1902 | 明治35 | 4  | 12 | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 408 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病                                          | 1902 | 明治35 | 4  | 13 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 409 | 朝日 | (広告) 宇津木病院 脳脊髄神経病者専門 電気療法水治療                                   | 1902 | 明治35 | 4  | 13 | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 410 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病脊髄病神経病                                            | 1902 | 明治35 | 4  | 27 | 広告 | 東京/朝刊 | 4 |
| 411 | 読売 | [広告] 脳病、脊髄病、神経病/北豊島郡滝野川村田端 東京脳病院                               | 1902 | 明治35 | 5  | 4  | 広告 | 朝刊    | 7 |
| 412 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病脊髄病神経病                                            | 1902 | 明治35 | 5  | 12 | 広告 | 東京/朝刊 | 4 |
| 413 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 精神病 神経病専門                                         | 1902 | 明治35 | 5  | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 414 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病                                          | 1902 | 明治35 | 5  | 25 | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 415 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病                                          | 1902 | 明治35 | 6  | 1  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 416 | 朝日 | (広告) 発行所 柳沢薬館 大木本店 大木合名会社 脳病神経病 ブライン                           | 1902 | 明治35 | 6  | 2  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 417 | 朝日 | (広告) 本舗 金沢巖 特約 大木合名会社 大木口哲 帝国堂ほか 胃病脳 神経病 健胃血精                  | 1902 | 明治35 | 6  | 2  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 418 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 精神病神経病専門                                          | 1902 | 明治35 | 6  | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 419 | 朝日 | (広告) 本舗 金沢巖 特約 大木合名会社 大木口哲 帝国堂ほか 胃病脳神経病薬 血精                    | 1902 | 明治35 | 6  | 7  | 広告 | 東京/朝刊 | 4 |
| 420 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病専門                                    | 1902 | 明治35 | 6  | 9  | 広告 | 東京/朝刊 | 4 |
| 421 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊椎病 神経病ほか                                        | 1902 | 明治35 | 6  | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 4 |
| 422 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 精神病 神経病専門                                         | 1902 | 明治35 | 6  | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 423 | 読売 | [広告] 精神病 神経病/小松川精神病院                                           | 1902 | 明治35 | 7  | 4  | 広告 | 朝刊    | 5 |
| 424 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病                                          | 1902 | 明治35 | 7  | 6  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 425 | 朝日 | (広告) 本舗 薬学得業士 金沢巖 特約 大木 大木本店 健胃血精 独逸柏林市処方方 ドイツ ヘルリン 胃病 脳神経病 全治 | 1902 | 明治35 | 7  | 11 | 広告 | 東京/朝刊 | 4 |
| 426 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病                                      | 1902 | 明治35 | 7  | 13 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 427 | 読売 | [広告] 内科 特に脳脊髄神経病/日本橋区 ドクトル・メジチーネ 峰秀世                           | 1902 | 明治35 | 7  | 16 | 広告 | 朝刊    | 3 |
| 428 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 能病脊髄病神経病精神病専門                                       | 1902 | 明治35 | 7  | 27 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 429 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 精神病神経病専門                                          | 1902 | 明治35 | 8  | 1  | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 430 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病脊髄病神経病精神病                                         | 1902 | 明治35 | 8  | 4  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 431 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病脊髄病神経病                                            | 1902 | 明治35 | 8  | 10 | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 432 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 精神病神経病専門                                          | 1902 | 明治35 | 8  | 13 | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 433 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病脊髄病神経病! 精神病! 専門                                   | 1902 | 明治35 | 8  | 17 | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 434 | 朝日 | (広告) 宝順堂 猿の頭黒焼 婦人血のみち 神経病                                      | 1902 | 明治35 | 9  | 2  | 広告 | 東京/朝刊 | 3 |
| 435 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 精神病・神経病専門                                         | 1902 | 明治35 | 9  | 3  | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 436 | 朝日 | (広告) 宇津木病院 脳脊髄神経病 電気療法水治法                                      | 1902 | 明治35 | 9  | 8  | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 437 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病                                      | 1902 | 明治35 | 9  | 14 | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 438 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 精神病 神経病                                           | 1902 | 明治35 | 9  | 16 | 広告 | 東京/朝刊 | 4 |

| 番   | 社名 | タイトル                                              | 発行日  |      |    |     | 種別 | 社/刊種  | 面 |
|-----|----|---------------------------------------------------|------|------|----|-----|----|-------|---|
|     |    |                                                   | 西暦   | 和暦   | 月  | 日   |    |       |   |
| 439 | 朝日 | (広告) 宇津木病院 脳脊髄神経病                                 | 1902 | 明治35 | 9  | 18  | 広告 | 東京/朝刊 | 4 |
| 440 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病                         | 1902 | 明治35 | 9  | 28  | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 441 | 読売 | [広告] 神経病・精神病/田端 東京脳病院                             | 1902 | 明治35 | 9  | 28  | 広告 | 朝刊    | 8 |
| 442 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 神経病 神経病専門                            | 1902 | 明治35 | 10 | 2   | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 443 | 読売 | [広告] 精神病・神経病専門/小松川精神病院                            | 1902 | 明治35 | 10 | 2   | 広告 | 朝刊    | 6 |
| 444 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病                         | 1902 | 明治35 | 10 | 5   | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 445 | 読売 | [広告] 脳脊髄神経病/山田病院                                  | 1902 | 明治35 | 10 | 9   | 広告 | 朝刊    | 6 |
| 446 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか                           | 1902 | 明治35 | 10 | 12  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 447 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 精神病神経病専門                             | 1902 | 明治35 | 10 | 17  | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 448 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか                           | 1902 | 明治35 | 10 | 19  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 449 | 朝日 | (広告) 小松川精伸病院 精神病神経病専門                             | 1902 | 明治35 | 10 | 20  | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 450 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか                           | 1902 | 明治35 | 10 | 26  | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 451 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病                         | 1902 | 明治35 | 11 | 2   | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 452 | 読売 | [広告] 脳病 脊髄病 神経病 精神科/東京脳病院                         | 1902 | 明治35 | 11 | 2   | 広告 | 朝刊    | 7 |
| 453 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 精神病神経病専門                             | 1902 | 明治35 | 11 | 6   | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 454 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 精神病 神経病                              | 1902 | 明治35 | 11 | 15  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 455 | 読売 | [広告] 精神病神経病専門/小松川精神病院                             | 1902 | 明治35 | 11 | 15  | 広告 | 朝刊    | 6 |
| 456 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病                             | 1902 | 明治35 | 11 | 16  | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 457 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病、脊髄病、神経病、精神病専門                       | 1902 | 明治35 | 11 | 23  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 458 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 精神病 神経病専門                            | 1902 | 明治35 | 12 | 6   | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 459 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病                             | 1902 | 明治35 | 12 | 14  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 460 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 精神病 神経病                              | 1902 | 明治35 | 12 | 15  | 広告 | 東京/朝刊 | 4 |
| 461 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病                         | 1902 | 明治35 | 12 | 28  | 広告 | 東京/朝刊 | 4 |
| 462 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 精神病 神経病                              | 1903 | 明治36 | 1  | 5   | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 463 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病                         | 1903 | 明治36 | 1  | 9   | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 464 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病専門                       | 1903 | 明治36 | 1  | 11  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 465 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 精神病 神経病                              | 1903 | 明治36 | 1  | 16  | 広告 | 東京/朝刊 | 4 |
| 466 | 朝日 | (広告) 宇津木病院 脳脊髄神経病専門 電気療法水治法                       | 1903 | 明治36 | 1  | 17  | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 467 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病                             | 1903 | 明治36 | 1  | 18  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 468 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病脊髄病神経病 精神病                           | 1903 | 明治36 | 1  | 25  | 広告 | 東京/朝刊 | 4 |
| 469 | 読売 | [広告] 精神病、神経病専門/東京府下小松川 小松川精神病院                    | 1903 | 明治36 | 1  | 116 | 広告 | 朝刊    | 3 |
| 470 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病脊髄病神経病                               | 1903 | 明治36 | 2  | 1   | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 471 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 精神病 神経病                              | 1903 | 明治36 | 2  | 4   | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 472 | 朝日 | (広告) 宇津木病院 脳脊髄神経病                                 | 1903 | 明治36 | 2  | 5   | 広告 | 東京/朝刊 | 4 |
| 473 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病                             | 1903 | 明治36 | 2  | 8   | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 474 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 精神病神経病専門                             | 1903 | 明治36 | 2  | 16  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 475 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病                             | 1903 | 明治36 | 2  | 22  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 476 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病脊髄病神経病精神病専門                          | 1903 | 明治36 | 3  | 1   | 広告 | 東京/朝刊 | 4 |
| 477 | 朝日 | (広告) 東京神系経病院 理学的療法 脳脊体神経病                         | 1903 | 明治36 | 3  | 2   | 広告 | 東京/朝刊 | 4 |
| 478 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 精神病神経病専門                             | 1903 | 明治36 | 3  | 4   | 広告 | 東京/朝刊 | 4 |
| 479 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病脊髄病神経病精神病専門病院                        | 1903 | 明治36 | 3  | 8   | 広告 | 東京/朝刊 | 4 |
| 480 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか                           | 1903 | 明治36 | 3  | 15  | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 481 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 精神病 神経病専門                            | 1903 | 明治36 | 3  | 16  | 広告 | 東京/朝刊 | 4 |
| 482 | 読売 | [広告] 医療機関 脳病脊髄病神経病! 精神病! 専門/東京田端 東京脳病院            | 1903 | 明治36 | 3  | 22  | 広告 | 朝刊    | 1 |
| 483 | 読売 | [広告] 医療機関 精神病、神経病専門/東京府下小松川 小松川精神病院               | 1903 | 明治36 | 4  | 4   | 広告 | 朝刊    | 6 |
| 484 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳 脊髄 神経病                               | 1903 | 明治36 | 4  | 6   | 広告 | 東京/朝刊 | 4 |
| 485 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか                           | 1903 | 明治36 | 4  | 12  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 486 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 精神病 神経病専門                            | 1903 | 明治36 | 4  | 16  | 広告 | 東京/朝刊 | 4 |
| 487 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病専門                       | 1903 | 明治36 | 4  | 19  | 広告 | 東京/朝刊 | 4 |
| 488 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病                             | 1903 | 明治36 | 4  | 26  | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 489 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか                           | 1903 | 明治36 | 5  | 10  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 490 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 精神病 神経病専門                            | 1903 | 明治36 | 5  | 10  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 491 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 脳病 精神病 脊髄神経病                           | 1903 | 明治36 | 5  | 12  | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 492 | 読売 | [広告] 脳病 精神病 脊髄神経病/東京市神田区 帝国脳病院、斎藤紀一院長             | 1903 | 明治36 | 5  | 22  | 広告 | 朝刊    | 5 |
| 493 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病                         | 1903 | 明治36 | 5  | 26  | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 494 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 精神病神経病専門                             | 1903 | 明治36 | 6  | 3   | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 495 | 読売 | [広告] 精神病、神経病専門/小松川精神病院                            | 1903 | 明治36 | 6  | 3   | 広告 | 朝刊    | 6 |
| 496 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか                           | 1903 | 明治36 | 6  | 7   | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 497 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病                         | 1903 | 明治36 | 6  | 14  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 498 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 精神病 神経病                              | 1903 | 明治36 | 6  | 16  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 499 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病専門                       | 1903 | 明治36 | 6  | 21  | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 500 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病                         | 1903 | 明治36 | 6  | 28  | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 501 | 朝日 | (広告) 本舗 丹平商会薬房 代理店 大木合名会社 津村順天堂 福井甚蔵薬店 健脳丸 脳病 神経病 | 1903 | 明治36 | 7  | 1   | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |

| 番   | 社名 | タイトル                                      | 発行日  |      |    |    | 種別 | 社/刊種  | 面 |
|-----|----|-------------------------------------------|------|------|----|----|----|-------|---|
|     |    |                                           | 西暦   | 和暦   | 月  | 日  |    |       |   |
| 502 | 読売 | [広告] 精神疾患専門/東京府南葛飾郡小松川村 小松川精神病院           | 1903 | 明治36 | 7  | 3  | 広告 | 朝刊    | 1 |
| 503 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 精神病 神経病 専門                   | 1903 | 明治36 | 7  | 4  | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 504 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病                     | 1903 | 明治36 | 7  | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 505 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 脳病 精神病 脊髄 神経病                  | 1903 | 明治36 | 7  | 8  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 506 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 脳病 精神病 脊髄 神経病専門                | 1903 | 明治36 | 7  | 11 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 507 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病専門               | 1903 | 明治36 | 7  | 12 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 508 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 精神病 神経病                      | 1903 | 明治36 | 7  | 17 | 広告 | 東京/朝刊 | 4 |
| 509 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊椎病 神経病                     | 1903 | 明治36 | 7  | 19 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 510 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳脊髄神経病                         | 1903 | 明治36 | 7  | 26 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 511 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 脳病 精神病 脊髄 神経病                  | 1903 | 明治36 | 8  | 2  | 広告 | 東京/朝刊 | 4 |
| 512 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病                 | 1903 | 明治36 | 8  | 2  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 513 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 脳病 精神病 脊髄 神経病専門                | 1903 | 明治36 | 8  | 9  | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 514 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病脊髄病神経病! 精神病! 専門              | 1903 | 明治36 | 8  | 9  | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 515 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 精神病神経病専門                     | 1903 | 明治36 | 8  | 12 | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 516 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 脳病 精神病 脊髄 神経病専門                | 1903 | 明治36 | 8  | 16 | 広告 | 東京/朝刊 | 4 |
| 517 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病脊髄病神経病! 精神病! 専門              | 1903 | 明治36 | 8  | 16 | 広告 | 東京/朝刊 | 4 |
| 518 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 精神病神経病専門                     | 1903 | 明治36 | 8  | 21 | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 519 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 脳病 精神病 脊髄 神経病                  | 1903 | 明治36 | 8  | 23 | 広告 | 東京/朝刊 | 4 |
| 520 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病                     | 1903 | 明治36 | 8  | 23 | 広告 | 東京/朝刊 | 4 |
| 521 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 精神病 神経病                      | 1903 | 明治36 | 9  | 3  | 広告 | 東京/朝刊 | 4 |
| 522 | 読売 | [広告] 精神疾患、神経病専門/南葛飾郡小松川村 小松川精神病院          | 1903 | 明治36 | 9  | 4  | 広告 | 朝刊    | 6 |
| 523 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか                   | 1903 | 明治36 | 9  | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 524 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 精神病・神経病専門                    | 1903 | 明治36 | 9  | 13 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 525 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 増築落成 脳病 脊髄病 神経病                | 1903 | 明治36 | 9  | 26 | 広告 | 東京/朝刊 | 4 |
| 526 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 増築落成 脳病 脊髄病 神経病ほか              | 1903 | 明治36 | 10 | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 4 |
| 527 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 精神病 神経病専門                    | 1903 | 明治36 | 10 | 6  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 528 | 朝日 | (広告) 青山病院 精神病専門 院長 斎藤紀一 帝国脳病院 脳脊髄 神経病専門   | 1903 | 明治36 | 10 | 8  | 広告 | 東京/朝刊 | 4 |
| 529 | 朝日 | (広告) 青山病院 精神病専門 院長 斎藤紀一 帝国脳病院 脳脊髄神経病専門    | 1903 | 明治36 | 10 | 11 | 広告 | 東京/朝刊 | 4 |
| 530 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病                 | 1903 | 明治36 | 10 | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 4 |
| 531 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 精神病・神経病専門                    | 1903 | 明治36 | 10 | 16 | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 532 | 朝日 | (広告) 青山病院 精神病専門 帝国脳病院 脳脊髄・神経病専門           | 1903 | 明治36 | 10 | 17 | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 533 | 朝日 | (広告) 青山病院 精神病専門 帝国脳病院 脳脊髄神経病専門            | 1903 | 明治36 | 10 | 25 | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 534 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病専門 増築落成          | 1903 | 明治36 | 10 | 25 | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 535 | 朝日 | (広告) 青山病院 精神病専門 帝国脳病院 脳脊髄神経病専門            | 1903 | 明治36 | 11 | 1  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 536 | 読売 | [広告] 精神病 神経病/東京小松川 小松川精神病院                | 1903 | 明治36 | 11 | 3  | 広告 | 朝刊    | 6 |
| 537 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病脊髄病神経病精神病専門                  | 1903 | 明治36 | 11 | 6  | 広告 | 東京/朝刊 | 3 |
| 538 | 読売 | [広告] 内科 脳脊髄 神経病/日本橋区品川町 榎田医院 院長 榎田亀一郎     | 1903 | 明治36 | 11 | 17 | 広告 | 朝刊    | 5 |
| 539 | 朝日 | (広告) 鎌倉養生院 内科 脳脊髄神経病                      | 1903 | 明治36 | 11 | 22 | 広告 | 東京/朝刊 | 3 |
| 540 | 朝日 | (広告) 本舗 薬剤師 小西久兵衛 次亜燐 肺病 肋膜炎 貧血 衰弱 脚気 神経病 | 1903 | 明治36 | 12 | 2  | 広告 | 東京/朝刊 | 4 |
| 541 | 朝日 | (広告) 東京精神病院 脳病 脊髄病 神経病                    | 1903 | 明治36 | 12 | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 542 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 精神病 神経病                      | 1903 | 明治36 | 12 | 9  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 543 | 朝日 | (広告) 青山病院 精神病専門 脳脊髄神経病専門 帝国脳病院            | 1903 | 明治36 | 12 | 13 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 544 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病                     | 1903 | 明治36 | 12 | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 545 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 精神病 神経病専門                    | 1903 | 明治36 | 12 | 16 | 広告 | 東京/朝刊 | 4 |
| 546 | 朝日 | (広告) 青山病院 帝国脳病院 精神病 脳脊髄神経病                | 1903 | 明治36 | 12 | 20 | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 547 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病                 | 1903 | 明治36 | 12 | 25 | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 548 | 朝日 | (広告) 精神病専門青山病院 脳脊髄神経病専門 帝国脳病院             | 1903 | 明治36 | 12 | 27 | 広告 | 東京/朝刊 | 4 |
| 549 | 読売 | [広告] 精神病/東京青山 青山病院▽脳脊髄 神経病/東京神田 帝国脳病院     | 1903 | 明治36 | 12 | 28 | 広告 | 朝刊    | 4 |
| 550 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか                   | 1904 | 明治37 | 1  | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 551 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 精神病 神経病                      | 1904 | 明治37 | 1  | 8  | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 552 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 脳脊髄 神経病専門 青山病院 精神病専門           | 1904 | 明治37 | 1  | 11 | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 553 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 増築落成 脳病 脊髄病 神経病                | 1904 | 明治37 | 1  | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 554 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 精神病 神経病専門                    | 1904 | 明治37 | 1  | 17 | 広告 | 東京/朝刊 | 4 |
| 555 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 脳脊髄神経病 青山病院                    | 1904 | 明治37 | 1  | 17 | 広告 | 東京/朝刊 | 4 |
| 556 | 朝日 | (広告) 精神病専門 青山病院 脳脊髄神経病専門 帝国脳病院            | 1904 | 明治37 | 1  | 24 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 557 | 朝日 | (広告) 青山病院 精神病専門 帝国脳病院 脳脊髄神経病              | 1904 | 明治37 | 1  | 30 | 広告 | 東京/朝刊 | 4 |
| 558 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 精神病 神経病                      | 1904 | 明治37 | 2  | 4  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 559 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 精神病 神経病                        | 1904 | 明治37 | 2  | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 560 | 朝日 | (広告) 青山病院 帝国脳病院 精神病 神経病                   | 1904 | 明治37 | 2  | 7  | 広告 | 東京/朝刊 | 3 |
| 561 | 読売 | [広告] 精神病、神経病専門/小松川精神病院                    | 1904 | 明治37 | 2  | 8  | 広告 | 朝刊    | 4 |
| 562 | 朝日 | (広告) 青山病院 精神病 帝国脳病院 脳脊髄 神経病               | 1904 | 明治37 | 2  | 14 | 広告 | 東京/朝刊 | 4 |
| 563 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 精神病 神経病                      | 1904 | 明治37 | 2  | 14 | 広告 | 東京/朝刊 | 4 |
| 564 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 青山病院 精神病 脳脊髄 神経病               | 1904 | 明治37 | 2  | 21 | 広告 | 東京/朝刊 | 4 |

| 番   | 社名 | タイトル                                 | 発行日  |      |    |    | 種別 | 社 / 刊種  | 面 |
|-----|----|--------------------------------------|------|------|----|----|----|---------|---|
|     |    |                                      | 西暦   | 和暦   | 月  | 日  |    |         |   |
| 565 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 神経病                    | 1904 | 明治37 | 2  | 25 | 広告 | 東京 / 朝刊 | 4 |
| 566 | 朝日 | (広告) 青山病院 精神病 帝国脳病院 脳脊髄神経病           | 1904 | 明治37 | 2  | 28 | 広告 | 東京 / 朝刊 | 8 |
| 567 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 増築落成 脳病 脊髄病 神経病ほか         | 1904 | 明治37 | 3  | 5  | 広告 | 東京 / 朝刊 | 4 |
| 568 | 朝日 | (広告) 青山病院 精神病専門 帝国脳病院 脳脊髄 神経病専門      | 1904 | 明治37 | 3  | 6  | 広告 | 東京 / 朝刊 | 8 |
| 569 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 精神病 神経病専門               | 1904 | 明治37 | 3  | 8  | 広告 | 東京 / 朝刊 | 8 |
| 570 | 朝日 | (広告) 青山病院 精神病専門 帝国脳病院 脳脊髄 神経病        | 1904 | 明治37 | 3  | 13 | 広告 | 東京 / 朝刊 | 7 |
| 571 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 精神病 脳病 脊髄病 神経病            | 1904 | 明治37 | 3  | 15 | 広告 | 東京 / 朝刊 | 4 |
| 572 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 精神病 神経病専門               | 1904 | 明治37 | 3  | 17 | 広告 | 東京 / 朝刊 | 8 |
| 573 | 朝日 | (広告) 精神病専門 青山病院 脳脊髄 神経病専門 帝国脳病院      | 1904 | 明治37 | 3  | 20 | 広告 | 東京 / 朝刊 | 4 |
| 574 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 増築落成 脳病脊髄病神経病ほか           | 1904 | 明治37 | 4  | 15 | 広告 | 東京 / 朝刊 | 8 |
| 575 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 精神病神経病                  | 1904 | 明治37 | 4  | 16 | 広告 | 東京 / 朝刊 | 8 |
| 576 | 朝日 | (広告) 青山病院 帝国脳病院 精神病 脳脊髄神経病           | 1904 | 明治37 | 4  | 17 | 広告 | 東京 / 朝刊 | 4 |
| 577 | 朝日 | (広告) 青山病院 帝国脳病院 精神病 脳脊髄神経病           | 1904 | 明治37 | 4  | 24 | 広告 | 東京 / 朝刊 | 8 |
| 578 | 朝日 | (広告) 青山病院 帝国脳病院 精神病 脳脊髄 神経病          | 1904 | 明治37 | 5  | 1  | 広告 | 東京 / 朝刊 | 4 |
| 579 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 精神病 神経病                 | 1904 | 明治37 | 5  | 3  | 広告 | 東京 / 朝刊 | 7 |
| 580 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病            | 1904 | 明治37 | 5  | 5  | 広告 | 東京 / 朝刊 | 8 |
| 581 | 朝日 | (広告) 青山病院 帝国脳病院 精神病 脳脊髄神経病           | 1904 | 明治37 | 5  | 8  | 広告 | 東京 / 朝刊 | 8 |
| 582 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 精神病 神経病                 | 1904 | 明治37 | 5  | 13 | 広告 | 東京 / 朝刊 | 8 |
| 583 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病 専門 脳病室増築落成 | 1904 | 明治37 | 5  | 15 | 広告 | 東京 / 朝刊 | 8 |
| 584 | 朝日 | (広告) 青山病院 帝国脳病院 精神病専門 脳脊髄 神経病        | 1904 | 明治37 | 5  | 22 | 広告 | 東京 / 朝刊 | 8 |
| 585 | 朝日 | (広告) 東京能病院 脳病 脊髄病 神経病                | 1904 | 明治37 | 5  | 25 | 広告 | 東京 / 朝刊 | 8 |
| 586 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 精神病, 神経病, 専門            | 1904 | 明治37 | 6  | 4  | 広告 | 東京 / 朝刊 | 8 |
| 587 | 朝日 | (広告) 青山病院 精神病専門 帝国脳病院 脳脊髄神経病専門       | 1904 | 明治37 | 6  | 5  | 広告 | 東京 / 朝刊 | 7 |
| 588 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病            | 1904 | 明治37 | 6  | 5  | 広告 | 東京 / 朝刊 | 7 |
| 589 | 読売 | [広告] 脳病、脊髄病、神経病、精神病専門 / 東京脳病院        | 1904 | 明治37 | 6  | 5  | 広告 | 朝刊      | 6 |
| 590 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 精神病 神経病専門               | 1904 | 明治37 | 6  | 14 | 広告 | 東京 / 朝刊 | 8 |
| 591 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか              | 1904 | 明治37 | 6  | 15 | 広告 | 東京 / 朝刊 | 4 |
| 592 | 朝日 | (広告) 青山病院 精神病専門 帝国脳病院 脳脊髄 神経病専門      | 1904 | 明治37 | 6  | 19 | 広告 | 東京 / 朝刊 | 8 |
| 593 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病            | 1904 | 明治37 | 6  | 25 | 広告 | 東京 / 朝刊 | 4 |
| 594 | 朝日 | (広告) 青山病院 帝国脳病院 精神病 脳脊髄 神経病専門        | 1904 | 明治37 | 6  | 26 | 広告 | 東京 / 朝刊 | 8 |
| 595 | 朝日 | (広告) 青山病院 精神病 / 帝国脳病院 脳脊髄神経病         | 1904 | 明治37 | 7  | 3  | 広告 | 東京 / 朝刊 | 7 |
| 596 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 精神病神経病専門                | 1904 | 明治37 | 7  | 3  | 広告 | 東京 / 朝刊 | 8 |
| 597 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病脊髄病神経病精神病               | 1904 | 明治37 | 7  | 5  | 広告 | 東京 / 朝刊 | 4 |
| 598 | 朝日 | (広告) 青山病院 精神病専門 / 帝国脳病院 脳脊髄・神経病専門    | 1904 | 明治37 | 7  | 10 | 広告 | 東京 / 朝刊 | 7 |
| 599 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 精神病・神経病専門               | 1904 | 明治37 | 7  | 13 | 広告 | 東京 / 朝刊 | 7 |
| 600 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病                | 1904 | 明治37 | 7  | 15 | 広告 | 東京 / 朝刊 | 7 |
| 601 | 朝日 | (広告) 青山病院 精神病専門 / 帝国脳病院 脳脊髄神経病専門     | 1904 | 明治37 | 7  | 24 | 広告 | 東京 / 朝刊 | 8 |
| 602 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病脊髄病神経病精神病専門             | 1904 | 明治37 | 7  | 25 | 広告 | 東京 / 朝刊 | 4 |
| 603 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 精神病 神経病専門               | 1904 | 明治37 | 8  | 3  | 広告 | 東京 / 朝刊 | 8 |
| 604 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病                | 1904 | 明治37 | 8  | 5  | 広告 | 東京 / 朝刊 | 8 |
| 605 | 読売 | [広告] 精神病 神経病 / 東京 小松川精神病院            | 1904 | 明治37 | 8  | 8  | 広告 | 朝刊      | 4 |
| 606 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 精神病神経病専門                | 1904 | 明治37 | 8  | 13 | 広告 | 東京 / 朝刊 | 8 |
| 607 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 青山病院 精神病 神経病              | 1904 | 明治37 | 8  | 14 | 広告 | 東京 / 朝刊 | 8 |
| 608 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病                | 1904 | 明治37 | 8  | 15 | 広告 | 東京 / 朝刊 | 4 |
| 609 | 朝日 | (広告) 青山病院 精神病 帝国脳病院 脳脊髄 神経病          | 1904 | 明治37 | 8  | 21 | 広告 | 東京 / 朝刊 | 4 |
| 610 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病                | 1904 | 明治37 | 8  | 25 | 広告 | 東京 / 朝刊 | 4 |
| 611 | 朝日 | (広告) 青山病院 精神病専門 帝国脳病院 脳脊髄 神経病専門      | 1904 | 明治37 | 8  | 28 | 広告 | 東京 / 朝刊 | 4 |
| 612 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 精神病神経病専門                | 1904 | 明治37 | 9  | 1  | 広告 | 東京 / 朝刊 | 7 |
| 613 | 朝日 | (広告) 青山病院 精神病専門 帝国脳病院 脳脊髄神経病専門       | 1904 | 明治37 | 9  | 4  | 広告 | 東京 / 朝刊 | 8 |
| 614 | 朝日 | (広告) 青山病院 帝国脳病院 精神病 脳脊髄神経病           | 1904 | 明治37 | 9  | 11 | 広告 | 東京 / 朝刊 | 8 |
| 615 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 精神病神経病専門                | 1904 | 明治37 | 9  | 11 | 広告 | 東京 / 朝刊 | 8 |
| 616 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか              | 1904 | 明治37 | 9  | 15 | 広告 | 東京 / 朝刊 | 7 |
| 617 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 脳脊髄神経病専門 青山病院 精神病専門       | 1904 | 明治37 | 9  | 18 | 広告 | 東京 / 朝刊 | 4 |
| 618 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 脳脊髄神経病専門 青山病院 精神病専門       | 1904 | 明治37 | 9  | 25 | 広告 | 東京 / 朝刊 | 4 |
| 619 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか              | 1904 | 明治37 | 9  | 25 | 広告 | 東京 / 朝刊 | 4 |
| 620 | 朝日 | (広告) 青山病院 精神病専門 帝国脳病院 脳脊髄神経病専門       | 1904 | 明治37 | 10 | 2  | 広告 | 東京 / 朝刊 | 8 |
| 621 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病・脊髄病・神経病・精神病専門          | 1904 | 明治37 | 10 | 5  | 広告 | 東京 / 朝刊 | 4 |
| 622 | 朝日 | (広告) 青山病院 帝国脳病院 精神病 脳脊髄 神経病          | 1904 | 明治37 | 10 | 9  | 広告 | 東京 / 朝刊 | 8 |
| 623 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病                | 1904 | 明治37 | 10 | 15 | 広告 | 東京 / 朝刊 | 4 |
| 624 | 朝日 | (広告) 青山病院 精神病 帝国脳病院 脳脊髄 神経病          | 1904 | 明治37 | 10 | 16 | 広告 | 東京 / 朝刊 | 8 |
| 625 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 精神病 神経病                 | 1904 | 明治37 | 10 | 20 | 広告 | 東京 / 朝刊 | 8 |
| 626 | 朝日 | (広告) 青山病院 精神病 帝国脳病院 脳脊髄 神経病          | 1904 | 明治37 | 10 | 23 | 広告 | 東京 / 朝刊 | 8 |
| 627 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 精神病神経病専門                | 1904 | 明治37 | 10 | 24 | 広告 | 東京 / 朝刊 | 8 |

| 番   | 社名 | タイトル                                                  | 発行日  |      |    |    | 種別 | 社/刊種  | 面 |
|-----|----|-------------------------------------------------------|------|------|----|----|----|-------|---|
|     |    |                                                       | 西暦   | 和暦   | 月  | 日  |    |       |   |
| 628 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病                             | 1904 | 明治37 | 10 | 25 | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 629 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病                             | 1904 | 明治37 | 11 | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 630 | 読売 | [広告] 精神病専門/青山病院▽脳脊髄神経病専門 帝国脳病院                        | 1904 | 明治37 | 11 | 6  | 広告 | 朝刊    | 8 |
| 631 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 精神病 神経病                                  | 1904 | 明治37 | 11 | 11 | 広告 | 東京/朝刊 | 4 |
| 632 | 読売 | [広告] 内科一般特に脳脊髄神経病/峯内科医院 院長 峯秀世                        | 1904 | 明治37 | 11 | 16 | 広告 | 朝刊    | 6 |
| 633 | 朝日 | (広告) 青山病院 精神病専門 帝国脳病院 脳脊髄神経病専門                        | 1904 | 明治37 | 11 | 20 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 634 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 精神病 神経病 専門                               | 1904 | 明治37 | 11 | 21 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 635 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病                                 | 1904 | 明治37 | 11 | 25 | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 636 | 朝日 | (広告) 青山病院 帝国脳病院 精神病 脳脊髄 神経病                           | 1904 | 明治37 | 11 | 27 | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 637 | 朝日 | (広告) 青山病院 精神病 帝国脳病院 脳脊髄 神経病                           | 1904 | 明治37 | 12 | 4  | 広告 | 東京/朝刊 | 4 |
| 638 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病室増築落成 脳病脊髄病神経病ほか                         | 1904 | 明治37 | 12 | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 639 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 精神病神経病専門                                 | 1904 | 明治37 | 12 | 6  | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 640 | 朝日 | (広告) 精神病専門 青山病院 脳脊髄神経病専門 帝国脳病院 院長 ドクトル斎藤紀一            | 1904 | 明治37 | 12 | 18 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 641 | 読売 | [広告] 精神病 脳脊髄神経病/青山病院 帝国脳病院                            | 1905 | 明治38 | 1  | 1  | 広告 | 朝刊    | 6 |
| 642 | 朝日 | (広告) 青山病院 精神病専門 帝国脳病院 脳脊髄 神経病専門                       | 1905 | 明治38 | 1  | 8  | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 643 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 精神病 神経病 専門                               | 1905 | 明治38 | 1  | 8  | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 644 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病 増築落成                        | 1905 | 明治38 | 1  | 8  | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 645 | 朝日 | (広告) 鎌倉養生院 内科病一般 脳脊髄神経病 婦人科                           | 1905 | 明治38 | 1  | 13 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 646 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 増築落成 脳病 脊髄病 神経病 精神病                        | 1905 | 明治38 | 1  | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 647 | 朝日 | (広告) 青山病院 精神病専門 帝国脳病院 脳脊髄神経病専門 斎藤紀一 両院診察              | 1905 | 明治38 | 1  | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 648 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 精神病 神経病専門                                | 1905 | 明治38 | 1  | 17 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 649 | 朝日 | (広告) 青山病院 精神病専門 帝国脳病院 脳脊髄神経病専門 斎藤紀一 両院診察              | 1905 | 明治38 | 1  | 22 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 650 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脊髄病 神経病 精神病                                | 1905 | 明治38 | 1  | 25 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 651 | 朝日 | (広告) 鎌倉養生院 脳脊髄 神経病 婦人科 産科                             | 1905 | 明治38 | 1  | 29 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 652 | 朝日 | (広告) 青山病院 精神病専門 帝国脳病院 脳脊髄神経病専門 斎藤紀一 両院診察              | 1905 | 明治38 | 1  | 29 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 653 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病                             | 1905 | 明治38 | 2  | 6  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 654 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 精神病 神経病専門                                | 1905 | 明治38 | 2  | 13 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 655 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 脳脊髄 神経病 青山病院 精神病                           | 1905 | 明治38 | 2  | 13 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 656 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病                                 | 1905 | 明治38 | 2  | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 657 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 青山病院 脳脊髄神経病 精神病                            | 1905 | 明治38 | 2  | 19 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 658 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病専門                           | 1905 | 明治38 | 2  | 26 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 659 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 青山病院 脳脊髄神経病 精神病専門                          | 1905 | 明治38 | 2  | 26 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 660 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 精神病神経病専門                                 | 1905 | 明治38 | 3  | 3  | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 661 | 朝日 | (広告) 脳脊髄神経病 帝国脳病院 精神病専門青山病院                           | 1905 | 明治38 | 3  | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 662 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 増築落成 脳病脊髄病神経病ほか                            | 1905 | 明治38 | 3  | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 663 | 読売 | [広告] 医療 脳脊髄神経病/神田 帝国脳病院▽精神科専門/青山 青山病院                 | 1905 | 明治38 | 3  | 5  | 広告 | 朝刊    | 8 |
| 664 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 脳脊髄神経病 青山病院 精神病専門                          | 1905 | 明治38 | 3  | 12 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 665 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病                                 | 1905 | 明治38 | 3  | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 666 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 青山病院 農脊髄 神経病 精神病                           | 1905 | 明治38 | 3  | 19 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 667 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病、脊椎病、神経病、精神病専門                           | 1905 | 明治38 | 3  | 26 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 668 | 朝日 | (広告) 脳病脊髄病神経病 帝国脳病院 精神病専門 青山医院                        | 1905 | 明治38 | 3  | 26 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 669 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病                                 | 1905 | 明治38 | 4  | 6  | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 670 | 朝日 | (広告) 荒久保講習所 神経病 西洋按摩術                                 | 1905 | 明治38 | 4  | 8  | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 671 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 脳病 脊髄病 神経病 青山病院 精神病                        | 1905 | 明治38 | 4  | 9  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 672 | 朝日 | (広告) 小松川精神病院 精神病 神経病                                  | 1905 | 明治38 | 4  | 9  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 673 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病                             | 1905 | 明治38 | 4  | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 674 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 脳脊髄神経病                                     | 1905 | 明治38 | 4  | 16 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 675 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 脳脊髄 神経病 青山病院 精神病専門                         | 1905 | 明治38 | 4  | 23 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 676 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病                                 | 1905 | 明治38 | 4  | 25 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 677 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病                             | 1905 | 明治38 | 5  | 6  | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 678 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 脳脊髄神経病 青山病院 精神病専門                          | 1905 | 明治38 | 5  | 7  | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 679 | 読売 | [広告] 脳脊髄神経病/神田区和泉町 帝国脳病院▽精神病専門/青山病院                   | 1905 | 明治38 | 5  | 7  | 広告 | 朝刊    | 6 |
| 680 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 青山病院 神経病 精神病                               | 1905 | 明治38 | 5  | 14 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 681 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病                                 | 1905 | 明治38 | 5  | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 682 | 朝日 | (広告) 幸島医院 リョウマチス神経病                                   | 1905 | 明治38 | 5  | 22 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 683 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 脳脊髄神経病 青山病院 精神病専門                          | 1905 | 明治38 | 6  | 4  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 684 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病                             | 1905 | 明治38 | 6  | 7  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 685 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病                             | 1905 | 明治38 | 6  | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 686 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病                                 | 1905 | 明治38 | 6  | 25 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 687 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 脳脊髄 神経病 青山病院 精神病                           | 1905 | 明治38 | 7  | 2  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 688 | 朝日 | (広告) 本舗 丹平商会本店 丹平商会分店 特約店 大木会社 福井基蔵 中田支店ほか 健脳丸 脳病 神経病 | 1905 | 明治38 | 7  | 3  | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 689 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 青山病院 脳脊髄神経病 精神病                            | 1905 | 明治38 | 7  | 9  | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 690 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病脊髄病神経病                                   | 1905 | 明治38 | 7  | 10 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |

| 番   | 社名 | タイトル                                | 発行日  |      |    |    | 種別 | 社/刊種  | 面  |
|-----|----|-------------------------------------|------|------|----|----|----|-------|----|
|     |    |                                     | 西暦   | 和暦   | 月  | 日  |    |       |    |
| 691 | 朝日 | (広告) 櫻田医院 内科脳脊髄神経病                  | 1905 | 明治38 | 7  | 10 | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 692 | 朝日 | (広告) 鎌倉養生院 内科病脳脊髄神経病婦人科             | 1905 | 明治38 | 7  | 10 | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 693 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病脊髄病神経病                 | 1905 | 明治38 | 7  | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 694 | 朝日 | (広告) 鎌倉養生院 内科病一般脳脊髄神経病              | 1905 | 明治38 | 7  | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 695 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 青山病院 脳脊髄 神経病 精神病         | 1905 | 明治38 | 7  | 16 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 696 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 青山病院 脳脊髄 神経病 精神病         | 1905 | 明治38 | 7  | 23 | 広告 | 東京/朝刊 | 1  |
| 697 | 朝日 | (広告) 鎌倉養生院 内科病一般 脳脊髄神経病             | 1905 | 明治38 | 7  | 25 | 広告 | 東京/朝刊 | 1  |
| 698 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病               | 1905 | 明治38 | 7  | 25 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 699 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか             | 1905 | 明治38 | 8  | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 700 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 青山病院 脳脊髄 神経病 精神病         | 1905 | 明治38 | 8  | 6  | 広告 | 東京/朝刊 | 1  |
| 701 | 朝日 | (広告) 宇津木病院 脳脊髄神経病 内科                | 1905 | 明治38 | 8  | 6  | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 702 | 読売 | [広告] 書籍 後藤省吾著「脳病神経病衰弱療法」/ 神田鍛冶町 交益社 | 1905 | 明治38 | 8  | 10 | 広告 | 朝刊    | 6  |
| 703 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 脳脊髄 神経病 青山病院 精神病専門       | 1905 | 明治38 | 8  | 13 | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 704 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病               | 1905 | 明治38 | 8  | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 705 | 朝日 | (広告) 宇津木病院 脳脊髄神経病                   | 1905 | 明治38 | 8  | 17 | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 706 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 脳脊髄神経病 青山病院 精神病専門        | 1905 | 明治38 | 8  | 20 | 広告 | 東京/朝刊 | 1  |
| 707 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病室増築落成 脳病 脊髄病 神経病 精神病   | 1905 | 明治38 | 8  | 25 | 広告 | 東京/朝刊 | 1  |
| 708 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 青山病院 脳脊髄 神経病 精神病専門       | 1905 | 明治38 | 8  | 27 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 709 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病               | 1905 | 明治38 | 9  | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 710 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 青山病院 脳脊髄 神経病 精神病         | 1905 | 明治38 | 9  | 25 | 広告 | 東京/朝刊 | 8  |
| 711 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか 脳病室増築落成     | 1905 | 明治38 | 9  | 26 | 広告 | 東京/朝刊 | 11 |
| 712 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか             | 1905 | 明治38 | 9  | 28 | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 713 | 朝日 | (広告) 宇津木病院 脳脊髄病 神経病 内科              | 1905 | 明治38 | 9  | 28 | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 714 | 朝日 | (広告) 鎌倉養生院 内科 脳脊髄神経病 婦人科ほか          | 1905 | 明治38 | 9  | 28 | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 715 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 青山病院 脊髄病 神経病 精神病         | 1905 | 明治38 | 9  | 28 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 716 | 朝日 | (広告) 鎌倉養生院 内科 脳脊髄神経病 婦人科ほか          | 1905 | 明治38 | 9  | 29 | 広告 | 東京/朝刊 | 1  |
| 717 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 青山病院 脳脊髄神経病 精神病          | 1905 | 明治38 | 10 | 8  | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 718 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病           | 1905 | 明治38 | 10 | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 719 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 脳脊髄神経病 青山病院 精神病専門        | 1905 | 明治38 | 10 | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 720 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 青山病院 脳脊髄神経病 精神病専門        | 1905 | 明治38 | 10 | 22 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 721 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病           | 1905 | 明治38 | 10 | 25 | 広告 | 東京/朝刊 | 1  |
| 722 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 脳脊髄神経病 青山病院 精神病専門        | 1905 | 明治38 | 11 | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 723 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病           | 1905 | 明治38 | 11 | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 724 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 脳脊髄神経病 青山病院 精神病          | 1905 | 明治38 | 11 | 12 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 725 | 朝日 | (広告) 鎌倉養生院 内科 脳脊髄神経病 産科婦人科          | 1905 | 明治38 | 11 | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 1  |
| 726 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病           | 1905 | 明治38 | 11 | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 727 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 脳脊髄神経病 青山病院 精神病専門        | 1905 | 明治38 | 11 | 19 | 広告 | 東京/朝刊 | 1  |
| 728 | 朝日 | (広告) 王子精神病院 脳脊髄神経病室新設落成             | 1905 | 明治38 | 11 | 23 | 広告 | 東京/朝刊 | 1  |
| 729 | 朝日 | (広告) 鎌倉養生院 内科病一般 脳脊髄神経病 産科婦人科       | 1905 | 明治38 | 11 | 26 | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 730 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病           | 1905 | 明治38 | 11 | 26 | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 731 | 朝日 | (広告) 王子精神病院 精神病専門 脳脊髄神経病室新設落成       | 1905 | 明治38 | 11 | 26 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 732 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 脳脊髄神経病 青山病院 精神病専門        | 1905 | 明治38 | 11 | 26 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 733 | 朝日 | (広告) 王子精神病院 精神病専門 脳脊髄神経病室新設落成       | 1905 | 明治38 | 11 | 29 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 734 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 青山病院 脳脊髄 神経病 精神病         | 1905 | 明治38 | 12 | 3  | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 735 | 朝日 | (広告) 王子精神病院 脳脊髄神経病室新築落成             | 1905 | 明治38 | 12 | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 736 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか             | 1905 | 明治38 | 12 | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 737 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 青山病院 脳脊髄 神経病 精神病         | 1905 | 明治38 | 12 | 10 | 広告 | 東京/朝刊 | 1  |
| 738 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病               | 1905 | 明治38 | 12 | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 739 | 朝日 | (広告) 精神病専門王子精神病院 脳脊髄神経病室新設落成        | 1905 | 明治38 | 12 | 22 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 740 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 脳脊髄神経病 青山病院 精神病専門        | 1905 | 明治38 | 12 | 24 | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 741 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病           | 1906 | 明治39 | 1  | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 742 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 青山病院 脳脊髄 神経病 精神病         | 1906 | 明治39 | 1  | 6  | 広告 | 東京/朝刊 | 1  |
| 743 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 青山病院 脳脊髄 神経病 精神病         | 1906 | 明治39 | 1  | 10 | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 744 | 朝日 | (広告) 王子精神病院 脳 脊髄 神経病 精神病            | 1906 | 明治39 | 1  | 10 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 745 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 脳脊髄神経病 青山病院 精神病専門        | 1906 | 明治39 | 1  | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 1  |
| 746 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病           | 1906 | 明治39 | 1  | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 1  |
| 747 | 朝日 | (広告) 王子精神病院 脳脊髄神経病                  | 1906 | 明治39 | 1  | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 1  |
| 748 | 朝日 | (広告) 王子精神病院 精神病専門 脳脊髄神経病            | 1906 | 明治39 | 1  | 20 | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 749 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 脳脊髄神経病 青山病院 精神病専門        | 1906 | 明治39 | 1  | 22 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 750 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病・脊髄病・神経病 精神病専門         | 1906 | 明治39 | 1  | 25 | 広告 | 東京/朝刊 | 1  |
| 751 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか             | 1906 | 明治39 | 2  | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 752 | 朝日 | (広告) 王子精神病院 精神病専門 脳脊髄神経病室新設落成       | 1906 | 明治39 | 2  | 7  | 広告 | 東京/朝刊 | 1  |
| 753 | 朝日 | (広告) 王子精神病院 脳脊髄神経病室新設落成             | 1906 | 明治39 | 2  | 14 | 広告 | 東京/朝刊 | 1  |

| 番   | 社名 | タイトル                                          | 発行日  |      |    |    | 種別 | 社/刊種  | 面 |
|-----|----|-----------------------------------------------|------|------|----|----|----|-------|---|
|     |    |                                               | 西暦   | 和暦   | 月  | 日  |    |       |   |
| 754 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 神経病専門                              | 1906 | 明治39 | 2  | 17 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 755 | 朝日 | (広告) 宇津木病院 脳脊髄神経病ほか                           | 1906 | 明治39 | 2  | 20 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 756 | 朝日 | (広告) 王子精神病院 脳脊髄神経病室新設落成                       | 1906 | 明治39 | 2  | 23 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 757 | 朝日 | (広告) 福田 脳神経病全治情報提供                            | 1906 | 明治39 | 2  | 23 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 758 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病脊髄病神経病                           | 1906 | 明治39 | 2  | 25 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 759 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病                         | 1906 | 明治39 | 3  | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 760 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病脊髄病神経病                           | 1906 | 明治39 | 3  | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 761 | 朝日 | (広告) 丹平商会本店 丹平商会分店 脳病神経病 健脳丸                  | 1906 | 明治39 | 3  | 16 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 762 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病                         | 1906 | 明治39 | 3  | 25 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 763 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか                       | 1906 | 明治39 | 4  | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 764 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか                       | 1906 | 明治39 | 4  | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 765 | 朝日 | (広告) 王子精神病院 精神病専門 脳脊髄神経病室新設落成                 | 1906 | 明治39 | 4  | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 766 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 院長五等省吾 脳病脊髄病神経病精神病                 | 1906 | 明治39 | 5  | 6  | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 767 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 院長後藤省吾 脳病、脊髄病、神経病ほか                | 1906 | 明治39 | 5  | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 768 | 朝日 | (広告) 青山病院邸内帝国脳病院 院長ドクトル斎藤紀一 脳脊髄神経病専門          | 1906 | 明治39 | 5  | 20 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 769 | 朝日 | (広告) 丹平商会本店 丹平商会分店 健脳丸 脳病神経病全治新薬 全世界唯一 脳病薬之霸王 | 1906 | 明治39 | 6  | 4  | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 770 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病                     | 1906 | 明治39 | 6  | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 771 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病                     | 1906 | 明治39 | 6  | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 772 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病                     | 1906 | 明治39 | 6  | 25 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 773 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 院長 後藤省吾 脳病 脊髄病 神経病 精神病             | 1906 | 明治39 | 7  | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 774 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病脊髄病神経病ほか                         | 1906 | 明治39 | 7  | 25 | 広告 | 東京/朝刊 | 4 |
| 775 | 朝日 | (広告) 丹平商会 ろせつた丸の首途を祝す 健脳丸 脳病 神経病              | 1906 | 明治39 | 7  | 25 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 776 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病                     | 1906 | 明治39 | 8  | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 777 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病                         | 1906 | 明治39 | 8  | 25 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 778 | 読売 | [広告] 頭痛、神経病に「健能丸」                             | 1906 | 明治39 | 9  | 1  | 広告 | 朝刊    | 5 |
| 779 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病                     | 1906 | 明治39 | 9  | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 780 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病 専門治療                | 1906 | 明治39 | 9  | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 781 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 後藤省吾 脳病 脊髄病 神経病 精神病                | 1906 | 明治39 | 9  | 24 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 782 | 朝日 | (広告) 本家 丹平商会本店 分店 丹平商会分店 脳病 神経病 全治新薬 健脳丸      | 1906 | 明治39 | 9  | 26 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 783 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 院長後藤省吾 脳病・脊髄病・神経病・精神病専門治療          | 1906 | 明治39 | 10 | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 784 | 朝日 | (広告) 宇津木病院 脳病 脊髄病 神経病ほか                       | 1906 | 明治39 | 10 | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 785 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 後藤省吾 脳病脊髄病神経病ほか専門治療                | 1906 | 明治39 | 10 | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 786 | 朝日 | (広告) 岡田薬院 子宮病血の道神経病薬                          | 1906 | 明治39 | 10 | 16 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 787 | 朝日 | (広告) 宇津木病院 脳病 脊髄病 神経病ほか 電気治療                  | 1906 | 明治39 | 10 | 21 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 788 | 朝日 | (広告) 東京神経病院                                   | 1906 | 明治39 | 11 | 2  | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 789 | 朝日 | (広告) 東京神経病院                                   | 1906 | 明治39 | 11 | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 790 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか                       | 1906 | 明治39 | 11 | 7  | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 791 | 朝日 | (広告) 東京神経病院                                   | 1906 | 明治39 | 11 | 7  | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 792 | 朝日 | (広告) 田村化三郎 脳病神経病 読売新聞社 神経の衛生                  | 1906 | 明治39 | 11 | 10 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 793 | 朝日 | (広告) 静寿堂薬房 保神 神経病 生殖器障害                       | 1906 | 明治39 | 11 | 14 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 794 | 朝日 | (広告) 田村化三郎 脳病 神経病 著書 神経の衛生                    | 1906 | 明治39 | 11 | 17 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 795 | 読売 | [広告] 精神病、脳病、神経病、入院随時/東京市巢鴨庚申塚 保養院             | 1906 | 明治39 | 11 | 18 | 広告 | 朝刊    | 4 |
| 796 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病                     | 1906 | 明治39 | 11 | 25 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 797 | 朝日 | (広告) 石川貞吉 門脇真枝 保養院 精神病 脳病 神経病                 | 1906 | 明治39 | 11 | 29 | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 798 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病                         | 1906 | 明治39 | 12 | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 799 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 脳病 神経病                           | 1906 | 明治39 | 12 | 6  | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 800 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 脳病 神経病 石川貞吉院長 門脇真枝医長             | 1906 | 明治39 | 12 | 9  | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 801 | 読売 | [広告] 精神病、脳病、神経病、入院随時/東京市巢鴨庚申塚 保養院             | 1906 | 明治39 | 12 | 16 | 広告 | 朝刊    | 8 |
| 802 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 脳病 神経病                           | 1906 | 明治39 | 12 | 19 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 803 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 脳病 神経病                           | 1906 | 明治39 | 12 | 23 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 804 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 後藤省吾院長 脳病 脊髄病 神経病                  | 1906 | 明治39 | 12 | 26 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 805 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか                       | 1907 | 明治40 | 1  | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 806 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 脳病 神経病                           | 1907 | 明治40 | 1  | 6  | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 807 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 脳病 神経病                           | 1907 | 明治40 | 1  | 13 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 808 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病                     | 1907 | 明治40 | 1  | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 809 | 読売 | [広告] 改築落成 精神、脳、神経病専門/東京西ヶ原 王子精神病院             | 1907 | 明治40 | 1  | 16 | 広告 | 別刷    | 2 |
| 810 | 朝日 | (広告) 保養院 東京精神病院改称 精神病 脳病 神経病                  | 1907 | 明治40 | 1  | 20 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 811 | 読売 | [広告] 精神病、脳病、神経病/東京巢鴨 保養院、院長 石川貞吉              | 1907 | 明治40 | 1  | 20 | 広告 | 朝刊    | 4 |
| 812 | 朝日 | (広告) 医学士 田村化三郎 脳病 神経病 著書神経の衛生 読売新聞社発行         | 1907 | 明治40 | 1  | 23 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 813 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病専門治療                 | 1907 | 明治40 | 1  | 25 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 814 | 朝日 | (広告) 医学士田村化三郎 脳病 神経病 著書神経の衛生 読売新聞社発行          | 1907 | 明治40 | 1  | 27 | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 815 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 脳病 神経病                           | 1907 | 明治40 | 1  | 27 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 816 | 朝日 | (広告) 医学士 田村化三郎 脳病 神経病                         | 1907 | 明治40 | 2  | 1  | 広告 | 東京/朝刊 | 4 |

| 番   | 社名 | タイトル                                  | 発行日  |      |    |    | 種別 | 社/刊種  | 面  |
|-----|----|---------------------------------------|------|------|----|----|----|-------|----|
|     |    |                                       | 西暦   | 和暦   | 月  | 日  |    |       |    |
| 817 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 脳病 神経病                   | 1907 | 明治40 | 2  | 3  | 広告 | 東京/朝刊 | 9  |
| 818 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか               | 1907 | 明治40 | 2  | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 819 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 脳病 神経病                   | 1907 | 明治40 | 2  | 11 | 広告 | 東京/朝刊 | 10 |
| 820 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病                 | 1907 | 明治40 | 2  | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 821 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 脳病 神経病                   | 1907 | 明治40 | 2  | 17 | 広告 | 東京/朝刊 | 1  |
| 822 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 脳病 神経病                   | 1907 | 明治40 | 2  | 25 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 823 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病脊髄病神経病精神病                | 1907 | 明治40 | 2  | 28 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 824 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 脳病 神経病                   | 1907 | 明治40 | 3  | 3  | 広告 | 東京/朝刊 | 1  |
| 825 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病                 | 1907 | 明治40 | 3  | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 826 | 読売 | [広告] 精神、脳、神経病治療 改築落成/東京西ヶ原 王子精神病院     | 1907 | 明治40 | 3  | 5  | 広告 | 朝刊    | 4  |
| 827 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 脳病 神経病                   | 1907 | 明治40 | 3  | 10 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 828 | 読売 | [広告] 精神病、脳病、神経病/東京巣鴨 保養院              | 1907 | 明治40 | 3  | 10 | 広告 | 朝刊    | 4  |
| 829 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか               | 1907 | 明治40 | 3  | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 830 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 脳病 神経病                   | 1907 | 明治40 | 3  | 17 | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 831 | 朝日 | (広告) 保養院 院長 石川貞吉 医長 門脇真枝 精神病 脳病 神経病   | 1907 | 明治40 | 3  | 24 | 広告 | 東京/朝刊 | 3  |
| 832 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 院長後藤省吾 脳病 脊髄病 神経病ほか        | 1907 | 明治40 | 3  | 25 | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 833 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病                 | 1907 | 明治40 | 4  | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 834 | 朝日 | (広告) 保養院 神経病 脳病 神経病                   | 1907 | 明治40 | 4  | 7  | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 835 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病                 | 1907 | 明治40 | 4  | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 836 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 脳病 神経病                   | 1907 | 明治40 | 4  | 16 | 広告 | 東京/朝刊 | 1  |
| 837 | 朝日 | (広告) 新宿脳病院 精神病 神経病                    | 1907 | 明治40 | 4  | 21 | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 838 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 脳病 神経病                   | 1907 | 明治40 | 4  | 22 | 広告 | 東京/朝刊 | 1  |
| 839 | 朝日 | (広告) 新宿脳病院 精神病 神経病                    | 1907 | 明治40 | 4  | 23 | 広告 | 東京/朝刊 | 1  |
| 840 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病                 | 1907 | 明治40 | 4  | 25 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 841 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 脳病 神経病                   | 1907 | 明治40 | 4  | 28 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 842 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病脳病神経病                     | 1907 | 明治40 | 5  | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 1  |
| 843 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病脊髄病神経病精神病                | 1907 | 明治40 | 5  | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 1  |
| 844 | 読売 | [広告] 医療 脳病 脊髄病 神経病/東京田端 東京脳病院 院長 後藤省吾 | 1907 | 明治40 | 5  | 5  | 広告 | 朝刊    | 8  |
| 845 | 読売 | [広告] 医療 精神脳神経病/東京王子 王子精神病院            | 1907 | 明治40 | 5  | 6  | 広告 | 朝刊    | 4  |
| 846 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 脳病 神経病                   | 1907 | 明治40 | 5  | 12 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 847 | 読売 | [広告] 医療 精神病 脳病 神経病/東京巣鴨 保養院 院長 石川貞吉   | 1907 | 明治40 | 5  | 12 | 広告 | 朝刊    | 8  |
| 848 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病脊髄病神経病                   | 1907 | 明治40 | 5  | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 849 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 脳病 神経病                   | 1907 | 明治40 | 5  | 20 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 850 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか               | 1907 | 明治40 | 5  | 25 | 広告 | 東京/朝刊 | 1  |
| 851 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 脳病 神経病                   | 1907 | 明治40 | 5  | 26 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 852 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 脳病 神経病                   | 1907 | 明治40 | 6  | 2  | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 853 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 脳病 神経病                   | 1907 | 明治40 | 6  | 9  | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 854 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか               | 1907 | 明治40 | 7  | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 855 | 読売 | [広告] 精神脳神経病/王子精神病院                    | 1907 | 明治40 | 7  | 5  | 広告 | 朝刊    | 4  |
| 856 | 読売 | [広告] 脳病 神経病/東京脳病院                     | 1907 | 明治40 | 7  | 5  | 広告 | 朝刊    | 6  |
| 857 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 脳病 神経病                   | 1907 | 明治40 | 7  | 10 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 858 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 脳病 神経病                   | 1907 | 明治40 | 7  | 14 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 859 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 脳病 神経病                   | 1907 | 明治40 | 7  | 21 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 860 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか               | 1907 | 明治40 | 7  | 25 | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 861 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 脳病 神経病                   | 1907 | 明治40 | 7  | 28 | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 862 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病脳病神経病                     | 1907 | 明治40 | 8  | 4  | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 863 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病脊髄病神経病精神病                | 1907 | 明治40 | 8  | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 864 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病脳病神経病                     | 1907 | 明治40 | 8  | 11 | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 865 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病脊髄病神経病ほか                 | 1907 | 明治40 | 8  | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 866 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病脳病神経病                     | 1907 | 明治40 | 8  | 18 | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 867 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病脊髄病神経病                   | 1907 | 明治40 | 8  | 25 | 広告 | 東京/朝刊 | 1  |
| 868 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病脳病神経病                     | 1907 | 明治40 | 8  | 25 | 広告 | 東京/朝刊 | 1  |
| 869 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 脳病 神経病                   | 1907 | 明治40 | 9  | 2  | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 870 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか               | 1907 | 明治40 | 9  | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 871 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 脳病 神経病                   | 1907 | 明治40 | 9  | 8  | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 872 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか               | 1907 | 明治40 | 9  | 8  | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 873 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか               | 1907 | 明治40 | 9  | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 1  |
| 874 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 脳病 神経病                   | 1907 | 明治40 | 9  | 16 | 広告 | 東京/朝刊 | 1  |
| 875 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 脳病 神経病                   | 1907 | 明治40 | 9  | 22 | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 876 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか               | 1907 | 明治40 | 9  | 24 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 877 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 脳病 神経病                   | 1907 | 明治40 | 10 | 6  | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 878 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 脳病 神経病                   | 1907 | 明治40 | 10 | 13 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 879 | 朝日 | (広告) 根岸病院 脳病 神経病 精神病                  | 1907 | 明治40 | 10 | 20 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |

| 番   | 社名 | タイトル                                  | 発行日  |      |    |    | 種別 | 社/刊種  | 面  |
|-----|----|---------------------------------------|------|------|----|----|----|-------|----|
|     |    |                                       | 西暦   | 和暦   | 月  | 日  |    |       |    |
| 880 | 朝日 | (広告) 保養院 神経病 脳病 精神病                   | 1907 | 明治40 | 10 | 20 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 881 | 朝日 | (広告) 伊藤医院 脳 脊髄病 神経病ほか                 | 1907 | 明治40 | 10 | 21 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 882 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか               | 1907 | 明治40 | 10 | 25 | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 883 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 脳病 神経病                   | 1907 | 明治40 | 10 | 27 | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 884 | 朝日 | (広告) 根岸病院 脳病 神経病 精神病                  | 1907 | 明治40 | 10 | 28 | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 885 | 朝日 | (広告) 川崎近雄 脳神経病最新療法健脳新法                | 1907 | 明治40 | 11 | 2  | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 886 | 朝日 | (広告) 根岸病院 脳病 神経病 精神病                  | 1907 | 明治40 | 11 | 3  | 広告 | 東京/朝刊 | 11 |
| 887 | 読売 | [広告] 脳病 神経病 精神病/東京市下谷区 根岸病院           | 1907 | 明治40 | 11 | 3  | 広告 | 朝刊    | 4  |
| 888 | 読売 | [広告] 精神病 脳病 神経病/東京巢鴨 保養院 石川貞吉院長       | 1907 | 明治40 | 11 | 3  | 広告 | 朝刊    | 8  |
| 889 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 脳病 神経病                   | 1907 | 明治40 | 11 | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 9  |
| 890 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 脳病 神経病                   | 1907 | 明治40 | 11 | 10 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 891 | 朝日 | (広告) 根岸病院 脳病 神経病 精神病                  | 1907 | 明治40 | 11 | 10 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 892 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか               | 1907 | 明治40 | 11 | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 893 | 朝日 | (広告) 根岸病院 脳病 神経病 精神病                  | 1907 | 明治40 | 11 | 17 | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 894 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 脳病 神経病                   | 1907 | 明治40 | 11 | 17 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 895 | 朝日 | (広告) 伊藤医院 脳・脊髄病 神経病                   | 1907 | 明治40 | 11 | 18 | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 896 | 朝日 | (広告) 保養院 院長 石川貞吉 精神病 脳病 神経病           | 1907 | 明治40 | 11 | 23 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 897 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病                 | 1907 | 明治40 | 11 | 25 | 広告 | 東京/朝刊 | 1  |
| 898 | 朝日 | (広告) 根岸病院 脳病 神経病 精神病                  | 1907 | 明治40 | 12 | 1  | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 899 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 脳病 神経病                   | 1907 | 明治40 | 12 | 1  | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 900 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 脳病 神経病                   | 1907 | 明治40 | 12 | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 901 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか               | 1907 | 明治40 | 12 | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 902 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 院長 後藤省吾 脳病 脊髄病 神経病         | 1907 | 明治40 | 12 | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 903 | 朝日 | (広告) 保養院 院長 医学士石川貞吉 医長門脇真枝 精神病 脳病 神経病 | 1907 | 明治40 | 12 | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 904 | 朝日 | (広告) 根岸病院 脳病 神経病 精神病                  | 1907 | 明治40 | 12 | 16 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 905 | 朝日 | (広告) 根岸病院 脳病 神経病 精神病                  | 1907 | 明治40 | 12 | 22 | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 906 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 神経病 脳病                   | 1907 | 明治40 | 12 | 22 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 907 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか               | 1907 | 明治40 | 12 | 26 | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 908 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 脳病 神経病                   | 1908 | 明治41 | 1  | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 1  |
| 909 | 朝日 | (広告) 根岸病院 脳病 神経病 精神病                  | 1908 | 明治41 | 1  | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 910 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか               | 1908 | 明治41 | 1  | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 911 | 朝日 | (広告) 根岸病院 脳病 神経病 精神病                  | 1908 | 明治41 | 1  | 12 | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 912 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 脳病 神経病                   | 1908 | 明治41 | 1  | 13 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 913 | 朝日 | (広告) 川崎近雄 脳神経病最新療法健脳新法                | 1908 | 明治41 | 1  | 14 | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 914 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊椎病 神経病ほか               | 1908 | 明治41 | 1  | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 915 | 朝日 | (広告) 根岸病院 脳病 神経病 精神病                  | 1908 | 明治41 | 1  | 19 | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 916 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 脳病 神経病                   | 1908 | 明治41 | 1  | 19 | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 917 | 読売 | [広告] 精神病、脳病、神経病/東京巢鴨庚申塚 保養院 院長・石川貞吉   | 1908 | 明治41 | 1  | 19 | 広告 | 朝刊    | 4  |
| 918 | 読売 | [広告] 脳病、神経病、精神病/下谷区下根岸町 根岸病院          | 1908 | 明治41 | 1  | 19 | 広告 | 朝刊    | 4  |
| 919 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳脊髄神経病                     | 1908 | 明治41 | 1  | 25 | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 920 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 脳病 神経病                   | 1908 | 明治41 | 1  | 26 | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 921 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 脳病 神経病                   | 1908 | 明治41 | 2  | 2  | 広告 | 東京/朝刊 | 1  |
| 922 | 朝日 | (広告) 根岸病院 脳病 神経病 精神病                  | 1908 | 明治41 | 2  | 2  | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 923 | 朝日 | (広告) 脳神経病最新療法 健脳新法 川崎近雄               | 1908 | 明治41 | 2  | 3  | 広告 | 東京/朝刊 | 1  |
| 924 | 朝日 | (広告) 松塚勇太郎 脳神経病者の苦悶を救う                | 1908 | 明治41 | 2  | 3  | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 925 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか               | 1908 | 明治41 | 2  | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 926 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 脳病 神経病                   | 1908 | 明治41 | 2  | 9  | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 927 | 朝日 | (広告) 根岸病院 脳病 神経病 精神病                  | 1908 | 明治41 | 2  | 9  | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 928 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか               | 1908 | 明治41 | 2  | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 929 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 脳病 神経病                   | 1908 | 明治41 | 2  | 16 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 930 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                  | 1908 | 明治41 | 2  | 16 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 931 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 脳病 神経病                   | 1908 | 明治41 | 2  | 23 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 932 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか               | 1908 | 明治41 | 2  | 25 | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 933 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病脳病神経病                     | 1908 | 明治41 | 3  | 1  | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 934 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病脳病神経病                    | 1908 | 明治41 | 3  | 1  | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 935 | 読売 | [広告] 書籍 川崎近雄著「脳神経病最新療法 健脳新法」/京都市 川崎近雄 | 1908 | 明治41 | 3  | 3  | 広告 | 朝刊    | 6  |
| 936 | 朝日 | (広告) 保養院 院長 石川貞吉 精神病 脳病 神経病           | 1908 | 明治41 | 3  | 8  | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |
| 937 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                  | 1908 | 明治41 | 3  | 8  | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 938 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 脳病 神経病                   | 1908 | 明治41 | 3  | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 939 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病             | 1908 | 明治41 | 3  | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 940 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病・脳病・神経病                  | 1908 | 明治41 | 3  | 18 | 広告 | 東京/朝刊 | 7  |
| 941 | 朝日 | (広告) 川崎近雄 脳神経病最新療法健脳新法                | 1908 | 明治41 | 3  | 31 | 広告 | 東京/朝刊 | 1  |
| 942 | 朝日 | (広告) 救世堂薬院 脳神経病者の自宅療法                 | 1908 | 明治41 | 4  | 2  | 広告 | 東京/朝刊 | 5  |

| 番    | 社名 | タイトル                                        | 発行日  |      |   |    | 種別 | 社/刊種  | 面 |
|------|----|---------------------------------------------|------|------|---|----|----|-------|---|
|      |    |                                             | 西暦   | 和暦   | 月 | 日  |    |       |   |
| 943  | 朝日 | (広告) 保養院 石川貞吉院長 精神病 脳病 神経病                  | 1908 | 明治41 | 4 | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 944  | 朝日 | (広告) 東京脳病院 後藤省吾院長 脳病 脊髄病 神経病                | 1908 | 明治41 | 4 | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 945  | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                        | 1908 | 明治41 | 4 | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 9 |
| 946  | 朝日 | (広告) 同仁病院 れうまちす神経病                          | 1908 | 明治41 | 4 | 7  | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 947  | 朝日 | (広告) 脳神経病最新療法 健脳新法 川崎近雄新著                   | 1908 | 明治41 | 4 | 8  | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 948  | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                        | 1908 | 明治41 | 4 | 12 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 949  | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 脳病 神経病                         | 1908 | 明治41 | 4 | 12 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 950  | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                        | 1908 | 明治41 | 4 | 19 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 951  | 朝日 | (広告) 保養院 院長石川貞吉 精神病 脳病 神経病                  | 1908 | 明治41 | 4 | 19 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 952  | 朝日 | (広告) 新宿脳病院 脳病 神経病                           | 1908 | 明治41 | 4 | 24 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 953  | 朝日 | (広告) 保養院 精神病脳病神経病                           | 1908 | 明治41 | 5 | 3  | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 954  | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病脳病神経病                          | 1908 | 明治41 | 5 | 3  | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 955  | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病脊髄病神経病精神病                      | 1908 | 明治41 | 5 | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 3 |
| 956  | 朝日 | (広告) 救世堂薬院 脳神経病者の悲観と苦悶を救ふ 脳神経新論             | 1908 | 明治41 | 5 | 9  | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 957  | 朝日 | (広告) 保養院 院長医学士石川貞吉 医長門脇真枝 精神病 脳病 神経病        | 1908 | 明治41 | 5 | 10 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 958  | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                        | 1908 | 明治41 | 5 | 10 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 959  | 朝日 | (広告) 本舗丹平商会本店 丹平商会分店 丹平商会支店 脳病神経病全治新薬 健脳丸   | 1908 | 明治41 | 5 | 11 | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 960  | 朝日 | (広告) 小森医院 脳病 脊髄病 脚気 神経病 ヒステリー(ほか)           | 1908 | 明治41 | 5 | 13 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 961  | 朝日 | (広告) 川崎近雄 元京都医科大学助手 米国薬化学士薬劑師 脳、神経病自宅新療法    | 1908 | 明治41 | 5 | 14 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 962  | 読売 | [広告] 脳病神経病自宅新療法/京都粟田口町 川崎近雄                 | 1908 | 明治41 | 5 | 14 | 広告 | 朝刊    | 4 |
| 963  | 朝日 | (広告) 東京脳病院 院長後藤省吾 脳病 脊髄病 神経病 精神病専門治療        | 1908 | 明治41 | 5 | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 964  | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                        | 1908 | 明治41 | 5 | 17 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 965  | 朝日 | (広告) 保養院 院長医学士石川貞吉 医長門脇真枝 精神病 脳病 神経病        | 1908 | 明治41 | 5 | 17 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 966  | 朝日 | (広告) 小森医院 塗擦新治療 脊髄病 血行器病 神経病 子宮病            | 1908 | 明治41 | 5 | 20 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 967  | 朝日 | (広告) 加命堂脳病院 脳病 神経病 精神病                      | 1908 | 明治41 | 5 | 23 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 968  | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 脳病 神経病                         | 1908 | 明治41 | 5 | 24 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 969  | 朝日 | (広告) 救世堂薬院 脳神経病新論 脳神経衰弱症とヒステリー症(婦人血の道)の自宅療法 | 1908 | 明治41 | 6 | 2  | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 970  | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病                   | 1908 | 明治41 | 6 | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 971  | 読売 | [広告] 脳、神経病新治療/京都市粟田口町 川崎近雄                  | 1908 | 明治41 | 6 | 6  | 広告 | 朝刊    | 6 |
| 972  | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                        | 1908 | 明治41 | 6 | 7  | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 973  | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                        | 1908 | 明治41 | 6 | 14 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 974  | 朝日 | (広告) 加命堂脳病院 精神病 脳病 神経病                      | 1908 | 明治41 | 6 | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 975  | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病                       | 1908 | 明治41 | 6 | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 976  | 朝日 | (広告) 小森医院 塗擦新治療 脳病 脊髄病 神経病(ほか)              | 1908 | 明治41 | 6 | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 977  | 読売 | [広告] 塗擦新治療 ヒステリー 神経病 午前宅診/芝区 小森医院           | 1908 | 明治41 | 6 | 15 | 広告 | 朝刊    | 4 |
| 978  | 朝日 | (広告) 加命堂脳病院 精神病 脳病 神経病                      | 1908 | 明治41 | 6 | 20 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 979  | 読売 | [広告] 精神病脳病神経病/加命堂脳病院▽造花 千代田すだれ/神田 緒方商店      | 1908 | 明治41 | 6 | 20 | 広告 | 朝刊    | 3 |
| 980  | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                        | 1908 | 明治41 | 6 | 21 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 981  | 朝日 | (広告) 小森医院 塗擦新治療 脳病 脊髄病 神経病(ほか)              | 1908 | 明治41 | 6 | 23 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 982  | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病脊髄病神経病 精神病専門                   | 1908 | 明治41 | 6 | 25 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 983  | 朝日 | (広告) 加命堂脳病院 精神病 脳病 神経病                      | 1908 | 明治41 | 6 | 27 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 984  | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 脳病 神経病                         | 1908 | 明治41 | 6 | 28 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 985  | 朝日 | (広告) 加命堂脳病院 精神病 脳病 神経病                      | 1908 | 明治41 | 7 | 4  | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 986  | 朝日 | (広告) 保養院 石川貞吉 門脇真枝 精神病 脳病 神経病               | 1908 | 明治41 | 7 | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 3 |
| 987  | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                        | 1908 | 明治41 | 7 | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 988  | 朝日 | (広告) 加命堂脳病院 精神病 脳病 神経病                      | 1908 | 明治41 | 7 | 10 | 広告 | 東京/朝刊 | 3 |
| 989  | 朝日 | (広告) 東京府巢鴨病院 精神病神経病患者無料診察                   | 1908 | 明治41 | 7 | 11 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 990  | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                        | 1908 | 明治41 | 7 | 12 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 991  | 朝日 | (広告) 保養院 石川貞吉 門脇真枝 精神病 脳病 神経病               | 1908 | 明治41 | 7 | 12 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 992  | 朝日 | (広告) 加命堂脳病院 精神病 脳病 神経病                      | 1908 | 明治41 | 7 | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 993  | 朝日 | (広告) 東京府巢鴨病院 精神病神経病患者無料診察                   | 1908 | 明治41 | 7 | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 3 |
| 994  | 読売 | [広告] 脳、神経病の自宅新療法/京都市 川崎近雄                   | 1908 | 明治41 | 7 | 15 | 広告 | 朝刊    | 4 |
| 995  | 朝日 | (広告) 川崎近雄 脳神経病自宅新療法 チルビン                    | 1908 | 明治41 | 7 | 16 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 996  | 朝日 | (広告) 保養院 石川貞吉 精神病 脳病 神経病                    | 1908 | 明治41 | 7 | 16 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 997  | 朝日 | (広告) 保養院 石川貞吉 門脇真枝 精神病 脳病 神経病               | 1908 | 明治41 | 7 | 19 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 998  | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                        | 1908 | 明治41 | 7 | 19 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 999  | 朝日 | (広告) 東京脳病院 後藤省吾 脳病 脊髄病 神経病 (ほか)             | 1908 | 明治41 | 7 | 20 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 1000 | 朝日 | (広告) 加命堂脳病院 精神病 脳病 神経病                      | 1908 | 明治41 | 7 | 21 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1001 | 朝日 | (広告) 救世堂薬院 脳神経病新論 久保光蔵                      | 1908 | 明治41 | 7 | 23 | 広告 | 東京/朝刊 | 9 |
| 1002 | 朝日 | (広告) 加命堂脳病院 精神病 脳病 神経病                      | 1908 | 明治41 | 7 | 24 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 1003 | 朝日 | (広告) 加命堂脳病院 精神病 脳病 神経病                      | 1908 | 明治41 | 7 | 25 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 1004 | 朝日 | (広告) 加命堂脳病院 精神病 脳病 神経病                      | 1908 | 明治41 | 7 | 26 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1005 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 後藤省吾 脳病 脊髄病 神経病 精神病              | 1908 | 明治41 | 8 | 1  | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |

| 番    | 社名 | タイトル                                   | 発行日  |      |    |    | 種別 | 社/刊種  | 面 |
|------|----|----------------------------------------|------|------|----|----|----|-------|---|
|      |    |                                        | 西暦   | 和暦   | 月  | 日  |    |       |   |
| 1006 | 読売 | [広告] 精神病、脳病、神経病/東京市下谷区根岸町 根岸病院         | 1908 | 明治41 | 8  | 2  | 広告 | 朝刊    | 4 |
| 1007 | 読売 | [広告] 精神病、脳病、神経病/東京・巣鴨庚申塚 保養院           | 1908 | 明治41 | 8  | 2  | 広告 | 朝刊    | 4 |
| 1008 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                   | 1908 | 明治41 | 8  | 3  | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 1009 | 朝日 | (広告) 保養院 石川貞吉 門脇真枝 精神病 脳病 神経病          | 1908 | 明治41 | 8  | 3  | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 1010 | 読売 | [広告] 精神脳神経病専門、慈善部あり入院希望に応ず/王子精神病院      | 1908 | 明治41 | 8  | 5  | 広告 | 朝刊    | 4 |
| 1011 | 朝日 | (広告) 加命堂脳病院 精神病 脳病 神経病                 | 1908 | 明治41 | 8  | 6  | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 1012 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 脳病 神経病                    | 1908 | 明治41 | 8  | 9  | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1013 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                   | 1908 | 明治41 | 8  | 9  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1014 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病                  | 1908 | 明治41 | 8  | 10 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1015 | 朝日 | (広告) 加命堂脳病院 精神病 脳病 神経病                 | 1908 | 明治41 | 8  | 11 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 1016 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                   | 1908 | 明治41 | 8  | 16 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 1017 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 脳病 神経病                    | 1908 | 明治41 | 8  | 16 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 1018 | 朝日 | (広告) 加命堂脳病院 精神病 脳病 神経病                 | 1908 | 明治41 | 8  | 18 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1019 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病              | 1908 | 明治41 | 8  | 20 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1020 | 朝日 | (広告) 加命堂病院 精神病 脳病 神経病                  | 1908 | 明治41 | 8  | 22 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1021 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 脳病 神経病                    | 1908 | 明治41 | 8  | 23 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1022 | 朝日 | (広告) 川崎近雄 脳、神経病自宅新療法                   | 1908 | 明治41 | 8  | 24 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 1023 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 脳病 神経病                    | 1908 | 明治41 | 8  | 31 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 1024 | 読売 | [広告] 精神疾患、神経病/東京・亀戸町 加命堂脳病院            | 1908 | 明治41 | 9  | 5  | 広告 | 朝刊    | 3 |
| 1025 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 脳病 神経病                    | 1908 | 明治41 | 9  | 6  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1026 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病・脳病・神経病                   | 1908 | 明治41 | 9  | 6  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1027 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病                  | 1908 | 明治41 | 9  | 10 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1028 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                   | 1908 | 明治41 | 9  | 13 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1029 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 脳病 神経病                    | 1908 | 明治41 | 9  | 13 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 1030 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病              | 1908 | 明治41 | 9  | 20 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 1031 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 脳病 神経病                    | 1908 | 明治41 | 9  | 20 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 1032 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                   | 1908 | 明治41 | 9  | 20 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 1033 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 脳病 神経病                    | 1908 | 明治41 | 9  | 27 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1034 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病脊髄病神経病精神病                 | 1908 | 明治41 | 10 | 1  | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1035 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 脳病 神経病                    | 1908 | 明治41 | 10 | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 1036 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                   | 1908 | 明治41 | 10 | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1037 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病                  | 1908 | 明治41 | 10 | 10 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1038 | 朝日 | (広告) 保養院 院長医学士 石川貞吉 医長 門脇真枝 精神病 脳病 神経病 | 1908 | 明治41 | 10 | 11 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1039 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                   | 1908 | 明治41 | 10 | 11 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 1040 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                   | 1908 | 明治41 | 10 | 18 | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 1041 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 脳病 神経病                    | 1908 | 明治41 | 10 | 20 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 1042 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病                  | 1908 | 明治41 | 10 | 20 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1043 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 脳病 神経病                    | 1908 | 明治41 | 10 | 26 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1044 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 精神病 脳病 神経病                  | 1908 | 明治41 | 11 | 1  | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 1045 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                   | 1908 | 明治41 | 11 | 1  | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 1046 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 脳病 神経病                    | 1908 | 明治41 | 11 | 1  | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 1047 | 読売 | [広告] 精神病脳病神経病/巣鴨庚申塚 保養院院長 石川貞吉         | 1908 | 明治41 | 11 | 1  | 広告 | 朝刊    | 1 |
| 1048 | 読売 | [広告] 精神病 脳病 神経病/下谷下根岸町 根岸病院            | 1908 | 明治41 | 11 | 1  | 広告 | 朝刊    | 1 |
| 1049 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                   | 1908 | 明治41 | 11 | 8  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1050 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病脊髄病 神経病 精神病専門             | 1908 | 明治41 | 11 | 12 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 1051 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 脳病 神経病                    | 1908 | 明治41 | 11 | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 1052 | 読売 | [広告] 精神病 脳病 神経病/巣鴨庚申塚 保養院              | 1908 | 明治41 | 11 | 15 | 広告 | 朝刊    | 2 |
| 1053 | 朝日 | (広告) 大久保脳病院 山田脳神経病院                    | 1908 | 明治41 | 11 | 16 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1054 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                   | 1908 | 明治41 | 11 | 16 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1055 | 朝日 | (広告) 山田脳神経病院 大久保脳病院 脳・脊髄・神経病科 精神病科     | 1908 | 明治41 | 11 | 19 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 1056 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病              | 1908 | 明治41 | 11 | 20 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1057 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 脳病 神経病                    | 1908 | 明治41 | 11 | 22 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 1058 | 朝日 | (広告) 山田脳神経病院 大久保脳病院新築落成 脳脊髄神経病科精神病科    | 1908 | 明治41 | 11 | 25 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1059 | 朝日 | (広告) 山田脳神経病院 大久保脳病院新築落成 脳脊髄神経病科精神病科    | 1908 | 明治41 | 11 | 29 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1060 | 朝日 | (広告) 加命堂脳病院 脳病精神病神経病                   | 1908 | 明治41 | 11 | 30 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1061 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病                  | 1908 | 明治41 | 12 | 2  | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 1062 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                   | 1908 | 明治41 | 12 | 6  | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 1063 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 脳病 神経病                    | 1908 | 明治41 | 12 | 6  | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |
| 1064 | 朝日 | (広告) 加命堂脳病院 脳病 精神病 神経病専門               | 1908 | 明治41 | 12 | 12 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1065 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 脳病 神経病                    | 1908 | 明治41 | 12 | 13 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1066 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                   | 1908 | 明治41 | 12 | 13 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1067 | 朝日 | (広告) 加命堂脳病院 脳病 精神病 神経病専門               | 1908 | 明治41 | 12 | 19 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1068 | 朝日 | (広告) 保養院 精神病 脳病 神経病                    | 1908 | 明治41 | 12 | 19 | 広告 | 東京/朝刊 | 5 |

| 番    | 社名 | タイトル                                        | 発行日  |      |    |    | 種別 | 社/刊種  | 面 |
|------|----|---------------------------------------------|------|------|----|----|----|-------|---|
|      |    |                                             | 西暦   | 和暦   | 月  | 日  |    |       |   |
| 1069 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                        | 1908 | 明治41 | 12 | 20 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1070 | 朝日 | (広告) 山田脳神経病院 大久保脳病院新築落成 脳脊、髄神経病科 精神科        | 1908 | 明治41 | 12 | 21 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1071 | 朝日 | (広告) 山田脳神経病院 医学博士山田鉄蔵 大久保脳病院新築落成 脳、脊髄、神経科ほか | 1908 | 明治41 | 12 | 26 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1072 | 朝日 | (広告) 加命堂脳病院 脳病精神病神経病専門                      | 1908 | 明治41 | 12 | 26 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1073 | 朝日 | (広告) 加命堂脳病院 脳病精神病神経病専門                      | 1908 | 明治41 | 12 | 31 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1074 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                        | 1909 | 明治42 | 1  | 3  | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1075 | 読売 | [広告] 精神病 脳病 神経病/東京下谷 根岸病院                   | 1909 | 明治42 | 1  | 4  | 広告 | 朝刊    | 2 |
| 1076 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                        | 1909 | 明治42 | 1  | 11 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1077 | 読売 | [広告] 脳神経病自宅新療法/京都市粟田口町 川崎近雄                 | 1909 | 明治42 | 1  | 12 | 広告 | 朝刊    | 1 |
| 1078 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                        | 1909 | 明治42 | 1  | 17 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1079 | 読売 | [広告] 精神病 神経病 患者無料診察/東京巢鴨病院                  | 1909 | 明治42 | 2  | 4  | 広告 | 朝刊    | 1 |
| 1080 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                        | 1909 | 明治42 | 2  | 7  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1081 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病脳病神経病                          | 1909 | 明治42 | 2  | 14 | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1082 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                        | 1909 | 明治42 | 2  | 21 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1083 | 朝日 | (広告) 新宿脳病院 脳病 神経病                           | 1909 | 明治42 | 3  | 2  | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1084 | 朝日 | (広告) 青山病院 帝国脳病院 精神脊髄神経病専門                   | 1909 | 明治42 | 3  | 7  | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1085 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病脳病神経病                          | 1909 | 明治42 | 3  | 7  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1086 | 朝日 | (広告) 山田病院 大久保山田脳病院 山田鉄蔵 脳 脊髄病 精神病 神経病       | 1909 | 明治42 | 3  | 14 | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1087 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                        | 1909 | 明治42 | 3  | 14 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1088 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 院長田沢秀四郎 脳精神脊髄神経病                 | 1909 | 明治42 | 3  | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 1089 | 朝日 | (広告) 山田病院 大久保山田脳病院 山田鉄蔵 脳 脊髄病 精神病 神経病       | 1909 | 明治42 | 3  | 18 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1090 | 朝日 | (広告) 東京精養院 脳神経病 胃腸脚気                        | 1909 | 明治42 | 3  | 20 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1091 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                        | 1909 | 明治42 | 3  | 21 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1092 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 脳精神脊髄神経病                         | 1909 | 明治42 | 3  | 21 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1093 | 朝日 | (広告) 山田病院 大久保山田脳病院 医学博士 山田鉄蔵 脳脊髄病 精神病 神経病   | 1909 | 明治42 | 3  | 25 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1094 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                        | 1909 | 明治42 | 4  | 4  | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1095 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 脳精神脊髄神経病専門                       | 1909 | 明治42 | 4  | 4  | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1096 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病専門                 | 1909 | 明治42 | 4  | 4  | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1097 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 脳精神脊髄神経病専門                       | 1909 | 明治42 | 4  | 11 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1098 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                        | 1909 | 明治42 | 4  | 11 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1099 | 朝日 | (広告) 山田病院 山田脳病院 脳、脊髄病 精神病 神経病               | 1909 | 明治42 | 4  | 13 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1100 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 脳精神脊髄神経病専門                       | 1909 | 明治42 | 4  | 18 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1101 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                        | 1909 | 明治42 | 4  | 18 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1102 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病 精神病専門                 | 1909 | 明治42 | 4  | 20 | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1103 | 朝日 | (広告) 山田病院 山田脳病院 脳、脊髄病 精神病 神経病               | 1909 | 明治42 | 4  | 23 | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1104 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 脳精神脊髄神経病専門                       | 1909 | 明治42 | 4  | 25 | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1105 | 朝日 | (広告) 山田病院 山田脳病院 脳、脊髄病 精神病 神経病               | 1909 | 明治42 | 4  | 28 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1106 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 脊髄病 神経病ほか                     | 1909 | 明治42 | 5  | 1  | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1107 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                        | 1909 | 明治42 | 5  | 3  | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1108 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 院長 医学士田沢秀四郎 脳精神脊髄神経病専門           | 1909 | 明治42 | 5  | 3  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1109 | 朝日 | (広告) 加命堂脳病院 脳 神経病 精神病                       | 1909 | 明治42 | 5  | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1110 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                        | 1909 | 明治42 | 5  | 9  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1111 | 朝日 | (広告) 山田病院 脳脊髄病精神病神経病 大久保山田脳病院               | 1909 | 明治42 | 5  | 13 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1112 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                        | 1909 | 明治42 | 5  | 16 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1113 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 脳精神脊髄神経病専門                       | 1909 | 明治42 | 5  | 16 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1114 | 朝日 | (広告) 井村病院 脳病 精神科 神経科                        | 1909 | 明治42 | 5  | 20 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1115 | 朝日 | (広告) 山田病院 脳脊髄病精神病神経病 山田脳病院                  | 1909 | 明治42 | 5  | 23 | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1116 | 読売 | [広告] 脳精神脊髄神経病専門/青山病院内 帝国脳病院 院長 田沢秀四郎        | 1909 | 明治42 | 5  | 23 | 広告 | 朝刊    | 1 |
| 1117 | 朝日 | (広告) 加命堂脳病院 脳神経病精神科                         | 1909 | 明治42 | 5  | 25 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1118 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 田沢秀四郎 脳精神脊髄神経病専門                 | 1909 | 明治42 | 5  | 26 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1119 | 朝日 | (広告) 山田病院 山田鉄蔵 脳脊髄病 精神病 神経病 大久保山田脳病院        | 1909 | 明治42 | 5  | 28 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1120 | 朝日 | (広告) 井村病院 井村忠介 脳病 精神科 神経科                   | 1909 | 明治42 | 6  | 3  | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1121 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 脳精神脊髄神経病専門 田沢秀四郎院長               | 1909 | 明治42 | 6  | 6  | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1122 | 朝日 | (広告) 加命堂脳病院 脳科 神経病 精神病                      | 1909 | 明治42 | 6  | 6  | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1123 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                        | 1909 | 明治42 | 6  | 7  | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1124 | 朝日 | (広告) 井村病院 井村忠介院長 脳病 精神科 神経科                 | 1909 | 明治42 | 6  | 11 | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1125 | 朝日 | (広告) 山田病院 山田脳病院 医学博士 山田鉄蔵 脳、脊髄病 精神病 神経病     | 1909 | 明治42 | 6  | 12 | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1126 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 院長 医学士 田沢秀四郎 脳精神脊髄神経病専門          | 1909 | 明治42 | 6  | 13 | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1127 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                        | 1909 | 明治42 | 6  | 13 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1128 | 朝日 | (広告) 加命堂脳病院 脳神経病科 脳精神科                      | 1909 | 明治42 | 6  | 16 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1129 | 朝日 | (広告) 井村病院 脳病 精神科 神経科                        | 1909 | 明治42 | 6  | 17 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1130 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 脳精神脊髄神経病専門 院長 医学士 田沢秀四郎          | 1909 | 明治42 | 6  | 20 | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1131 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                        | 1909 | 明治42 | 6  | 20 | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |

| 番    | 社名 | タイトル                                              | 発行日  |      |    |    | 種別 | 社/刊種  | 面 |
|------|----|---------------------------------------------------|------|------|----|----|----|-------|---|
|      |    |                                                   | 西暦   | 和暦   | 月  | 日  |    |       |   |
| 1132 | 朝日 | (広告) 山田病院 医学博士 山田鉄蔵 脳、脊髄病 精神病 神経病                 | 1909 | 明治42 | 6  | 20 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1133 | 朝日 | (広告) 井村病院 脳病 精神科 神経科                              | 1909 | 明治42 | 6  | 22 | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1134 | 朝日 | (広告) 山田病院 大久保山田脳病院 山田鉄蔵 脳脊髄病 精神病 神経病              | 1909 | 明治42 | 6  | 26 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1135 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 脳精神脊髄神経病専門 院長田沢秀四郎                     | 1909 | 明治42 | 6  | 27 | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1136 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                              | 1909 | 明治42 | 7  | 4  | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1137 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 脳精神脊髄神経病専門                             | 1909 | 明治42 | 7  | 4  | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1138 | 朝日 | (広告) 加名堂脳病院 脳神経科 精神科                              | 1909 | 明治42 | 7  | 10 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1139 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                              | 1909 | 明治42 | 7  | 11 | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1140 | 朝日 | (広告) 山田病院 大久保山田脳病院 脳、脊髄病 精神病 神経病                  | 1909 | 明治42 | 7  | 13 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1141 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 脳精神脊髄神経病専門                             | 1909 | 明治42 | 7  | 13 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1142 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 脳精神脊髄神経病専門                             | 1909 | 明治42 | 7  | 18 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1143 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                              | 1909 | 明治42 | 7  | 18 | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1144 | 朝日 | (広告) 山田病院 大久保山田脳病院 脳、脊髄病 精神病 神経病                  | 1909 | 明治42 | 7  | 24 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1145 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 脳精神脊髄神経病専門                             | 1909 | 明治42 | 7  | 25 | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1146 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                              | 1909 | 明治42 | 8  | 1  | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1147 | 読売 | [広告] 脳神経病自宅療法 無代送本/京都市 元京都大学助手 川崎近雄               | 1909 | 明治42 | 8  | 2  | 広告 | 朝刊    | 1 |
| 1148 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 脳精神脊髄神経病専門                             | 1909 | 明治42 | 8  | 3  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1149 | 朝日 | (広告) 山田病院 山田脳病院 脳脊髄病 精神病 神経病                      | 1909 | 明治42 | 8  | 6  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1150 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                              | 1909 | 明治42 | 8  | 8  | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1151 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 脳精神脊髄神経病専門                             | 1909 | 明治42 | 8  | 8  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1152 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 脳精神脊髄神経病専門                             | 1909 | 明治42 | 8  | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1153 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                              | 1909 | 明治42 | 8  | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1154 | 朝日 | (広告) 山田病院 山田脳病院 脳・脊髄病 精神病 神経病                     | 1909 | 明治42 | 8  | 22 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1155 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 脳精神脊髄神経病                               | 1909 | 明治42 | 8  | 24 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1156 | 朝日 | (広告) 山田病院 山田脳病院 精神病 神経病 脊髄病                       | 1909 | 明治42 | 9  | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1157 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                              | 1909 | 明治42 | 9  | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1158 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 院長田沢秀四郎 脳精神 脊髄 神経病専門                   | 1909 | 明治42 | 9  | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1159 | 朝日 | (広告) 本舗 大木合名会社 大阪支店 大木口哲本店 電気水 りうまちす 神経病の良薬       | 1909 | 明治42 | 9  | 7  | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1160 | 朝日 | (広告) 加命堂脳病院 脳神経科 脳精神科                             | 1909 | 明治42 | 9  | 12 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1161 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 脳精神脊髄神経病専門                             | 1909 | 明治42 | 9  | 12 | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1162 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                              | 1909 | 明治42 | 9  | 12 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1163 | 朝日 | (広告) 山田病院 山田鉄蔵 脳脊髄 神経病 精神病 記念別院山田脳病院              | 1909 | 明治42 | 9  | 13 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1164 | 朝日 | (広告) 王子精神病院 精神脳神経病                                | 1909 | 明治42 | 9  | 13 | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 1165 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                              | 1909 | 明治42 | 9  | 19 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1166 | 朝日 | (広告) 加命堂脳病院 脳 神経病 精神科                             | 1909 | 明治42 | 9  | 20 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1167 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 脳 精神 脊髄 神経病専門                          | 1909 | 明治42 | 9  | 20 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1168 | 朝日 | (広告) 山田病院 山田鉄蔵 脳脊髄 神経病 精神病 記念別院山田脳病院              | 1909 | 明治42 | 9  | 21 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1169 | 読売 | [広告] 脳病神経病 健脳丸/大阪市心斎橋 丹平商会本店                      | 1909 | 明治42 | 9  | 25 | 広告 | 朝刊    | 1 |
| 1170 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 脳精神脊髄神経病専門                             | 1909 | 明治42 | 9  | 26 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1171 | 朝日 | (広告) 王子精神病院 精神脳神経病専門                              | 1909 | 明治42 | 9  | 30 | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1172 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                              | 1909 | 明治42 | 10 | 3  | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1173 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 脳病 精神病 脊髄病 神経病                         | 1909 | 明治42 | 10 | 3  | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1174 | 朝日 | (広告) 加命堂脳病院 脳神経科 精神科                              | 1909 | 明治42 | 10 | 9  | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1175 | 朝日 | (広告) 山田病院 大久保山田脳病院 脳脊髄病 精神病 神経病                   | 1909 | 明治42 | 10 | 9  | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1176 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                              | 1909 | 明治42 | 10 | 11 | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 1177 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 脳精神脊髄神経病専門                             | 1909 | 明治42 | 10 | 11 | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 1178 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 脳精神脊髄神経病                               | 1909 | 明治42 | 10 | 19 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1179 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 脳脊髄神経病                                 | 1909 | 明治42 | 11 | 7  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1180 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                              | 1909 | 明治42 | 11 | 7  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1181 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 神経病                                 | 1909 | 明治42 | 11 | 11 | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1182 | 朝日 | (広告) 山田病院 大久保山田脳病院 脳脊髄病 精神病 神経病                   | 1909 | 明治42 | 11 | 13 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1183 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                              | 1909 | 明治42 | 11 | 14 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1184 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 脳精神 脊髄 神経病                             | 1909 | 明治42 | 11 | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1185 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 脳精神脊髄神経病専門                             | 1909 | 明治42 | 11 | 21 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1186 | 朝日 | (広告) 山田病院 本院創立十年記念新築 山田脳病院 医学博士山田鉄蔵 脳 脊髄病 精神病 神経病 | 1909 | 明治42 | 11 | 24 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1187 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                              | 1909 | 明治42 | 11 | 28 | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1188 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                              | 1909 | 明治42 | 12 | 6  | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1189 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 院長医学士田沢秀四郎 院主ドクトル斎藤紀一洋行中 脳精神脊髄神経病専門    | 1909 | 明治42 | 12 | 6  | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 1190 | 朝日 | (広告) 加命堂脳病院 脳神経神経科                                | 1909 | 明治42 | 12 | 16 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1191 | 朝日 | (広告) 根岸病院 神経病 脳病 神経病                              | 1909 | 明治42 | 12 | 19 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1192 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                              | 1910 | 明治43 | 1  | 3  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1193 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                              | 1910 | 明治43 | 1  | 9  | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1194 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                              | 1910 | 明治43 | 1  | 16 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |

| 番    | 社名 | タイトル                                            | 発行日  |      |    |    | 種別 | 社/刊種  | 面 |
|------|----|-------------------------------------------------|------|------|----|----|----|-------|---|
|      |    |                                                 | 西暦   | 和暦   | 月  | 日  |    |       |   |
| 1195 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                            | 1910 | 明治43 | 2  | 7  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1196 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病脳病神経病                              | 1910 | 明治43 | 2  | 20 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1197 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                            | 1910 | 明治43 | 2  | 27 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1198 | 朝日 | (広告) 山田病院 山田脳病院 脳脊髄 神経病 精神病                     | 1910 | 明治43 | 2  | 28 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1199 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病脳病神経病                              | 1910 | 明治43 | 3  | 6  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1200 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病脳病神経病                              | 1910 | 明治43 | 3  | 13 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1201 | 朝日 | (広告) 山田心理療院 神経衰弱等の神経病を根治し記憶力を増し酒煙草吃音寝小便等の習癖を矯正す | 1910 | 明治43 | 3  | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1202 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                            | 1910 | 明治43 | 3  | 20 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1203 | 朝日 | (広告) 山田心理療院 神経病 催眠 心理治療 教授                      | 1910 | 明治43 | 3  | 21 | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1204 | 朝日 | (広告) 山田病院 山田脳病院 脳脊髄 神経病 精神病                     | 1910 | 明治43 | 3  | 24 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1205 | 朝日 | (広告) 山田病院 山田脳病院 医学博士 山田鉄蔵 脳脊髄 神経病 精神病           | 1910 | 明治43 | 3  | 30 | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1206 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病脳病神経病                              | 1910 | 明治43 | 4  | 17 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1207 | 朝日 | (広告) 山田病院 山田脳病院 脳脊髄 神経病                         | 1910 | 明治43 | 4  | 25 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1208 | 朝日 | (広告) 山田病院 山田脳病院 脳脊髄 神経病 精神病                     | 1910 | 明治43 | 4  | 29 | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1209 | 朝日 | (広告) 東京脳病院 脳病 神経病                               | 1910 | 明治43 | 5  | 1  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1210 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                            | 1910 | 明治43 | 5  | 1  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1211 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                            | 1910 | 明治43 | 5  | 8  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1212 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                            | 1910 | 明治43 | 5  | 16 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1213 | 朝日 | (広告) 山田病院 山田脳病院 脳脊髄 神経病 精神病                     | 1910 | 明治43 | 5  | 23 | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1214 | 朝日 | (広告) 山田病院 脳脊髄 神経病 精神病                           | 1910 | 明治43 | 5  | 31 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1215 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                            | 1910 | 明治43 | 6  | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1216 | 朝日 | (広告) 山田病院 山田脳病院 脳脊髄 神経病 精神病                     | 1910 | 明治43 | 6  | 9  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1217 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                            | 1910 | 明治43 | 6  | 12 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1218 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                            | 1910 | 明治43 | 6  | 20 | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1219 | 朝日 | (広告) 山田病院 山田脳病院 脳脊髄 神経病 精神病                     | 1910 | 明治43 | 6  | 27 | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 1220 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                            | 1910 | 明治43 | 7  | 4  | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1221 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 神経病・脳病・精神病専門 斎藤紀一帰朝診察再開              | 1910 | 明治43 | 7  | 8  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1222 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                            | 1910 | 明治43 | 7  | 10 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1223 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 神経病 脳病 精神病                           | 1910 | 明治43 | 7  | 17 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1224 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                            | 1910 | 明治43 | 7  | 17 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1225 | 朝日 | (広告) 山田病院 山田脳病院 脳脊髄 神経病 精神病                     | 1910 | 明治43 | 7  | 19 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1226 | 朝日 | (広告) 山田病院 山田脳病院 脳脊髄 神経病 精神病                     | 1910 | 明治43 | 7  | 29 | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1227 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                            | 1910 | 明治43 | 8  | 7  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1228 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                            | 1910 | 明治43 | 8  | 14 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1229 | 朝日 | (広告) 発売元 山崎帝国堂 脳丸 脳病神経病全治薬                      | 1910 | 明治43 | 8  | 17 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1230 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病脳病神経病                              | 1910 | 明治43 | 8  | 21 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1231 | 朝日 | (広告) 山田病院 山田脳病院 脳脊髄 神経病 精神病                     | 1910 | 明治43 | 8  | 22 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1232 | 朝日 | (広告) 山田病院 山田脳病院 脳脊髄 神経病 精神病                     | 1910 | 明治43 | 8  | 29 | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 1233 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                            | 1910 | 明治43 | 9  | 4  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1234 | 朝日 | (広告) 山田病院 山田脳病院 医学博士 山田鉄蔵 脳脊髄 神経病 精神病           | 1910 | 明治43 | 9  | 12 | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 1235 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                            | 1910 | 明治43 | 9  | 27 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1236 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                            | 1910 | 明治43 | 10 | 2  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1237 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                            | 1910 | 明治43 | 10 | 9  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1238 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                            | 1910 | 明治43 | 10 | 17 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1239 | 朝日 | (広告) 山田病院 山田脳病院 医学博士 山田鉄蔵 脳脊髄 神経病 精神病           | 1910 | 明治43 | 10 | 20 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1240 | 朝日 | (広告) 丹平商会薬房 健脳丸 脳神経病最新薬                         | 1910 | 明治43 | 10 | 25 | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1241 | 朝日 | (広告) 山田病院 山田脳病院 脳脊髄 神経病 精神病                     | 1910 | 明治43 | 10 | 30 | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1242 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                            | 1910 | 明治43 | 11 | 6  | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1243 | 朝日 | (広告) 山田鉄蔵 山田病院 山田脳病院 脳脊髄 神経病 精神病                | 1910 | 明治43 | 11 | 10 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1244 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                            | 1910 | 明治43 | 11 | 13 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1245 | 朝日 | (広告) 青山病院 帝国脳病院 脳神経 脊髄神経病 院長 斎藤紀一               | 1910 | 明治43 | 11 | 20 | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1246 | 朝日 | (広告) 山田病院 山田脳病院 脳脊髄 神経病 精神病                     | 1910 | 明治43 | 11 | 28 | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 1247 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                            | 1910 | 明治43 | 12 | 4  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1248 | 朝日 | (広告) 山田病院 紀念別院・山田脳病院 脳脊髄神経病精神病                  | 1910 | 明治43 | 12 | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 1249 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                            | 1910 | 明治43 | 12 | 11 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1250 | 朝日 | (広告) 本舗 丹平商会薬房 健脳丸 脳病神経病                        | 1910 | 明治43 | 12 | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1251 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                            | 1910 | 明治43 | 12 | 18 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1252 | 朝日 | (広告) 医学博士 山田鉄蔵 山田病院 山田脳病院 脳脊髄 神経病 精神病           | 1910 | 明治43 | 12 | 26 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1253 | 朝日 | (広告) 丹平商会薬房 脳病神経病新薬健脳丸                          | 1911 | 明治44 | 1  | 14 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1254 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                            | 1911 | 明治44 | 1  | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1255 | 朝日 | (広告) 山田病院 山田脳病院 脳脊髄 神経病 精神病                     | 1911 | 明治44 | 1  | 27 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1256 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                            | 1911 | 明治44 | 2  | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1257 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                            | 1911 | 明治44 | 2  | 12 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |

| 番    | 社名 | タイトル                                  | 発行日  |      |   |    | 種別 | 社/刊種  | 面 |
|------|----|---------------------------------------|------|------|---|----|----|-------|---|
|      |    |                                       | 西暦   | 和暦   | 月 | 日  |    |       |   |
| 1258 | 朝日 | (広告) 山田病院 山田脳病院 脳脊髄神経病精神病             | 1911 | 明治44 | 2 | 24 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1259 | 朝日 | (広告) 山田病院 山田脳病院 脳脊髄神経病精神病             | 1911 | 明治44 | 2 | 28 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1260 | 朝日 | (広告) 帝国脳病院 脳精神脊髄神経病                   | 1911 | 明治44 | 3 | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1261 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                  | 1911 | 明治44 | 3 | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1262 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                  | 1911 | 明治44 | 3 | 12 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1263 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                  | 1911 | 明治44 | 3 | 19 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1264 | 朝日 | (広告) 東京府巣鴨病院 看護婦募集 精神病神経病患者無料診察       | 1911 | 明治44 | 3 | 23 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1265 | 朝日 | (広告) 東京府巣鴨病院 看護婦募集 精神病神経病患者無料診察       | 1911 | 明治44 | 3 | 26 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1266 | 朝日 | (広告) 山田病院 山田鉄蔵 脳脊髄神経病 精神病 別院山田脳病院     | 1911 | 明治44 | 3 | 27 | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1267 | 朝日 | (広告) 佐野彪太 内科 脳脊髄 神経病                  | 1911 | 明治44 | 3 | 28 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1268 | 朝日 | (広告) 佐野彪太 内科 脳脊髄 神経病                  | 1911 | 明治44 | 3 | 29 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1269 | 朝日 | (広告) 山田病院 山田鉄蔵 脳脊髄 神経病 精神病 記念別院山田脳病院  | 1911 | 明治44 | 3 | 31 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1270 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病・脳病・神経病                  | 1911 | 明治44 | 4 | 2  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1271 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病脳病神経病                    | 1911 | 明治44 | 4 | 9  | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1272 | 朝日 | (広告) 医学博士佐野彪太 内科脳脊髄神経病                | 1911 | 明治44 | 4 | 12 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1273 | 朝日 | (広告) 佐野彪太 内科 脳脊髄 神経病                  | 1911 | 明治44 | 4 | 16 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1274 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                  | 1911 | 明治44 | 4 | 16 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1275 | 朝日 | (広告) 医学博士佐野彪太 内科 脳脊髄 神経病              | 1911 | 明治44 | 4 | 21 | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1276 | 朝日 | (広告) 佐野彪太 内科 脳脊髄 神経病                  | 1911 | 明治44 | 4 | 24 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1277 | 朝日 | (広告) 医学博士佐野彪太 内科 脳脊髄 神経病              | 1911 | 明治44 | 4 | 26 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1278 | 朝日 | (広告) 山田病院 山田脳病院 脳脊髄 神経病 精神病           | 1911 | 明治44 | 4 | 27 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1279 | 朝日 | (広告) 山田病院 山田脳病院 脳脊髄神経病精神病             | 1911 | 明治44 | 4 | 30 | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1280 | 朝日 | (広告) 佐野彪太 内科 脳脊髄 神経病                  | 1911 | 明治44 | 5 | 4  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1281 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病脳病神経病                    | 1911 | 明治44 | 5 | 7  | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1282 | 朝日 | (広告) 佐野彪太 内科 脳脊髄神経病                   | 1911 | 明治44 | 5 | 8  | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1283 | 朝日 | (広告) 医学博士 佐野彪太 内科、脳脊髄・神経病             | 1911 | 明治44 | 5 | 12 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1284 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                  | 1911 | 明治44 | 5 | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1285 | 朝日 | (広告) 丹平商会本店 丹平商会分店 丹平商会支店 脳病神経病新薬 健脳丸 | 1911 | 明治44 | 5 | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1286 | 朝日 | (広告) 医学博士 佐野彪太 内科 脳脊髄神経病              | 1911 | 明治44 | 5 | 16 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1287 | 朝日 | (広告) 医学博士 佐野彪太 内科 脳脊髄 神経病             | 1911 | 明治44 | 5 | 20 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1288 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                  | 1911 | 明治44 | 5 | 21 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1289 | 朝日 | (広告) 医学博士 佐野彪太 内科 脳脊髄 神経病             | 1911 | 明治44 | 5 | 24 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1290 | 朝日 | (広告) 山田病院 山田脳病院 山田鉄蔵 脳脊髄 神経病 精神病      | 1911 | 明治44 | 5 | 24 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1291 | 朝日 | (広告) 山田病院 山田脳病院 脳脊髄 神経病 精神病           | 1911 | 明治44 | 5 | 30 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1292 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                  | 1911 | 明治44 | 6 | 4  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1293 | 朝日 | (広告) 佐野彪太 内科 脳脊髄、神経病                  | 1911 | 明治44 | 6 | 4  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1294 | 朝日 | (広告) 榎田亀一郎 内科一般 脳脊髄末梢神経病              | 1911 | 明治44 | 6 | 9  | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1295 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                  | 1911 | 明治44 | 6 | 11 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1296 | 朝日 | (広告) 榎田亀一郎 内科 脳脊髄 末梢神経病               | 1911 | 明治44 | 6 | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1297 | 朝日 | (広告) 佐藤彪太 内科 脳脊髄 神経病                  | 1911 | 明治44 | 6 | 17 | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1298 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                  | 1911 | 明治44 | 6 | 18 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1299 | 朝日 | (広告) 榎田亀一郎 内科一般脳脊髄末梢神経病               | 1911 | 明治44 | 6 | 21 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1300 | 朝日 | (広告) 山田病院 山田脳病院 脳脊髄 神経病 精神病           | 1911 | 明治44 | 6 | 29 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1301 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                  | 1911 | 明治44 | 7 | 2  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1302 | 朝日 | (広告) 佐野彪太 医学博士 内科 脳脊髄 神経病 入院随意        | 1911 | 明治44 | 7 | 4  | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1303 | 朝日 | (広告) 佐野彪太 内科 脳脊髄 神経病                  | 1911 | 明治44 | 7 | 8  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1304 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                  | 1911 | 明治44 | 7 | 9  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1305 | 朝日 | (広告) 佐野彪太 内科 脳脊髄科 神経病                 | 1911 | 明治44 | 7 | 13 | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1306 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                  | 1911 | 明治44 | 7 | 16 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1307 | 朝日 | (広告) 山田病院 山田脳病院 脳脊髄 神経病 精神病           | 1911 | 明治44 | 7 | 27 | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1308 | 朝日 | (広告) 山田病院 山田脳病院 脳脊髄 神経病 精神病           | 1911 | 明治44 | 7 | 31 | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 1309 | 朝日 | (広告) 佐野彪太 内科脳脊髄神経病                    | 1911 | 明治44 | 8 | 1  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1310 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病脳病神経病                    | 1911 | 明治44 | 8 | 6  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1311 | 朝日 | (広告) 佐野彪太 内科脳脊髄神経病                    | 1911 | 明治44 | 8 | 8  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1312 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病脳病神経病                    | 1911 | 明治44 | 8 | 20 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1313 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病脳病神経病                    | 1911 | 明治44 | 8 | 27 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1314 | 朝日 | (広告) 山田病院 山田脳病院 脳脊髄神経病精神病             | 1911 | 明治44 | 8 | 29 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1315 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                  | 1911 | 明治44 | 9 | 3  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1316 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                  | 1911 | 明治44 | 9 | 10 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1317 | 朝日 | (広告) 医学博士 佐野彪太 内科 脳脊髄 神経病             | 1911 | 明治44 | 9 | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1318 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病脳病神経病                    | 1911 | 明治44 | 9 | 17 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1319 | 朝日 | (広告) 佐野彪太 内科 脳脊髄 神経病                  | 1911 | 明治44 | 9 | 22 | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1320 | 朝日 | (広告) 佐野彪太 内科 脳脊髄 神経病                  | 1911 | 明治44 | 9 | 29 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |

| 番    | 社名 | タイトル                                 | 発行日  |      |    |    | 種別 | 社/刊種  | 面 |
|------|----|--------------------------------------|------|------|----|----|----|-------|---|
|      |    |                                      | 西暦   | 和暦   | 月  | 日  |    |       |   |
| 1321 | 朝日 | (広告) 山田病院 山田脳病院 山田鉄蔵 脳脊髄 神経病 精神病     | 1911 | 明治44 | 9  | 30 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1322 | 朝日 | (広告) 医学博士佐野彪太 内科 脳脊髄 神経病             | 1911 | 明治44 | 10 | 7  | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1323 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                 | 1911 | 明治44 | 10 | 8  | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1324 | 朝日 | (広告) 医学博士 佐野彪太 内科 脳脊髄 神経病            | 1911 | 明治44 | 10 | 14 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1325 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                 | 1911 | 明治44 | 10 | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1326 | 読売 | [広告] 脳神経病最新薬 健脳丸/大阪心斎橋 東京市箔屋町 丹平商会薬房 | 1911 | 明治44 | 10 | 15 | 広告 | 朝刊    | 4 |
| 1327 | 朝日 | (広告) 医学博士佐野彪太 内科 脳脊髄 神経病             | 1911 | 明治44 | 10 | 21 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1328 | 朝日 | (広告) 山田病院 山田脳病院 脳脊髄 神経病 精神病          | 1911 | 明治44 | 10 | 24 | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1329 | 朝日 | (広告) 山田病院 神経病                        | 1911 | 明治44 | 10 | 30 | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 1330 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                 | 1911 | 明治44 | 11 | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1331 | 朝日 | (広告) 佐野彪太 内科 脳脊髄 神経病                 | 1911 | 明治44 | 11 | 8  | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1332 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                 | 1911 | 明治44 | 11 | 12 | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1333 | 朝日 | (広告) 医学博士佐野彪太 内科 神経病                 | 1911 | 明治44 | 11 | 14 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1334 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                 | 1911 | 明治44 | 11 | 19 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1335 | 朝日 | (広告) 佐野彪太 内科 脳脊髄 神経病                 | 1911 | 明治44 | 11 | 22 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1336 | 朝日 | (広告) 佐野彪太 内科 脳脊髄 神経病                 | 1911 | 明治44 | 11 | 29 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1337 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病脳病神経病                   | 1911 | 明治44 | 12 | 3  | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1338 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                 | 1911 | 明治44 | 12 | 10 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1339 | 朝日 | (広告) 医学博士佐野彪太 内科 脳脊髄 神経病             | 1911 | 明治44 | 12 | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1340 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                 | 1911 | 明治44 | 12 | 17 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1341 | 朝日 | (広告) 医学博士佐野彪太 内科 脳脊髄 神経病             | 1911 | 明治44 | 12 | 22 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1342 | 朝日 | (広告) 山田病院 山田脳病院 脳脊髄 神経病 精神病          | 1911 | 明治44 | 12 | 28 | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1343 | 朝日 | (広告) 山田病院 山田脳病院 脳脊髄 神経病 精神病          | 1911 | 明治44 | 12 | 29 | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 1344 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                 | 1912 | 明治45 | 1  | 7  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1345 | 朝日 | (広告) 医学博士佐野彪太 内科 脳脊髄 神経病             | 1912 | 明治45 | 1  | 11 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1346 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                 | 1912 | 明治45 | 1  | 14 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1347 | 朝日 | (広告) 医学博士佐野彪太 内科 神経病                 | 1912 | 明治45 | 1  | 28 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1348 | 朝日 | (広告) 山田病院 山田脳病院 山田鉄蔵 脳脊髄 神経病 精神病     | 1912 | 明治45 | 1  | 30 | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1349 | 朝日 | (広告) 山田病院 山田脳病院 山田鉄蔵 脳脊髄 神経病 精神病     | 1912 | 明治45 | 1  | 31 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1350 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                 | 1912 | 明治45 | 2  | 4  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1351 | 朝日 | (広告) 帝国心理学会 精神病神経病一切 催眠術治療           | 1912 | 明治45 | 2  | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1352 | 朝日 | (広告) 佐野彪太 内科 脳脊髄 神経病                 | 1912 | 明治45 | 2  | 6  | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1353 | 朝日 | (広告) 東京府巢鴨病院 看護婦募集 精神病神経病患者無料診察      | 1912 | 明治45 | 2  | 8  | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1354 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                 | 1912 | 明治45 | 2  | 11 | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1355 | 朝日 | (広告) 医学博士 佐野彪太 内科脳脊髄神経病              | 1912 | 明治45 | 2  | 13 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1356 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                 | 1912 | 明治45 | 2  | 18 | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1357 | 朝日 | (広告) 医学博士佐野彪太 内科 脳脊髄 神経病             | 1912 | 明治45 | 2  | 21 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1358 | 朝日 | (広告) 山田病院 山田脳病院 脳脊髄 神経病 精神病          | 1912 | 明治45 | 2  | 26 | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 1359 | 朝日 | (広告) 医学博士佐野彪太 内科 脳脊髄 神経病             | 1912 | 明治45 | 2  | 27 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1360 | 朝日 | (広告) 山田病院 山田脳病院 脳脊髄 精神病 神経病          | 1912 | 明治45 | 2  | 28 | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1361 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                 | 1912 | 明治45 | 3  | 4  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1362 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                 | 1912 | 明治45 | 3  | 11 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1363 | 朝日 | (広告) 佐野彪太 内科 脳脊髄 神経病                 | 1912 | 明治45 | 3  | 11 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1364 | 朝日 | (広告) 佐野彪太 内科 脳脊髄 神経病                 | 1912 | 明治45 | 3  | 17 | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1365 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                 | 1912 | 明治45 | 3  | 17 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1366 | 朝日 | (広告) 医学博士佐野彪太 内科 脳脊髄 神経病             | 1912 | 明治45 | 3  | 24 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1367 | 朝日 | (広告) 山田病院 山田脳病院 脳脊髄 神経病 精神病          | 1912 | 明治45 | 3  | 27 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1368 | 朝日 | (広告) 佐野彪太 内科 脳脊髄 神経病                 | 1912 | 明治45 | 3  | 28 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1369 | 朝日 | (広告) 山田病院 山田脳病院 脳脊髄神経病 精神病           | 1912 | 明治45 | 3  | 31 | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1370 | 朝日 | (広告) 医学博士 佐野彪太 内科 脳脊髄 神経病            | 1912 | 明治45 | 4  | 3  | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1371 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病脳病神経病                   | 1912 | 明治45 | 4  | 7  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1372 | 朝日 | (広告) 佐野彪太 内科脳脊髄神経病                   | 1912 | 明治45 | 4  | 9  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1373 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                 | 1912 | 明治45 | 4  | 15 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1374 | 朝日 | (広告) 佐野彪太 内科 脳脊髄 神経病                 | 1912 | 明治45 | 4  | 16 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1375 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                 | 1912 | 明治45 | 4  | 21 | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1376 | 朝日 | (広告) 医学博士佐野彪太 内科 脳脊髄 神経病             | 1912 | 明治45 | 4  | 21 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1377 | 朝日 | (広告) 本舗丹平商会 丹平分店 丹平支店 脳病神経病新薬 健脳丸    | 1912 | 明治45 | 4  | 22 | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1378 | 朝日 | (広告) 山田病院 脳脊髄神経病 精神病                 | 1912 | 明治45 | 4  | 29 | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |
| 1379 | 朝日 | (広告) 山田病院 山田脳病院 脳脊髄神経病 精神病           | 1912 | 明治45 | 4  | 30 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1380 | 朝日 | (広告) 佐野彪太 内科脳脊髄神経病                   | 1912 | 明治45 | 5  | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1381 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病脳病神経病                   | 1912 | 明治45 | 5  | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1382 | 朝日 | (広告) 佐野彪太 内科脳脊髄神経病                   | 1912 | 明治45 | 5  | 10 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1383 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                 | 1912 | 明治45 | 5  | 12 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |

| 番    | 社名 | タイトル                                  | 発行日  |      |   |    | 種別 | 社/刊種  | 面 |
|------|----|---------------------------------------|------|------|---|----|----|-------|---|
|      |    |                                       | 西暦   | 和暦   | 月 | 日  |    |       |   |
| 1384 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                  | 1912 | 明治45 | 5 | 19 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1385 | 朝日 | (広告) 医学博士 佐野彪太 内科 脳脊髄 神経病             | 1912 | 明治45 | 5 | 20 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1386 | 朝日 | (広告) 山田病院 山田脳病院 脳脊髄神経病 精神病            | 1912 | 明治45 | 5 | 29 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1387 | 朝日 | (広告) 山田病院 山田脳病院 脳脊髄神経病 精神病            | 1912 | 明治45 | 5 | 31 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1388 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                  | 1912 | 明治45 | 6 | 2  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1389 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                  | 1912 | 明治45 | 6 | 9  | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1390 | 朝日 | (広告) 医学博士 佐野彪太 内科 脳脊髄 神経病             | 1912 | 明治45 | 6 | 9  | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1391 | 朝日 | (広告) 医学博士 佐野彪太 内科 脳脊髄 神経病             | 1912 | 明治45 | 6 | 20 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1392 | 朝日 | (広告) 山田病院 山田脳病院 脳脊髄神経病 精神病            | 1912 | 明治45 | 6 | 29 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1393 | 朝日 | (広告) 山田病院 山田脳病院 脳脊髄神経病 精神病            | 1912 | 明治45 | 6 | 30 | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1394 | 朝日 | (広告) 医学博士 佐野彪太 内科 脳脊髄 神経病             | 1912 | 明治45 | 7 | 5  | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1395 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                  | 1912 | 明治45 | 7 | 6  | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1396 | 朝日 | (広告) 医学博士 佐野彪太 内科 脳脊髄 神経病             | 1912 | 明治45 | 7 | 12 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1397 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                  | 1912 | 明治45 | 7 | 14 | 広告 | 東京/朝刊 | 6 |
| 1398 | 朝日 | (広告) 医学博士 佐野彪太 内科 脳脊髄 神経病             | 1912 | 明治45 | 7 | 16 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1399 | 朝日 | (広告) 医学博士 佐野彪太 内科 脳脊髄 神経病             | 1912 | 明治45 | 7 | 20 | 広告 | 東京/朝刊 | 1 |
| 1400 | 朝日 | (広告) 根岸病院 精神病 脳病 神経病                  | 1912 | 明治45 | 7 | 21 | 広告 | 東京/朝刊 | 7 |
| 1401 | 朝日 | (広告) 山田病院 山田脳病院 医学博士 山田鉄蔵 脳脊髄 神経病 精神病 | 1912 | 明治45 | 7 | 29 | 広告 | 東京/朝刊 | 8 |